

# ホームステイ



じゅじゅ

じゅじゅ

「お飲物は？」

「あ、えっと、し、白ワイン、お願いします」

「かしこまりました」

ワインなんてあまり飲まないけど、いいわよね。

ちょっとした前祝い？

機内の中、もちろんエコノミー、そしてパック旅行。

でも、ただの観光じゃないわよ、ホームステイ！

ホームステイって学生だけだと思ってたら、最近はいろいろあるのね。

私が申し込んだのは「主婦のためのクッキング・ホームステイ」。

アメリカの料理上手な奥さんのいるお家で家庭料理を覚えるのよ。

すごく興味があったわけじゃなかったのよね。

NETで見つけて、なんとなく資料を取り寄せただけで、

本気で行くつもりなんてなかったわ。

でも、美香が...

「おかあさん、行ってくればいいじゃん！」

「でも...ねえ」

「ほら、日程見てよ！ 8月3日から24日って。

おかあさんの誕生日が20日だから、アメリカで誕生日迎えられるよ！

記念すべき50歳をアメリカでってよくない？」

「でも、お盆があるから、おとうさんのお墓参りもしなきゃいけないし」

「そんなのどうでもいいじゃん！」

「どうでもよくないでしょ！ 美香ったら、おとうさんが聞いたら泣くわよ」

「今のおかあさん見たらもっと泣くと思うよ」

「え？」

「おとうさんが死んで5年だよ？ おかあさん、今も喪中みたいじゃん！」

「そ、そんな...」

「毎朝私のお弁当作って、昼間は庭の手入れとかテレビ見て、晩御飯作って、

どこかに出かけるわけでもないし、趣味があるわけでもないし」

「そんなこと言ったって、おとうさんが生きてたときからそうだったわよ」

「だ・か・ら、お父さんはもういないの！」

ガーン

ショック...

なんだかショック...

まるで、私がおとうさんが今も生きてると思い込んでるみたいじゃない...

「おかあさんにだっておかあさんの人生あるじゃん」

「な、なにえらそうなこと言ってるのよ、おかあさんはおとうさんと結婚して、  
美香を生んで、育てて、それなりにちゃんと生きてきたんだから」

地味かもしれないけど...

「それが悪いって言ってないじゃん。

もうおとうさんはいないし、私だって働いてるんだから、  
おかあさんも好きなことしたらって言ってるだけだよ」

「好きなこと...って言われても...ねえ」

「だから、ほら、これ！ おかあさん料理好きだし、短大だって英文科でしょ？」

「大昔よ」

「私が中学のときなんか、よく英語の宿題みてくれたじゃん」

「中学の英語くらいしか... それに、それだって何年も前の話でしょ。」

英語はおとうさんの専門だったから、高校からはおとうさんがみてたじゃない」

美香が真剣な顔で私を見て...

「おかあさん、今はいいけど、私が結婚したりしたら、おかあさん一人だよ？」

ガーン

ショック...

頭をハンマーで殴られたくらいショック、ハンマーで殴られたことはないけど。

そうよね... 美香だって、いつかこの家からいなくなるのよね...

そんなこと考えたこともなかった...

「美香... 結婚するの？」

「じゃなくて！ やってみたいと思うことやればいいって言ってんの！」

「これがやりたいことかどうかわからない...」

「わからないならやってみればいいじゃん！」

「そう...かなあ」

「そうだよ！ まだ身体が動くうちにさ！」

ガーン

その言葉が、「まだ身体が動くうち」っていうのが決め手だったのよね。

おとうさんは私より15歳年上だった。

私の短大のときの助教授。

おとなの男っていうの？ 憧れてたわ。

授業のときはいちばん前の席で、ずっとウツトリ見てたわ。

卒業式の日、おとうさんから交際を申し込まれたのよ。

おとうさんも私のことを好きだったなんて、嬉しかったわあ。

1年つきあって結婚して、すぐに美香ができたのよね。

それからは、ずっと主婦と母親。

はあああ、15歳も年上と結婚するもんじゃないわね。

60歳になって、定年で、やっとゆっくり二人で...と思ってたらポックリよ？

心筋梗塞！

だからずっと言ってたの！

油っこいものとかお肉が大好きで、定期健診にはいつも引っかかってたんだから。

少しは食べ物に気をつけてって。

私はできるだけお野菜たっぷり、お魚も白身のものとか、そりゃ気を配って、

そうそう、お弁当だってちゃんと栄養バランス考えて作ってたわよ。

それなのに、あの人ったら、お弁当の他にから揚げとかハンバーガーとか、

私がいなくて食べてたんだもの、あとで知ったんだけどね。

そりゃ心筋梗塞にもなるわよ！

私は45歳で未亡人よ？ そりゃね、あの人がちゃんとしてくれてたから、

生活に困るってことはなかったけど、そういう問題じゃないでしょ？

ああもう、なんだか怒りがこみあげてきちゃった。

「あの、すみません。 白ワインお願いします」

## ホームステイ先からの手紙

---

美香との会話のすぐあとで、ホームステイ・コーディネート会社に申し込んだわ。  
この「クッキング・ホームステイ」っていうのは、  
アメリカの料理好きの奥さんがいる家庭に3週間ホームステイして、  
その奥さんにアメリカの家庭料理を教わったり、  
アメリカの一般家庭を体験したり、こっちも日本料理を教えたりって、  
そういうプログラムなんですって。  
もちろんボランティアだそうよ。  
アメリカってすごいわねえ、見知らぬ異国人を簡単に家に泊めてくれるなんてねえ。  
私だったら無理だわ、気を使っちゃうもの。

申し込んで数週間で私のホームステイ先が決まったって連絡があったわ。  
ペンシルバニアのハリスバーグっていうところなんですって。  
ホームステイ先の奥さんからの手紙も来たわ。  
今どきメールじゃなくて手紙っていうのがいいわよねえ。  
手書きの文字だと親近感が湧くじゃない？  
そういう目的だってコーディネート会社の人を書いてたわ。  
申し込みのときに、私も錆びついた英語で必死に自己紹介を手書きしたわ。  
写真も同封したし。お父さんの三回忌のときのしかなかったけど。

キャシーって名前で、その地域で料理教室もやってるんですって！  
有線テレビ（ってケーブルのことかしら？）で番組にも出てるって、本格的じゃない！  
写真も入ってたわ。  
これはテレビに出てるときかしら？  
料理の乗ったお皿に手をかけてニッコリ笑ってるわ。  
金髪美人てこういう人のことを言うのね。  
何歳かしら？ 若いわよね、30代前半？  
「あ、この人ポトックスやってる」  
覗き込んでた美香がそう言ったわ。  
「そんなことわかるの？」  
「わかるよ！ ポトックスやってる人っておんなじような表情だもん」  
「へえ」  
さすがアメリカだわ。  
わかる美香もすごいけど...  
「美香、あなた、ポトックスやってないわよね？」  
「やるわけないでしょ！ 必要ないもん！」

まあそうね、必要があるとしたら私よね、やらないけど。

ボトックスは関係ないわ。

「あなたが来ることを楽しみにしてる」って書いてくれてるもの。

機内の照明が薄暗くなった。

窓をちょっとだけ開けて外を見たけど、どこを飛んでいるのかわからないわ。

海外旅行なんて、短大で仲の良かった3人で卒業旅行にハワイに行った以来だわ。

それもパック旅行だったけど、そのときには私はあの人に告白された後で、

それを二人にだけは話したのよね。ビックリした顔してたっけ、フッフ。

でも、あれも海外っていっても、ハワイでしょ？

たいてい日本語が使えるから、そんなに英語を話す必要はなかったわ。

今回はどうなのかしら？ ハワイみたいにはいかないわよね。

でも、現地スタッフさんがいるって言ってたから、心配ないわよね？

ちょっとドキドキしてきちゃった。

「あの、すみません、白ワインください」

まだ実感湧かないなあ。

この飛行機の中も日本語だし、まわりも日本人がほとんどだし、

私、本当にアメリカに行くのかしら？

アメリカねえ...

まさか50歳になるときにアメリカに行くとは思ってなかったわ...

ワイン...飲みすぎちゃったかしら...

映画観たいのに... 眠く... なっちゃ... て...

## ファミリーの出迎え

---

ニューヨークの空港に着いたときに、アメリカだって感じたわ。  
アメリカっていうか日本じゃないって、やっと実感したわ。  
まわりは外人だらけで、向こうからしたら私が外人なんだろうけど、  
英語が渦巻いてるっていうのかしら？ そんな感じ。

ニューヨークから巨大なバスでハリスバーグに着いたときには、もう夕方6時。  
このプログラムに参加した人たちのファミリーが待ってたわ。  
映画や海外ドラマと同じように、目を見開いたような顔で、「Hi!」とか言って、  
ハグしたり、なんだかすごい騒ぎ。  
アメリカだわあ！  
キャシーはどこかしら？ 最初はなんて言えばいいの？「Hi!」？  
それとも、「How do you do?」？ 初めましてはそれよね、学校で習ったもの。  
ああ、ドキドキする――！

ポツーン

他のファミリーたちは皆いなくなっちゃって、私だけ残ってる。  
もう8時になっちゃったわよ？  
キャシー、どうしたのかしら？ 時間間違えたとか？  
現地スタッフの人が電話してくれてる。  
テレビの収録で遅れてるのかしら？ それとも料理教室が...

「カトーサン」  
「あ、はい」  
「連絡トレマシタ」  
よかったあ！  
「ゴ主人デシタ」  
はいはい、それで？  
「トニカク、ボクガ、カトーサンノステイ先ニ連レテイキマス」  
あ... そう...

現地スタッフって日本人じゃなかったのね。

まあ日本語はなんとか通じるからいいけど。

バンに乗せられて進む夜の道は、日本みたいに明るくないけど、危なくないのかしら？ こっちは犯罪が多いんでしょ？

「コノ地域ハ、アー... Harrisburgデ高級ナトコロデスネ」  
へえ。

「デスカラ、ウチノ会社ハ、コノ地域ヲ選ビマシタ、安全デスネ」

安全ならよかったけど。

迎えにきてもらえなかっていうのが、なんだか淋しい。

他の人たちはあんなにウェルカム状態で迎えに来てもらえたのに。

「ココデス」

バンが止まった場所は、石造りっていうのかしら？

そういう壁で、玄関までの道の両側には木が植えてあって、素敵！

現地スタッフがドアホンのボタンを押した。

ビー———ッ

ビーなの？ ピンポンじゃないのね、アメリカだわあ。

ガチャッとドアが開いて、男の人が出てきた。

キャシーのご主人...よね。

「ハ、ハウ...」って言おうとしたら、現地スタッフがご主人に何か言っていて、ご主人も何か言っていて、何を言ってるのかサッパリわからない。

「カトーサン」

「は、はい？」

「奥サン、イナイソウデス」

「いない？」

「ゴ主人ハ、ホームステイノコト知ラナカタソウデス」

え...

エ———ッ!?



「キャ、キャシーはいつ帰ってくるんですか？ 私はどうしたらいいんですか？」  
「トニカク、今日ハモウ遅イノデ、ココノ家ニ泊マツテクダサイ」

とにかくって、泊まるにきまってるでしょ！  
ここにホームステイしにきたんだから！

現地スタッフは、キャシーのご主人にまた何か言って、ご主人も何か言って、  
「カトーサン、明日連絡シマスカラ、今夜ハココニ泊マツテクダサイ」

泊まるでしょ！ 泊まるためのホームステイでしょ！

現地スタッフがご主人に、また何か言って、ご主人は「Ok」って言って、  
(Okだけは聞き取れたわ)  
「ソレジャ、オヤスミナサイ」とバンに乗って 行っちゃった。

「Come in」

カミン？ 入れってこと...よね？

荷物持とうとしたら、「Ah, sorry. Go ahead」って、なんだかわからないけど、  
ご主人が荷物を持ってくれたわ、さすがアメリカね、レディーファースト？

家の中は... アメリカ！

## 初英会話

---

映画とか海外ドラマの世界って、本当にあるのねえ。

暖炉って初めて見たわ。

大きなソファ！ あんなのうちのリビングに入らないわよ。

その上にクッションがズラーーッと置いてあるわ。

どこに座るの？

「Ah... Excuse me」

え？ あ！ そ、そうだった、挨拶よね。

ドキドキするわあ、本物のアメリカ人との英会話なんて初めてよ。

「えっと... ハウ ドゥ ユー ドゥ ユー」

あら？ 黙っちゃった、ちがった？ はじめましてって、これじゃないの？

「How do you do?」

やっぱり本物は発音が違うわあ！

自己紹介自己紹介！ 名前ね！

「マイ ネーム イズ ヒロミ・カトー」

「Ah... Pardon?」

パードン？ 聞き返してるってこと？

「ヒーーローーミーー、カトーー」

「K, Katoo?」

カトウウウウウじゃないわよ。

「ヒーーーローーーミーー、カ...」

「Romie?」

ロミーって、ヒがなくなっちゃってるわよ。

「Well... My name is Dan Swope, and I have...」

「ダン？」

「Dan」

「デ〜ン？」

「Dan」

「ダエ〜ン？」

なにその、目を上にあげてハァ〜みたいな顔？

それより、正解はどれよ？

「I have something to tell you」

もしかして...

「I didn't know my...wife had signed up the program and」

あ！

「ドン？」

キョトンとした顔...って、万国共通なのね...

「Are you.... Hungry?」

ハングリー、お腹がすいた、お腹すいてるわよお。

「イエス」

車に乗せられて、着いたところは... すぐにわかったわ。

あのマークも万国共通なのね。

マック。

アメリカで最初に食べる料理がマック。

THE・アメリカだけ。

席について、これって... S？

アイスティーのSを頼んだわよね？ これってLじゃないの？

ダンだかデ～ンだかのコーラはLLでしょ！

でも、ミディアムって聞こえたんだけど。

ビッグマックってアメリカにもあるのね、あ、そうね、アメリカが先よね。

でも、本当にビッグなのね、ビッグだからビッグマックってことなのね。

私は頼んでないわよ、私のはフィレオ・フィッシュよ。

マックのいいところは、メニューの写真を指させばいいってところね。

支払いはダンだかデ～ン... キャシーのご主人がしてくれたわ、カードで。

アメリカってマックもカードで買うのね。

なんでこんなこと考えてるかって...

会話がなないんだもの。

ないっていうか、キャシーのご主人はビッグマック食べながら、  
何度も携帯で電話してるのよ、出ないみたい、キャシーよね、どうしたのかしら？  
会話...するっていてもねえ、

「ホワット・イズ・ユア・ホビー？」なんて趣味の話をする雰囲気じゃないしねえ。  
この人... 誰かに似てるのよねえ... 眉間にしわ寄せて、気難しそうな顔...

あ！ ほら、あの俳優！ ほら、あれよ！ 美香が好きな映画に出てた、  
なんだっけ、あの、太った女の子を好きな、顔は出てるのよ、えっと...

あ！

「ヒュー・グラント！」

「What?」

じゃなくて、別の方！

「コリン・ファレル！ じゃない、えっと、あ！ コリン・ファース！」

ああ、サッパリした！

「Are you ok?」

え？

「オーケーオーケー」

「Finished?」

終わった？ 何が？ 誰に似てるかわかったかってこと？

あ... 食べ終わったかってことね。

「イエス」

家に戻ってきたけど、キャシーはどうなったの？

「あの... ホエア・イズ・キャシー？」

「Pardon?」

え～、こんな簡単なことも通じないの？

あ！ th！ ティーエイチよ！ 舌をかむのよ！

「ホエア・イズ・キャthイ？」

あ、なにか考えてる、何かあったのかしら？

「I don't know」

知らない、えっ？ 行方不明？ 警察に届けなくていいの？

「イ・イズ・シー・オーケー？」

「guess so」

ガス... 予測する...よね？ そうだと思うってこと？

アメリカ人って... おおらかなのかしら？

奥さんがどこにいるかわからない、連絡が取れない、OKだと言うと...

日本だったら検索願ひ出すわよね？ でもあれって24時間経ってからだったかしら？

「That guy said you don't have a place to stay tonight and」

あ、ちょ、ちょっと待って、何言ってるのか早くて、

「ウェ・ウェイト！」

両手を前に出して全身で止めたわよ。

「プリーーズ・スピーーク・スローーリーー」

あ、またあの目を上にしてハァ～みたいな顔したわ。

そういうのを顔に表すってどうかしら？

思ってもそんなあからさまにするのって失礼じゃない？

日本だったら...って、ここはアメリカだったわ。

「Ooooooaaaaay」

Okくらいはわかるわよ！

「I wiiiiil shooooow yooooou a gueeeest roooooom」

なにそのわざとらしい言い方！

バカにしてるの？

「Cooooome wiiiiiiith meeeeeee」

そういえば、あのコリン・なんちゃらもイヤな男だったわよね。

途中までしか観てないけど。

まあ、あれは役なんだろうけど。

コリン・なんちゃらもどきが廊下の突き当たりの白いドアを開けたわ。

わあ！ 素敵！

薄いブルーに白い窓枠に、壁の色と同じようなベッドカバー！

家具も白で統一されてて、フカフカのカーペットも薄いブルーで、

はああああ、雑誌の写真みたいだわあ。

「Thiiis iiiiiis yooooour baaaaath roooooom」

そこまで伸ばさなくてもわかるわよ！ 見れば...

部屋の角にある白いドアの奥には、はああああ素敵！

壁一面タイルで、そのタイルで一輪の青い花の絵になってる～！

洗面台のカウンターは白で、洗面用シンクは花と同じ青。

石鹸とかいろいろな瓶が並んでて、いい香り。

アメリカって感じの香りねえ、なんとなくそんな感じよ。

「Thiiiiis iiiiiiis a cloooooooset」って開けた棚の中、  
わあ！ タオルまで色がそろえてあるのねえ！ 素敵～！

「Welll.... Soooo..... Gooooood naaaaaight」  
Good night くらいわかるってば！

パタンとドアが閉まって、はあああああ  
ドスンとベッドに大の字よ。

今何時？

時計は飛行機の中で合わせてきたから... 夜の11時45分か。

メイクとらなきゃ。

お風呂に入る元気ないわあ。

メイクだけでもとらなきゃ。

ああ、めんどくさい。でもとらなきゃ。

## 第一日目の朝

---

ハッ！

何時？

ガバッと起き上っ...たら あら？

あ... そうか...

アメリカだった。

何度も目が覚めちゃった、だって夜中っていても日本のお昼過ぎでしょ？

お昼寝感覚っていうの？ ちょっと寝たかなってくらいよね。

これが時差ボケっていうのかしら？

あ、そんなことより、今何時？

10時!? けっこう寝てたんじゃない！

顔洗わなきゃ！ メイクは？ いちおうしないとね。

コンコンコン

誰？ キャシー？ そうかも！

「キャシー！」

ガチャッ

「キャー————ッ！」

バタンッ

お、男、ていうか、キャシーのご主人！

やだ、まだ顔も洗ってないのに、パジャマだし。

「Excuse me!」

え、あ、「は、はい、じゃなくて、イエス」。

「You got a telephone call.」

テレホン？ 電話？ 誰？ 美香？ あ、キャシー？

「ウェ、ウェイト！」

急いでジーパンとTシャツに着替えて、顔洗ってないけど、いいわ。

リビングに行くと、キャシーのご主人が手招き（日本と逆向きって本当ね）して、私に受話器を渡した。

「もしもし？ あ、へ、へロー？」

「カトーサン、現地スタッフノケントデス」

ああ！ なんかホッとする、いちおう日本語だから。

「今、ゴ主人ト話シテマシタ」

できれば、キャシーが帰ってくるまでここにいてくれないかしら？

「予期セヌ事態ガ発生シマシタ」

「ハ？」（よくそんな日本語知ってるわね）

「ゴ主人ト奥サンハ離婚シマシタ」

「ハ？」

「一カ月前ダソウデス」

へ？

「ゴ主人ハ、奥サンガ、コノプログラムニ参加シタノ知りマセンデシタ。

奥サンカラモ事務所ニ連絡ナカッタノデ、私タチモ知りマセンデシタ。

カトーサンニ、ゴ迷惑オカケシマシタ、スミマセンデシタ」

「え、で、ど、どうなるんですか？」

「他ノ受け入レ先ヲ探シマス、タダ、急ナノデ、ソレマデホテルヲ用意シマス」

「ホテル？」

「モチロン費用ハコチラデ出シマスノデ」

「ちょっと待ってください！ ホテルに泊まってる間、私はどうしたらいいんですか？」

「カトーサンノ好ナコトシテイテクダサイ、観光デモショッピングデモ」

「観光とかショッピングって...」

だんだん...

「そんなことがしたいならホームステイなんかしないわよ！

クッキング・ホームステイっていうから申し込んだのよ！」

頭に血がのぼってくのがわかる

「だいたい、私が、どんな決意でこれに申し込んだか、主人のお墓参りだってあったのに、美香が身体が動くうちについていうから、なのに迎えも来ないし、

ご主人の名前だって発音できないし、ゆうべの食事はマックよ！

アメリカまできてマックよ！ それで今度はホテルって、いいかげんにしてよ！」

怒りすぎて涙が出てくるわよ！

「ア、アノ、ソレデハ、日本ニ帰ル飛行機ヲ手配シマスカ？」

「ここまで来て日本に帰れっていうのっ？」

「イ、イエ、カトーサンガソウシタイノデアレバ...」

「どうしたらいいかなんて、わかるわけないでしょ！」

って言った途端にワーワーッと泣きだしちゃった...

受話器をにぎっていた私の手をポンポン... え？



あの人が、ジェスチャーで代わるみたいなことやってるから受話器を渡したわ。

ああもう... おとうさんのお墓参りに行かないバチがあたったのかしら...

やだもう子どもみたいに涙が止まらないわよ...

だって... 心細かったんだわ... キャシーはいないし、ご主人は意地悪だし...

何が起ってるのかわからないし、聞こうと思ったって言葉が出ないんだもの...

肩をポンポン

振り向くと、あの人が受話器を私の方に差し出してた。

やだ、私ったら取り乱して、泣いても怒ってもどうしようもないわよね。

ホテルにいるくらいなら帰ろう。

「もしもし...」

「カトーサン、今ゴ主人ト話シマシタ」

わかってるわよ...

「新シイ受け入れ先ガ決マルマデ、ソコニイテイイソウデス」

「ハ？」

「チョード、ゴ主人ハ二週間ノ夏休ミダカラ、イイソウデス」

えっと... なんだかコロコロ変わるから頭がついていけないわ...

「ちょっと待ってね、つまり、次のホームステイ先が決まるまで」

「ソコニイテイイソウデス」

「ここに...いる... あ...そう...」

「ソレデハ、マタ電話シマス」

「あ...はい」

で？

私はここにいていい。

次の受け入れ先が決まるまで...

でも、キャシーはいない。

あら？ ちょっと待って！ 離婚したって言ってたわよね？

エーーーーッ!? 離婚ーーーーっ!?

一大事じゃないの！ こんなことしてていいの？

こんなことって、私だって行くところはないんだけど、あ、私はあるわね。

日本に帰ればいだけ...なんだけど、ここにいていいって、いいわけーーー？

「Coffee？」

って、「サ、サンキュー」

私にコーヒー入れてる場合？

テーブルをはさんで、私はソファに、あの人は一人掛けの椅子に座って、  
コーヒー飲んでるの。

何て言えばいいのかしら？ 大変でしたね？ 英語でなんて言うのよ？

あ、それより、離婚して大変なときに私のことを置いてくれるっていうんだから、  
ちゃんとお礼言わなくちゃ。

でも、なんでそんなときに私のことを置いてくれるのかしら？

ボランティア精神？ アメリカ人でそうよね、ガガだってそうだったじゃない？

ガガって何かと思ったわ。レディ・ガガって聞いたとき、

若かった頃夢中だったクイーンの「レディオ・ガガ」思い出したもの。

そしたら、美香が言うにはあの曲の名前から考えたっていうじゃない？

ガガは今はいいのよ、とにかく、お礼しなきゃ。

「あの、サ、サン」 あ、ティエイチだったわ、「Thアンキュー」

「For what?」

フォーホアット？ For~って、~のために、ああ、思い出した！

何に対してっていう疑問形よね。

「フォー... フォー... ユー（指さしたわよ）・ミー（自分のことも）、

ステイ（今度は床を指さしたわよ）・ok」

ア~~~~ッ！ まともな英文が出てこな~~~~い！ 昔は少しはできてたのにい。

「No problem」

これはわかるわ、わかるけど、プロブレムあるじゃない、あなたの人生！

それより、よくあんな単語と手振りだけで通じたわね。

「It's my... ex. wife's fault, and... my fault」

Faultって、失敗？ 落ち度？だったっけ？

あらら、暗い顔になって下向いちゃったわ。

あ... カーペットのゴミを拾っただけなのね。

こっち見たわ。

「Are you hungry?」

え？ あら、もう12時近い。

「イ、イエス」

お昼からピザ？

しかも、なにこのピザ、人が座れそうなくらい巨大だわ。

ゆうべはマックで、今日は朝食兼昼食がピザ。

まさか今夜はケンタッキーじゃないわよね？

これがアメリカ？

ちがうわよね、クッキング・ホームステイなんだから、

アメリカ人だってクッキングするってことよね？

こんな食生活を3週間も、あ、そうじゃないわね、次が見つかるまでね。

いつまでかはわからないけど、こんなのばかり食べてたら、

私もおとうさんの元につれていかれちゃうわ。

まだ早いわよ！

何か作ろう！

えっと、「ホエア・イズ・キッチン？」

アメ〜リカン！

さすが料理のプロのキッチンねえ。

真ん中にカウンターもあって、そこにも小さな流しがついてて、

ああ！ 憧れの食洗機！ でも、これ、大きすぎてウチでは無理ね。

大きなオーブンが二台も上下にあるわよ！

これでシャケなんか焼けないわね、一瞬で黒焦げだわ。

シャケなんか焼かないわよね、アメリカ人は。

そして！ 大きな冷蔵庫！ まさにアメリカって感じよね。

「あの、オープン、ok？」

「Sure」

いってことね。

な——んにもない

奥の方にオリーブの瓶とピクルスの瓶

それだけ

私の頭の中もカラッポ

これじゃ何も作れないわ

どうしよう

「あの」

振り返ると、あの人が「ン？」みたいな顔したわ。

「スーパーマーケット・ゴー・プリーズ」

もう夢中！

---

ここは... なに？

この巨大な空間は？

向こうの端が見えないわ。

す... すっごーーい！

圧倒される感覚、そして、湧き上がってくる闘争心！

私、負けない！ 何にかはわからないけど、身体中の血が湧いてくるわ！

まずは野菜よ！

巨大なカートを押して私は走るの！

野菜はたいてい入口近くよ！

ほらね！

わあああああ！ 色とりどりの野菜が積んである～！

なんか、ほら！ 映画とかにも出てくるじゃない？

あれは本当だったのね！

あら、パック詰めってないのね、なるほどね、欲しい分だけこのビニール袋に入れて、この秤に乗せればいいわけね。

でも、この秤の単位、グラムじゃないのね。

フッ、関係ないわ。主婦の勘を侮るなかれよ！

これはズッキーニ？

Cucumber... キューカンバーは... きゅうり！ 巨大！

浅漬はできないわね、でも薄切りにして三杯酢であればなんとかなるんじゃない？

きゅうりは今はいいわ、たまねぎと、あ、ニンジンもあるし、じゃがいも、

すっご〜い！ いろいろな種類があるのねえ。ふつうのでいいわ。

見たことのない野菜もいっぱいあるわ、どうやって使うのかしら？

まあ今日はいいわ、それより何を作ろうかしら？

肉じゃが？ いいわね！ あとは... キノコもいっぱいあるわ！

あら、これって椎茸？ Shitake mushroomって書いてる！

こんなところで椎茸に会えるなんて涙が出そうだわ。

これってマッシュルームよね？ 巨大！ でも、スライスすれば使えるわね。

見たことないキノコ... 毒キノコじゃないわよね？ そんなもの売るわけないわね。

これは... 匂いがきつくないから使えそうだわ。あとこれも。

キノコのホイル焼きも作れるわね。

わあ！ 果物もいっぱい！ このリンゴ！ よく映画に出てくる小さくて赤いあれだわ！

毒リンゴみたいにテッカテカできれいねえ。ベリーもこんなに種類があるの？

しかも全部生よ！ あ！ 果物とヨーグルトでフルーツサラダができるじゃない？

明日の朝食にいいわね。卵もいるわね。あ、お肉もだわ。

お肉売り場は... たぶんあっちね。あら？ なにこれ——っ？ 牛乳？

ガソリンの容器みたいに巨大！ 飲み切らないうちに腐っちゃうんじゃない？

でも、牛乳も買っておいた方がいいかしら？ えっと... あら、なに？

Light...Non fat... へえ、牛乳にもこんなに種類があるのね。ふつうのでいいんだけど、

もう少し小さいのはないのかしら？ これは... まあこの中では小さいからこれね。

そして、なんていうか、まあ... すっごい！ お肉売り場の広いことったら！

なにこれ？ 私の顔より大きいじゃない！ えっと、豚肉は... えっ？ 薄切りがない！

ああ！ 切ればいいのよ、これでいいわね。あとは... 調味料ね。

おしょうゆは... あった！ あ... これかあ。あんまりおいしくないのよね。

なにこれ？ どこの？ Made in Japanて書いてるけど見たことないわ。

この定番のいいわ。出汁はあるかしら？ えっと... あ、あるある。

中華のものと一緒にところって、こっちの人には同じなのかしら？

でも、この出汁の素はねえ... あ！ ある！ 持ってきたんだったわ！

キャシーに和食を教えようと思って... まあいいわ、出汁はいいわ。

お米ってあるのかしら？ えっと穀物系でしょ？ きっとこっちね。

こっちだったけど、こんな小さい袋しかないの？ 長細いのとかなじゃないのよ、

日本のお米ってないのかしら？ これ...が近いかしら？ これでいいわ。

なにこの箱？ 袋ごとお湯につけてる絵がついてるわ。Instant rice、インスタント？

まずそう！ でも... これもちょっと試してみる？ アメリカなんだから。

あとは、朝食用のパン！

これはベーグルね、これはマフィン、Morning rolls？ 朝食用ってこと？

いいんだけど... どうして全部こんな大袋なの？

食パンなんて業務用みたいに長いのよ？ 食べきれないわよ。

どれにする？ そうねえ、食パンならサンドイッチも作れるから...

食べきれるかしら？

だいたいこれでいいわね。あら？ 掃除用品コーナー？

わあ！ いろいろあるのねえ！ ワクワクしてきちゃったわあ！

あっちは何かしら？ あ、ダメダメ、きりがいいわ、レジよ、レジ！

ド～キドキする。

初めての買い物よ。でも、スーパーのレジだもの、ピッてやるだけよね。

「Next!」

わ、私ね。

「Cash or charge?」

え？ なに？ キャッシュはわかったけど、なに？

「Charge」

ニュッと目の前に手が伸びて、え？ あ！

すっかり忘れてた！

キャシーのご主人！ じゃなくて、元...ご主人。

私が買い物してた間どうしてたのかしら？

あ、待って、この人に払わせちゃっていいの？ 私だってカードは持ってるわ。

楽天だけど、Visaだから、アメリカで使ってもポイントって貯まるのかしら？

えっ？

目の前の数字、えっと、日本円にしたら... 一万ちょい？ エーーーーッ!?

あら、こっちって店員が袋詰めしてくれるのね。

「Let's go」

両手に、まさに山のような袋を持って前を歩いていったわ。

車の中。

やっぱり... 一万いくらも使わせちゃったのはねえ、返さないと。

なんて言えればいいの？ 「アイ・ウィル・ビ・バック」？ それはターミネーターだわ。

「Did you get everything you need?」

え？ なに？ 早くてわからない。

でも、ゆっくりしゃべってって言うと、またあれになるんでしょ？

「Did you」

え？ はい？

「get」

はいはい？

「everything you need?」

わかった！

そうよ、ゆっくりってこういうことよ！

「イエスイエス！」

「Good」

「イエスイエス！」

えっと...

「あの、ア、アイ・ウィル・ビ・バック...」

「Do you wanna go back to the store?」

だから、アイ・ウィル・ビ・バックは、ターミーネーターよ！ ちがうちがう！

「アイ・ウィル... えっと... バック... あ！ マネー！」

「What do you mean?」

どんな意味？ だから...

「えっと、ユー、なんだっけ？ あ！ ペイ！ マネー、アイ、バック、マネー」

「Never mind」

ネバー、けして、あ！ 映画の中で言ってたわ、何の映画だっけ？

なんでもいいけど、気にするなってことよね。

「でも、バット」

「You need them, right?」

語尾が上にあがってるから質問文？ 必要とするか？ってこと？

「イ、イエス」

「So, no problem」

あなたの人生にはあるけどね。

ふっ切れたのかしら？ そんなことはいいわ、家に帰ったら料理よ。



買った食材をズラッとカウンターに並べるの。

戦利品って感じね。

果物とヨーグルトと卵は冷蔵庫に入れておいて...と、まだまだガラ〜ンとしてるわ。

まずは... キノコのホイル焼きの準備ね。

食べる前にトースターに入れればいいだけだから。

えっと... ホイルはどこ？ 引き出しがいっぱいで... あった！

なにこの幅の広さ!? 半分に切れればいいわね。

キノコを切って、均等にホイルの上に置いて、塩・胡椒して...

あ、ワイン！

リビングを覗くと、あの人ソファで寝ながら本を読んでいる。

どこの家でも同じなのね、奥さんが料理してる間、私はあの人奥さんじゃないけど、男の人はリビングでガラ〜ンとしてるのよね、おとうさんもそうだったわねえ。

そんなことはいいのよ、ワインよ。

「えっと、え、エクスキューズ・ミー」

「Sure」

「ドウ・ユー・ハブ・ワイン？」

「Pardon？」

「ワイン、あの、ほら、こうやって飲む、ワイン」

「Ah! Wine!」

「イエスイエス」

「Red or white？」

赤か白？ ホイル焼きには白よ。

「ホワイト」

私がそう言ったらね、あの人どうしたと思う？

よく映画でやるじゃない？ 人差し指立てて、ドヤ顔でまかせろみたいな顔！

あれって映画だからだと思ってたけど、本当にやるのね、アメリカ人って。

まあいいわ、キッチンに戻って続きにとりかからなきゃ。

日本で便利よね、至れり尽くせりていうの？

薄切りのお肉ってどこにでもあると思ってたわ。

でも、私だって数十年主婦やってたのよ、お肉を薄切りするなんて簡単よ！

負けないわ！

ゆ〜っくりとナイフで... ほらほら、できるのよ、フッフッフッ。

「Here you are!」

あの人白ワインをかかげてキッチンに入ってきたわ。

「サンキュー」

あ...

「あの、オープン、プリーズ」

「Sure」

私がいつも使ってるのってキュッてひねれば開くやつだから、ああいうコルクのって無理。

昔まちがえてコルクの買ってきて、ひどい目に遭っちゃった。

しまいには棒でギュッて中に押し込んだもの。

使うたびに茶こしでコルクの粉をこさなきゃならなかったわ。

ポンッ

「サンキュー」

瓶を受け取ってキノコの上にかねようとしたその瞬間、

「Oh!」

なに？

「Are you gonna use Montrachet for cooking?」

モ、モンラ？ なに？

「It's 1995!」

どうしちゃったの？ なに？

「ああ！ ユー・ドント・ライク・マッシュルーム？」

「I do, but.... Well... Never mind」

行っちゃった。

料理に白ワインを使うのが不思議だったのかしら？

そうね、男の人って食べるだけで、作り方なんて知らないものね。

さてと、ワインをかけて... わあ！ このワイン、いい香り！

あとは、バターを...

あ

バター...

買うの忘れたあ！

冷蔵庫の中には... ない、あるわけない。

どうしよう...

バター無しで作る？ でも、バターが決め手なのよお。

リビングを覗くと... こっち向いたわ。

「What?」

「アイ... ニード・バター、ノー・バター」

「Pardon?」

「バター！」

「You mean... butter?」

バラー？

「バター！ こういう四角い、イエロー、こうやってパンに塗る、バター！」

「May..be.. you mean butter, right?」

「アイ・ニード・バター！！！」

「Ok！」

あの人シュパッて立ち上がってシュッと出ていった。

お願い！ ちゃんとバターを買ってきて！ バラーとかいうのじゃなくて！

買ってきたわ、ええ、ちゃんとバター。

5種類も。

四角いの中からプラスチックのパック入りからチューブのまで。

男の人ってそうよね、買い物頼まれるとどれがいいかわからなくて何種類も買ってくるの。

おとうさんもそうだったわ。

そして、どれも違ってたりするのよ、メーカーと名前言ってもよ？

あら？ あらっ？ このいちばん小さい四角いのは...

エシレバター!?

あの高級で有名な、私も使ったことないエシレバター！

「あああああ！ サンキューーー！」

感激して両腕あげちゃったわ。

「I'm so glad you're pleased」

「アイアム・ハッピー！ サンキューーー！」

嬉しそうな顔してるけど、いちばん嬉しいのは私！  
持って帰りたいくらいよ！  
持って帰ってどうするのよ、今使わなきゃ。

完成！

肉じゃが、キノコのホイル焼きに、肉じゃがで残ったお肉を全部薄切りにして、  
玉ねぎとニンジンをおろしにして残ってたキノコも巻いて、  
フライパンで焼いて塩・胡椒して、ちょっと蒸して（白ワイン少々もね）、  
最後にちょっとお醤油でアクセント。

炊飯器がなかったからお鍋で炊いたわ。

今の若い子にできるかしら？ 美香には教えたことはあったけど、やらないわね。

そうそう、あのインスタント・ライス！ まずいの！

でも、もったいないから、玉ねぎのみじん切りとニンジンのみじん切りと、

椎茸のみじん切りと一緒に炒めて卵とでチャーハン作ったわ。

インスタント・ライスを制覇してやった気分よ！

でも、私... アメリカに料理を習いにきたのよね？

なんで料理を作ってるの？

しかも、いつも家で作ってるようなもの。

マックやピザを食べ続けるよりはいいわ。

## 夕食と呼び名

---

「Wow!」

ウォ〜ッて... 本当に言うのね。  
映画とかでもワオワオ言ってるものね。  
私は恥ずかしくて言えない！

あ！ 写真撮ろう！ アメリカで作った初めての料理だもの。  
本当はキャシーが作ってるところやできた料理の写真を撮るつもりだったんだけど、  
しかたないわ、それにしても離婚て...

「Looks good!」

嬉しそうにしてるけど... 大変ねえ。

えっと... 料理だけだと家の夕食と変わらないわねえ。

あ！ この人を入れればアメリカって感じになるんじゃない？

「アイ・テイク・ピクチャー、だから、スマイル！」

「Pardon？」

「えっと、ピクチャー！（カメラを指さしてみせたわよ） セイ・チーーズ！」

「Ah! Ok」

目が笑ってないけど、ま、いいか。 ピッ パシャッ

料理で使った白ワインを、あの人が、ワイン・クーラーっていうの、これ？

こんなのが家にあるってアメリカねえ。

これも写真撮っておこう。 ピッ パシャッ

私は... あの人が... フォークで肉じゃがを口に入れるのを... 息を殺して見ている。

「Mmm, good!」

「え？ 本当？」

「Yes, it's really good」

あら？ 私、今日本語だったわよね？ でも、返事したわよ？

料理に言葉はいらないんだわ！ 料理は国境を超えるのね！

フッフ、ワイン飲んじゃお！

あら、美味しい！ 料理に使うのはもったいないくらいね。

「ワイン・イズ・グッド！」

「Yes, it's VERY good one」

「イエスイエス」

はあああ、自分の味ってホッとするわ。

アメリカで自分の料理食べてるのは複雑だけど、ファースト・フードよりずっといいわ。

完食！

ご飯は残したのよ、けっこううまく炊けたんだけど。

あのインスタント・ライスのチャーハンは全部食べたのよね。

まあ、いいわ、少し残ってるからおにぎりにでもしておこう。

さてと、後片付けしよう...って、お皿持って立ち上がったたら、

「I'll do it」

あの人が私の手からお皿とってシンクのところに運ぶのよ。

手伝ってくれるってこと？

さすがアメリカだわあ。

おとうさんなんて、お茶ひとつ入れなかったわよ。

テーブル拭きたいんだけど、食器用のは見つけたんだけど、テーブル拭くのは...

「あの...」

いい加減、名前呼んだ方がいいわよね。

でも、ダンだかデ〜ンだか、よくわからないんだもの。

あ！ 名字！ 名字を呼べはいいんだわ、たしか...

「ミスター・ソープ！」

顔あげた！ よし！

「ミスター・ソープ、えっとテーブル...」

「Swope」

え？ そう呼んだわよね？

「ソープ」

「S・woope」

「ソーーーーープ」

あ、またあの顔した！ やれやれみたいなの？ ちゃんと言ってるじゃない！

なに？ 人差し指チョイチョイって、来ってこと？ なによ？

私の目の前に、シンクの横に置いてあるハンドソープを突きつけて、

「This is soap」

ハンドソープでしょ？ それくらいわかるわよ？

「My last name is Swope」

「ソープ...」

あら？ なに？ 人差し指鼻のところにつけて古畑任三郎みたいに、なによ？

「Ahhh... Can you」

あなたは、できるか？

「Say Danny?」

「ダニー？」

「Yes! Danny」

「ダニー」

「Call me Danny」

あ、そう...

「ダニー」

「Yes」

だ～ったら最初から言ってくればいいじゃない！ デ～ンとかそんなのじゃなくて！

「Only my mom used to call me Danny when I was a lil kid」

何を言いながらやれやれみたいに首振ってるの？

あら？ マム？ マムって言ったわよね？ マムってお母さんよね？

私をお母さんって呼ぶってこと？

「アイ・アム・ナット・ユア・マム！」

「I know!」

なんで笑うのよ!?

「Now my turn」

マイ・ターン、どこかで聞いたことあるわ、何の映画だったかな？

「Please let me know your name again?」

ン？ なんて？

「Your name」

ああ！ 私の名前！

「ヒロミ、ヒ・ロ・ミ」

「Hi..oomi...」

ヒオミじゃなくて！

「ヒーローミ！」

「Hiiiiooomi」

そんなむずかしい名前じゃないでしょ！ キャリー・パムパムじゃないんだから！

私も言えないけど、パミュパム？ あれ？ ピヤムパム？

「Well.... Would you...」

あ、はいはい？

「let me call you Romie?」

えっとlet～は、～させるで... ロミーと呼ばせろと...

やっぱり ヒは削除されちゃうのね。

「Actually Romie is a boy's name though」

私は聞き逃さなかったわよ、今、ボーイズ・ネームって言ったわ。

つまりあれ？ ヒロミがヒロシみたいになるってこと？

んもーっ、いいわ！ ヒオミより。

「オーケー、ロミー、オーケー」

「Good! So now we're Romie and Danny」

語呂はいいわね。



## 食後の会話

---

それにしても...

どうして部屋の中がこんなに暗いのかしら？

このリビングだってこんなに広いのに、ソファの横のサイドテーブルの上に、  
テーブルランプが一個と、壁にくっつけて置いてる棚の上に一個だけ。

天井に照明がついてないわよ。エコ？ へえ、ここまでするのね、アメリカって。  
だったら、こんな白熱球じゃなくてLEDにすればいいのに。

「Thank you for your great dinner」

え？ なに？

「Thank you for your great dinner」

あらあ、グレートだなんてえ、それほどでもないわよお。

「ノーノー、ナット・グレート、ホホホ」

料理してほめられるなんてちょっと嬉しいわ。ちょっとじゃないわ、かなり。

「It was. You are a very good cook」

褒め言葉って、ちゃんとわかるものなのね、私も現金かしら、ウッフ  
それともお世辞？ アメリカ人てお世辞がうまいっていうじゃない？

「えっと、本当に？ってなんて言うんだっけ、あ、トゥルー？」

あら？ シバシバまばたきしちゃって、やっぱりお世辞なの？

「True」

本当に？

「トゥルーにトゥルー？」

「True, true, true」

なんで笑ってるのよ？

「Especially...」

ニヤツとして、なに？

「Steamed mushrooms were excellent」

ああ！ キノコのホイル焼きが気に入ったのね。

そりゃそうよ、エシレバター使ったんだもの、美味しかったわあ、香りもすごくよかったし。

「バター・イズ・スペシャル！」

「Yes, and... this is special, too」

ワイン？ そうね、ワインもなかなか美味しかったわね。

「Do you want more?」

料理に使ったワインを食事中と食後に飲む...っていうのもエコかしら？

食後にワインなんか飲んだことなかったわ。

食べ終わったら、片づけて、次の日のお弁当の下準備したらグッタリなもの。

でも、アメリカだし...

「イエスイエス」

こういうのもたまにいいわよね。

「Where do you live in Japan?」

え？ ジャパンのホエアー、どこにリブしてるかってことね。

「東京、あ、ト〜ウ・キョ〜ウ」

「Ah! Tokyo!」

で言っても、外れの方なんだけどね。

「Do you have family?」

なんだか中学校の英語の授業みたいだわ。

「イエス・アイ・ドウ」

ハッ！ この人、ファミリーがいなくなっちゃったんだったわ！

子どもはいるのかしら？ キャシーが連れていったのかしら？

キャシーの手紙には何も書いてなかったわ、この人のこともよ。

あの手紙書いてた頃から離婚話になってたのかしら？

だったらなんで私のこと受け入れたの？ てことは、その頃はまだ...

「Romie?」

でも、離婚って、そんなに急にする？

「Romie, are you ok?」

えっ？ 私より

「アー・ユー・オーケー？」

ポカーンとした顔してるけど

「Yeah, I'm fine」

ファインじゃないのはわかってるのよお。

「Do you have kids?」

キッズ？ えっと、子どもね。

「イエス・アイ・ドウ」

「How many?」

ハウ・メニー... “How many apples do you have?” そうそう、中学で習った習った！

「ワン」

「Boy or girl?」

この人なんでこんなにしゃべり続けるのかしら？

最初会ったときはムツツリしてたのに。

あ、手料理食べて、キャシーのこと思い出しちゃった？

それで、淋しくなって、しゃべり続けてないと、なんていうの？

孤独に押しつぶされそう... そうかもしれないわ、かわいそうに。

「Romie?」

「あ！ え、ガ、ガール」

「Ah! Lucky you!」

あなたはアンラッキーよねえ、その年で離婚なんて...って、この人何歳？

「ハウ・オールド・アー・ユー？」

またシバシバまばたきしてるわ、あなたは何歳ですか？って、これじゃなかった？

「I...am 48」

フォーティーエイト... 48！ 私のひとつ下？ わからなかったわあ、

ていうより、外人の年ってわからないわよねえ。

ほら、美香が前に好きだったインなんかのJなんとか、

キムタクより年下だって知ったときはビックリしたもの。

それじゃキャシーは何歳？ 30代前半に見えたけど、美香はボトックスしてるって、

「ハウ・オールド・イズ・キ」

あっ、ダメダメダメ！ 思い出させちゃうわよ、えっと、

「ア、アイ・アム49！ でも、すぐ...って、あ、スーーン50！」

「Are you kidding?」

キ、キディ？ キディランド！ 子ども？ はああああ？ 何言ってるの、この人!?

「アイ・アム・ナット・キッド！」

「I know, but you look young, very young」

ヤング？ あ、あら、そう？ そうかしらあ、やだあ、ウフフフ

「So... You have a daughter and husband」

ハズバンドは、

「ダイ」

「Pardon?」

「マイ・ハズバンド・ダイ」

「Oh... I am sorry」

なんであなたが謝るの？

「ノー・ソーリー！ マイハズバンド、心筋梗塞って... えっと、ハート...」

あっ！

「シアー・ハート・アタック！」

「Oh...I...see」

ありがとう、クイーン！

## やっとな

---

今夜はお風呂に入るわよ。  
それにしても、やっぱり素敵ねえ、このバスルーム。  
まずはメイク落として...

あ

鏡の中の私...

メイク... してない！

エーーーーッ!? 私、今日ずっとスッピンだったのーーーーっ？

あ、だって、ほら、あの人に起こされて、あのカタコトの役立たずのスタッフから電話で、それから...えっと... あ、ピザでしょ？ それでスーパーに行ったのよね。  
スーパーにもスッピン!? ああもう、えっと、そうそう料理して、食べて、さっきまであの人としゃべって... でも、何回かトイレに来たわよね？  
鏡見る余裕なかったわよお、あ！ 顔も洗ってなかったわ！  
まあいいわ、この年になってメイクしようがしまいがたいして変わらないし、でも、スッピンを人に見られるってイヤよねえ、まあ、あの人に見られたっていいけど。どうせ次の受け入れ先が決まるまでだけだし。

カウンターに着替えの下着とパジャマ、そして棚からタオルを出して...

こんな高そうなタオル使っているのぉ？ ウフフ

バスタブにゆっくりつかりたいわあ。

入浴剤持ってくればよかったかしら？ でも荷物になるしねえ。

あら？ これはなあに？ Bath Salt... バス・ソルト！ あら、いい香り！

これを入れて入ろうかしら？ でも、身体も髪も洗うわけだから、

お湯につかって、すぐにお湯を抜かないとダメよね？ 逆にする？

髪と身体を洗った後にお湯をためて... めんどくさいわ、いいわ、シャワーで。

日本のホテルもそうよね、だからおとうさんはホテルに泊まりたがらなかったのよ。

学会で出張から帰ってくると、うちのお風呂がいちばんだって言ってたわ。

美香はシャワーだけよね。せっかくお湯をためても入らないからもったいないったら。

えっと...

どれがシャワーの水栓？ このレバー？ これはバスタブの栓なのね。

おそらく... この丸い取っ手みたいなのがそうよね。  
回せばいいの？ 出てこない。壊れてるのかしら？  
あら？ 何か書いてるわ。  
シャワーからお湯が出てる絵の下にPULL。ああ！ 引くってことね。

グイッ

「キャーーーーーーーーーーーーッ！」

つ、冷たい！ 冷たーーーーい！ と、止めなきゃ！ 水が滝みたいで、  
と、届かない、あの取っ手まで届かなーーーーい！  
どうしようどうしようどうしよう！ だれかーーーー！ タスケテーーーー！

「Romie!」

い、息ができない... 水が... イタタタ、どうすれば、あの取っ手に

「Romie! Are you alright?」

なんとかしないと死んじゃう！ まだおとうさんのところには行かないわよ！

グッ

と... 止まった...

「Romie! What's happened?」

だれっ？

「Are you alright?」

あ、あの人！ やだ！ なに？

「ホ、ホワットーーーーッ？」

「Are you ok?」

「オ、オーケーじゃないけどオーケーーーーーッ！」

「Are you sure?」

「オーーーーーケーーーーーッ！」

「Ok, if you need a help, let me know!」

「ノー・ヘルプ！ オー——ケー——！」

「Ok!」

なに？ 覗き？ まさか！ まあどうでもいいけど、どうすればちゃんとお湯が出るの？  
あら？

取っ手のところのふちに青と赤のグラデーション...

これは... 温度ってこと？

今は矢印がいちばん右、いちばん青いところ、さっき回したから？

これを回して...ちょっと赤いところに... そして... ああ、ドキドキする PULL！

「ギャッ！冷たっ...あ...」

ぬるくなったわ。

そういうことだったのね。

もう少し赤い方に回して... あ、ちょどいい。

はあああ、シャワー浴びるだけでこの苦労ってなによ？

それにしても、この水圧、吹き飛ばされそうなんだけど。

アメリカ人て頑丈なのね。

こっちのドライヤーって、すごい風圧だからあっという間に乾いたわ。

日本のもこれくらいだと楽なんだけどねえ。

ああ、サッパリした！ 髪の手触りもサラッサラよ。

アメリカに来る前に白髪染めしてきたから、まだ大丈夫ね。

肌は... パックして寝よう。

プラセンタ入りマスク、肌がプルツとする気がするのよ、気のせいかもしれないけど。

なんだか喉乾いたわ。

水分摂らなきゃ！ 水分、水分、お肌に水分、身体に水分。

若い頃はそんなこと考えもしなかったわ、喉が渴いたから何か飲むだけだったわ。

年をとるって... 未知との遭遇だわ。

夜のキッチンで... 静かよねえ。

うちでもそうだわ。

静かで落ち着くんだけど、ちょっと淋しいのよね。

この冷蔵庫すごいよ。

この小窓みたいなところから氷とクラッシュされた氷と冷たいお水が出るの。

はあああ、冷たくて気持ちいい！

ガタッ

な、なに？

「Waaaaaaaaaaa!」

「キャーーーーーッ！」

な、なに？ ホラー映画みたいな声出すから、私までビククリしちゃったじゃない！

「Ah... well... sorry, Romie, right?」

なに言ってるの？

「イエス」

あの方が笑い出したわよ、なによ？ どうしたの？

「Sorry... I've thought Jason's coming into my house! Hahahaha!」

ジェ...イスン...だけわかったけど、それって、だれ？

「フー、ジェイ・スン？」

「Friday the 13th! Hahahaha!」

フライデー？ サーティーン？ 金曜日、13... 13日の金曜日？

あのジェyson？ それがどうしたの？ 夜中に私がここにいたから？

失礼しちゃうわ！ 何もあんなのを...

あ

パックしたままだったーーーーっ！

ベッドの中よ。

走ってきたのよ。

うしろから「グッナ〜イ、ジェyson！」とか言ってたけど。

男ってデリカシーがないっていうか、まあ私もパックしたままキッチンに行っちゃったからだけど、



だって、まさかあの人が来るなんて思わないじゃない？ あの人の家なんだけど。

いいわよ、べつに、パックした顔見られたって。

若いときだったら男の人にそんなの見られたら泣くわね。

若いときはパックなんてしなかったわ。

いいわもう、寝る！

はあああ、なんだか私の人生の10年分の出来事が1日で起こったみたいな日だったわ。

10年はオーバーかしら、5年？

ちがうわ、こんなこと初めてよ！

## 朝食

---

重た～いまぶたを開けて時計を見ると 6時40分か。  
ゆうべは一度も目が覚めなかったわ、疲れが出たのね。  
ヨッコラ... イデデッ、身体が、固まってる、  
ぐっすり眠れるのはいいんだけど、身体がガッチガチになるって、若い頃は...  
そんなことより起きなきゃ。  
今日はちゃんと顔を洗ってメイクするんだから。

フルーツヨーグルトサラダは冷蔵庫の中。  
ゆうべの残りのマッシュルームを使ったオムレツもできたし、  
トーストはあの人が起きてきてから焼けばいいんだけど...  
問題はコーヒーよ。  
私ってコーヒーいれるのがヘタなのよ。  
おとうさんは日本茶しか飲まなかったし、私もふだんは紅茶で、  
たまに喫茶店でコーヒー飲むくらいなんだもの。  
家では美香がいてるから、加減がわからないのよねえ。  
それに、このコーヒーメーカー、きっと最新式よね？  
触らない方がいいわ、壊しそう、ううん、壊すわ、メカに弱いんだもの、私。

「Good morning, Romie」

あ、起きてきたわ。

「グッドモー...」

目があって、一瞬固まっちゃった、ゆうべのパックした顔...見られたのよね？  
なんだかあの人の目の下あたりも、なんていうの？ 笑いこらえてるっていうか、  
あっ、そんなことどうでもいいのよ！

「ダニー」

「Yes？」

「プロブレム」

「Ah... Problem？」

「イエスイエス」

「What kind of problem？」

「コーヒー」

「What？」

「アイ、作れないってなんだっけ... これ！」

コーヒーメーカーを指さして

「ノー、コーヒー、だから、プリーズ・コーヒー」

「Do you want me to make coffee?」

「コーヒー」

「Sure!」

はあああ、朝から英語って頭がまわらないわあ。

オムレツとフルーツヨーグルトサラダにトースト。

あの人が入れたコーヒーと...

あ、牛乳飲むかしら？

「えっと、牛乳... なんだっけ、ほら、あ！ ミルク！」

「What?」

どうしてこんな簡単な単語も出てこないの？ まあいいわ。

「えっと、ユー・ニード・ミルク？」

「I...need... What?」

んもーっ、見せた方が早いわ。

冷蔵庫から、重たいったら！ これでも小さい方なんだから驚くわよ。

「これ！ ニード？」

「Ah! Milk! Yes, thank you」

百聞は一見にしかず

こういうことね。

あっ！

「ノーーーーッ！」

あの人が驚いた顔のままストップ・モーション...になっちゃったけど、

「ノー、えっと塩は、あ、ソルト！ ソルト！ ノー！」

「Why?」

「味がついてるのよ、ってなんて言えばいいの？ えっと、イート！」

「What?」

「イート！ とにかく、こうやって、イート！」

「You mean... Should I eat without salt?」

「イート！」

横目で私のことチラッチラッと見ながら... 食べた！

「Ah! It's already added salt'n pepper!」

何言ってるのかわからないけど納得はしたみたいね。

「Mmm... Very good!」

満足そうに食べてるから大丈夫ね。

「It was a fantastic breakfast」

アメリカ人で、グレートとかファンタスティックとか簡単に使うのねえ。

日本だったら、こんな朝食くらいでファンタスティックなんて言わないわ

ていうか、言わないわよ、ファンタスティックなんて。

「Thank you, Romie」

でも、朝食作ったくらいでサンキューって言われると嬉しいわねえ。

おとうさんも美香も、ありがとうなんて言ってくれたことなんかないわよ。

バタバタ食べてバタバタ出かけていだけなんだもの。

これでも朝食のメニューだって考えてるのよ、昨日は和食だったから今日は洋食とか。

本当はな〜んにもしないで寝ていたいときだってあるのによ？

それに、ほら、お弁当だってそうよ？ 毎日考えなきゃいけない苦痛ってわかる？

せっかく作っても、美香ったら、今日は会社の人たちとランチだからいらなくて、

だったら前の日に言ってよ！ 私のお昼にするけど、お昼からミニハンバーグの煮込みって

「Romie?」

え？

「はい？ あ、ホワット？」

「Are you... ok?」

「オーケーオーケー」

この人のことすっかり忘れてたわ。

リビングで食後のコーヒー。

こういうのって、なんだか優雅な気分になっていいわねえ。

アメリカのコーヒーって飲みやすいのね。

あのコーヒーメーカーがいいのかしら？ でも絶対触らないわ！

トゥルルルトゥルルル

電話！

ちがうちがう、私は出なくていいのよ、私の家じゃないんだから。

あっ！ もしかしたら、あの現地スタッフ？

あの人が何かしゃべってるから、友だちとかかしら。

あっ、キャシー？ そ、そうかしら？

こ～っそり顔を見ると、あら、笑顔。

ということはキャシーではないわね。

キャシーかもしれないわ！ 仲直りしている最中とか？

仲直りしてくれないかしら？ そしたら私も何も考えないでクッキング・ホームステイよ。

でも、離婚しちゃったわけでしょ？ 無理よねえ。

「Romie!」

えっ？

「Kent」

誰？

「へ、へロー」

「カトーサン、現地スタッフノケントデス」

こいつか...

「今ゴ主人ニオ話シシマシタ」

なに？ 次の受け入れ先が決まったの？

「実ハ、マダ新シイ受け入れ先ガ決マラナイノデスネ」

はあっ？

「デスカラ、モウ少シ、ソチラニイテクダサイ。」

「ゴ主人ニハ、モウ、オ話シシテマスカラ、大丈夫デス！」

「あのねっ、いちいち決まらないって電話しないでよ！ 期待するでしょ！」

「ゴモットモデス」

「次の受け入れ先が決まるまで二度と電話してこないで！」

「デモ、現地スタッフトシテノ責任ガアリマスカラ」

「責任感じてるなら早く探して！」

「ソレハ全カヲ尽クシテ...」

「だいたいね、私のことなのに、なんであの人に先に話してるのっ？」

「ソレハ、ソノ方ガ話ガ早イト思イマシタ」

ウッ

た...たしかにそうだけど...

トントンと指で肩をたたいて、代わるって手振りをするから受話器を渡したわ。

ああああ、先が見えない。

人生ってそうよね、若い頃は見えてる気がするけど、そんなの思い込みよ。

一寸先は聞いて、昔の人はいいこと言ったわねえ、そのとおりなもの。

おとうさんが突然死んだときだって、まさかあんなに急になんて思ってもいなかったわ。

もっと優しくしてあげればよかった... 私が最後にあの人に言った言葉なんて...

「おとうさんのオナラはくさいのよ」

ひどいわよね。でもくさかったんですもの。

まさかその10分後に突然苦しんで、あっという間に死んじゃうなんて思わなかったんだもの！

くさくてもくさくないって言ってあげればよかった... ウツ...泣けてきちゃった...

「Romie... Are you alright?」

あ、やだ、また泣いてるところを見られちゃったわ。

「イエスイエス」

「Romie」

両肩グッとつかまれちゃったわ。

「I understand you are upset」

そんな真剣な目をされちゃうと...

「I told Kent」

おとうさんのオナラがくさかったって考えてたのが申し訳ない気がしちゃう。

「You can stay here as much as you... can」

アズ・マッチ・アズって、なんだったっけ？

「So no worry, ok?」

「オー...ケー...」

とにかく... まだここにいるってことなのよね？

ということは...

行かなきゃならないところがあるわ！

備蓄よ！

---

まだあの家にいるってことは、それ相当の覚悟をしないとイケないってことよ。  
何に対しても対応できるようにしておかないと！

だから、私は今またこうしてスーパーに来てるの。  
だって今朝トースト焼いてた時に気づいたのよ。  
あの食パンでお昼のサンドイッチ作るつもりだったけど、卵しかなかったの。  
ハムもレタスも何も買ってなかったのよ、昨日はあわててたしね。  
今日は買いまくるわよ！ どんな事態がきても大丈夫なようにね！

まずは... メインになるものからだわ！

「Romie」

え？

「May I push the cart?」

あ、そうか、この人もいたんだわ。

「ホワット？」

手振りで、カートを、ああ、カートを押そうか？ってこと？

いいけど... スーパーで男の人って足手まといなよねえ、悪いけど。

でも、まあいいわ。

「ゴー・ミート！」

「Pardon?」

ほらね！ ああもう！

「こっち！ ラン！ こうやって、ラン！」

カートを押して走るあの人と肉売り場に走る私。

さてと...

どうする？ 鶏肉、バスンと真ん中から切ってるのか骨付きもも肉、  
ささみって売ってないのね、ひき肉もないし。

いっそ... この丸ごとを買う？ ささみだって取れるわよ。

「Are you gonna make Roast chicken?」

ローストチキン？

「ノー！」

「What do you wanna make?」

今...私に...

「ノー・トーク！」

「Oh... sorry」

話しかけないで！ 考えてるんだから！

そうね！ 丸ごと買うわ！ 解体して冷凍しておけばいいし。

牛肉と豚肉も買っておいた方がいいわね。

牛肉はひき肉があるのね、でも、いちばん小さいパックでもハンバーグ6個は作れるわ。

でも、小分けにすればいいから買うわ！

とにかく、考えうるものはすべて買っておいた方がいいわね。

魚は？ アメリカ人だって魚は食べるわよね？

いちおう聞いてみる？

「ドゥー・ユー・イート、魚はフィッシュよね、フィッシュ？」

なに？ そのジェスチャー？

口を指さして、人差し指でチッチッチッて、なにやってるの？

「ドゥー... ユー... イー... フィッシュ？」

なに？ 口パクパクさせて... アイ...アイ...オー？

「ホワット？」

「Can I talk?」

だっ... だから男の人とスーパーで買い物したくないのよっ！

「アンサー！」

「Not much」

ナット・マッチ... そんなに食べないってこと？

「ユー・ドント・ライク・フィッシュ？」

なにその手をヒラヒラって？

「ホワット、こういう、ヒラヒラ？」

「So so」

ソーソー？

「ホワット・ソーソー？」

「Not much, but I can eat」

そんなに好きではない...と。

ああそう。

フッフッフッ

あなたは今私の闘争心に火をつけたのよ。

子どもの好き嫌いをなくす努力をし続けた主婦のねっ！

買うわっ！



巨大なカートに山盛り！

野菜も果物も調味に使えるものも、とにかくどう組み合わせてもいいように突っ込んだのよ。

今日は大丈夫！

とにかくこの楽天のカードを店員に差し出せばわかるはずよ！

「Next！」

さあ！

「Cash or charge？」

楽天ガンバレ！

「Charge」

えっ？

あの方がカード出しちゃったわ。

「ノーノー、アイ・ハブ・カード」

「Romie, I pay, you, cook」

アイ・ペイ、ユー・クック... 自分が払う、私はクックする...

いいのかしら、だって... わっ！ さ、三万近いわよ！

こんなに買っちゃって、この人に払ってもらうのって気がひけるわあ。

もしこの楽天カードで買って、ポイントになったとしたら...

私、ゴールド会員になれるんじゃないかしら？ 楽天広場で買わないとダメ？

「Let's go, Romie」

よくまあ一人で持てるわねえってくらいの荷物を持って車の方に歩いていくわ。

骨だけになった鶏さん、骨だって無駄にしないから成仏してね。

ささみも取ったわよ、今の若い子にできるかしら？ オーッホホホ

牛肉も豚肉も、ありとあらゆる料理を想定して小分けして冷凍庫に直行よ。

その間にサンドイッチ作って、あの人に食べさせたわよ。

私は肉と格闘しながら食べたわ。

これが主婦よ！

勝ったって気分よ！ この満足感！ 久しぶりだわあ。

いつ以来？ あっ、そうそう！ なんと長ネギがあったのよ！

アメリカで長ネギに会えるなんて泣きそうだったわ、泣かなかったけど。

さてと、今夜は何を作ろうかしら？

何か食べたいものってある？

リビングのソファでガラ〜ンと横になって本を読んでるわ。

ていうか、寝てるわよ？

起こさない方がいいかしら？

空になったお皿だけ片づけちゃうわ。

「Oh, Romie, sorry I was sleeping」

あら、起こしちゃった。

「スリープ・スリープ」

あっ、じゃなくて、

「ホワット・ユー・ワント・イート・ディナー？」

「What do I wanna eat for dinner?」

「ホワット・ユー・ワント・ディナー？」

「Whatever you want to make」

にっこり笑うけど... ホワットエバーって... なんだっけ？

「えっと、ミート？ パスタ？ スープ？ あとは...」

「Romie, make」

作る

「anything you want」

エニシング、なんでも、私がワントするもの

それって...

もしかしたら、意識したら、なんでもいってこと？

これだもの！

なんでもいって言われるのがいちばん困るのよ！

主婦が「言われて一番イヤな言葉」ナンバーワンだわ！

「Romie?」

あっそう

「May I help you?」

ヘルプ〜ッ？

「ユー・ノー・ヘルプ！」

まったく男って役に立たないったら！

わかったわよ、私が作りたいものでしょ？ 作るわよ！  
覚悟しなさいよ！

ジス・イズ・スズキ。

鱸よ。

英語でなんちゃらって書いてあったけど、そんなもの見なくてもわかるわ。

ドデーと大きな半身しかなかったけど買ったわ。

今日のみだけ切って、あとは適当に切って冷凍庫に入れたわ。

魚はそんなに好きではないと。

そう言ったわよね。

私のを食べてもそう言えるかしら？

これはね、塩ジャケしか食べなかった美香を魚好きにしたレシピよ。

美香が高校のときに調理実習がある前日のことよ。

実習で作る献立持ってきて作り方おしえてって言うのよ。

それを習うんじゃないの？って思ったわ。

一回聞いたくらいじゃわからないって言うのよ。

しかも同じ班の子たちも料理なんかしたことない子ばかりだっていうじゃない？

ホワイトソースの作り方から教えたわ。

とにかく弱火で、少しずつ牛乳を足してよく混ぜて...を繰り返す。

美香の班だけホワイトシチューになったって言ってたわ。他の班はブラウンシチュー。

勝利に酔いしれたわ。そうそう、白玉まで作らされたわよ。

その中に、魚のホイル焼きがあったの。洋風！

それまで和風のしか作ったことなかったから新鮮だったわ。

それを私流にアレンジしたのが今では我が家の定番よ。

そして、美香は今では魚が大好きになったわ。

ホイルの上に薄切りにした玉ねぎを敷いて、その上に塩・胡椒した鱸を置くの。

ポイントは、このとき魚にすりおろしたレモンの皮をふりかけるのよ。

レモン汁もほんのちょっとね。そして、魚の上にベーコンを置くの。

あとは横にキノコを置いて、サッと塩・胡椒して、バターと白ワインで、

15分から20分で洋風魚のホイル焼きの完成よ！

あら？ 昨日もホイル焼きだったわね...

でも、あれはキノコだけだったから別物よ。

昨日のワインがまだ少し残ってたから、それとエシレバターを入れて、

エシレバターを使って美味しくないわけがないわ。

そして、鶏ガラの出番よ！

さっと洗って30分くらいグツグツ強火で煮て、一回ザルにあげるの。

ほら、臭みがあるでしょ？ 血とか汚れとかね。

そして、新しい水と生姜を薄切りにしたものと長ネギの先っぽと一緒にコトコト煮るのよ、ひたすらコトコトとね。

でも、今日は半分は玉ねぎとかセロリの葉っぱを入れたのも作ったわ。

中華風と洋風どっちにも使えるようにね。

スープを煮ている間に、海老と長ネギとしいたけを細かく切って、

塩・胡椒とちょっとお醤油入れて混ぜて、ワンタンの皮に包む。

そう！ ワンタンの皮が売ってたのよ！

できあがったガラスープに塩・胡椒と色づけ程度にちょっとだけお醤油入れて、

ちょっとだけごま油を入れるの。このちょっとで中華風になるのよね。

ごま油も売ってたの！ 胡麻もあったから買っておいたわ。

強火にして、その中にワンタンを入れて、浮き上がってきたら完成よ。

あとは、食べる直前に、器にレタスを敷いて、熱々のスープをよそって、

ネギをのせて出来上がり！

あとはニンジンを生切りにして、ハチミツちょっととレモン汁と塩で軽く和えて箸休め。

上にパラパラッと白ごまかけて出来上がりよ。

ごぼうがあればキンピラが作れるんだけどねえ。

まあ、これだけでできればいいわ。

はあああ、さすがに疲れたわあ。

「Wow!」

ワオもだいぶ聞き慣れてきたわ。

さあ、開けなさい、そのホイルを開けるのよ。

「Oh, smells so good!」

早く食べてよ！

フォークで... 口に入れた... さあ、どうだ？

あら？ なんにも言わない... ダメ？ やっぱりダメなの？  
顔あげて、私をジッと見たわ、なに？ 魚だから？ なんでもいって言ったでしょ？

「Romie....」

な、なに？ そのシリアスタッチな顔は、なに？

「I've...never...had...」

私は持ったことがない...？

「such a delicious fish!」

私は持ったことがない、こんなデリシャスな魚... えっと、気に入った...ってこと？

「ユー・ライク？」

「I love it!」

はああああああ

「勝った！」

「What did you say?」

「勝ったあ！ ヤッター！」

「What?」

「ユー・セイ・ユー・ドント・ライク・フィッシュ！」

ユー・セイ・ユー・ラブ・イット！ アイ...アイ...」

勝ったって、なんて言うの？

あっ！

「ア〜イ・アム ザ・チャンピオ〜ン、マイフレ〜ンド！」

ああ！ フレディー！ 私、勝ったわよ！

「Yes, you are the champion, my friend」

あの人がニッコリ笑ったわ。

負けを認めるなんて男らしいわ！

「Romie...」

「イエス？」

「You are... Something」

あなたは... サムシング、何かだ...？

何かって何？

いいけど、勝ったから！

## バスはバス

---

片づけ（あの人がほとんどしてくれたんだけど）が終わって、  
さすがに今日はグッタリよ。  
スーパーで闘い、肉と闘い、あの人の魚嫌いと闘ったんだから。  
私の全勝だけど！ オーッホホホ  
あああああ、でも疲れたああ。  
若い頃はこれくらいなんてことなかったのにねえ。

今日はもうお風呂入って寝よう。

「アイ・ゴー・バス」

「Pardon？」

「アイ・ゴーーー・バス」

ポカン？ なにその顔？ 聞こえなかった？

「アーーーイ・ゴーー・バス」

ああ！ って顔したわ、やっとわかったのね。

「Where are you going？」

どこに・・・行く？

「だから、ゴー・バス」

なにその笑いをこらえるつもりで、ちっともこらえられてない顔！

「Ah... May I say something？」

何かを...言っていていいか...？

「イエス」

「I think you want to take a bath」

ああ！ テイク・ア・バスって言うのね？

「イエス、アイ・テイク・ア・バス」

なにその身体グニャグニャさせて口に手をあてて... 笑ってるじゃない！

「Romie, I'm sure you don't want to take a bus now」

はあっ？ ドント・ワント？ 私がお風呂に入りたくない？ 入るって言ってるでしょ！

「アイッ・テイクッ・ア・バスッ！」

なんで涙流して笑うのよっ？

「Romie, look at my mouth」

口を見ろ... なによ、なんで口なんか見なきゃならないの？ 見るけど。

「You want to take a bath, see? BATH」

そうよ？

「You said bus, BUS, did you get the difference？」

ディフェレンス...違い...をゲットしたか...?

「Bus is a vehicle,」

「ビ、ビーク...?」

「Ah.... Car. Big, large...」

なんでもいいけど、なんだかわからないけどっ、

「アイ・テイク・ア・バスッ!」

はああああ バラの香りで癒されるわあ。

やっぱりゆったり湯船につかるのがいちばんよねえ。

それにしても... なによあれ? そりゃ私の英語がひどいのはわかってるわよ。

だからって笑うことないんじゃない? 失礼よ!

まあ、なにか教えようとはしてたけど... だからって... ああ、気持ちいい...

ほくれるわあ... なんだか...寝て...しまい...そう...

ダメダメ! 溺れ死ぬ!

あの強烈な水圧ですっかり眠気が吹っ飛ばされたわ。

ハァ〜、バタン!

このベッド、大の字になってもまだまだ余裕があるわね、ダブルかしら?

これくらい広いと気持ちいいわね、でもシーツを取り換えるとき大変そうだな。

美香と私のシングルベッドのシーツ取り換えるだけでグッタリなもの。

コンコンコン

ン?

「Romie」

え?

「イ、イエス?」

「Would you like beer」

ビア... ビール?

風呂上りの一杯! いいわねえ!

あ... でも...



「ウエ... ウェイト、えっと、ファイブ、あ、ミニッツ！」

「5 minutes?」

「イエスイエス」

「Ok」

だって...

パック、あと5分はやってないとダメなんだもの。

パジャマは脱いで... でも、せっかくお風呂に入ったのにジーパンはねえ。

あ、これこれ！ ユニクロで買ったロング丈の部屋着！ これがいいわ。

990円がセールで450円だったのよ。持ってきてたの忘れてたわ。

ていうより... そんなの思い出す余裕もなかったわよ。

あっ、スッピン！ いいわもう、せっかく顔洗ってパックしたんだから。

「Oh! Pretty dress!」

プリティー・ドレス？ 450円なんだけど、部屋着だし...とは言わないでおこう。

「Come here」ってリビングの大きなドアを開けたわ。

わあ！ ウッドデッキ！ デッキチェアもある～！ 映画みたいだわあ。

「Here you go」

バドワイザー！ しかも缶じゃなくて瓶よ、アメリカって感じねえ。

栓抜きどこ？

あ... クイッとひねってるわ、開いた、へえ。

あ、あら、な、かなか...

「Let me do it」

ポンッ

「サンキュー」

「Cheers!」

チアーズ？ ああ！ 乾杯！

「チアーズ！」

コンと瓶と瓶を合わせてグビッ、はあああ、お風呂上りにはやっぱりビールね！

あら？ お風呂上にビールなんて、もう何十年も飲んでないわ。

美香が生まれてからそれどころじゃなかったし、夜は後片付けして、

お弁当の下準備して洗濯物たたんで、バタバタお風呂に入ってボタンだよ。

「Romie」

「えっ？ あ、イエス？」

「I'm sorry about... laughing」

ラフイング... えっと、あ、笑う？ あっ、さっきのこと？

「I didn't mean to hurt you, but you were so cu...」

そうよ！

「ノー・ラフ・マイ・イングリッシュ！」

「I won't, I promise」

「アイ・ドウ... えっと... あ、マイ・ベスト！」

「Yeah, you are doing very well」

「えっと、ビフォー、ロングロングタイムアゴー」

「Yes？」

「アイ・スピーク・イングリッシュ、モア！ バット、アイ・フォーゲット、ナウ」

「Because you don't have to speak English in Japan, right？」

ビコース？ なぜならば？

「ビコース、アイ・アム、言いたくないけど、オールド・ナウ」

「No! Romie, you are not old! You look very young, I'm serious」

ヤングだけはわかるわ、ウッフ、もうっ、アメリカの男ってうまいんだからあ。

「でも、本当にそう思ってる？」

「What？」

「ユー・true？」

「Ah! Hahaha, yes, true」

ハハハ？

「ホワイ・ユー・ラフ？」

「Ooh, it doesn't mean... it just... well.. You were so cute」

キュート——？ なにそれえええ、酔っ払ってるのお？ それでもいいけどお。

「Romie, I figured out, when you say bus, you mean bath, so no worry, I got it!」

「バス？ イエス、アイ・テイク・ア・バス、ビフォー、えっと、アイ・カム・ヒヤ」

「I know, now you are clean!」

「クリーン？ イエス、アイ・アム・クリーン・ナウ！」

「Oh, Romie, Romie, Romie, hahaha」

あっ！ それ知ってる！

「アイ・ノウ・アイ・ノウ！」

私、空で言えるわよ！

「O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo? でしょ？」

「W...ow...」

だって私、あのフランコ・ゼッフェレリのロミジュリ14回観たのよ？

映画の14回はDVDの10000回よ！

おとうさんの専門分野だったし、これでレポートだって書いたんだから！

「Deny thy father and refuse thy name;

Or, if thou wilt not, be but sworn my love,

And I'll no longer be a Capulet. なっつかしい！」

「Romie...」

「え？ なに？間違えてた？ ミステイク？」

「Perfect! More than perfect, wow!」

「ロミジュリだけよねえ、憶えてるの、あとはねえ」

「Romie...」

「イエス？」

「You are.... Something!」

だから、その何かって何？

## フレンチ・トースト

---

今朝はフレンチ・トーストを作ってるのよ。

コツはね、弱火でじっくり焼くこと。でないと中の方がグジュグジュのままになるの。

ア、〜〜ッ、ゆうべの私ったらあああッ！

久しぶりにお風呂上りにビール飲んだからだわ。

ロミジュリのバルコニーの場面なんか一人で気持ちよくやっちゃって！

記憶なくすほどは酔ってなかったのよ、ちょっとだけ気持ちよくなっちゃったのね。

まあいいわ、旅の恥はかき捨てって言うじゃない、まだ捨てられないけどね。

まだここにいるわけだから。それにしても、この食パン、永遠になくならないんじゃない？

半分は冷凍にしたけど、冷凍したパンで美味しくないのよね。

いざっていうときはパン粉にする？ 山ほどできるわね、まあいいわ、今考えなくても。

「Good morning, Romie」

あ、

「グッモーニン、あ、コーヒー・プリーズ」

「Sure」

あとはサラダね。

「smells good!」

「ドゥー・ユー・ライク・フ... あっ！」

どうしよう...

とんでもないこと思い出しちゃった...！

大昔、若い頃、観たあの映画、ほら、えっと、あ、「クレーマー・クレーマー」！

奥さんが出ていっちゃって、息子とフレンチ・トースト作ってたわ...

フレンチ・トーストって、アメリカではそういうときに作るものなのかしら...

あてつけに作ったわけじゃないのよ？

「Romie, are you ok?」

私はオーケーだけど...

「アー・ユー・オー・ケー？」

「Y..eah, what do you mean?」

「フレンチ・トースト... オーケー？」

「Oh, I love it!」

あの映画観てないんだわ、よかった....。

自分が作ったものを美味しそうに食べてるのを見るってしあわせよね。

おとうさんも最初は美味しいとか言ってくれてたんだけど、いつの間にか言わなくなっちゃたわよ。美香なんて私の料理で育ったから当たり前だと思ってるし。

この人は美味しそうに食べてくれるのよねえ、パサパサになりかけた食パンで作ったフレンチ・トーストでも。

「What?」

「え？」

「Why are you staring at me?」

「ステア？ ホワット？」

「Ah... You are looking at me, look」

この人もジェスチャーがうまくなってきたわ。

「Do you have something to say?」

何か言うこと？

「ああ！ ユー・イート、美味しそうになってなんて言うの？ スマイル！」

「Ah！」

「アイ・ルック・ユー・スマイル、アイ・アム・ハッピー！」

「Me, too. You are... a really... great cook」

ほらね！ こうやって褒めてくれればやる気が出るのよ！

「But you don't have to cook all the time」

え？ クックしなくていい？

「ホワイ？ ユー・ドント・ライク・マイ・クッキング!？」

「I do! But if you like to go sightseeing or shopping, whatever, I'll take you」

私... 長文はわからない。

「Romie?」

「セイ・アゲイン」

「Ah, let's see.... Do you have anything you like to do?」

何か...私が...するのが...好き...なこと？ だからあつ

「クッキング！」

なに？ なんで笑ってるのっ？

「ユー・ラフ！ ノー・ラフ！」

「Sorry sorry.... But.... Haaa... You are...」

私が？ なに？ 涙目になるまで笑わなくてもいいじゃない！

「What to say.... I bet your husband was very happy」

ハズバンドがハッピー？ そうかしら... 人生の最後にオナラがくさいって言われても？

だといんだけど... あの世に行ったら忘れてるかしら...

「Oh... sorry, did I remind you of...」

「アー・ユー・ハッピー？」

あっ

私ったら

なんでこんなこと聞いちゃったの？

奥さんといたときはしあわせだったかなんて、離婚したばかりじゃない！

ほら、あの人もハ？って顔で固まっちゃったわよ。

ど————しよ————？

「Yes」

イエス？ あ、そう、よかったあああ、気にしてないわ。

「グー—ツド！」

ああ、ホッとした！

ホリデ～

---

今のうちに夕食の下ごしらえしておこうかしら。

昨日はお魚だったから、今日はお肉がいいわね。

鶏肉と牛肉と豚肉、何でも作れる体制にはなってるけど、何か食べたいものってあるかしら？  
どうせ「なんでもいい」って言うんでしょけど、いちおう聞いてみる？

ひょいとリビングを覗くと...

やっぱりソファでダラ～んと横になって本を読んでるわ。

他にすることないのかしら？ まあ男って家では... あら？ ちょっと待って。

たしか、ほら、あの、なんだっけ、あのカタコトの現地スタッフ、言ってなかった？

二週間の休暇を取ってるって... え？ あの、旅行とかする予定だったとか？

そうよね、二週間も休みを取るっていったら、海外旅行とか... あっ！

私がいるから行けなくなっちゃった？ そうかも... どうしよう...

言ってくればいいのに！ そしたら私帰ったわよ。でも、あの人がいていって言ったのよね？

人がいいのねえ。じゃなくて、いい人、いい人よ。

そうね、人がいいから、じゃなくて、いい人だから私に言えなくなっちゃったんじゃない？

私から切り出してあげた方がいいかしら？ そうね、そうだわ。

「ダニー」

「Yes?」

「イフ・ユー・ハブ、えっと、プラン？ そうそうプラン・トゥ・ゴー、ゴー」

「Pardon?」

「だから、ユー・テイクじゃない、ユー・アー・テイキング・バケーション」

「What?」

「バケーション！ トゥーウィーク・バケーション！」

ああっ、かんぺきにわからないって顔してるう！ バケーションじゃないの？

休み... えっと... あっ！

「マドンナ！」

「WHAT?」

「ほら！ ホリデ～！ セ～レブレ～ト！」

「Ah! Holiday! I know the song!」

「ソングじゃなくて！ ユー・アー・テイキング・ホリデ～！」

「Ah! Yeah」

よし！

「だから、ユー... キャン！ キャン・ゴー！」

「To where?」

どこって、あなたが決めたんでしょ？

「Romie, what do you want to say to me?」

言ってるじゃないっ！

「だから、ホリデー、ユア・ホリデー」

「My holiday... and?」

「ユー・キャン・ゴー！」

「So.... Whe...re?」

なんでまた笑うのよ!?

「ホエア・ユー・ワント・ゴー！」

「Well... you mean... I can...go...where I want to go?」

「イエスイエスイエス！」

「Why?」

「なぜって聞くっ？ だって、ユー・アー・テイクーキング・ホリデ〜！

だから、えっと、ハワイ？ グアム？ ユー・ワント・ゴー、ゴー！」

「Romie, I don't have any particular plan on this vacation」

えっと... ドンド・ハブ... プランがない... 二週間も休み取って？ ウッソ〜。

「イフ・ユー・ウォリー・ミー、ドント・ウォーリー、アイ・キャン...」

留守番てなんて言うの？

「キープ・ホーム」

ちがうみたいね... えっと... あっ！

「アイ・キャン・ドウ・ホームアローン！」

「Home... alone? Ah! Hahahaha, too dangerous!」

ああもーっ、そうやって笑ってればいいわよ！ 心配してあげて損したわ！

もういい！ 夕食の下ごしらえしよう！ どうせ「なんでもいい」って言うから聞かないわ！

「Romie!」

なによっ？

「I have a place to go, well... I want to visit there」

ほらあ、あるんじゃない！

「オーケー・オーケー！ ゴー！」

「Would you come with me?」

ハ？

「I want you to come with me」



私も？ 行く？

「ホワイ？」

「Well, I just... feel like it」

ジャスト・フィール・ライク... 私はちょうどそう感じる？ どういう意味？

でも、どこ？

「ファー—— アウェイ？」

遠いところに旅行なんてイヤよ？ アメリカだってそうとうの決意だったんだから。

「No, it takes about... 30 or 40 minutes by car」

30分から40分... だったらいいけど。

「でも、ホワイ・アイ・ゴー？」

「Because... I don't want you to do... Home Alone! Hahaha!」

留守番くらいできるわよ！

## 私はわからない

---

これでいいかしら？

ちょっとカジュアルなワンピース。

メイクも手抜きじゃなくて、ちゃんとしたわよ。

だって、どこに行くのかって聞いたら、お父さんとお母さんのところだっていうじゃない？

たしかそうよね？ マイ・ファザー・アンド・マザーって言ってたもの。

何か手土産みたいなもの持っていかなくていいかしら？

て言ってもねえ、私が日本から持ってきたものって出汁の素くらいなもの。

あ、途中でお菓子屋さんにもでも寄ってもらう？

「Romie!」

はいはいはい！ 男って出かけるときいつもせかせるんだから！

よし、行ってくるわ！

なんだか日本代表になった気分よ！

あら？ いつもの車じゃないのね。

この車って、あれよね？ オープンカー。

突然雨が降ったら大変よね。

「Oh, beautiful dress!」

これ？ これもサマーセールで買ったんだけどね。

「Here we go!」

ブオーーッて、な、なにこの車!? スピード出しすぎじゃない？

「You can grab that bar!」

え？ バー？ あ、これ？ これをつかめばいいわけね？

「We call that bar, Chicken bar! Hahahaha!」

チキンバー、鶏の棒...

「Haha....Ah... Wasn't it funny?」

おもしろいか？

「ノー」

「Ah.... Ok」

ブオーーッて、むち打ちになっちゃうわあっ！

「What do you think?」

え？ 何を思うか？

「This car」

ああ、車。

車をどう思うかって聞かれてもねえ、そうねえ...

「スモール」

「Small? Yeah, coz it's a sport car」

スポーツ・カーねえ。

あら？ そういえば、そんな曲があったわよね？ なんだっけ...

あっ！ ロジャー！

「The machine of a dream~, such a clean machine~だったわよね？」

「Absolutely!!!」

「えっと、サビが... I'm in love with my car~, gotta feel for my automobile~だったっけ？」

「Yes! Yes! Yes!」

嬉しそうに親指立てちゃってるけど、この歌の意味がいまだにさっぱりわからない。

あら？ あそこに見えるのは...

「ストップストップストップ！」

あ〜、行きすぎちゃった。

「バックバックバック！」

「What happened?」

「花よ花！ ご両親に、えっと、フラワー！」

「Oh! I almost forgot! Yeah, I gotta get flowers!」

車をバックさせて、さっき見つけた... やっぱり花屋だったわ！

食べ物って好みがあるけど、お花だったら手土産にいいわよね。

わあ！ きれい！ あら、いろんなアレンジメントがあるのねえ、素敵だわあ。

でも、好きなお花をあげた方が喜ぶわよね。

「ダニー、ホワット・フラワー・ユア・マザー・ライク？」

なにその肩ヒュッてあげて両手ひろげて、わかりませんって顔！

男に聞いた私がバカだったわ、花のことなんかわかるわけなかったわ。

いいわ、私が選ぶわ。

そうねえ、夏だから、この小さなひまわりもいいわね。

この薄いブルーの小さな花がたくさんついてるのも可愛いね。

あら？ これって芍薬じゃない？ へえ、アメリカにも芍薬があるのねえ。  
私は好きだけど、ちょっと季節はずれかしら？ あ！ ピンクのデイジー！ 可愛い！  
これがいいわ！ これだけでブーケにしたら絶対可愛いわ。10本くらい買っちゃおう？

「Hello!」

あら、ニニコニコしたおじさん！...って、私より年下かもしれないけど。

「えっと、メイク・ブーケ・プリーズ」

ン？て顔で固まっちゃった...

「ブーケ、ほら、こういう、丸い、ほら、これくらいの」

「I guess she wants you to make a bouquet with these flowers」

ダニー... 私が何を言いたいかわかるのはアメリカであなただけなのね...

「Oh! I see!」

おじさんは、人差し指を立ててドヤ顔、アメリカの男ってみんなやるのね。

「あ！ ウェイト！ これこれ！ えっと、チャージ！」

やっと楽天カードの出番よ！

「Romie, you don't have to pay for it」

「ジス・イズ・フロム・ミー・トゥ・ユア・マザー！」

「Oh, so sweet of you. Thank you」

「ユア・ウエルカム！」

なんだか、やっと、ちゃんと自分で買い物したって気分よ！

可愛いブーケ！

やっぱりこれにしてよかった！

「Are you ready?」

「イエス、あ！ ドライブ・スローリー！ フラワー... ヒュッ！」

「Ah! Hahaha, ok!」

ブォーンッ！

何がokよ！

会ったことはないのに...

---

ここは...

墓地...よね？

どういうこと？

あの人の後について歩くけど...

あ、止まった。

「This is my father's grave and this is my mother's」

えっ？ 亡くなってたの？

右側のちょっと古い石には“GUY.J.SWOPE”、左のには“HELEN.Y.SWOPE”、  
これがダニーのご両親のお墓...

「Hi, Dad! Hi, Mom, this is Romie」

あ、お花、あら？ お花立ては？

「ホエア・イズ・フラワー... スタンド？」

「Just put on here」って言うから、HELENって書いてある方の前に置いたけど。

「Mom, Romie bought you a beautiful bouquet for you」

「あ、あの、マイ・ネーム・イズ・ヒロミ、ハウ・ドウ・ユー・ドウ」

私は自然に目をつぶって手を合わせて...

会ったこともない人たちのお墓なんだけど、なんだか今会ってるような気持ちになって...

私はキリスト教ではないんですけど、気にしないでくださいますよね。

お二人の息子さんにお世話になってます。とてもいい人です。

きっとお二人の育て方がよかったんだと思います。

できれば生きているときにお会いしたかったですけど、

こうしてお二人のお墓参りしているのも何かの縁だと思います。

お母様、私がお世話になっている間は、ちゃんとした食事を作りますので、

どうぞ心配なさらないでください。

なんだか... バカみたいだけど...涙が出てきて...

見知らぬ他人の私が涙なんか流して驚いてるかもしれませんが、ゆるしてください。

「Mom, Romie is an excellent cook. I know you'll love her recipes」

あっ...もう...

「アイ...ワント...メイク・ユー...ディナー...」

生きてるときに食べて欲しかったです...

「Romie...」

「アイ・ドント・ノウ・ホワイ・アイ・クライング...」

「Thank you, Romie... My dad and mom must love such a sweet girl...」

あの人の手が私の肩をそっと抱いた途端...

号泣

はああああ

墓地の中のベンチに座った頃に、やっと泣き止んだわ。

ポケットティッシュ全部グチョグチョ。

横に座ってるけど、なんだか恥ずかしくて顔を見れないわぁ。

ビックリしたわよね、ご両親に会ったこともない私が号泣だもの。

ていうか、本当はこの人がしんみりにご両親のお墓参りしたかったんでしょ。

邪魔しちゃって申し訳なかったわぁ。

「Last time I came here was... like... about a few months ago」

チラッと横目で見たら、あの人は前向いたまま... ひとりごと？

「That day was... I found out Cathy's pregnant」

え？

「And the baby was not mine」

えっ？

「She cheated on me. That baby's father was one of my friends....」

え... え—————っ？

チラッと横目で見ると、まだ前を向いたまま。

きっとひとりごとね...

でもね...

なぜか...

私...

全部わかつちやっただのよおおっ！

キャシーが妊娠して、そのお腹の子のお父さんは彼じゃなくて、彼の友だちって！

ウッソーーーー！

そんな昼ドラみたいなことが本当にあるのーっ？

この人、なんで突然こんなこと言い出したのかしら？

あっ、私かわからないと思って、口に出して吐き出したかった？

そうね、そうかも...。

それじゃ、わからないふりしてた方がいいのかしら？

そうよね、私がかつてるからって、どうにかできることじゃないもの。

「Romie, are you ok, now?」

えっ？

あら、微笑んでる...

「イ...エス」

でも、

「アー・ユー...」

オーケーなわけじゃない！

「ハングリー？」

「Ahaha, not yet」

そうね、山ほどフレンチトースト食べさせちゃったものね。

「Shall we go back home?」

「イ、イエス」

駐車場に向かって歩きながら見ると、アメリカの墓地って、芝生の中で、

まるで公園みたいにのんびりできる風景ね。

ダニーのお父様とお母様、彼を見守ってあげてくださいね。

かなり大変な目に遭ってます。

あ、それから、もしよろしければ...

日本の私の主人に、お墓参りしなくてごめんなさいと伝えていただけますか？

あ、今のはいいです、ダニーに全力を注いであげてください！

NOTE:

*I dedicated this chapter to Mr. & Mrs. Caleman, and my dear Helen Swope.*

*I wish I could make dinner for you.*

*I miss you so much and I love you!*

## ピンクのバラ

---

はあああ、やっと家に着いた…。

あの鶏の棒とかいうのがあってよかったわあ、何度も吹っ飛ばされそうになったわよ。

私が悲鳴あげると笑うのよ!? それに、なんなのかしら? チキンチキンって言ったのよ。

チキンが食べたいってこと? それじゃ夕食はチキンにする? そうね、今から解凍しておけば間に合うわ。

「Romie, thank you for... coming with me」

「あっ、ノーノー! アイアム・ソーリー!」

「Are you sorry?」

「イエス! えっと、ビコーズ、アイ・クライ・メニーメニー・クライ!」

「Ah! Don't be sorry, I'm... very moved」

えっと... 動かされた? 動揺したってこと? そりゃそうよね、悪いことしたわあ。

「Romie」

「イエス?」

「Well.... Ah....」

なに? 早くしてくれないかしら、チキンを解凍しておかないと下ごしらえできないのよ。

「This is for you」

え?

ピンクのバラが一本、ちゃんとラッピングされてリボンまでついてる...!

「フォー・ミー?」

「Yes」

ウッソー! お花なんてもらったことないわよ! あ、母の日のカーネーションはあるけど。

「サンキュー!」

いつの間にか買ったの?

「ホエン・ユー・バイ・イット?」

「While you were looking around the flower shop」

えっと、私がお花を選んできるときってことかしら?

「サンキュー!」

でも...

「ホワイ?」

「Why? Ah... Well... I just.... Ah... no reason」

理由はない、まあそうよね、なんとなく買っちゃうときってあるわよね。

なんとなく買っちゃって、あとで後悔したこともあるけど、特にネットショッピング....

「Do you like it?」



「イエスイエス！ アイム・ハッピー！ サンキュー！」

「You are very welcome」

ニッコリしてる...けど、あの墓地での話... ダメダメ、聞かなかったのよ、聞かなかった！  
そんなことより、チキンの解凍よ！

えっと... 花瓶はどこかしら？

ダイニング・ルームの棚の中にそれらしいのは飾ってあるんだけど、大きすぎるわよねえ。

あ！ そうだ！

キッチンカウンターの下の扉を開けて、この瓶の絵がついてるゴミ箱の中に、

ほら、あの白ワインの瓶！ ちゃんと中をすすいで捨てたからきれいよ。

これに水を入れて、このバラを... あらあ、素敵じゃない？

あ、早くチキンを解凍しないと！

今夜のメニューは、チキンのレモンとハチミツ焼きよ。

鶏のもも肉に強めに塩・胡椒して、焼いて、そこにレモン汁とハチミツを混ぜたのをかけて、

中に火が通るように蓋をして弱火で、ときどきフライパンの中の汁をかけて、

最後に蓋を取ってちょっと強火にして出来上がり！

だって、ほら、バラに合うと思わない？ よく映画とかで出てくるじゃない？

食卓にバラがあって、あら？ チキンじゃなかったかしら？ ステーキ？ まあいいわ。

ニンジンのグラッセも作ったわよ、ちゃんと面取りしたんだから！

いつもはどうせ私と美香だけだから、面取りもしなくなっちゃったけど。

ハウレンソウのソテーと、ポテトサラダ！

このポテトサラダは私特製なのよ、ハチミツを大さじ一杯入れるのがコツなの。

マヨネーズ独特の角がなくなるの。

さあ！ あとは真ん中にバラを置いて... あ、写真写真！ん～、料理だけだと、

やっぱりうちの食卓と変わらなくなるわねえ。

やっぱり、あの人を入れて撮ろう。

「Oh, Romie, it looks like a three star restaurant!」

レストランみたい？ それは言い過ぎよお、ウフフ～

「Ah! You put the rose in the bottle of Montrachet!」

ボトル？

「イエスイエス！ ビューティフル！」

「Perfect! Hahaha!」

「ユー・セイ・ユー・ワント・チキン、だから、ほら、チキン！」

「Pardon?」

「ユー・セイ、チキンチキン！ 車の中で... イン・カー！」

「Oh! I see! Hahahaha!」

なんで笑うの？

「Yes, I'm crazy about chicken! Hahahaha!」

クレージー？ 気が狂いそうなほど食べたかったの？ やっぱりチキンにしてよかったわあ。

「What is it?」

「ポテト・サラダ」

「You mean... potato salad?」

ポレ〜ロ・サラ...？

「とにかく、イート！」

「OK!」

「あっ、ノーノー！ウエイト！ ピクチャー！」

「Ah! Ok!」

バラと料理とこの人と...で、ピッ パシャッ

「Romie, shall I take your picture?」

「ハ？」

「Ah... Do you want me to take your picture?」

この人、本当にジェスチャーがうまくなったわねえ。

「Do you?」

「あっ、私の写真？ ノーノーノー！」

「Why?」

だ〜って、メイクもほとんど落ちてるし、髪だってあの車でグシャグシャになったままだし...

ピッ パシャッ

え？

「あっ！ 今撮ったでしょ！」

ニヤッと笑ってる、撮ったんだわ、んもうっ。あとで削除しておこう。

あ、そうだ！

「ダニー、一緒に、えっと、トウギャザー、ユー・アンド・ミー・ピクチャー！」

「Well...as you like it」

As you like it! 知ってるわよ！ シェイクスピアの『お気に召すまま』でしょ？

あれもレポート書いたのよ、そんなことは今はいいわ。

あの人の横にしゃがんで、えっと、腕を伸ばせるだけ伸ばしてるけど、

これでちゃんと撮れるのかしら？ 美香はスマホで自写撮りとかってやってるけど、デジカメだからわからないわ、この辺？

「Romie, why don't you use self-timer?」

なに？

「Let me see.... Ah! Here it is, I guess」

なんの話？ あら？ なにその画面？ セルフタイマーって、そんなのついてたの？

私のカメラなのに、私が知らなくてこの人が知ってるって、どういうことお？ いいけど。

あの人私のデジカメを壁際の棚の上に乗せて...

「10 seconds!」

走って戻ってきて、

「10,9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1, GO!」

シーーーン

え？ 顔見合わせちゃった                      ときに、ピッ    パシャッ

1秒遅iiiiiiii！

オーマイガー

---

夕食が終わって、後片付けして、ダニーからもらったバラはキッチンカウンターの上。部屋に置こうかなあとも思ったんだけど、ここなら料理しながら見れるでしょ？

「Romie, let's get drunk!」

ダニーがキッチンに来て、グラスをふたつ出して...

この瓶は... ウィスキーかしら？ ウィスキーなんて飲めるかしらあ？

「ストロング？」

「Yeah... but not so much」

どっちよ？

「I'll make a special recipe for you」

スペシャルレシピ？ なに？ おつまみか何か作るの？ ていうか、作れるの？

グラスに氷を入れて、ウィスキーを入れて、お水を入れて、ラップしておいたレモンの残りの... 皮？ あ、むいてるけど、あ、あ、指切りそうよお。

「Then squeeze the lemon peel and wipe the hedge of the glass and done!」

料理じゃなかったわ。

「Let's go」

ダニーはグラス二個持ってウッドデッキに向かった...から、ついていったわ。

「This is Scotch and water and lemon twist」

スコッチと...水とレモン...トウイスト？

「Try!」

トライするけど飲めなかったらゆるしてよ？ そんなにお酒強くないんだから。

おっ おおお、強い...けど、あら、レモンの香りがして飲みやすいわね。

「I prefer straight, but this is my mother's favorite」

え？ なに？

「ホワット？」

「My mother loved it, and I'm sure she would love to make it for you」

マイ・マザー・ラブ・イットで... えっと... わかんない。

「Instead of her, I made it for you」

えっと...？

「Romie, I know you don't understand what I'm saying, it doesn't matter」

え〜っと...

「プリーズ・スピーク・スローリー」

「No!」

ノ、ノーッ?

「Hahaha, Just, let's have fun!」

「ああ! オーケー!」

「Cheers!」

「チアーズ!」

ああ、このレモンの香りがいいわねえ! ゴクゴクいけちゃうわ!

「Oh, you like it!」

「イエスイエスイエス!」

「Good!」

「グッドグッド!」

アハハハ!

そこから...

記憶がないのっ!

気がついたら、ベッドの中だったの! 朝になってたの!

あれから... 何があったの? どうやってここまで戻ってきたの?

思い出せな——い!

あっ、もう10時っ!?

お、起きなきゃ! 顔洗わなきゃ! あ... ちょ、ちょっとクラクラする。

あ————! 顔がむくんでる———!

「Romie! Good morning!」

そりゃ... もう起きてるわよね...

「グ... グッド・モーニン...」

朝食作らなきゃ... ウエツ 今、卵を想像したら気持ち悪くなっちゃった...

これって... 二日酔い? 二日酔いなんてなったことなかったわ。

おとうさんが二日酔いだったときは... あ、しじみ汁がいいっていうから...

しじみなんて売ってないわよね、売ってたとしても、この冷蔵庫にはないわよ...

「Romie, are you ok?」

オーケーに... 見える?

「I can tell you are hangover」

何か言って笑ってるけど、日本語だったとしても私は笑えないと思うわ...

「Sit and have a cup of coffee, I'll get it」

座らされてコーヒー渡されて... はあああ... 最悪...

「I was surprised」

サプライズ... そりゃ驚くわよね...

「You were speaking in English very well」

ヘッ?

「スピーキング... イングリッシュ?」

「Yeah! You should have Scotch all the time! Hahaha, No, I'm just joking」

「ホワット・アイ・セイ... イングリッシュ?」

「Don't you remember?」

「アイ・ドント・リメンバー... ナッシング... イン・マイ・ブレイン...」

「Oh! Ahahaha!」

笑わないでよ! こっちは... 泣きそうよ!

「ホワット・アイ・セイ?」

「Do you really want to know?」

な...なに? その意味ありげな言い方!? イヤー---! 何言ったの---っ?

「At least I can tell you is... You were singing」

シンギング? 歌ってたああああっ?

「ホワット・ソング?」

「I'm not sure, but probably one of QUEEN」

クイーン?

「I just remember one phrase... Death on two legs」

デス・オン・トゥー・レッグス---っ?

なんであんな過激な歌を私は歌ったのおおおっ？

あれってフレディーが、元マネージャーに、立ったまま死ねとか、おまえなんかハートがないとか、ウツソー！

「アイ・ドント・リメンバー、バット、イツ・ナット・アバウト・ユー！」

「It's not? Oh, thank God!»

エーーーーッ!? 私がこの人のこと歌ってたと思っただけのーーーーっ？

「ビリーブ・ミー！ イツ・ナット・アバウト・ユー！」

「I know, Romie, I know. I'm just kidding」

わかって...る？ はあああ... だったらいいけど...

「Romie, thank you for singing that song」

はあっ？

「I felt better! Hahaha!»

なんでフェルト・ベターなの？ なんで私はデス・オン・トゥー・レッグスなんて歌ったの？

クイーンにはもっといい歌があるのにいいっ！

あ... もう... なんだか... 頭クラクラしてきちゃった...

「アイ... アイ... アイ・テイク・ア・バス！」

「Go ahead. I hope you get the right line!»

なんかわけわかんないこと言って笑ってるけどおおっ、笑いごとじゃないわよーーーーっ！

砂漠が水を吸い込むように

肌が保湿クリームを吸い込んでいく...

昨日あの車でずっと突風にあたりっぱなしで、しかもメイク落とさないで寝たからだわ...

でも、お風呂に入ったらなんかスッキリしてきたわ。

信じられない、お酒飲んで記憶なくすなんて...

何杯飲んだの？ 何杯でもいいわもう、ああ自己嫌悪...

“She is stupid!”

え？

なんか... 聞こえたような... 気のせいかしら。

“Express your anger...”

えっ？ な、なに？

“Freddie is right!”

あ... 頭の中で... 声が聞こえるーーーー！

私、まだ酔っぱらってるのかしら？ パンパンパンパン

あ、そうだ、パッティングするの忘れてたわね。

パティングしてもちゃんと感覚あるわよ？

“Goodbye Cathy! Hello! Happy future!”

わ... 私の声...

あら？ なんか... 思い...出せ...そ... ダメだ。

「Are you feeling better?」

私... この人に何言ったのかしら？

「Have lots of water, here you are」

水の入ったコップを渡してくれたけど...

すべての謎は、この人がにぎっているのよね...

「ダ、ダニー」

「Yes?」

「ホワット・アイ・セイ、ラストナイト?」

私の顔見て... 微笑んで... いいから早く言ってよ——！

「You... cheered me up」

チアー？

「ホワット?」

「Ah.... You tried to make me feel better」

フィール・ベターをトライした？

「Romie, you know what's happened between Cathy and me, right?」

キャシーと...

ハッ！

「You said to me express my anger, and sang Death on two legs!」

ア————————ッ！

「オ————マイガ————————！」

言っちゃったんだわ——っ！ 知らないふりしてたのに——っ！

「アイ・アム・ソー————リ——————！」

「Don't be sorry, I have to beg you to forgive me, I made you worry」



だから... 長文は無理...

「Ah, you didn't get it, ok, well... Thank you」

サンキュー？

「ホ、ホワイ？」

「You made me feel better, and... Thank you for your singing! Hahaha!」

オ～...マイ...ガ～～...

## お母さんのレシピ

---

私だって落ち込むときはあるのよ。

ていうか、しょっちゅう落ち込んでるわよ。

世間では50のおばさんはデ〜ンとかまえて何にも動じないと思ってるんだらうけど、

動じっぱなしよ、グラングランよ、更年期だってあるのよ！更年期は今は関係ないけど。

いくら酔っ払ってたからって、ていうより、酔っ払ってるときにあんなこと言ったなんて、

ダニーは笑ってたけど、笑えるようなことじゃないじゃない？ 私ってサイテーだわあ。

かといってねえ、「本当にごめんなさい」って、また謝るのもねえ、逆に話を蒸し返すだけだし

ねえ、はあああ... 今日の夕食は何にする？ 何も思いつかないわあ。

それより... この食パン、もうパサッパサよ、パン粉にするしかないわね。

だったら今夜はフライにする？ フライねえ、胃がもたれるのよねえ。

とにかくパン粉だけでも作っておかないとカビ生えちゃうわ。

えっと... フードプロセッサーはどこかしら？ ここ？ 違ったわ、あら、料理本？

ほとんど新品じゃない？ そうよねえ、私も若い頃は料理本見て作ってたけど、

最近は適当に作っちゃうものねえ、たまに買って結局見ないのよね。

ン？ なんか奥の方に... ノート？ よいっしょっと、あら、古いノート、あっ...

まさか... キャシーの日記？ でも日記をこんなところに入れておく？ あっ、隠してた？

「Romie」

「ギャーーーーー！」

「Oh, I'm so sorry! I didn't mean to make you scared」

あ、ダ、ダニー...

「Romie... Where did you find it?」

え？

「That notebook」

ハッ...

「It's my mother's recipe notes!」

え？

「ユ、ユア、マザーズ・レシピ・ノート？」

「Yeah! My mother always used that notes, so I remember」

よかったあ... キャシーの日記じゃなくて...

「When Cathy and I married, my mother gave it to her」

結婚したときに...キャシーにあげた... ああ、だからここにあったのね。

「She never used it though, hahaha」

全然使わなかった... 嫁と姑の確執？ どの国でもあるのね。

え？ 全然使わなかったってことは... おふくろの味をずっと食べてない...

あ！

「ダニー、ホワット・ドゥ・ユー・ライク、えっと、マザーズ・レシピ？」

「What do I like? Well...let's see.... Ah! This one!」

ダニーが指さしてるのは... “Meat sauce spaghetti”ミート...sau...s...spagehetti?

ミートソース・スパゲティ！

「ダニー！ アイ・メイク・イット、フォー・ディナー、トゥナイト！」

え？

ポカン？

「Romie...」

え？ なになになに？ あ、目が赤くなっちゃて、やだやだやだ、私また何か悪いこと言った？

あ！ キャシーにあげたって言ってたんだっただあ！ 思い出させちゃったんだわあ！

「ア、アィム・ソ...」

「Great! Wow! Great! Thank you!」

よ... よかったあああああ... 心臓に悪いけど...

えっと、牛挽肉はある、玉ねぎとニンジンとセロリもある、ニンニクもあるし、

Tomato sauce、トマト・ソース...が、ない。Basil... バ...ジルよね？ ない。

Parmesan cheese、パーメサン...チーズ...、パルメザンチーズ！ ない。

「ダニー、スーパー・マーケット」

「Yes, let's go!」

ダニーのお母さんのノートを持ってきて、ダニーにちゃんとチェックしてもらって、

よし、そろったわ！

あとは...

英語で書いてあるってところをどうするか...

あ！

「ダニー、ヘルプ・ミー」

「Of course!」

だいたいはわかるのよ、私も何度も作ってるし、でも、ほら、ちょっとしたところで味って変わるじゃない？ できるだけこのレシピの味にしたいのよ。

たとえば、この“Add sugar – 2 Table spoon”、お砂糖を入れるのはわかるけど、テーブルスプーンで、どのスプーンなのかわからないんだもの。ダニーはわかったから。お砂糖入れるっていうのはアイデアよねえ。味見したら、トマトの酸っぱさの角が取れてるのよ。

バジルは生じゃなくて瓶に入ったのだったわ。それもテーブルスプーン二杯よ。けっこう入れるのねえ。白ワインを入れるのよ、牛肉だから赤だと思ってたわ。ダニーがスーパーの中のお酒売り場で選んでくれたわ。

「Don't use Montrachet for cooking」って言って笑ってたけど、どういう意味？ まあいいけど。

ただね、問題は、問題でもないんだけど、スパゲティ！

まず茹でるときよ、半分に折れって言うの！ したけどね。

アルデンテにして、いちおうダニーに一本食べさせてみたの、硬すぎるっていうのよ。30秒ごとに味見させたわ、オーケーが出たときにはうどんみたいにフニャフニャよ？ でも、彼のお母さんの味の再現だから、うどんみたいなのがそうだとしたら... そうなのよ。

サラダも作ったわ。もちろんダニーのお母さんのサラダドレッシングのレシピで。ワイン・ビネガーって知らなかったわ。米酢より角がないのね。でも、これで酢飯は作れないわ、赤いの。

あのピンクのバラをテーブルに持ってきて、できた！

ダニーがウッドデッキのところで待ってろって言うから、多分そうよね？

ガーデンチェアに座って...

はあああ、よかったあ！

Exactly the sameって、まさに同じって意味よね？

おかあさんのと、まさに同じ味だって喜んでくれてたわ。

あのミートソース美味しかったわ、スパゲティは私は茹ですぎだと思うけど。

それにね、食べるときにスパゲティをナイフで切ったのよ？ 巻くでしょ、ふつう？

何も言わなかったけどね、だって、ダニーのお母さんの味の再現だから。

いいの、スパゲティがうどんみたいでも、ナイフで切っても、喜んでくれたから。

「Romie」

「あ、イエス？」

「Here you go」って渡されたのはレモンの香りの...

「Don't worry, no alcohol! Hahaha, taste it」

「ああ！ レモンジュース？」

「Kind of, it's lemonade」

「レモネード！ グーOOD！ アイ・ライク・イット」

「It's my recipe」

これを作るから、ここで待ってろって言ったのね。

「サンキュー！」

「My pleasure! And thank YOU for the best meat sauce spaghetti」

ベストって言っても、

「ベスト・イズ・ユア・マザー、あれは、ユア・マザーズ・レシピ」

「Thank you, Romie, you're so sweet.」

あなたが喜んでくれて本当によかった。

だって私本当に落ち込んだんだもの。

ダニーのお母さんに助けられたような、ていうか、本当に助けられたわよ。

昨日お墓参りしたから助けてくれたのかもしれないわ。

ダニーのお母さん、ありがとうございます！

「Romie, why are you praying?」

え？ あ、手を合わせちゃってたわ。

「You never bore me! Hahaha!」

何言ってるのかはわからないけど、あなたが笑ってるからそれでいいわ。

## 新しいホームステイ先

---

今朝はね、フッフッフ、もうあの食パンじゃないのよ。

とっくにパン粉になって冷凍庫で眠ってるわ。

昨日スーパーに行ったときに見つけたの！ 冷凍のパン生地！

しかもよ、いろいろあるのよ！ 筒に入っていて、ポンッと開けると、ちゃんと切れていて、それをオーブンに並べて焼けばいいだけのとかね。

本当は自分でパン生地作ればいだけなんだけどねえ。

若い頃は作ってたのよ、強力粉でピザまで作ったんだから。

それがねえ、去年だったかしら？ テレビで本場のピザが出てて、

美香が食べたいっていうから、昔取った杵柄っていうの？

パパッと強力粉とベーキングパウダーとお砂糖入れたぬるま湯に入れておいてイーストを混ぜた...

ところまではよかったの。

練り！ これがまったく練れないのよ、若い頃はできたのに。

そのうち腰が痛くなってきちゃって、美香が代わって、グイグイ練ってたわ。

その瞬間、私はパン生地を作ることからの引退を決意したのよ。

あら？ 何の話だったけ？

あ、そうそう！ 今朝からは焼き立てのパンが食べられるのよ！

ほら！ 焼けたわよ！

「Good morning, Romie」

「グッモーニン、ダニー」

「Hmmm, smells good!」

「あっ！ ドント・イート・ナウ！」

ヘッヘッへみたいなイタズラした子どもみたいな顔でパクッと、

「Oh! Gosh! Hot!!!」

ハッハッハッ、つまみ食いなんかするからよ！

ゆうべのサラダの残りど、フルーツと、オムレツと焼き立てパンと、ダニーの役目のコーヒー。

こういう、なんともない朝がいちばんしあわせよねえ。

若い頃はもっと刺激的なことばかり求めてたけど、ちがうのよね。

片づけが終わって、リビングで食後のコーヒー。

はああ、の〜んびりするわあ、まさにバケーションね。

あら？ 電話？

「I'll get it」って、ダニーが立ち上がった。

今夜の夕食は何を作ろうかな？ ダニーのお母さんの他のレシピを作ってみようかしら？

「Romie」

「イエス？」

「From your friend」ってニコツとして受話器渡したけど、  
友だち？ アメリカまで電話してくる友だちなんている？

「もしもし？」

「カトーサン、現地スタッフノケントデス」

ああ... こいつか... なんでこの人が私のフレンドなのよ!?

「ちょっと待ってて！」

「ワ、ワカリマシタ」

「ダニー！」

「Yes？」

「ヒー・イズ・ナット・マイフレンド！」

「Oh, I thought he was your friend!」

「ノー！ ヒー・イズ・マイ... エナミー！」

「Oh, your enemy! So, he must be Montague! Hahaha」

モンタギュー、ジュリエットの敵だわっ。

「もしもし」

「カトーサン、僕ハカトーサンノ敵デハナイデス」

殺さないわよ！

「カトーサン、吉報デス！」

吉報なんて言葉、美香も知らないと思うわよ？

「新シイホームステイ先ガ見ツカリマシタ！」

え？

「同ジホームステイ・プログラムニ参加シテイルヨシダサンノ、  
ホスト・ファミリーノ近所ノ家デス」

ヨシダさんなんて知らないわよ...

「明日ノ朝、僕ガ迎エニ行キマスノデ、ゴ安心クダサイ」

「あ... そう...」

「先ホドゴ主人ニモ伝エテオキマシタノデ、大丈夫デス」

あ... そう...

「デハ、明日ノ朝、10時デイイデスカ？」

「いいわよ...」

「ソレデハ失礼シマス」

新しいホームステイ先...

すっかり忘れてたわ...

そうよね... そうだったわ...

なんだか... ソファにドスンと座ると、目の前にダニー。

「Congratulations!」

そう言ってニッコリしたわ。

「サンキュー...」

て...言えばいいの...よね?

「So you can start your homestay program」

「イエ...ス」

「You must be happy!」

ハッピー? ハッピー...なのかしら? あんまり急だから...

「ダニー」

「Yes?」

「アー・ユー・ハッピー?」

「Me? Yeah, I'm happy for you」

ニッコリしてる。

そうよね... そりゃそうよ、私ったらなに聞ってるの?

離婚したばかりなのに、2週間の休暇中なのに、人がいいから置いてくれてただけなもの。

そうよ、そうだわ、私はクッキング・ホームステイに来たんだから、

新しいホームステイ先が決まって、やっと本来の目的ができるのよね。

そうだわ、そうね。

冷蔵庫の中、こんなにいっぱい買っちゃってたのよね。

ダニーが料理するかしら? しないわね。

冷凍庫もいっぱいよ。とても今日一日で食べきれないわ。

チンすればいいだけにしておく? それだって今日一日で作りきれないわ。

ゆうべのミートソースは小分けにして冷凍したけど、このパン粉はどうする?

「Romie, what are you doing?」



え？ ああ、ダニー...

「え...っと... アイアム・シンキング」

「Sinking? Ah... Well, I guess... You are thinking, right?」

「イエス、シンキング」

「About what?」

「アイ・バイ・メニーメニー・シング、アイ... なんとかしなきゃってなんて言うの?」

「Romie, don't worry about those stuff. I'll take care of it」

テイク・ケアオブ... 世話をする？ できるの？

でも... そうね、今日一日じゃどうにもできないし、明日から私は別の家にいるわけだし...

今日できることといたら...

「ダニー、ホワット・ドゥ・ユー・ワント・イート・フォー・ディナー?」

「Well... Oh! I love to eat your fish!」

魚？

「Remember? You won! You are the champion!」

ああ、魚のホイル焼きか。

「オーケー」

「Good!」

なんていうの？ なんか、なんだろう？

ホイル焼きの他に、野菜スープも作ったわ。

ベーコンと、あとはとにかくいろいろな野菜を入れて、塩・胡椒で味付けして、

マカロニをそのまま入れて、マカロニが茹で上がったら出来上がりよ。

多めに作ったから、明日の夜も食べられるわ。

「It's really good!」

って、陽気に、ふつうに食べてるのを見てると、なんか、なんだか、

「This vegetable soup is so delicious, too!」

腹が立つ！

なんていうの？ 私がいなくなるのが嬉しいみたいなの？ そうかもしれないけど？

それじゃ、私が毎日料理してたのはなんだったわけ？ べつに頼まれたわけじゃないけど。

でもね、なんかホッとしてるみたいなの？ ホッとしてるんだらうけどっ。

「Romie?」

「イエスッ」

「Are you ok?」

「ノーッ」

「No? What's wrong with you?」

「アイム... アングリー！」

「Angry? For what?」

「アイ、アイ、んもーっ、なんて言っていていいかわかんないわよっ！」

「I can see, you are really angry」

「アイッ・テイクッ・ア・バスッ！」

「It's a good idea!」

んもーっ、いちいち腹が立つーっ！

バタンッ

修行者みたいに、あの水圧にあたってたら、少し落ち着いたわ。

なんであんなにカッカしたのかしら？

更年期？ 最近はほとんど症状はなかったんだけど、でも、そうかも。

だって、冷静に考えたら、今、冷静よね？ 冷静よ、お世話になったのよ？

行くところがなかったからって置いてくれたんだもの。離婚したばかりなのに。

でも、今はちゃんとしたホームステイ先が決まったのよ。

そりゃ「よかったね」って言うわよ、よかったんだもの。そうよ、そうなのよ。

やだ、私ったらダニーに八つ当たりしちゃって、謝らなきゃ。

あと3分経ったらね。

あ...ら？ ダイニングテーブルの上も、キッチンもきれいになってる。

ダニーは？

あ、ウッドデッキに出てる。

キャシーがいなくなってから、いつもああやって一人でいたのかしら...

なんだか... なんていうか...

「Ah! Romie!」

あ、振り返っちゃった...

「Are you feeling better?」

「イ、イエス」

「Good」

ニッコリして...

「Would you like beer?」

バドワイザーの瓶を見せて...

「イエス」

「Come here!」

そばにいくと、蓋を開けてから私に瓶を渡してくれて...

「Cheers to your cooking homestay!」

いつもと同じ笑顔で...

だから...

なんか...

「淋しい...」

「What?」

「なんだか... 淋しい...」

「Sorry, I don't understand. What did you say?」

「わからなくていいわ、私は淋しいの」

「Oh, Romie! It's not fair! I don't understand Japanese!」

笑ってるけど...

「いいの、わからなくて... 淋しいのよ、だって...」

アイ・ハブ・ハッピータイム、ウィズ・ユー」

「I had happy times with you, too」

そう言ってほほ笑んだから...

だから、いいの、ハッピーだったのなら... よかった。

「カトーサンノ新しいホームステイ先ハJensenサンデス」

「ジェンセン...」

発音しやすいのね。

「ソウデス。中心街ノ向コウ側ナノデ、1時間ホドデ着キマス」

現地スタッフの...名前なんだっけ？ とにかく車の中。

今朝も、いつものように、パンを焼いて、オムレツとフルーツサラダ作って、  
ダニーがコーヒーいれて、いつものような朝食の時間だった。

食べ終わると、いつものように、「I'll do it」って言って、

いつもと違ったのは、

「Romie, you should pack your stuff」

「ホワット？」

「Pack your stuff in the luggage」

「ラゲージ？」

「Luggage」

四角い？

「You carry」

取っ手みたなのを持つ？

「Pack!」

その四角いのに... 入れる？

「あ！ パッキング？」

「Yes! Packing!」

「あっ！ まだだった！」

「Hurry up! Kent will come and pick you up in about an hour!」

行けって言うみたいに両手ヒラヒラさせたから、急いで部屋に行ったわ。

パジャマをたたんで入れて、部屋着も入れて、あっ、そうそう！

化粧品一式をポーチに詰め込んで... できちゃった。

まだおみやげも何も買ってなかったしね。

準備ができて、ダニーがコーヒーを入れてくれて... 一息ついてたら、

今横で運転してる男が来たのよ。

「カトーサン、ココガHarrisburgノ中心街デス」

へえ、歴史的な建物が多いのね。

ダニーにもらったピンクのバラは持ってきたわ。  
ちょっと萎れてきたけど、思い出だから。

「Jensenサンノ奥サンハ、Beckyサン德斯」

「ベッキー...」

「ソウ德斯、トテモトテモ料理ガ上手德斯」

いよいよ玄関を出るときも、いつもの笑顔だったわ。

「サンキュー」って言うと、

「Thank YOU for great meals and everything」

そう言って、やっぱり微笑んでた。

ドアを開けて出ようとしたとき、私の後ろで何か言ったのよ。

「ホワット？」って振り返ったら、「Good luck!」って、笑顔だったわ。

グッドラックじゃなかった気がしたんだけど、アミ...なんだったかな？

あ... そういえば... あれ、ときどき言ってた... あれは何だったのかしら？

「ねえ、ユー・アー・サムシングって、どういう意味？」

「サムシング？ オー！ You are something德斯ネ」

「そんなカンジ」

「アナタハ、スゴイ人德斯、トカ、アナタハ素敵ナ人德斯、トイッタ意味德斯ネ」

え...？

あの「何か」って... そういう意味だったの...

「それじゃ... アミ... あっ！ アミッシュウってというのは？」

「アミッシュウ？ ソレハ、イツ聞イタ言葉デスカ？」

「さっき、玄関出るとき、たしか... そう聞こえたんだけど」

「オー！ I miss you! マタハ、I'll miss youデハナイデスカ？」

「あっ、そんなカンジ！ もう一回言って」

「I miss you」

「アイ・ミス・ユー...」

「淋シイ」

え？

「マタハ、淋シクナルヨ、トイウ意味デスネ」

淋しい...

そう言ったの？

「ベッキーサンハ、トテモ明ルイ人デ、カトーサンガ来ルノヲトテモ楽シミニシテマス」

私...

「本当ニ料理ガ上手デス、僕ガ保証シマス」

なにしてるの？

「先日、カトーサンノ受ケ入レ手續キデ、ベッキーサンノ家ニ行ッタトキ、  
ゴ馳走ニナリマシタ、ミートソース・スパゲティガ、トテモ美味シカッタデス」

ミートソース・スパゲティなら作り方知ってるわよ...

「僕ニ作り方ヲ熱心ニ教エテクレマシタ、オカゲデ覚マシタ、ハハハ！  
赤ワインヲボトル半分タップリ入レルノガ、ポイントダソウデス」

ミートソースには白ワインよ...

「ベッキーサンノトコロナラ、カトーサンモ、キット楽シイデス」

時間がないのよ...

私... もうすぐ50よ？

おとうさんと同じ年に死ぬとしたら、死なないと思うけど、あと10年しかないのよ？

なにやってるのよ？

無駄にする時間なんかないのよ！

「アイ・テイク・ア・バス！」

「カ、カトーサン？ ドウシテデスカ？」

「アイ・テイク・ア・バス！」

「僕ハ安全運転シテイマスカラ心配シナイデクダサイ」

「アイ・テイク・ア・バス！」

「カ、カトーサン、ドウシテバスニ乗リタイノデスカ？」

「ほらね！」

「ナ、ナニガデスカ？」

「吉報なんて知ってるあんたでさえ、私の英語はわからないのよ！」

「カトーサン、ス、スミマセン、何が起コッタノカ、僕ニハ」

「戻って！」

「ハ？」

「戻って！」

「ド、ドコニデスカ？」

「ダニーのところ！」

ドアを開けた途端、ポカン？とするのは、覚悟してたわよ。

「Ro... Romie! What happened?」

でもね、私、時間がないの。

「Do you have left something?」

「アイ・バブ・ア・グレート・クッキングティーチャー、イン・ディス・ハウス！」

「What? Not me, right?」

「ユア・マザー！」

「My mother? Well, you know she already...」

「ユア・マザーズ・レシピ！」

「Oh! You want her recipes! I'll give it to you」

「ノー！」

「No?」

ちがう、ちがうの、言いたいことは...

「なんて言えばいいの、だから、他の家に行く必要なんてなくて、だから」

「Romie, speak in English, please. I want to understand what you are saying to me」

わかってるけど、なんて言えばいいの、英語で...

あ

「アイ・ミス・ユー」

ダニーが驚いた顔で私を見てるけど...

私は... 次になんて言ったらいいのか... 英語が... ぜんぜん浮かばない

「I missed you, too」

ダニーが...

これは...

ハグっていうのよね...

同じ気持ちを 同じ言葉で言えた

短い言葉だけど ちゃんと言わなきゃ 時間がかかってしまうから

だって 私には時間がないんだもの

若い頃みたいに 遠い未来なんてないから

「アイ・ワント・ステイ・ウィズ・ユー」

「I want you to stay with me」

「アイ・ワント・クック・フォー・ユー」

「I love your cooking」

あと三週間もないから...

あと三週間もないなら、今やりたいことをしたいの

「アイ・テイク・ア・バス」

「Not now, you're clean」

ダニーは私をバグしたまま、そう言ったの。

ほらね？ 私の英語をわかるのはダニーだけなのよ。



## 洗濯機

---

戻ってきてよかったって、つくづく思ったのは、荷物を持って部屋に入ったときよ。

部屋っていうか、バスルームなんだけど。

シャワーカーテンのレールに、ゆうべ干しておいたパンツとブラジャーがぶら下がってたの！

お風呂から上がると、いつも下着だけは洗面台で手洗いして干してたのよ。

バタバタしててすっかり忘れてたわ。

ここにあと2週間ちょっといるってことは、下着の手洗いだけじゃ限界だわ。

バスタオルだって洗いたいし、Tシャツだってもう替えがないのよね。

洗濯機使わせてもらわなきゃ。

バスタオル2枚を重ねて広げて、フェイスタオルやTシャツと...

石鹸で手洗いしてたから、下着がガサガサ、柔軟剤使いたいわ、そうね、下着も。

これを巻いて... よいっしょっと。

リビングをチ...ラッと覗くと、ダニーが窓の外を見ながらコーヒーを飲んでるわ。

パッと顔引込めちゃった。

だって...

ほら、あの、さっきの、ハグ？

映画とかだと、あそこで次の場面が変わるかエンドロールが流れて終わるじゃない？

現実はそうじゃないのよね。

腕を離れた後、なんか気まずいっていうか照れくさいっていうか恥ずかしいっていうか。

まあ私とダニーがハグしてるところなんて、人が見たら、絶対見られたくないけど、

初老のおじさんとおばさんがいたわり合ってるみたいにしか見えないだろうし、

恋人同士でもないし、30年ぶりの涙の再会ってわけでもないし、

実際は30分くらい離れてただけで、しかも出会ってまだ4日くらいだし、

なんでハグしちゃったのおおお？

私じゃないわよ？ むこうがしてきたのよ？ してきたって言い方もおかしいけど、

あ、だって、そうよね、こっちの人にとってはハグとかキスは、キスはしてないけど、

ほら、挨拶みたいなものでしょ？ 握手みたいな感覚？ そうよね。

「Romie？」

「ギャー——ッ！」

「Oh! Sorry! I didn't mean to scare you」

至近距離...

あっ、洗濯物！ 落としちゃった！ 見えちゃう！

「What are you doing?」

「あ、えっと、アイ・ワント、洗う、ワッシュ... イット、これ」

「Do you wanna wash them?」

「イエス、ワッシュ」

「Do you wanna use a washing machine?」

「ん？」

「Ok, come with me」

来いって手をチュイチュイッて動かしてるから、わかったわ、行けばいいのね。

「This is a laundry room」

ダニーがドアを開けたそこには... わあ... 巨大！

「This is a washing machine, and this is a dryer」

業務用みたい...

「Here is... a detergent, and...」

「アイボリー！」

「Ah, you know Ivory. Good! So you know how to use it, hahaha」

これってネットで見たことあるのよ！ 高いから買ったことないけど。

「It's a fabric softener」

「ダウニー！ 本場のダウニー！ 巨大だわあ！」

あら？ なに？

「ホワイ・ユー・ラフ？」

「Because... You are very excited to see a detergent and a fabric softener!」

エクサイト？ するでしょ！ だって、

「イツツ... アメリカン・ドリーム！」

なんで爆笑？

「ホワイ・ユー・ラフッ？」

「Sorry, but... Oh, Romie, you never ever bore me!」

フン！ 笑ってればいいわ！ 男にはわからないのよ！

パサッて洗濯機の中に入れたけど... この巨大な洗濯機でこれだけを洗うの？

水量調節ってあるのかしら？ 容量センサーはあるわけね。

主婦をバカにしないでよ、洗濯機一台買うのだって、大型電気店やネットまで、調べに調べて買うんだから。たどりついた結論はね、だいたいみんな同じ機能付き。

アメリカのだって変わらないわ、巨大なだけで... 多分...ね...

容量センサーがあったとしても、たったこれだけ洗うために動かすわけでしょ？

もったいないわよねえ、もっと溜まってからにする？

でも、ここにいっぱいになる頃には日本に帰ってるわよ、こんな巨大なんだもの。

あっ！

「ダニー！」

「Do you have any trouble?」

「トラブル？ イエスイエス！」

「Do you want me to show how to use them?」

「ギブ！」

「What?」

「ギブ・ユア、洗濯物って、汚れ物？ あっ、ダーティ・シング」

「pardon?」

「ユア・ダーティ・シング！」

「My... dirty thing?」

「ホワイ・ラフ？」

「I know what you mean, but... Ok, so, why do you want ... hahaha... can't say that!」

「ノー・ラフ！ アイ・ワッシュ・ユア・ダーティ・シング！」

なんで座り込んで笑ってるのっ？

「Ah... Romie, you don't have to wash mine, I'll do it」

やらなくていい... お節介だったかしら？ お節介って... なんて言うの？

あ、ロミオ！

「O, I'm too bold...って、お節介じゃなくて、図々しいだったかしら」

「You are not, so kind, but you don't have to」

「ダニー、イツツ...」

もったいないって、なんて言うの？ あ！

「エコ！」

「What?」

「エコ！」

あら？ 考え込んじゃってる？ エコって言わないの？ エコ...エコ...

「エコノミック！ かな？ エコロジー！ってなんだっけ？」

「You mean... eco-friendly?」

フレンドリー？ なんでもいいけど、

「イツツ・ベリー・ビッグで、ユーズ、メニー・ウォーターと...」

急に...

自分がバカみたいに思えてきちゃった。

やっぱり... お風呂と料理のことしか通じないんだわ...

わかりあえてる気がしてたけど、気がしてただけで、たかが洗濯物のことも通じない...

「アイム・ソーリー... アイム・オーケー... やっぱり... I'm... too bold...」

ダニーの顔見ないで、洗濯室に戻った...

そうよね...

ダニーの洗濯物を洗うなんて、奥さんじゃあるまいし、やり過ぎよね。

舞い上がり過ぎてたんだわ、いい年して、なにやってるの？

これは、もう少し溜まってから洗おう...

洗濯機に手を入れようとした瞬間...

ドサドサって目の前に落ちてきて...洗濯機の中がいっぱいになっってる？

「Yes, you are bold」

へ？

振り返ったら... 至近距離...

「In a good meaning」

な...なに？

「Or... Should I say, you are brave to wash such a mess!」

なに？

「Pull this detergent case」

ここを引っ張って...

「Pour your favorite Ivory into... here」

アイボリーをここに...

「And pour American dream Downey into here」

ダウニーはこっち...

「Shut the case door, and push this START button」

スタートボタンを押して...

「ホ...ワイ...」

「Why? If you don't push the start button, it won't work!」

「ノー...そうじゃ...なくて...」

バカ...みたい...泣けてきちゃって...

「Oh, Romie, don't cry. I know you want to cry because you have to wash my dirty thing」

笑ってるけど... 何言ってるのかわからないけど...

「Romie」

そんなに顔近づけないで... 私... きっと... マスカラとれてるから...

「This is your house, at least for 3 weeks」

私の...家...？

「So, do what you want to do」

やだ...

「I want you to do whatever you want to」

やめてよ... そんな優しい声で...

「When you are happy, I'm happy, too」

そんなに優しいこと言うの...

「Oh, Romie, don't cry」

ああもう、ほら！

マスカラぐちゃぐちゃになっちゃったああああ！

気づいちゃった...!

---

バカみたいだわ...

洗濯物ひとつで泣くなんて...

まるで私が泣くほど洗濯したかったみたいじゃない。

そこまでしたかったわけじゃないのよ。

ただあれっぽっちの量で洗濯機まわすのはもったいないと思って。

はああ、つくづくただの主婦よねえ、もったいないしか考えられなかったんだもの。

他人に自分のものを洗濯されるなんてイヤよねえ。

それなのに、ダニーが気を使ってくれて洗濯物出してくれたから、

それで、なんていうか... なんだかわからないけど泣いちゃったのよ。

ダニーだって本当は呆れてるわよね。

これは... やっぱり更年期症状じゃないかしら。

感情の起伏が激しすぎるもの。

泣いたり怒ったりハイテンションになったりガクンと落ち込んだり。

命の母A錠持ってくればよかった、この1~2年落ち着いてたから忘れてたわ。

あ、Calvin Klein... カルバン・クラインのトランクス。

そうね、私たちの年代で男性用の素敵の下着っていえばカルバン・クラインだったわ。

おとうさんだって最初は履いてたのよ、本当に私たち女子大生の憧れだったのよ。

おとうさんがステテコ履きだしたときにはショックだったけどね。

だって私まだ25歳だったのよ？ おとうさんは40だったけど。

憧れだった人がステテコ履くなんてショックだったわよ。

あれで、何かがふっ切れたけどね。

男性の下着見たってなんとも思わないもの。

もうただの洗濯物のひとつとしか見えないわ、タオルをたたんでるのと同じ感覚ね。

こうやって女は何かを失っていくのね。

何かって... 何かしら？

なんでもいいけど、それにしても、よくもまあこんなに溜めてたわねえ。

キャシーが全部やってくれてたのかしら？ まあ私には関係ないんだけど。

でも、もうキャシーはいないじゃない？ これから一人でなんでもやらないと、

ほら、こんな山のように洗濯物が溜まっちゃうのよ？

私が心配してもしかたないんだけどね。

でも...

アメリカの乾燥機ってすごいわあ。

Tシャツも縮まないのよ、シワシワにもならないの。タオルなんてフッカフカだから、洗濯する前の二倍くらいの量に見えるわ。

ダニーのは... ここに置いておけばいいわね。

なんだか顔を合わせづらくて、まっすぐ部屋に戻ってきちゃった。  
私... この家に戻ってこなかった方がよかったんじゃないかしら...  
なんだか違うのよ、ここを出る前と今と...  
その、ほら、ミートソースに赤ワイン入れる人、女の人だから、  
更年期のことだってわかってくれたかもしれないし...  
でも...  
ダニーも... アイ・ミス・ユーって... ハグして...

う...そ...

そんな...だって...

うそ...

まさか...

そんな...

だってまだ...

それに...

でも...

どうしよう！

「Romie?」

ハッ...

ドア越しに声が...

「Are you ok?」

「あ、え、あ、えっと」

「May I open the door?」

「え？ あ、は、はい、あ、イ、イエス...」

あ、開いちゃった...

「Thank you for washing my stuff」

はあああ 顔見れない...

「Romie?」

い... 息が...

「Are you... ok?」

「ノー...」

「No? What's wrong with you?」

息が... 苦しい...

「ア、アイ...キャント... 息、息、あ、ブリーズ...」

「Bree... You mean breathe?」

「キャント...ブリーズ...」

「Oh,no, Shall I call 911?」

コール... コール？ あっ！ 電話！

「ダニー」

「Yes?」

「ブリーズ・コ...」

あ、電話は高いわ...

「フェイスブック！」

「What?」

「アイ・ニード・フェイスブック！」

「What are you talking about?」

「アイ・ニード・フェイスブック！」

「D, do you want to use Facebook? Right now?」

「フェイスブック！」

「What's for?」

「アイ・ニード・マイ・ドーター！ ナウ！」

「Just a sec!」



## 美香との会話

---

ダニーがノートパソコンを持ってきてくれて、  
フェイスブックのログインページを出してくれた。

「If you need my help, just call me」

そう言って部屋のドア閉めたわ。

英語だけど、どこにID入れてパスワード入れるかはわかるわ。

ログインは“log in”ここよね。

入った！

ああ！ 懐かしい！ もう何年も入ってなかった気分よお！

フレンドは少ししかないけどね。

あら、美佐江さん、髪の毛切ったのね。

そ、そんなところはどうでもいいのよ、美香よ！

えっと、チャット... ああ！ よかったああああ、いる！

美香：おかあさん！ 元気してた？

あ、気がついてくれたのね！

あ

ない

日本語のキーが        ない

ひろみ：mika, nihongo no kibodo ga naino

美香：アメリカのだもんねwww

ひろみ：waratteru bawai ja nainoyo!

美香：  どうしたの？

ひろみ：hanaseba nagaino.

美香：だったら帰ってきてから聞くよ

ひろみ：kaette karaja osoinoyo!!!!

美香： そのPCにSkype入ってない？

スカイプ？ どこ？

ひろみ：wakaranai!!!!

美香：キャシーさんに聞けば？

ひろみ：dakara Cathy ga inainoyo!!!!

美香：出かけてるの？

ひろみ：rikon sitetanoyo!!!!

美香：＼(◎o◎)／！

ひろみ：kaomoji tukatteru bawai ja nainoyo!

美香：Skypeで話してよ！

え？ あ！

ひろみ：Wait

美香：爆

爆じゃないわよ！

「ダ、ダニー！ ヘルプ・ミー——！」

スカイプのID覚えてなかったから、ダニーので入れてくれたわ…。

ダニーと美香がSkype仲間になっちゃったけど、あとで削除すればいいわね。

「おかあさん！ 見える～？」

手なんか振ってる場合じゃないわよ！

「美香————！ どうしよう！」

「どうしようって、何を？ てか、キャシーさんがいないなら、どうしてるの？」

「いるのよ」

「どこに？」

「キャシーのご主人、元ご主人のところ」

「なんで？」

「だからあっ、話せば長いんだってばああっ」

「話さなきゃわかんないよ」

そうね、たしかに…

「じゃあ手短かに言うけど、新しいホームステイ先が決まるまで行くところがなくて、  
そしたら、ここにおいでくれたのよ」

「よかったじゃん」

「そ、そうなんだけど、新しいホームステイ先が決まったのよ」

「よかったじゃん」

「でも、戻ってきちゃったの」

「ハ？」

「またここに戻ってきちゃったの！」

「なんで？」

「だからあっ、いろいろあったのよお！」

「いろいろって何よ？」

「料理したり、スーパー行ったり」

「家にいるときと同じじゃん！ ハハハ」

「同じ、だけど、違うのよ！ ダニーの」

「ダニーってだれ？」

「あの、キャシーの、元ご主人」

「ああ、このプロフ写真の人ね、コリン・ファースに似てない？」

「似てるのよ、眉間にしわ寄せて何か考えてるときとか」

「なんかわかる！ ハハハ」

「それはどうでもいいのよ！」

「あ、そっか、それで？」

「えっと、どこまで言ったっけ？ あ、ダニーのご両親のお墓参りに行って」

「おかあさん、アメリカでもお墓参りしてるの？ ウケる！」

「ウケなくていいから！ そこでね、聞いちゃったのよ」

「何を？」

「キャシーが妊娠して、その赤ちゃんの父親はダニーの友だちなんだって…」

「エーーーーッ？ マジで？」

「それはいいのよ」

「よくはないと思うよ？」

「よくはないけど、問題はそれじゃないのよ！ そのあと、ピンクのバラをもらって」

「へえ～、アツメリカ～！」

「まじめに聞いてよ！」

「聞いてるよ、真夜中なのに」

「そ、そうなの？」

「いいけど、それで？」

「ダニーのお母さんのレシピが見つかって、キャシーが一度も作ったことがないって言うから、  
作ったのよ、ダニーがいちばん好きなミートソース。」

「すごく喜んでくれて、ダニーがレモネード作ってくれて…」

「で？ 問題ってなに？」

はあああ…

「あのね…」

「ダニーのことが好きになっちゃったの？」

ハッ…!?

「ななっ…」

「ちがうの？」

「ち…が…わない…」

「へえ！ おかあさんがねえ！」

「笑いごとじゃないでしょ！」

「べつにいいじゃん、好きになったって」

「だって、おとうさんがいるのよ！」

「死んだじゃん」

「そんな簡単に言うっ？」

「だって死んだんだから」

「そう…だけど…」

「むこうだって離婚したんでしょ？ だったらいいじゃん」

「いいじゃんて、そんな簡単なことじゃないでしょ…」

「むこうは？ ぜんぜんその気なし？」

「わからない…」

「でも、バラをくれたんでしょ？」

「ピンクよ」

「何色でもいいじゃん！ なにかそれっぽいこと言われたりしてないの？」

「そういうのは、べつに、ただ、アイ・ミス・ユーって」

「言ってるじゃ〜ん！」

「でも私から、あ、おかあさんが先に言っちゃっのよ」

「おかあさんから？ 意外！ けっこう積極的！」

「ちがうの、なんか、なんとなく、言っちゃって、そしたら、ダニーもそう言って、ハグされて」

「エー——ッ？ ハグしたの？ 決まりじゃん！」

「でも、こっちの人ってするでしょ？ 挨拶みたいに」

「でもさ、I miss youって言った後でハグだよ？ それは挨拶のハグじゃないよお」

「そう...かな？ そうなの？」

「私に聞かないで本人に聞けば？」

「聞けるわけないでしょ！」

「で、何が問題なの？ 何も問題ないじゃん」

「あるでしょ！」

「なに？」

「だって、会ってからまだ数日しか経ってないし」

「でも、おかあさんの好きなロミジュリだって、会った次の日に結婚したんでしょ？」

「あれは13歳と15歳で、しかも3日で死んだでしょ！」

「あのね、おかあさん...」

「な、なに？」

「もうすぐ50になるんでしょ？」

「そ、そうよ」

「恋のひとつでもしておいたら？」

「ハ？」

「命があるうちにさ」

ガーーーーン

アントニオ猪木にひっぱたかれたくらいの衝撃...

多分... それくらい...

## ダニーのスパゲティ

---

美香は、もう眠いからって言ってログアウトしたわよ。  
まあね、むこうは真夜中だものね、あら？ 今何時？  
5時半すぎ！ 夕食のしたくしなきゃ。  
何にしよう... 思いつかないわ...  
キッチンに行ってから考えよう。  
あ、ノートパソコン返さなきゃ。  
顔合わすのが...なんか... 気まずいわあ。

チ...ラッ...と、リビング覗いたら... あら？ いない。  
ちょっとホッとしちゃったわ。  
ノートパソコンをテーブルの上にそっと置いて...

キッチンにダッシュ！

「キャー————ッ！」

い いた キ キッチンに

「Did I scare you again?」

「ア、アム・オーケー...オーケー...」

ま...まさか... ここにいるとは...

「Have you finished talking with your daughter?」

トークを終わったか...

「イ、イエス」

「How's she doing?」

「オ、オーケー」

「Good. No wonder you were looking like... feeling down」

な、なんて？

「You miss your daughter」

私が... 美香を？

「ノー」

ついさっきまで、すっかり忘れてたわ、美香には悪いけど、だって、それどころじゃなかったんだものおおお。

ポカンしてるけどっ、あなたが原因なのよっ！

「Romie... Are you... glaring at me?」

「グ、グレ... ホワット?」

「You are looking at me like... you look at your enemy or something」

エナミー? 敵?

「ノーノー! ユー・アー・ナット・マイ・エナミー!」

「So I'm not Montague! Hahaha」

モンタギュー? ロミオ? 美香の言葉思い出しちゃった...!

なんでモンタギューなんて言い出すのよおおおっ!

「ホワット・イズ・モンタギュー!?!」

「Are you... playing... Juliet's monologue?」

ジュリエットー...ツ?

「ノー! アイム・ナット・ジュリエット! アイム・ベリー・オールド!」

「You are not very old, you are very... attractive」

「ホワット?」

「I'm glad... you didn't understand what I said...」

なにブツブツ言ってるの?

「ホワット?」

「Ah... Coffee?」

「そ、そうね... イエス、あっ、ノー! アイ・クック・ディナー!」

すっかり忘れてたわ...

「You don't have to」

しなくていい?

「ホワイ?」

「It was a hard day for you, you know, ah... you came back and...」

ハード・デー... たしかに... ハードだったわ...

「You look tired, we can have...」

ハッ!

「ノー・ビックマック! ノー・ピザ! ユー・ダイ・フォー...」

「Sheer heart attack?」

「イエス!」

「Hahaha! Ok, no fast food!」

「ノー!」

「Well, then, I'll do it」

「ドウ... ホワット?」

「Cooking!」

「ホッ... ワット？」

あ、親指立ててドヤ顔。  
料理なんてできるの？

私はキッチンスツールに座って、カウンターの向こうで、スパゲティを茹でてるダニーを見てる。

私が冷凍しておいたミートソースと、冷蔵庫に入れておいたゆうべのスープはチンして、  
「I know how to use a microwave!」

そう言って笑って...

男の人が料理してるのを見てるなんて初めて... まあ、温めてるだけなんだけど。  
最近の若い子は男の子でも料理するらしいけど、私が若い頃はほとんどいなかったわ。  
あのお鍋の中のスパゲティは、きつとうどんみたいになるのね。

そう思うとおかしくなっちゃって...

「グフッ...」

「What are you laughing? Am I doing wrong?」

悪いも何もスパゲティ茹でてるだけじゃない！

「ハハハ！」

「Romie! Don't laugh! I'm doing my best!」

「イエスイエス、ユー・アー・ドゥーイング・ベスト、ハハハ」

「Why are you laughing?」

「だって、なんか。おかしくなっちゃって、えっと、あ、ファニー！」

「Funny! Oh, Romie! You have no mercy! Ok! Laugh at me!」

あっ、鍋が噴いてる！

「ダニー！ 鍋が、スパゲティ！」

「What? Oh! No!」

あわててる姿がお〜っかしくて... 笑いが止まらないわハハハハ！



「Dinner for you!」

テーブルには、ゆうべのスープとチンしたミートソース...の下にうどんみたいなスパゲティ。

「サンキュー」

「You are very welcome! Actually you've made them though, hahaha」

「ユー・ボイル・スパゲティ」

「Yeah! I boiled spaghetti! I can boil spaghetti!」

うどんみたいだね。

「What are you laughing?」

「アイ... 言えないわよ、あ、ハッピー」

「Oh, you're happy, then I'm happy, too」

なんだか、いつもの空気に戻った感じでホッとするわ。

「ダニー、アイ・テイク・ピクチャー、ユア・ファースト・クッキング」

「Ok, let's take a picture. This is my first warmed up dinner」

ダニーがカメラをカウンターに置いて走って私の横にしゃがんだ。

「Ready? 10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2...」

え？

ピッ パシャッ

ほっぺたに...

キ ス ？



だって、美香が...

---

反射的に 見ちゃった

目が 合っちゃった

「Ah...」

な なに...?

「Will you excuse me?」

え?

「Just a sec」

あ、出ていっちゃった...

な、なに?

あれは... 気のせい?

妄想?

願望?

で

なんで出ていっちゃったの?

あ

カメラ...

ダイヤルを... ド...ドキドキする... 再生モード...

あ

目がテンみたいなマヌケぶらの私に... してる————っ!

なんで? なんで? なんで————っ?

なんであのタイミング? ていうか、なんで? なんで... キス?

「Romie」

振り向いたら いた！  
すぐ後ろに！

「Romie, I am sorry」

え？

「I am very sorry」

ハ？

「I was... like a stupid young boy」

ヘッ？

「Please forgive me」

はあああああっ？

「なにそれ———っ!？」

「I know you are angry」

「キスしたあとでごめんなさいって、なにそれ———っ!？」

「Romie, please speak in English, please」

「キスされた後で、ごめんなさいって言われた女の気持ち、あなたにわかるっ!?  
許してくれとか、バカだったとか、私にキスしたのはバカだったってこと？」

「Romie, I know you are very angry, I made a big mistake」

「ハアッ？ ビッグミステイク———っ!？」

「Yes, I did, I didn't mean to hurt you, but」

「傷ついたわよっ！ 大きな間違いだったとか、ごめんなさいって、なにそれ———っ!？」

「Romie, I'm very very sorry」

「ホワイッ？」

「Why？」

「ホワイ・ユー・キス・ミーッ？」

「Ah... be...cause...」

「ホワ———イッ？」

「I like you... very much」

「ライク———ッ？」

「Yes」

なにそれ———っ？

「ユー・ライク・ミートソース！ アイアム、同じって、セイム！ミートソース！」

「No! I love you!」

え？

「Ah... Don't... Don't worry, I won't... just... Forget it!」

ハ？ フォーゲット？ 忘れろ？

「ホワイ？」

「I...just... don't want you to feel uncomfortable, and...」

「イツツ・ナット... True？」

な...なんで...そんな... 困ったような...顔してるの... やっぱり... ウソ？

「True」

え？

「本当に... True？」

ダニーが... 私のこと見つめて...

「I love you」

あ...

ど... どうしよう...

で...も...

美香が...

「アイ... ラブ... ユー... トゥー」

命があるうちにさ...って... 言うからあああ

わからなくなって...

---

あのあと... どうなったと思う？

ダニーが感動した顔で私を抱きしめて...キス...

みたいなことじゃないの。

私、自分の部屋に駆け込んで、トイレで吐いちゃったの。

何も食べてなかったから、何も出なかったけど。

なんていうの？ ほら、ジェット・コースターに乗って気持ち悪くなるみたいな？

そんなカンジね。

アイ・ラブ・ユーって言われて、アイ・ラブ・ユーって言って、吐くって...

恋ってエネルギー要るのねえ、あとスピード？ 身体がついていかないっていうか。

だって、ときめきと動悸の違いがわからないのよ。

そういえば... 恋と更年期症状って似てるわ。

カーッと熱くなったり、クラクラしたり、息が苦しくなったり。

もしかして... これは恋じゃなくて、やっぱり更年期症状じゃないかしら？

だって、吐いたら少し楽になって、そして、なんだか冷めてるの。

冷めてるっていうか、さっきまで大騒ぎしてた自分がバカみたいに思えてきちゃった。

恋って、もう遠い昔でぼんやりとしか思い出せないけど、恋してるときって、

その人がこの世のすべてみたいに思ってた？ 眠ってるとき以外はその人のことばかり考えて、

その人がいない人生なんて考えられないとか、そんな感じだったわよね。

でも、私、ダニーがいない人生は考えられるわよ、考えられるっていうか、

50年近く生きてきて、ほぼ50年近くダニーは私の人生にいなかったもの。

なんでアイ・ラブ・ユーなんて言っちゃったのかしら。確かに好きよ、好きだけど、

愛してるって言葉の重さと気持ちがピッタリこないっていうか...

ピッタリこないっていうのとも違うわ...

なんか...

なんていうのかなあ... もうそんな重たいものを持って生きる元気はない？

そうね、それだわ、また最初に戻っちゃうけど、体力？ 気力？ 追いつかないのよ。

それにねえ、若い頃みたいに永遠の愛なんて信じてないもの。

だって、永遠に続くものなんてないってわかってしまったんだもの。

50年も生きてればそうなるわよ、いいんだか悪いんだかはわからないけど。

永遠は永遠だって思っているときしか恋愛なんてできないわね。

だいたいこんなことゴチャゴチャ考えてるなんて恋してないってことよね。

恋ってもっと、ほら、ロミオとジュリエットだって、もう少し考えたら？って思うくらい何も考えずにダーンと爆走でしょ？　それが恋よね。　無理だわ。

あ...

ダニーのこと、ほっほらかしだったわ。

気持ち悪くなって走ってきて、そのままだった。

どうしよう... アイ・ラブ・ユーは撤回しますって言った方がいいかしら？

撤回って英語でなんて言うの？ あ、取り消す？ 取り消すってなんて言うのよ？

はあああ、まあ、とにかく、心配はしてるだろうから... 行かなくちゃ。

あら？ いない。

ダニーも気持ち悪くなって部屋に戻ったのかしら？ ありえるわ。

その方がいいわ、お互いにあれはなかったことにしようって... あら？ 誰かと話してる？

電話してるのかしら？

チ...ラッ...とリビングを覗くと、私が借りてたパソコンの前でしゃべってる。

友だちかしら？ ニコニコして話してるわ。

こうやって見ると、若い頃みたいにドキドキはしないけど、なんだろう...

ずっと見ていたい...とは思うのよ。

「Ok. See you!」

パタンと閉じて、あっ、こっち見た。

「Oh, Romie! I was just...」

なに？ パソコンと私を交互に指さして？ あっ 私、どこか壊した？ そ、そうかも...

「アイム・ソーリー！」

「What's for? Oh, don't be sorry. Are you feeling better?」

「え？ あ、イ、イエス」

「Good. Oh! Romie, I hope you forgive me」

許してほしい... やっぱダニーも恋じゃないって... いいのよ、いいの、私もだから。

「I was talking with your daughter, and she's already off」

ン？ ドーター...娘... なんのこと？

「I booted up my computer, and your daughter was on Skype」

Skypeだけはわかるけど... 何の話？ ああ！

「ユー・スピーク・ウィズ・ユア・フレンド、イン・スカイプ？」

「Not my friend, your daughter」

ン？ ドーター？ 私の娘？ 美香？ それがなに？

「She said she's thought you're online, and took a contact with me, well, my ID」

オンライン...しか、わからない...

「Romie, do you understand what I'm saying？」

「ノー」

「That's what I thought. Ah... I talked with your daughter, Mika」

私は...話をした...あなたのむす... 美香!?

「ホワイッ？」

「Ah! You got it!」

な、なんで美香と？ なに？ どういうこと？

「ホワイ美香っ？」

「That's what I was explaining, well, let's see... You didn't log out」

ログアウトしていなかった...？

「So my status was sleep mode」

スリープモードって... なに？

「When I... Anyway I talked with your daughter, so forgive me」

説明するのがめんどくさくなったのねっ。

あっ！ 美香と話した後、削除するの忘れてた！

「アイム・ソーリー、アイ・フォーゲット、えっと削除は、あ、デリート」

「Don't be sorry, I enjoyed chatting with your daughter」

エンジョイした？

まあね、美香は私よりはるかに英語が堪能で外資系に勤めてるしね。

「You are very lucky, you have such a good daughter, and she is beautiful」

ふ～ん、ビューティフルね、そうよね、若いしね。

「She loves you so much」

痛烈な一撃食らわしてくれるけどねっ。

「あっ！ ホワット・シー・セイ？」

な、なに、その指をチッチッチミみたいに振って？

「Top secret」

トップ・シークレットーッ？

美香～っ、なに言ったのおおおっ？

「I'm just kidding, hahaha」

笑いごとじゃないわよおお。

「It's just about for a few minutes, so, hello, my name is Dan Swope, how are you? Harmless」



なんだか... 美香がうらやましいわ... ダニーとふつうに会話できるんでしょ？  
私なんて、二人でジェスチャー・ゲームやってるみたいな会話しかできないし。

「Romie」

「イエス？」

「May I show you something？」

何かを見せていいか？

「イエス」

「Come with me」

そう言って、今まで行ったことのない方の廊下に向かったわ。

## 子ども部屋

---

そこは小さな部屋。

壁全面に青い空に白い雲の壁紙で、あとは何もない部屋。

「This is a Kid room」

キッド・ルーム... 子ども部屋？

「ドウ・ユー・ハブ・チャイルド？」

「No」

え？ だったら... なんで？

「When I was 30 and Cathy was 22, she was pregnant」

え？

「Don't worry, it was my baby, hahaha」

ダ、ダニー... 自虐的よおお

「So we married」

デキ婚!?

「I was very happy, I wanted my kids, many kids, because I was an only child of my parents」

一人っ子なのね、美香もだけど。

おとうさんが42のときに前立腺肥大になって、二人目はあきらめたわ。

「But, Cathy had miscarriage」

「ホワット？」

「We lost our baby before... you know」

流産...ってこと？

「It was 6 months」

でも... なぜ...こんな話を... 私にするの？

「We were still young, and so I'd thought we could have a new baby.

But Cathy didn't want to have a baby anymore」

赤ちゃんは欲しくない... そうね、流産した後なら、そう思うのもわかるわ。

「She asked me to give her a time, and I understood her feeling」

夫としてのダニーの姿が見えるような気がして...

「We bought this house 10 years ago」

10年前にここに住むようになったってことね。

「I made this kid room because Cathy said she wanted to have a baby」

え...

でも...

「Well, we never used this room」

そんな過去があって、そして... あんなことがあったなんて...

「ホワイ... ユー...ショウ・ミー...?」

ダニーが... ちょっと淋しそうな目で微笑んで...

「I want you to know me, this is a part of my life」

ダニーは微笑んでそう言ったけど、目には涙がたまっていて...

「I've been stuck in this room, stuck in my past... until you came this house」

え？

「Romie, What color does Mika like?」

ミカ？ あ、美香？

「えっと、ピンク、パープル、ホワイト...、でも、ホワイ・美香?」

「She said she wanted to come and stay here someday, hahaha」

美香——っ！ ホテル代わりに使うつもり——っ!?

「So, I should change the wall paper, it's too boyish, isn't it?」

でも...

「ダニー...」

「Yes?」

「ドント・チェンジ・ウォールペーパー」

「Why?」

「ユー・セイ、イツ・パート・オブ・ユア・ライフ」

ダニーが驚いたような目で私のことを見てるけど...

「ジス・ルーム・イズ・パート・オブ・ユー」

ダニーは私のことをずっと見つめたままで...

「アイ・ライク・ジス・ウォールペーパー」

ダニーの目から一筋涙が流れていた。

「Romie.... May I hug you?」

「イエス」

この人の腕の中は... 悲しくなるほど... ホッとできるの

それだけは本当なの

それだけでいいわ

## ベッドルーム

---

ゆうべは、あれから、もううどんとすら呼べなくなったスパゲティをチンして、スープを温め直して、ふたりで食べて、片づけが終わったらドッと疲れが出ちゃって、そりゃ疲れるわよね、昨日一日でいろいろなことがあり過ぎたもの。

あの子ども部屋... ダニーの話を聞いて、多分私だいたいわかったわよね？  
なんだかホッとしたの。ホッとしたっていうか、なんだか、同じね...っていう感じかしら。  
僕の人生の一部だって...そういう意味よね？ わかるわあ。  
だって、やり直せるほど若くはないんだもの、ここまで来ちゃったんだから。  
できればなかったことにしたいこともひっくるめて私の人生になっちゃってるんだもの。  
50年も生きてきたら、生きてきた分より先の方が短いのよね。  
100歳以上生きるとしたらべつだけど、100歳まで生きたいとは思わないわあ。  
日本最長寿のおばあちゃんですなんてテレビに出るのはイヤよお。  
あら？ なんのこと考えてたんだっけ？ あっ、おっ、はあ... オムレツ焦がすところだったわ。  
。

「Good morning, Romie」

そう言ってキッチンに入ってきて、私に微笑むダニーの目が、いつもより... なにかしら？  
優しい？ ううん、いつも優しい目なんだけど、それよりもっと...なんか...

「Romie, Hello, are you awake?」

「え？ あ、へロー」

「Hello, sleepyhead! Hahaha」

なにかしら？ この... なんていうか... 私のこと見るときの... なんか...  
あ、早くしなきゃ冷めちゃうわ。

ウソみたい、またこうやって一緒に朝食食べてるわ。

昨日の朝が最後だと思ってたのに... 私が戻ってきちゃったからよ。

「Romie」

「イエス？」

「Do you have any plan for today?」

プラン？ そうねえ...

「クッキング、ランチ・アンド・ディナー？」

「Alright, I know, I know, you love cooking!」

なに笑ってるのよ？ 私が作らなきゃマックかピザかうどんみたいなスパゲティでしょ！

「Will you lend me your hand?」

手？ なに？ 見たいの？ 今？ いいけど？ はい、どうぞ。

「You...」

なに？ なんで笑うの？ あ、涙流してる！ なによっ？

「Oh...Romie... I love you! Ahahaha!」

えっ...

そ...そういうこと...

笑いながら...

言うっ？

「Oh...No! I didn't mean... I mean...」

ミンミンなによっ!?

「What should I say? Ah! Romie, help me」

ヘルプ？ ど、どうしたの？

「ホワット、ホワット、え...っと... あ！ ハブン？」

「After breakfast, I'll show you」

ま、また何か見せるの？ 今度はどんな過去～？

子ども部屋の斜め向かいの廊下のいちばん奥のドア。

ここは... どんな過去の部屋なの？

「Come in」

ダニーがドアを開けたら... わあ、巨大ベッド！ 本当にあるのねえ。

「This is... my bed room」

ダニーのベッドルーム...

えっ？ 助けてって、まさか、でも、昨日の子ども部屋の流れから、ウソッ、そんな、

そ、そりゃアイ・ラブ・ユーって言ったけど、言っちゃったけど、それは、だから、

そこまでは、そこまでっていうか、そんなこと、ちがうの、そうじゃなくて、

「アイ・キャント・ヘルプ・ユー！」

「Why？」

ホワイって、あたりまえでしょ！ ムリっ！ なに考えてるの？

「I didn't say anything yet」

「ノー！ ノー！ ノー——ッ！」

「Romie？」

あっ、近寄ってこないで！

「ノーッ！」

「What happened？」

ハプンしちゃダメッ！　なんて言えはいいの？　あっ...！

「ノー・エッグ！」

「What?」

「アイ・ハブ・ノー・エッグ！　エンド！」

「What are you talking about?」

なんで笑ってるのよっ？　そんな簡単なことじゃないでしょっ！

男って、すぐ、そっちなのっ？

「Romie, calm down, please calm down」

ダウンて、倒れる？　そ、そのベッドにっ？

「ノーッ！」

「Did I say something wrong?」

だからあ、あなたの気持ちはわかるっていうのは、そういう意味でのわかるじゃないのよ。

「ア、アイ・アンダスタンド、ユー・ワント・ベイビー」

「What?」

「アイ・キャント、産むって、生産する？　プロデュース・ベイビー！」

キョトン？

だって、しょうがないじゃない！

「アイ・ハブ・ノー・エッグ！　エンド！　だから、ノー・ヘルプ！」

あ、座り込んでうなだれちゃた...　でも、私はその気ないし、その気っていうか、  
そんな、こんな、あら？

笑ってる？　笑ってる場合じゃないでしょっ！　笑うことじゃないしっ！

「Romie... you are totally misunderstanding...」

ミスアンダースタンディング...って、なんだっけ？　あ、誤解、誤解？　なにを？  
それより、なんでまだ笑ってるのよっ!?

「I... haaa... just a sec...」

深呼吸してるわ。

そうよ、少し冷静になった方がいいわ！

「I... just wanted to buy a new bed sheets set」

ん？

「Bed sheets set」

ベッド...シーツ...セツ...　シーツ？

「Look at this sheet」

シーツを見る...

「I don't want to sleep in red roses any more」

真っ赤なバラだらけ...　派手！　美香ならチョー派手って言うわね。

「Cathy chose it」

ここにダニーが寝てるっていうのが...　美香なら、チョー・ウケる。

「I haven't bought such things in a department store」

こういう言葉はなぜかわかるのよ、デパートで買ったことがないわけね。  
アメリカって楽天ショップってないのかしら？  
で？

「I would like you to come with me and choose one, well , two is enough?」  
一緒に来て選んでほしい...

「I like the color of the wall, but I have no idea... What can I say...」  
壁の色が好きだけど... ああ、壁の色と合うようなのが欲しいわけね...

えっ？

あっ！

わ... 私ったらーーーーっ！

「ア、アイ... ああもう、ソーーーーリーーーーッ！」

「Don't be sorry, it was hysterically funny, I...still... hahaha!」  
もう... 恥ずかしくて泣きそうよお...

「Romie, I don't need a baby, I need your help, choose a sheets set for me」

はああ、もう... 立ってられない...

ヘナヘナって、こういうことよね... 座り込んだじゃったわよ...

「Romie」

顔をあげたら... 至近距離...

「You make me smile, you make me laugh, what I needed so much」

私を見つめるダニーの目...

あ...

「ユア...アイ...イズ...」

「Yes?」

「ブラウン」

キョトンと...しちゃった...

「Romie...」

「イ、イエス？」

「Yes, my eyes are brown! Oh, Romie!」

なんだかわからないけど、ハグされて...



ダニーは笑ってたわ。

## デパートメント・ストア

---

こ...ここは... なに？

近未来都市？

なんで電気屋の隣りに靴屋があるの？ まだ町ならわかるわよ？ 室内よ？

見上げると... 何階あるの？ 全部ズラーーッとお店。

アメリカのデパートって、こんななの？ こんな一大都市みたいな中で、  
どうやってシャツ売り場を見つければいいのか？

「Romie, this way」

ディス・ウェイって、デパートでシャツ買ったことがないって言ってたのに、  
売り場わかってるの？ で、でも、ダニーにまかせるしかないわ。

私一人で動いたら絶対迷子になるわ... 怖いから、ダニーのシャツつかんじやった。

「What are you doing?」

「アイ・ドント・ワント・ルーズ・ユー」

「What?」

「ドント・ルーズ・ミー」

な、なに？ なんでビックリしたみたいな、ヘンに真剣な顔になってるの？

そんなにここって迷路みたいななの？ そうなの？ってなんて聞けばいいのか？

迷路って、迷...迷宮... あ！

「イズ・ディス、ラビリンズ？」

「What?」

「ラ・ビ・リ・ン・ス」

考えてるわ、眉間にしわ寄せて... なにを？

「Oh! Labyrinth!」

「イエスイエス」

今度は笑い出したわ、私は泣きそうなのにつ。

「No, it's just a shopping mall」

ショッピングモール？ こんな巨大都市みたいなのが？

でも、デパートに行くんじゃなかったの？

「ホエア・イズ・デパート...メント・ストア？」

「It's at the end of the hallway」

指さすけど、どこよ？

「Don't worry, I won't lose you」

笑ってるけど、イヤよ？ 突然駆け出したりとかはナシよ？

もっとギュッとつかんでおこう。

「Ok! Grab my shirt as much as you want! Hahaha」

笑ってる場合じゃないのよっ！ 私はねっ！

デパート！ そうよ！ こうでなくちゃ！

一階には化粧品売り場があるのよ、どこの国も一緒ね。

おそらく、向こう側にアクセサリ売り場があるはずよ。

はあ、ホッとするわあ。

そして、エスカレーターのところ、各階の案内が書いてるはず。

ほらね！

えっと... Living- Bed and Bath 5、 五階ね。

「ファイブ」

「Now you know where we should go more than !!」

あたりまえよ！ デパートは女の本能を知り尽くして構成されてるのよ。

入った途端、香水やメイクの香りで気分を高まらせて、アクセサリで目をくらませて、二階や三階に洋服で...って、そんなことどうでもいいわ、五階よ！

わあ～、すご～い！

雑誌に載ってるみたいなベッドがいっぱい！

どれも素敵ねえ、これなんてお姫様のベッドみたいよ。

あ、お姫様じゃなくてダニーのを探さないと。

ていうか、ダニーはどれがいいの？

「ホワット・ドウ・ユー・ライク？」

「Well... At least, not this one」

お姫様みたいなのはイヤだ...と。

そりゃそうね。

まあこんなにいっぱいあるんだから、自分の好きなものを選べはいいんじゃない？

「えっと、選ぶ... あ、チューズ、ホワット・ユー・ワント」

なにその、両手広げて路頭に迷ってるみたいな顔？

ああもう、男ってそうよね、シャツひとつ選べないのよ。

デパートで男が役に立つって、荷物持つくらいよね。

そうねえ、壁の色が好きなわけでしょ？ コーヒーにミルクいっぱい入れたみたいな？

カフェオレっていうの？ もうちょっと薄い気がしたけど。

それに合うとしたら、やっぱり茶系よね。あそこのセットも素敵じゃない？

その横のネイビーブルーのセットも合うんじゃない？

えっと... あらら、セットだとけっこうな値段になるのね。

あれ？ あっちにSALEって書いてるコーナーがある！  
すご〜い！ 50%OFF！ こっちは70%！ 70%って、原価いくらなのよ？  
このキャラメルみたいな色素敵じゃない？ サイズは... あった、キングサイズ。  
これは... Fitted sheet ベッドマット用ってことよね。  
フラットシートもいるって言ってなかった？ ホテルで毛布の下にあるやつよね？  
同じ色は... ない。 あ、そう。わかったわよ、あるもので組み合わせてやるわよ！  
これでもね、パッチワークだってやってたんだから！ 美香の幼稚園のバッグや  
お弁当入れだって、ありものの布を組み合わせて可愛いのを作ったわよ！  
老眼になってからは裁縫なんてしてないけど。  
私とセール品との闘いだわ！

勝った！  
フラットシートは白地にキャラメル色っぽいストライプ。  
コンフォーターケースはちょっと濃い茶色に一本だけ黄色の線が入ってるやつよ。  
どうよ！ 茶色だけにしないのがポイントよ！ 茶系はそれしかなかったんだけど。  
それより枕よ。なんで4個もあるの？ 一人2個ずつ？ あったけどね。  
コンフォーターケースと同じのと、フラットシートと同じのが。  
あとは... はああああ クッション！ なんでベッドにクッション？ しかも4個も！  
でも負けないわ！

誰か私をほめて！  
あのセール品のバラバラなのから選んだのよ！  
濃い茶色の無地と、クリーム・イエローっていうの？ それとピーチみたいなオレンジ。  
このふたつはポイントになるでしょ？ ただね、あとひとつが見つからないの。  
私が好きなのはあるのよ、できれば買って帰りたいくらい。  
でも、それも一個しかないから、うちのソファの上のは二個だからあきらめたけど。  
あのね、ちょっとザラツとした生成りに、四角の下斜めに一本百合が描いてあるの。  
鉛筆で描いたみたいなのでね、素敵なのよ。ああもう頭がそれになっちゃって、  
もうひとつが選べないわあ。

「Do you like this one?」  
わっ あ、そうか、いたんだったわ。  
「ドウ・ユー・ライク... ゼム？」  
「Excellent!」  
よかった！ これでイヤだって言ったらお姫様セットにしてやるけどね。  
「アイ・ニード、ワン・モア、クッションカバー」

「How about this one?」

え？ これ？ だってこれ花がついてるわよ？

「ドゥ・ユー・ライク・イット？」

「You like it, right?」

「私？ イエス、私はね」

「Good. Buy this one」

「イッツ、ほら、フラワー、ユー・オーケー？」

「Yeah, I think it's... yes」

そうね、ひとつくらいこういうのがあってもいいわよね。

私の趣味を押し付けちゃうみたいだけど、でも素敵なのよお。

これで、キマリ！

「Which floor do want to go next?」

次？

べつに... あっ！ ここに行ってみたい...

「ここ、フォー」

「4th floor? Oh, sure, you never want to miss it. Kitchen Ware! Hahaha」

だってー、アメリカのキッチン用品見たいんだもの～！

## ヴィクトリアシークレット

---

ここは... なんていうの... なんていうか... アメリカのキッチン用品売り場ってカンジ。そうなんだけど。

日本人の私を寄せ付けない空気っていうの？

これをどう使うか、おまえにわかるか？ みたいな？

これはわかるわよ、パンをこねたりホイップクリーム作るやつでしょ？

映画とかのキッチンによくあるわよね。

でも、私はほとんどパンなんかこねないし、ホイップクリームだってメレンゲだって、そんなにしょっちゅう作らないもの。

しかも、こんなに大きなもの置くところなんてないわ。

これは何？ Deep fryer... フライだけのための機械？ フライパンかお鍋でいいじゃない！

私、これにしか使えないっていうのが嫌いなものよ。

ほら、これ！ 日本にもあるけど、Apple peelerって、リンゴの皮むくだけよ？

どれだけリンゴの皮むくつもり？ 業務用ならわかるけど、ふつうの家で使う？

たしかにね、ふつうのピーラーは便利よ。最初に使ったときにはちょっと罪悪感感じたけど。

だって、包丁でニンジンやじゃがいもの皮をむけてこそ一人前の主婦じゃない？

でも、一度使っちゃうとねえ、楽なのよねえ。

でも、アップル・ピーラーだけは認めることはできないわ。

これは... Slow cooker？ パンフレットの写真を見るには... ああ。

ここに材料入れてタイマーかけて煮込み料理ができるってやつね。

こっちは？ Crock-pot... どう違うの？ ああ、だいたい同じようなものなのね。

私は煮込み料理は時間をかけたいのよ。圧力鍋も使わないわ。

なんていうのかしら、途中で味見したり、一回止めて味を染み込ませて、また煮るとか、効率的じゃないけど、かけた時間も味付けのような気がするのよ。

どんなに時間かけても、おとうさんも美香もパパッと食べて終わりだけだね。

でもまあ、共稼ぎの主婦とか独身とかには便利なものかもしれないわね。

こっちは小物コーナーね。スライサー、日本にもあるわ。買ったことあるのよ。

結局包丁で切る方が早くて使わなくなったわ。美香はたまに使ってるわね。

たまにしか料理しないしね。あの子、あんなでお嫁に行ったとき、やっていけるかのしら？

それにしても...

もっとワクワクするかと思ったら、そうでもなかったわ。

えっと、ダニーは？

えっ？ やだ、どこに行ったの？ 帰れなくなっちゃう、どこよ？

「What are you looking for?」

「ワッ！」

ああ... ビックリした... すぐ後ろにいた...

「Did you find something you want?」

私が欲しいもの？

「ノー」

「No? I thought you're going to buy everything in this floor, hahaha」

「ナッシング、アイ・ワント」

「Ok. So which floor do you want to go next?」

次に行きたいフロア？

「ノー」

「No? Don't you want to see clothes or jewelry or...」

服やジュエリー？ そうねえ...

このデパートのって高そうだし、だいたいそんな高い服着ていくところもないし、アクセサリなんていつするの？

「ノー」

「No? Are you sure?」

「アイ・ワント・ゴー・ホーム」

「Ah... Ok, but... Are you sure?」

確かか？って、そう言ってるじゃない！

「アイ・ワント・チェンジ・ユア・シーツ！」

私の勝利を早く見たいのよ！ ちょっと心配だし....

なに？ なんで笑ってるの？ あなたが新しいシーツが欲しいって言ったんでしょ！

「ウィ・ゲット、ニュー・シーツ、だから、ゴー・ホーム！」

「Ok, let's go home」

エスカレーターを下りて下りて下りて...

デパートの入口...っていうか、出口。

ここからまたあの近未来都市になるのよね？

「Ok! You are grasping my shirt, now we can go!」

はああ... でも、さっきよりは怖くなくなったわ...

あら？ あのお店の文字、どこかで見たことがある...

Victoria's Secret... ヴィクトリアシークレット！ 美香の憧れだったわよね？

日本じゃ、なかなか手に入らないって言ってたわ。

おみやげに買う？

「Oops! Romie, what happened?」

あ、ダニーのことつかんでるの忘れて止まっちゃってたわ。

「えっと、アイ・ワント・シー、あそこ？」

「Do you want to go to Victoria's Secret?」

「イエス」

「Ah... sure, go ahead」

え？ なにその手？ 行けて、ひとりで？ スーパーじゃないんだから無理よ。

「カム・ウィズ・ミー」

「Me? Oh... no... no....」

「カム・ウィズ・ミー！」

「I can't!」

「ホワイ？」

「Romie, it's a lingerie store for women」

ランジェリー... ウーマン... あっ、そうよね、でも、私一人で買えるかしらあ？

「Go and get what you want! You can do it!」

なにがユーキャン・ドウ・イットよっ！

でも、そうよね、下着売り場だもの、日本のと変わらないわよ。

う... わあ... なにこの... セクシー満点勢揃い...

美香はこんなのが欲しいの？ このパンティなんて、ほとんど紐よ？

もしかして、これがTバックていうやつ？ 美香は履いてないわよ？

あら... なんだか... こっちを見てない？ 店の中にいる若い子たち...

そ...そうね、私みたいなおばさんがTバックの前に立ってるんですものね。

私が履くわけじゃないのよ！ 美香よ！ 美香も履かないと思うけど...

そ、それじゃ... ブラ？ あら、これは可愛いんじゃない？ サイズは... えっ

32？ こっちは？ 34...って、日本のと違うううう、わからないいいい。

「Did you get what you want?」

「ノー...」

「No?」

「アイ...ワント・バイ...美香の、マイ・ドーター、プレゼント...」

「Oh! You wanted to buy a present for Mika!」

「イエス... でも、サイズ、アイ・ドント・ノウ、アメリカンサイズ...」

「Ah... I see」

「美香ライク・ヴィクトリアシークレット、ノー・ヴィクトリアシークレット、ジャパン...」



しかたないわ... 帰りの空港の免税店で何か買うしかないわね...

「Ok! Let's go!」

え? レッツゴーって、行くの?

「Come with me, Romie!」

なんだか本当に戦争に行くみたいな悲壮な顔してるけど...

「イ、イエス」

「Do you know what size of...」

その手振りは、美香のブラのサイズってことね。

「えっと、いつも干すときに見てるのよ、たしか... Cのセブンティー?」

「70? You mean... 70 centimeters?」

センチメートル? ああ、そう...よね?

「イエス」

「Let's see...」

あら?

あっちの方に...

「ダニー!」

「Yes?」

「Tシャツ! あっち!」

「T shirt! Yes! Good! Let's go there!」

買ったわ!

横がレースになってるタンクトップとI LOVE PINKとか書いているTシャツ。

ラッピングがどうのこうのっていうのは、ダニーがやり取りしてくれたわ。

美香! ヴィクトリアシークレット買ってあげたわよ!

「サンキュー、ダニー!」

「You are... welcome」

ダニーは汗だくになってたわ。

さてと、家に帰ってシーツ替えなきゃ!

ユー・クック！

---

私は買ってないわよ。

でもね、デパートで見たキッチン用品が上の棚にズラッとあるの。

しかも全部箱に入ってるの、新品。しかも、あの売り場でいちばん高かったものばかり。

ダニーが自分でベッドメイクするって言うから、あんな大きなベッドを一人で持って

ぎっくり腰にならないかしら？ まあ、とにかくそう言うから、私はキッチンに来て、

ダニーのお母さんのレシピを見てたら、あの膨大な量のパン粉を使って作れそうなのを見つけたの。

ブレッド・プディングって、プリンじゃないのよ、何かしら？ デザートだってことは確かなの。

とにかく、それを作るためのオーブン用の容器を探してて、上の棚を開けたら、あったのよ。

そりゃそうよね、キャシーは料理のプロでしょ？ でも、なんでひとつも使ってないの？

キャシーも私と同じで、こんなものは使わない？ だったらなんで買ったの？

まあ、べつにいいんだけど、ほら、これは電動ミキサーでしょ？ フライヤーもあるわよ。

こっちは、Smoothie Maker...スムージー... ああ、今流行ってるヨーグルトドリンクね。

これは日本でも売ってるのよ、ちょっと欲しいと思ったの。

でも、毎日飲むのか？って思ったら毎日は飲まないわ、私はね。

美香だって、たま～に買ってきて飲んでる程度だし。

これは...Slow Cooker、ああ、なんでも突っ込んでおけばできるやつね。

説明書にはいろいろな料理の写真が載ってるけど、本当に簡単にこんなのできちゃうの？

美香がお嫁に行くときに持たせようかしら？ まだそんな予定なんかないんだけど。

私が使ってみてもダメなのよね、なんていうの？ 要領がわかっちゃってるから。

美香レベルで本当に使えるかどうかよね。 どうなのかしら...

私ったら、なに真剣に考えてるの？ 嫁入りが決まったわけじゃあるまいし。

でももう27でしょ？ そろそろ決まらないと...ねえ。付き合ってる人はいるみたいなんだけど。

「Romie!」

「あ、イエス？」

「Come here!」

できたのね。

素敵！

壁の色にも合ってる、シックで素敵！

コンフォーターケースの黄色い線もアクセントになってるし、

クッションのピーチオレンジとクリームイエローが柔らかい感じが出てていいんじゃない？

私の好きなクッションカバー、真ん中、そうね、そんなに違和感ないわ、いいかも。

「What do you think?」

もちろん！

「アイ・アム・ザ・チャンピオン！」

「Yes, you are!」

「ユー・ライク？」

「I love it!」

よかった！

あ！

「ピクチャー、オーケー？」

「Sure!」

私の記念すべき巨大ベッドのコーディネート初作品よ！

急いでカメラ取ってきて写したわ。

「Romie, I'll take a picture of you and your great work. Get on the bed!」

え？

「オン・ザ・ベッド？」

いいのかしら？ 人様のベッドの上に... でも... 記念だし。

「A-ha! Yes, you are a Japanese, very polite, sitting up straight! Hahaha」

ジャパニーズが...なに？ 正座のこと？ だって人様のベッドの上だもの、するでしょ？

「Smile!」

ピッ パシャッ

「あ、ついでに、ついでにって... ユー・アンド・ミー、ピクチャー！」

「Ah! Ok!」

ダニーがベッドの真正面にある巨大なテレビが置いてある棚の上にカメラを置いて...

「あっ！」

「What?」

「ノー・キス！」

「I know! No kiss! I'll act like a polite American」

ダニーがわたしの隣りに走ってきて正座...っぽいことして、10秒数えて、はい、撮れました！

それにしても...

「ダニー、ホエン、ユー・スリープ、ユー・ユーズ、2...ピロー？」

「Well... Yeah. Why?」

だって、ふたつもどうやって使うの？

「ハウ？」

「How? Like this」

寝てみせたわ、身体がちょっとななめになってるけど寝やすいのかしら？

「ドゥ・ユー・ユーズ・クッション？」

「Cushion? When I watch TV or read a book, I use them like this」

ああ！ テレビ見るときとかに壁にもたれるためだったのね。

こういう感じ？

「Oh, now you're trying American style!」

「イエス」

へえ、こうやってテレビ見るのね。いいわね、ベッドでテレビなんて。

え... ど...こ... あれ... 私... 寝ちゃって...た...

あ、横でダニーも眠ってる。

へえ、こんな顔して眠るのね... やっぱり似てるわよね、ほら、あれ、あ、コリン・ファース！

あっ、今何時？ ブレッド・プディング！...は、いいとして、夕食のしたく！

え？

起き上ろうとしたら...

腕をつかまれちゃ...った...

「Please... stay...」

でも...

「Stay with me... just... a little bit more」

で、でも...

「Please...」

そ...んな...目で...

「ア、アイ、メイク、ディナー」

あっ、ガバッと跳ね起きたわ...

「Ok! Alright! Great! Cathy never cooked! And you cook all the time! Great!」

な...なに？

出ていっちゃった...

なんで突然怒っちゃったの？ なに？

ちょっと！ なによ？ どういうこと？

あれ？ どこにもいない...

はあ？ なんなわけ？ なんで私が怒られなきゃならないのよっ!?

ユー・クック・オール・ザ・タイム〜ッ？ 料理するでしょっ！

私が生なきゃマックやピザやうどんみたいなスパゲティでしょっ！

だいたい、なんで怒るのっ？ 私は必死にシート選んだでしょっ！

なんなのよっ!？ いないしっ！

あっそ！ だったら私も出ていくわよっ！

バンッて思いっきり玄関のドア閉めて出てきたわよっ。

わけわかんないっ！

私になにしたっていうのよ———っ!?

ディナー作るって言うただけでしょ！ なんで突然怒るのよっ！

なにか悪いことしたっ？

ヴィクトリアシークレットに行ったこと？ そりゃあれは申し訳なかったけど、

でも、私が無理やり引っ張っていったわけじゃないでしょ！

あの人がレッツゴーとか言って入っていったんじゃない！

すごーくイヤだったんなら、あのとき言ってよ！ 免税店で何か買ったわよ！

でも、シート替えたときには機嫌よかったじゃない！

なんなの？ 突然よ？ あ——、ムカツク！

あ...ら？

ここは... どこ？

プリプリしながら歩いてたから... えええ... 自分がどこにいるのかわからない...

こ、こういうときって、動かない方がいいのよね？ それって登山のときだったっけ？

でも、やっぱり、どっちに行ったらいいかわからないから、動かない方がいいわね。

ここで死ぬのかしらあ？ 遭難したんじゃないんだから死なないわよね。

誰か通るわよ、山の中じゃないんだもの。そうよね？ そうよ。

でも... あの家の住所... わからない... ダニーズ・ハウス？ あ、ちがう。

ダエ〜ン・ソープ？

本人にも通じなかったんだからダメよね。

もういいわ、もう、誰か来るまでここに座ってるわ。来るかしら... ああ、もういい！  
へえ... この辺って素敵な家ばかりね。

そういえば、あの現地スタッフが安全なところだって言ってなかった？

はあああ、よかった...

なんであんなに怒ったの？ 私がいつも料理してるって... でも、喜んでたじゃない？

あれ？ その前に... キャシーがなんとかって...えっと...なんだったっけ...

キャシー...ネバー... あ、ネバーって言ってた、ネバー... あ、クック... え？

ネバー、never、けして~しない、けして料理しない、ハ？ あれ？ 聞き違い？

そうよね、だって料理のプロだもの、じゃあ、ネバー... なんだっけ？

「Romie!」

あ！ ダニーの声！ ああ！ よかったああ！

「ダ...」

ちょっと待って。

急に怒り出したのはむこうよ？ いなくなったし。

そんなに簡単に許さないわよ！ 私は何も悪いことしてないんだもの！

「Romie!」

フン！ せいぜい探しなさいよ、私は怒ってるんだから！

「Oh! Romie!」

なにがオー・ロミーよ！ 私の名前はひろみよ！ 私の名前もちゃんと言えないくせに！

まあ... 私も言えないけど。

近づいてきた...！ でも、私は顔なんか見てやらないわ！

「You scared me!」

スケア？ 怖い？ 先に怒ったのはそっちでしょ！

「Romie, I'm sorry, I'm very sorry」

謝ればいいってもんじゃないわよ！

「Please forgive me. I hurt you so much」

傷つけた？ 怒らせたわよっ！

「Romie, please come back home with me」

イヤよ！ まだ...

「Romie」

あ、ま、前にまわってきたわ、フン、顔なんか見てやらないわよ。

「I'm very sorry, I was silly, stupid... asshole!」

アッソーって... なに？

「Romie, please say something」

何か言え？ 言えるものなら一時間ばかり罵倒し続けてやるわよ！ 日本語だけど。

「I don't... I don't want to lose you」

迷子にさせたくないってこと？ なに言ってるのよっ!? 私が家を出たのは、

「ビコーズッ、ユー・アングリーッ、ミーッ！」

「I am very sorry, you have nothing wrong, all my fault」

「ホワイッ？ ホワイ・ユー・アングリーッ!?」

「I was... crazy」

「クレージーッ？ ホワイ・クレージーッ？」

「I was... frustrated」

フラストレイ...ションは、イライラする？

「ホワイ？」

なに？ その怯えたみたいな困ったみたいな顔？

「Do I have to confess?」

コンフェス？ えっと、たしか、ジュリエットのセリフで... ああもうっ、忘れたけどっ、

「コンフェス！」

なによ？ 早く言いなさいよ！ なんなのよ？ あ、そう。

「オーケー、バイバイ！」

あっ、立ち上がろうとしたら、腕つかんで、なによ？

「I am a man!」

僕は男だ、わかってるわよ、だからなによ？

「I am just a stupid man!」

僕は、バカな男だ... で？ だから？ なに？

「Romie, I beg you, please forgive me」

許せ許せって、なによっ！

「ノー！」

そんな絶望的な顔したってダメよ！

「アイ・ドント・クック！」

「Romie! I didn't mean...」

「ノー・クック！」

「I'm very sorry, that was...」

「アー・ユー・ソーリー？」

「Yes, yes, I do so much」

「クック！」

「Pardon?」

「ユー！ クック！」

「Me?」

「イエス！ ユーツ！」

そうよ！ 今、キッチンにいるわよ！ もちろんダニーもね！

私は料理しないわよ！

自分でしてみなさいよ！

ダニーは野菜切ってるわ。

そうよ、ザクザクでいいのよ、ビーフシチューなんだから、どうせとろけるわ。

肉もゴロゴロでいいのよ。

レシピは私が書いてやったわよ、いちばん手軽にできそうにね。

書くのはできるのよ、スペルはうろ覚えだけど。

そうよ、それを全部突っ込むのよ。

赤ワインと塩・胡椒とトマトペーストとお砂糖テーブルスプーン一杯もね。

本当は最初に炒めるんだけど、そうしなくてもできるのは知ってるわ。

そうよ、蓋をして、タイマーを4時間。

見てやろうじゃない、スロー・クッカーのお手並みを！



だって...

---

赤いバラがグルングルン回ってるわ。

洗濯機の中でね。

なんだかダニーと一緒にいたくなくて、キッチンを出てチラッと廊下を見たら、

グシャッと積んであったのよ。だから、洗濯室に持ってきて洗濯してるのよ。

また使うかどうかは知らないけどいちおうね。

なんで私、洗濯なんかしてるのよ？

放っておけばいいじゃない、私のじゃないんだし。

ついやっちゃったのよ。

汚れ物が置いてあると拾って洗濯しちゃうのよ、だってずっとそうしてきたんだもの。

このシーツ、どうするのかしら？ ダニーはもう使わないわよね、イヤだって言ってたもの。

何かに使える？ テーブルクロス？ こんな派手なテーブルクロス？

どこに料理があるかわからなくなるわよ。思い切ってサマードレス作るとか？

着れないわ、こんな派手なの。これをどうしようと私に関係ないのよ！ なに真剣に考えてるの？

なんだかまだモヤモヤするのよ。ダニーはおとなしく私に言われるがままに、

お肉切って野菜切って... まあね、全然料理できない人があのお鍋を使って、

ちゃんと料理ができるのか試したかったんだけどね。でも、それだけじゃないのよ、

なんていうか、ユー・クック・オールザタイムって... 謝ってたけど、でも、あの言葉、

そう思ってたの？っていうか、喜んでもらってると思ってたのに、本当は... お節介？

だからフラストレーションが溜まるって、イライラしてたのに我慢してて...

だから、私がディナー作るって言ったら怒ったの？ 爆発しちゃったってこと？

そういえば... 何回か言われたわよね、料理しなくていいって。そうよ、ゆうべも言ったわ。

疲れてるだろうからとか言ってたけど、本当はウンザリしてたの？

あ、美香にも言われたことがあるわ、ウンザリは言わなかったけど、

いつも夕飯作って待ってなくていいよって、待ってるわけじゃないけど、ていうか、

美香は、ドタキャンていうの？ 帰る頃に電話してきて、今日は会社の人たちとご飯食べてくるって、

もっと早く電話してきてよ！ 私一人だったら適当に残り物つついて済ませてたわよ！

はああ、何度そんなことあったかしら... あら？ ちがうちがう、今は美香のことじゃないのよ。

ウンザリしてたのならそう言ってよ！ ウンザリって英語でなんて言うのかしら？

言ってたのにわかってなかったとか？ そうなの？ 私が悪いの？ なんで私が悪いの？

私は料理作ってただけよ！ 食べたくないなら食べなきゃいいじゃない！

マックでもピザでも好きなもの食べればいいじゃない！ あ... 私がダメって言ったんだわ...。

それじゃ、やっぱり私が悪いの？ でも... アイ・ラブ・ユア・クッキングって言ってなかった

？

言ったわよ、ほら、私が戻ってきちゃったとき。勢いで言っちゃった？ ありうるわ。

男って自分が言ったことなんて全然覚えてないんだから！ あ... だから？

僕は男だって、そういう意味？ バカな男だって、憶えてないバカな男ってこと？

男なんてみんなバカよ！ そんなのわかってるわよ！

憧れて理想の人って思ってたおとうさんだって、結局はステテコ履いたただのおっさんだったわよ！

男って、自分がバカだって女がわかってるってわかってないのかしら？ バカじゃない!?

でも... それじゃ... 私、この家でなにすればいいの？ 洗濯？

この真っ赤なバラだって、洗濯したからって使うかどうかもわからないのよ、なのに洗濯してるって...

私がやってることって、全部ただのお節介で、なんの意味もなくして...

だけど...私...ずっとそうやって生きてきたんだもの... それが全部... 無駄なことだったの？

「Romie...」

あ...

「Why are you crying?」

だって...

「It must be... me」

あなたじゃなくて...私が...

「ア...アイ...アム...」

役立たずって英語でなんて言うの... あ... 奇跡的に...

「ユースレス！」

思い出したああ...

口に出したらもっと悲しくなっちゃったああ...

「You are not useless! Please don't think like that」

「ユー・フラストレーション」

「What?」

「フラストレーション！ アイ・クック、ユー・フラストレーション」

「What? Oh! No! Romie, You are misunderstanding!」

「でも、オンリー・アイ・キャン・ドウ、イズ、クッキング」

「Romie, listen」

「それか、ワッシュ、こんな、ド派手な、ユースレス・シーツ！」

なんかもう... 情けなくなっちゃったああ...

声出して泣くなんて...バカじゃない... だけど...なんかもう...私の人生が...

「アイ... deny マイ・ライフ、ユー... Refuse マイ・クッキング...」  
ジュリエットのセリフよお...  
あなたのお父様を否定して、あなたのお名前を拒絶してのパクリよお...  
だって、それしか思いつかなかったんだものおお...

「Romie!」

泣いてる顔見ないでよお、鼻水ダラダラなんだからああ...

「Please listen to me」

聞くけど... わからないかもおお...

「I never refuse your cooking. I love your cooking. It's true」

わかったけど... だったらなんで怒ったのよおお...

「I've thought you understood what I said, but you didn't」

え、なに？ アンダストゥッド、理解！ 理解してると思った... でも、してない？

私が悪いのっ？

「アム・アイ、悪い、なんだっけ、あ、バッド？」

「No! I was wrong. Ah... bad」

あ... そう...

「Shall we go out this room?」

ハ？ 部屋から出ないか？

「It's too hot」

暑すぎる... ああ、はいはい。

ビールよ。

まだ夕方なのに。

ダニーはコーヒー？って言ったの、私がビア！って言っちゃったの。

だって、飲まなきゃやってられないって気分だったんだもの。

新橋のサラリーマンが会社帰りに飲みに行く気持ちが少しわかるわ。

ちょっとちがうかもしれないけど。

ダニーは黙ってるわ、視線は感じるの、でも、何を言っているのかわからないんだもの。

泣き疲れたっていうのもあるわね。きっと目が腫れてるわ... そんなに見ないでよ。

鼻水ダラダラたらしめるのまで見られちゃったし、もう、そんなに見るなら何か言ったらっ？

いいわよっ、だったら私も見てやるわよっ！

キッとね！

なにそのビックリした顔!?

「What?」

ホワットーッ? こっちのセリフよ!

「ホワイ?」

「Why? Why... What?」

「ホワイ・ユー・ルック・ミー、ノーワードでルック・ミー?」

「Ah... Because...」

ビコース? なに?

「Because...」

だから、そのあとはっ?

「I just wanted to...」

ただそうしたかった...

あ... そう... 理由なし...

まあ... そういうときも... あるわね...

そうよ! 私、この人にバックした顔まで見られたんだもの。

腫れた目なんか見られたってどうってことないわ!

「オーケー! ルック・ミー」

「Oh! You gave me permission! Hahaha!」

笑ってる... 泣いたカラスがもう笑ったってこのことよね。あ、泣いたのは私だわ。

「Ok, I'll stare at you!」

な、なに? 顔近づけてジーッて...

やっぱり... 茶色... 目が... どうして... いつも... こんなに...

あ

目を開けると...まだ...私のこと...

え...

キス...

しちゃった...

でも...

こんな愛しそうな目で...

見つめられると...

ほら...

また...

溶けちゃいそう...

「Romie... Stay with me...」

はい...

「You don't have to cook now」

そうね...

「I already cooked」

そんな優しい目で言われたら...

「アイ・ステイ・ウィズ・ユー」

そう言いたくなっちゃうわ。

## 危険兵器

---

中学生のときだったかしら？ テレビで古い映画をやってたの。

「風と共に去りぬ」

中学生の私には、あのヒゲのおじさんのどこが魅力的なのかわからなかったわ。もっとわからなかったのは、スカーレットがレッド・バトラーに会いに行った場面。レッド・バトラーにキスされてヘナヘナ～ってなっちゃうところ。なんでキスされてヘナヘナ～ってなるのか、まったく意味がわからなかったわ。さっきまではね。もちろんファーストキスじゃないわよ、ファーストキスは高校のときよ。それはいいとして、ダニーにキスされたら、ヘナヘナ～ッどころじゃなかったの。ほぼ失神よ？

「What are you thinking?」

何を考えてるかって、風と共に去りぬの英語のタイトルって... あ！

「Gone・ウィズ・ザ・ウィンド」

「Are you thinking about Gone With the Wind? Now?」

「イエス」

「Sometimes I wish I could see into your brain」

私の脳みその中を見たい？

「ホワイ？」

「because...」

あ...

スカーレット...わかるわ...今なら...ね...

レッド・バトラーは...やっぱり私の好みじゃないけど...

「Romie, why are you hiding?」

だって...

お姫様抱っこは卑怯よ。

お姫様抱っこはまだいいとしても、お姫様抱っこしながらキスって、私、本当に失神してたと思うの。

でなきゃ...

なんで―――っ？

なんでこんなことになっちゃったの―――っ？

私、欲求不満なんかじゃなかったわよ？

必要性なんか感じてなかったもの！ とくに更年期に入ったら全然よ！

なのに、なんで―――っ？

べつに、ダニーが無理やりってことじゃ...なかったんだけど、

イヤだったとか...でもないんだけど、イヤっていうより...新大陸発見みたいなカンジだったけど

...

新大陸っていうか... 新境地？ じゃないわね... 新感覚？ ていうか... 新鮮？

新鮮っていうより、ていうか、そんなことじゃなくて！

あっ！

「What are you doing?」

シーツ... はがされちゃった...

「Your face... looks like a stray puppy or something!」

パピー？ 子犬？ なんで笑ってるのよおお

「Ok, I'll take you home」

あっ、グイッて引っ張られちゃ...って、抱っこされ...ちゃった...

イヤ...なわけじゃ...ないんだけど...

「You are so quiet」

静かって、何を言えればいいのよおお？

「Ah! You are thinking something」

何か考えてるって、考えるでしょおっ？ 頭の中ゴチャゴチャよおっ！

「Tell me」

言えて... だからなんて言えればいいのよおお？

私は、ふつう、こんなこと、こんな簡単に、だから、英語で言えないわよお。

あ... ある。

でも... 古語なのよお。

言わないよりいいかしら？

「えっと... If thou think'st I am too quickly won, I'll frown and be perverse an say thee nay」



ポカン？

あまりに早く心を与える女とお思いになるなら顔をしかめ意地をはりイヤと言いましょ...  
なんだけど、ちょっと言いたいことと違うのよお。

あ、これは？

「Thou mayst think my 'havior light」

はすっぱな女とお思いになるかもしれないわ...なんだけどお、何が言いたいかわかって！

「Bravo!」

拍手してる場合じゃなくて！

「ノー！ アイ、ワント...」

「Lady, by yonder blessed moon I swear! That tips with silver all these fruit-tree tops--」

ハ？ ロミオのセリフ？ つ、続ければいいの？

「えっと、O, swear not by the moon, the inconstant moon, ほ、ほんとに？

That monthly changes in her circled orb, Lest that thy love prove likewise variable」

「What shall I swear by?」

「ま、まだ続けるの？ Do not swear at all. Or, if thou...って、なんでこんなことしてるのよお？  
」

「Romie, you are so funny! Hahaha!」

「私は、真剣に... アイアム・シリアスッ！」

「That's why it's so funny!」

だからおもしろいって...

わかったわ！ もういいっ！

あっ... う...動けない... そ、そんなギョッて...

「Romie, I understand what you wanted to tell me.」

何が言いたいかアングスタンドしてる...

「And I know... You are not quickly won」

知ってる...そんなに...簡単に心を与える女じゃない...って...

「Dost thou love me?」

シェ、シェイクスピアで、きたわねっ。

「Nayッ！」

「You do」

な、なに、その自信ありげにユードウって？

「At least you love my...」

あっ、危険兵器が近づいてきた...

フラットシート、グイッて引っ張って逃げたわっ！

「Oh, Romie, Romie! Wherefore art thou Romie?」

なぜあなたはロミーなの？って、

「ビコーズッ、ユー・キャント・セイ・マイネームッ！」

「You can't either」

ウッ...

あら？

「What's that noise?」

あれは多分...

「スロー・クッカー、フィニッシュ」

「Believe me, love, it was the nightingale」

まだやってるのおおおっ!? しかも、それジュリエットのセリフだしっ！

「ナインチゲールじゃないわよ、イット・ワズ・スロー・クッカー！ ユア・ビーフシチュー！」

「Should I go and check right now?」

「イエス」

「Ok, I'll go and check」

あっ 素っ裸で立ち上がった... 見、見ちゃダメ！

「Oh! You turned away from my fat, ugly, old man's body!」

「ユー・アー・ナット・ファット、そんなには...ね」

「Romie...」

な、なに？ そんなまじめな顔で...

「Come here」

ど、どうしたの？

あ

ヤラれた...

ボタン

意識を取り戻して、服を着て、ベッドメイキングしてるの。

私、絶対こんな巨大なベッドは買わないわ、毎日こんなことしてたら腰を悪くしちゃうわ。

「Romie!」

な、なに？

「I need your help」

何が起こったの？

「I have no idea it's done or not yet」

んっと... できてるかどうかわからない？

なんで？ できてるじゃない！

あとは、こうやって浮いてる脂を取ればいいだけよ。

「What are you doing?」

何してるって、

「テイク、オイル」

「Why?」

やれやれ、これだから初心者は...って、私も最初はそうだったけどね。

「ドゥ・ユー・ワント・イート・オイル?」

「No」

「ほらね?」

「I see」

あとは、こうやって下の方からそっと...

「Looks good!」

そうね、あ... そうか、シチューとか煮込み料理って、出来上がって蓋を開けたときは、脂が浮いてて、下の方にお肉や野菜があるから... だから、わからなかったのね。

これは美香にも教えておいた方がいいわね。あの子、作るかしら？

さてと、味はちゃんとしみてるかしら？

小さいスプーンを出して...

そうね、いいんじゃない？

「How is it? Good?」

「えっと、トライ」

あ... ごめんなさい、私が味見した残りをそのまま口に突っ込んだわ。

「Good!」

「ね?」

「Yes!」

このスロークッカーいいわね。

私はやっぱり使わないけど、美香でもできるわ、ダニーでもできたんだから。

あ！ そうよ！

「ユー・キャン・クック！ アフター、アイ・ゴーバック・ジャパン！」

あ

そう...よね...

私... 帰るんだわ...

お、おねがい、何か言って...

黙って私のこと見てないで...

さっきみたいに... ふざけたこと言ってよ...

でないと...

私...

ただ黙って抱きしめないで... 何か言ってよ...

「だったら私が言う... Parting is... such sweet sorrow...」

別れは甘い悲しみ... ジュリエットはそう言うけど、甘くないわ... 現実...

「Romie... We still have times. You are still here. Don't think about tomorrow」

そうね... 考えなくてもわかってるもの...

私たちはずっと一緒にいられないって...

こうやって現実を突きつけられて、なんとかそれを受け入れて生きてきたんだもの...

あきらめることばかりだったわ、だから...

「アイ・ティーチ・ハウ・トゥ・クック」

笑って言えるわ。

「You must be a very strict teacher」

あなたも笑えるのね。

年をとるって悪いことばかりじゃないわ。

こうやって笑って、あきらめたフリができるもの。

そして、そのうち本当にあきらめられるときがくるのがわかってるから。

ビーフシチューだけってわけにはいかないわよね。

これで、簡単に作れるものって何かしら？

この説明書に載ってるのは初心者には無理よ。

あ、ポトフ！ そうね、野菜もいっぱい取れるし、キャベツなんてザクッと切ればいいだけだし

。

カレーは？ アメリカ人でカレーライス食べるのかしら？ カレー・ルーなんて売ってた？

「What are you thinking?」

洗い終わったのね。

「レシピ・フォー... 初心者って、あ、ビギナーズ」

「Sure! You are very serious about cooking」

「アトム・シ...」

「I know you are always serious!」

「イエス」

笑ってる。

こっちは心配してあげてるのよ？ 待って... 余計なお世話かしら...

だって私、あと二週間で日本に帰っちゃうのよ...

そのあと、この人が何十年生きるかわからないけど、そこまで考える必要ない？

そうよね... 私がいなくなった後、この人が何を食べようと私には関係なかったわ。

そうね... 私がここにいる間だけ、ちゃんとしたものを食べさせてあげることしかできないのよ

。

この二週間で私ができることって... あ、この人のお母さんのレシピを作ればいいんだわ。原点に戻ったわ。私、クッキングホームステイに来たのよ、恋をしに来たわけじゃないわ。できるだけあのレシピを作って覚えて帰ればいいんだわ。

「アイ・ドント・ティーチ・クッキング」

「Why?」

「アイ・メイク・ユア・マザーズ・レシピ」

「Well, if you want to, but, why did you change your mind?」

「アイ・ワント・メイク・ユア・マザーズ・レシピ、できるだけ、あ、アズ・マッチ・アズ・アイ・キャン」

微笑んでるつもり？

うまくできてないわよ。

男ってウソつくのヘタね、すぐにバレるのに。

女はできるわよ、自分にだってウソつけるもの。

でないと、やってられないことばかりだもの。

女の方が強いわね、子どもだって生んじゃうんだから。

そうよ、子ども生んだ女は強いよ。強くならなきゃやってられないことばかりだもの。

本当に今10代や20代じゃなくてよかったって思うわ。

「アイ・テイク・ア・バス」

でなきゃ、やってられないもの。

## 素直に

---

私ね、やっとわかったのよ、偶然にだけどね。

このシャワー、引っ張るところで水圧の調節ができるってことに。

いつも思い切り引っ張ってたからすごい水圧だったんだわ。

そしてね、わかってるのよ。

私は全然強くなんかないし、自分にウソなんかつけてないってね。

かっこつけちゃったけど、今も髪を洗いながら泣きそうなのよ、泣かないけど。

だって泣いてもわめいても、どうしようもないんですもの。

あと二週間で私は帰るのよ。

だからいいのかもしれないってどこかで思ってもいるの。

期限付きってことは、先がわかってるってことでしょ？

小説の最後のページを先に読んじゃって、結末はわかってるって感じ？

そういえば最近、もっと前から？ 本を読んでないわねえ、老眼になってからめんどくさくて。

それに、現実手いっぱい架空の物語なんて読んでる暇なんてなくなったわよ。

ハッピーエンドなんてないってわかったわよ。死ぬまで続くんだもの。

おとうさんと結婚したときは、ハッピーエンドだと思ったわ。物語って、そのあたりで終わるじゃない？

ところが先があるのよ、私みたいに自分でも平凡かなって思うような人生でもね。

おとうさんが突然死んで悲劇のクライマックス...で終わるわけでもないのよ。こうやって生きてるし。

最高のハッピーエンドがあるとしたら、ロミオとジュリエットよ。

あれは悲劇じゃないわ、だって最高に盛り上がってるときに、若いまま死ぬのよ？ しあわせだと思うわ。

あれで無事に結婚したとするでしょ？ 20年後とか30年後はどうよ？

素敵だったロミオはハゲで中年太りで、美しかったジュリエットもシワやシミに悩まされて、ロミオが浮気したりして大ゲンカしたり、倦怠期で口もきかなくなったり、こどものことで頭抱えて悩んだり。

ありうるでしょ？ そんな現実見ないで愛し合ったまま死ねたのよ、ハッピーエンドよ。

こうやって鏡に映ってる私、これが現実なのよ。

目のあたりをこうやって引っ張って、耳のあたりもキュッと引っ張ると、少しは若い頃の顔になるんじゃない？

でも、手を離すと、ほら、現実。

それでもパックする自分が哀しいわ、無駄な抵抗？ 現実逃避？ 逃げられないけどね。



ダニーは自分の部屋かしら？

この冷蔵庫とお別れするのは辛いわ、浄水されたお水が冷たくなって出てくるんだもの。  
二週間先だけどね。

ダニーがいないウッドデッキ。

これが本当の私の現実なのよ。

ウッドデッキは私の現実じゃないけど。

わかってるわよ...

本当は一生懸命自分に言い聞かせてるのよ。

本当は... ここに来てくれないかなあって思ってるのよ。

来てほしいわよ、あと二週間しか一緒にいられないんだから。

できるだけ一緒にいたいって思ってるわよ。

でも、一緒にいて...なんて言ったら、現実に戻るのがもっと辛くなっちゃう。

だから必死に我慢してるのよ、素直じゃないわ、わかってるわよ、美香には素直になりなさい  
って、

ちがう、素直じゃなくて、正直に言いなさいだったわ。悪いことしてウソついたときよ。

私は今、素直じゃなくて正直じゃなくて自分にウソついてるわ。

え...

後ろから... やめて... そんなに優しく... 抱きしめられたら... ウソつけなくなっちゃう...

「I love you」

ダメダメダメダメ、耳元でそんなこと言わないで...

必死に、必死に、我慢してるんだから！

だからあっ、お姫様抱っこしないで！

ほらっ、その目！

そんな目で見ないでよ！

このあと何するかわかるわよ！

ほら！

もうっ！ この人、大キライ！

ウソ...だけど。

「Good morning, again!」

アゲイン、そうね、さっきベッドの中で言ったものね。

いつもと同じようにコーヒーいれてる。

私もいつもと同じように朝食作ったわ。

いつもと同じように一緒に食べて...

これが現実って勘違いしちゃいそうよ。

「Do you have any plan for today?」

プラン？ そうねえ...

「Oh! Cooking! I was stupid to ask such a question!」

なにそれ？ じゃあ聞くけど、

「ドウ・ユー・ハブ・プラン?」

「No」

ほら！

「I just want to be with you」

この人... ビックリするほど素直だわ。

「オ、オーケー」

私は... 少しは素直になってるわよ。

今何してると思う？

散歩。

手をつないで。

高校生みたい。

おじさんとおばさんだけど。

「This is where I found you yesterday」

え？ なに？ 昨日、私を見つけた...

こんな近くだったの？

すごーく遠くに来ちゃったって思ってたわ。

なんでここに来たんだっけ？ あ、ダニーが怒って、私も怒って...

なんで怒ってたんだっけ？

「What do you think?」

なにを？

「ホワット?」

「Do you like this area?」

このエリアが好きか...

「イエス、ビューティフル」

「I like it, too」

そうね、だからあの家を買ったのよね。

家を買うときって、まわりの環境も大事なもの、ご近所の人たちとかもね。

「Most of people living here are lawyers, so we call this area Law Farm! Hahaha!」

ファーム？ 畑？ どこにあるの？

「It's not funny?」

おもしろいか？

「ノー」

「Ok! No problem!」

問題ない？ あ、そう。

「Shall we go back home?」

家に帰ろうか...

なんだか... いい言葉...

「イエス」

見上げたら、ダニーが微笑んでたから...

「アイ・ラブ・ユー」

なんだか言いたくなかったの。

でも、恥ずかしいから走っちゃったわ。

「I'll catch you!」

すぐつかまっちゃったけど... 走るの遅いのよ...  
でも...

道路の真ん中でキスするなんて...

どうかしてるぜ！ （古い？）

## 友だちからの電話

---

集中できないのよ。

ブレッドプディングを作ってみようと思ってるんだけど、食べたことも見たこともないし、それに... 料理してる時間をもったいないって思ってるの！ 信じられる？ 私はビックリよ！ そんなこと思ったこと一度もないわよ。

ゴミ出しのときに近所の奥さんにつかまっちゃって、くだらない噂話聞かされて、ああ、早く家のことしたいのに時間をもったいないと思ったことはあるわよ、何度もね。でも、料理してる時間をもったいないなんて一度として思ったことはないわ。

なんでそんなこと思ってるかって、ダニーと一緒にいたいと思ってるのよ。

だってあと二週間しかないじゃない？ 一分でも一秒でも長く一緒にいたいって思ってるの。なんていうの、こういうの？ 恋ボケ？ わからないけど、公共の道路の真ん中でキスしゃったり、

これが日本だったら、うちの近所だったりしたら、もう住んでいられなくなっちゃうわ。

まあ、そばにいたいと思っても、ダニーは今電話中でリビングにいるけどね。

帰ってきたら電話がかかってきたの。だから私はキッチンに来たのよ。

それで、ブレッドプディングでも作ろうかと思ったんだけど、集中できないのよ。

バカみたいだわ。

「Gosh...」

あら、頭振って苦笑いして来たわ。

「It was from one of my friends」

ああ、友だちからだったのね。

そうよね、いるわよね、友だち、その人たちは、これからもダニーと一緒にいられるのよね...

「He was totally panicked」

パニック!?

「シ、シリアス・プロブレム？」

「Well, for him, yes, but what can I do?」

彼にとってはシリアスで？ 何ができるだろうか？

「ホワット・プロブレム？」

「Never mind」

気にするな...

そうよね... ダニーの友だちのことですものね... 私は関係ないのよね...

ダニーにはダニーの現実があって、その中に私は入れないのよ...

「What are you doing?」

なんだか...

「ネバー・マインド」

「What?」

また現実をビシッと顔にたたきつけられた気分よ。

「Romie?」

「アイ・ネバー・マインド・ユア・フレンド、ビコーズ・イツ・ユア・フレンド」

「Romie, Why are you upset?」

「ネバー・マインド」

キッチン飛び出して、自分の部屋に入っちゃった....。

アゝ —————ッ！

やってることが子どもだわ————っ！ すねてるんだもの————っ！

私はいったいいくつよ？ もうすぐ50よ！ 50！

これじゃまるで5歳児じゃない！ 50の顔した5歳児なんてちっとも可愛くないわ！

「Romie」

あ

「May I open the door?」

どうしようどうしよう、なんか恥ずかしくって...

「Should I kick the door down?」

ド、ドアをキック？ 壊れちゃうわよ！

「ノ、ノー、オ...オープン」

「Thank you!」

入ってきた... 顔見れないけど...

「I found you!」

ああ... ごめんなさい... 私、本当に子どもみたいに、すねたりなんかして...って、英語でなんて言えばいいのかしら...

「Can I tell you a stupid story?」

ステューピッド... バカ... 私のこと?

「John, he was a guy who called me, you know」

ジョン...

「He has 5 kids」

5人も! 奥さん頑張ったわねえ。

「And his wife is pregnant now, again」

またっ? すごい...

「They are Catholic」

キャソ... なに?

「Ah, ne... Well, last night, she had to go to hospital, and she's staying there」

ホスピタル... 病院に行って... ステイしてる...

「She has to stay at least for a week or more」

妊娠中毒症かしら? たしか斜め向かいの奥さんもそれで入院してたことあったわ。

でも、なんでそんなことを私に? ていうか、ダニーに?

「Their youngest daughter is the 1st grade, she is going to join summer festival or something tomorrow」

いちばん下の娘が... サマーフェスティバルにジョインする...明日...

なんでこんなに長い話なの?

「She has to bring some kind of homemade...Ah... cake or cookies or whatever」

ホームメイドのケーキかクッキーを持っていかなくてはならない...で、いいのかしら?

「But her mom can't make anything because... you know」

でも、ママは作れない... そうね、入院してるもの...

本当に長いわね、この話...

「So the daughter is very upset and crying, you know, 6 years old girl」

6歳じゃねえ、理解できないわよねえ。

「Then, my friend called me to ask for making homemade... stuff」

ハ? ダニーに? 作ってくれ? 聞き間違い?

「Actually not me, Cathy」

ハ？

「He didn't know Cathy and I divorced」

離婚したのを知らなかった...

「ホワイ？」

「I forgot to tell him」

言うのを忘れた？

「ホワイ？」

「Because it's just one month ago, and I couldn't tell all my friends!」

あ、そうよね、まだ1ヵ月だものね...

「So I can't help him!」

しかたないけど... その女の子、かわいそうね...

「Most of people are in summer vacation, and he's panicked for his lil girl」

5人も子どもかかえて、奥さん入院しちゃって、いちばん下の子が... 大変ねえ。

「Funny...」

何がおもしろいの？ かわいそうじゃない！

「He didn't know Cathy couldn't make Homemade cakes or such kind of things」

なにその両手でVサインをクイックイッて...

え？ ホームメイドを作れない？ キャシーが？

キャシーって... ミステリーだわあ。

「That's all!」

その子... どうするのかしら...

もし美香が6歳で、楽しみにしてたお祭りに出られないとしたら...

考えただけでも涙が出そう... もう27だから考えなくていいんだけど...

あら？ でも... けど...

「イエス... アイ・キャン...」

ハ？って顔してるわ。

そ、そうよね、出しゃばりすぎよね、ダニーの友だちで私は関係ないのよ。

「Would you?」

ン？

「Would you make something for his daughter?」

「イ、イズ・イット... オーケー？」



「Great! Thank you! Romie, thank you so much!」

まだ何も作ってないんだけど...

「May I call John and tell him about it?」

でも、本当に...

「イズ・イット・オーケー?」

「Sure! You are an angel!」

エンジェル... ずいぶん年くってるエンジェルだわ...

あ

ちょっと

ケーキって... ていうか、お菓子って...

目分量じゃダメなのよ!

レシピはあるのよ、日本にね。美香が小さいときは、おやつは全部手作りしたんだもの。虫歯にならないようにね。小学生になったら、隠れて買い食いするようになって、私の努力をすべて無にしたけどね、今頃後悔して歯医者に通ってるけどね、いい気味だわ。美香の虫歯はどうでもいいのよ! どうしようどうしよう...

あ

ある

ダニーのお母さん! ヘルプ・ミー!

## バナナブレッド

---

この流れだとブレッドプディングってことになるんだけど、それはダメ。  
作ったことも見たこともないものを作るのは危険すぎるわ、何が正解なのかわからないもの。  
ヘンなもの作っちゃったら、その女の子がかわいそうよ。  
えっと... 私が知ってるものって...  
え？ なにこれ？  
Rice pudding... ライス... ご飯でプディング？  
生のお米に、ミルクに、お砂糖と卵とレイズンとバニラ...  
ウッ... 想像しただけで吐きそう...  
同じお米使ったお菓子でも、おはぎならいいけど、これは... ムリッ

「Romie! John was really... Oh... What' wrong with you?」  
これ見て、これ...  
「Ah, rice pudding! Are you gonna make this?」  
「インポッシブル！」  
「Is it hard to make?」  
「イージー、でも... アンビリーバボー」  
「What?」  
「アイ・キャント・ビリーブ・ライスプディング！」  
「Can't believe? What do you mean?」

わからないかしら、お米を主食とする日本人の気持ち...  
たとえば... あ！

「イマジン！」  
「John Lennon?」  
ジョン・レノンの曲じゃなくて！  
「ユー・イマジン！」  
「Me?」  
「イマジン、えっと、キャン・ユー・イート・ステーキ...」  
「You mean... steak? I love it!」  
「ノー！」  
「Because... It causes heart attack?」  
「そういう意味じゃないの！ イマジン！ ステーキ・イン・ミルク・シュガー・バニラ！」  
あ... 想像してるわ...  
「キャン・ユー・イート？」

「No」

「ね？」

「So rice pudding is like a steak in milk, sugar and vanilla for you」

「イエス」

「Ok! No rice pudding! Just forget it!」

「でも、アトム・ソーリー... イッツ・ユア・マザーズレシピ」

「You don't have to be sorry. It's not my favorite anyway」

あら？

これは... 作れるわ...

バナナブレッド！

作ったことあるもの、何回も作ったわ。

ここに書いてある分量で作れば、ちゃんとできるわ！

材料は全部あるのよ。

ベーキング・ソーダもベーキング・パウダーも、封を開けてないのが棚の中にあったわ。

小麦粉も卵もあるし、バニラ・オイルもあったわ、新品のが。

ダニーのお母さんはクルミを入れてたみたいだけど、クルミがないのよ。

それに、私はクルミは入れないの、バナナの味をジャマしちゃう気がするから。

サワークリームも入れるって書いてるけど、ないし、私は入れたことないわ。

それでも作れたから、これもなくても大丈夫ね。

もちろんバナナもあるわ、朝のヨーグルトサラダのために一房買ってあったの。

ただ、バナナブレッドに使うバナナは黒くなったくらいが甘味と香りが出るの。

ここで裏ワザを使うわ。電子レンジでチンよ。ただし、いっきにやっちゃダメ。

10秒くらいずつやって様子を見るの。バナナは温めると甘味が増すのよ。

卵は黄身と白身に分けて、白身をホイップしてメレンゲを作っておくの。

あ！ あれが使える！ ほら、このミキサー！ メレンゲはあなたにまかせたわ！

今は手でやってる時間がないの！

できたわ！

粗熱が取れてきたからホイルに包んで完成よ。

バナナブレッドは作ったその日じゃなくて、次の日に食べるのがいいのよ。

しっとりとして味と香りがしみこむの。だから、明日持っていくにはピッタリね。  
念のために4本作ったわ。だってお祭りってなんでも大量に作るでしょ？  
美香の幼稚園のバザーのときなんて、大きなお鍋に豚汁作って、炊飯器何度も稼働させて、  
大量のおにぎり作ったもの、無理やりバザーの係にさせられたときだったわ。  
よくやったわね、私も。若いからできたのね。

「Smells so good!」

あ、すっかり忘れてた、いたんだったわ。  
私がつってる間なにしてたのかしら？ 見てただけ？ そうね、なにかできるわけじゃないもの  
。

えっと、持って行っていいって...

「え〜... あ、ブリング、ユア・フレンド」

「Thank you!」

はあ〜、よかったああ、ダニーのお母さんのおかげだわ。

「I guess one is enough」

1個でいい... そうなの？ あ、でも、

「フォー、ユア・フレンズチルドレン」

「That's a good idea! They'll love it. But... two is enough」

他の子には2個でいい... べつに3個でもいいんじゃないの？

まあダニーの友だちの家だから、ダニーがそう思うなら、そうなのね、きっと。

あら、1個余っちゃった。

「Would you come with me?」

え？

「John said he wants to see you and say thank you」

ダニーの友だちのところに行く... でも...

「ユアフレンド、ニード・バナナブレッド」

「Yes?」

「ブリング・バナナブレッド、オンリー」

「Don't you want to see my friend?」

会いたくないのか...って、会いたくないとかそういうのじゃなくて...

なんて言えばいいのかしら...

「Don't worry, he is a nice person」

心配してるわけじゃないんだけど...

「えっと... ユアフレンズ・ドーター・ニード・バナナブレッド、だから、ブリング・スーン」

「So you don't want to come」

ドンド・ワントじゃないんだけど...

「アイ・ジャスト、ハッピー、トゥ・ヘルプ・ユアフレンド」

なんて言っているのかわからないのよ...

「Ok, I'll be back soon」

ダニーがバナナブレッド持って出ていく後姿見ながら...

ホッとしてるの。

たしかにさっきは... すねちゃったけど、ダニーの現実にズカズカ入りたかったわけじゃないの。

淋しかったのよ、私が知らないダニーの現実があることが。あってあたりまえなんだけど。

でも、そこに私は入っちゃいけないのよ。入れないもの、私はダニーの現実じゃないわ。

それに、そのお友だち、ダニーが離婚してたことを知らなかったんでしょ？

そこに私？ クッキング・ホームステイしてますって？ キャシーもいないのに？

奥さんが入院して、娘さんがお祭りに持っていくお菓子がなくてパニックしてたところに私よ？

むこうだってどんな顔しているのかわからないと思うわ、正直それどころじゃないと思うの。

迷惑かけちゃうわ、結局、ダニーに。

私だって、ほぼ50年生きてきたんだから、それくらいはわかるわよ。

多分... さっき私がすねてたから、ダニーが気を使ってくれたのね。

それにしても...

このライスプディング...

いちおうアメリカの料理だから覚えた方がいいのかしら？

でも、おそらく絶対一生作らないと思うわ。

庭をね、グルッと見て回ってるの。

いつもはウッドデッキがある方しか見てなかったわ。

芝生がきれいに敷いてあって、木がところどころにあって素敵なのよ。

でも、この裏庭... レンガ造りの通路のところどころに四角いスペースがあるけど、

雑草だらけだわ。雑草の間から花が少し見えるけど、ヒョロ〜ツとして、肥料不足なのね。

あら？ これってラベンダーじゃない？ ああ、いい香り！ ラベンダーだわ。

うちの庭にも植えてるわ、こんなに広い庭じゃないからチョコッとだけなんだけど。

あら？ ダニー？ 帰ってきたのね。

「Romie!」

なんで叫んでるの？ なにかあったの？

あれ？ いないわよ？

「Romie!」

え？ なんで道路走ってるの？

「ダニー？」

「Oh! Romie!」

戻ってきた。

「Where were you?」

「えっと、あっち」

「Backyard?」

「とにかく、あっち」

「I've thought you ran away again! Hahaha」

逃げた...と思った？

失礼ね！ 逃げないわよ！ 迷子になるし...

「Oh, you found lavender」

「これ？ イエス、ほら、いい匂いよ」

「Hmm... I love lavender」

「ミー・トウ」

なんだか...

こういう... 小っちゃなひとときが... 好きよ。

ダニーが言うには、多分ね、多分そういうことだと思うんだけど、

お友だちも、その娘さんもすごく喜んだんですって。

今その話をしてるの、ちょっと早口になってるから、詳しくは聞き取れないんだけど。

「Oh! I almost forgot! Jenny...」

「ジェ...ニー？」

「My friend's youngest daughter」

「ああ！」

そういえば、さっきからジェニジェニ言ってたわ、聞き流しちゃってた...

「She asked me to give you this card」

ダニーがズボンの後ろポケットから出したのは、小さな画用紙を二つ折りにしたもの。

「イツツ... フォー、ミー？」

「Yes」

開いてみたら...

絵が描いてあるわ... 黒い髪で... 羽が生えてて、頭の上に輪っかがあるから天使ね。

字も書いてある...

子どもの字ね、フッフ。

“Thank you, Hiromi. My angel! xoxo Jenny”

ひろみて、ちゃんと書いてある...

私の天使だって...

「よかった...」

この子を、ちょっとでも助けてあげられて...

泣けちゃう... よかったわ...

「I'm proud of you」

ン？

「You saved my friend from crisis,, and saved me」

救ったって... そこまでのことじゃないわ、だって、

「オンリー・アイ・キャン・ドウ、イズ、クッキング」

なに？ その謎めいた笑みは？ なによ？

「May I have some?」

バナナブレッド？ 一個残ってたやつ、いいけど、

「ナット・トゥデー、ユー・キャン・トゥモロー」

「Why?」

しっとりして味がしみるって、なんて言えば...

「あっ、もう食べてる！ ユー・イーティング！」

なにその、ヘッヘッへみたいな顔！ 子どもみたい！

「It's really good!」

そりゃそうよ、だって、

「イツツ・ユア・マザーズ・レシピ」

ちょっとアレンジしちゃったけど、基本はそうよ。

「You know what?」

「え？ ホワット？」

「My mother had never made banana bread」

え？ ちょ、ちょっと待って、マザーはバナナブレッドをネバー作らなかった？

「ウツソ〜、だって、レシピ、ヒア、ユア・マザーズ」

「My father had an allergy to bananas」

アレジー？ アレ...アレ... アレルギー？ バナナのアレルギー？ そんなのあるの？

「So my mother didn't make banana bread, even after my father died」

「じゃ、なんで、ホワイ、レシピ、ヒア？」

「I don't know, maybe she just wanted to make someday」

そうね... いつか作ってみようと思って、結局作らないものってあるわよね。

「I love banana bread」

「あ、そう」

「I had to buy banana bread at café or bakery」

カフェやベーカリーで買った... あ、そう。

「So this is the first homemade banana bread for me」

初めてのホームメイド...

「あっ、そうなの？」

「This is the best banana bread I've ever had」

「それは、ビコーズ・ユア・マザーズ・レシピ」

「I told you, I've never had my mother's, it's yours」

まあ... そうだけど...

「I must confess...」

コンフェス... 前も、ジュリエットのセリフで、あ、思い出した！ 白状するとか告白よ！

「I wanted to keep one for me, so...」

ひとつを自分のためにキープしたかった...

あっ！ だから！ 2個でいいとか、なんかよくわからないこと言って、そういうこと？

「Yes」

私、何も言ってないけど？

「ユー・アー...」

「I know! Childish! Right?」

チャイルデッシュ... 子どもじみた...

えっと...

私もあなたのこと言えないけど...ね。



静かな夕方。

ダニーはソファに横になりながら本を読んでいるわ。

私はコーヒー飲みながら窓の外を見ながらボーッとしてるの。

いいわね、こういうなんともない時間。

さすがにバナナブレッド4個も作ったら、ちょっと疲れたわ。

昔はあれくらいなんともなかったのにねえ。気持ちは変わらないのに、身体は違うのよ。

なんていうの？ 両方がピタッとこない？ あ、フィットしない？ そんな感じね。

夕食何にする？ ゆうべはビーフシチューだったから、あっさりしたものがいいわね。

お魚は... あ、もうないわ。そろそろスーパーに行った方がいいかしら？ でも、お肉はまだあるのよ、

あ、お野菜がなくなってきてるわ、やっぱり行った方がいいわね。

えっと、お魚がないから、チキンか豚肉？ 本当はねえ、梅肉和えなんかさっぱりしていいんだけどねえ。

梅干し持って来ればよかったわ、そしたら梅干しドレッシングも作れたわ、はちみつと梅干しをたたいたのとお塩で和えれば、きゅうりでもなんでもいくらでも食べられちゃうのよねえ。持ってくればよかったわ、失敗したわあ。

「You are thinking about cooking」

「え？」

「Bingo!」

なっ... なによ、まるで私がいつも料理のことしか考えてないみたいに、たしかに、今は料理のこと考えてたけど、でも、このくらいの時間から考えないと間に合わないのよ！ 他の主婦にも聞いてみなさいよ！ みんなそう言うから！

「Which do you love?」

ハ？

「Me or business?」

身体クネクネさせて...

オカマの真似？ 突然どうしたの？

「ア... ア、ア－ユー・オーケー？」

「I was just teasing! Hahaha」

な、なに、どうしたの？

「I'm sure you never said such kind of things to your husband」

そんなことを？ 夫に言ったことがない？と確信する？

そんなこと？　なんて言ってたっけ？　ホイッチ、どっちが、ラブ、ミーかビジネス...  
なにそれ？

「ホワット？」

ニヤッと笑う...だけっ？　ど、どういうこと？　なに？　ミーかビジネス、どっちが...  
あ！　仕事と私とどっちが大事なの!?って、それ？　アメリカでもあるわけ？

それを私が言ったことがないと...確信する...　　ないわねえ。

「ノー」

「See？」

言わなきゃダメだったかしら？　女として...　何か欠落してるってこと？

「And... I'm sure you had a very good husband」

そうね...　まあ、たしかにいい人だったわ、いつもいいわけじゃなかったけどね。

「I was a terrible husband」

ハ？

「I was very busy... and came back home very late」

えっと...　突然...　どうしちゃったの？

「I believed I was working for Cathy」

キャシーのために働いていると信じていた...　それはそうよね、扶養義務があるもの。

「But truth was... I just didn't want to come back home」

しかし真実は...　家に帰りたくなか...　え？

「ホワイ？　あっ...　ッ、ソーリー」

そんな立ち入ったこと聞くなんてバカバカバカ！

「Because...」

答えるの？

「Well, Cathy was very attractive, outgoing, aggressive in a good meaning」

良い意味で...しか、わからなかったわ。良い意味でってことは、ほめてるのよね？

「She was very frustrated for... being my wife」

奥さんでいることに...　フラストレーションがあった？

「She said I'm boring」

彼女は言った...　僕は...　ボウリング？

「I know, I am」

知っている、僕はそうだ...　ボウリングだ？

ボウリング？　あのボウリング？　ボウリングが好き...ってこと？

でも、アイアムって言ったわよね？　僕はボウリングだ？　なに？

私の頭の中 ?????????? こんな感じ。

「She always blamed on me, she couldn't choose which shoes she should put on,  
She said it's because of me, It's raining, because of me! Haha...」

何言ってるのかまったくわからないんだけど、もしかしてわからなくていいのかも。  
この人、ただしゃべりたいだけなんじゃない？ ほら、墓地でもそうだったじゃない？  
いいわ、わからないけど、聞くだけはできるわ、本当に聞くだけなんだけど。

「Now I'm making you bored, right?」

ボアがわからないけど...

「ダニー、アム・リスニング！ トーク！ キープ！ トーク！」

「Oh, Romie... Hahaha」

なんでそんな情けない顔して笑うの？

もしかして...

「ダニー」

「Yes?」

まだ...

「ドウ・ユー・ラブ・キャシー？」

「I did, but now, no」

愛していた、今はノー...

それじゃ...

なんで急にキャシーのことを話し始めたの？

「Oh! Romie! Don't misunderstand!」

誤解しないでくれ？ なにを？

「ホワット？」

「What I said to you is true, true from my heart!」

僕が言ったことはtrueだ、ハートから... 言ったことって... どれ？

「ホワット...じゃなくて、ホイッチ・ユー・セイ？」

「I said... I love you」

「ああ！ それ！」

「Yes」

「それなら、I believe thee!」

どうして... 私って... 肝心なときに... 古語しか出てこないのおっ？

ほら、笑ってるしいっ。

「ノー・ラフ！」

「I'm not, I'm just... I love you」

「あ...あ、オ、オーケー、ミー・トゥ...」

な、なんで、愛の告白しあってるの？ 何の話してたんだったっけ？

「あ！ キャシー！」

「Oh, you have something to ask me about Cathy, don't you?」

キャシーについて聞きたいこと？ そりゃいっぱいあるわよ、ミステリーよ。

なんでキッチン用品があんなにいっぱいあって、ひとつも使ってないのかとか、

シー・ネバー・クックって、どういうことかとか... あ、なんで私のこと受け入れたの？

「You are thinking!」

「イエス、あ、でも、ナット・アバウト・クッキング！」

「I know! Hahaha」

「ホワイ・キャシー、受け入れる？ アクセプト・ミー？」

「I don't know, but... That is Cathy」

わからない... でも、それがキャシーだ... 答えになってるようでなっていないわね。

「Cathy always changes her mind... like that」

指パチンって...

「ホワット、これ、パチン？」

「Well, she changes her mind very quickly」

すぐに気が変わる... ああ、なるほどね！って、そんなあ！ 受け入れられた私はどうなのよ!?

着いたら迎えがなくて、ご主人は知らなくて... あら？ でも、それで...イヤなことってあった？ ない。

「ノー・プロブレム！」

「What?」

「アィム・ヒヤ、ビコーズ・キャシー、だから、アイ、サンキュー・キャシー！」

え... な、なに？ なんで黙って見てるの？ なにかヘンなこと言った？

「You are...」

君は...

「You are...」

君は...

「You are...」

君は... なにっ？

「ホワット？」

「I love you」

「アイ・ノウ！」

なんでブツで嘔き出すのおっ？

「Ok, you know I love you. So do you love me?」

「イエスイエス！」

なんでまた笑うのよっ!?

「Oh, Romie! You never ever bore me!」

その、ボアがわからないのよお！

あ！

美香！

ダニーにパソコン借りたわ。

「アイ・ニード・フェイスブック」って言ったら、美香にハローって言ってくれだって。

今、日本は何時？ 夜中の... 2時か3時？ 寝てるかしら... そうね、でも、いちおう...

あ、いた！

なにこんな遅くまで起きてるのよ？ 起きててくれてよかったけど。

ひろみ：mika!

美香： おかあさん、元気してた？

ひろみ：kikitai koto ga arunoyo.

美香： なに？

ひろみ：skype, please

美香：チョーウケる！

ひろみ：hayaku!

美香：okeydokey

なに今の？ オケイドケイ？

「ハ～イ！ おかあさ～ん！」

またのんきに手なんか振っちゃって...

「美香、ボアってなに？」

「ボア？ 歌手の？」

「歌手？ 歌手じゃないと思う」

「突然ボアって言われてもさあ」

「あのね、さっき、ダニーがキャシーのことを話し始めたのよ」

「へえ」

「突然なのよ、本当に突然、それでね、奇妙なこと言い出したのよ！」

「なに？」

「キャシーがダニーを、ボウリングって言ったんだって」

「ボウリング？」

「そうなの！ それでね、たしかに僕はそうだって言うのよ！」

「それってさ... boringじゃないの？」

「そうよ、ボウリング、僕はボウリングだって、おかしいでしょ？」

「おかあさんが言ってるのは、球投げてピン倒すやつでしょ？」

「そうよ！ さっきからそう言ってるじゃない！」

「それ全然関係ないし」

「え？ 違うの？」

「boringは退屈って意味だよ」

「退屈？」

「キャシーはダニーさんのことを退屈な人だって言ったんじゃないの？」

「ダニーが退屈？ ぜんぜん退屈じゃないわよ？」

「知らないけど、そう言ったんじゃないの？」

「本当に退屈じゃないのよ！」

「じゃ、いいじゃん」

「それじゃ、僕もそう思うって、自分のことを退屈だって思ってるのかしら？」

「じゃないの？」

「違うわよ！ ぜんぜん退屈なんかじゃないわよ！」

「私に力説されてもさあ」

「ちょっと待ってて、私、ダニーに言ってくるから」

「てか、私もう寝るし」

「え？ あ、そ、そうよね、そっちは夜中だったわね」

「じゃ、もういい？」

「そ、そうね、あっ、待って、ボアは？」

「ボア？ ああ、最初に言ってたやつ」

「いっつも言うのよねえ、さっきも言ってたの、ユーネバエバボアミー...だったかしら？」

「ああ！ わかった！ 同じだよ！」

「何が？」

「boringとbore」

「同じ？」

「boringは退屈なって形容詞で、boreは退屈させるって動詞だよ」

「美香...」

「なに？ え〜っ？ 泣いてるのお？」

「だって、おとうさんが見たらどんなに喜ぶだろうって思って...」

「ハア？」

「英語の形容詞とか動詞の説明をちゃんとできるなんて... さすがおとうさんの子ね」

「これだもん、ダニーさんがYou never ever bore meって言うよね」

「え？ な、なんで突然ダニーなの？」

「なんでもない」

「なによ？」

「だからあ、ダニーさんはおかあさんといると退屈しないって言ってるんだよ」

「そういう意味だったの？」

「おかあさんといると楽しいんじゃないの？」

「そ、そう？」

「知らないけどさあ、そう言うってことはそうなんじゃないの？」

「私といると楽しい... フフ、そうかしら」

「どこまでいったの？」

「なにが？」

「ほら、この前の好きって話」

「ど、ど、どこ...まで...って...」

「へえ、けっこうイイカンジなんだあ」

「ななななにも言ってないでしょ！」

「へえ、かなりイイカンジなんだあ」

「だだだだから、なにも言ってないでしょ！」

「いいじゃん、二人とも楽しいならさ」

「二人？」

「ダニーさんとおかあさん」

「ああ、そういうことね」

「なんか言われたりした？」

「なにを？」

「好きみたいなさ」

「え、ま...まあ...ね」

「マジ？ なんて？」

「え、だ、だから... アイ...ラブ...ユー...って...」

「マジ？！ まだ一週間しか経ってないのに？」

「ちがうわよ、一週間じゃないわよ！ ほら、この前美香と話したすぐあとよ！」

「ウッソーー！」

「ウソじゃないわよ！」

そうだわ... そして、私は吐いちゃったんだったわ...

「ダニーさんて意外とヤルじゃん」

「意外？」

「だって、見たカンジ、そんなに情熱的ってカンジじゃないじゃん」

「なに言ってるの！ 風と共に去りぬなんだから！」

「なにそれ？」

「え... な、なんでもないわよ」

言えないわ... いくらなんでも、美香には... 絶対！

「いいけど、楽しくやってるみたいだし」

「ま、まあね」

「それじゃ寝るね」



「あ、そうね、おやすみなさい」

「ダニーさんによろしくって言っというて」

「よろしくって何て言えばいいの？」

「Mika say Hi to you だよ」

「ミカ...セイ・ハイ・トゥ・ユー...ね、あ、ダニーも美香にそう言ってくれって言ってたわ」

「わかった、じゃね」

そうだったのね...

ボウリングって... 退屈って意味だったのね。

でも、違うわよ！ ダニーは退屈なんかじゃないわ！

あ、パソコン返さなきゃ。

「How's Mika doing?」

「あ、ミカ・セイ・ハイ・トゥ・ユー...だったわよね？」

「Oh, thanks」

にっこり笑ってるけど、ダニー、あなた、間違ってるわ。

「ダニー」

「Yes?」

「ユー・アー・バッド」

「What? Am I? Did I do something wrong?」

「ユー・セイ・ユー・アー・ボウリング」

「Bowling?」

「イエス」

「Ah... Do you want to go and play bowling?」

退屈に行って遊ぶ？ あ、退屈だからどこかに行って遊ぶ？ そんなことないわよ！

「ノー！ ユー・アー・バッド！」

「Ah.... Well....」

なに頭かしげてるの？

「Ah.... Ok, go on」

「ゴーオン？」

「Ah... Ah! Keep. Talk」

ああ、話し続けろってことね。

「キャシー・イズ・バッド、トゥ」

「Cathy?」

「イエス、ユー・セイ・キャシー・セイ、ユー・アー・ボウリング」

なに？ 眉間にシワよせて、何を考えてるの？ でも、間違ってるものは間違ってるのよ！

「Ah! Boring!」

そう言ってるじゃない！

「イエス！」

「Now I got it. So? Keep. Talk」

「ユー・ネバエバ・ボウリング！」

なに？ 黙っちゃって、ビックリした顔？ 通じてない？

「ユー！ ネバエバ！ ボウリング！」

なんで何も言わないの？ 黙ってジーーッと私のこと見てるだけ？ わからない？

「ユー、あ！ ユー・ネバエバ・ボア・ミー！」

あら？

なに？

立ち上がって...

こっちに...

私のこと... 見てる...目に... 涙...が...

抱きしめられちゃった...

ギュッて...

わかってくれたのね。

美香、ありがとう。

## チキンスープ

---

夕食はササミに塩・胡椒して白ワインちょっとかけてチンしたのを細く裂いて、ニンジンやセロリやキュウリを千切りしたものと一緒にサラダにして、半解凍した豚肉を薄く切ってキャベツの間に挟んで、コンソメと塩・胡椒で蒸し煮にしよう...と思って、下準備は終わったんだけど、頭痛がするのよ。イブ飲もうかしら... もう少し我慢してみよう... なんだかダルいわ... 風邪？ 熱はないみたい... 蒸し煮を作ったら、イブ飲んでおこうかしら...

あ...

めまい...

ちょ...ちょっと立ってられないわ...

はああ...

一回座り込んだら立ち上がれないわ...

「Romie! Are you ok?」

あ... ダニー... えっと... 頭痛って...

「ヘッド...痛いって...ペイン...」

「Headache?」

「ヘデ...?」

「Can't you stand up?」

なに... スタンドアップ... 立つ...

「ノー... めまいって... えっと... マイ・ブレイン... シェイク...」

今... 英語... ムリ... 日本語だって...ムリ...

「You have a dizzy」

なに...

「You should go to bed」

「イ...」

エス...って言う前にお姫様抱っこ... 助かるわ...

ベッドの中... 頭がガンガン... 目をつぶっててもクラクラ...

「I have Tylonel. Do you want me to get some?」

音にしか... 聞こえない...

やっぱりイブ飲もう...

「ウォーター...」

「Water?」

「ウォーター...」

「Just a sec」

はあああ もう...

目を開けたら... めまいはもうなくなってる... 頭痛はまだうっすらするけど。

でも、身体が重くて動く気になれないわ...

たま~にあるのよね... たま~にだけど。

その、たま~に...が、なんでアメリカでなのお... はああ

そういえば... 私が、たま~にこんなになったとき、美香とおとうさんが鰻丼食べてたわ。

お寿司のときもあったわよ。それじゃまるで私がいなくてご馳走が食べられるみたいじゃない？

私だって鰻丼やお寿司食べたかったわよ、でも、そういうときは食欲ないから食べられないのよ

。

美香が何か食べる?って聞きに来るけど、お粥って言ったって、どうせ作れないのはわかってるから、

いらないって言うのよ。そういうときは私がもう一人いればいいのにつくづく思うわ。

ちょっとよくなって、自分でお粥炊いて梅干しで食べるの、虚しいわ。

そういうときって... 私ってなんなのかしらって思うのよ。

機能しないと、なんていうの? 厄介者? そこまでじゃないけど、ただのお荷物?

主婦ってなんなのかしら? そんなたいそうなことじゃないけど...

でも、そのうち家事もだんだんできなくなっていったら、本当にただのお荷物だわ。

老人ホームに入れられちゃうのかしら?

ああ、ダメだわ、具合が悪いときに考え事すると暗~くなっちゃうの。

はあああ... まだ... 眠いわ...

ン？ あ... 頭痛がなくなってる...

でも、まだ身体がダルい...

あ...

ダニーの夕食...

きっとピザでもとるわね。それがマック？ ステーキが好きって言ってたからステーキ食べに行くかも。

いいわよ、好きにしてちょうだい。

私がダウンしたときはご馳走を食べられるチャンスよ。

「Romie?」

あら？

「イエス？」

「May I come in?」

「イエス」

心配そうな顔って、こういうのを言うのね。

「Are you feeling better?」

「イエス」

「Oh, good」

「でも、アム・ソーリー、アイ・ハブ、気力がないって？ ノー・パワー・クッキング」

「Oh, Romie! Don't think about cooking!」

「ユー・キャン・イート・ビクマック、ピザ、ステーキ」

「Don't worry about me! I can take care of myself. Just, take a rest! Ok?」

「オーケー」

「Do you have an appetite?」

ン？

「Ah... Can you eat something?」

何か食べられるか... お粥 どうせ作れないから...

「ノー」

「How about chicken soup?」

チキンスープ？ なんの話？

「ホワット？」

「Just a sec」

チキンスープなんて作ったかしら？ ササミのサラダは作ろうと思ってたけど...

インスタントスープ？ ムリっ、インスタントはムリ、すごくクセがあるんだもの。

あら？ 持ってきたわ。香りは... 悪くないわ、むしろ、いい香り？

「You don't have to, but... just... Try」

澄んだスープの中にチロチロッと... これって私が裂いておいたササミ？

香りが... なんだろう、これ... 柑橘系... レモン？ でも... まさか...ね。

「ドウ... ユー・メイク・イット？」

「I'll explain later, just try」

とにかくトライしろ...と。

どれ、チョピッとね。

あら？ さっぱりしてる、ふつうのよりは...ってことだけど。

なんだろう、ちょっとほのかに酸味が... やっぱりレモンの香りがするのよね...

「Is it good？」

「イエス、でも... ホワイ？」

「What do you mean why？」

「ホワイ、チキンスープ？」

「because you are sick」

なぜなら... 病気だから... で？

「ホワイ、アム・シック、ホワイ、チキンスープ？」

ハ？って顔してるけど、私もハ？なんだけど。

「Don't you have chicken soup when you are sick in Japan？」

チキンスープを飲まないのか、病気の時、日本で...

「ノー」

「What do you have when you are sick？」

お粥

...って、なんて言えばいいの？

「えっと... ライス...スープ？」

「Ah, ok. Rice, sure, rice」

大丈夫よ、あなたにお粥作れなんて言わないから。美香だって作れないから。

私は誰にもお粥は期待しないのよ。

「Do you have some more？」

そうねえ... せっかく作ってもらったから、食べないと悪いわよねえ。

ていうか...

「ドウ・ユー・メイク・チキンスープ？」

「Actually you made it」

ハ？ 私が作った？

「I found two kinds of chicken soup in the freezer」

二種類のチキンスープをフリーザーで見つけた...？

「You put the note, one was Chicken soup A and the other was J」

私がノートを？ チキンスープAとJ...

あっ！ 鶏ガラスープ！

最初にチキン丸ごと買ったときに作ったやつだわ！

すっかり忘れてた...

そうよ、Aはアメリカで洋風で、Jは長ネギとか入れた中華風...だけど日本のJよ。

ダニーの冷蔵庫だから、何が入ってるかわからないと申し訳ないと思って、英語で書いたのよ！

はああ、遠い昔のようだわあ。

そして、このスープは確実にAの方だわ。

どうしてわかったのかしら？

「ホワイ、ユー・ノー、これ、A?とJ?」

「A means American and J means Japanese, right?」

そのとーーり！ 頭いいわあ！

「I tasted it, but no taste! So I added salt and pepper, and lemon juice」

「やっぱり！ レモンジュース！」

「Yeah, it's a traditional American chicken soup, well, should I say chicken broth?」

レモンジュースを入れる！

アイデアだわ。さっぱりするものね、病気の時には飲みやすいわね。

でも...

ごめんなさい...

私、やっぱり...

お粥の方がいい。

## Aプラス

---

あれからまた寝ちゃったわ。

疲れかしら？ そうかもしれないわ、こうなるときって、いつも疲れが溜まったときだもの。

あとから考えればだけど。

今何時？ もうすぐ9時！ かなり寝たのね。

だいぶ楽になったわあ。

なんだか喉が渴いちゃった。

あら？ 何か聞こえる？

キッチン？

チ...ラ...ッと覗くと、ダニー... なにやってるのかしら？

ていうか... 鼻歌歌ってるわ。

ダニーの鼻歌なんて初めて聞いたわよ。

もうちょっと隠れて聞いてようかしら。

あ、ボソボソ歌い始めた。

なんか聞いたことのある曲だけど...

あら、目をつぶったわ。

ノッてきた、身体動かしてる。

あの手は... エア・ドラム？

あ、入り込んじゃってる！ 今度はエア・ギターだし！

この歌って... あれじゃない？ キャンリブ〜リビビブダデュ〜とかいうやつ。

すご〜い！ 完全に入っちゃってる！

キャシーは見たことないのかしら？ これ見たら退屈だなんて絶対思えなくなるわよ！

ああっ、キャシーに見せてあげたい！

あらあ、せつなそうな顔して、どんな内容なのかわからないけど、両手広げちゃって！

「Can't give anymore〜！」

「すご〜い！」パチパチパチ

「Wahhhhhhhh！」

あ、驚かせちゃった。

「アイム・ソーリー！」

なに？ 私を指さして？ 指さして？ 指さして？

「ホワット？」

「W, well... n, n, nothing...」



「ユー・ネバエバ・ボア・ミー」

え？ なに？ 怖いものでも見たような目で？ なに？

え？ また私を指さして？ 指さして？ 指さして？

「ホワット？」

「Ah... Are you feeling better?」

「イエス」

「Good, good, very good」

「ファースト・タイム、アイ・シー・ユー・シングイング！」

なに？ また私を指さして、その恐怖映画みたいな顔？

「Since... when... were you ... there?」

いつから？ そこに？

「最初からって、あ、ビギニング」

「God!!!!」

なんで？ なんで頭抱えてるの？ いいじゃない！

「アイ・エンジョイ！」

楽しかったわよ。

あ、久しぶりにやった！ 目を上にして、あ～あみたいな顔！

なに？ 私、なにか悪いこと言った？

あ、エンジョイじゃダメなのかしら、ライク？

「アイ・ライク・ザット・ソング！」

あ、また指さそうとして... 止まった。

「Well, this song, Without you was made by Badfinger, and covered by Harry Nilsson. Most of people think this song is Harry Nilsson's original, but it's not. Ah, yes, Mariah Carey covered, too. I prefer Badfinger version」

なに？すごい早口！ 眉間にシワ寄せて、まじめな顔で、なにを言ってるの？

「ホワット？」

「Ah... Which version do you like?」

どっちのバージョン...が、好きか？ 何の話？ とにかく、

「アイ・ライク・ユアソング！」

なに？なんでそんな情けな～い顔してこっち見るの？

「ユー・アー・グッド・シンガー」

なんで、いちいち黙～ってこっち見るの？

「ドウ・ユー・シング・ホエン...」

「Romie, shall we change the subject?」

ン？ 何を変えるって？

「ホワット？」

「Ah, do you want something? Tea or...」

「あ、ウォーター」

「I'll get it」

あら？ スロー・クッカーが出てる...

「Here you are」

「あ、サンキュー」

あら？ 中に豚肉とキャベツ...で、煮てある...

なんで？ たしか私、お鍋に入れたわよね？

火をつけようと思ったときにめまいがしたのよ、そうよ、それがなんでこの中で出来上がってるの？

「ダニー...」

「Yes?」

「ユー... メイク・イット？」

「Well, it was in the pot, but I had no idea how long or... you know, so I put them into it」

ポットの中に入って... どれくらいの長さか... そして、ここに入れた...

「And I found the similar thing in the leaflet, this one, you see?」

説明書... 豚肉と野菜の煮込み...

「It said 1 hour, so I just set it, and done!」

一時間... セットした...

スロー・クッカーを使って... 自分で作ったのね...

まあ、味つけはしておいたんだけど。

「じゃ... ユー・イート・ディス、フォー・ディナー？」

「Yes, and chicken soup」

ピザとると思ってたわ...

感動...！

「ダニー、ユー・アー・グレート！」

「You are the greatest teacher, so I could use it. Hahaha」

「ユー・アー、ベリーベリーベリーグッド・ステューデント！」

「Would you give me A?」

A評価のことでしょ？　うちの短大もABC評価だったからわかるわよ！

「アイ・ギブ・ユー、Aプラス！」

「Wow! Thank you! Hahaha」

「アンド、Aプラス、フォー・ユア・シング！」

「God!!!!」

ほめてるのに、なんで頭抱えるのよっ？

## ベンヴォリオ

---

ベッドの中よ。

無理やり連れてこられたわ。

もちろんお姫様抱っこよ。

今は私の枕元にいるわ。

いつものあの茶色い優しい目で私のこと見てるわ。

ダニーの若い頃って... どんなんだったのかしら？

さっき歌ってたとき、なんとなく、ダニーが若かった頃をチラッと見た気がしたの。

「ダニー」

「Yes?」

「どんな... ハウ...ワズ・ユー、ホエン、ユーアー・ヤング?」

「Well, just an ordinary stupid young guy」

ただの... オーディナリー... あ、ふつう? ありふれた? バカな若い男...

まあ、そうね、若い男の子って、たいていおバカさんよね。

「Why are you asking such a question?」

「ビコーズ...」

ちょっと見てみたかったわ...

「アイ・ジャスト... ワント・シー」

笑ってるけど...

私は知らないのよね、この人の若い頃...

「How about you?」

私?

「そうねえ... もっとフレッシュ・スキン、シワ... ノー・リンクル」

ああ、あの頃の肌に戻りたいわあ。

「I love your wrinkles」

シワをラブ? ウッソ~!

「When you smile, I see wrinkles here.... It's just... beautiful」

スマイルしたときのシワがビューティフル？

はあああ、うまいこと言うわねえ！（本当はすっごく嬉しいんだけど）

「Ok, go to sleep, honey」

「ハ、ハニー!？」

「Ah, Romie」

ハニーって... よく映画で言ってるわよね... 一瞬ドキッとしちゃった。

「Good night」

「あ、ダニー」

「Yes?」

「えっと、サンキュー・フォー・チキンスープ」

「My pleasure. Thank you for the greatest banana bread」

「マイ・プレジャー」

って、なに？ ダニーの真似してみただけなんだけど。

「Good night, sleep well, ok?」

「オーケー」

なんか...

「ダニー」

「What?」

あ... なんて呼びとめちゃったのかしら？

「アイ... フォーゲット」

「Let me stand here till thou remember it」

あ、ロミオのセリフ... 君が思い出すまでここに立っていようって...

そうね、私に通じるのはロミオとジュリエットのセリフだけなのよね、情けないけど。

「Your turn」

私の番？ え？ やるの？

「えっと、でも... あら？」

そういえば... なんてロミオのセリフを知ってるの？ 今さらだけど...

「ホワイ・ユー・ノウ・ロミオズ・プロット？」

「It's a long story, do you wanna hear it?」

長い話... 聞きたいか...

「イエス」

「Ok」

私の横に座ったわ、よっぽど長い話なのね。

「When I was Senior High, I had to attend at the play」

シニアハイって高校よね？ お芝居に参加しなければならなかった...

「It was a part of English literature class」

それは英文学クラスの一環だった...

「ユー・アー・ロミオ？」

「No, Benvolio」

ああ！ ベンヴォリオ！ ロミオのいところで友人、地味な役よね。

「The guy who took a role of Romeo, he was very good looking and girls were... you know?」

なるほど、ロミオ役の子はイケメンで女の子にモテてた...と。

「But the guy was not good at memorize his plots, in other words, idiot! Ha Ha Ha」

えっと、セリフを覚えるのが...得意じゃない... イディオット... バカ、ハハハ。

「Oh, you got it. So I had to memorize all his plots besides mine」

えっと、僕のセリフの他に彼のを全部覚えなければならなかった...

「ホワイ？」

「The teacher asked me to do so」

先生がそうしてくれと言った...

「I had to prompt from the beginning to the end!」

最初から最後までプロンプト... ああ、プロンプター、こそこそってセリフを教えるわけね。

「Do you understand?」

「イエス」

「Now I can take a role of Romeo! Juliet's here, She knows every plots, so I don't have to prompt!」

そうね... 若い頃は女の子ってロミオに憧れるけど...

「ユー・アー・ベンヴォリオ」

「What? You mean I can never take a role of Romeo?」

だって...

「You're right. I'm not the kind of .... Romeo」

「イフ、アイ・アム・ジュリエット・ナウ、」

今なら...

「アイ・ラブ・ベンヴォリオ」

ベンヴォリオは思慮深く、まわりのことを思いやって、バカみたいに闘おうとしないもの。

「Romie... You are...」

なに？

「killing me」

キリング？ 殺すーっ？

「ノー！ アイ・ドント・キル・ユー！」

「Hahaha, I didn't mean... well... You don't have to understand」

理解しなくていい？ なによ？ 言ってよ！

「ホワット？」

「Well, you are...」

私は？

「Killer Queen!」

キラー・クィーン？ 今度はクィーンの曲？ どういう意味？

「Good night, Your Majesty」

チュッて...

私... モエ・エ・シャンドンを柵の中に入れてないわよ？

わかってるの

---

あ？

もう9時？

すっごく寝ちゃったわ、寝すぎてまだ眠いくらいよ。

あ、ダメダメ、朝食！

ダニーはもう起きちゃってるわよね。

やっぱり、起きてたわ。

「Good morning」

「グッモーニン」

「Coffee?」

「え？ イエス、でも、アイ・メイク・ブレックファースト」

「You don't have to. You still need a rest」

「アーム・オーケー、ナウ」

「Just sit here」

キッチンツールに座れ...と。

座ったけど？

「Are you hungry?」

そうねえ... そんなには...

「So so?」

あの手のひらヒラヒラは... えっと、あ、そんなでもない...だったわ！

「そうそう、それ！」

あ、人差し指立ててドヤ顔した。

なにをするの？

棚を開けて... あ、スムージー・メーカー？

箱の説明書きを読んで... 冷蔵庫から... ヨーグルトとリンゴを出して... バナナを...

バナナ、もう二本しかないわ、昨日使っちゃったから。

あっ！

「ノーッ！」

「Don't you like it?」

「最初に、ワッシュ！」

「Wash? Should I wash an apple?」

「アップルは洗ってあるの、メーカー！ ワッシュ！」

使ってないんだから埃とかついてるのよ。

「Oh, you mean this smoothie maker, but, why?」



「ファーストタイム、中... インサイド！ 埃って... あ、ダスト！ ワッシュ！」

「Ah, ok!」

洗ってる。

「あ、ダメダメ、拭いて」

「What?」

「そのキッチンペーパーで、そうそれ、こうやって、拭いて、水気、ウォーター、アウト」

「I got it!」

よくわかるわね。

バナナをむいて、手で...ちぎって...入れた。

リンゴを... あ、手を切らないでよ、ザクッと切った。

ヨーグルトを入れて... ハチミツ入れるのね。

蓋をして、なに？ スイッチ押しながら、ドヤ顔でこっち見て？

そうね、できるのね、はいはい。

できた。

どれどれ？

あ... 美味しい！

「Good!」

「イエス！」

ああ！ これなら...

「ユー・キャン・メイク・アフ...」

「I know! I can make smoothie after you go back to Japan, right?」

な... なに、その怒ったみたいな言い方？

だって、それが現実なんだもの、しかたないじゃない。

え？ なに、その挑戦的な目？

あ、そう！ いいわよ！ 私だってやってやるわよ！

どうよ！ あ、もっとグイッと、私だって！ どうよ！

なによ？ プツて、笑ってるし...

「You win!」

私の勝ち？

なに？ なにかのゲームだったの？

「Oh, Romie」

今度は抱きしめられちゃった。

まあ... 睨まれるよりいいけど。

今はソファに座ってコーヒー飲んでるの。

ダニーはどうしてると思う？

私の膝の上に頭を乗せて本を読んでるわ。

最初是一緒に座ってただけなの、あら？って気がついたら、こうよ。

ときどき私のこと、ほら、チラッと見て微笑んでるけど。

そうなのよね、結局男の方が甘えん坊なのよ。

若い頃って、カレに甘えたいとか思うじゃない？ 相手も僕が守ってあげるよみたいなこと言うのよ。

幻想。

現実はこちらよ。

ていうか、なんで突然私の膝に？ まあいいけど。

そうね、若い頃って勘違いオンパレードよね。

たとえば... そう、昨日みたいに、具合が悪くなって、そしたらすごく心配してくれて、チキンスープまで作ってくれたでしょ？ それがずっと続くと思うわけよ、続かないわよ。

そのうち、具合悪いの？ 寝てれば？で終わり。それが現実。

でもいいの、それはね。肝心なのは、世話をしてくれるかどうかじゃなくて、自分で自分のことができるかどうかなのよ。こっちが具合悪くても、何もできないから、具合悪いまま食事作ったりしなきゃいけないって、けっこう辛いわよ？

それより、ほら、ゆうべみたいに、自分で工夫して自分なりに作ったでしょ？

さっきもスムージー作ったじゃない？ 自分で自分のことをしてくれれば、

こっちも安心して寝ていられるのよ。私... おとうさんの教育間違えちゃったわあ。

な〜んにもできなかったんだから。どこに何があるのかさえ知らなかったのよ？

もしも私が先に死んでたらどうしたのかしら？ 美香だって働いてるし。

そう考えたら、私より先に死んでよかったのかも....。

「What are you thinking?」

何考えてるか？

「アイム・ハッピー、マイ・ハズバンド・ダイ」

あ、ちがうちがう！ それじゃまるで、おとうさんが死んだからハッピーみたいじゃない！

「What?」

そりゃ、ホワットよね。

「ノーノー... ていうか... ホワイ、ユアヘッド・イズ・オン・ミー？」

「Do you mind?」

気にするか... べつに...

「ノー」

あら？ 起き上って... チュッ？ そして... また... 私の膝の上... あ、そう。

なあに？ 甘えたい年頃でちゅか？

「ヨチヨチ」

頭なでてやったわ。

「Oh, you treat me like a kid!」

子どもみたいにトリート...あつかう？ なに言ってるの！

「マン・イズ・ア・キッド」

万国共通よ。

「So you think a man is childish!」

子どもじみた？

「ナット・チャイルディッシュ、チャイルド」

「Worse!」

笑ってるけど、実際そうでしょ？

そうねえ、そういうことにイライラしたときもあったけど、この年になるとわかるのよ。

こうやって、な〜んともない時間を、な〜んともなく一緒にいることがしあわせって。

だって、おとうさんみたいに突然死んじゃったり、ダニーとだって...

ずっと一緒にいられるわけじゃないんだもの。

ずっと続くものなんてないのよ... だから... 今こうしていられることが...

とっつもしあわせなことだって... わかるだけでも、しあわせだわ...

「Romie...」

起き上って...

「Why are you crying?」

私の顔を覗く目が... やっぱり優しくて...

「ビコーズ...」

ずっと続くわけじゃないってわかるのは... 悲しくて... そして...

「アイム... ハッピー」

抱きしめるあなたの腕が温かいのも...

「I'm happy for being with you, Romie」

耳元で聞こえるあなたの声が優しいのも...

「I love you... I really do...」

その言葉が英語でも... 本当だって...今は本当だって... わかるから...

できれば... ずっと続いてほしい。

スーパーマーケット・アゲインよ。

ダニーは今日もゆっくりしてた方がいいみたいなのを言ったけど、

そんなこと言ってられないのよ！ 食材が尽きてくるんだから！

カートの中はもう食材が山のようになってるわ。

もう少し近くにあったら、毎日来られるんだけど、しかたないわね。

ダニーがレジに持っていくから、好きに見てきていいよみたいなのを言ったから、

いつもは立ち寄る暇がないコーナーも覗いてるの。

スーパーにオモチャまで売ってるのよ？ 日本なら、せいぜいオモチャ付きのお菓子くらいよね

。

あら？

あっちの方に... あれって... 園芸コーナー？

すご〜い！ 園芸用品がズラッとあるわ。

あら、可愛い手袋。

こういうのをはめて庭仕事したら気分もちがうわね。

奥の方に花があるわ。

すごいわねえ、スーパーでこれだけ置いてあるなんて。

なにこれ？ ローズマリーじゃない？ あ、やっぱりローズマリーだわ。

ローズマリーって、こんな巨大な木みたいになるの？ 小さい鉢植えしか見たことなかったわ。

これはタイムね、やっぱりタイム！ ああ、いい匂い！

うちの庭は小さいから、寄せ植え用の小さなプランターにハーブ植えてるのよ。

たま〜に使うけど、おとうさんが生きてたときはほぼ和食だったから使わなかったわ。

あら、これってラズベリー？ こっちはブルーベリーで、ブラックベリー？

なんだかいっぱいベリーがあるのね。こんなのを庭に植えられたら、買う必要なんてないわ。

うちの小さな庭じゃ絶対無理ね。

こっちはお花のコーナーなのね。

すご〜い！ バラってこんなに種類があるの？ うちのバラは植えてないわ。

植える場所もそんなにないし、近所のバラ好きの奥さんが、バラは手入れが大変って言ったのよ。

殺虫剤とか消毒剤とか肥料もバラの種類で替えたりするって。私には無理だわ。

他の花も綺麗ねえ。こういうのをいろいろ植えられるくらい広い庭があればいいけど、

やっぱりうちの庭じゃ無理ね。アメリカだからできるのよね。

あ！ ラベンダー！

ああ、いい匂い！ 他の花にくらべたら地味かもしれないけど、大好きなの。

美香に言ってるのよ。もしも私が死んだら、お棺には菊じゃなくてラベンダーを入れてって。

そしたら、なんて言ったと思う？ 真冬に死んだら何を入れればいい？だって。  
私ね、そうは言ったけどね、おかあさん、そんな話しないでって言うと思ったの。  
そしたら、まるで葬儀屋みたいに事務的に言うんだもの、でも、たしかにそうよね。  
それは考えてなかったわ... そうよね... 真冬にラベンダーは咲いてないわね。  
頑張ってラベンダーが咲いてるときに逝くようにするしかないってことよね。  
でも、そんなこと計画したってできるわけじゃない！  
あら、こっちに鉢植えのラベンダーもあるのね。  
こんなのがキッチンにあったら素敵ね。

「Romie!」

あ、ダニーの声。

「ダニー！ こっちこっち！」

あ、見つけた。

走ってきたわ。

ゼーゼーしちゃって、どうしたの？

「Gosh... I was looking for you all over the store!」

ン？

「Oh, you found lavender」

「イエス」

「Are you gonna buy it?」

「ああ... アイ・ワント、でも...」

「Do you want more?」

もっと？

「ノーノー」

「Ok!」

って、ダニーがさっさと鉢を持ってレジに行ったわ。

いいのかしら？

買って来た食材は全部処理したわ。

冷蔵庫、冷凍庫、野菜室、完璧！

ラベンダーは、キッチンの窓辺のいちばん日当たりのいいカウンターの上。

やっぱりこういうのがあると、なんていうのかしら、家庭的？ 温かい雰囲気？

「Done?」

「イエス」

「Ok, then, it's a movie time!」

ムービータイム？ 映画？ 映画に行くの？ 日本語字幕あるかしら？

「Do you wanna watch it?」

ダニーが見せたのは...

あ！

フランコ・ゼッフェレリ監督のロミオとジュリエット！

「I found it at the store」

何十年ぶり？

借りたことはあるのよ。でも観ようとする、おとうさんや美香が別なのがいいって、日中ひとりで観てもねえ、ゆっくり観る雰囲気でもないし。

「And we need popcorn!」

ポップコーン？ 私買ってないわよ？ 買いに行くの？ わざわざ？

「I'll show you how to make popcorn」

作るの？

大きな片手鍋を出したわ。

あら？ いつのまに？ あれは... 乾燥とうもろこし？

バラバラバラってお鍋の底が隠れるくらい入れて...

コーンオイルをとうもろこしギリギリひたひたになるくらいまで入れて...

蓋をして... 火をつけた...

「Very low heat」

弱火ってことね、とろ火くらいだわね。

「You have to keep moving the pot, or it will burn」

えっと、お鍋を動かし続ける、でないと... 焦げちゃうのね。

「Never ever take off the cover」

けして蓋を取るな...と。

「Listen!」

ン？

「Can you hear the sound corns are popping?」

あ！ パンって、あ、すごい、パンパンって、爆発しないかしら？

あら？ だんだん聞こえなくなってきた...

「Well I think it's done!」

火を消して... 蓋を開けたら...

「ポップコーン！」

「Yeah」

こうやって作るのね。

「Do you want to add batter or just salt?」

バターか塩か？

「ソルト」

塩をかけてゆすって、大きなボウルに移して...

「Let's go!」

「ホエア？」

「Movie theater!」

ダニーのベッドの上。

クッションにもたれながらポップコーン間に置いて観てるのよ。

懐かしい！

あ、ベンヴォリオ！

「ダニー、ユー！ ベンヴォリオ！」

「Ah! Hi! I know what are you gonna say」

何を言うかわかってる、そりゃそうね、やったんだもの。

すごいわ、私、どれひとつ忘れてないわ。

DVD100回観ると映画館に14回通うのとじゃ質が違うのよ。

サントラも何度も聴いてたし。

あ...

ロミオとジュリエットが最初に出会う場面...

オリビア・ハッシー、本当に魅力的だわ、こんな顔に生まれたかったって何度も思ったもの。

レナード・ホワイティングもやっぱり素敵だわあ。

こんなロミオだったらジュリエットも一目惚れしちゃうわよねえ。

“palm to palm is holy palmers' kiss”

手のひらと手のひらを合わせるのが聖なる巡礼者のくちづけ...

この場面も素敵なのよ。



「O, then, dear saint, let lips do what hands do」

え？ ダニー？ なに？ ロミオごっこ？

“Saints do not move, though grant for prayers' sake”

聖なる者は動きませんわ、たとえ祈る者の願いだとして

「Then move not, while my prayer's effect I take」

なに？ こっち見ちゃって？ 画面見なさいよ。

「Thus from my lips, by yours, my sin is purged」

こうして僕のくちびるから、あなたのくちびるへと、罪は清められるのです...

私にキス...？

「ホワット・アー・ユー・ドゥイング？」

「Sin from thy lips? O trespass sweetly urged!」

罪があなたのくちびるに？ おお、なんという罪深いことを！って、知ってるから。

「Give me my sin again」

僕の罪を返して...

なんでまた私にキスしてるの？

「ダニー！ ルック・ムービー！」

なに笑ってるのよ？

たしかにロミオのセリフ全部入ってるわ。

ああ、大好きなバルコニーの場面！

言えるわ、ジュリエットのセリフ全部...

ロミオのセリフだって知ってるわ...

これを観ていたあの頃... 夢中になっていたあの頃... まるで自分がその中のように...

あの頃の私は... 何も見えなかった... まだ何も始まってなかった...

だから... その先何が待っているかなんて知らずに...

ロミオとジュリエットだって... この先何が待っているのかわからないから...

だから... こうやって突き進めるのよ... 結末を知らないから...

それを観ていた私も... 自分の人生がどうなるかなんて知らなかったから... 夢中になれた...

でも...

今は...

私の人生はほとんどわかっちゃって...

今だって...

この先、ロミオとジュリエットがどうなるか知ってるのよ...

この先、どうなるのか知ってるのよ...

結末がわかっているのに...

なにやっているの？

こんなことしてて何になるの？

なんだか... バカみたい。

何も知らないふりなんてして、こうやって、何やっているの？

「アイ... キヤント」

ベッドからおりて...

ダニーの部屋から出て...

自分の部屋に戻ってドアを閉めた。

## ふりはできない

---

なんていうの？

まざまざと自分が年をとってしまったんだって思い知らされた？

そうね、そんな感じかしら。

いろいろなことの見えて、だいたい見えてしまうようになっちゃったのよ。

だから、あきらめるの。辛いけど、あきらめるの、だってしかたないんですもの。

どうあがいてもダメって、もうわかってるんですもの。そして、そのうちに、

あきらめたものは私の人生から消えていくのよ、もともと手に入れられないものなんだもの。

それはいいの、でも...

見えないふりはできないのよ、見えてるんだから。

くだらない「見えてないごっこ」なんてできないわ、見えてるんだもの。

今を味わう？ そんなこと私にはできないわ、知らないふりしてそんなこと。

知ってるのよ！

二週間後には、私は日本に帰るのよ！

もうここにはいないのよ！

ダニーと離れるのよ！

そんなこと知らないようなふりして、陽気にポップコーン食べながら映画観て？

バカみたい！ 知ってるのに！ こんなことして何になるの？

ひと夏の思い出？

そんなことしてるほど若くないわ。

これ以上見えないふりはムリ。

「Romie」

来ないで... 私は今... あなたと知らないごっこはできないのよ...

「May I come in?」

入ってきたら、あなたが見るのは、現実を知ってる50の女よ...

「Romie, I wanna talk with you」

何を話すの？ ふたりで見えないふりして話すことなんてあるの？

「I'll open the door, ok?」

開ければいいわ、あなたが見るのは、現実よ。

「Romie...」

戸惑ったような目...

「Would you tell me what happened?」

何が起こったのか？

「Why did you leave my room suddenly?」

なぜ突然部屋を出ていったのか？

「Are you angry at me because I did stupid thing?」

そんなことじゃないわ。

「You said ... you can't, what did it mean?」

どういう意味って...

こんなことも... ほら、こんなことすら伝えられないのよ？ これが現実なのよ。

「Romie, please... Say something」

何が知りたいの？

「ホワイ・ユー・ワント・ノウ?」

「What?」

「ホワイ・ユー・ワント・ノウ、マイ... フィーリング?」

なに？ 驚いた顔して？

「Because I love you」

「ああ！ もうたくさん！」

そんな言葉聞きたくない！

「アイ・ラブ・ユー・イズ・ナッシング！ フォー・ユー！ フォー・ミー！」

「Nothing? What do you mean nothing?」

「なんて言えばいいの？ ふりをするって?」

あなたが私の言いたいことをわかろうとしてる、でも、通じないでしょ？

「アイ・ドント・ノウ・ハウ・トゥ・セイ、イングリッシュ！」

「Speak, any words you know, speak」

私の中にある言葉なんて... 少ししかないのよ...

「アイ... アイ・キャント・プレイ、みたいになって... ライク、アイ・ドント・シー...

現実... リアリティ、オブ... わかんないわよね」

「Please, keep, talk」

「ユー・セイ、ドント・シンク・トゥモロー、でも、ユー・ノウ、アイ・ノウ、

アイ・ハフ・トゥ、ゴージャック・ジャパン、トゥーウィー... えっと...

「Two weeks later」

「イエス」

2週間後って... トゥーウィークス・レイターって言うのね...

「ユー・ノウ、アイ・ノウ、結末... エンド・オブ・ストーリー」

真剣な顔で私を見てるけど... 何を考えているのかわからない...

「アイ・キャント・プレイ、まるで、ライク、アム・ハッピー、ライク、アイ・ドント・ノウ・エンド...」

「So... What do you want to do?」

何がしたいのかなんて、

「ナッシング! アム・ナット・ハッピー!」

「You are not happy being with me?」

「そうじゃなくて、アム・ハッピーだからアム・ナット・ハッピー!

なんて言えばいいの? なんて言えばいいの? だからっ、なんて、言えば...」

「Romie, I'm listening, take your time」

あ...

「ダニー...」

「Yes?」

「オンリー・アイ・キャン・セイ... ジュリエット・プロット」

「Speak... Bright angel」

あなたの茶色い目が... 私を見てる... 何を考えてるのか... わからないけど...

「My bounty is as boundless as the sea... My love as deep」

私が賜うものは海のように果てしなく、私の愛は海のように深く...

こんなところから始めていいのかわからないけど...

本当は...

The more I give to thee, the more I have, for both are infinite

あなたに与えれば与えるほど、私はもっと愛を... どちらも終わりがなく...だけど...

「The more I love to thee, the more... I'm sad, for both are infinite」

あなたを愛すれば愛するほど... もっと悲しくなるの...

バカみたい...こんなことも...自分の言葉で言えないのよ...

抱きしめないで... 抱きしめたって... 現実是不変なんだから...

「Me, too...」

私を抱きしめる腕の力が... もっと強くなって...

「Me, too」

あなたの声が... 震えてる...

「Romie...」

私を見るその目は... 濡れてる...

「Even though I know the end of our story...」

たとえ結末を知っていても...

「I can't stop loving you」

あなたの目が... 苦しそうな... 見ているだけでも... 悲しくなる...

「I have to tell you...」

その目の中に... あなたの弱さを... 今まで見たことのない弱さが見えて...

「Even when I was smiling...」

微笑んでいるときでも...

「My heart was aching」

「エイキング？」

「Hurt, pain」

痛い...

微笑んでいるときでも... 心は痛い...

「ミー・トゥ」

あなたの目は泣きそうなほど悲しそうで... だけど... 愛しそうに私を見てる...

「アイ・ラブ・ユー、だから... ペイン、メニーメニー... ペイン」

あなたが... 真剣な目で... 私のことを...

「Will you...」

え？ なに？ 聞こえない

「ホワット？」

えっ？ ど、どうしたの？ その、なにか怖いものでも見た顔...

「ホ、ホワット？」

「Ah... nothing」

「セイ！ ホワット？」

どうしたの？ ヘンよ、なんだか... 落ち着かなくて、なに？

「ホワット？」

「Ah... Will you...make Banana bread for me?」

ハ？

「バナナブレッド？」

「Yes」

「ナウ？」

「No, before... you go back...」

「オーケー」

「Good. Thank you」

でも...

な〜んか... ヘンよ？

「ダニー」

「Yes?」

「ユー・アー... ヘンって... あ、ストレンジ」

「Am I?」

「イエス」

なにその、悪いことして、叱られるのが怖くて隠してる子どもみたいな顔？

「Why, why are you looking at me... like this?」

そうね、美香が小さい頃、そうやって美香のこと見たわよ、何か悪いことしたらしいときね。

「ビコーズ、ユー・アー・ベリー・ストレンジ！」

あ、その顔は、美香が隠すのあきらめて白状するときの顔だわ。

「Yes, I know, I'm strange, I feel strange, very strange」

ハ？

マジ、ストレンジ！



## 突然

---

悲しくても辛くても、食事はしなきゃ。

いつものどおりに夕食作って、一緒に食べてるのよ。

目をあげると、ダニーが私のこと見てるの、ほら、今もね。

そして、微笑んでるわ。

「ユー・アー・スマイリング」

「Yes」

「ていうことは、ユア・ハート・イズ、なんだっけ？ エイ...」

「Aching」

「あ、それ」

「Yes, my heart is aching」

顔が赤くなってるわ。

「グッド」

「What do you mean, good?」

日本語に訳したら、なんだよそれ？かしら。

「ユア・ハート・イズ、エイキング、イズ、ユー・ラブ・ミー」

「Yes」

「だから、グッド」

また微笑んだわ。

「How about you?」

「ミー？」

「Is your heart aching?」

「そうねえ... ノー」

だって、もうフリはしなくていいから、少し楽になったわ。

「No? Oh, you don't love me!」

な～に言ってるの！ 知ってるくせに。

私にあんな愛の告白させちゃって、まあジュリエットのパクリだけど。

「Romie」

「イエス？」

「I love you」

「アイ・ノウ」

なに？ その、両手広げて情けな～い顔で、なんで笑うの？

「ホワイ・ユー・ラフ？」

「Because... I said I love you, and you said... just, I know! It's like... hahaha」

だって、ご飯たべながらそんな、照れるのよ。

「アイ・キャント... はああ♪ アイラビュ～」

そこまで笑う？

「Don't do that」

やらないわよっ。

お風呂からあがって、お水を飲みにキッチンに行ったら、拉致されて、今はダニーのベッドの中。

ダニーが、私の荷物をこの部屋に持ってきたら？って、多分そんなことを言ったんだけど、ノーって言ったの。だって、そんなことしたら、ここから出ていくとき、もっと辛くなるし、それに、何かあったとき、ダニーに怒ったりね、そういうとき籠もる場所が必要だから。

「Oh! You are ready for getting angry at me!」って笑ってたけど。

だけど...

できるだけ一緒にいたい。

いっぱいいっぱいダニーを感じておきたい。

きっと、いつか、こうやって抱きしめられている感触も、少しずつ消えていくのはわかってるけど。

朝食を食べ終わって、ソファでコーヒー。

もちろんダニーの頭は私の膝の上。

ビーーーーッ

えっ？ な、なに？

ダニーが立ち上がって...

ああ、誰か来たのね。

玄関のドアを開けたわ。

どうしたの？ その顔...

女の人の声？

あら？ 男の人の声もする...

お友だちかしら？

コーヒーの準備した方がいいかしら？

あ、入ってき... あれ？ あら？ どこかで... エーーーーッ？

キャシー！...よね？

うわあ... やっぱり美人だわ...

え？ でも... なんで、キャシー？

あ、目が合っちゃった。

“Oh! I know you!”

わ、私？

“Hi, Mimie!”

ミ、ミミー？

“Can I call you Mimie? Coz It's hard to pronounce your name”

今度は「ろ」さえなくなっちゃったわ... いいけど...

「Romie, it's... Cathy」

ダニーの顔が... わかってるから、はい、キャシーね。

“Romie? Oh, no! It's a boy's name! What a shame!”

ミミーだろうが、ロミーだろうが、どっちも本当の私の名前じゃないからいいのよ。

ていうか...

なに？ どういうこと？ 今なにが起こってるの？

「This is... Peter」

ピ、ピラー？

あら、この人、ほら、バービー人形の恋人の人形、ケン？ あれはリカちゃん？

それが年取って髪の毛薄くしたみたいな人だわ。こういう人って実在するのねえ。

‘Nice to meet you, ah...’

握手ね、はい。

「えっと、マイ・ネーム・イズ・ヒロミ」

‘Hee... Pardon?’

わかったわよ！ 私の名前はアメリカ人は誰も発音できないってことがねっ！

「Hiromi」

そう、本当はそうなんだけどね。

え？

“Honey, you can call her Mimie”

‘Ok, Mimie’

今... ダニーが...

あ、そんなことより、これはなに？

ダニーの顔を見ても、ダニーの方が混乱した顔してる...

あ、そう、わかった！

「えっと、ドウ・ユー・ワント・サムシング・・トゥ・ドリンク？」

えっと... なんで、みんな黙ってこっち見てるの？ 通じない？

“Oh, Mimie! You speak English very well”

拍手してくれて... ありがとう...

“Do you have anything fruity? Coz I’m pregnant now”

はいはい、妊娠してるから、フルーツ系ね。

「えっと、ピー...」

‘Same thing is fine’

キャシーと同じもの、はいはい。

なんか... ダニーが... 黙ったまま... すごーく怒ってるんだけど...

とにかく、私はこの場から消えます！

ラズベリーをバニラシュガーで和えて潰して濾して、レモン果汁と、ハチミツと、  
あ、これこれ、ダニーがたまに飲む発砲炭酸ミネラルウォーター。

これなら妊娠してるときにサッパリするわ...って、私なにやってるの？

私なにやってるのかはいいけど、何が起きてるの？

なんでキャシー？ あの年取ったバービーの恋人はなに？

ていうか、なんで私、何か飲みますか？なんて言っちゃったの？ 奥さんでもあるまいし。

ていうか、あっちが奥さんで、え？ 私は愛人？ ちがうちがう、離婚したんだから、

あれは元奥さんで、私は、なんでもいいけど、何が起こってるのかわかんない！

とにかく、とにかく、これを運んだら... 部屋に入ろう。

ふうふうう 深呼吸して...

う...わああ... 空気が... 硬直してるううう...

空気じゃなくて... ダニーが... 見たことないくらい怒ってるわ... 怒りすぎて無表情よ...

“So cute!”

この人はまったく硬直してないわ。

“Did you make it?”

「イ、イエス」

“Let me try”

この人... しゃべり方とか... 動きが...

“Delicious!”

いちいち... 可愛いわ。

そ、そんなことはいいわ、部屋に戻ろう！

“Mimie!”

え... 私...の...こと？

「イ... イエス？」

“I’m asking Dan for staying here with you”

私と...ここに...ステイ... ハ？

“I’ve been so depressed. Look, I tried to kill myself”

あ、左手首に包帯... キル・マイセルフ... ヘッ? じ、自殺?

“So I found out I need something new, and I remembered about you, and”

「Cathy, stop!」

ダニーが... 無表情～... 怖～い...

“Dan, I’m talking to Mimie, not you”

めげないし! すごく可愛い言い方だけど。

「Would you please leave from my house?」

飲み物なんか出しちゃって、余計なことしたかしら...

“Dan, it’s just a couple of days. I need something new to forget... this”

あ～らら... 包帯指さしちゃって... 自殺しようとしたことを忘れるために... ここに?

「We divorced」

“I know. I was your wife”

おお...と...

私... ここにいない方がいいんじゃないかしら...

「Please, leave」

ダニーの感情のない声が... どれほどダニーが...

“Well, then, how about...”

めげないのねえ! ある意味感心しちゃうわ。

“Instead of staying here, I want to go shopping with Mimie”

えっ？ わ、私？

“Let’s go shopping, Mimie! It’ll be fun! What do you think?”

え... 決定権... ワタシーーーーッ？

ダニーの顔をチラッと見たら... 目が... ノーッて...

「イエスっ」

ダニーをチラッと見たら... 目が飛び出そうなくらいビックリした顔してるけど...

「レッツ・ゴー・ショッピング！」

“Oh, Mimie! How sweet!”

行くわよっ、ショッピング！

## ゴージャスなショッピング

---

ピーなんか運転して、キャシーは助手席で、私は後部座席...で、隣りにダニー。

「I'll go with you」って無表情に言ったのよ。

ムリして来なくてもいいのに。

すごーい無表情で隣りに座ってるのよ、何も言わないの、怒ってるのかしら？

怒ってるわよね、私がイエスって言っちゃったから。

でも、私が一緒に買い物に行けば、あの家にはステイしないんでしょ？

それに、私、キャシーがどんな人なのか知りたいのよ、だってミステリーだらけなんだもの。

着いたところは、道路の両側に私でも知ってる超有名ブランドがズラーーッ。

す...ごい... こんな店入ったことないわ、間近でウィンドウ覗いたことだってないわ。

“Mimie! Come on!”

プラダーーーッ？

はあああ... 別世界。

絶対、絶対っ触らないわ、指紋でもついて買い取りなんてさせられたら... ムリっ。

キャシーは、まるで自分のお店みたいに自由にとっかえひっかえ、楽しそうねえ。

“Mimie!”

え？ は、はいはい。

私... まるで、奥様の買い物についてきた家政婦みたいだわあ。

“What do you think? This one or this one?”

どっちがいいか？

「フォー・ユー？」

“Yeah!”

パープルか赤か...

「レッド」

“Oh! You know me!”

よく知らないんだけどね。

“I'll buy it!”

ウソッ!? 私の判断で決めちゃうっ？ ヤメテーーー！

“Did you find yours?”



「ハ？ ミー？」

“Yeah!”

「ノー！」

“Why? Don't you like PRADA?”

好きとか嫌いじゃないのよ。

“Do you wanna go to GUCCI or HERMES?”

「ノーサンキュー、ノー」

“Ok!”

サンキュー... はあああ

えっと、今度は... なんていうブランドかわからないけど、高そう。

プラダでバッグ買って、置いてある靴の裏が全部赤いお店で靴買って、ここに来たの。

“Mimie!”

はいはい、もう慣れたわ。

“I wanna try this one, this one, this one, and this one”

はいはい、それ全部試着したいのね。

あら？

なんだかこの光景、前にも見たことあるわ。

いつだっけ？

あ！ 美香が10歳か11歳くらいのときよ。

洒落っ気が出てきて、よくこうやって試着に付き合わされたわ、もちろん買わなかったけど。

だからかしら？ べつにイヤだと思わってないのよね。 こういうものよね？みたいな？

“What do you think?”

あああ！ 金髪に真っ赤なドレスがピッタリ！

「ビューティフル！」

“Thank you!”

ニコニコしちゃって、可愛いわねえ。

“I wanna show it to Peter and Dan!”

え？

“Mimie, bring them here!”

「えっと、トゥー？」

“Yeah!”

ダニーも連れてくるの？ いいけど... 来るかしら... 私のこと怒ってるみたいだし...

いた。

二人とも離れて立ってるわ。

友だち...だったのよね？ 複雑でしょうねえ。

まずはピラーね。

「エクスキューズ・ミー、キャシー・イズ・コーリング・ユー」

‘Oh!’

走っていったわよ。

次は... こっちだ...

「ダニー」

やっぱり怒ってるう... 黙ってるものお... でも...

「あの、キャシー...」

「Does she want me to come?’

「イエス...」

えっ？

ギュッて

なんで           ここで           キス？

あ、行っちゃったし。

なに今の？

いいけど。

ピラーが、ビューティフルとかゴージャスとか、なんだかいっぱい褒めてるわ。

“Dan, what do you think?”

えっ？ 横向いて無視？ な、なんでもいいからいちおう言ってあげればいいじゃない。一言でも褒めてあげれば、それで気が済むのよ、10歳の女の子はっ。あ、10歳じゃないわ。

“Mimie, you should try on some clothes”

「え？ ミー？」

“Yeah!”

「ノ、ノーサンキュー」

“I insist!”

インシスト？ インシスト... なんだっけ？

“Honey, what do you think? Which color is good for her? Orange? Yellow? Green?”

なにになになに？ 私抜きで話進んでるの？

‘Maybe... brown?’

ピラーはいいからっ！

「White」

えっ？

ダ、ダニー、何言ってるの——っ!?

“Wow! Surprise! Dan Swope chose the color of woman’s clothes!”

選んだことあるのよ、美香のだけどね、ヴィクトリアシークレット連れてっちゃったのよ。

“Ok, white! How about this one?”

わあ... 形はシンプルだけど... 高そう... 怖い...

“Try!”

って、渡されちゃったわよお。

振り返ってダニーのこと睨んでやったわ！ 余計なこと言うから——っ！

はあああ... これ、いくら？ ヒ——ッ！ だいたい20万円！ 着なきゃダメ？

“Mimie! We are waiting!”

待ってなくていいわよお、もう。

そ〜っと... そ〜っとね...

あら、素敵。やっぱり高いのは違うわねえ。

“Mimie!”

「あ、イ、イエスイエス！」

そ〜っと試着室のドア開けたら... 三人でこっち見てるううう。

それは残酷でしょお！ こんな金髪美人の後に私って〜...

“Let us see you!”

わかったわよ、はい！

“Oh, pretty”

ドレスがね。

チラッとダニーを見たら... なによ、そのキョトン？ 似合わない？ わかってるわよ。

“Dan, what do you think?”

聞かなくていいから！

「So shows a snowy dove trooping with crows」

え...

“Dove? Oh, Dan! You are cruel! You should say at least Swan!”

私だけ... わかるわ...

カラスの群れの中の雪のように白い鳩のようだ

ロミオがジュリエットに一目惚れしたときのセリフのひとつ...

ダニーに微笑んでみせたら、ダニーも微笑んで... 胸を押さえて痛そうな顔したから...

ンフって笑っちゃったわ。

“Mimie, you should buy it!”

ハ？ 買う？

「ノーノーノー」

“Why? You look good!”

「サ、サンキュー、でも、ノーサンキュー」

“Dan, why don't you buy it for her?”

え、なに？ ダニーに？

「ノーノーノー！」

“Mimie, I'm talking to Dan, not you”

わかってるけどお。

“Dan, you should buy it for her”

やめてやめてやめて——っ。

「She said no」

はあああ、ダニー... サンキュー——！

“See? This is Dan Swope!”

やれやれみたいな顔してるけど、いいのよ、これで正解なの！

さっさと着替えてこよう！

高級ブランド街の中の高級そうなカフェの中。

キャシーはガールズ・トークがあるからとか、多分そんなことを言って、  
ダニーとピーターに、あっちに行ってみたいに手をシッシッってやって、  
ダニーは心配そうにチラッと私を見たけど、大丈夫よ、多分...

どうせわからないところは聞き流すんだから。

そして、今、ダニーとピラーはカウンター席の両端に座ってコーヒー飲んでるわ。

“Mimie, what do you think?”

なにが？

「ホワット？」

“Peter!”

ああ、ピラー、どう思うって聞かれても、話もしてないしねえ。

“Isn't he gorgeous?”

ゴージャス... さあねえ、バービー人形の恋人の毛の薄いのにしか見えないけど...

“We met at Homecoming party of his Senior High”

彼の高校の、ホームカミング... 同窓会みたいなものかしら？

“Actually Dan took me to there”

え？ ダニーの高校？ ピラーってダニーの高校の同窓生ってこと？

“It was destiny!”

運命だった...と。

“I fell in love with him in a moment like this”

指パッチン、すぐにね、恋に落ちた... ハ？ えっと、ダニーと一緒に行ったのよね？

“I still remember that moment even though it's an about, when? Ah! One year ago!”

一年前！

“He told me he felt exactly the same feeling as I did!”

はあ... 彼もまったく同じフィーリングを感じた...と。

“Isn't it romantic?”

ロマンティック...かもしれないけど... ダニーは？

“So we started to go out since the next day”

次の日からーっ？

“It was a kind of thrill, you know? Dan didn't know about us”

ウフフって、この人... まーったく罪悪感がないんだわ、なさ過ぎて責める気になれないくらいよ。

「あの、メイ・アイ・アスク？」

“Sure! I have an open mind”

オープンマインドっていうか、開けっ放しだけど...

「ホワイ... デイド・ユー、結婚... あ、マリー、ダニー？」

“Danny? Who? Oh! You mean Dan? Sound like a lil boy! You are so cute, Mimie!”

それはいいからっ！

“It’s a long story”

長いよね、いいわよ、聞くわよ。

“One of my cousin was working at the same office as Dan”

いところが同じ会社で...って、そこから？ 本当に長くなりそう...

“One day, my cousin invited me to the party of that office and I met Dan”

この人... パーティーで出会う確率高いのねえ。

“I was 20, and he was... about 28? And Mimie, can you believe it?”

な、なにを信じられるか？

“He had no interest in me! Me! Me!”

そこまでMeを強調しなくてもわかるから。

“But, I’m a love hunter!”

ラブハンター... 愛の狩人？ 自分で言うところがすごいわ。

“Oh, Mimie, it was VERY hard! It took one year to get his heart!”

一年なら... VERYって強調するほどはハードじゃなかったと思うけど。

“You know what? He graduated from Harvard!”

ハーバード？ ハーバードって、あのハーバード？ ダニーって頭いいのねえ。

“And I knew he was going to run his own office”

彼のオフィスをランする？ ラン？ いいわ、パス。

“So... I cheated!”

チーティド？ なにそのイタズラするときの子どもみたいな顔？

“I didn’t take pills, and... I was pregnant!”

ニーッコリ？ ピル、ピルって、あ、避妊の、それで、妊娠！ あ！ そういうこと？

“And I married!”

拍手すればいいのかしら...

“Mimie, you should understand, I was too young to be a mom, I was not ready yet”

21か22よね？ 私が美香を生んだ年と変わらないけど、まあ、人それぞれだから...

“So I was so relieved when I lost my baby”

リリース... リリーフ... たしか... あ... 解放する！ え？

“I said to Dan, I was hurt very much and I didn’t want to have a baby any more”

それは... ダニーからも聞いたわ... あの子ども部屋を見せてもらったとき...

“He believed it!”

それは... 信じるわよ...

“Oh! Yeah! I don't remember when, but I wanted to have a new house”

10年前よ、ダニーが言ってたわ。

“So I said to Dan, I want to have a baby, but this house is too small to have a baby”

それも聞いたわ...

“And... He bought a new house! Can you believe it? I didn't want a baby, but he bought a house!”

信じられるわよ... ダニーならそうするわよ、したわよ... でも... 信じられないのは...

“But I didn't expect this one, it was an accident”

お腹指さしてるってことは... 赤ちゃんのこと？

“Oh! Mimie! Don't misunderstand, it's Peter's, not Dan's”

アイ・ホープ・ソーだわ。

“Well, I think it'll be nice to have a baby, a new experience for me”

そうね... すぐに飽きないでくれることを祈るわ。

“Do you have a kid?”

手紙に書いたんだけど...

「イエス、ワン・ドーター」

“Nice! I want a girl, too! I will buy fancy dresses like a princess, you know?”

よだれやなんやかやですぐにベタベタに汚れるけどね。

“But I hate getting ugly!”

アグリー？ 醜くなる？



“You know? It’s growing and I can’t wear nice dresses, and I’ll look ugly! Yuck!”

妊娠してお腹が大きくなるのが醜くなること...

ふつうは、ここで、妊娠してる女性は美しいわよって言うのよ。

でも... たしかにそうよ、お腹の大きい妊婦とグラビアに出てくるような子と、

どっちとデートしたい？って聞いたら、妊婦を選ぶ男の人はいないわよ。

この人、底なしに正直だわ、辛辣すぎるくらいだけど。

“Mimie, I’ll tell you a secret!”

シークレット？ これ以上あるの？

“This”

包帯してる手首...

“I didn’t try to kill myself”

え？

“Yeah, I cut a little bit, but I just wanted Peter to worry me”

えーっ？

“And I wanted make him jealous, so I said I wanted to stay at Dan’s house ”

嫉妬させたいから... ダニーの家に泊まりたいと言った...

「エー———ッ？」

“I know! Isn’t it a good idea?”

グッドではないと思うわよ？

“I was surprised coz Peter actually brought me to Dan’s house!”

だって...

「ビコーズ・ユー・セイ...」

“I know because I said so, but I didn’t wanna see Dan! Staying at that house? No way!”

あなたが言ったんでしょおお？

“And you were there! Sorry, I didn’t remember about you, but a good idea came out!”

私は... 言ってみればネギを背負ってたカモだったわけね。

“Oh! I almost forgot! I’ll show you some pics of my cooking”

クッキング？

あ、タブレットっていうのよね、あれ。

“Do you have your Facebook page?”

フェイスブック...

「ノー」

ウソついちゃった...

“Oh, what a shame. I have my own page. If you register, click ‘Like’ on my page”

「オーケー...」

クリックしないと思うけど...

“Look!”

これは...

きゅうりが何本も柱みたいに立ってて、その上に黄色に染めたカリフラワー...

下にはブルーのゼリー？ ピーマンとか多分パプリカのみじん切りがちりばめられて...

“The title is Tropical Ocean!”

たしかにトロピカルね...

“This one is my favorite! Rose garden!”

えっ？ これって... 本物の赤いバラ？ 花が上向いてズラッと植えてある...

“Can you see here? I spread foie gras over the dish”

フォアグラ... フォアグラ？ あ、下にパテみたいなのが...

“And sprinkled truffle like roses’ leaves”

トラッフル？ あ！ トリフ？

これは...

料理というより... モダンアートだわ。

ダニーが、キャシー・ネバー・クックって言ったけど、キャシー・キャント・クックよ！

## シークレット・コード

---

カフェを出て、今度はアクセサリーのお店に入ったわ。  
男性陣二人は入口近くの椅子に離れて座ってるわ。  
ダニーなんてうつろな目で天井見てるわよ。  
だから、ついてこなくていいって言ったのに。

“Mimie! What do you think?”

キャシーが指さしたのは、わあ... ダイヤモンドがビッシリついてるブレスレット！  
いくらするの？ 値段もついてないわよ？

“I like this one, too”

指さしたのは、金の土台に大きなルビーとダイヤモンドが真ん中についているもの。  
こっちの方がまだ安いんじゃないかしら？  
...って、私がピラーの懐具合を心配してどうするのよ？

それより...

チラッとダニーを見たら...  
あのままじゃ意識を失って死ぬかもね、死なないけど。

キャシーは店員さんに両方出してもらって、両腕にはめて...

“Mimie, which do you like?”

こうなったら...

キャシーの耳元で...

「キャシー、ドント・カット、ここ」  
包帯を指さしてね。

「ユー・ドント・ワント、アグリー... 傷痕ってなんだっけ？ あ！ スカー！」

“Oh, no!”

キャシーの顔が恐怖でひきつったわ。

“Mimie! Right! Oh, my god! I won't! I won't!”

アグリーが効いたわね。

“Mimie, do you think it will be ok?”

ただちょっと切っただけなんでしょ？

「キープ・クリーン」

“I will! I will!”

さてと、ここからは買い物に夢中になってる娘の熱を何度も冷ましてきた母親の本領発揮よ。

「キャシー、ディス・イズ・ベリーヘヴィ・フォー・ユア、スカー」

知らないけど。

“Is it?”

「ユア・スカー... オープン！」

ウソだけど。

“Oh! Nooooo!”

卒倒しそうな顔してるわ、脅しすぎたかしら？

“I don't buy them today”

そうそう。

“I have to go home! I have to kill germs right now!”

「イエス！」

さあ、ダニー、帰れるわよ！

車の中では、キャシーがピラーにハリーアップだの私を殺したいの？だの大騒ぎしてるわ。

ダニーがチラッと私の方を見る視線を感じるけど、私は知らない顔して座ってるだけ。

10歳の娘の扱いはまかせてよ。美香より扱いやすいわ、あの子頭がいいから扱いにくかったもの。

車がダニーの家の前に止まった途端にダニーは車から出たわ。

よっぽどイヤだったのね。

だからついてこなくてよかったのに。

“Mimie!”

え？ キャシーも車から出てきちゃう？

あ、木陰に引っ張られちゃった。

“Mimie, thank you for letting me know”

包帯指さして... ああ、はいはい。

“How long are you gonna stay here?”

えっ？ ま、まさか、また来るなんてないでしょうね？

「あの... トゥー・ウィークス」

“Two weeks? Oh, poor Mimie! I have to tell you something”

な、なに？

“Dan is hopelessly boring!”

出た...！ ボウリング！

“I wish to help you, but, you know what?”

知らないわよ。

“Peter and I are going to move to Paris!”

「え？ パリス？ パリ？」

“Yeah! We already bought a house!”

家も買った...と。

“So I’m too busy to help you, coz we’ll move there one month later”

一か月後に...ね。

“So... Oh, poor Mimie! You would die for, anyway, boring!”

フッフッフッフッフッフ

「キャシー、アイ・ハブ・サムシング・テル・ユー」

“What? Tell me! Tell me!”

「ダニー、ネバエバ・ポア・ミー」

“What did you say?”

「ダニー・ネバエバ・ポア・ミー！」

そうよ、目を丸くして驚くがいいわ。

あなたのこと嫌いじゃないわ、ぜんぜん嫌いにはなれないの、友だちにもなれないけど。

でもね、これは...

愛する人を傷つけた相手への、女の復讐よ！

去っていく車に微笑んで手を振ってサヨナラしたわ。

はあ、さてと！

えっ？

ギュツて腕つかまれて、なに？ 引っ張られて、なんで？ そんなに怒ってるの？

顔を見るとムツとしたままで鍵開けて...

そんなあああ、私、一生懸命やったのにいいい

ボタンとドアが閉まった途端、ウツ！ ギュツて！ ま、まって、ちょっと...

「い、息！ キヤント...はああ、ブリーズ...」

なんで突然キスなのっ？ しかも、ギュウツて息ができないくらいよ？ どうしたの？

見上げたら、ダニーが私を見てるけど...

「ホワット？」

あっ また... ウツ い、息っ どうしちゃったのよおお？

「ウエ... ウェイト！」

無理やり身体離れたわ。

「アー・ユー... アングリー？」

あ... 私もバカなこと聞いちゃったわ、怒ってたらキスはしないわよね。

でも、怒ってるみたいに激しくて...

「No! I just... I love you!»

言ってることとやってることが合っていないのよおおお！

もしかして、キャシーの顔見て動揺しちゃった？ そうね、そりゃそうよね。

「ダニー、アーユー、アップ・アンド・ダウン、アップ・アンド・ダウン？」

「What do you mean?」

「ユア・ハート、ムービング、シェイキング、ビコーズ・キャシー」

「No」

「ノー？」

「because of... you!»

「わ、私っ？ えっ？ ディ、デイドウ・アイ・ドウ... サムシング、バッド？」

「No! Not at all!»

ちがう... あ、そう。

「You are amazing!»

「ホワット？」

「I can't express... how I feel by words」

言葉で言ってくれなきゃわからないわよおお！

言われても、あんまりわからないけどおお。

ダニーがコーヒーを持ってきてくれたわ。

少し落ち着いたみたいね。

でも、さすがに疲れたわあ、店の中駆け回るんですもの。

「You looked very beautiful with that white dress」

「ホワイトドレス？ ああ！ ノー、イツツ・ナット、私向きじゃない、マイ・スタイル？」

「I can't agree though」

同意できない？

「I wanted to buy it for you, but you said no, so...」

「グッド、グッド、ユー・ディド、正しい... えっと、ライト」

あ！ あのとき...

「ユー・セイ、ロミオズ・プロット！」

「I knew you would notice」

「キャシー・ディドゥント・アンダスタンド」

「Cathy is never interested in Shakespeare」

こんなこと言って二人で笑ってごめんなさいね、キャシー、でも、楽しいのお！

「Do you want to know something... interesting?」

「イエス」

「Peter, you know」

ああ、ピラーね。

「He was Romeo」

ン？

「Do you remember I talked about the play, Romeo and Juliet in Senior High」

「ああ、イエス」

「He took the role of Romeo!」

「エーーーーッ？」

あのバービー人形の恋人を年取らせて髪薄くしたのが？

まあ、そうね、若かったら、女の子にはモテたかもね、私はイヤだけど。

「I knew he didn't understand Romeo's plots」

「ああ！ ユー・プロンプト！」

「Yes. So I spoke that plot to you. Only you and I could understand what I said」

「ああ！ なるほどね！」

「I felt like I was a spy. Secret code between you and I!」

シークレットコード、暗号！

「そうね、イエス！」

「"Have not saints lips, and holy palmers too?"」

「わかるわよ？ "Ay, pilgrim, lips that they must use in prayer"」

「See? Only you and I can understand...」

このセリフでは... まだキスはしないんだけど... いいわ...

あなたといると... 若い頃夢中になっていたことが... 無駄じゃなかったって思えるから...



## 男って

---

夕食のおかずは... キャシー！

「You threatened Cathy!」

「イエス！ アイ・セイ、スカー、オープン！ キャシーが、キャーーーーー！」

「Gosh! You are terrible!」

「でも、アイ・レスキュー・ユー！」

「You rescued me from what?」

「フロム、そうねえ、あ！ ボウリング！」

「Oh, you rescued me from boring!」

「イエス！ ユー・ルック、ライク、死にそう、オールモスト・ダイ！」

「Hahaha! Right! You were observing me!」

「ユー・アー、こうやって、はあああ〜」

「You make me laugh so hard!」

「だから、ユー・ドント・ハフ・トゥ・カム・ウィズ・ミー！」

「I'm your bodyguard!」

「な〜にがボディガードよ！ ユースレス・ボディガード！」

「Are you gonna fire me?」

「なんだかわからないけど、クビ！ カット！」

「Oh! I lost my job!」

あーーーー、おっかしい！

涙流しながら笑ってるダニーを見てると、そうね、キャシーに感謝だわ。

あ、そうだわ！

「ダニー、安心してって？ えっと... あ、フィール・セイフ」

「For what?」

「キャシー・ドント・カム・ヒヤ、ノーモア」

「Why can you say that?」

「キャシー・セイ、キャシーとピラー・リブ・イン・パリス、ワンマンズ・レイター」

「Paris?」

「イエス」

「Sounds just like Cathy!」

「だから、ユー・アー・セイフ！」

「You are like my bodyguard!」

「イエス、アトム・ベリーグッド・ボディガード」

「Yes, you are! Better than I am」

「ユーアー・ユースレス・ボディガード」

「Oh! You have no mercy!」

今朝は怒りすぎて無表情だったダニーが笑ってるわ。

それにしても、人間って究極怒るとあそこまで無表情になるのねえ、怖かったわあ。

片づけが終って、早めにお風呂に入って、部屋から出てきたら、

ダニーがウッドデッキのところに座ってるわ。

何か考えてるのかしら？ それともボーッとしてるだけ？ そうね、疲れたのね。

「Romie」

あなたの無防備な姿を、そっと見てるのも好きなんだけど...

「Do you want beer?」

「イエス」

やっぱり一緒にいたいわ。

「I was amazed」

「ホワット？」

「You communicated with Cathy so easily.」

キャシーと簡単にコミュニ... コミュニケーションしてた？

「She is very difficult to understand, what to say... a kind of out of control」

彼女を理解するのはむずかしい？ アウト・オブ・コントロール、そうですね。

「But you dealt with her... like a magic」

「ナット・マジック、ベリー・イージー」

「Easy?」

「イエス、キャシー・イズ、10イヤーズオールド・ガール」

「what does it mean? She is 42」

なんて言えばいいのかしら...

「アイアム・マザー、アイ... 育てた... あ、レイズド・マイ・ドーター」

「Yes, I know. And?」

「10イヤーズオールド・ガール... んっと、ドウ・ホワット・シー・ワント、

セイ・ホワット・シー・シンク、そうね... サムタイム、セイ・ビフォー・シンク」

そうよ、10歳の女の子って、したいことして、言いたいこと言って生意気なんだから！  
同じ年の男の子よりマセてるのよね。

「What is the point?」

ポイントは何か？ だから、

「キャシー・イズ、永遠のって？ あ、フォーエバー・10イヤーズオールド・ガール」

「You mean... Cathy is an eternal 10 years old girl?」

そうよ！ 永遠のって、エターナルだったわ！

あ、それはいいのよ。

「イエス」

「Sorry, I don't get it. What do you mean?」

だ〜か〜ら〜

「ユー・マリー、エタ・エターナル・10イヤーズオールド・ガール」

なにその顔？ まだわからない？

「ユー、えっと、扱う、トリート・キャシー、ライク・アダルト・ウーマン」

「She is」

「インサイド！ インサイド！ リメンバー・ホワット・アイ・セイ！

キャシー・ドウ・ホワット・シー・ワント、キャシー・セイ・ホワット・シー・シンク、  
ときどき、サムタイム、キャシー・セイ・ビフォー・シー・シンク！ いつもかしら？

イツ、ジャスト・10イヤーズ・オールド・ガール！」

「Ah!」

やっとわかった？

「でも、マン・シー・ジャスト・アウトサイド、だから、ユー・キャント・アンダースタンド」

「Wow!」

「ね？」

「Romie, You can be an excellent counselor!」

なに言ってんの！

「マザー・ハフ・トゥ・ビ・カウンセラー！」

「You are a great mother!」

「ノー！ イット・ワズ・ハード！ 美香イズ、ベリーベリーベリー・ハード！」

「Hahaha!」

「トゥルー！ だから、キャシー・イズ・ベリー・イージー！」

美香とくらべたらナッシングだわよ。

「You got Cathy just in a day! I spent 20 years and I couldn't」

だって、あなたは男だもの、ていうか、1日もかからなかったわ、30分くらいよ。

「So... I've married 10 years old girl. Wow... It does make sense」

「だから、ユー・アー・ナット・バッド・ハズバンド」

「Well... I'm not sure about it though」

「ユー・セイ、キャシー・ネバー・クック」

「Yes, I did. She never cooked」

「ドウ・ユー・ノウ・ホワイ？」

「Well, when we married, she's already pregnant. She said she didn't feel well, and so she couldn't.

Then she lost our baby, she said she didn't feel like cooking. After she started to be on TV program,

She said she's too busy to cook」

妊娠してるときは気分が悪くて... 流産した後はそんな気になれなくて、  
テレビに出るようになって、忙しくて料理できない...

それを... 信じてたの？

バカじゃない？

「ダニー、ドウ・ユー・ハブ・チャンス・トゥ・イート・キャシーズ・クッキング・ビフォー？」

「Yeah, before we married, she brought me gorgeous lunch box almost everyday」

ゴージャスなランチボックスを、ほぼ毎日持ってきた...

さすがラブ・ハンター！ 誰かに作ってもらったのね。

「It didn't matter that she didn't cook or not. We went restaurants, using catering service」

レストランやケータリング...

「Cooking was not important」

え？

クッキングは... インポートじゃない...  
料理は... 重要じゃない...

あ、そう。

「グッド」

「What do you mean, good?」

「アイ・ゴー・トゥ・ベッド、グッナイ！」

そうね、料理なんて、重要じゃないわよね。

バカじゃない？

見え見えじゃない！ あんな言い訳信じてたなんてバカよ！

ああ、でも、いいのよね、料理なんて重要じゃないのよね、キャシーがいればよかったのよね。

あんなに可愛いんだもの、女の私でさえ可愛いと思ったもの、おバカさんだけど。

男はおバカさんが好きなのよね、料理ができなくても。

それに美人だし、ボトックスしてたとしても、生え際にリフトアップの痕があったけど。

ダニーが今朝あんなに怒ってたのは、きっとまだ未練があったのね。

だから、あのバービー人形の毛の薄い恋人に嫉妬して怒ってたんだわ。

一緒に来るって言ったのも、私のボディガードとか言っちゃって、本当はキャシーといたかったんじゃない？

未練っていうやつ？ そうよね、離婚してまだ1ヵ月でしょ？ 男って未練がましいもの。

バカみたい！ 私がよ！ 彼をレスキューしたなんて、レスキューされたくなかったのよ。

もっと一緒にいたかったんじゃないの？ そうかもね。だから、あんなにグッタリしてても、

何も言わなかったんだわ。私が勝手に、引き離したってこと？ そうね。

パリに行くのも、本当はショックなのかもね。それなのに、私ったらセーフだなんて、

バカじゃない？ ダニーはまだキャシーを愛してるのよ！

あ...

だからだわ...

キャシーたちが帰った後、怒ったみたいに私のこと引っ張って、

あのキスだって怒ったみたいなキスで、なんていうの？ あの二人を見てイライラして、

私に八つ当たりキス？ そうよ！ そんなカンジ！ ひどい！

それなのに、私ったら、キャシーは10歳の女の子だとか、わかったように解説なんかしちやっ

、

そんなこと、ダニーにはどうでもいいのよ！ 料理なんか重要じゃないくらいにね！

べつに私はプロのシェフでもなければ、世界料理愛好団体の代表でもないけど、

そんな団体ないと思うけど、料理が重要じゃないって、私ができることって料理くらいよ！

それを全否定したってことは、そうよね、やっぱり私よりキャシーがいいのよ！

そりゃそうよ、キャシーが真っ赤なバラだとしたら、私はカスミ草？

ううん、おまけでつけてくれるハッパ程度だわ。

そうよ、キャシーはロミオが一目で恋に落ちるほど美しいジュリエットよ！

本物のジュリエットの方が頭はいいけど。そうだとしたら、私は？ 乳母よ！

ジュリエットのお世話をする乳母！ まさに今日はそんな感じだったもの。

な～にが暗号よ！ キャシーに、何か言ったら？って言われて、褒め言葉なんか出ないから、

ロミオのセリフ言ってごまかしたんでしょ！ 鳩！ そうよ、そりゃカラスの中にいたら、

鳩だってきれいに見えるわよ！ なにそのセリフ？ ロミオってバカじゃない？

あ、シェイクスピアが書いたんだわ、だったら、シェイクスピアもバカよ！ 男はバカよ！  
そうね、キャシーがきれいなカナリアだとしたら、私は鳩よ、神社の境内で豆つつく鳩よ！

なにが腹が立つって、ダニーに愛されてるって思い込んでた自分よ！  
きっと、ただ淋しかったのよ、離婚して1ヵ月で私に来て、それで、なんとなく、  
淋しさが紛れるから、愛してるとか言っちゃって、実際キャシーと再会したら、  
やっぱりキャシーのことを愛してるってわかったんだわ！ いいわよ、それならそれで。  
だったらハッキリ言ってよ！料理なんて重要じゃないって、そういうこと？  
遠回しに私は重要じゃない、そういうこと？ 愛してないってハッキリ言えばいいじゃない！  
いいわよ、べつに、ショックなんか受けないわよ、若い子じゃないんだから！  
今だって、ほら！ いつもなら、ほら！ すぐ来るでしょ？ 来ないもの！  
やっぱり私のことなんて愛してないってわかったからよ！

浮かれてた自分がイヤになる...

いい年して...

あと二週間もここにいるのが... 長いわ... 二週間も一緒にいるなんて...

ダニーの心は、まだキャシーにあるってわかってるのに...

朝になったけど...

起きる気になれないわ。

どうせ朝食作ったって、それがなんだっていうの？

そんなもの、どうでもいいのよ。

もう10時...

このまま、ここにこもっててもしかたないわ。

ダニーにハッキリ聞くわ、その方がお互いにサッパリするわ。

そうね、お友だちでいいじゃない。

その方がいいわ、それだったら、二週間後に帰るとしても、辛くないもの。

いない。

どこにも... いない。

キャシーがパリに行くって知って、キャシーに会いに行ったのかしら？

そうかもね。

あら？ 冷蔵庫の扉に... 白い封筒が...

“To Romie”って書いてある。

置手紙？

本当の気持ちが書いてるのかしら...

本当はキャシーを愛してるってわかったって...

わかってるけど...

開けるのが怖い...

でも、ちゃんと現実と向き合わなきゃ。

分厚い...

二つ折りの手紙を... 開けて...

達筆だわ。

英語でもあるのよ、達筆って。

おとうさんが古い文献とか持ってたし、私もたまに整理を手伝ってたからそれくらいはわかるわ

。

それに、私、読むのはまだ得意な方なのよ、聞いたり話すのはすっかりダメになったけど。

“Dear Romie (Hiromi)”

突っ込んでいいかしら？

カッコに入るものが逆でしょ！ Hiromiが本当の名前なんだから！

まあ、いいわ。

*Dear Romie (Hiromi),*

*I am not the kind of a man who can express my feeling, emotion, my thought.*

*But I will try to tell you as much as I can.*

“僕は感じていること、感情、考えを表現できるような男ではない。



けれど、できるだけ君に伝えようと思う。”

そうね... 本当のことを言ってもらった方がいいわ。

## 手紙

---

*When Cathy and Peter came, I was very upset.*

“キャシーと”

え？ ピーター？ ピラーだと思ったわ。

“キャシーとピーターが来たとき、僕はとても腹立たしかった”

そうよね、二人一緒の姿なんか見たくなかったわよね。

*Especially Cathy reminded me of horrible days I've spent with her.*

“特に、キャシーは、彼女と過ごした悲惨な日々を思い出させた”

え？

*Those days were nightmare.*

*It was not only for Cathy's fault. I also could not solve our problems.*

“それは悪夢の日々だった。

キャシーだけが悪いわけではない、僕も僕たちの問題を解決できなかった”

*When Cathy was sitting in front of me, I felt like as I was sitting in the past.*

*Past which is composed of despair, darkness, confusion, anger.*

“キャシーが目の前に座っているとき、僕はまるで過去の中に座っているような気持ちだった。

絶望と闇、混乱と怒りで構成されている過去”

*It is nonsense talking about the past, and so I will skip such silly things.*

“過去のことなど話しても無意味だ、こんな愚かなことは飛ばそう”

*I'm not good at writing a letter!*

*It's like a paper for exam.*

*I hope you understand what I want to tell you.*

“僕は手紙を書くのが得意じゃない。

これはまるで試験のレポートみたいだ。

僕が何を伝えたいか君がわかってくれるといいけれど”

ここで気がついたのね...

*The reason I came with you was protecting you from Cathy's madness.*

*I didn't want Cathy to hurt you.*

*She always does unexpected things, and so all my nerves were so tensed.*

*I was watching Cathy like as, yes, as if I were your bodyguard, although you said*

*I was a useless bodyguard, and you were right!*

“僕と一緒にいったのは、君をキャシーの狂気から守るためだった。

キャシーに君を傷つけさせたくなかった。

彼女はいつも予想外のことをするから、僕の全神経はピリピリしていた。

僕はキャシーを見張っていた、まるで、そう、まるで君のボディガードのように、

君は僕を役立たずのボディガードだって言ったけど、たしかに君は正しかったよ”

え...

*You treated Cathy like as your friend, or should I say like as your daughter.*

*You were smiling, you were listening to what Cathy said in a gentle attitude.*

*Unconsciously my eyes were following you, only you. I couldn't stop seeing you.*

*You were very natural, elegant, cute... impossible to write down everything I felt.*

“君はキャシーを友だちのように、それとも娘のようにというべきかな、扱っていた。

君は微笑んでいた、優しい態度でキャシーの話を聞いてあげていた。

無意識に、僕の目は君を追っていた、君だけを、君を見ずにはいられなかった。

君は自然で、エレガントで、可愛くて... 僕が感じたことすべてを書くのは不可能だ”

*When you showed up with the white dress, you took my breath away.*

*At that time I understood from the bottom of my heart,*

*How Romeo felt when he first saw Juliet.*

“君が白いドレスで現れたとき、僕は息もできないほど魅せられてしまった。

あのとき、心の底からわかったんだ、ロミオが初めてジュリエットを見たときの気持ちを”

'O, she doth teach the torches to burn bright!  
It seems she hangs upon the cheek of night  
Like a rich jewel in an Ethiope's ear;  
Beauty too rich for use, for earth too dear!  
So shows a snowy dove trooping with crows,  
As yonder lady o'er her fellows shows.  
The measure done, I'll watch her place of stand,  
And, touching hers, make blessed my rude hand.  
Did my heart love till now? forswear it, sight!  
For I ne'er saw true beauty till this night.'

*I'm sure you know these lines of Romeo.  
I wish I could complain to Shakespeare,  
These are not enough to express my feeling for you.  
You might laugh, and I know I'm a fool, love makes me a fool.  
Romie, I fell in love with you, again.  
It's not because of that white dress, it's because of you.  
When you showed up with that dress, I wanted to say this line, instead of Dove part.*

“Did my heart love till now? forswear it, sight!  
For I ne'er saw true beauty till this night.”

*It was very hard to suppress my passion, desire, love.  
Romie, I'm a stupid Romeo!*

“もちろん君は、このロミオの台詞を知ってるよね。  
僕はシェイクスピアに文句を言いたいくらいだ。  
これでは僕の君に対する気持ちを表しきれないよ。  
君は笑うだろうね、わかってるよ、僕は愚か者だ、愛が僕を愚か者にするんだ。  
白いドレスのせいじゃなく、君のせいで...  
僕は君に再び恋に落ちてしまったんだ。  
君がああのドレスで現れたとき、僕は鳩の部分ではなく、このパートを言いたかった。

”僕の心は今まで恋に落ちたことがあったか。我が目よ、誓いを取り消せ。  
僕は今夜初めて本物の美しい人を見たのだ”

僕の情熱や欲望、愛を抑え込むことは難しかった。  
ロミー、僕はバカなロミオなんだよ”

*Right after Cathy and Peter left, I was totally out of control.  
Passion and desire burst out and I couldn't stop...  
I'm sorry for scaring you, but I wanted you so badly.  
I wanted to have you as mine so badly.  
My behavior at that time was... just like as stupid Romeo!  
But Romie, you have to know, or you already know, I am just a man, just a stupid man!*

“キャシーとピーターが去った後、僕は完全に制御不能だった。  
情熱と欲望が爆発して、止めることはできなかった...  
君を怖がらせてごめんね、でも僕は君が欲しくてたまらなかった。  
君を僕のものにしたくてたまらなかった。  
あのときの僕の行動は... まるでバカなロミオそのものだ！  
でも、ロミー、わかってほしい、いや、君はもうわかってるだろうけれど、  
僕はただの男なんだ、ただのバカな男なんだよ”

*You explained me that Cathy was just an eternal 10 years old girl.  
It did make sense, and finally I could understand everything of Cathy's queer behaviors.  
I was like a helpless dad who could never handle his teenage girl.  
You changed my tragedy into the funniest comedy!*

“君はキャシーが精神的に10歳の女の子だと説明してくれた。  
それでわかったよ、やっとキャシーの奇妙な行動すべてが理解できたんだ。  
僕はまるでティーンエイジの娘に振り回される父親みたいだったんだ。  
君は僕の悲劇を最高に笑える喜劇に変えてくれたよ”

*You asked me that Cathy had cooked or not.  
To be honest, since right after I married her, I had to handle too many things.  
Many things Cathy required me, I could never think about such as cooking, cleaning,  
daily stuff in my life, well, I have to say in our marriage life.  
I was handful and exhausted. What a horrible husband I was to feel like that.*

“君はキャシーが料理したことがあるかどうか聞いたね。

正直に言うと、結婚直後から、僕はキャシーが要求してくるあまりに多くのことをなんとかするのにいっぱい、僕の人生で、いや、僕たちの結婚生活の中で、料理や掃除のような日常的なことを考えることなんてできなかった。

僕は手いっぱい疲れ果てていた。こんなことを感じるなんてひどい夫だったよ。”

*Also I must confess...*

*Forgive me. I was thinking totally a different thing when you were talking about Cathy.*

*My heart was beating so fast for just looking at you and I couldn't think about anything but you.*

*I wanted to tell you how much I love you.*

*I know I wouldn't be able to do well, I'm not good at such things.*

*Actually I couldn't, you went to bed, I understood you must have been exhausted.*

*Shopping with Cathy was almost... suicide!*

“それに、白状すると...

僕をゆるしてほしい。

君がキャシーのことを話していたとき、僕はまったく違うことを考えていたんだ。

君を見ているだけで心臓がバクバクいって、君以外のことは考えられなかった。

僕がどれほど君のことを愛しているか伝えなかった。

そういうことは得意じゃないから、うまく言えないとは思ったけど。

実際できなかったよ。君が寝てしまったから。でも、君は疲れ果てていたんだと思う。

キャシーと買い物するなんて... ほとんど自殺行為だ！”

*So I'm writing this letter to you now.*

*I know I won't be able to tell, speak, pronounce, it's not possible to me.*

*If I could, I want to ask you...*

*Please be my girl.*

*Danny (Dan)*

“だから僕は今こうして君に手紙を書いている。

僕は君に伝えることが、言葉にすることが、口に出して言うことが、不可能だと思う。

できることなら、君に願いたい...

どうか僕の恋人になってください”

これって...

本当にダニーが書いたの？

こんなにしゃべる人だった？　しゃべってないけど、書いてるんだけど。

こんなに情熱的？　まあ確かにキスとかは...　そうだけど。

だって、アイ・ラブ・ユーって言うときだって、優しい愛しそうな目はするけど、ここまでパッション満載って感じじゃないわよ？

ていうか、あまりに情熱的すぎて、私に書いてるって実感がないんだけど。

誰かに書いたラブ・レターを読ませてもらったみたいな感覚？

それで？　ダニーは？

書きっぱなしで放置？　逃げたの？

なに？

わかんない。

## ヴォイス

---

ふつう... こういう手紙をもらったら嬉しいわよね？

こんな情熱的な手紙、生まれて初めてもらったわよ。

本当に私宛て？ 私よね、本名と呼び名の両方の名前書いてるし。順序は逆だけど。

本当にダニーが書いたの？ ダニーにきまってるわよね。内容読んだってダニーしかいないわよ。

だいたいここで私に手紙書く人って、ダニーしかいないじゃない。

冷蔵庫の扉にマグネットで貼り付けてあったし。

だけど、なんで、こうピンとこないのかしら？

まあ、料理が重要じゃないっていうのは、料理どころの騒ぎじゃなかったってことだったのね。

それは、まあね、誤解しちゃったわ。

え？ でも、この手紙だと、ダニーは私が誤解して怒って部屋に入ったとは思ってないのよね？

キャシーと買い物して疲れ果てたからって思ってるわけよね？

だったら、なんで手紙なんか書いたの？ 今まで手紙なんか書いたことないじゃない？

私があきらかに怒ってたときだって、そういうときは、いつもドアを開けて入ってきて、

あ、ほら、家を飛び出したときだって探しに来たわよ。

突然この手紙を書いた意味がわからない。

なんで？

あ、ドアが開く音がした。

帰ってきたんだわ。どこに行ってたのかしら？

どうする？ いちおう覗いてみる？

そっとリビングを覗くと...

向こう向いて... なに？ あの大きい封筒？

いちおう声かける？ そうね。

「ダニー」

「Waaaa!」

そこまで驚かなくても...

「Ah... Ro, Romie... G, good morning」

もうお昼近いけど...

「グッモーニン」



「Ah... How are you?」

ハ?

「アーム・ファイン、サンキュウ、アンド・ユー？」

「I'm fine... Thank you」

なにこの英語の授業みたいな会話？ しかも中一の教科書の初期！

「Ah... I went to... an office」

オフィス、仕事場？ ああ、そうだったの。

「May I put... this stuff into my room?」

べつに私に聞かなくても...

「イエス」

「Thank you」

なに？ なんであんなにオドオドしてるの？ 私が何かした？

あ、戻ってきたわ。

「Coffee?」

「あ、イエス」

な～んかヘンだわ。

ソファと一緒に座ってるけど、私の膝に頭を乗せるわけでもなく、ちょっと間空けて座ってるのよ。

チラッとこっちを見るから、私も見ると、サッて顔そむけるのよ。

なんで？

「ダニー」

「Yes?」

「ホワット？」

「Ah... What do you mean what?」

「ユー・アー・ストレンジ」

「Am I?」

「イエス」

「Well... maybe...」

多分って、絶対的にヘンよ！

あら？ もしかしたら、この手紙を読んだかどうか気になってるのかしら？  
あれだけ情熱的なこと書いたんだもの、気になるわよね。

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・リード・ディス・レター」

「You did?」

「イエス」

「Ah... Ok」

ちっともオーケーな顔じゃないわよ？

あ、手を動かして、上向いたり横向いたり、何か聞こうとしてる？

「ホワット？」

「What do you mean... what?」

さっきもまったく同じ会話をしたわよっ。

「ドゥ・ユー・ワント・アスク・サムシング？」

「Ah... yes... Ah... Did you... understand?」

「レター？」

「Yes, that letter...」

「ノー」

ポカン？ そして... なんでちょっと安心したような顔？

「Ah, ok. It's just... I... I wrote it in the midnight, so... it's too...」

夜中に書いたから、なに？

ああ！ そうね、よくあるわよ、私も何回もあったわよ、夜中に書いて、  
朝になって読み返したら、叫びたくなるほど恥ずかしいこと書いてたってこと。  
でも、そういうことじゃないのよ。

「アイ・アンダerstand・ホワット・ユー・ライト」

「What do you mean?」

どういう意味って、どういう意味？

「アイム・ベリー・グッド・アット・リーディング」

読むのは得意なのよ。

「だから、アイ・アンダerstand・エブリシング・ユア・レター」

なにその絶望的な顔？ だって、私に書いたんでしょ？

「But... You said you didn't understand...」

「アイ・ドント・アンダerstand、ホワイ・ユー・ライト・ディス・レター」

「Why? Are you asking me why? Why did I write this letter?」

三回もホワイ言う？

「It's just because I wanted to let you know my feeling and... how much....I... love you」

「ドウ・じゃない、ディドウ・ユー・ノウ・アイム・グッド・アット・リーディング？」

「No」

ハ？

私が読むのが得意かどうか知らないで書いた...

理解できないかもしれないのに書いた...

なんで？

「ホワイ？」

「Again?」

「ホワイ、ユー・ドント・セイ・トゥ・ミー？」

「As I wrote... I'm not good at express my... emotion」

ハ？

「アイム・ナット・グッド・アット・ヒアリング、スピーキング」

でも...

「アイム・トライング・アンダerstand・ユー、トライング・セイ・マイ・フィーリング」

「Yes, I know. You are amazing, it's true」

そうだわ...

なんで、こんなに情熱的な手紙をもらっても、ときめかなかったのか...

なぜ自分に宛てて書かれたものに思えなかったのか...

わかったわ...

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ライク・ユア・ヴォイス」

ちょっと驚いたような目で私を見てるけど、そうなのよ。

「アイ・ワント・ヒア、ロミーとか、イエスとか、ユー・ネバエバ・ボア・ミーとか、  
コーヒー?とか、ユア・ボイスで、だから、スピーク、プロナウンス」

「Romie...」

「ほら! アイ・ライク・ユア・ヴォイス!」

「Coffee?」

「アトム・ドリンキ〜ング」

ちょっとキャシーの真似しちゃった。

「Oh, Romie! I love you!」

「アイ・ノウ!」

「Hahaha!」

「ユー・エブリタイム・テル・ミー、だから、アイ・ノウ」

「That's right」

「アトム、ユー・ノウ、アイ・ラブ・ユー」

「Oh! Do you? I didn't know that!」

「えっ? 言わなかったっけ?」

「I'm just kidding, hahaha!」

わかった! アトム・ジャスト・キディンって、からかったってことね!

「Romie」

抱きしめられちゃった。

やっといつものダニーに戻ったわ。

「Romie, be my girl」

「オーケー」

「Ok? So casual!」

「じゃ、Ay」

「So classic!」

「だったら... イエス」

ダニーが... 私の好きな茶色の... 優しくて愛しそうな目で... 私を見てる。

「You know what?」

「ホワット？」

「You never ever bore me」

「ユー・ネバエバ・ボア・ミー、トゥ」

笑ってる、いつもの笑顔で...

あんな情熱的な手紙を全否定しちゃって申し訳ないけど、

私、ああいう手紙でときめくほど若くないの。

あなたとふつうに、こうやっている方がときめくのよ。

取扱いがむずかしいでしょ？ 50歳の女って... 10歳の女の子より。

私ね、昔からよく言われるのよ。

おとうさんにも言われてたし、美香にもよく言われるわ。

なんでそんなどうでもいい細かいことにこだわるんだって。

たしかにね、そうだとは思うのよ、私がいつも引っかかることって大きなことではないの。

でも、案外それが実はとっても大切なことだったりするのよ、私はそう思うんだけどね。

まわりはそうは思わないらしいの。

たとえばね、ほら、このトマト、真っ赤できれいよ、もちろん完熟で美味しいわ。

このトマトを真っ赤なお皿に乗せるとするでしょ？

そうしたら、せっかくのこのきれいな色が目立たなくなっちゃうでしょ？

でもね、どんな色のお皿に乗せたって味は変わらないのよ、それはわかってるの。

だけど、私はトマトを赤いお皿に乗せたくはないわけよ。

それで言われるのよ、何色のお皿に乗せたって味は変わらないんだからいいでしょって。

そうなんだけどねえ。

でも、今、私が引っかかっているのはトマトじゃないのよ。

ダニーの手紙。

まだそこ？よね。わかってるのよ、でも、な～んか引っかかるのよ。

私が理解できないかもしれないのに、あれをなぜ書いたのか？ってところなの。

だって、手紙って伝えたいことを伝えるために書くわけでしょ？

あれを書いた時点では、ダニーは私がある全部理解できるとは思ってなかったのよ。

それなのに、なんで書いたのかしら？

まあ、私が、手紙じゃなくて声に出して言ってって、たいしたことじゃなくてもいいから、

ダニーの声が聞きたいって言って、それで終わっていいはずなんだけど。

そんなこと言った本人の私がまだ納得できてないのよ。

まあそれでも、あれを読んだからわかったこともいくつかあったけどね。

でも、それじゃ解説書じゃない！

あんなに一生懸命、おそらく必死に書いた手紙を解説書呼ばわりはひどいわね。

でも、私が理解できたから解説書になれたのよ。

理解できなかったとしたら、ただの様子が書いてある紙よ？

私がこだわってることって、トマトをどの色のお皿に乗せるか程度のくだらないこと？

私はどっちもくだらないとは思わないんだけどね。

でもね...

「ダニー」

「Yes?」

「ホワット・ドウ・ユー・・・シンク、トマト？」

「What do I think... tomato salad? It's delicious!」

「そうじゃなくて、アイ・プット・トマト・オン・ホワイト、お皿、あ、ディッシュ」

「Ah...yes」

「イフ・アイ・プット・トマト・オン・レッド・ディッシュ、ホワット・ドウ・ユー・シンク？」

あ、考えてるわ、考えてくれてるわ！

「Do you want red plates?」

ちがうっ！

赤いお皿が欲しいわけじゃないのよ！

え？ これってプレートっていうの？ ディッシュとどう違うの？

そんなことはどうでもいいわ！ 今はね、今はどうでもいいわ、あとで考えるわ。

この人に聞いた私がバカだったわ、だいたい、私が理解かもしれないのに手紙書いた張本人だもの。

「Why did you ask me about the color of plate?」

だから... お皿の色は...

「ナッシング、マイ・クエスチョン・イズ・ナッシング、美香セイ・ソウ」

笑ってるわ、あなたもそう思ってるのね、そうね、いいわ、片づけるわよ。

今はね、ソファに座って脚をテーブルに乗せて本を読んでいるダニーの肩に頭のせてボーッとしてるの。

ダニーは片腕で私の肩を抱いて片方の手でページめくってるわ。

読みにくくないかしら？ 私、どいた方がいい？ めくってあげる？ 何読んでるのかしら？

なんだか難しい単語ばかり並んでるわ。

「What are you looking at?」

何を見てるのって...

「ユア・ブック」

「Do you wanna read? You are good at reading, right?」

なにそれ、イヤミ〜っ？

いいわよ、読んでやるわよっ！

「アイ・トライ！」

えっと？ え〜っと...

A relationship in which said patented invention or invention has been disclosed...

関係... パテントって特許？ 発明、特許のある発明か発明はdisclosed、開示された？

これって... 日本語で書かれていたとしてもわからない...

「So?」

そうって...

「サムシング... アバウト... インベンション」

「Good!」

絶対バカにしてる。

「リード、アイ... 邪魔しないって... あ、ドント・ディスターブ」

「You never disturb me」

いいの、私のことは気にしないで、私も考えることがあるから。

えっと、なんだったっけ？

あ、そうそう手紙だわ。

この人は、今みたいに、私が理解できないだろうと思ってたのに書いたのよね？

そこが、やっぱりわからない。

「What are you thinking? About patented invention?」

発明のことなんか考えてないわよ。

「アイム・シンキング、アバウト・ユア・レター」

「Oh! You're still thinking about my stupid letter!」

「イツ・ナット・ステューピッド、でも、アイ・ドント・アンダスタンド」

「You said you understood」

「イエス、でも、アイ・ドント・アンダスタント、ホワイ・ユー・ライト・レター」

「Oh... You still want to keep talking about my letter. Ok! Keep. Talk, I'm listening」

「ドント・リスン、聞くんじゃないで、アンサー」

「Answer... To what?」

「えっと... でも... そうよね、マイ・クエスチョン・イズ・ナッシング、忘れて、フォーゲット」

「Romie, I will answer, if you have any question. Just, ask me」

「そう？ じゃ、お言葉に甘えて、えっと、あ、可能性、パッシビリティ」

「Possibility, ok, and?」

「パッシビリティ、アイ・ドント・アンダスタント・ユア・レター、でも、ユー・ライト」

「Yes... and?」

「ホワイ？」



「Oh... why, again, ok, let me see...」

考えてるわ... 答えが出るのかしら？

「Do you know the song, Michelle?」

「ミッシェル？ だれ？ フー？」

「A song, one of The Beatles」

「ビートルズの歌？ ヘルプ？」

「Ah, Yeah, 'HELP' is one of their songs, but I'm talking about 'Michelle'」

ミッシェル？ どんな歌？

「Don't you know 'Michelle'？」

う～ん... 聞けばわかるかも。

「ダニー」

「Yes?」

「シング」

「What?」

「シング」

「Ah... Do you want me to sing 'Michelle'？」

「イエス」

「Oh...no, no, no...」

「アイ・ワント・ノウ！ シング！」

「Oh... you are serious」

「アトム・シ」

「You are always serious, I know, I know」

なにその両手広げて、目を上に向けて、神に助けを乞うみたいなの？ さっさと歌ってよ！

「I will sing, but... Don't look at me」

歌うけど？ 自分を見るなど。 わかったわ、反対側見てるわよ。

深呼吸してる。

いいから、早く歌ってよ。

「'Michelle, ma belle. These are words that go together well, My Michelle'」

ン～？ 聞いたことあるような...ないような...

「シング・モア」

「Sing more? Ah... Ok.

‘Michelle, ma belle. Sont des mots qui vont très bien ensemble, Très bien ensemble’」

ハ？ 全然わかんない。

「アイ・ドント・アングスタンド、ナッシング！」

「It's French words」

「ああ！ フランス語！」

「Do you know the song?」

「ン〜... シング・モア」

「More? Is it a torture or something?」

「ホワット？」

「Nothing, ok... Ah...

‘I love you, I love you, I love you. That's all I want to say’」

「ああ！ ダニー！ グレート！ アイ・ライク・ユア・シングイング！」

「Ah, thank you for your applause, but it's not the point. Do you know the song or not?」

「聞いたことあるような...ないような...って、なんて言うの？」

「Let's see...」

この歌がなに？

「Oh! Yes! Just a sec!」

あら？ 自分の部屋に行っちゃった。 なんで？

あ、戻ってきたわ。

ノートパソコン？

「Let's see...」

なに？ あ！ YouTube！ こっちだと全部英語表記なのね、まあ、そうよね。

「Here you go」

“Michelle- The Beatles (with lyrics)”

歌詞付きってことね。

すごくシンプルなギターの音と優しいメロディ...

“愛してる これが僕が言いたいことすべてなんだよ

君がわかってくれそうな言葉を僕は言い続けるよ

君が僕にとってどんなに大切な存在か、君がその意味をわかってくれるように願い続けるよ”

この男の人は... 多分フランス人のミッシェルを愛して...

彼女は英語がわからなくて... でも、この男の人は彼女がわかってくれるまで、  
ずっと言いづけるよって... そういう歌...

「Did you get the meaning of lyrics?」

「イエス...」

「I wrote that letter to you in the same reason as he did」

私がいかにわからなかったとしても、わかるまで... 気持ちをわかってもらえるまで...  
言い続けようとして...

「Well, this is a man!」

そうだったのね...

それなのに、私ったら、口で言えとか、解説書だとか...

「ダニー... サンキュー・フォー... ユア・レター」

ダニーが... ちょっと恥ずかしそうに微笑んでるわ。

「アイム・ハッピー、トゥ・ハブ... ユア、ラブレター」

「I'm luckier than he is, because you understand」

ほらね。

私が引かかることは小さいことかもしれないけど、実は大切なことなのよ。

WRITER: LENNON, JOHN WINGSTON / MCCARTNEY, PAUL JAMES

Lyrics © Sony/ATV Music Publishing LLC, Universal Music Publishing Group

## 初めて知った事実

---

目が覚めちゃった。

今何時？ 5時半ちょっと過ぎてるくらいね。

ダニーは寝てるわ。

寝てるときの顔って無防備よね。

写真撮ったら怒るかしら？ 私なら怒り狂うわね。

あ、いびきかいた。

若い頃だったらショックだったかもね。

おとうさんがいびきかいたのを初めて聞いたときはショックだったわ。

あの憧れの人がいびきかくなんてって。

だって、竹之内豊そっくりだったのよ？ 友だちは全然似てないって言ったけどね。

むしろ竹之内豊に失礼だまで言われたけどね、でも私にはそう見えてたのよ。

その竹之内豊が、竹之内豊ではないけど、いびきかいたのよ？ ショックだったわよ。

でも、今はなんとも思わないの。

いちおう好きな人でしょ？ いちおうって、好きよ、好きな人よ、その人がいびきかいてるのよ

。

でも、そんなことなんとも思わないの、だって人間だものって感じ？

初々しさのカケラもないわね、50近くで初々しさなんか要求されても困るけどね。

こうやって寝顔見ると... 実感がないのよ。

この人が私をあんな情熱的な言葉満載の手紙書いて、あのミッシェルの歌みたいな気持ちで、私にわかってもらえるまでって思ってるとか、そこまで愛してもらってるとか。

ひどいわよね、でも、どうしても、それほどまでに愛されちゃってるって実感できないの。

ほら、右腕なんか一晩中腕枕してくれてたのによ？ 嬉しいって思うべきよね？

でも、私、無理しなくていいのになんて思っちゃうの。だって一晩中腕枕なんかしてたら、

うっ血しちゃうわよ？ 固まっちゃうし。起きたとき痛くて大変だろうなあって思っちゃうの。

若いときは嬉しかったわよ。おとうさんも最初のうちはやってくれてたわ。

でも、結婚したてのときには、おとうさんはもう36歳だったから、肩痛めちゃって、

病院に行ったら四十肩って言われたのよ、30代なのに四十肩！

あのとき悟ったわ、腕枕って若い子しかやっちゃダメだって。私はまだ若かったけどね。

二十代前半で腕枕してもらうことをあきらめたのよ、腕枕の現実を知ったみたいな？

まあそれはどうでもいいわ。どうしよう、この腕、戻してあげる？

でも、へたに動かしたらそれこそ四十肩になっちゃうわよね、もう五十肩ってことになるのかしら？

どっちでもいいわ、とにかく、私は頭をどけた方がいいわね。

あ、それより、もう起きて顔洗って、ゆっくり朝食の準備でもするわ、どうせ目が覚めちゃったし。

えっと、顔も洗って着替えたけど、まだ朝食作るには早いわねえ。  
ウッドデッキにでも出て新鮮な空気でも吸う？

あ... ソファの前のテーブルの上に昨日のままのノートパソコン。

あの歌は素敵だったんだけどねえ。

そうだわ、美香、向こうは何時？ 夜の7時か8時？ 帰ってきてるかしら？

ときどき、友だちと飲みに行くからとか言っちゃって遅く帰ってくるのよね。

あれは絶対デートだと思うのよ。まあ、年頃だからいいんだけどね。

えっと... 電源は... ここね。あら？ 昨日の画面が出たわ。電源切ってなかったのね。

フェイスブックは... ここ。ログインして... いたいたいた！

ひろみ：mika!

あら？ なんで返信しないの？ 気づかない？

ひろみ：mika!!!!

美香：珍しいね、こんな時間に。

よかった... 気づいたのね。

それとも、別の人とチャットしてた？ まあいいけど。

ひろみ：Skype please!

美香：オッス♪(´▽`)"

27にもなって顔文字って、どうかと思うのよ。

「おお、そっち朝だね、おはよう」

「おはよう... でも、そっちは夜よね？」

「だね」

だねって...

「どうしてるの？ 元気い？」

「まあね」

「元気じゃないの？」

「元気だけど...」

「なに？ ダニーさんとなんかあった？」

「あったっていえばあったんだけど」

「なに？ わかんない、ハッキリ言ってよ」

「ハッキリ？ そうねえ、あのね... ラブレターもらったの」

「ハ？」

「ハってなによ？」

「ラブレターって、手紙ってこと？ 紙に書いてるやつ？」

「そうよ？」

「チョー・ガラパゴス！」

「な、何語っ？」

「ガラパゴスっていうか、平安時代？」

「ハアッ？ 何言ってるの！ 昨日もらったのよ！」

「だって今どき手紙って、しかも傍にいるのにさ」

「あのね、おかあさんたちの時代はね、携帯もパソコンもなかったから、手紙なの」

「まあいいけど、それで？」

「なにが？」

「なんて書いてあったの？」

「えっとね、ちょっと待って、今もってくる！」

「だいたいでもいいよ！」

「要約できないのよ！ 頼むから待っててよ！」

「はいはいはい」

「はいは一回！」

「はい」

まったく何が平安時代よ!? メールで気軽になって軽すぎるわよ！

「ほら、これよ」

「画面で見せられてもわかんないよ」

「じゃ、読むわ」

「マジ？ いいけど」

「いくわよ、“Dear Romie、カッコ、Hiromi閉じるカッコ”、これって逆よね？」

「どっちでもいいよ、さっさと読んでよ」

“I am not the kind of a man who can express my feeling, emotion, my thought.

But I will try to tell you as much as I can”

「おかあさんてさ、書かれた英文読むときは発音いいよね」

「そんなことは今どうでもいいのよ！ 聞いて！」

「はいはい、あ、はい」

三回言ったわよ。

「“When Cathy and Peter came, I was very upset.”」

「ヘッ？ キャシーが来たの？」

「来たのよ！ バービー人形の恋人を年取らせて毛を薄くしたみたいな男と！」

「チョー・ウケる！」

「なにが？」

「おかあさんのたとえが。すごいイメージできちゃうし」

「そこはどうでもいいのよ！」

「で？ キャシーって、どんな人だった？」

「そうねえ、永遠の10歳の少女って感じ」

「意味わかんない」

「それはいいのよ、とにかく読むから、聞いて！」

「はいはい」

もう突っ込む気にもならないわ。

音読したわよ、全文、まるで高校の英訳の授業であてられたときみたいな気分だわ。

「どう思う？」

「どう思うって？」

「この手紙、どう思う？」

「それは、おかあさんが思えばいいことでしょ」

「そうだけど、聞いてて、どうだった？ 情熱的？」

「正直言っているの？」

「言って！」

「何かの説明文聞いているみたいだった」

「ハッ！ やっぱり？」

「やっぱりって、おかあさんもそう思ったの？」

「そうなのよ！ ときめかないのよ！」

「エ～？ それはかわいそうじゃ～ん、そこまでビッシリ書いてるのにさ」

「美香だって説明文みたいって言ったじゃない！」

「だって、私がもらったわけじゃないもん」

「そうね、でも、もらった私がときめかないって、なんでかしら？」

「私に聞かれてもさ」



「まあ、そうだけど... あ、それにね、この手紙、私が理解できるかどうか知らなかったのに書いたのよ」

「ただ書きたかったんじゃないの？」

「まあね、そうなのよ。ビートルズのミッシェルって曲を聞かせてもらってわかったんだけどね」

「ビートルズ？ ああ、中学校の教科書に載ってた昔のバンド！」

「教科書？ ビートルズが教科書？」

「なんで？ ビートルズって、教材ってイメージしかないよ？」

ガーン... ショック... たしかにビートルズは私より年代がちょっと上だけど...

「ダニーさんてさ、不器用なんじゃないの？」

「不器用？ 頭はいいのよ、難しい本読んでるし。あ、ハーヴァード卒業したんですって」

「っぼいね。だからじゃないの？」

「だからなに？」

「だから説明文みたいな文章になっちゃうんじゃないの？ 理路整然とはしてるじゃん」

「そうなのよ、わかりやすい説明をしてもらってる...としか思えないのよ」

「てか、ラブレターなんて書いたことないんじゃないの？」

「えっ？ そうなの？」

「知らないけどさ」

「そうなのかしら...」

「ねえ、おとうさんからラブレターもらったことあるの？」

「おとうさん？ そうねえ... ラブレター... シェイクスピアのソネットを渡されたけど」

「ハア？ なにそれ？」

「シェイクスピアのソネット知らないの？ シェイクスピアはね、最初はソネットから...」

「知ってるよ！ 私だって英文学専攻だったんだから。なんでソネットなの？ってこと」

「それがね... わからないのよ」

「ハ？」

「今もわからないの」

「聞かなかったの？」

「だって、ほら、おとうさんはおかあさんの先生だったでしょ？」

だから、ソネット渡されたときは課題だと思ったのよ」

「学生のときにもらったの？」

「ううん、卒業してから、お茶でも飲まないかって誘われて、そこで渡されたの」

「それを課題だと思うおかあさんの思考回路がわかんない」

「だって、おとうさんはおかあさんの先生っていう頭しかなかったのよ」

「じゃもうソネットはいいから、ラブレターはもらったことないってことでしょ？」

「そうねえ... ないわねえ」

「ねえ、プロポーズの言葉って何て言われたの？」

「え？」

「私、聞いたことないんだよねえ、興味もなかったし」

「プロポーズ... そろそろいいんじゃないかって言われて... 何がですかって聞いたら...

ご両親にお会いしたいって言われて... 会わせて... 私がお茶を入れ直してて...

戻ってきたら、もう結納はどうするって話になってて... 結婚したのよ」

「ハァァァ？」

「ハア〜って、そうなんだもの」

「おかあさんさ、なんでおとうさんと結婚したの？」

「だって憧れの人だったんだもの、竹之内豊そっくりだったのよ」

「全然っ似てないからっ！ いつも言ってるけど、どっこも似てないからっ！」

「そっ... そこまで全否定するっ？ あなたのおとうさんよ？」

「だって似てないんだもん！ おかあさん目えおかしいんじゃない？」

「美香... おかあさんのこと... そんな言い方って...」

「だから、いいよ、それは。そう思ってるなら思っただけいいじゃん」

「思っただけいいって...」

「おとうさんはさ、おかあさんに一目惚れしたんでしょ？」

「ちがうんじゃない？」

「でも、そう言ってたよ」

「え？ いつ？」

「いつだったかなあ？ おかあさんがお風呂入ってるときで、おとうさんはビール飲んでて、

おとうさんはおかあさんに一目惚れしたんだよって言ってたよ」

「ウソ！」

「マジで」

「そんなこと初めて聞いたわよ！」

「ウツソー！」

「うそじゃないわよ！」

「だって言ってたよ、1年の最初の授業のときにパッと見た瞬間、この人だって思ったって」

「ハア？」

「ハアッて、こっちがハアッ？だよ」

「そんなこと... 聞いたことない...」

「だから辛かったんだってさ、教え子だから、卒業するまで待ってたって」

そうなの？ だって... そんなこと... 一言も言ったことないわよ...

「本当に聞いたことないの？」

「ない...」

「わかった！」

「な、なにが？」

「おとうさんとダニーさんの悲劇」

「なにそれ？」

「おかあさん、鈍感だから」

「どっ鈍感!? 鈍感!? 鈍感!? おかあさんだって、いろんなこと感じて...」

「そういう意味の鈍感じゃないよ」

「じゃ、どういう意味よ？」

「あ、ソフフフ」

「なに? なにニヤニヤしてるの？」

「Hi, Dan!」

ハ?

「Hi, Mika!」

えっ?

あっ!

「キャ————ツ！」

う... うしろに... いた————っ!

「み、美香、なんで言わないのよっ？」

「下の小さな画面に映ってたでしょ？」

え?

あ... 私...と... ダニーが... 後ろに...

「み、美香、そ、そろそろ切るわね」

「待ってよ、私、ダニーさんと話したいから」

ハ?

「Dan, Can I talk with you for just a few minutes?」

な、なにになになに？

「Sure」

なにになになになに？

「み、美香、何言うつもり？」

「挨拶するだけだよ」

「もういいじゃない、したじゃない」

「いいから！ おかあさん、ちょっとあっち行ってて」

ハ？

「Dan, let her go to somewhere」

なにになになに？

「Oh, Mika, you wanna do a secret talk」

「Yep!」

なにになになに？

「Romie, Do you mind if I talk with this young girl?」

ヤ、ヤング・ガール？ なに？ 頭がパニックっちゃって...

「美香、ダニーはなんて言ってるの？」

「若い女の子と話がしたいんだって！」

ハァ～？ 若い女の子と話がしたいいいいっ？

あ、そ！

いいわよ！ どうぞ！

私は... 朝食作るわ！

リビングから笑い声とか聞こえるけど、関係ないわっ。

なにが若い女の子と話がしたいよっ!?

私にラブレターとか、ミッシェル聞かせたりとかしたくせに！

いいけど？ べつに！ 若い女の子の方がそりゃいいでしょうよ！

なによっ、ただのスケベおやじ？ そうね！ 男なんて、みんなそんなものよっ！

でも...

おとうさんが... 私に一目惚れだった...

なんで美香が知ってて、私が知らないの？

本当にそんなこと言ったのかしら？

「Romie」

あっ、きた！ スケベおやじ！

「Mika wants to talk with you」

フン！ さぞ楽しかったでしょうね、若い女の子とおしゃべりできて！

じゃなくて、何言ったのよ——っ、美香———っ！

「み、美香、何の話したの？」

「おかあさん、安心していいよ」

「何を？」

「ダニーさんは、おとうさんとはちがう」

「ハ？」

「私が何も言わなくても大丈夫みたい」

「な、何を言ったのよっ？」

「だから、本当に何も言ってないよ」

「だって、なんか楽しそうに話してたじゃない！」

「ああ、おかあさんの料理は美味しい？とか、そんな話しかしてないよ」

「それで、なんで、安心とか、おとうさんとちがうとか、言ったのよ？」

「だから、そういうふつうの話してたら、そう思っただけ」

「ハ～？」

「いいよ、おかあさんわからなくて、そのうちわかるから」

「なによ、その謎めいた言い方っ？」

「あ、それから、さっきのウソ」

「さっきのって？」

「若い女の子と話したいって」

「え？」

「この女の子と話をしてもいいか？って、ちゃんとおかあさんに聞いてたんだよ」

「ハァァァァ？」

私... スケベおやじなんて思っちゃったじゃない...

「へえ、おかあさんでも妬くんだあ」

「な、なにも言っていないでしょ！」

「妬くってことはさ、やっぱ好きなんじゃん」

「なにも言っていないでしょ！」

「おかあさんてさ、わかりやすいよねえ」

「ハ？」

「それじゃ、またね！」

消えた。

たったひとつ言えることは...

ダニー...

スケベおやじだなんて思っちゃって、ごめんなさい。

朝食を終えて、今はソファでコーヒーを飲んでるの。

ダニーは私の隣りで相変わらずむずかしそうな本を読んでるわ。

美香はとってもラブリー・ガールだねとか言ってたけど、あの子のせいで、

あなたはスケベおやじ扱いされたのよ？って言いたかったわ、言わなかったけど。

英語でスケベおやじって何て言うのかわからないし、そんなこと言う必要ないんだけど。

でも... ちょっとショックだったわ。おとうさんが私に一目惚れだったってことを、

20数年一緒にいて全然知らなかったなんて。それを美香は知ってて、私はさっき知ったのよ？

一目惚れかどうかは問題じゃないのよ、知らなかったってことが問題なのよ。

もしかしたら、私、おとうさんのこと何も知らなかったんじゃないかしら？

何もってことはないけど、でも、ずっと一緒にいて知ってるつもりになってて、

実は知らないことの方が多かったんじゃないのかしら？

でも、美香は知ってて、私は知らなかったってことは... やっぱり私って鈍感なの？

鈍感って...！ これでも、ずっと美香のことやおとうさんのことを一生懸命気遣ってきたつもりよ？

ああ、疲れてるんだなあとか、お腹がすいてるのねとか、風邪じゃない？とか。

でも... 知らなかったことがあったのよ。

てことは、やっぱり鈍感？

ダニーに聞いてみる？ でも、今本を読んでるし、それに、そう思ってたとしても、

本人に鈍感だよなんて言えないわよね。でも美香は言ったわよ。まあ娘だからだけど。

「What are you thinking?」

え？

「You look very serious」

シリアスって言いながら笑ってるってどうかしら？

でも、確かにシリアスよ、私にとってはね。

どうする？ 聞いてみる？ そうね、ハッキリ言ってもらった方がいいわね。

「ダニー」

「Yes?」

「ドウ・ユー・シンク...」

鈍感って、英語でなんて言うのかしら？

「Do I think what?」

感じるのが鈍い、鈍って英語でなんて言うの？ あ！

「ドゥ・ユー・シンク、アイ・ドント・フィール・グッド？」

あら？ 固まっちゃった？ 凶星？ やっぱり鈍感だって思ってる？

「プリーズ・ビ・オネスト」

いいのよ、正直に言って！ 覚悟はできてるわ！

「Ah... Well... Unless you don't pretend...」

プリテンドって、ふりをするってことよね？

「ノー！ アイ・ドント・プリテンド！」

「Oh... I see...」

なんでそんなに困った顔してるの？ やっぱり鈍感だと思ってるから？  
いいのよ！ ハッキリ言って！

「Well, let me ask you first... Why are you asking me such a question?」

なんでそんなことを聞くのか？

そうね、突然、鈍感かって聞かれてもね。

「アイ・ディド・ナット・ノウ、マイハズバンド・フェル・イン・ラブ・ウィズ・ミー」

ハ？って顔？ あ、一目惚れを忘れてたわ。

「ヒー・フェル・イン・ラブ、えっと、ヒー・ルック・ミー・ファースト」

「O...k... and?」

「美香ノウ・イット、でも、アイ・ディド・ナット・ノウ、今朝まで、ティル・モーニング」

「Are you upset about it?」

アプセット... 腹が立つ、動揺する... そういうわけじゃないのよ。



「アイム... むしろ、アプセット・アバウト... ミー！」

「Why?」

だって...

「アイ・フィール・ライク... アイ・ドント・ノウ・ヒム」

口にしたら... なさけなくて... 涙が出てきちゃった...

「Oh, Romie, don't cry」

抱きしめてくれるのは嬉しいけど... なさけないわ...

「He was just shy」

シャイ？ じゃ、なんで美香は知ってるのよ？

「美香セイ・アイ・ドント・フィール・グッド、あ？ ウェル？」

「What?」

「あ！ マイ・ブレイン・キャント・フィール・ウェル」

「Oh! You tried to say...insensitive?」

インセ... なに？

「Oh, no! You are not, not at all」

ちがう？ 鈍感じゃないって言ってるの？

じゃ、これでも？

「ワンモアシング」

「Ok, I'm listening」

「アット・ファーストデイト、ヒー・ギブ・ミー・シェイクスピアズ・ソネット」

「He knew you, you love Shakespeare」

「ソネット18、エイティーンよ？」

「Sonnet 18th, Ah... Oh, it's a kind of confession of love」

「ソネット18イズ・ラブ・フロム・マン・トゥ・ヤングマン！ マン！ ナット、ウーマン！」

「Wow! You really know Shakespeare」

「ビコーズ、アイ・シンク・イツ・ホームワーク、アイ・スタディ・イット！」

「Why?」

「ビコーズ・ヒー・ワズ・マイ・ティーチャー」

「Oh! So you've thought it's a home work! You were a very good student」

「ノー、アイ・ワズ・ナット・ステューデント、イット・ハプン、アフター...」

卒業...

「グラデュエーション」

そりゃそうよね？ キョトンよね？

「だから、マイ・ブレイン・ドント・フィール・ウエル」

「Romie... May I ask you something?」

「イエス」

なんでも聞いてよ... もう隠すことなんてないんだから。

「Did you tell him you've thought it's a home work?」

聞くわけじゃない！ そうだと思い込んでたんだもの！

「アイ・ギブ・ヒム・メニー、これくらいの、レポート、アット・ネクストタイム」

「Romie...」

わかってるわよ、やっぱり鈍感なのよ、私って。

「It's so... funny!」

エーーーーッ!? 笑うっ? 私の悲劇を笑うっ?

「Romie, you are so cute!」

キュートおおお?

「イッツ・ナット・キュート！ イッツ、あ！ そうね！ 私って、ステューピッド！」

鈍感じゃなくて、バカなんだわ！

「You are not stupid」

いいの、慰めてくれなくても、わかってるから、自分のことは自分がよくわかるのよ。

「You are very pure」

「ピュア？」

「Genuine」

いやいや、ピュアはわかるのよ、あとの方が... なんだっけ？

「Innocent like a child」

イノセント？ えっと... 無邪気？ 無邪気じゃないわよ、ピュアでもないし。

「アトム・ナット・ピュア、ナット・イノセント、ビコーズ...」

言っちゃうけど...

「アイアム・バッド、アイ・ルック・リフトアップ、ここ、オブ・キャシー」

「Oh! You found the scar of plastic surgery on Cathy's face!」

「イエス...」

「Oh! Romie!」

この話で、なんで抱きしめるのかしら？ 笑いながら？

「You know what?」

「ホワット？」

「I'm jealous」

嫉妬？

「何に？ トゥ・ホワット？」

「To your husband」

「ハア～？ ホワイ？」

「He could read your paper, report about the sonnet」

レポートを読むことができたから？ 読みたいの？

「でもね、アトム・ナット・グッド・アット・ソネット」

「It doesn't matter, I'm just... jealous」

嫉妬してるって言いながら... ニッコリ？

「But I know...」

あの茶色の優しい目が... 近づいてきて...

「You feel...」

あ...

「Very good...」

朝から...

風と共に去っちゃう...

風と共に去ってばかりいられないわ。

お昼のサンドイッチ作るついでに夕食の下準備...って、夕食は何にする？

夏野菜と海老のパスタなんてどう？ あ、ダメだ... うどんみたいにしなきゃダメなのよ。

私、パスタ料理はけっこう得意なんだけど、パスタをうどんみたいにしちゃったら、

どんなバリエーションにしたところで、洋風焼うどんだわね。

いっそ、スパゲティで煮込みうどん作っちゃう？ 不味そう... ダメね。

ダニーは、さっき電話がかかってきて、リビングで話してるわ。

あら？ ダニーって... 携帯持ってないのかしら？ おとうさんは携帯が嫌いだったわね。

でも、それじゃ困るって大学の事務局に無理やり持たされてたわ。でも、結局電源切っちゃうから、

私が事務局長にお願いされちゃって、結局家にいるときは私がおとうさんの携帯に出てたのよ。

バカみたい！ 家にいたんだから家電でも一緒じゃない？ 家以外のことまで責任持てないわよ

！

あら？ そういえば... ほら、いちばん最初の夜、マックに行ったとき、携帯で電話してたわよね？

あれはキャシーだったはずよね。出なかったけど、まあ出ないのは今ならわかるけど。

あれ以来携帯持ってるの見たことないわ。まあいいわ、私が出なきゃいけないわけじゃないから。

。

それより、夕食は何にするかってことよ。

煮豚でも作る？ それに温野菜のサラダと、あ、チャーハン作って中華風にすればいいかしら？

それじゃ、豚肉のロースの塊を解凍しておけばいいわね。コトコト三時間煮ればいいだけだし。

あ、お米も先に炊いておかないと。でも、まだ早いかしら？

「Romie」

電話が終ったのね。

でも、今、あなたにかまってる暇はないのよ、ごめんなさい。

「Romie」

「イエス」

えっと、お米は2カップでいいかしら？

「I have something to ask you」

はいはい、なんでも聞いてちょうだい。

「イエス？」

先に研いでおいた方がいいわね。

「I was invited to a wedding reception of my mother's friend」

ン？ ウェディング？ ああ、結婚式に招待されたのね。

「グッド」

えっと... チャーハンに入れる野菜も切っておく？

「I got an invitation card a month ago, and I sent back RSVP that I wouldn't attend」

招待状を一カ月前にもらった... その後のがちょっとわかんないけど、はいはい。

「Because it's for Cathy and me, but we already divorced」

キャシー？ なに？

「You are required to attend at this reception with your wife or husband or, anyway, a couple」

えっと... いっそ書いてくれないかしら？ 何を言ってるんだか...

「That's why I sent her RSVP I couldn't attend, but she called me and she wanted me to come」

えっと、彼女は来てほしいだけはわかったわ。

「イエスイエス、ゴー」

電話までしてくれたんなら行くべきよ、なんだかよくわからないけど。

「I talked her about you, and she wants you to come with me, too」

ン？ 彼女が私に来てほしい？ ハ？ なんの話？

「Would you come with me?」

一緒に来てくれないか？

「ホエア？」

「The wedding reception」

ハ？

「ホワイ？」

「Ah, as I told you, she wants you to come with me」

彼女が私に来てほしい？

「彼女って... フー？」

「My mother's friend」

えっと、ダニーのお母さんの友だち...が、なんで？

「ホワイ？」

「I talked her about you」

彼女に私のことを言った... で？ なんで私も行くの？

「ホワイ？」

「Because I just... wanted to tell her」

なぜならば... 彼女に言いたかったから。

そこじゃなくて！

「ホワイ・アイ・ゴー？」

「She wants you to come with me」

彼女が私に来てほしい... さっきも聞いたわよ、だから、

「ホワイ？」

「Ah...」

困った顔されたって、私だって困るわよ。

わけわからないもの、なんで私がダニーのお母さんのお友だちの結婚式に行くの？

会ったこともないし、ただ遊びにきてほしいのならまだわかるけど、結婚式でしょ？

「Romie, she is 80years old」

80歳... え？

「ハー... ウェディング？」

「Yes」

80歳で結婚式？ 金婚式とかじゃなくて結婚式？

アメリカ人ってタフだわ。

「She has cancer and she knows it」

キャンサー... え？ 癌？ 彼女は知ってる...

「So she decided to held this reception for her last good memory」

最後の良い思い出として、レセプションをすることにした...

「Actually I didn't know she has cancer until she told me on that call」

あの電話で言われるまで癌のことは知らなかった...

「So... I want you to come with me for her」

彼女のために一緒に来てほしい...

たしかに...

80歳で、癌で、最後の思い出に結婚式をする...

それなら絶対行くべきね。

でも...

「ホワイ・ミー？」

私の疑問はおかしい？ だって、ダニーが行くのはわかるわよ、行くべきよ。  
でも、なんで私も行くの？ 言ってみれば見知らぬ日本人よ？

「She wants you to come」

ああ、またそこに戻っちゃった。

「だから、ホワイ・ミー？ シー・ドント・ノー・ミー！」

「Because I told her you are my girl!!」

ハ？ なんでキレ気味？

ていうか、ていうか... おかしいでしょ！

マイ・ガールって、まあ、それは...いいけど、言っちゃったんならいいけど、  
だって私、あと2週間、あ、もうあと12日くらい？で帰っちゃうのよ？  
そんな公の場に、しかも、離婚してまだ1ヵ月しか経ってないのに、  
日本人の女なんか連れていったら、どうなるかって考えないの？

...って言いたい！

でも、英語が出てこないっ！

「I know you are upset」

ハア？ するでしょ！

まだ、バナナブレッド作るとか、キャシーと買い物行くくらいならいいわよ？  
結婚式って、そんな大切な場所に、私だって、これでも教授の妻だったからわかるわよ！  
そういう常識っていうの？  
...って言いたいっ！

せいぜい言えるとしたら...

「アイ・ハブ、コモンセンス」

「I know!」

あなたはあるの？って聞きたいっ！

でも、それはいくらなんでも失礼だから言わないわよ、ただ...



「ユー・ディヴォース、ジャスト・ワンマンズ・アゴー」

「Yes?」

「ユー・テイク・ミー・トゥ、公って? あ、パブリック・プレイス」

「Yes?」

「アトム・ナット・ユア・ワイフ」

「Romie, this is America」

ここはアメリカだ。

それを言われたら...

「オーケー」

としか言えないじゃない。

「Oh, thank you!」

え? そういうオーケーじゃなかったんだけど、なるほどねっていう意味なんだけど。

「Let me tell her!」

え? え? え?

もう行くことになっちゃたの?

どうすればいいの? どうすればいいの?

ただ行けばいいのよね? 行けばいいんでしょ? 行くわよっ!

あら? ちょっと待って、私... 結婚式用の服なんて持ってきてないわよ?

靴だってペタンコ靴よ、それでいいの? いいわけないじゃない!

どうするの? えっと... とにかく、明日にでも買うしかないわよ...ね。

安くてそれっぽいの売ってるお店って、ダニーが知ってると思う? 思わない。

ああもう日本だったら、通販であるのよ! あ、アメリカにもあるかしら?

ダニーに、そういうサイトを探してもらって送ってもらう? 数日で着くわよね。

えっと、結婚式っていつ? 私がいる間? そのあとだったら知らないわよ?

「Romie! She was very excited to see you!」

それはよかったけど...

「ダニー」

「Yes?」

「ホエン・イズ・ウェディング?」

「Tomorrow」

ン?

「We supposed be there till 1:00 PM」

「ホエン?」

「Tomorrow」

トゥモロー...って 明日... 明日?

エーーーーッ!?

「トゥモロー?」

「Yes」

「ホワイッ? ホワイッ?」

「What do you mean why?」

「ホワイ・ユー・ドント・セイ、もっと! モア! 早く! スーン?」

「Oh, sorry. She kept trying to call my mobile」

モバイル?

「This one」

ポケットから... 携帯?

「I kept my mobile off, so she couldn't catch me till today」

オフ? 電源をオフってこと? つまり電源を切ったままだった...

だから、彼女はつかまえられなかった、今日まで...

「アーーーーッ!」

男ってーーーーっ!



ピリッピリ！

---

人間て、あまりに怒りでパンパンになると、叫ぶのね。

言葉なんて出てこなかったわよ、脳みそが原始人に戻っちゃうのかしら？

だから、キーッとなるとか、カーッとなるって言葉があるんじゃないの？ 知らないけど。

落ち着くのになちょっと時間がかかったわ。

ダニーが、Coffee?って聞いたとき、私、ウォーターって言ったのよ。

ウォーターって、ヘレン・ケラーかよっ！だったわ。初めて言葉の存在を知ったみたいなの？

やっと言葉が出る余裕はできたってことかしら？

こんなこと考えてるってことは、まだ落ち着いてはいないわね。

落ち着けるわけないでしょ！

明日って！ 結婚式に行くことだって納得し切れてないのに、明日？

携帯の電源切ってたから連絡取れなくてって、私の責任？ ちがうでしょ！

それなのに、なんでここまで私が追い詰められなきゃいけないの？

たかだか結婚式に出るくらいで追い詰められるなんて大げさだと思ったら、大間違いよ。

その結婚式ね、ドレスコードとやらがあるんですって、なんだかよくわからないけど？

それがね、女性はロングドレスなんですって！ ロングドレスなんて持ってないわよ！

一生着ることもないと思ってたわよ、ていうか、思いもしなかったわよ！

...なんて考えてる暇もないのよ、明日なんだから！

とにかく、ロングドレスと靴を買いに行かなきゃって言ったら、

ダニーが、クラッチも必要なんじゃないかって。

クラッチって何?って聞いたら、小さなこれくらいのパースって言うの。

なんだろうと思って考えたら、パーティー用のバッグのことだったのよ。

確かにそうね、そうなんだけど、ダニーがそんなものを知ってることに驚いたわよ。

だから聞いたの、なんで知ってるんだって。

「Cathy」

この一言で、すべてがわかるって、キャシーって、ある意味すごいわよね？

会っておいてよかったわ、コミュニケーションの手段になってるもの、まあそれはいいんだけど。

さて、どこに買いに行くかってことになって、ダニーが、キャシーと行ったところはどうだって言うのよ。

あんなバカみたいに高いものしか置いてないところで買ったら破産よ！

たかだか一回しか着ないのに、何十万も払うなんてバカじゃないのっ？

...って言いたかったんだけど、「ノー」しか言えなかったわ。

英語が出てこなかったんですもの。

それで、ダニーがあちこちに電話かけて、あちこちって言っても三件だけど、

多分友だち？ その奥さんたちにどこで買えばいいか聞いたのよ。

三人中二人が、ここがいいって言ったお店に、今向かってる最中よ。

それじゃ、せっかく答えてくれた残りの一人の意見は無視？

案外少数意見の方が正しかったりしない？ そんなこと言ってる場合じゃないんだけど。

そうそう、その花嫁さんの意向で黒はダメなんですって！ 黒はお葬式の色だからですって！

冠婚葬祭は黒でしょ？ 黒を奪い取られたら、もうどうしていいかわからないわよ！

冠婚葬祭は黒って言う頭しかないんだもの！

ロングドレスだけでもいっぱいいっぱいなのに、色まで考えなきゃいけないの？

「What are you thinking?」

いろいろ考えてたわよっ、いろいろとねっ。

でも今は...

「カラー・オブ・ドレス」

「Oh, I see」

いいわよね、あなたはっ。黒のスーツに蝶ネクタイでいいんでしょ？

なんで男は黒でもいいの？ 男も黒はダメだったらいいのになっ！

「You looked beautiful with white」

ハア？

さっきは遠慮してたけど、もう今は言わせていただくわ！

「ドウ・ユー・ハブ・コモンセンス？」

「I believe so. Why?」

ちょっとムツとしたみたいって言ってるけど？

「ホワイト・イズ・フォー・ウェディングドレス！」

黒がダメなら、白はもっとダメに決まってるでしょっ！

「Oh! Yes, right, you are right!」

自分のことじゃないから気楽なもんよねっ。

「You look very nervous」

ハア？ あたりまえでしょ！

突然見ず知らずの人の結婚式に出るハメになって、しかもそれが明日で、この先一生着ないであろうロングドレス買いに行くのよ？ そして黒はダメって言われて、ナーバスにならない方がおかしくない？

「Relax, it's just a dress」

ジャスト・ア・ドレスっ？

そのジャスト・ア・ドレスのために、女たちがどれほどの苦勞をすと思ってるの？

場に合わないデザインや色を選んじゃったら、主催者に失礼でしょ！

それにね、私がここまでナーバスなのは、あなたに恥をかかせたらどうしようって思うからよ！

そういうものなのよ、女はねっ。

「You don't have to worry so much」

心配するな？ するでしょ！

「Just... Enjoy shopping, er... like as Cathy」

キャシー？

キャシーみたいに買い物を楽しめ？

まずいこと言ったって顔してるわね、まずいこと言ったのよ、言ったわよ！

「ストーopp! ストップ・カーーーー！」

車をゆっくり路肩に止めて...

「Romie, I'm sorry, I didn't mean...」

「イフ・ユー・ワント・キャシー、ゴー・ウィズ・キャシー！」

「Romie, I'm sorry, so sorry. I didn't mean that. I just...」

「ああ、もうダメ！」

車から飛び出してバンッとドア閉めたわ。

進行方向と逆を歩いてるわ。

ダニーが私のこと呼んでるけど、ムリ、今はムリ。

ムリでしょ！

私がおかしいの？ 買い物を楽しめない私がおかしい？

楽しめるわけじゃない！ 私が着るもので、ダニーに恥をかかせるかもしれないのよ？

私はいつも、おとうさんに恥をかかせないように、学内の奥様の集まりでも、とにかく、

いつでも、着るものとか、あまり目立たないように、でもみすぼらしくないようにとか、

それは私のためじゃなくて、おとうさんに恥をかかせたくなかったからよ。

見栄じゃないわよ！ だって大切な人でしょ！ その人に恥なんかかかせたくないでしょ！

それってアメリカじゃないの？ だったら私、アメリカはわからないわ！

「Romie!」

え？ 車は？ あ？ 置いたまま？

「Tell me, what do you want to do」

何がしたいか？

したいんじゃなくて、恥をかかせたくないのよ！

恥をかかせるって、なんて言うの？ かかせるんじゃないで、かかせたくないんだけど。

「Romie, please say something」

何か言えって、だからっ

「アイム・サーチング、ワード！」

「Oh, I see. Ok, take your time」

時間かけても見つかるかしら、ていうか、この中にあるのかしら？

あ！

あったけど...

「What?」

わかるかしら...

「Do you bite your thumb at us, sir?」

ポカンよね、だって、この人、ベンヴォリオとロミオの台詞しか知らないんだものね。

これは第一幕の喧嘩が始まる時のアブラムの台詞なのよ。

爪をかんでペッて相手にかけるのは屈辱を与える意味だって...

「Romie... “I do bite my thumb, sir”」

え？ 次の Sampson の台詞、わかるの？

「Tell me, what do you want me to know by these lines?」

この台詞で何を知ってほしいのか... だから、そこなのよ。

「アイ・ドント・ワント、ピーポー、バイト・ゼア・サム・アット・ユー」

「Why do you think... people would bite their thumb at me?」

なんでそう思うのかって...

「ビコーズ・オブ・ミー」

「You? Couldn't be!」

だから、男は気楽だっていうのよ！

女の気遣いがわからないのよ！

じゃ、たとえば、こんなこと言われたらどう？

「オー！ ダニー・ブリング・ステューピッド・ジャパニーズウーマン、ウエア、  
ステューピッド・ドレス！ ダニー・イズ・クレイジー！ ハッハッハ、どう？」

「Oh... I see!」

やっとわかった？

「You were... You are... worrying about me!」

あたりまえでしょ！ 他に何かあると思ってるのよ！



「Oh, Romie! How can I say... “The more I know thee, the more I love, for both are infinite”」

ハ？

私を知れば知るほど...私を愛する？

ていうか、なんでジュリエットの台詞？ 今はそういうことじゃなくて！

だから、キスしてる場合じゃなくて！

「だから、ね？ アイ・キャント・ビ・キャシー」

「I never want Cathy! I want you!」

わかってるかしら？

ここで愛の告白してる時間はないのよ！

「ダニー、ウィ・ドント・ハブ・タイム！ ゴー・ショッピング！」

「Sure! Don't worry, I will help you!」

あなたの助けなんて、アテになるわけないでしょ！

だから、ずっとナーバスだったのよ！

えっとね...

ダニーの友だちの奥さん二人が紹介してくれたお店は、確かにいろいろ揃ってるの。

でも、1/3が黒で1/3が白で、他の色は1/3しかないのよ。

しかも、その1/3も派手な色ばかりで、なんていうのかしら、主役級？

しかたないから靴とバッグを見てみたけど、高いの。そして、やっぱりデザインが主役級。

シンプルな黒のドレスに、こういうバッグや靴ならまだいいわよ。でも黒はダメなのよ。

どうしよう...

あ

「ダニー、ドウ・ユー・リメンバー、ワンモア・ショップ？」

「Ah... You mean... The shop which Tim's wife mentioned？」

誰の奥さんか知らないけど、少数派の人よ。

「Yeah, do you wanna go there？」

「イエス」

賭けるしかないわ、その少数派の意見に。

ていうか、その三人って、どういう基準で選抜したのかしら？

そのうちの二人がいいって言ったお店がこれよ？ 確かに質はいいけど。

着いたところは... なんだか大きな倉庫みたいなところ。

「Romie, it's an outlet shop」

アウトレット... ということは、安いのは確実ね。

安かろう悪かろうじゃ困るんだけど、最近のアウトレットはバカにできないのよ。

でも、ここがどうなのかは、入ってみないとわからないわね。

「とにかく、レッツ・ゴー」

最初はね、あまりに広くて、どこに何があるのかわからなかったんだけど、  
ダニーが店員さんに聞いてくれて、ここがロングドレスのコーナー。  
そうね... あら、なかなかいいのがあるじゃない！ シンプルで色もゴテゴテしてなくて、  
素材だっていいわよ、安っぽくないもの、やっぱり最近のアウトレットはバカにできないわ。  
この薄い紫の、素敵じゃない？ ベージュもシックだけど老けて見えるのよ、私にはね。  
このピンク、くすんだ感じがクラシックで素敵ね、デザインもシンプルだし。  
紫かピンク...かなあ？ でも、この年でピンク？ 派手なピンクじゃないけど...  
無難に紫かな？ そうね。

「No, pink one」

ハ？

「You look beautiful with that pink one」

意見を言ったわ。

「ワオ！ ダン・ソープ・チューズ・ザ・カラー・オブ・ウーマンクローズ！」  
って、確かキャシーが言ってたわよね。

「Hahaha! Yes I do!」

「オーケー、ピンクね」

ダニーがピンクがいいって言うんだから、それがいちばんよね。  
あとは、これに合う靴とバッグね。

あったわ！

うっすらグレーがかった白い靴と、グレーで、ドレープっていうの？それがついてるバッグ。  
ピンクにグレーは合うと思うの、ほら、こうやって、合うわよ。いいんじゃない？

「Perfect!」

そう？ 決まり！

「Oh, finally I could see your smile!」

私の顔から笑顔を奪ったのは誰よ？

まあ、これでそろったから恨んでないけどね、まあ恨んではいなかったわよね？

ちょっと恨んでたかしら？ もういいわ。

ドレスが一万五千円くらい、靴が二千円くらい、バッグも二千円くらい。

このデザインとこの材質でこの値段なら、なかなかいい買い物じゃない？

楽天カード、出番よ！

「I'll take care of them」

「ああ、大丈夫よ、イツツ・マイン」

「Do you bite your thumb at me, my lady?」

ハ？

屈辱を与えるのか？

「Romie, I'm a man」

わかってるわよ！ それで、さっきモメたんじゃない！

「A man wants to take care of his woman」

男は彼の女の世話をしたい...

男って見栄っ張りね。

女は素直じゃないんだけど、本当は服を買ってもらうなんて嬉しいんだけど。

「サンキュー」

えっ!? チュッて！

店員さんもいるのに———っ！

恥ずかしいから、出てきちゃった。

でも、少数派の意見って大切ね。

その、なんとなかっていう人の奥さん、気が合うかもしれないわ。

ここがいいって言ったんだもの、よかったもの。

そうよね、たいていみんなが「あそこのランチは美味しいわよね」って言うお店って、高いだけでそうでもなかったりするじゃない？ そういうものよね。

あ、出てきた。

「All set!」

はあああ、よかったあああ。

「Do you like ice cream?」

え？ アイスクリーム？

「イエス？」

「Ok! Let's go!」

「ホエア？」

「Ice cream shop!」

サーティーワンかしら？

煮豚が気になるけど...

たまにはいいわね。

アメリカのアイスクリームって食べたことないし。

大きい！

1スクープが日本の2倍くらい？ コーンからはみ出てるし。

サーティーワンじゃなかったわ、もうちょっとクラシックなお店。

お店の外に置いてあるベンチに座って食べてるの。

私はストロベリー・バナナ・クリームとかいうので、ダニーはロッキーロード。

ロッキーロードって岩だらけの道っていう意味だけど、やっとわかったわ。

もうね、マシュマロとかナッツとか、チョコの塊がボッコボコ出てるの。

まさに岩だらけ！ そういうことだったのね。

でも、そんな甘そうなのを食べて大丈夫なのかしら？

ダニーって、血糖値はどうなのかしら？ 血糖値って英語でなんて言うの？

血の糖分だから、そのままだとブラッド・シュガー？ さすがにそれはないわね。

「What are you thinking?」

え？ 何って...

「ブラッド...シュガー」

としか言えないわ、そう考えてたんだから。

「Are you thinking about blood-sugar level now?」

え？ 血糖値ってブラッド・シュガーでいいの？ まんまじゃない！

「Sometimes I wish I could look into your brain!」

前にも言われたわよね、脳みその中を見たいって。  
なんで？ 心配してるだけじゃない！

「Don't worry, mine is normal!」

だったらいいけど。

「You always worry about me!」

そう？ 心配しすぎ？

「トゥーマッチ？」

「No, I'm happy!」

「ハッピー？」

「Yeah, happy to have someone cares about me!」

そうね、でも... あなたのことを心配できるのも... あと...

「Don't think about that!」

「え？」

「Do you wanna bite?」

ロッキーロード... どんなかしら？

あ 甘い...！ 容赦なく甘い！

「You are surprised! Why?」

笑ってるけど、

「ベリーベリー、スイート！」

「Which is sweeter?」

ん... ロッキーロードの味がするけど...

こっちかな。

## 吐きそう

---

これをどうしたらいいのかしら？

これって私の顔だけど。

まずは基礎工事からよね。

保湿クリームとアイクリームを塗ってから下地クリームよ。

若い頃は化粧水の後にすぐ下地でよかったんだけどね、下地もいらなかったわ。

今そんなことしたらファンデーションはヨレヨレでパウダーで粉ふきいもみたいになっちゃうわ。

もちろんゆうべちゃんとパックもしたわ。へ口へ口だったけどね。

ゆうべ夕食に何作ったんだっけ？ 煮豚じゃないことだけは確かよ、えっと...

ゆうべの夕食のことなんかどうでもいいのよ、顔よ、顔。

さっきなんてね、吐いたのよ。何も食べてなかったから何も出なかったけど。

朝食は作ったけど食べられなかったわよ、食べたら吐きそうだったんだもの。

結局食べなくても吐いちゃったけど。

ダニーは... 何してたかしら？ もう頭がパンパンでダニーのことなんて意識にもなかったわ。

男はいいわよね、せいぜい髭を剃って髪の毛を整えて着替えるだけでしょ？

女はね、年をとればとるほど支度に時間がかかるのよ。

だって、ほら、こうやって砂漠が水を吸うように保湿クリームを吸い込んでいく肌と格闘よ？

そこからよ？

ウキウキしながらメイクしてたのって何歳くらいまでだったかしら？ 遠い昔で憶えてないわ。

今やメイクは重労働よ、しかも労力を費やしたわりにはまったく報われない重労働。

とにかく、いつもよりはきっちりメイクした方がいいわね、でも厚化粧にはならないように。

どうやったってたいして変わらないんだけどね。

虚しい...

そんなこと思ってる暇はないのよ、髪もセットしなきゃならないんだから。

私... 人様の結婚式でこんなだったら、美香のときはどうなっちゃうのかしら？

倒れちゃうんじゃないかしら？ 新婦の母親が式の当日に倒れたりしたら大騒ぎになっちゃうわ。

相手の家族になんて思われるかしら？ 美香にも迷惑かけちゃうわ、お姑さんにイビられるかしら？

美香のことは今はいいのよ！ 完全に現実逃避してたわ、逃避できるならしてもいいかしら？

もうどうでもいいこと考えてないで顔よ、顔！

なんとかできたわ。

いいわよね？ いいわよ、もう。花嫁じゃないんだから。



口紅が鮮やかなものなんて持ってないから、前に美香にもらって使ってなかったグロスが、ちょうどピンク系だったから薄く塗ってみたんだけど、おかしくないかしら？  
いいわよ！ 私の顔なんて誰も見ないんだから！

髪もセットしたわ。

セットって言えるかしら？ クルクルブラシでシュッシュュッしてドライヤーで、フワッとさせてちょっと流れが出たくらいなんだけど。

べつにいいわよ、誰が見るっていうの？ おばさんの髪なんか！

それじゃなんでセットしたの？ なんでもいいのよ！ 着替えよ、着替え！

まずは靴を履いてみて、当たりそうなところにバンドエイド貼らなきゃ。

こんなヒールの高い靴、絶対靴擦れ起こすもの。

あとはストッキング履いて、服を着れば完成よ。

こんな裾の長い服なんて初めて着たわよ。

おとうさんとの結婚式は、おとうさんもまだ助教授で、そんなにお金もなかったし、私の両親が私のために貯金してくれていたけど、おとうさんが結婚式にお金を使うのはもったいないって、

私名義の貯金は使わないで、神社で両家族だけで式をしたのよ。

私は成人式の振袖だったわ。おとうさんはふつうの背広だったし。

あれはあれでよかったわね、気を遣わなくてすんだもの。

あ、でも、美香が生まれてちょっとしてからだったかしら？ お母さんが言ったのよ。

ひろみの花嫁姿が見たかったわって、ポツンと。私、親不孝しちゃったかしらって思ったわ。

でもねえ、もう美香も生まれてるのに、そんなこと言われてもねえ。

私の結婚式のことはどうでもいいのよ！

えっと、今、何時？ 12時15分。

12時30分に出発するって言ってたから、ヒーーーーッ、ギリギリだったわ！

よかった、早めに準備して、だから時間がかかるのよ、年をとるとね。

えっと、バッグに、ハンカチとティッシュと、お財布が入らないのよ、必要ないかしら？

いちおう2ドルくらい入れておく？ あとは、忘れ物はないわね。

よし！

ダニーはリビング？

あ！

かっこいい！

ポケットに手を入れて窓の外見てるけど、黒のスーツに蝶ネクタイが似合うわ！  
やっぱりこういう服って外人が着るためにあるのねえ。

「ダニー」

振り向いた途端に                フリーズ？

なんで固まった？ なにかおかしいの？ ちがう？ こうじゃない？ なに？

「ホワット？」

「Ah... You are...」

私が？ なに？ 時間がないんだから、何かヘンなら言ってよ！ メイク？ 髪型？ なに？

「サムシング・バッド？」

「Oh, no, no... You are beautiful」

「ああ、サンキュー」

ていうことは、これでいいのね？

「よし、レッツ・ゴー」

私の気が変わらないうちにねっ。

「Ah... Romie」

「イエス？」

「I think... you need one more thing」

えっ？ もうひとつ何か必要？ なに？ 何を忘れた？ 眉毛も描いたわよね？

「Necklace」

ネックレス？

エーーーーーッ？ ネックレスも必要だったの？ どうしよう？ 持ってきてない！

早く言ってよーーーー！ 昨日言ってよーーーー！ これだから男ってーーーー！

しかたないわ。

「アイ・ドント・ハブ・ネックレス」

「I have」

ハ？

ダニーがネックレスを持ってる？ キャシーの？ エ〜、この服と合うかしらあ？

ダニーが四角い紺色のピロードの箱を... でも、この箱って、かなり年代物？

「This is my mother's」

え？ お母さんの？

ダニーが開いて見せてくれたのは、真珠のネックレス。

わあ、素敵！

シンプルだけど、留め金のところに小さなルビーがついていて、品があっけきれいな！

「Do you like it?」

「イエス、でも、イズ・イット・オーケー？」

お母さんの大切な形見を借りていいのかしら？

「I want you to wear it」

私につけてほしい... いいのかしら？ それじゃ、お言葉に甘えてお借りするわ。

「サンキュー」

「Let me do it」

あ、つけてくれるの？ そうね、自分でつけようとして壊したら大変だわ。

「サンキュー」

ダニーが私の後ろからネックレスを首にまわして、あ、髪が邪魔かしら？

なんだか... ドキドキしてるわ...

だって、こんなふうに男の人にネックレスつけてもらうなんて初めてだもの...

あ

首に そっと キス

これだからアメリカ人て

ちょっとトキメいちゃったじゃない

「Let me see you」

どう？ 合ってる？

「Oh... Romie...」

あっ、ちょっと待って、ちょっと待って、口紅落ちちゃうでしょ！  
そんな叱られた子犬みたいな目をしてすがってもダメ！  
もう一回やり直す体力ないのよ！ 時間もね！

今は車の中よ。

ああ、ドキドキしてきたわ。

「Romie」

「イエス？」

「Ah... Nothing」

あ、そう。

あのね、さっきからこのやり取り、おんなじやり取り、5回くらいやってるわよ？  
言いたいことがあれば言えば？  
ファンデーションがヨレてるけど言いにくいとか？  
言ってくれた方が優しさってものよ！  
いいけどね、私のファンデーションがヨレてたって、結婚式に影響なんかひとつもないわ！

「Romie」

ほら！

「イエス！ アイ・ノウ・ユー・セイ・ナッシング！」

「Ah... Right」

だったら黙って運転してて！

私また吐きそうになってるんだから！

## 結婚式

---

着いたわ。

着いたっていうか、私はもう席についてるんだけど。

入口で、ダニーが腕をスッと出すのよ、腕を組むってことよ。

手慣れたもんだったわ、日本の男じゃあんなふうになんか自然にできないわよ。

正直、ありがたかったわ、だってこんな高いヒールで一人で歩く自信なかったもの。

ダニーを杖扱いして申し訳ないけど、腕を組んでもらってなかったら、ここに座ってないわ。

えっとね、入口からここまでのことはほとんど覚えてないの。

かなり緊張してたのね...って、今もまだ少し緊張してるけど、だいぶ落ち着いてきたわ。

まわりは外人だらけよ、まあここでは私が外人ってことになるんだけどね。

年齢層はかなり高いわ、私が若く思えるもの、いつもこういう中にいれば若いって錯覚できるかもね。

丸テーブルがいくつもあって、わりと日本の披露宴会場に似てるんだけど、

親族が中央の花嫁さんと花婿さんにいちばん近い席なの。

日本はいちばん遠いところでしょ？ でも、たしかに親族がいちばん祝いたい人たちよね。

それにね、来賓祝辞とか仲人からの紹介とかがないのよ。みんなふつうに食べてしゃべってるわ。

料理はフルコースなの。なかなかの味だったわ、安心して食べられる味っていうのかしら？

それに、お年寄りが多いから、あまり脂っこくなくて食べやすかったわ。

食べられたの、車の中では絶対ムリって思ってたけど、料理を前にしたら食べてたわ。

ダニーは、ときどき傍に来る知り合いと話してるけど、私はひたすら気配を消して、ただ静かに食べ続けてたわ。ときどき目の前のおばあちゃまと目が合ってニッコリされて、私もニッコリして、それ以上話しかけられないようにひっそりと食べてたわ。

こういうのは得意なの。おとうさんの学会の夫婦の集いみたいなものに行ってたもの。

この人がどことこのだれだれ教授で紹介されても、さっぱり憶えられないから、

ただ微笑んで、主人がお世話になっておりますってお辞儀して、あとは気配消してたわ。

お世話になってるのかどうかもわからなかったけどね。

あ、意識が日本に飛んでたわ、ていうか過去？

今ね、ケーキを食べてるのよ。

こっちのウェディングケーキは本物なの、それを切り分けたものが今目の前にあるの。

ウェディングケーキ入刀みたいな派手なことはしなかったわ。

え？

なに？

チンチンチンって？

え？ あら？ みんながやり始めたわよ？ なに？

「This is a sign to ask the groom to kiss his bride」

ダニーが私の耳元でささやいておしえてくれたわ。

花婿に花嫁にキスをしろというサイン？

あら！ 本当だわ！ キスしてるわ！

アメリカねえ！

花嫁さんは、確かにどう見てもおばあちゃんなんだけど、なんだかとっても可愛い。

真っ白な髪をシンデレラが舞踏会に行くときみたいに結い上げてベールをつけて、

口紅もきれいなピンクで、チークもピンクで、それが似合ってるのよ。

80歳の花嫁なんて想像もできなかったけど、何歳になっても花嫁はきれいなのね。

花婿もおじいさんだけど、ニコニコして、二人ともしあわせそうだわ。

あのチンチンチンは、フォークやスプーンでグラスをたたくのよ。

何度もチンチンチンするの、そのたびにキスするの、疲れないかしらって思うんだけど、

愛はエネルギーを与えるのね、チンチンチンしてくれるのを待ってるみたいなもの。

「Romie」

「イエス？」

「This is John」

え？ ジョン？

ダニーと同年代かちょっと若いぐらいの赤毛の男の人がニコニコしてるけど... だれ？

「Do you remember you made banana bread for his daughter?」

バナナブレッド... あっ！

「ジェニーズ・ファザー？」

“Oh, so sweet of you! You remember my daughter’s name!”

えっと、名前を憶えてる？

「イ、イエス」

なんだかよく聞き取れない。

何か言ってるのよ、今も何か言ってるの、でも、ほとんどわからないの！

だから...

ニッコリしてるしかないのよ！

ダニーに何か言って私にも何か言って、私はニッコリしたままで、やっとむこうに行ったわ。

「How could you remember his daughter's name? Even I didn't remember!」

どうやって名前を憶えていられた？ 私もわからない。

なんだかとっさに出てきたのよ、カードもらったからかしら？

「Romie」

ダニーが耳元に、なに？ 私、いっさいさっきの会話わかってないからね？

「John said you are very sweet and very gorgeous」

スイートでゴージャス？

お世辞に決まってるじゃない！ 真に受けちゃって、男ってバカね！

理解できなくてよかったわ、英語のお世辞にどう対応していいかわからないもの。

あら、音楽が始まったわ。

生演奏ね。

よく古い喫茶店で流れてるような古い曲ね。

花嫁さんと花婿さんの思い出の曲かしら？

なんだかあちこちから、おじいさんとおばあさんのカップルが出てきて踊り始めたわ。

そういえば、よく映画であるわよね、結婚式でこうやって踊ってる場面。

花嫁さんと花婿さんは踊らないのかしら？ 映画では踊ってるわよね？

日本では、おじいさんとおばあさんがこうやって頼寄せて踊るなんて見たことないわ。

なんだか微笑ましい光景ね。

あらあ、花嫁さんと花婿さんが見つめ合ってほほ笑んでるわ。

しあわせなのね、おじいちゃんとおばあちゃんなのに初々しいのよ。

「Romie」

え？

「イエス？」

「Would you dance with me?」



ン？

「Dance with me」

ダンス？

なにが？

「ホワット？」

「Dance with me」

ダンス... ウィズ... 一緒に... ミーと...

ハ？

「Dance with me」

えっ？ わ、私？

「Yes, please」

バカじゃないのっ？

できるわけじゃない！

「ノー！」

「Romie, come on」

カモンじゃないわよ！

「アイ・キャント・ダンス！」

バカじゃない!?

ダンスなんて聞いてないわよ！ 黒じゃないロングドレスでいっぱいっばいよ！

「Romie」

な、なによ？ 耳元で言っても大声で言っても答えはノーよ！

「Do you want people bite their thumb at me?」

え？

ダンスしないと屈辱を与えられるの？

だから、みんなカップルで踊ってるの？

で、でも、私、本当に踊れないんだけど？

ど、どうしよう...

「ダニー」

「Yes?」

「ヘルプ・ミー！」

「My pleasure」

もう泣きそう。

よかった、近所の人がここにはいなくて。

あ、曲が変わったわ。

あれ？ これはよく聞くわよね？ なんだっけ？

あ、ほら、あの歌手もカバーしてて、美香が聴いてたわ、えっと...じゃなくて、

曲はどうでもいいのよ、踊らないと恥をかかせるわけね？ でも踊っても恥かかせないかしら？

「Grab my hand」

えっと、こっち？ 右手をつないで...

「Put your left hand on my shoulder like this」

左腕をひじをあげて、肩に置く...

こう？

「That's right」

あっ、ちょっ、グイッと、身体をピタッとくっつけるのね？

「Trust me」

信頼しろ？ いっそ人形みたいに持ち上げて勝手に踊ってくれないかしら？

あら？

なにこれ？

ダニーにまかせてれば、スルスルッて自然に動いてるわ。

もしかして、ダニーって、踊りがうまい？ もしかしてじゃないわね、うまいわよ。

あ！ この曲！

「フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン！」

「Oh, you know this song」

歌詞がよかったのよ。

なんだったかしら？

そんなこと考えてる余裕ないわ、ていうか、無心ね、無心。

なんだかダニーに身を任せて音楽にのっていると... 気持ちいいわ。

今日は香水つけてるのね、さりげなくて、いい香り。

私は... 香水なんて持ってないから、キッチンのラベンダーを三本切って、

ドレスと一緒につるしておいただけなんだけど。防虫効果もあるしね。

そんなこと考えてちゃダメよ、無心、無心。

「What are you thinking?」

「アイ・キャント・シンク！」

「I can't either」

自分も考えられない？

そうね、私をリードするだけでせいいっぱいよね。

それは申し訳ないけど...

でもね...

昨日言われたばかりの私には、これがせいいっぱいよ！

## 花嫁のブーケ

---

拍手で我にかえったわ。

私、本当に無心だったわ。

禅の境地ってこういうことかしら？

あら？

え？

なに？

ウソ！

ダンスフロアーに

ダニーと私だけーーーーっ？

ウッソーーーー！

なんで？ なんでなんでなんでーーーーっ？

みんながニコニコしてこっち見てるから、顔だけ必死に笑顔にして、席に戻ったわ。

ま、まあ、いいわ。

これでダニーは恥はかかないわけわよね。

私の任務はこれで完了したわ。

私の任務ってなに？

「Romie, let me introduce you to Cissie」

シシーって、あ、花嫁さんね。

車の中で聞いたのよ、あのヘンなやり取りの後でね。

花嫁さんがシシーで、花婿さんが... なんだったけ？

今のダンスで飛んじゃったわ。

踊ってる人たちの間を抜けて...

「Romie」

「イエス？」

「I must confess」

白状しなければいけない？ なにを？

「I told you a lie」

ライ... ウソをついた... どの部分？ ジョンが言ったこと？ なに？

「I just wanted to dance with me」

ン？

「People don't bite their thumb at me」

え？

ちょっと待って、整理するから。

ダンスをしたかった？ ピーポーはサムを...

ハ？

ダンスしたかっただけ——っ？

それでウソついた————っ？

「ハァァァアッ？」

「I know I'm childish」

それを言えば済むと思ってるの——っ!?

「ユーッ！」

しか出ないっ！

ハ——————ッ!?!しか出ないっ！ 日本語でも出ないっ！

「You can kill me, but not now」

殺してもいいっ？ いいのねっ！

でも、今はダメ？

あ、みんながこっちを見てる...

ニコニコして私に手をふってるおじいさんに、顔面麻痺しそうなくらい必死にニコリしたけど...

「Romie, come here」

って腕出したけどっ、つかまったけどっ、ギュウッてつかんでやるのが今できるせいっぱいよっ！  
なんで笑ってるのよっ!?

「You are so cute」

ハーーーーッ!?

できれば、この腕にガブッで噛みついてやりたいっ！

「I'm ready for any punishment」

罰を受ける準備はできてるっ？ できてなくても受けるのよっ！

「But not now」

わかってるわよっ！

帰ったら覚えてなさいよっ！

「Cissie!」

あ、花嫁さんだわ。

“Oh, my dear Danny boy!”

今は死刑延期にしてやるわよっ、花嫁さんに免じてねっ。

「Congratulations, Cissie」

“I'm so glad you could come to my wedding, my dear”

おばあちゃんの英語ってゆっくりしてるから、なんか聞き取れるわ。

「Cissie, this is Romie」

あ、私のこと？

“Oh, what a lovely Japanese girl!”

心の中ではダニーを今すぐでも殺したい！と思っているのでラブリーではないんです。

「コングラチュレーションズ」

“Thank you, sweetie”

可愛いわ、近くで見ても、顔が輝いてるわ。

“Oh! Isn't it Helen's pearl necklace?”

え？ ネックレス？

「Yes, it is. You still remember, Cissie」

“How can I forget her pearl necklace? That is Helen's favorite!”

ああ！ ダニーのお母さんのネックレスだって言ってるのね。

“I still remember she was wearing that necklace at her wedding”

ダニーのお母さんが結婚式のとくにしてた？

“I was her maid of honor, did you know that, Danny boy?”

「Yes, my mother told me, and you told me」

“Did I? Oh, I'm old, I forgot that”

シシーさんのしゃべり方って、心がほんわかするわ、笑ってる顔も可愛いし。  
こんなおばあちゃんになれたらいいわね、可愛い愛すべきおばあちゃん。

“So, my sweet Japanese girl”

あ？ 私？

「イエス？」

“How do you like Danny boy?”

えっと、ダニー・ボーイを、ハウ、どのように好きか？

「ヒー・イズ、ベリー... カインド」

ウソついたのよっ！ シシーおばあちゃん！ ダニーは私にウソついたの！  
私、ニッコリしてるけど、本当はすごく怒ってるの！

“Danny boy, you are going to marry this lovely girl, aren't you?”

マリー... 結婚？ いやいや、それは、え？ なんで黙る？ ノーでしょ！

“Oh! I will give her my bouquet! Isn't it a good idea?”

え？ ブーケ？

えっと、それは、花嫁のブーケ、それって、投げるやつよね？

“You are the next, sweetie”

え？ いや、あの、そんなニッコリしてブーケ差し出されても、どうすればいいの？  
ダ、ダニー！ なんとか言ってよ！

あ

そうだわ... そうだったわ。

「サンキュー！」

ニッコリして受け取ったけど、他にブーケ欲しい人って... いなさそうだから、いい？

「Thank you, Cissie」

やっと口を開いたわね。

“Oh, what a shame! Helen is not here”



ヘレンがここになくて残念...

そうね... きっとお友だちの花嫁姿を見たかったと思います。

こんなに輝いてるお友だちの姿をきっと見たかったと思います。

私もお墓しか行ったことはないですけど、きっとここに来たかったと思います。

“Oh, sweet girl, are you crying for Helen?”

はい... なぜだかわからないんですけど...

「シー・ワント...シー・ユー...」

“Oh, let me hug you, my baby girl”

シシーおばあちゃんの椅子は... きれいな飾りで隠されていたけど... 車椅子...

か細い腕で抱きしめられたら... もっと泣けてきちゃって...

「ユー・アー、ベリー・ビューティフル」

それしか言えなかったわ...

帰りの車の中。

シシーおばあちゃんからもらったブーケは私の膝の上。

なんで受け取ったかって...

だって、シシーおばあちゃんは癌で、あそこで私が躊躇してる時間はないのよ。

あの笑顔を悲しそうな顔にしたくなかったのよ。

でも...

どうしよう... このブーケ...

あ

「ダニー」

「Yes?」

「ゴー・トゥ、ユア・マザーズ、えっと、グレイブ」

ダニーは黙って車を方向転換させたわ。

HELEN.Y.SWOPE

そのお墓の前にシシーおばあちゃんからもらったブーケを置いたわ。

ダニーのお母さん、シシーさんの結婚式に行ってきました。

シシーさんは、とってもきれいでしたよ。

ヘレンがいなくて残念だって言っていました。

このネックレスのことを覚えてましたよ。

あ、ネックレスをお借りしました、ありがとうございます。

お借りしてよかったです、シシーさんが...

きっと... このネックレスと一緒に...

シシーさんに会いに行ったんですね、そうですね。

だとしたら、私、行ってよかったです、少しでもお役にたててよかったです。

お願いします、少しでも、一日でも、シシーさんが長く生きて、今日のしあわせを、一日でも多く感じてられるように、どうか守ってあげてください。

見ず知らずの私がこんなことお願いするのは失礼かもしれないんですけど、

本当に輝いていたから... どうか、お願いします。

「Shall we go back home?」

そうね...

あっ

「ウェイト、ワンモア」

ダニーのお母さん！ ダニーは私にウソついたんですよ！ ひどいでしょ？

叱ってくださいね！ 今夜、夢枕に立って思い切り叱ってください！ お願いします！

「オーケー、レッツ・ゴー」

ダニーの腕につかまって、車まで歩いている。

ダニーはずっと黙ったままだったけど、きっとダニーも、お母さんにシシーさんのことを報告したのね。

私は、あなたがウソついたことを言いつけてやったわよ。

今夜、思いっきりお母さんに叱られて泣くといいわ！

「What are you thinking?」

「ナッシング」

フッ、今夜わかるわよ！

ダニーボーイ！

## 真珠のネックレス

---

家に戻ったのが6時過ぎ。

私、車の中で爆睡してたの。

ダニーに起こされるまで気づきもしなかったわ。

だって朝から緊張してたでしょ？ 朝からっていうか、昨日からだけど。

終ってドッと疲れが出たのね、ほとんど失神だったと思うわ。

しっかりフルコースを食べたからお腹空いてなかったけど、

いちおうダニーに、お腹空いてるかって聞いたら空いてないって言うから、

夕食は作らなくてすむわ、正直、疲れちゃってムリだわ。

とにかく靴が、っていうか足が痛くて痛くて、それに着慣れないドレスなんか着てたから、肩が凝っちゃって、さっさと着替えたわ。メイクなんてとっくに落ちてたわよ。

このドレス、もう一生着ないと思うのよ、どうしよう？

まあ、いいわ、今はこのクローゼットに下げておくわ。

あ、真珠のネックレス！

留め金を前に回して... 壊さないように... よし。

そうだわ、拭かないと。

真珠は汗や皮脂で変色するから使ったら拭いておくのよ。

もう10年以上？ もっと？ 20年くらい前だわ、美香の入学式のときだもの。

とにかく、真珠のネックレス買ったときに店員さんが教えてくれたの。

私のは養殖真珠だけどね、それでも、いちおう真珠だから。

柔らかい布じゃなきゃダメなのよ、傷つけちゃうから。

私のハンカチはタオル地だからダメね、どうしよう...

あ、ダニーが持ってるかもしれないわ、このネックレス持ってたんですもの、あるはずよ。

あら？ まだ着替えてなかったの？

蝶ネクタイ外してシャツのボタン開けただけで、ダランとソファに座ってるわ。

スーツがシワになっちゃうじゃない！ ダニーのスーツのことは今はいいのよ。

「ダニー」

「Yes?」

「ドウ・ユー・ハブ、えっと、ソフト、で、スムーズ？ 布、クロス？」

「What do you want to do?」

「クリーニング、パール・ネックレス」

「Cleaning of... pearl necklace?」

「イエス」

なにその、ハ？みたいな顔。

「Ah... How about this?」

胸ポケットからチーフ出したわ。

これはシルク100%だから、最適だけど、シルクよね、いいのかしら？

「イズ・イット・オーケー？」

「Sure」

そうよね、あなたのお母さんのなんだから。

それに、そんなに汚してはいないつもりよ、冷や汗はかいたわよ、かいた！

まあ、とにかく拭かないと。

確か、結婚式のとくにしてたって、シシーさんが言ってたわよね。

そんな年代物なのに、こんなに状態がいいってことは、ダニーのお母さんは、

よほどちゃんと手入れしていたんだわ、本当に大切なものだったのね。

これって、天然真珠じゃない？ きっとそうね、私のとは光沢の奥行が全然違うもの。

「Now I remember, my mother used to wipe pearls just like you do」

お母さんも磨いてた？ やっぱり！

「ユア・マザー・ノウ、ハウ・トゥ、テイク・ケア・パール」

「And you, too」

私は店員さんに教えてもらっただけよ。

これをつけていたダニーのお母さんって、どういう人だったのかしら？

趣味はすごくいいわね、品もあるし、きっときれいな人だったと思うわ。

あら？ ダニーが静かね、寝てる？

え？

ジッと見てた？

ああ！ お母さんが真珠の手入れをしていたのを思い出してるのね。  
思い出に浸ってていいわよ、私は磨いてるから。

できた！  
あとは...

「ダニー、ボックス、プリーズ」  
「Box? Oh, here it is」

箱の中に、そっとていねいに入れて... ありがとうございます。

「サンキュー」

え？ なに？ ほら、早くしまっ。

「Ah...」

ン？ あ！ チーフ？ ちょっとシワシワになっちゃったけど、箱の上に載せて...

「サンキュー」

なにその目？  
なにか困ってる？  
なに？

「ホワット？」

「Ah... What do you think about that pearl necklace？」

パールネックレスをどう思うか？

「ビューティフル！ ベリーベリービューティフル！」  
「Do you like it？」  
「イエスイエス」

なに？ またその困ったような目？  
どうしたの？

「ホワット？」

「Ah... Ah...」

ああ・ああって、なに？

どうしちゃったの？

あ、やっと箱を受け取ったわ。

え？ 上に置いてたチーフをポイッて床に投げてどうするの？ シワクチャになっちゃったから？

「Would you accept it?」

アクセプト... 受け入れる... なにを？

「ホワット？」

え？ ちょっと待ってくれ？ 言葉を探してるの？ 英語でしょ？

「I want to give」

私はあげたい...

「this pearl necklace」

パールネックレス

「To you」

あなたに... あなた？ って、私？

「ミー？」

「Yes」

「ホワイ？」

え？ またその目？

なに？ え？ 目でわかれって言うの？

わからないわよ！

「ホワット？」

フーッて息吐いて、なに？

「because I love you」

ハ？

なぜなら、愛しているから...

私はこのパールネックレスをあげたい... なぜなら愛しているから...

私が...

もし... 20歳なら...

何もためらうことなくもらったと思うわ...

たとえ...

あと10日で、ここからいなくなるとしても...

でも...

今の私にはできない...

たとえ、あなたが私のこと愛してくれていても...

私があなただのこと愛していても...

「ダニー...」

「Yes?」

「アイ・ラブ・ユー...」

でも...

「アイ・ハフ・トゥ... ゴーバック・トゥ・ジャパン」



「I know」

抱きしめないで... 今...抱きしめないで... 泣いちゃう... 泣いちゃうから...

「Romie... I love you」

わかってるわ... こんなに大切なものを... 私にくれるほどだって...

だから...

「ユー・ハフ・トゥ・キープ、ネックレス、フォー・ユア... ニュー・ブライド」

ダニーが... 悲しそうな淋しそうな目で微笑んだわ...

今はわかるわ... あなたの目が何を言いたいかわ...

私たち... 何も考えないでいられるほど若くはないわ...

最後の思い出を作るほどには年を取ってはいない...

すごく中途半端ね...

「イフ... アイム・80... キブ・ミー・ネックレス」

「Yes, I would」

ダニーのあの茶色の目が...

あ！

「ノー！」

「Why？」

「パニッシュメント！」

「What？」

「ノー・キス！ パニッシュメント！」

そうよ、キスはダメ、それが私にウソついた罰よ！

「Oh, Romie! Please choose other things!」

「ユー・セイ、ユー・レディ、エニィ・パニッシュメント！」

「Not this one!」

「エニィ・イズ・エニィ」

なんでもってことでしょ？

「Romie, forgive me, forgive me. I beg you, forgive me!」

「ノーーーー」

「Oh, Romie! You kill me!」

「ユー・セイ、アイ・キャン・キル・ユー！」

なにその目？

どうしてやろうかって目？

いい気味だわ！ ヘッヘッヘ～だわ！

「I'll kill you!」

あっ

それは... ずるいでしょ？

押さえつけるなんて...

「No... I don't want to kill you, never!」

あなたの目が優しく微笑んで...

「I love you」

知ってる？

いつも...

あなたのキスで瞬殺されるのよ？

それにね...

私たち...

運命を嘆き続けていられるほどは、やっぱり若くはないのよ。

今こうやって... 一緒にいられるだけで... いいわ。



## 欲張り

---

ウソつきよ。

私がね。

お風呂に入ってくるって言ったのはウソじゃないけど。

今は一緒にいらればいいなんて、本当は夢なんか見るのが辛いだけよ。

だって、どうせ叶わないだし、それに、現実を見るのも辛いんだもの。

ノー・キスだとかパニッシュメントだとか、本当はそんな気分じゃ全然なかったわ。

ダニーだってわかってたわ、わかってるってわかったわ。

そんなことがわかってちゃって、年とると誤魔化しが効かなくなっちゃうから厄介だわ。

ほら、鏡に映る私の顔も、どうやっても何しても、どう見てもおばさんの顔よ。

それなのに、こうやってバックするって、無駄な抵抗してるのよ。勝ち目はないのに。

でも、あきらめきれれるほどは悟れないのよ...って、なんだかいつも同じこと考えてるわ。

はあああ、疲れた、行ってよかったけどね。

このまま寝ちゃうんじゃないかしら？

あの真珠のネックレスだって、素直にもらってもよかったのよ。

でも、ダニーと離ればなれになって、それぞれの現実に戻って、そしたらきっと、その現実の中で生きていって、きっとダニーは、その現実の中で誰かと出会うわ。

そして、その人を愛して、結婚するかもしれないわ。

そのときには、あの真珠のネックレスは、

あれを私にあげようと思ってくれた思いは無くなっているのよ。

そうなるだろうなって思うと、夏の思い出の記念になんて気持ちで持っていられないわ。

そこにはもう何も意味がないものを持っているなんて辛いもの。

自分がダニーにとって無意味なものになるのが... なるんだけど、なるわよ、そういうものよ。

諸行無常... あら、突然浮かんだわ、そうね、すべてのことは常ならずよ。

今までのことを振り返ってみると、本当にそうだなって思うわ。

おとうさんだって、ずっとそばにいるものだって、それがあたりまえの感覚だったわ。

でも、そうじゃなかった、いないってことを受け入れるのに時間がかかったわ。

そういうのをまた乗り越えるほどエネルギーないわ、もう二度とイヤだわ。

「Oh!」

え？

ノックなし？

「Hi, Jason!」

ハア？

あっ！ パック...！

「Nice to see you again!」

ノックもなしでドア開けて、笑うなんて！

「ユー・ニード・パニッシュメント！」

ダニーと二人並んでベッドに横になって天井見てるの。

「Mrs. Jason」

「イエス、ミスター・ジェイソン？」

「When can I take it off?」

「んっとね、あと... 10ミニッツ・モア」

「10 minutes!? Oh, no...」

「イッツ・グッド・フォー・スキン、サイレンス」

「Yes, mom」

ダニーにもパックしてやったの。

なんだかゴチャゴチャ考えてるのがイヤになって、すごくバカバカしいことしたくなったのよ。

ダニーも黙ってやらせてたから、きっと同じ気持ちだったのかもしれないわ。

チラッと横目で見ると...

グフッ

「Don't laugh!」

だって、真面目な顔でパックしてるんだもの。

「Romie」

「イエス？」

「I'm hungry」

「ウェイト、えっと、9ミニッツ」

「Oh, you found the most cruel punishment, can't move, can't eat」

「サイレンス」

「Can't talk」

「ノー・トーク！」

「Yes, mom」

ダニーが私の手をにぎったわ。

いいけど... よくないけど... いいけど...

なに考えてるのかしら？

なに考えててもいいわ、もう考えるのも疲れたわ。

こうやってポーッとしてるのもいいんじゃない？ 肌にもいいし。

そろそろいいわね。

「オーケー、ユー・キャン...」

顔見合わせて...

なんだかもうおかしくて二人で笑っちゃったわ。

なにやってるの？ いいわよ、なんでも。

「Oh, wait. Let's take a picture!」

「ピクチャー？」

「Yes, Mr. and Mrs. Jason!」

いいけど。

ダニーがセットして...

パシャッ

「Let's see」

なにこれ———？

バカみたい！

アメリカのおじさんと日本のおばさんがパックして写真に写ってる！  
最高にくだらなくて、ここまでくだらないと、むしろスツキリするわ。

さあ、あとはパッティング。

「ダニー、ドウ・パッティング」

「What?」

そうね、わからないわね、いいわ、やってあげる。

「こうやって...」

男の人の顔をパッティングするなんて笑えるわね。

ダニーが私の手のひらに... そういうことしないでよ...

イヤなら手をひっこめられるけど... イヤじゃないから逆に辛くなるじゃない...

パン！

「Ouch!」

「フィニッシュ！」

「So, can I eat something?」

「イエス！」

キッチンで立ちながらサンドイッチよ、ビールもね。

私が提案したんじゃないわよ、私が作ってるそばからダニーが食べちゃうのよ。

ついでにビール出してきて、作ってる私の口元に瓶の口を持ってきて飲ませるんですもの。

いいけどね、なんていうの、なんか、えっと、ハジケてみたい？

こういうのがハジケるっていうのかどうかわからないけどね。

きっとダニーもそうなのね。

ビールを持ってウッドデッキに出たわ。

これで二本目、顔がほてってるわ。

なんだか...

バカみたいなことするのもいいわね。

考えたってしかたないってわかってるのに考えちゃって疲れるのよ。

だから、バカみたいなことして、なんていうの空気抜き？　そういう感じだわ。

ダニーが私の手をにぎって...

私って、きっと欲張りなんだわ。

こうやって二人で一緒にいて、手をにぎってもらってるだけでしあわせなはずじゃない？

もし、明日、私が死ぬとしたら、きっと最後の夜がこんな夜でしあわせだったって思うはずよ。

でも、もっと... なにかもっと...って思ってるの。

それって明日もその先も生きる前提なのよね、生きると思うけど、当分死なないと思うけど。

でも、もし明日死ぬとしたらって考えたら今をもっと味わえるのよ。

でも、できないのよ、明日死ぬってというのが、なんていうのかしら、リアルじゃないんだもの。

だから、欲張っちゃうのよ、こうやっている今がしあわせなはずなのに。

「What are you thinking?」

ビックリするかもしれないけどね、私、欲張るって単語知ってるのよ。

美香が中学のときに聞かれたの、欲張りって英語でなんて言うの？って。

そのときはすっかり忘れてたから、辞書引っ張り出して調べたのよ、だから憶えてるの。

よく考えたら、美香に辞書で調べさせればいいだけの話だったんだけどね。

「Romie?」

「あ、えっと、アィム・グリーディ」

文字で書けばgreedyなのよ。

「What do you mean?」

どういう意味か？　え？　グリーディじゃなかった？

「えっと、なんて言えばいいかしら...　アイ・ワント・モア?」

「Beer?」

ハァッ？　ビールじゃないわよっ！

もう、男って！　もっと空気読みなさいよっ！　空気読むって...

「リード・ザ・エア！」

「Read... the air? What do you mean?」

空気読めって意味がわからない？

「だからっ、リード、ザ、ジ？　エア！」

「Ah... What do you want to say?」



何が言いたいのか？

アメリカでは空気を読むっていう概念がないのかしら？

もういいわ、とにかく...

「アイ・ドント・ワント・ビア」

「So, what do you want?」

何が欲しいのか...

だから、そこなのよ！

あのネックレスのことがあって、まあいろいろあって、こうやってて、

そして、私をもっと欲しいと思っちゃうって言ったら、ビールではないってわからない？

少なくとも、この状況で、ビールはありえないでしょ！

「What do you want?」

もうっ

「ナッシング！」

男に微妙な女心をわかれっていう方がムリだったわ、私が悪かったわ！

「I want you」

ハ？

なんで

そんな

ストレートに

正直に言うのっ？

そうよ！ それなのよ！ 本当はそれなのよ！ 簡単に言えば、それよ。

「I'm greedy」

ハ？

わかってたんじゃない！

「ユー... リード・マイ・マインド」

悔しいけど。

「Now I understand」

あ、そう。

「But I didn't read your mind」

私の心を読んだのではない？

「You confessed」

私が... 白状した？

あ

リード・マイ・マインドなんて言っちゃった...！

「Let's be honest」

正直になろう...

そうね、今さらね。

「イエス」

「We want each other」

「イエス」

「I love you」

「イエス」

「Do you love me?」

「イエス」

「Good」

「イエス、グッド」

そうね、明日もし死ぬとしたら、今ウソついてたら、いちばん後悔するわね。

それだけはわかるわ。

もしかして...

ダニーもそういうことを考えてたの？

ダニーの顔を見たら、あの茶色の優しい目で微笑んだわ。

そうなのね。

そうよね。

## スノーイング？

---

あのね...

身体が重たいって感覚... 若い人にわかるかしら？

私はわからなかったわ、わからないってこともわからなかったわ。

意識はあるのよ、でも、まぶたを開けることさえ一苦労なの、たかだかまぶたよ？

頭では起きなきゃって思ってるの、身体は起きないの、起きられないのよ。

感覚はね、若いときと変わらないのよ、だから若いときと同じようなペースで動くよね、次の日大変なことになるの、身体が若くないから。

次の日ならまだいい方だわ、ヘタすると3~4日後にきて、「どうしたの、私？」ってことになるのよ。

たまに一週間後にきたりしたらもう、たとえば筋肉痛ね、意味がわからなくてパニックよ。

原因が一週間前にあるなんてとっさには思えないじゃない？

これは、確実に昨日のだわ。

結婚式に出て、お墓に行って、真珠のネックレスのことでパンパンになって、

おまけにビールでしょ？ 今の私の許容量としては結婚式でダウンしてもおかしくないわ。

目を、よいっしょ、開けた。

今何時？ 首動かすのもめんどくさい、えっと、10時20分。

このまま寝ていたいわ。

でも、ここってダニーのベッドだから、自分の部屋に移動しなきゃいけないと思うと、

はあああ

ため息つくようなことでもないんだけど。

ダニーはまだ寝てるのかしら？ 今度は反対側に首動かすの？ めんどくさい。

よいっしょ、あら？ いない。

とっくに起きたのね。

起こしてくれなかったのね。

起こされても起きなかったと思うけど。

でも、私、あなたのイビキで真夜中に起こされたのよ。

すっごく大きなイビキで目が覚めたのよ、すぐにまた寝ちゃったけど。

真夜中にイビキで目が覚めたなんて何年ぶりかしら？

おとうさんが死んでからは一人で寝てるから、静かなものよね。

真夜中に起こされなくてすむけど、一人なんだなあって思うのよ、たまにだけだね。

よいっしょ。

起きてないわよ、ダニーの枕にゴロンと移動しただけよ。

ダニーの匂いがするわ。

自分以外の枕の匂いなんて...

正直になろうなんて、正直になったところでどうなるの？

どうせあと10日で私は帰らなくちゃいけないのよ。

愛してるよとか言い合ったところで何か変わる？

冷めてるわね、わかってるわ、ううん、冷めてるんじゃないのよ。

哀しいことに、私は現実離れしたことはありえないことを知ってる歳になってるってことよ。

「Oh, finally Sleeping beauty is awake!」

スリーピング・ビューティ... 眠れる森の美女？

起きたら、おばさんになってたわよ、100歳じゃないけど。

「Coffee?」

コーヒーを持ってきてくれたのね。

「サンキュー」

「This is my side, did you roll over to here?」

マイサイド？ あ！

「アイム・ソーリー」

ここはダニーの場所だったわ。

「Romie, I'm just teasing you」

ティージンギュー？

笑ってるから、なにか笑うことよね？

「Are you still sleepy?」

まだ眠いのか？

まあ、そうね、それに笑う気分でもないわ。

ベッドにもたれて、私の肩を抱いて（つまり私は肩を抱かれて）、コーヒー飲んで、ときどき私の髪にキスして、ギュッと肩抱いたりして...

今、私がなんて思ってると思う？

この人、恋愛ごっこしてるのかしら...よ？

冷めてるにもほどがあるけど、そう思っちゃってるのよ。

ひどすぎない？ でも、そう思っちゃってるのよ。

「Romie」

「イ、イエス？」

「You were snoring」

スノーイング？ 雪？ なに？

「ホワット？」

「You...」

え？ ダニーがグゴォって...

「私？ ミー？」

「Yeah」

ウッソーーー！

「It was cute」

キュートなわけじゃないじゃない！

イビキかく女なんて！ それこそ100年の恋もいっぺんに冷めるってやつだわよ！

「I pinched your nose, and I released my fingers, you snored again!」

鼻を？ 指、つまんだってこと？ スノー、スノア？ アゲイン？

鼻をつまんで？ 指を離したら？ またイビキかいたって、そういうこと？

「ハァァァアッ？」

「Sorry, but it was funny」

笑ってるけどっ、いいおとながそんなことするっ？

おとなじゃなくても、人の鼻を、寝ている間に、そんなことして遊ぶっ？

「アイ・ヘイト・ユー！」

「I don't care, I love you」

嫌いって言われたのよ、ケアしなさいよ、アイ・ラブ・ユーなんて言わないでよ。  
もうやめない？ 愛してるとか、そんなこと、辛いだけじゃない、愛してるって、  
100回言ったって、何も変わらないのよ、10日後にはバイバイよ。  
むしろ嫌いになってほしいわ、そしたらあきらめがつくもの、楽になるわ。

「What are you thinking?」

何を考えてるか？ だから...

「ドント・ラブ・ミー」

「What?」

「ヘイト・ミー」

「Why?」

なぜって...

うまく言えないわよ、そんなこと、日本語でだってむずかしいわよ。

「ビコーズ...」

なんて言えばいいの？

「ビコーズ... アイ...」

理由はなんでもいいわ。

「スノーイング」

いびきでもなんでもいいわよ。

「Snowing? Ah! Snoring!」

そう、それよ、それでいいわよ。

「How can I?」

なんでできるのか？

「You were sleeping like a little child...」

子どもみたいに眠っていた...

「It made me happy... I love to hear your snoring...」

しあわせを感じた... 私のイビキを聞いているのが好き...

「It makes me feel like... I'm not alone」

ひとりぼっちじゃないって... 感じられるから...

「イヤ...」

「Romie?」

「イヤ...」

「Why are you crying?」

だって...

「一緒にいたい」

言いたかったけど...

「一緒にいたい」

言ったらもっと悲しくなるから...

「Romie, speak in English」

でも...

「一緒にいたい」

あなたがわからなくても...



「一緒にいたい」

あなたに言いたいの...

「一緒にいたい」

あなたがこうやって抱きしめてくれるうちに...

「一緒にいたい、一緒にいたい、一緒に...」

言ってもしかたないってわかってるけど...

「Je veux être avec toi pour toujours」

え？

「ホワット？」

「You don't have to understand」

アンダerstandしなくていい？

「ホワイ？」

「Ah... Because... I'm not sure what I said was correct or not」

自分が言ったことが... コレクトかどうか... わからない？

どういう意味？

「Why did you cry?」

なぜ泣いたのか...

「ビコース...」

言えないわよ。

「ユー・スノーイング、アイ・ウェイクアップ、ミッドナイト」

「Did I?」

「イエス」

「Was I cute?」

「ノー」

可愛くないわ。

だって...

あなた、私のウソがわかるんですもの。

## Montrachetの真実

---

どうかしてると思わない？

あんなハードな一日の翌日にピクニックに行くって言うのよ？

ピクニックっていったらお弁当でしょ？

とてもそんなものを作る元気がないって言ったら、自分がテイクケアするって言うの。

マックじゃないわよね？ ドライブスルー？ もうなんでもいいわ。

顔を洗って薄くメイクして、だって紫外線がねえ、あ、クマができてる、いいわもう。

ユニクロのサマードレスでいいかしら？ 脚がパンパンにむくんでジーパンがキツイのよ。

薄いカーディガン持って... カメラもいちおう持って行く？ そうね、思い出？ 思い出って。

「Are you ready?」

「イエス」

なに？ なんでジッと見てるの？ クマ？ しかたないでしょ、そんなに見ないでよ。

「Hard to believe this beautiful girl snores」

スノア？ あっ！ イビキ！ それを言うっ？

「ユー・アー、ビッグ、ビーーーグ・スノア！」

「Yes, and I was not cute」

「ノー！」

「You were cute」

チュッて

「Let's go」

この車か...

ダニーのお母さんのお墓に最初に行ったときに乗ったわよね。

この車じゃ、助手席で居眠りなんてできないわね。

ダニーが途中で車を止めたのは、パン屋さんのようなレストランのようなお店。  
待っててって言って、少しして大きな箱を抱えて戻ってきたわ。  
私の足元に箱を置いて、だって後ろに積むところがないのよ。

「All set!」

車を発進したわ。

大きな池？ 湖？ その周りに大きな木があちこちに生えていて、  
その下には木製のテーブルとベンチがいくつもあるの。  
ダニーは箱の中から紙のテーブルクロスを出して広げて、サンドイッチが入っている箱と、  
これはなにかしら？ チーズ？ その箱と、白ワインとグラスを置いたわ。  
こんな便利なセットが売ってるの？  
これなら気軽にピクニックに行けるわね。

木陰は気持ちいい風が通って、なんだかホッとするわ。  
ピクニックなんてどれくらいぶり？ 美香の幼稚園の親子遠足以来だわ。  
ピクニックにワインなんて日本じゃ考えられないわ、せいぜいお花見のお酒？

「Do you remember Montrachet?」

モンラ...なに？

「ホワット？」

「White wine, you used for cooking, it was ...yes, the first time you cooked」

白ワイン... 最初に料理した...

「ああ！ デリシャス、それとエシレ・バター！」

「I know you love Échiré butter, I can see every morning, but I'm talking about white wine」

「イエス、アイ・リメンバー」

あの空き瓶に、あなたからもらったピンクのバラを活けたんですもの。

「Do you know how much did it cost?」

いくらするか知ってるか？

そうねえ、美味しかったから二千円くらいするかしら？ そんなに高いのを料理に使ったの、私？

えっと、ドルにすると... わからないから1ドル100円にして...

「トゥエンティ・ダラー？」

なに？ ニヤッて、本当はコスパ？ 980円とか？

「It's about... five hundred thousand yen」

ン？ ファイブ、5、ハンドレッド100、サウザンド1000、えっと一、十、百...

50万？ あれ？ 計算間違ってるわよね？

ダニーがテーブルの上に指で... 5、000000... 50万... え？

「Yes」

「ごっ 五十万円——っ？」

ウッソ——！ そんな高いのを料理に使ったのおおっ？

「ア...ア... アイム... ソ——ーリ————ッ！」

あ... 貧血起きそう...

「Don't be sorry, it has a story」

ストーリー聞く余裕が...ない...と思うの... クラックラしちゃって...

「Cathy bought that wine, of course with my card, to celebrate for our divorce」

ン？ キャシーが買った、ダニーのカードで、セレブレ... お祝い、離婚の... え？

離婚のお祝い？

「She forgot about that wine and left home」

あのワインのことは忘れて、家を出ていった...

「I didn't want to drink it by myself, but I couldn't throw it away, too expensive to do that」

一人で飲むのはイヤだったけど、捨てられなかった、そりゃそうよ、50万ですもの。

「When you asked me did I have a white wine, I remembered that wine」

私がホワイトワインはないかって聞いたとき、あのワインを思い出した...

「I thought it would be a good idea to drink it with you, drink it up」

私とあのワインを飲むのは、いいアイデアだと思った...

「But you used it for cooking」

「アイム・ソー---リー---！」

「Don't be sorry, let me finish this story」

「イ、イエス」

「Yeah, at first I was frightened, Montrachet for cooking?」

最初はビックリした？　するわよねえ、ああああ、ごめんなさああああい。

「But I realized, it couldn't be better」

ベター？　えっと、couldn't be betterって...　あ、これ以上ないくらい最高だった...わよね？

「How can I say... that Montrachet was the kind of... a symbol of my worst memory」

モン...なんとかは、最悪の思い出のシンボルだった...

「You turned it to a delightful dish, it was really delicious and I enjoyed it」

えっと、私があれをディライトフルってなんだっけ？　とにかく美味しい料理に変えた？

「Now that Montrachet is a funny and delicious memory for me」

今はあのモンラなんとかは、おかしくて美味しい思い出...

それはよかったけど、私はやっぱり罪悪感でいっぱいよ！　50万のワインって...

「セイ・トゥ・ミー、ビフォー・アイ・ユーズ、アイ・ドント・ノウ...」

「Romie, what I want to say is... You always turn bad things to good things」

いつも悪いことを良いことに変える？

「ノー、アイ・ギブ、悪夢って？ あ、ナイトメア、アイム...」

美香に天然って言われるのよ、自覚はないんだけど、天然て？ ナチュラルではないわね。

「えっと、不注意、ケアレス・ミステイク、エブリタイム、ナイトメア」

だいたい50万のワインを料理に使うなんて悪夢以外のなにものでもないわ...

「I love your nightmare, well, it can never be a nightmare, it's a sweet dream」

私の悪夢を愛する？ 悪夢にはならない？ スイート・ドリームだ？

この人って... ときどき思うんだけど... かなり... ロマンチスト？

現実をちゃんと見てるかしら？ 私はそんなスイート・ドリームなんかじゃないわ。

「ダニー、ユー・ハフ・トゥ・ルック・ミー、本当の私って？ あ、トゥルー・ミー」

「yes?」

「アイム・ナット・スイート・ドリーム、アイ、言いたくないけど... スノア！」

そうよ、イビキをかくおばさんよ！ 現実をちゃんと見て！

「See?」

見ろ？

「How can I stop loving you?」

ダニー... あなた... 少し変わってるかもね...

イビキかくおばさんが好きなんて...

大きな木にもたれて座ってるの。

なんだか気持ちいいわ、疲れが抜けていく気がするわ。

木の、なんて言ったっけ、フィットなんか？ 癒し効果があるってやつ、それかしら？

ダニーは私の脚を枕に寝てるわ。

本当は私が寝かせてほしいくらいよ。

でもね、こうしてられるのも... そんなこと思うと、ずっとこうしていてもいいと思うの。

ずとって、死ぬまでこうしてはられないけどね、脚だってしびれちゃうだろうし。

きれいなところね。

ダニーがこれはポンドだって言ってたから池ってことよね。

ときどき家族連れとか夫婦連れが、こっちを見てニッコリして通り過ぎるけど、

私とダニーは、あの人たちからは何に見えるのかしら？

恋人ではないわね、おじさんとおばさんですもの、おじさんとおばさんで恋人でもいいんだけど

、

恋人っていったら若者ってイメージですものね。

だったら夫婦？

そうね、こんな恰好してるんだから夫婦だと思ってるわね。

私とダニーって何なのかしら？ 愛してるって言い合って... そういうことだから、

いちおう恋人ってことよね？

期限付きの。

考えるのやめよう、泣きそうになったわ。

池の写真でも撮って、帰ったら美香に見せるわ、池の写真なんて興味ないと思うけど。

さっきまで写真をいっぱい撮ったわ。テーブルの上に並べたランチの写真とか、

食べてるダニーの写真とか、セルフタイマーで二人の写真も撮ったわね。

日本に帰ってその写真を見るとき、私はどんな気持ちで見るとかしら...

当分見る気にならないかも、どうなのかしら、案外帰ったら割り切れたりして？

そんなこと、今考えたってしかたないわ。

私の膝の上で寝てるダニーでも撮るわ。

パシャッ

私、ここから見るダニーも好きなのよ。

だって、自分の膝の上に頭を置いてる顔を見られるのは、今は私だけでしょ？

おとうさんも私の膝の上に頭乗せたことはあったけど、耳かきするときだけだったわ。



こんなふうにジッと顔を見たことなんてなかったわね、耳かきに専念してたから。  
耳かきが終わるとサッと立ち上がってたし。でも、あれはあれで今になればいい思い出だわ。  
ダニーの髪って柔らかいのよ、クルンってしてるし、茶色で、白髪もあるけどね。  
まつ毛も茶色いのよ、茶色のマスカラなんかつけなくてもいいわね。  
ダニーがマスカラつける必要なんてないんだけど、まつ毛が長いしね。長さの問題じゃないけど。  
鼻もスツとして高いのよ、うらやましいわ。私のも低くはないけど、このスツは日本人にはないわよね。

くちびる... 瞬殺兵器よね。こうやって見るだけだどふつう、少し薄い？  
ちょっと触ってみようかしら？  
柔らかいわ...って！ ちょっ！パクッて！

「Yummy」

起きてたの？

なにそのイタズラっ子みたいな目？

あ、起き上がった。

顔をジッと見てたことバレちゃったかしら。

だって暇だったんですもの、暇ってわけじゃなかったけど、忙しくはなかったけど、ただ...  
なに？ なんでジッと見るの？ 仕返し？ あ、わかった！ そうはさせないわよ。

サッと立ち上がって走ったわ、足は遅いんだけど。

いつも瞬殺されてられないわって、すぐに捕まっちゃったわ、本当に私って走るの遅いのよ。  
後ろから抱きしめられるの... 嫌いじゃないわ、正直に言うわ、好きよ、ドキドキするのよ。  
こういうことにドキドキできるのも今だからよね。

もしも、もしも、もしも、結婚したとしたら、いつかこんなこともしなくなるわ。

膝枕だって、耳かきのときくらいになるわ、ダニーの耳かきはしたことはないけど。

ドキドキだってしなくなるわ、だからいいのよ、期限付きだから、愛してるとか、  
そういうこと言ったりできるのよ、せつない気持ちにだってなれるのよ。

もしも、もしも、ずっと一緒にいたら、きっとこんな気持ちなんて感じなくなるわ。

いるのがあたりまえになって、ときどき、どこかに出かけてくれないかしらとか思って、  
こうやって抱きしめられながら、髪にキスされてキュンとするなんてこともなくなるわ。

だから...

でも...

私がダニーと一緒にいたいって思うのは...

キュンとしたり、ドキドキしたいからじゃなくて...

あたりまえになってもいいの、私の存在がダニーにとってあたりまえになっても...

うん、ちがうわ。

あたりまえになりたいんだわ。

私はダニーのあたりまえの存在になりたいって思ってるのよ。

いるのがあたりまえって。

私もダニーがいるのがあたりまえだって、そんな毎日を送るのが、一緒に送るのが、ダニーだったらいいのって思ってるのよ。

こうやって一緒にいるのがあたりまえになる日なんて、絶対になんてわかってるのに。

「What are you thinking?」

私はね...

「アイ... ミス・ユー」

もう淋しいのよ。

「Romie, I'm here」

わかってるけど...

「Look at me」

あなたの茶色い目が私を見てるけど...

「I'm here, Romie」

そうね... あなたは今はここにいるわ...

「I'm here... Here with you...」

抱きしめるあなたの腕は今は温かいわ。

「イエス、ユー・アー・ヒア」

死ぬわけじゃないんだもの。

でもね...

ずっと一緒にいたって思ってしまうの、バカでしょ。

## アンティル

---

帰るんだけど、不思議に思うのよ、この車、雨の日はどうするのかしら？  
後ろのこの黒いのを被せるの？ だったら最初から屋根のついたのにすればいいのに。

「Why are you looking at this car?」

なんで見てるのかって、最初るときから思ってたんだけど聞いていい？

「ドゥ・ユー・ライク・ディス・カー？」

なに？ その、ビックリしたような顔？ 聞いただけじゃない。

「What do you mean?」

どういう意味？ 簡単な質問文だったわよね？ 発音がおかしかった？

「ドゥ・ユー・ライク・ディス・カー？」

これよ、これ、この車。

「That's why I have it」

好きだから持っている、そりゃそうだわね、バカな質問したわ。  
でも、これを好きっていう気持ちがわからないのよ。

「Do you wanna drive this car?」

ン？

「Do you want to drive?」

ドライブしたいか？ できるわけじゃない。

「ノー」

「Come on! I let you drive」

いやいやいや、カモンじゃなくて、

「ノー」

「It's fun!」

楽しい？ あ、そう、いいけど、そうじゃなくて、

「アイ・キャント・ドライブ」

「Ah! You didn't bring an international driver's license」

インターナショナル？ ライセンス？ なんだかわからないけど、

「ノー」

「Well, just try one or two blocks」

トライって、

「ノーノー」

「No worry, just a few blocks」

ブロックが何なのか知らないけど、

「アイ・キャント・ドライブ」

「What do you mean?」

どういう意味って、そのままよ。

「アイ・キャント・ドライブ」

「You mean... Don't you drive even in Japan?」

日本だろうとどこだろうと、運転できないっていうのはそういうことでしょ！

「アイ・キャント・ドライブ」

何回おんなじこと言わせるの？

「How can you survive?」

どうやって、サーバイブ... えっと... あ、生き残る、ハアッ？ 生き残るうっ？

運転なんかできなくたってこうやって生きてるわよ！

「えっと、バス、トレイン、それと、サブウェイ、ジャパン・イズ・ワンダフル！」

日本愛国者みたいになっちゃったけど、生き残るなんて言うんだもの。

「Oh, you should learn how to drive」

ハウ・トゥ・ドライブ、運転のしかたを？ 覚える？

「ホワイ？」

「No question, I'll teach you how to drive」

運転のしかたを教える？ いやいやいや

「ノーノーノー」

いいから、いいの、本当に、運転したいとも思っていないのよ。

「Come on!」

だからカモンじゃなくて

「ノーサンキュー」

「I can't hear you」

聞こえない？ もっと大きい声で言った方がいい？

「ノーサ...ンツ」

あのねっ、キスすれば私が黙ると思ってるのっ？ ちょ、ちょっと、なに？

「You sit here」

もう座らせてるじゃない！ あなたの脚の間にっ！

「Lean back on me, and hold the wheel...」

何言ってるのかさっぱりわからないけど、勝手に私の体を動かしてるわよ！  
ちょ、ちょっと待って、冗談よね、からかってるだけよね？

「ダニー、ジョーク よね？」

「I'm serious」

シリアスって、ウソでしょ!? ウソ！ ウソウソウソ！

「Here we go!」

「ギャ—————ッ！」

止めて————っ！ 声が出な————っ！ ス、ス...

「スト—————ップ！」

スーッて 止まった。

私の後ろで大声で笑ってる。

あなたの脚の間で私が殺意を抱いてるって知ってるかしら？

「Ok, you sit this side」

ヒョイッて私を助手席に移動させたわ。

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ヘイト・ユー」

「Ok! I love you!」

愛してるって、いつまでよ？

いつまでって、アンティル？

「アンティル... ホエン？」

「Until... I die」

死ぬまで...

「ダイ！ ナウ！」

「If you ask me so, but... How can you go back home? You can't drive, right?」

私がそう言うなら？ でも？ どうやって家に帰る？ 運転できないだろ？  
人の弱みにつけこんで——っ あ、そう。

「アイ・ウォーク！」

「Ok, go ahead」

え？ いいって？ 本気？

わ、わかったわよ！ 歩くわよ！

「Romie!」

私の手をグッて引っ張って... よかったあああ、道がわからないんだもの。

「I need a child sheet to tie you, so you can't escape!」

チャイルドシート？ なに？

「ホワット？」

「Nothing, fasten your sheet belt」

あ、シートベルトね。

ブォー——って、むち打ちになりそうだってば！

私、もしも、もしも、ずっと一緒にいることになっても、この車には二度と乗りたくないわ。

今はソファに座ってコーヒー飲んでるの。

ダニーはまたむずかしい本を読んでるわ。

まあ、あの車はべつとして、ピクニックしてのんびりしたら疲れがとれた気がするわ。

夕食のこと考える余裕が出てきたもの。

ランチがけっこうボリュームがあったわよね、チーズとかいろいろな種類があったし。

あっさりしたものがいいかしら？ ダニーは何か食べたいものってあるかしら？

聞いても無駄よね？ なんでもいって言うんだわ。でも、いちおう聞いてみる？

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ワント・ビ・ウィズ・ユー？」

ン？ どうした？ なんてそんな驚いた顔してるの？

「I want to be with you, too」

一緒にいたい...

なんでそうなるの？

何が食べたいって...

あっ

聞いてない！

本音が出ちゃった！

「えっと、そうじゃなくて、ホ、ホワット・ドウ・ユー・ワント・フォー・ディナー？」

「Anything you want to make」

ほら、やっぱりね。

わかっているのに聞いちゃうのよ。

「Romie」

「イエス？」

「I really want to be with you」



本当に一緒にいたい...

「アンティル... ホエン？」

わかってるのに聞いちゃうなんて...

「Until I die」

死ぬまで...

「Don't say die now!」

今死ねって言うな？ 言わないわよ、今、死なないでよ。

「ドント・ダイ... アンティル... アイ・ゴーバック・ジャパン」

せめて日本に帰るまでは一緒にいてよ。

「Ok」

優しい目で微笑むけど、本当はもっと長生きしてほしいわ。

もう会えなくなっても、生きてるって思えば、少しは...

「So, what are you gonna make for dinner?」

そうね...

「ホワット・ドゥ・ユー・ワント・イート？」

聞いても無駄だってわかってるけどね。

「Meat sauce spaghetti」

あら！ めずらしい、ちゃんとリクエストしたわ。

え？ また、うどんにするのお？

いいけどね、あなたが好きなら。

## アルデンテ

---

サラダも作ったし、あとはスパゲティを茹でれば出来上がりね。  
7分て書いてあるから、12分くらいかしら... うどんみたいなパスタにするにはね。

「Romie」

あら、どうしたの？

「I forgot to tell you」

私に言うのを忘れた、なにを？

「Only 2 days left」

2日しか残っていない、何が？

「ホワット？」

「My vacation」

休暇？

あ！ そういえば、あの現地スタッフが最初に言ってたわ、ご主人が二週間の休暇をとってるって。

あのときは何も考える余裕がなかったけど、ていうか、まさかこんなふうになるとは、こんなふうって、ねえ、まさか...ねえ。

「I'll extend until the day you leave」

ン？ イクステンド？ なんだっけ？

「ホワット、イクステンド？」

「Ah...taking holidays... longer」

両手をビローンって...

あ、延ばすってこと？ なにを？ ホリデー、休暇を？

「ホワイ？」

「I don't want you to be alone, and I want to be with you as much as I can」

私をひとりぼっちにさせたくない、できるだけ一緒にいたい...

それは...

でも...

あと一週間もあるのよ？ 二週間の休暇だけでも今年の有給全部使っちゃたんじゃない？

それに、なんていうのかしら、一週間延ばしたところで...

「Romie?」

あのね...

「ワーク」

「What?」

「えっと、ドント、ロンガー、ホリデー」

「I want to」

私だって主婦歴長いのよ。

若い子みたいに、あとさき考えないで一緒にいたいだけじゃ現実的じゃないのも知ってるわ。

私がいなくなった後、風邪でもひいたりしたらどうするの？ 有給ないのよ？

それに、その分今月のお給料少なくなるでしょ？ それが現実でしょ？

て、英語でなんて言えばいいかしら？

えっと...

「ユー・ワーク、給料って、給料、あ！ インカム！ ユー・ゲット・インカム」

「You are very practical!」

プラクティカルって、なんだっけ？ えっと... あ、現実的？ あたりまえでしょ！

「アィム・ハウスワイフ！」

え？ なに？ ポカン？ あら、今度はなに？ 目が... 泣きそう？ 悪いこと言った？

言っていないわよ、だって現実ってそういうものでしょ？

もっとちゃんと説明した方がいいのかしら？

えっとね...

「イフ・ユー・アー・マイハズバンド、アイ・セイ、ワーク、フォー、インカム」

あら？ これじゃ収入のために働けていうひどい奥さんみたいに聞こえるかしら？

でもね...

「ウィ・ニード・マネー、フォー・リビング」

生活するためには収入は必要なのよ、だって

「ウィ・ハフ・トゥ・ペイ、フード、えっと、電気代、エレクトリシティ、とか、ウォーターとか？」

あら？　なんでこんな話になっちゃったんだっけ？

「Romie... You are a very excellent housewife」

エクセレント？　そんなんじゃないわ。

「アィム・ジャスト、ハウスワイフ」

哀しいほどにね、浸みついちゃってるのよ、主婦がね。

「So... You make me work for income」

まあ、そうよね。

「イエス」

「Because we need money for paying bills of electricity, water and food」

まあ、そういうことよ。

「イエス」

「Oh, Romie...」

え？　抱きしめる？　ここって抱きしめるところ？　そんなこと言った？

「Ok, I'll go back to work 3 days later, for income you need to pay the bills」

私が必要なわけじゃないけど、まあそういうことよ。

「イエス」

「I wish if...」

私は願う、もし？

「Romie」

「イエス？」

「Water is boiling」

ボーリング？

あっ！ スパゲティー茹でるお湯！ 地獄の窯みたいに沸騰してるわ！

あら？ 今日のスパゲティは美味しいわ。

なんでかしら？

あっ！

ポーッとしてて、袋に書いてある時間であげちゃったんだわ。

どうしよう、もう一回茹でる？ でも、オリーブオイルかけちゃったわ。

あ、ダニーが、え？ クルクルって？ スパゲティ巻いてる？ 切らないの？

食べた...

硬いわよね？

「Al dente!」

え？ 今、アルデンテって言った？

「イエス...」

硬い？

「I must confess」

ダニーって白状しなきゃいけないことが多くない？

「I prefer al dente」

アルデンテを好む？

ハアッ？

「でも、ユー・メイド・ソフト、ベリーソフト、ファーストタイムと、いつだっけ？」

「I thought you wanted to know my mother's cooking, she made overcooked spaghetti」

お母さんのクッキングを知りたいと思った？ いつもオーバークック、茹ですぎ？

「でも、ユー・カット、スパゲティ！」

「That's my mother's way」

お母さんのやり方？

え？ でも、たしかダニーが作ったときも、うどんみたいに柔らかかったじゃない？

「ユー・メイド・ソフト・スパゲティ、いつだったけ？」

「I thought you liked soft one」

「アイ・ラブ・アルデンテ！」

「Do you？」

ドウユー？じゃないわよ！

アルデンテが好きなんだったら言ってよ、そしたら、私、もっとパスタ料理作れたのよお。

「Is there anything wrong？」

何か悪いことでもあるのか？って、もっと前に言ってくれって言っても今さら遅いわよ。

「グッド、ユー・ライク・アルデンテ、グッド」

「And you love al dente」

「イエス」

「Good」

まあいいわ、こうやって一緒に夕食食べられるのもあと二日...じゃないわ、  
夕食は一緒に食べられるわよ、遅く帰ってきても、一緒には食べられるわ。

接待とかあるのかしら？おとうさんは学部の飲み会とかあったけど。

まあそれはいいわ。

お昼は？ いつもどうしてたのかしら？

「ダニー、ホエン・ユー・ワーク、ホワット・ドウ・ユー・イート、ランチ？」

「Ah... buying sandwiches, or... going to Café... MacDonald's, and so on」

マクドナルドーーーッ？

「Oh, I know you want to say. No MacDonald's! No Big Mac!」

「ノー・ビッグマック！」

「Ok, I'll stay away from MacDonald's」

笑ってるけど、笑いごとじゃないのよ。

男ってそうよ、せっかく身体のことを考えて食事を作っても、外で好き放題食べるのよ。

おとうさんがそうだったわよ、それで、ああいうことになっちゃったのよ？

お弁当作る？

一週間だけでも、作らないよりはいいわよね？

そうね、でも、アメリカのお弁当って、何を持っていくの？ おにぎりじゃないことは確かね。

「What are you thinking?」

お弁当って、英語でなんて言うのかしら？

えっと... 映画でよく出てくるわよね、小さい子が...

あっ！

「ランチボックス！」

「Lunch box?」

「イエス、アイ・メイク・ランチボックス、フォー・ユー」

え？ ポカン？

ランチボックスって、アメリカだと子どもだけなのかしら？

「You are...」

私は？ なに？

やっぱりヘンなのかしら？ ズック入れを持っていけみたいなカンジなのかしら？

「Je veux t'épouser」

え？ なに？ 全然聞き取れなかったわ。

「ホワット？」

「Well, MacDonald's lost a customer, I was V.I.P. for them!」

マクドナルドはカスタマーを失った？

一人くらいいなくなっても大丈夫よ！



ソファに座ってコーヒーを飲んでるの。

ダニーは私の横でむずかしい本を読んでるわ、いつもと同じように。

いつもと同じようにって、しあわせな言葉ね。

おとうさんが死んでから特にそう思うようになったわ。

その、いつもと同じだって、ずっと続くわけじゃないってわかったし。

ダニーとのいつもと同じは、あと10日？ 9日？ 期限付きだしね。

突然いつもと同じが奪われてしまうよりはいいかもしれないわ。

おとうさんが突然いなくなってしまったあのときよりは、ずっといいわね。

私... ずるいわ。

ダニーが一週間休みを延ばすって言ったとき、延ばさなくていいって、

仕事に行ってるって、それって、確かにあのとき言ったことはウソじゃないけど、

こうも思ったのよ、ダニーがいなくてことに慣れる準備期間になるかもしれないって。

だって、日本に帰るまで24時間一緒にいて、突然いなくなったら耐えられないもの。

ダニーだって、ふつうに仕事するようになったら、きっと私がいなくてことに慣れていくわ。

ダニーがどう思うかはわからないけどね、どう思ってるかもわからないし。

アルデンテが好きだったこともわからなかったんだから。それはいいけど。

ダニーの脚のところにコロンで膝枕したら邪魔になるかしら？

なんだか突然したくなっちゃったんだけど。

膝枕って... してもらったことあったかしら？ 小さい頃はあったかもしれないわ、

でも、おとうさんにしてもらったことって、あった？ ないわね。

新婚のときは、ちょっと、やってもらいたいなあって思ったことはあったわね。

でも、いつも文献とか、次の授業のための資料とか読んでたから、

邪魔したら悪いなあと思ってるうちに、そんなことしたいとも思わなくなってたわ。

「Why are you looking at my legs?」

なんで脚を見ているのか？

膝枕してみたいって、英語でなん言うの？

わからない、やってみせるしかないわ。

「イフ・アイ・ドウ...」

こうやって

「ホワット・ドゥ・ユー・シンク？」

正直に言っていいのよ、邪魔なら邪魔だって。

「Well, I'll try not to fart」

ファート？

「ホワット・ファート？」

「Ah... stinky gas」

スティンキー... 臭い...だった？ 臭いガス、おなら？

おならしないようにトライする？

「オーケー、アイ・ドント」

起き上ろうとしたら押さえつけられるって、どうなのかしら？

「Don't worry, my fart smells like a rose」

僕のおならはバラの香りがする？

バッカみたい、いいけど。

見上げたら、ダニーがニッコリして、また本に目を戻したわ。

よかった、邪魔じゃないってことね。

膝枕って気持ちいいのね、なんだかホッとするわ。

たまにだからいいのよね、毎日やってたら、ただの枕代わりにしか思わなくなるわ。

そうかしら？ わからないわ。

こうやってずっと一緒にいられるのもあと二日なのね。

あと二日ってことは、え？ そのあとの一週間分の食材を買っておかないといけないわ。

でも、もし、途中でどうしても必要なものがあったらどうすればいいのかしら？

あ、そうだわ！

「ダニー」

「Yes？」

「アイ・ニード・テイク・ア・バス」

「Ok, go ahead」

どうぞって、わからないのよ。

「えっと、ティーチ・ミー、ハウ・トゥ・テイク・ア・バス」

「What do you mean?」

どういう意味って、通じない？

「ティーチ・ミー、ハウ・トゥ・テイク・ア・バス」

どうしたの？ なに？ なんでそんな、なんていうの？ うろたえる？

「Ah... Do you mean... you want to take a bath... with me?」

一緒に？ そうね、その方が心強いわね。

「イエス」

「Romie, you should, you, well, sit up」

え？ 私の頭を、あ、邪魔？ はいはい。

「Now?」

そうね、本を読んでたのに中断させちゃうのは申し訳ないわね。

「アフター・ユー・フィニッシュ・リーディング・ブック」

「Ah... ok...」

コーヒーのお替りいるかしら？

「How can I concentrate?」

本を置きちゃったわ、どうしたの？

「Romie, do you really want to take a bath with me?」

本当に一緒にバスに乗りたいのか？

バスは嫌いなのかしら？

「イフ・ユー・ドント・ライク...」

「Ah... Well... I love to...but...」

バスに乗ることを愛してる、でも、なに？

「To be honest... I didn't know you are... so passionate」

パッション... パッション？ 熱心？ 熱心とは知らなかった？ なに言ってるの？

「ユー・ノウ、アィム・パッション？ パッションネート？だったけ？」

「Well... Yes...yes, I know」

「ね？ ホエン・ユー・ワーク、アイ・ハフ・トゥ・ゴー・スーパーマーケット」

「Super market? What are you talking about?」

何のことを言ってるのか？

「アイ・ニード・バス、アイ・ゴー・スーパーマーケット」

あら？ 固まった？ なんで？

「ホワット？」

え？ ちょっと待ってくれ？ 頭抱えちゃったわよ、そんなに大変なことなの？

「So... You were talking about a bus, a vehicle, not a bath...」

バスじゃなくてバス？

「How can I distinguish her bus and bus?」

なんで上見てしゃべってるの？

「First of all...」

最初に？

「I need beer」

ビールが必要？

どうしちゃったの？

「ダニー」

「Yes」

「アー・ユー・オーケー？」

「No」

ノー？

「Anyway let me get beer」

「オーケー」

どうしちゃったのかしら？

ビール一口飲んだら少し落ちついたみたい。

さっきはどうしちゃったのかしら？

「Romie」

「イエス？」

「Forget about a bus」

バスのことは忘れろ？

「ホワイ？」

「It takes about an hour to the nearest bus stop by foot」

えっと、一時間、いちばん近いバスストップまで？

「When you want to go to a super market or anywhere, call me」

スーパーに行きたかったら... コール、電話？

「ホワイ？」

「I'll come and take you to where you want to go」

来て、行きたいところに連れていく？

「でも、ユー・ワーク、ワーキング？」

「Don't worry about it」

いやいやいや、ウォーリーするわよ！

「アイ・ドント・ WANT、ディスターブ・ワーク！」

スーパーに行くくらいで仕事中に電話して呼ぶなんて、アンビリーバボーよ。

「Not at all. Well, sometimes I might not be able to come right after you call me, but...」

「ノー、アイ・キャント・コール、ホエン・ユー・ワーク」

「Yes, you can. Just pick up the phone and push the button」

電話のかけ方の話じゃないわよ！

「Or...」

または？

「Shall I teach you... how to drive?」

運転の仕方を... 教えようか——っ？

「ノ——ッ！」

死んじゃうわよ！

「So you have no choice!」

選択の余地なし？

どうして？ 私はあなたの仕事の邪魔をしたくないだけなのに、  
なんでこんなふうに追い詰められなきゃならないのおおお？

「Romie」

なによっ？

「Don't talk about a bus anymore, never, please」

バスのことはもう言うな？ けして？ プリーズ？

「ホワイ？」

フウ〜って、なに？

「ホワイ？」

「I would misunderstand...」

誤解する？

「ホワット・ミスアンダスタンド？」

だから、その、目でわかれってというのはムリよ！

「ホワット？」

「Ah... I thought... You wanted to... take a shower with me」

思った... 私がしたい... シャワーと一緒に...

ハ？

「How can I distinguish between a bus...」

ディステングィッシュって、なんだったっけ？ えっと... あ！ 区別するだった？

「And a bath, you say bus instead of bath, that bath, in a bathroom」

バスと、バスルーム？ 区別ができない？

えっ？

それじゃ、私がダニーと一緒に風呂に入りたいって言ってたと思ってたの？

「ユ、ユー... ユーツ！」

そんなこと思ってたなんてーーーーっ！

「You want to say I'm disgusting, but it's not all my fault」

すべてが自分のせいじゃない？ 私のせいでもあるって言うの？

なんでよ？

「Do want to take a bath with me?」

ハ？

「I know you are passionate」

そ、そういう意味だったのおおおっ？

笑ってる... ムカつくわ。

だったら、こう言ったらどうするの？

「オーケー！」

ほら、驚いた顔してるじゃない！  
からかってることくらいわかってるわよ。

「ジョーク！ リード・ブック」

本でも読んでなさい。  
私は膝枕させてもらうわ。

「Not now」

あ、邪魔？

「I have to... calm down」

落ち着かなきゃならない？ どうしたの？

「ホワイ？」

「Because...」

なぜならば...って言って、何考えてるの？

「Oh! I want to fart」

おならしたいから？ あら、そう。

「オーケー」

「Romie...」

「イエス？」

「You don't understand what a man is」

男が何か理解していない？

「アイ・アンダスタンド、マン、えっと、ファート、エブリタイム」

おとうさんだって、しょっちゅうおならしてたわよ。

なに？ なんで笑うの？

「Ok, come here」

来いって、臭くないかしら？

「Oh, you're wondering I stink」

そのとおりよ。

「You'll smell the scent of a rose」

グイッて...

あら、臭くないわ。

バラの匂いもしないけど。



## 言葉じゃない言葉

---

ゆうべはもちろん一緒にお風呂になんか入らなかったわ。

日本のお風呂ならまだわかるわよ？ あの狭いバスタブに二人なんてどうやって入るの？

それはどうでもいいけど、お風呂って、主婦にとっての唯一の安らぎの時間なのよ。

それに、女の舞台裏って感じじゃない？ むだ毛を剃って、身体を洗って、W洗顔して、

髪なんてCMみたいに優雅に洗ってられないわよ、ガシガシ根元から洗うんだもの。

最近ヘアカラートリートメントもするから、キャップ被るのよ？

そんな姿見られたくないわ。でも、そのうち人様にお風呂に入れてもらうようになるのかしら？

そんなこと考えるのはまだ早いわ、できればそうなりたくないわねえ。

でも、こればかりはわからないものねえ。

あら？ 私、何を考えてたんだっけ？ まあいいわ。

スーパーマーケットに行ったわ。

できるだけ、ううん、絶対にダニーに電話しなくていいように、ありとあらゆる想定をして、とにかく買ったわ、それはもう山のように買ったわよ。

そしてね、私、アメリカで日本の偉大さを知ったの。

ダニーのお弁当を入れる容器を探したのよ。そしたらね、お弁当箱があったの！

その名前がね、BENTO BOXよ？ ベントー・ボックス！弁当って今や国際語なのね。

しかも、子供用から大人用までいっぱいあるの。

どう見ても日本のと同じようなのがたくさんあったけど、何を入れるのかしら？

アメリカでもおにぎり？ まあそういう人もいるだろうけど、ダニーはあまりご飯は好きじゃないって、

最初に作ったときにわかったから、おにぎりはダメね。でもチャーハンとかピラフは好きなのよ。

基本はサンドイッチってことで、サンドイッチと、おかずが入るようなのを買ったわ。

あさってから久しぶりにお弁当作りね、5回だけ... 考えない考えない！

とにかく、この山のような食材を収めるところに収めなきゃ。

「Finished?」

「イエス」

買い物して食材を収めて、さすがに疲れたわ。

はあああって、ダニーの肩にもたれると、片腕で私を抱きしめるの。

「You bought lots of stuff」

「イエス」

「Even if we would have a flood, we would be able to survive like as Noah's ark」

ノアズアーク？

「ホワット？」

「Nothing」

なによ？　なんでニヤニヤ笑ってるの？

「So I can see you really don't want to call me when I'm at work」

仕事中に電話したくない？　あたりまえでしょ！

「ノー！　アイ・ドント・コール・ユー」

「Oh, don't you want to hear my voice？」

僕の声聞きたくないのか？　そういう問題じゃないでしょ？　そりゃ聞きたいと思うけど。

「You are thinking!」

笑ってる...　からかっているのね！

「ノー！　アイ・ドント・コール・ユー！」

「Even if this house is on fire, won't you call me？」

オン・ファイア？　ファイア、火、家が火、火事になっても？

「ノー」

「Call me!」

バカ言わないで。

「アイ・ネバー・ファイア・ハウス、ビリーブ・ミー」

私は火事なんか起こさないわよ！

「I have a very good wife」

ン？

「Ah... I mean... housewife」

主婦に言い換えたわ。

「For... your husband」

死んじゃったけど？

「Ah... Coffee？」

はいはい。

「イエス」

気まずかったのね、コーヒーって、もう少しマシなごまかし方はなかったのかしら。

ワイフって...　ちょっとドキドキしちゃったじゃない、ドキドキした私も私だわ。

でもまあ、ここで私がやっていることって主婦だわ、主婦以外のなにものでもないわ。

そりゃダニーだって主婦って言うわよ、主婦だったのかしら？　やっぱり言い間違い？

そんなこと考えたってしょうがないわ、どっちにしろ、あと一週間とちょっとだもの。

「Here you are」

「サンキュー」

コーヒを片手で持って、もう片方の腕で私の肩を抱くのね。

ずっとこうしていらればいいのに...

ムリだってわかってるのに、バカね。

「What are you thinking?」

いつも聞くのね。

でも、私が本当に思ってることなんか言ったら、きっとあなたは困るわよ。  
だってね...

「あなたの奥さんになりたいの」

よかったわ、あなたが日本語がわからなくて。  
本音が言えるもの。

「Oh, really!」

え？

「OK!」

わ、わかったの？

ど、どうしよう、どうしよう、えっと...

「ノ、ノー、ノー、イツツ・ジョーク、ジョークよ」

「Oh, I see! You spoke something serious」

え？

「I didn't understand what you said!」

笑ってる...

ハメられた！

頭にくる——っ！

「アイ・セイ、アイ・ヘイト・ユー！」

「No, you didn't say that」

なんでわかるのよっ？

「Veux-tu m'épouser?」

ハ？ ヴューテュ...なに？

いいわよ、私だってわかったふりしてやるわ！

「イエス！」

なに？ 深刻な顔？ 深刻より、戸惑ってる？

あっ！ わかった！

「ノー！ アイ・ドント・テイク・ア・バス・ウィズ・ユー！」

あら？ 笑ってる？ ちがう？

「Oh, Romie, please take a bath with me!」

あっ、やっぱり？

「ノー！」

「Ok, I gave up!」

そうよ、あきらめなさい。

「Anyway I have to learn Japanese」

日本語を覚える？

「ノーッ！」

「Why?」

だって独り言が言えなくなるじゃない。

でも、一週間くらいで日本語を覚えられる？ ムリよね？

この人ならできそう...

試してみる？

「ダニー、セイ、あいしてます」

「アイシテマス」

「似合わない」

「ニアワナイ」

「ノーノー、それは言わなくていいの」

「What?」

「ストレンジ」

「My Japanese is so bad?」

「ノー、でも、ストレンジ」

「Strange, ok, so you want me to speak English」

「イエス」

「I love your English」

私の英語が好き？

「ノー！ マイ・イングリッシュ、イズ、ベリーベリー・バッド！」

「I wouldn't say bad, yours is unique」

ユニーク？

「And I love your facial expression」

フェイシャル... 顔の？ イクスプレッション... 表情ってこと？

「ホワイ？」

「I can see even when you don't speak anything」

何も言っていないときでも？ わかる？

ウソ！

「See? Maybe you're thinking... You're kidding」

エ〜〜？

「Now you're thinking... Oh, no」

「ド、ドント・ルック・マイ・フェイス！」

クッションで顔隠したわ。

私って、そんな？ そんなに顔に出ちゃうの？ そんなこと言われたことあった？

あっ、美香に言われたことあるわ。

おかあさんて一人で考え事してる時、見てるとおもしろいって。

なんのことかわからなかったけど、それ？

「Romie, show your face」

「ノー！」

「Please, I won't tease you」

からかわない？ 本当かしら？ それじゃ、目だけよ。

あ、笑ってる。

笑ってるけどね、知ってる？

あなたの目だって、いろんなことがわかるのよ。

その素敵な茶色の目を見れば...

笑っていても、何か悲しそうなのよ。

悲しそうだけど、でも、もっと何か...

「I love you」

だから、英語で言われても、いつもそれが本当だってわかるのよ。

## A Day a Dog

---

奥さんになりたいなんて言ったけど、本気でなれるなんて思ってなんかいないわ。  
なれるわけがないってわかってるから言ったのよ、言いたかったっていうか。  
だって、目でわかるとか表情でわかるっていても限界があるじゃない？  
悲しそうだなあとか驚いてるとか、それくらいはわかるけど、それだけじゃダメなのよ。  
たとえばよ？ 美香の発表会が来週の土曜日にあるんだけど、学会とか予定が入ってる？  
って、英語でなんて言えばいいの？ おとうさんと英語で話したことはないけどね。  
それに美香の発表会なんてもうないからいいんだけどね。たとえば悪かったわ。  
トイレに行く、ゴー・トゥ・バスルームよね？ オシッコに行きたいは？ わからない。  
ダニーがそう言ってるのに私がわからなかったら？ 子どもじゃないんだから勝手に行くわね。  
そうじゃなくて、なんていうのかしら、日常の、伝えなきゃいけないこと？  
伝えなきゃいけないことを伝えられなくて、言われてもわからなかったら、  
現実の生活が成り立たないもの。書いてもらえばまだわかるんだけどね。  
私も書く方がしゃべるよりまだマシなのよ、過去形とか、書くときには出てくるんだけど、  
いざしゃべるときになると、この単語の過去形は？って、わからなくなっちゃうの。  
だからって筆談し続けていられないでしょ？ 期限付きだからこんなことしてられるのよ。  
それくらいわかってるわ。  
だから、私は今、現実にも目を向けてるの、この目の前の牛肉の塊を薄切りにするのよ。  
ステーキ用も買ったけど、薄切りも必要なんだもの。それにね、お弁当に入れる牛肉は、  
薄切りじゃないと食べる時硬くなっちゃうのよ。ステーキ弁当なんて最悪よ？

「Romie」

「イエス？」

「Do you wanna go out with me？」

出かける？

「ホエア？」

「A book store」

本屋？

「オーケー、ゴー」

「I want you to come with me」

私も？

「ホワイ？」

「I just want to go with you」

私と一緒にいきたいから、あ、そう。

そうね、もしかしたら料理の本があるかもしれないわ。

でも、ダニーの行く本屋ってむずかしい本しか置いてないんじゃない？

「Why are you staring at me?」

なんでジッと見てるのか？

「ルック・マイフェイス、ユー・セイ、ユー・ノウ・ホワット・アイ・シンク」

「Romie, yes, you have a very expressive face, but I just teased you」

エクスペッシブな顔だけど、からかっただけ？

ほらね？ 考えてることはわからないのよ、言わないとね。

「What are you thinking?」

だから、何を考えてるのかって、いつも聞くのよ。

「ギブ・ミー、そうね、5ミニッツ」

「Sure」

「アイ・ハフ・トゥ・スライス、あら？ 牛肉、ど忘れ、あ、カウ、あ、カウは牛よ」

「Ok! Slice a cow! I'm sure you got meat for one cow」

牛1頭分の肉？ そんなには買ってないわよ！

笑いながら行っちゃったけど、あ！ ビーフ！ 今思い出したわ、もう。

すごいわあ。

どうすごって、すごいとしか言えないわ。

日本の本屋とイメージが、なんか違うのよ。

だって、ソファがあちこちに置いてあって、座って本を読んでもる人がいるのよ？

立ち読みはダメだけど座ってならいいの？

それに、こんなにいっぱい英語のタイトルだけの本だらけ。あたりまえだけど。

「Romie, what kind of books do you want to look?」

どんな本を見たいか？ 料理の本？ でも、こんな広いところじゃ迷子になりそう。

「アイ・ウェイト・ヒア」

このソファのところで待ってるわ。

あら？ 何か考えてるわ。

「Come with me」

一緒に来い、むずかしい本のところ？ いいけど。

「Here you are」

ズラーーーーッと料理の本よ。

African cooking、アフリカ料理？ 食べたことも見たこともないのに作れないわね。

あ、ちょっと待って、私が本を買いに来たわけじゃないのよ。



「ダニー、ゴー」

「Go? To where?」

どこって、自分の好きな本を探してって、えっと... あ！

「ファインド・ブック、ユー・ワント」

「Are you sure?」

「イエス、アトム・ヒア、ノー・ムーブ」

ここから動かないわ。

「Ok, I'll be back soon」

「ノー・スーン、えっと、あ！ テイク・ユア・タイム、アトム・オーケー」

ここから動かないから、それにこんなに料理の本があるんだから。

「Thank you, honey」

ハニー？

チュッて...

よかった、誰も見てなかったわ。

それにしても...

なぜかしら？こんなに料理の本がたくさんあるのにワクワクしないのよ。

そうだわ、私、日本でも料理の本なんて買わないんだもの、テレビとかで見た方がわかるのよ。

Japanese Cuisine? 日本料理?

ほら、これだもの。カリフォルニア・ロールは日本料理じゃないのよ！

日本料理の本なんか見てもしょうがないわね。

でも、日本料理作るアメリカ人もいるのね、本があるってことはそういうことだものね。

あら？ あっちの方に... English Literatureって、英文学？

あらあ、懐かしい！ おとうさんが持ってた本もあるわ。

あ、シェイクスピアもある！ これは読めるわよ、私。

“What the hell is that?”

ン？

あら、中学生？ 高校生？ 日本でそんなメイクしたら校則違反よ、ピアスまでしてるし。

A Midsummer Night's Dream、夏の夜の夢、おもしろいわよ、読んだら？

あら、戸棚に戻しちゃった。

首振ってるわ、どうしたのかしら？ まあ私には関係ないんだけど。

あ、目が合っちゃった。

“Mom”

エッ？ わ、私？

「ミー？」

“Yeah”

なんで私？

“I need to write a paper for the next semester about something of fucking Shakespeare”  
シェイクスピアにファッキングをつけたわっ。

“Which one is easier?”

どれが簡単か？

まったく若い子って、簡単なものばかりやりたがるのね、まあ、そうでしょうけど。

「Romeo and Juliet」

これだけは、まともな発音できるのよ、日常の何の役にも立たないけど。

“I know that! Which one?”

知ってるって言ったなら、背表紙見ればわかるでしょ！ 英語なんだから！

ほら、これよ！

なにその、あ〜あみたいな顔はっ？

“It's not English!”

「イツ・オールド・イングリッシュ！」

“How can I read that fucking words?”

またファッキングをつけたわねっ！

どれ！ 貸しなさい！ 読んであげるわよ！

「O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo?’

“What the hell is where...for art tha..u?”

「Wherefore art thouイズ・ホワイ・アー・ユー」

“How can you know that?”

どうやってわかるのか？

「ユーズ・ディクショナリー」

辞書を使いなさい！ 辞書を！

“Dictionary? You mean a book?”

そうよ、ググるとかいうのじゃなくてね！

「イエス」

“Yuck!”

「ドウ・ユー・ワント・ゲットF？」

FはFailよ、言ってみれば赤点よ、ううん、単位を落とすのよ。

“No! My dad's gonna kill me!”

いいお父さんね。

「ユーズ・ディクショナリー」

“Can you choose one?”

ハ？ 辞書を選べって、私が？ いいけど、どこ？ あ、こっちかしら。

これはダメね、こっちは... あ、これがいいわ。でも、30ドル？ 高いわね。

「ゴー・トゥ、えっと、図書館... あ、ライブラリー」

“Library? Why?”

「ユー・ドント・ハフ・トゥ・バイ・ディクショナリー」

“Cool! I'll do that”

あ、そう。

“I'm gonna get it”

そうね、ロミオとジュリエットだけ買えばいいわ。

“Here”

ハ？ なんで私にお金と本を渡すの？ 買ってこいっていうの？ 自分でやりなさい！

「ゴー・トゥ、えっと、キャッシャー」

“Aren't you a staff?”

スタッフ？ 店員だと思ってたの？ こんな英語しゃべれない本屋の店員はいないでしょ！

「ノー！」

“What are you?”

あんた何？って言ってるんだわ、あんた何ってっ!?

「アトム・ジャスト・ハウスワイフ」

“Wow! Cool!”

いいから早く行きなさいよ！

「ゴー！」

“Thanks!”

「ユー・アー・ウェルカムよ」

走って行ったわ。

たのむから、二度とシェイクスピアにファッキングをつけないでねっ。

それにしても、あのバッチリメイクはどうかと思うわ。

「You sold a book!」

えっ？ あ、ダニー！

「The manager must want to hire you」

マネージャーがなに？

「I'm really amazed」

アメイズって、なんだったっけ？ ほら、日常会話だところなのよ。

「Did you find anything you want?」

何か欲しいものは見つけたか？

「ノー」

「You were busy for selling a book」

本を売るのに忙しかった？ 売ったわけじゃなくて、え？

「ホエン・ユー・カム・ヒア？」

「Well.... I heard you were reading Romeo and Juliet, and so I found you」

ロミオとジュリエットを読んだのを聞いて？ けっこうずっといたんじゃない！

黙って見てたの？

「ホワイ・ユー・ドント・ヘルプ・ミーツ？」

「You didn't need my help」

笑ってる。

いいわよ、笑いなさいよ、こんな英語であんな子とやり取りしてた私をねっ。

「Do you want an ice cream?」

アイスクリーム食べさせれば機嫌が直ると思ってるの？

食べたわよ、アイスクリーム。

今は、ソファに座ってコーヒー飲んでるわ。

ダニーはむずかしい本をいっぱい買ってたわ。

タイトルだけでも辞書を引かなきゃわからないようなのをね。

「Oh, I bought a book for you」

私に本を買った？

むずかしいのはムリよ？

「Here you are」

なにこれ？ 絵本？

完璧にバカにしてるわ！

「You'll like it, I hope」

絵本ね、そうね、私の英語は幼児並みってことよね。

えっと、タイトルは... A day a Dog? 一日、一匹の犬？ 犬の話？

ダニーが片腕で私の肩を抱いて、もう片方の手でページをめくったわ。

え？

犬が車から放り出されてる絵...

車を必死に追いかけて... でも、車は遠くに... 道の真ん中で立ちつくしてる...

そこには... 言葉はひとつも書いてない...

だけど... 飼い主に捨てられた犬の気持ちが伝わってきて...

言葉はひとつもないのに...

涙が...

ひとりぼっちの犬の不安と孤独が...

絵だけなのに... 言葉はひとつもないのに...

最後のページで... ひとりぼっちで歩いてた男の子と出会って... 甘えてる... そばにおいて  
って...

涙がとまらない...

言葉がひとつもなかったのに...

私の肩を抱いている手がギュッと私を抱き寄せて...

あなたが、なんでこの本を私に買ったのか...

わかったわ

あなたも同じこと思ってたからなのね

「ダニー...」

それしか言えなかった...

あなたは黙って私のことを抱きしめたわ...

両方の腕で...

*A Day a Dog: Un jour, un chien by Gabrielle Vincent*

どうやってこの本を見つけたのって聞いたら、私のところに戻る途中に、子どもの本のコーナーがあったんですって。たまたま目にとまって、ページをめくったら、すごく感動したって、タッチ・マイ・ハートって、そういう意味よね？

ハートにタッチするって、「感動する」より、リアルに感じるいい言葉だわ。すごく嬉しかったわ、自分が感動したものを私にも見せたいと思ってくれたことが。女ってそういうものよね。だけど、ときどきバカな男がいるのよ、特に若いときにね。感動させようとするの、たとえば、そうね、バラの花100本贈るとか？ もらったことないけどね。

でも、バラの花100本もらって喜ぶ女もいるわね。100本もどうするの？ 花瓶は？ 水をあげるのだって大変だし、花びらが落ちてきたら片づけるのが大変じゃない。何かで見たわね、映画だったかしら、海外ドラマ？ どっちでもいいけど、部屋中真っ赤なバラで埋まってて、床一面にバラの花びらが敷き詰められて、そこに恋人を連れてきて、彼女は「オー！」とか言って感激してたのよ。私だったら絶対イヤだわと思って見てたわ。そのときはいいかもしれないけど、誰が掃除するの？ 彼？ 男が掃除するわけじゃない、オー！なんて感動したって、次の日には掃除よ？ そういうこと考えないのかしら？

「Romie」

横を見ると、すぐそばにダニーの顔、腕枕しながら私の髪を触ってるわ。100本のバラなんかより、ずっとずっとタッチ・マイ・ハートだわ。そんなこと恥ずかしくて言えないけどね。

「What are you thinking?」

言えないわよ、そうね、タッチ・マイ・ハートは省くわ。

「ワンハンドレッド・ローズ」

「One hundred roses?」

「イエス」

その後があるんだけどね。

「Do you want one hundred roses?」

「ノー」

「Don't you like roses?」

「アイ・ライク・ローズ、でも、ワンハンドレッド・イズ・クレーイジー」

「Crazy? Why?」

なぜって、えっと、ちょっと待ってね、なんて説明すればいいのかしら、英語で。

「アイ・ハフ・トゥ、掃除、クリーンアップ、枯れたって？ アフター・ローズ・ダイ」

ポカン？ 通じない？

「Romie...」

「イエス？」

「You are very practical!」

なんで笑うの？

笑うようなこと言った？ 言ってないわよ？

「I thought women love to be given a bunch of roses」

バンチオブ？ たくさんのってことかしら？

「Didn't your husband give you, I wouldn't say one hundred, but, many roses?」

ハズバンドがたくさんのバラをくれなかったのか？ だからっ

「ヒー・キブ・ミー・オンリー、ソネツ」

「Sonnet 18th, and you wrote a paper about it」

「イエス」

よく憶えてるわね。

「Wow, he knew you」

彼は私を知っていた？ ソネツ18なのに？

「ソネツ18、えっと、あ、ドント・タッチ・マイ・ハート、アイ・シンク、イツ」

「You thought it was a homework」

「イエス」

なんでそんなに憶えてるの？

「I wish I could have a drink with him and talk about you」

彼と飲みながら私のことを話したかった？

「ホワイ？」

「Well... We love the hardest nut to crack」

え？ ハーデストナックラッ？

「ホワット？」

「And stimulates men's spirits to crack it」

なに？ 全然わからないわよ。

「ホワット？」

「And I'm thinking... how can I crack this hardest and sweetest nut」

クラック、ハーデスト、ハードの最上級、スィーテスト、これも、硬くて甘い、なに？

「Will you marry me?」



「ホワット？」

「See? I can't crack it」

「ホワット・クラック？」

「Ah... Do you know walnut?」

ウォルナット、クルミよ。

「イエス」

「To eat walnut, you have to crack it」

ああ、クルミを割るってことね。

「ナウ、アイ・アンダスタンド！」

「Good」

なんだ、クラックってそういうことね。

「アイ・ドリンク・ウォーター」

「Ok, go ahead」

ダニーの部屋を出てキッチンに来たわ。

ようするにあれでしょ？

私は割れないクルミだってことでしょ？

そうよね、だって...

わからないふりをしたんだもの。

結婚してくれって言ったのよ。

わかったわよ、でも、全然わからないふりをしたの。

だって... だってそんなこと...

できるわけじゃない。

ダニーだってわかってるわ、わかってるから、私がわからないふりをしても、

わからせようとはしなかったわ、いつもなら、なんとかわからせようとしてくれるもの。

私がわからないふりをしたこともわかっていたかもね。

できるわけないのに、言いたかったのね。

そう思ってくれてるだけでいいわ。

私だって、なれるわけないってわかってて、あなたの奥さんになりたいって言ったんだもの。

「Romie」

「イエス？」

言わないでね。

「ドウ・ユー・ワント・ウォーター？」

「Yeah」

「オーケー」

グラスに冷たいお水を入れて、ダニーに渡したわ。

ダニーの目が優しく私を見てるけど...

「ダニー」

「Yes？」

「サンキュー・フォー・ブック、ア・デー、ア・ドッグ」

「I'm glad you like it」

「イット... タッチ・マイ・ハート」

ダニーが微笑んでるわ。

だけど... そのきれいな茶色の目の中に... 見えるのよ...

だから...

「タッチ・マイ・ハート」

ダニーが私のことを抱きしめて...

「So... You like that book more than one hundred roses」

「イエス」

「You touch my heart」

「ビコーズ、アイ・ライク・ザット・ブック？」

「Because... You didn't let me crack a hard nut」

なぜなら、硬いクルミを割らせなかったから...

ほら、私がわからないふりしてたのをわかってたのよ。

だって、わかっちゃったら、あなたは困ったでしょ？

できないのに、言っちゃったんだもの。

バカね。

「ユー・アー・ステューピッド」

「Yes, I know」

見上げると、あなたが私のことを見てる。

きっと、今、私たち、同じことを考えて、同じことを感じてるのね。

そして、私たち、お互いが何を思ってるのか、わかってるのよ。

「I love you」

それはわからないふりはしないわ。

「アイ・ラブ・ユー」

これだけは、そうじゃないふりはできないのよ。

## 得手不得手

---

今日でダニーの休暇が終るのね。

ダニーが日中いないって想像できないわ。

だって、私がここに来たときから、ずっと24時間一緒にいたんだもの。

こうやって毎朝ダニーがくれたコーヒーを飲んで、一緒に朝食食べて、あら、あくびしてる。

そうね、ゆうべ何度も寝返りうってたものね、私が眠ってると思って、ときどき、

そっと私の髪を触ったりキスしたりしてたわ。あのとき、ワッ！って起き上ってやったら

ビックリしたかしら？ やってみればよかったわ、どんな顔したかしら？

「What are you giggling?」

キグリング？

「ホワット？」

「You... ehe」

え？ 声出して笑ってた？

「What is so funny?」

何がおかしいのか？

言えないわよ。

「ナッシング」

「Let me guess, you are thinking something about...me」

えっ？

「Bingo!」

なんでわかったのかしら？

「I told you, your face never can tell a lie」

私の顔はウソはつけない？

「Well, I couldn't say never, sometimes you are like a great actress」

ときどき私は... グレート・アクトレス... アクトレス、女優？

「ホイッチ・ワン・ドゥユー・ライク？」

「What?」

「マリリン・モンロー？ オードリー・ヘップバーン？」

あ、考えてる考えてる。

モンロー派？ だとしたら、私とは違うタイプね、オードリーも違うけど、どっちも全然違うけど。

「Ah! You mean Marilyn Monroe or Audrey Hepburn!」

そこっ？ 発音が悪かった？

「Well, my answer is... You」

はあああ、グウの音も出ないほど見事な答えを言うのね。

そして、私がゆうべ、わからないふりをしたことを暗につついてるんだわ。

いいわよ、私だって言ってやるわ。

「ユー・アー・グレート・アクター！」

「Which one am I like, Clark Gable or Humphrey Bogart?」

誰それ？

「フー？」

「Don't you know them?」

「ノー」

「Ok, no problem! You don't have to know them」

知らなくてもいい、あ、そう。

なによ、ニヤッと笑って！ やっぱりあのとき、ワッ！て驚かせてやればよかったわ。

あ、ダメダメ、心臓麻痺起こすかもしれないわ、やらなくてよかったわ。

「What are you thinking?」

「シアー・ハート・アタック」

「QUEEN?」

ちがうっ。

ほらね、こうやって食後にソファに座って、ダニーは本を読んで、私の膝に頭を乗せてね、私はコーヒー飲んで、ずっとこうしてたから、明日から朝食後にはダニーがいない...

ダメだわ、想像できないわ。

二週間、まだ二週間？って感じね、もっとずっと長くこうしていたような気がするわ。

でも... もし私がここに来なかったら、ダニーは何をしていたのかしら？

前に特にプランはないって言ってたけど、二週間も一人でどうするつもりだったのかしら？

あら、寝てる。

しあわせだわ。

今。

あなたが私の膝の上で眠っている顔を見ているのが。

ずっと見ていたいとか、もっととか、何も無いわ。

しあわせなんだもの。

今。

言葉なんか... もう浮かんでこない... しあわせだから。

しあわせなんだけど、もう1時間はこうしてるの。

それはいいんだけどね、コーヒー飲んでたでしょ？ トイレに行きたいのよ。

でも、赤ちゃんみたいにスヤスヤ眠ってるのを起こすのも悪いし、だけど我慢も限界なのよ。

起こす？ 起こすしかないわね、我慢してたら膀胱炎になっちゃうわ、その前に漏らしちゃうわ

。

起こす！

「ダニー」

ビクともしない。

「ダニー」

あ、目を、あ、またつぶっちゃった。

「ダニー！」

「Y... yes...」

まだ寝ぼけてるわ。

「ダニー！」

「What?」

緊急、緊急、緊急、あ、

「エマージェンシー！」

「What?」

あ、ガバッと起き上がったわ。

「What happened?」

説明している暇はないの！ 説明したくないし！

「エクスキューズ・ミー！」

走ったわ。

脚がしびれてて、ヨロヨロだったけどね。

大丈夫、間に合ったわよ。

そうね、こういうものよ。

しあわせに浸ってても、ほら、これが現実。

これが生きるってことね。

そんなたいそうなことじゃないんだけど。

はあああ、サッパリした！

「Are you ok?」

え？ そんな心配そうな顔して、どうしたの？

「イエス」

「Are you sure?」

「イエス」

いやいやいや、おでこに手をあてても、熱なんかないわよ。

「What happened?」

何が起きたって、トイレに行きたかっただけよ。

「You said emergency, did you throw up?」

スローアップ？ なに？

「You looked like you were feeling dizzy」

「ディジー？」

「You couldn't walk, what should I say? Ah, walk like this」

手をユラユラ...

ああ！ 脚がしびれてたからよ！

って、英語でなんて言えばいいの？

「マイ・フィート、イズ・ライク、しびれるって？ えっと、エレクトリック・ショック？」

「What?」

そ、そんな、深刻な顔で驚かなくても...

「You should go to bed!」

「ノー、アム・オーケー」

いや、そんな、そんな心配そうな顔して見られても、私はただトイレに行きたくて、

でも、脚がしびれてたからヨロヨロしちゃっただけで...

あ、トイレに行きたかっただけって言えばいいんだわ。

「アイ・ワント・ゴー・トゥ・バスルーム」

「Sure, do you want me to take you?」

ちがうちがう、今じゃなくて。

「過去よ、パスト」

「What?」

あ、ゴーの過去形、ほらほらほら、えっと、あ！

「ウエント！」

ポカン？

わかったわ、書くわ！

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ニード・ペン、アンド、ペーパー」

「Now?」

「ナウ」

まさか本当に筆談するとはね。

“*I just wanted to go to bathroom*” ほら、書くと出てくるのよ。

「Oh, I see...」

“*You were sleeping on my knees for one hour ...*” どうして書くときはスラスラ出るのがしら？

「One hour?」

「イエス」

「Oh, I'm sorry!」

「イツ・オーケー」

“*That's why my legs couldn't move well*” しびれるって英語がわからなかったわ。

「Romie」

「イエス?」

「You write a very good hand!」

字がうまい? おとうさんの授業は厳しかったもの。

それも書けばいいのかしら?

いちおう書いておく?

“*My husband was a very st*”

「Romie, speak」

「アトム・ナット・グッドアット・スピーキング」

どうしてしゃべるとこうなのかしら?

「And wake me up when you want to go to bathroom」

それはわかってるけど、

「アトム・ハッピー、ルック・ユア、書きたいわ、スリーピング・フェイス」

なにその呆れたみみたいな顔? 笑ってるし。

「Should I get diapers for you?」



ダイアパース？

「ホワット・ダイアパース？」

*diapers*

スペル書かれてもわからないわよ。

「ダニー、ライト・ピクチャー」

「What?」

「ピクチャー、ダイアパース」

「Oh...no...no...no...」

「プリーズ！ アイ・ワント・ノウ！」

「Oh, no... you are serious...」

「イエス！」

フウ〜って、そんなにむずかしいもの？

え？ なにこれ？ なに？ カメ？ カメに三角？

「ホワット・イズ・イット？」

なに？ そのうらめしそうな目？

「ホワット・イズ・イット？」

「baby!」

「ベイビー!?!」

ウソ！

どう見てもカメよ！ それに三角！ この三角は？ これが赤ちゃんなら...

あ！ オムツ！

「ダニー...」

「Don't tell me. I know I'm very bad at drawing」

誰にでも不得意なものってあるのねえ。

これが赤ちゃんて、100人が見ても誰も思わないわよ？

「Anyway kick me down, and go to bathroom!」

「オーケー」

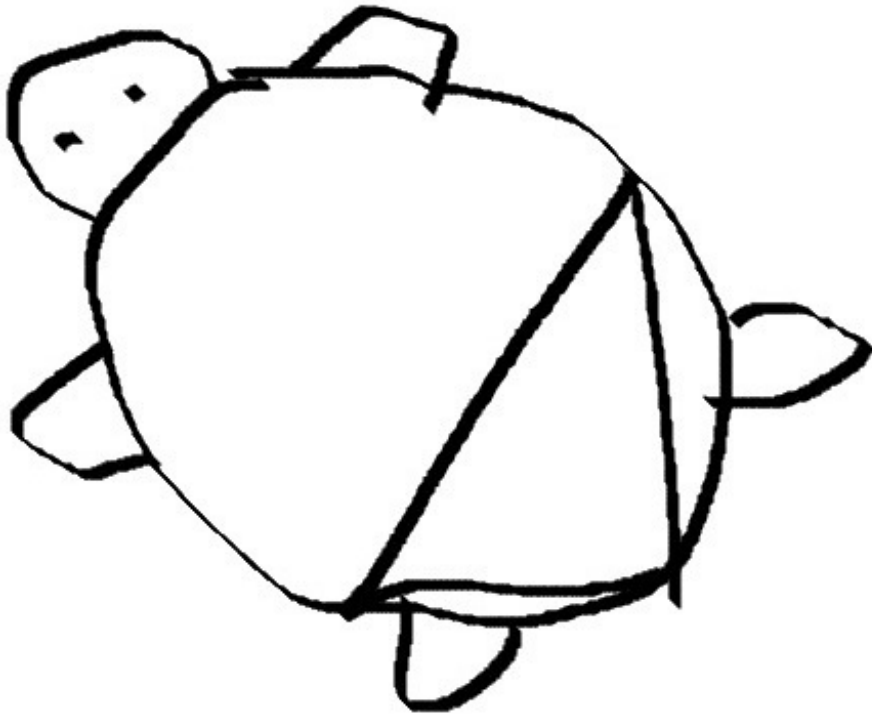
申し訳ないことしちゃったわ。

それにしても...

これが赤ちゃん？

ヘタにもほどがあるわ。

Danny's drawing



バカじゃない？

---

ダニーが絵を捨てようとしたから、サッと奪い取ってきたわ。  
だって、ここまでのって、ある意味貴重よ。見たことないもの。  
おとうさんも絵は得意じゃなかったけど、ここまでじゃなかったわ。  
ていうか、ここまでのって今まで見たことないわよ。  
ダニーは頭を抱えて「オー・ノー」ばかり言ってるから慰めたのよ。  
ピカソみたいよって。そしたら絶望的な目で、だま〜って私を見るのよ。  
じゃ、なんて言えばよかったの？ ハッキリ言えばよかった？ カメにしか見えないって？  
まあいいわ、この絵は取っておくわ。辛いときに見たらきっと笑えると思うから。  
それにしても、オムツをダイアパズっていうのは知らなかったわ。  
学校でオムツのことなんて習わないでしょ。まあ、私にはもう必要ないけどね。  
美香が子どもを生んだら... 必要ないわ、オムツはオムツで通じるもの。  
私がオムツをつけるときが来るのかしら？ イヤだわ。誰だってイヤよね。  
でも、そうなっちゃうことがあるのよ。美香にオムツを替えてもらうの？  
オムツを替えてあげた子にオムツを替えてもらうの？ 複雑だわあ。  
でも、やってくれるかしら？ お嫁に行っちゃったら...  
今そんなこと考えたってしかたないわよ。  
ダニーはどうするのかしら？ そんなこと私が考えたってしかたないわよ。  
それに、ほら、結婚するかもしれないじゃない？ できれば若い奥さんがいいんじゃない？  
30代前半くらい？ そうしたら赤ちゃんだってできるかもしれないし。  
ダニーのこれからの人生設計を私が考えたってしょうがないでしょ！  
それより、私の老後だわ。まだピンとこないけどね、でも、そんな遠い先でもないのよね。

「Romie」

あ、えっと、この絵を隠さなきゃ。

「ウェイト」

スーツケースのポケットの、ホームステイプランのファイルに挟んで...

そうよね、私、クッキング・ホームステイで来たのよね、すっかり忘れてたわ。

まあ、いいわ。

「オーケー」

ドアが開いて、ダニーが... 入口の壁にもたれて、私のこと見てるけど...

「ホワット？」

「Ah... What are you doing？」

何をしてるのか？

言えないわ、あの絵を隠してたなんて。

「ナッシング」

あら？ 視線が... テンテンテン あっ、スーツケース見てる！

あ、今度は私を見た... バレちゃった？

「Oh, you are preparing for leaving」

ン？

準備、リービング、去る、まだ一週間もあるからしないわよ。

「Ok, I won't disturb you」

あら？ 出て行っちゃった。

まだパッキングなんかしないわよ、でも、あの絵を隠してたとは言えないわ。

リビングに行ったら、ダニーがソファに横になって本を読んでるわ。

私に来て、こっちを見ようとしらないわ、本に熱中してるの？

でも、いつもなら、すぐに気づいてこっちを見てくれるのに。

そうね、最初の夜とか、はじめはこうだったわ。

ダニーがソファに横になって座っていて、私は一人掛けの椅子に座ってたわ。

ダニーは...

私がいなくなる準備をしているのかしら...

あのソファには... もう私の場所はなくなるのね...

「ダニー」

「Yes?」

こっちを見ようとしらないわ。

どうして？ 何か怒ってるの？ さっきまであんなに楽しかったのに...

楽しかったのは私だけだった？ ダニーは頭抱えてたわ、よっぽどイヤだったんだわ。

それで怒ってるの？ 絵を描かせちゃって、ピカソみたいだって言ったから？

「アイム・ソーリー」

「For what?」

全然こっちを見ない。  
よっぽど怒ってるのね。

「アイ...」

絵を描かせちゃってって、なんて言えばいいの？ ピカソみたいだって言っちゃって？  
字で書いても、きっと読んでくれないわね。  
こっちを見ないくらい怒ってるんだもの。

「ドント・ノウ...」

どうしていいかわからないから、キッチンに来たわ。

私がデリカシーがなさ過ぎたのかしら？

でも、あのカメは可愛いと思うわよ、あ、カメじゃない、赤ちゃんだったわ。  
いいじゃない、絵がヘタだって。頭はいいし、歌もうまいし、ダンスだって上手だし。  
綺麗な茶色の目だし、キスは風と共に去りぬだし、一個くらい苦手なことがあったって。  
それに、私は欠点だとは思わないわ、ヘタだけど、ちょっとホッとしたのよ。  
ダニーにも苦手なことがあるんだってわかって。可愛いと思ったわ。  
でも、ダニーにとっては、あんなに怒るくらいイヤなことなのね。

まだ夕食の準備には早すぎるわね。

今日はダニーの好きなステーキにしようと思ってるんだけど、  
解体しておいた鶏ガラでスープを作っておく？ そうね。  
三羽分あるのよ。大きなお鍋に入れて、これは全部洋風にするの。

「What are you doing?」

え？

鶏ガラスープを作ってるって... ていうか、見てわからない？

「Don't you have to pack your things?」

パック、パッキング？

それより、顔がまだ怒ってるわよね？

「アー・ユー・アングリー？」

「Why do I have to be angry? Soon or later you have to」

なんで怒る必要があるんだって言って怒ってるわよね？

「ホワイ・アー・ユー・アングリー？」

あ、ホワイって、理由は絵よ、あきらかにあれよ。

「I'm not angry」

怒ってないって言って怒ってるじゃない。

でも、私が悪いんだわ。

「アトム・ソーリー」

「For what?」

さっきも同じような会話した気がするけど、絵のことを口にしたら、火に油を注ぐことにならない？

それに、いくら怒ってるからって、そんな冷たい言い方って...

いいわ！ もう怒っちゃってるんだもの！ 向き合うべきよ！

「ダニー」

「Yes?」

なにその冷たいイエスっ？

私はそんなことにはめげないわよ！

「アイ・ラブ・ユア・ピクチャー！」

「What?」

「イツ・ナット・ルック、ベイビー、でも、アイ・ラブ・ユア・ピクチャー」

「What are you talking about?」

なんのことを言ってるのかって、

「ユア・ピクチャー！ イット・ルック・ライク、亀、亀... タートル！」

「Turtle?」

「イエス、タートル」

「Turtle...」

「アイ・ラブ・ユア・ピクチャー」

茫然としてるわ。

やっぱり絵のことを言われるのはイヤだったかしら？

でも、私は本当にあれはとていいって思ってるってことをわかってほしいのよ。

見せるしかないわ。

「ダニー」

「Yes...」

「カム」

手を引っ張って、私の部屋に連れてきたわ。

そのままスーツケースのところに連れてきたわ。

「ジャスト・ルック、ドント・タッチ」

そうよ、イヤだからってビリビリなんて破ってほしくないわ。

「What are you going to show me?」

何を見せようとしているのか？

見ればわかるわよ。

「ほら！」

スーツケースをパカッと開けて見せたわ。

「And... So?」

え？ あ、そうだわ、ファイルに挟んでたんだわ。

「ドント・タッチ」

「No...」

これこれ！

「ほら！」

「Wha... what...are...」

「アイ、隠す隠す、あ、ハイド、ビコース、アイ・ワント・イット」

なにその恐怖におののくような目？

ダメよ、克服しなきゃ！ 私はいいと思うのよ、このカメ！

「So... You...were not...packing....」

「アイム・ソーリー、アイ・ハイド・イット」

なに？ なにか考えてるわ、私の顔見たわ、なに？ あ、また、あらぬところを見て...

目が泳いでるわ、茶色い目が泳いでる、ショック？ そんなに自分の絵がイヤ？

「Romie...」

「イエス？」

「I'm sorry...」

え？ なんて抱きしめるの？ アイム・ソーリーって？ 描かなきゃよかったってこと？

「I'm sorry... I thought you were packing, and I was...upset」

ハ？

パッキングをしていると思ったから？ アプセット、腹が立った？

「ホワイ？」

「I felt like... you were preparing for leaving me」

僕から去っていく準備をしている気がした...

バッカじゃない？

「アイ・ハブ・ワンモア・ウィーク」

「Yes」

「アイ・ドント・ワント...」

バカじゃない？

準備なんて... あなたから去っていく準備なんて...

「アイ・キャント... プリペア...」



できるわけじゃない...

「Romie... I'm sorry」

そんな目で見たって、私の大好きな目で見たって...

「アイ・ドント・フォーギブ・ユー」

抱きしめたって... ゆるしてあげないわ...

だって...

「ユー・ディドント・ルック・ミー」

私のこと無視したし...

「ユー・セイ・イエス、ベリー・コールド」

冷たかったし...

「ユー・ディドゥント・キブ・ミー、スペース、ソファ」

私の座るところがなかったもの...

「Romie, I was stupid, I am stupid, childish, disgusting」

最後のが何なのかわからない...

「But... Would you please love me?」

それでも僕を愛してくれないか？

「ユー・アー・ベリー・ステューピッド」

「Yes, I know」

「アイ・ラブ・ユア・ピクチャー、ビコース・ユー・ライト・イット」

情けない顔して微笑んでるけど、泣きそうな顔して微笑んでるけど、

「ルック！ アイ・ラブ・ディス・タートル！」

私がこのカメの絵が好きってことはそういうことでしょ？

「Romie...」

「イエス？」

「It's a baby」

あ、そうだったわ。

美香が二歳くらいのときかしら？ ずっと私について歩いてたわ。  
どこに行くにもチョコチョコついてきて離れないの。  
トイレにまで入ってこようとしたわ。外で待ってなさいって言うのと泣くのよ。  
ドアの前で私が出てくるまでずっとよ？ しかたないから、あっち向いてなさいって、  
中に入れて用を足したこともあったわね。  
あの頃を思い出しちゃったわ。  
だって、ほら、鶏ガラスープのアクを取ってる私の腰に腕をまわして離れないの。  
ダニーよ、48歳、いいおとな、世間的にはおじさん。  
さっきまで、あんなに冷たかったのに、勝手に誤解して、勝手に怒ってたくせに。  
今は、ほら、今度は髪にチュッて。  
いいけど？ トイレには入れないわよ。  
あとは、このまま弱火で煮込んでおけばいいわ。  
IHって楽ねえ、火の傍にいらなくていいんだもの、タイマーまでついてるし。  
うちもIHにしたいけど、美香と二人だけだし、そのうち美香もお嫁に行ったら、  
私ひとりだもの、卓上コンロだけでもいいくらいだわ。

ダニーがソファに座って、私はわざと一人掛けの椅子に座ってやるわ。

「Romie」

横に来いって、ソファをポンポンしてしてるけど、知らないふりしてるの。  
あ、来たわ、見ないわ、連れていこうとしても無駄よ、お姫様抱っこしようとしたら、  
この椅子にしがみついてやるわ。  
え？ なんで私の脚元に座ってるの？

「ダニー」

「Yes?」

「ユー・アー・ステューピッド」

「I know」

居直ってるわ。  
わかったわよ、ソファに座るわよ。  
立ち上がったら、お姫様抱っこ？ いいのよ、そこまで機嫌とらなくたって。

え？ あら？ ソファじゃないの？

なによ？ とろけちゃいそうな目で私のこと見て。  
さっきのあの冷た〜い目はどうしちゃったの？

「I love you」

だったら勝手に誤解してスネないでよ。

「Do you love me?」

私の髪を優しく触りながら聞いたって、そう簡単にはいかないわよ。

「アイ・ラブ・ユア・タートル」

「Ok, if you love my turtle, I will draw 100 turtles」

100匹のカメ？

「I will give you my 100 turtles instead of 100 roses」

100本のバラの代わりに100匹のカメの絵？

「イエス！ プリーズ！」

「Actually that was a baby though」

誰が見ても赤ちゃんとは思わないから大丈夫よ。

美香だって喜ぶわ。

「美香 ラブ・ユア・タートル、トゥ」

「Are you going to show that to Mika?」

「イエス」

「Oh, no」

「オー・イエス」

「Ok, that is yours, do whatever you want」

そうよ、腹をくくって堂々と...

「Will you marry me?」

懲りない？

そうね...

「イエス」

って言ったら、どうするの？

「Good! Now you are my wife!」

笑ってるわ。

「イエス、ユー・アー・マイ・ハズバンド！」

おじさんとおばさんで夫婦ごっこだわ。

「Mrs. Swope」

「ミスター・ソープ」

「Ah... well... Call me, honey, or... darling」

ハニー？ ダーリン？

やっだあ！ 言えないわよ————！

「ノー！」

「Why? I'm your husband」

だ～って～ 笑っちゃうわよお。

「キャン・ユー・コール、ハニーとかダーリン？」

「Sure, honey」

あ、前にも言ってたことあったわね。

「My sugar pie」

シュガーパイ？ 砂糖のパイ？ キャ————！

「Honey pie」

ハチミツのパイ？

「My sweet pie」

パイばかりだわ。

「ホワイ・オール・パイ？」

「I don't know, anyway... sweet...」

あ...

たしかに...

スイートね...

ようするに、あれよね。

ほら、そんなことありえないってわかってるけど言いたい？

美香が高校のとき、テレビ見ながら、誰だったけ？ ほら、あのイケメンの、  
とにかく、「キャー！ 結婚したーい！」って、よく言ってたじゃない？  
まあ言うだけなら、べつにいいわよね、ありえないってお互いわかってるし。  
それに楽しいから、いいんじゃない？

でもね...

でも...

ハニーだけは言えない！

シャワー浴びてこよう。

「アイ・テイク・ア・バス」

「Do you want to take a bath with me, honey?」

どうしてそんなに簡単にハニーって言えるのかしら？

「Oh, no, no, it's just a joke. Don't be angry」

ン？ 怒る？ なんで？

あっ！ 調子こいて一緒に入る？って言ったんだわ！

「ノー！ ナット・ウィズ・ユー！」

「I know, go ahead」

まったく男って！

ていうか、二歳児じゃないんだから！

まあ冗談だって言ってからいいけど。

いちおう鍵かけておくわ。

「Now you are clean!」

「イエス、ユー・テイク・ア・バス、トゥ」

「Yeah」

知ってる？ 今、素っ裸で目の前を歩いて行ったのよ？

まるでもう20年も経った夫婦みたいに、な～んの照れもなくね。

いいけど、何回も見てるし。

おとうさんもよく素っ裸でお風呂から出てきてたわ。

美香が中学に入るまでね。中学生になった美香に「キモい！」って言われてからは、バスタオル巻くようになったけどね。小さい頃は一緒に入ってたのにねえ、キモいよ？

ベッドを直しておこうかしら。

ああもう、ベッドが大きいから大変。

このシーツを買ったときは... まさか... ねえ。

あのときは、この上に座って写真撮ったんだわ。

まさか中に... ダメダメ、はしたなかったわ。

あ、ダニーの服、たたんで... あら？ 着替え持って入った？

素っ裸よ。

洗面台のカウンターのところに置いておく？

そうね、ここのお風呂は、カーテンじゃなくて磨りガラスみたいな扉だから、見えないわよね、これを置いて、鶏ガラスープを見てくるわ。

鍵は... 開いてるわ。

チラッと... シャワー浴びてるわ、そりゃそうなんだけど。

ダニーって脚が長いよね、アメリカ人って、みんなそうなのかしら？

「Wahhhhhh!」

あっ！

ビックリしたあ... 突然出てくるんだもの。

あら、バシンってあわてて閉めたわ。

一緒にお風呂に入ろうかとか言ってるけど、本当は照れ屋なのね。

素っ裸で目の前歩いて行ったくせに。

鶏ガラスープ見てこようっと。

鶏ガラスープはできたわ。

この大きい鍋がそのまま入るって、アメリカの冷蔵庫ってすごいわね。

明日になったら、上に脂が固まっているはずだから、それを取り除いて小分けにするわ。

来た。

私の腰に腕をまわしてるもの。

「Honey」

首筋にチュッとかしても、わかっちゃったのよ。

「ダニー」

「Yes?」

「ユー・アー・シャイ」

私の背中で固まってるわ。

「I didn't expect you were coming in」

いいのいいの。

「ユー・アー・シャイボーイ」

「Boy? Am I not supposed be your husband?」

バスバンドのはずじゃないのか？ はいはい。

「オーケー、オーケー、ユー・アー・マイ・ハズバンド」

背中におんぶしてる気分だけどね。

おんぶって言うには、背が高いから、頭が私の頭のずっと上だけどね。

ほら、こうやって振り返っても、上を見上げるのよ？

ダニーは覗き込むようにしてるし。

私、この年にしては背は高い方なんだけど、それでも見上げるって、何cmあるのかしら？

「ダニー」

「yes?」

「ハウ・トール・アー・ユー？」

「6 feet and one and a half inch」

ハ？

「プリーズ・センチ、あ、センチメートル」

「Ah... one hundred and eighty seven centimeters」

100... 80... 7... 187cm! 高い!

「What is your height, ah... how tall are you?」

「えっと、ワンハンドレッド、シックスティセブン、センチメートル」

「So... You are about... 5 feet and 6 inches」

なんだかよくわからないけど。

「Why did you ask my height?」

なんで身長を聞いたのか？

「アイ・ジャスト・ワント・ノウ」

「I'm glad you are interested in me」

興味を持ってくれて嬉しい？

今さら？



そうね、もっと前に聞いてもおかしくないわよね。  
でも、それどころじゃなかったんだもの。  
なんだかバツバタして2週間経っちゃったわよ。  
やっと落ち着いたって感じかしら。

ダニーは本を読んでいて、私は横でコーヒーを飲んでるの、ソファでね。  
ふつうの夕方、最高だわ。  
明日からどうなるのかしら？ まったくわからないわ。  
いいわ、どうせ明日になったらわかるんだから。

「Romie」  
「イエス？」  
「Come here」

膝の上に頭をのせろってこと？

「ユー・ドント・ファート？」  
「I told you, mine smells like a rose」  
「イフ・アイ・スリープ、ワン・アワー、ホワット・アー・ユー・ドゥイング？」  
「I'll kick you down and run into a bathroom」  
はあ？ 私をけり落としてトイレに駆け込むううっ？  
「オーケー、アイ・ドント」  
「Don't worry, I'm in a diaper」  
オムツをしてるってこと？ もうバツカじゃない？  
「If I wet, change my diaper」  
オシッコしたらオムツを替えてくれ？

そういうことよね。  
もしも、もしも、もしも、本当に結婚したとしたら、  
待っているのは、家族が増えるとか、子どもの成長とかじゃなくて、  
どっちがどっちかのオムツを替えることになりうる日々ってことよね。  
それって、結婚っていうより、介護だわ。介護だけじゃないけど、  
介護覚悟ってことよね。

「オーケー、アム・グッド・アット・チェンジ・ダイアパーズ」

まあそれは本当よ、美香でさんざんやったもの。

「Oh, so sweet! If you wet your diaper, I will change it」

私のオムツを替える？

「ノー！」

「Why not? I'm your husband and you are my dear wife」

ああ、冗談！ そうね、本気で嫌がることはなかったわね。

「オーケー」

ダニーの膝に頭をのせたわ。

ダニーは私を見て微笑んで、本に目を戻して、また私を見て、チュッて。

この夫婦ごっこ、逆に楽かもね。

なんでも冗談にできちゃうもの！

楽しいし！

1週間だけね。

## Tボーン・ステーキ

---

Tボーン・ステーキのお肉って、このT字型の骨のこっちとこっちの部位が違うのよ。昔調べたことがあるの。Tボーン・ステーキなんて焼いたことはないけどね。片方がサーロインで、もう片方がヒレという説とテンダーロインという説があるの。どっちにしても巨大だってことには変わらないわ。ダニーが好きなんですって。前にスーパーに行ったとき、サーロインとヒレとどっちが好き？って聞いたら、Tボーンって言ったのよ、見たらビックリしちゃった、顔より大きいんだもの。たまにステーキを作ってはあげてたんだけどね、Tボーンは無視してたの。でも、昨日は買ったのよ。だって今日は休暇が終る最後の夜でしょ？明日から仕事だから、好きなものを食べさせてあげようと思ったの。おとうさんのときもそうだったわね。まあ夏休みっていっても、夏期講習があったりで、丸々休みじゃなかったけど、明日から新学期っていう前の晩は好きなものを作ってあげたわ。から揚げとかトンカツとかね。あれがよくなったのかしら？今さら考えたって遅いわよ。

ダニーは今ほりビングで、多分いつものように本を読んでるわ。もう二度とWill you marry me?なんて言わないでほしいわ。次はどう返していいかわからないもの。でも、もう言わないわね、夫婦ごっこしてる間は。Will you marry me?って、けっこう、かなり、すごく重たい言葉でしょ？基本的には一生に一度言われるだけよね。それを二回も、しかも、どっちもあんなに軽く言われたら、なんていうのかしら？ほとんど意味のない言葉みたいに思えてきちゃうわ。How are you? みたいな？もし次に言われたら、I'm fine, thank you って言ってやろうかしら？なんだかね... そんなに簡単に軽く言わないでよって、バカにしてるの？って、だって、まるで、僕たちは結婚できないよって念を押されてるような気がするのよ。できないけどね、宇宙旅行に行こうくらい現実味がないけどね、わかってるわよ。結婚したいのかって聞かれたら、結婚がしたいわけじゃなくて...何がしたいのかしら？そばにいたいなのよ、でもムリだってわかってるのよ、それだけだわ。

ほら、こうやって、私が作った料理を美味しそうに食べてるのを見るのが好きなだけなの。ずっと見ていたいって思うの、それができないから悲しいだけ、ちょっとだけね。

「Romie」

「イエス？」

「I have a good news」

グッドニュース？

「ホワット？」

「I have a couple of favorite suits」

えっと？ お気に入りの、スーツ？

「They were very tight, and I couldn't wear them」

タイト、キツいってこと？ 着れなかった？

「Means I was fat」

太っていた？ そんなに太ってなかったと思うけど？

「I tried them on during you were cooking」

私が料理している間にトライしてみた...

「They fit me perfectly!」

パーフェクトにフィットした...

「Thank you for your cooking」

私の料理にサンキュー？

「ホワイ？」

「I couldn't believe it, but, I lost my weight only for two weeks」

二週間で、ロスト、失う、ウェイト、体重？ 痩せた？

「本当？」

「Yes」

「アイ・アム・ハッピー！」

「I am happy, too!」

ああ！ よかった！ 自分がやってきたことが無意味じゃなかったんだって思えるわ！

「Oh, you are smiling!」

「イエス！」

「I love your smiling face」

「サンキュー！」

私、栄養士でもなんでもないけど、なんていうのかしら、主婦の勝利みたいな感覚？

あ、そうだわ、言っておかなきゃ。

「ダニー、ドント・イート、ビツ」

「I know, I'm retired from V.I.P. of MacDonald's」

「グッド」

でも、ときどきそういうのも食べたくなくなったりするわよね。

「ダニー、サムタイム・イズ・オーケー、でも、ナット・エブリタイム」

「How can I eat Big Mac after I...」

ン？ どうしたの？ 黙っちゃって？

「ダニー？」

「How can I eat Big Mac, I love T-bone steak!」

ああ！

「イエス、アイ・ノウ、でも、ナット・エブリタイム」

「Not every time, ok, I won't」

そうよ、今日は明日から仕事だから特別なのよ。

いっつもこんな大きいステーキ食べてたらマック食べるより太っちゃうわ。

明日のお弁当に何をつくるかは決まってるのよ。

下ごしらえできるものは、夕食作ってるときに一緒にやったしね。

お弁当箱を洗っておけばいいだけね。

来たわ。

「Romie」

私の肩にあごをのせてるわ。

「What are you doing?」

「ウォッシング・ベントー、じゃない、ランチ・ボックス」

「So I'm going to take this lunch box tomorrow」

「イエス」

「What are you gonna make for lunch?」

それはね

「トップシークレット」

「T-bone steak?」

「ネバー！」

「I know」

私の肩にあごを乗せているダニーの顔をチラッと見たら...

やだ...

なんだか、しあわせって、ちょっとウルツとしちゃったから、  
すぐにお弁当箱拭いて、カウンターの上に置いて...

これだけでいいのに...

「finished?」

「イエス」

「Now you are all mine」

君は全部僕のもの？

「Let's get out from the kitchen」

キッチンから出よう、はいはい。

今夜は本は読まないのね。

あすから仕事ですものね、ボーッとしたいわよね。

「Romie, I had the best summer vacation I've ever had」

今までの中でいちばんの夏休みだった...

「It's because... all of you」

すべて私のおかげ...

「Thank you」

なによそれ、まるで今日が最後みたいに。

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ステイ・ワンモア・ウィーク」

「Yes, I know」

「フロム・トゥモロー、ユー・ハフ・トゥ・ワーク、フォー・ミー」

「For... you...」

「イエス、アイ・ユーズ・マネー、フォー・フード、エレクトリシティ、ウォーター」

そうよ、だから、

「ワーク・フォー・ミー！」

見ないで、こっち見ないで。

「ビコーズ、ユー・アー・マイ・ハズバンド」

ちょっとだけでも...

「ユー・ハフ・トゥ・ワーク・フォー・ミー」

そう思わせて...

「ビコーズ、アィム・ユア・ワイフ」

あなたのこと見れない... バカだと思ってるかもしれない...

「アイ・セイ・イエス」

それはNoっていう意味だけど、それをあなたもわかってるけど...

まだ終わりにしないでよ！

「アイ・テイク・ア・バス！」

泣きそうなもの。

「No!」

ノー？

「Don't go」

行くな？

「This is the last night of your husband's vacation」

ハズバンドの休みの最後の夜...

「I want to spend this night with my wife」

自分の妻と一緒に過ごしたい...

「Honey, stay with me」

ハニー...

「イエス、ハニー」

言えたわよ。

あなたもニッコリ笑ってるわ。

ほら、あなたの横に座ったわよ。

従順な妻でしょ？

あなたが私の肩を抱いて...

「So, you make me work very hard」

「イエス」

「My god! I have a tough wife」

タフ？ そうね。

「イエス、ユー・キャント・クラック」

笑ってるわ。

「Honey, I might die, for working too hard」

死ぬかもしれない？ なに言ってるの！

「ノー、ユー・ドント・ダイ」

「How can you say that?」

なんでそんなことが言えるのかって？

「ビコース、ユー・アー・イーティング・マイ・クッキング！」

負けたって目をして笑ってるわ。

勝っちゃった？

主婦は強いだよ。

強くはないけど...

強いふりしなきゃいけないときがあるのよ。



## 休み明けの出勤前

---

目覚ましが鳴る1分前に目が覚めたわ。

主婦の悲しい性質だわね。

ダニーはまだ眠ってる、眠っててね。

休み明け初日のお弁当はロールサンドよ。

食パンをのし棒で少しだけ薄くして、中にソーセージや卵やハムとチーズを入れて巻くの。

もちろん、別々によ？ソーセージはソーセージだけよ、ケチャップとマスタードは入れるけどね

。

パンをラップの上に載せて具を置いてラップごと巻いて端をキュッと捻じって止めるのよ。

そして、真ん中あたりを斜めにカットすると、ほら、きれい！

きれいなだけじゃないのよ。休み明けって仕事が溜まってたりするでしょ？

忙しいのよ、でも、このロールサンドだと、手も汚さずに食べられちゃうの。

そしてね、レタスやトマスは入れちゃダメよ、ベチャツとなるから。

野菜は茹でたブロッコリーとカリフラワーとインゲンを炒めて横のケースに入れるの。

本当はね、小さくカットした苺とかバナナとホイップクリームのフルーツ・ロールもあるの。

美香が好きでよく入れてあげてたんだけど、男の人って、そういうの好きじゃないでしょ？

だから、フルーツはこっちのケースに食べやすいようにカットしてバニラシュガーをかけてお

くわ。

水筒じゃなくて、サーモなんだっけ？ とにかく保温できる小さめの水筒も買ったから、

ゆうべ作った鶏ガラスープにみじん切りにした野菜を入れてスープも作ったわ。

あとは、これをこのランチボックス専用の手提げ入れに入れば出来上がり！

そういえば、美香が幼稚園のときには蓋の上にメモを貼って、絵を描いてあげたり、

中学のときには、テストの日には「リラックス！」とか、元気がないときには、

「帰りたくなったら帰ってきていいのよ」って書いたりしたわね。

そのうち、「今日何時に帰ってくるのか電話して！」って伝言みたいになっちゃったけど。

ダニーにも書く？

なにを？ エンジョイ・ユア・ランチ？ カフェのウェィターみたいよね。

“I love you”

昼からこれはやり過ぎだわ。

“Eat and work!”

軍隊じゃないんだから。

“When you are tired, take a coffee break”

これね。疲れたらコーヒーでも飲んでねって、これでいいんじゃない？

これを蓋の上に貼って、はい、いつでも持っていけるわよ。

朝食も作ったし、あとは、ダニーが来ればコーヒーができるわね。

えっと、仕事が9時から5時って言ってたわ。

ここを30分前に出れば間に合うって。ていうことは、8時半に出るのね。

7時に起きるって言ってたわ、もう7時過ぎてるわ。起きて顔洗ってるかしら？

なんとなく音がするから起きてるみたいね。

まだダニーが日中いないって実感わかないわ。

「Good morning, honey」

「グッ...」

あら！

スーツ姿が            カッコいい！

「What are you looking at?」

「ユー・アー、カッコいいって？ あ、ハンサム！」

あら、真っ赤になっちゃった。

「Ah... Thank you」

「コーヒー・プリーズ」

「Sure」

へえ、やっぱりスーツって外人が着るべきものなのねえ。

カッコいいもの！

惚れなおしちゃったわ、惚れなおすって英語でなんて言うの？

言わなくてもいいわよ、そんなの。

こうやって一緒に朝食食べてると、いつもの朝と変わらないのよね。

でも、これから仕事に行くのよね。

仕事？ なんの？ ダニーの仕事ってなに？

聞いたことあった？ どうだったけ？

あら？ ない。

「What are you thinking?」

「ダニー」

今さらナンだけど...

「ホワット・イズ・ユア・ジョブ？」

ポカン？

「Didn't you know that？」

「ノー」

二週間も一緒にいたのに、知らなかったわ。

ていうか、知らなかったことにも気づいてなかったわ。

「I'm an attorney」

ハ？

「Ah... I'm a lawyer」

ロイヤー... ロイヤーって... 弁護士!?

へえ、弁護士を生で見るのって初めてだわ。

「ディス・イズ・ファーストタイム、アイ・シー・ロイヤー」

「Don't you have a family lawyer？」

家族の弁護士？ 家族の中に弁護士がいるかってこと？

「ノー」

「Hire me! I'm a good lawyer!」

弁護士だったとはねえ。

あ、それじゃ、こんなこともするのかしら？

「ドウ・ユー、えっと、オブジェクション！ ギルティー！ ノーギルティー！」

「Hahaha! You can be a lawyer! No, I'm not a criminal lawyer, I'm a legal counsel」

ン？

「Ah... a kind of counselor of companies」

カンパニーのカウンセラー... 顧問弁護士ってことかしら？ なるほどね。

「Now you got it」

「イエス」

あら？ そういえば...

「ユー・ラン・ユア・オフィス」

「Yes, I run my own office. How did you know that?」

「キャシー」

「Ah! I see」

「ホワット・ラン? 走る? ラン? こうやって?」

「Hahaha! No, I have my own office」

ああ! 自営業ってことね。

大変ねえ。

「ダニー、イツツ・ハードワーク」

「What?」

「ラン、なんだっけ? ラン、ユー・ラン」

「Ah! Well, it's a small office」

無理しないでねって、なんて言えばいいのかしら?

「ドント・ワーク、そうねえ、トゥーマッチ?」

「I have to work for you」

「イエス、でも、ナット・トゥーマッチ、ユー・アー・タイアード、ラン・イズ・ハード」

今までと違う分野の話になると英語がメチャクチャだわ。

「Are you worrying me?」

あたりまえじゃない!

「イエス」

え? なに? なんて黙ってジッと私のこと見てるの?

もしかして、不安を与えすぎちゃった?

「ダニー、ドント・ウォーリー、ユー・ドント・ダイ」

「Yes, I know. I ate your breakfast, so I won't die」

「イエスイエス」

休み明け初日から不安を与えちゃダメじゃない、私ったら。

あ、立ち上がったわ、そろそろ行くのね。

お皿を持って... 洗うの? 今日からはいいのよ。

「ダニー、えっと、アイ・ウィル・ウォッシュ」

「I can do it」

わかってるけど。

出勤前にお皿を洗ってる場合じゃないでしょ。

「ノー、イツツ・マイ・ワーク、リーブ・ディッシュ」

「You spoil me」

スポイル？ なんだかわからないけど、

「アトム・ハウスワイフ」

「Did your...」

ン？

「ホワット？」

「Ah... Nothing」

あ、そう。

あ！ 上着！

はい、どうぞ！

「What are you doing?」

え？ 何をしてるのかって、上着を着せようとしてるだけよ？

「ウェア、こうやって、あなたに、ユー、ほら、ウェア」

ポカンとしてないで早く！

「Did you always help your husband for putting on a jacket?」

ハズバンドがジャケットを着るのをヘルプしてたのか？

ヘルプっていうか、そりゃそうでしょ？

「イエス」

「Do you wanna do it?」

やりたいとかやりたくないじゃなくて、

「ウェア！」

早く着てよ！

「Ok, ok」

なんなの？ 朝の忙しいときに？

あ！ お弁当！

「ダニー、ランチボックス」

「Thank you, honey」

チュッて、まるで新婚さんみたいだわ。

そのうちしなくなるのよ、おとうさんはしたこともないけどね。

「I'll be back around 5:30」

「オーケー」

男が時間どおりに帰ってくるなんて絶対ないけどね。

「Romie」

「イエス？」

「I love you」

ガバッとキス！

アメリカの出勤って、毎朝こうなの？

「ダニー、ユー・レイト！」

「Oh, I have to go」

「ドライブ・ケアフリー」

「Yes, I will」

またチュッ？

「Romie, are you ok?」

「イエス」

「Call me whenever you... oh, no, you won't」

「ドント・ウォーリー」

なに？ 私のことジッと見て...

「I already miss you」

もう淋しい？

私は... 実感がないんだけど。

「I love you」

チュッてして、出ていったわ。

ダニーが日中ずっといないなんて、まだ...

あら？

戻ってきたわ。

忘れ物？

「I love you」

チュッ

そしてドアが閉まったわ。

車の音がするから、やっと行ったのね。

振り返ると...

ダニーのいない空間...

お皿洗おう。

## ひとりぼっち

---

昨日作った鶏ガラスープ。

上に固まった脂を取り除いて、塩・胡椒で味付けして、冷めたらジップロックに小分けして冷凍するの。

夕食は何にする？ 昨日はステーキだったから、お魚？ でも、ダニーは基本お魚が好きじゃないのよ。

私の料理したものは食べるようになったけど、久しぶりに出勤して疲れて帰ってきてお魚じゃねえ。

ポーク・ソテー？ でも、疲れて帰ってきたときって、胃腸も疲れてるのよね。

チキンにする？ そうね、ついでに明日のサンドイッチの具材も作れるわ。

こうやって、キッチンで下ごしらえしていると、リビングにダニーがいるような気がしちゃうわ。

これが終わってリビングに行ったら、ソファに座って本を読んでもるんじゃないかって。

いるわけじゃない、さっき出かけたわよ。

コーヒーを持って、リビングに行ったら...

誰もいない。

いつもダニーが座っているところにダニーがいない。

寝室に行ってるような気がしちゃう、トイレに行ってるんじゃないかって。

ソファに座っても、いつもダニーが座ってる左側にダニーがいない。

そのうち、あそこの廊下からこっちに来そうな気がしちゃう。

私、いつもここに座っても、何かしていたわけじゃないわ。

本を読んでいるダニーの横に座って、ボーッとしてたり、いろんなこと考えてるだけ。

それなのに、ダニーが横にいないだけで、何をしたらいいのかわからなくなってるのよ。

テーブルの上にノートパソコンがあるの。

美香とSkypeできるようになって、ゆうべダニーが置いてくれたの。

でも、今、美香と話す気分になれないのよ、話すことも浮かばないし。

話すことはいっぱいあるはずなんだけど、何も頭に浮かんでこないの。

ダニーの寝室のベッドメイキングでもしてこようかしら。

きちんとベッドメイキングしてあるわ。

いつもそうだったけど、会社に行く朝も、ちゃんとベッドメイキングしていくなんて。

アメリカの男の人ってみんなそうなの？ それとも、ダニーがそうなの？

わからないけど、私がここで寝るようになる前も、いつもきちんとしてあったわ。



今朝までは、ここに寝てたわ。

ダニーの枕... ダニーの匂いがする...

死んだわけじゃないのよ、おとうさんのときとは違うのよ。

あのときは...

おとうさんが死んだ次の日の朝も、前の日の朝と何も変わってなくて、

おとうさんが死んだって実感が湧かなかったわ、涙も出なかった。

だって、なにひとつ変わってないのよ？ いつもおとうさんが大学に出かけた後みたいに。

悲しいとか、本当に何も感じなかったの。おとうさんのいない寝室で、

おとうさんのベッドをいつもみたいに直してたら、美香が来たの。

「おかあさん」って私に抱きついて泣いたときに、初めて涙が出たの。

おとうさんが死んで悲しかったのか、美香が悲しんでいるのが悲しかったのかわからなかった。

でも、美香が抱きついて泣けるのは、もう私しかいないんだって思ったら、

涙が止まらなくなって... こんなときになんでいないの？って。

いちばんいてほしいときに、なんでいないの？って。

お葬式とかいろいろなことが終って、美香もまた出勤するようになって、

おとうさんが生きていたときも、いつも日中は一人だったのに、一人でいるのが辛かったわ。

怖かったわ、油断したら深い深い暗闇の中に引きずり込まれそうな気がして...

だから、何かしていようと思うんだけど、身体が動かないの。

ここにあるゴミを、すぐそこにあるゴミ箱に捨てることもできなかったの。

やっと一人でいることに慣れたのは、おとうさんが死んで三年くらい経ってかしら。

忘れてたわ。

ひとりでいるっていうこと。

ひとりでいることに慣れてたのに、ひとりでいるって... こんなに空っぽな気持ちだってこと。

よかったわ、一週間の準備期間があって。

突然またあの家でひとりになったら、私またあの闇に引きずり込まれそうになるわ。

あら？ 何の音？ リビング？

電話だわ。

でも、ダニーは出なくていいって言ってたわよね、留守電にしてるからって。

それに、えっと、インポート、重要な電話はダニーの携帯にかかってくるからって。

“Thank you for calling. I'm sorry but I can't answer your call right now.

Please leave a message after the tone. I'll get back to you as soon as possible”

ダニーの声だわ。

どんな顔して録音したのかしら？

あの顔よ。

『Romie, it's me. Pick up the phone』

ン？ ロミーって言った？ まさかね。留守電に私の名前は入れないわよね。

『Romie, pick up the phone』

あら？ またロミーって聞こえたんだけど。

『Romie, are you there?』

ロミーって言ってる。

『Romie! It's not recording!』

リコーディングではない...

え？

『Romie! Pick · up · the · phone!』

電話を取れ？

えっと、違ってたらどうしよう、切っちゃう？

「あ... へ、へロー」

「Oh, Romie!」

「ダニー！」

「Yes, it's me」

どうしたの？ 何かあったのかしら？

「How are you doing?」

どうしていたのか？

「アイム・ドゥーイング・オーケー」

「Good」

「ホワイ・ユー・コール・ミー？」

「Ah... I'm just... checking how you are doing」

私がどうしているのかチェックしてる？

「アイム・オーケー」

「Good」

今何時？ 10時半くらい？ まだ工作中よね？

「ダニー、ドント・ウォーリー、アイム・オーケー」

「Good」

「えっと、ゴー・バック・ワーク」

「Yes, yes, I will. Ah.... Romie」

「イエス？」

「I love you」

エーーーーッ？ 会社でそんなこと言っていいのおおっ？

「オ、オーケー、オーケー、ゴージャック・ワーク」

「Yes, I will. Ah...Romie」

え？ まだ続けるの？

「イエス？」

「I love you」

またっ？ 工作中でしょ？ 大丈夫なの？ 心配になっちゃう！

「イエスイエス、ゴージャック・ワーク」

「Yes, I will. So... See you later」

またあとでってことね。

「イエス、グッバイ」

ブチッ

て、私から切らないと永遠に続きそうだったんだもの。

今のはなに？

私がどうしてるかチェックした？

3歳の子どもが一人で留守番してるわけじゃないんだから大丈夫よ。

バカじゃない？

I love you なんて会社で...

やだもう...

ダニーの声を聞いたら...

なんだかホッとして泣けてきちゃったじゃない...

私のこと考えてくれてたって思うと...

ひとりぼっちじゃないって... 思っちゃうじゃない...

I love you って言ってもらって...

本当は嬉しかったのに...

仕事中に時間使わせたら申し訳ないと思っちゃって...

でも、嬉しかったの...

どうしよう...

この#と1を押したら、ダニーの携帯につながるって、

君は絶対にかけてこないだろうけど、In caseって念のためってことよね？

かけてもいいかしら...

ちょっとだけ...

忙しかったら出なくていいのよ...

どうしよう...

#と1を... 押したわ。

トゥルルッて...

「Romie?」

私だってわかったの？ あ、そうね、番号登録してあるのね。

「イエス」

「You are calling me!」

嬉しそうな声...

「イエス... サンキュー... コーリング・ミー」

「Are you crying?」

「イエス... ビコーズ... アイ・ラブ・ユー」

一瞬... 沈黙したわ... 2秒くらい...

「Romie... I love you」

「アイ・ラブ・ユー、だから、ワーク・フォー・ミー、ハニー」

「Oh, I have a tough wife!」

「イエス」

「Ok, I'll be back to work, honey」

「イエス、バイバイ」

私...

今は...

少なくとも今だけでも...

ひとりぼっちじゃないわ。

ひとりだと...

---

枕カバーを洗うわ。

あとはバスルームのランドリーボックスの中の下着とかタオルとかね。

シーツはムリだわ、外せても元に戻せる自信がないもの、今日はやめておくわ。

掃除はね、一カ月に一回プロフェッショナルに頼むんですって。

昔の私ならもったいないと思ったけど、今はわかるわ。

だって、換気扇とか、特にレンジフードの汚れとか、窓とか、家中やると疲れるのよ。

年をとるってお金がかかるのね。

でもね、チョチョッと掃除するための使い捨てるのハンディモップとかは買ったの。

おとといね、ダニーがないときに掃除できるようにね。

リビングのソファの後ろの棚にはビッシリ本が並んでるのよ。

ちゃんと見たことはないんだけどね。ソファの横のサイドテーブルの下にも本。

見慣れた光景だわ、おとうさんの書斎なんて、壁が本でできてるみたいだったわ。

ほら、やっぱり！ サイドテーブルの下に埃が溜まってるわ。

積んである本をどけて、モップで埃を取って、積んである順番は絶対変えちゃいけないの。

それなりに意味があるらしいのよ、おとうさんはそうだったわ、きっとダニーもそうね。

そうかしら？ でもいちおうこの順番のまま揃えて置いておくわ。

この棚の上の方はムリだわ。椅子に乗っても届かないわ。プロにおまかせね。

本って知らないうちに埃が溜まるのよね、ほら、この上にも。

掃除機使っちゃう？ どこにあるのかはわかってるの。巨大だけどね。

今日はやめておくわ、まだ日にちがあるし。

あら、このいちばん下の棚に... 学校のアルバム？ High Schoolって高校よね？

見ちゃおうかしら？ でも、勝手に見たら悪いわよね。ちょっとだけ見ちゃう？

ちょっとだけ...

ねえ、どうして全員、全員よ？ あらぬ方向を見てニッコリ作り笑いしてるの？

卒業アルバムって、まっすぐ前を向いて撮影するわよね？ 歯を出して笑うのはダメだったわよ

。

そんなことはいいわ、どこにいるの？ あら？ これ、キャシーのピラーじゃない？

Peter Hamptonって、そうよね、そうだわ。髪の毛フッサフサだわ。

まさにバービー人形の恋人よ！ まさか何十年後にはこの髪が... まあいいけど。

ダニーは... もしかしてこれかしら？ 目がそうなんだけど。Daniel Swope、ダニエル？

ダニーの本名ってダニエルなの？ 外人の名前って不思議よね。

ウィリアム・シェイクスピアのウィリアムって、シェイクスピアがってわけじゃないけど、ウィリアムって名前の人がビルで呼ばれるって知ったときにはわけがわからなかったわ。ダニエルはまだいい方ね、原形が残ってるもの。

これが高校生のときのダニーなのね。地味けどなかなかハンサムなんじゃない？

もしも、私が高校生のときに会ったら好きになったかしら？ まず接点がないわ。

だいたいダニーが高校生のときの私を好きになったかしら？ どうかしら？

そんなことまじめに考えてどうするのよ？

あ、これって、ロミオとジュリエットの劇じゃない？ そうよ、ピラーが真ん中にあるもの。

ダニーは... ピラーに重なって半分しか見えないけど、これよね？

プロンプターやってたのね。大変だったわね。

これは... もしかして、プロムっていうのじゃない？ ピラーが王冠かぶってるわ。

一緒にいる女の子って、本当に高校生？ すっごい色気ムンムンだけど？

ダニーは... どこにいるの？ これかしら？ みんなが踊ってる写真のこの端に写ってる...

へえ、ダニーと一緒に踊ってる子、けっこう可愛いじゃない。

ダニーって面食いなよね、キャシーだって顔は、今はイジってるけど、美人だし。

男ってそうよね、結局顔なのよ、きっと高校生のときの私に会ったら好きになんかならないわ。

もういいわ。

見なきゃよかったわ。

あそこに私がないのが、なんだか... あたりまえなんだけど、なんだか...

ダニーと一緒に踊っている相手が私じゃない... あたりまえだけど。

バカじゃない？ 何十年も前のことじゃない！ ダニーの高校生時代に私がないって、私の高校生時代にもダニーはいなかったわよ。この世に存在していることすら知らなかったわ。ひとつ上の生徒会会長と付き合ってたわね。なんで付き合うようになったのかしら？

ああ！ 無理やりクラス委員やらされて、全学年会議に出るようになったのよ。

そのときに、よく話しかけられるようになって、そうそう、映画を見に行こうって言われて。

なんで私と映画を見に行きたいのかよくわからなかったのよね。

何の映画だったかしら？ 未知との遭遇？ よく憶えてないけど、そんな感じの映画。

全然おもしろくなかったことだけは憶えてるわ。星のことが好きなのかしらって思ったのよ。

あと、放課後図書館で一緒に勉強しようって言われて、勉強したわ。

一緒に帰ろうって言われて、逆方向なのに？って不思議だったわ。

それで、あるとき言われたのよ。僕たち付き合ってるんだからって。

ビックリしたわあ。え？ そうなの？って。相手がそう言うならそうなのかしら？って。

だって男子と付き合うなんて初めてだったんだもの。

何をもってして付き合うというのかわからなかったのよ。

一年のときから、会長が卒業するまで続いたわね。自然消滅したけど。

ファースト・キスの相手よ。全然ロマンティックじゃなかったけどね。

私の家の前まで送ってきて、なにかモゾモゾしてるなあって思ったら、グイッて。  
正直、くちびるとくちびるが触った、そんな感じ？ それだけ。  
私、あの人のこと好きだったのかしら？  
今さらそんなこと考えたってしょうがないでしょ！  
暇すぎるんだわ、だからしょうもないことばかり考えるのよ。  
洗濯機見てこよう。

枕カバーに枕を入れて、ポンポン。  
タオルはバスルームの棚に入れたわ。  
ダニーの下着は、ウォークイン・クローゼットのこの引き出しのいちばん上よね。  
いつもは、洗濯室に置いておくと、自分で持っていったから私が入れたことはないけど、  
いつもここから出してたわ。  
やっぱりここだわ。  
あら？ 封筒？ 何かの書類？ あら？ なんか見たことがあるような...  
ダニーの会社のかしら？ あ、会社っていわないのかしら、法律事務所？  
あ！ そういうことね、事務所に置いておけない機密書類みたいな？ そうね、きっとそうよ。  
絶対に触らないわ、ここに下着を入れるだけよ、はい、閉めたわ。  
大丈夫、私は何も見なかったわ、だれかに脅されても絶対に言わないから安心して。  
弁護士って大変なのねえ、こういうこともしないといけないのね、神経使うわよね。

いつも何してたっけ？  
夕食の準備をするには早すぎる午後。  
近所のスーパーに行ったり、たまに美香に借りてきてもらったDVD観たり、  
庭に出て草取りしたり、あとは？  
外に出てみる？ そうね、ずっと家の中にいるから持て余しちゃってるんだわ。

この裏庭...  
最初はどんなだったのかしら？  
せめて30代だったら、ここの草取りしてたけど、あまりに広くてムリだわ。  
たとえばね、あのいちばん日当たりのいいところで家庭菜園ができるでしょ。  
トマトとか、インゲンとか、きゅうりとか。  
若い頃は広い庭が欲しかったけど、そのときは美香が小さくてそれどころじゃなくて、  
時間ができるようになると、体力がないから、コンテナでミニトマトで充分なのよ。  
これに手をつけるには時間がなさすぎるわ、それより体力がなさすぎるわ。



ところどころにお花が咲いてるから、切って瓶にでも活ける？ そうね。  
デイジーとか、これは何かしら？ きっと種が飛んできたのね。ラベンダーもあるし。

活けたけど...

こんなことだけしてたら時間ももったいないわ。

そうだわ！

ミートソース作ったわ。

これを小分けにして冷凍するの。

あとは、そうね、スロー・クッカーで簡単に作れるレシピを書こうかしら。

だって、ダニーが作れるのはビーフシチューだけでしょ？

説明書に書いてあるのは、下準備が必要なものがけっこうあるから、

ただ切って、入れればできるものを書いておけばいいわね。

何に書く？ ノートなんてないわよ。

あ、パソコン！

このアイコンはメモパッドよね？ クリック。

そうだわ。

あ、でも、日本語変換が... いらないわよ、ダニーが読むんだもの。

今日は野菜スープね。

無駄な時間過ごしちゃったから、もう少ししたら夕食の準備しなきゃいけないわ。

今は... 5時20分。

5時半頃帰るって言ってたけど、早くて6時、せいぜい6時半、7時でしょうね。

休み明けの初日だもの。8時かもね。

もし同僚と飲みに行くなら電話してほしいわ。そうっておけばよかったわ。

でも、英語でなんて言うの？ イフ・ユー・ドリンク・ウィズ、同僚って？

パソコンで調べたくても、まず日本語が打てないから自動翻訳が使えないのよ。

美香にSkypeする？ むこうは明け方だわ。

あ、チキンがそろそろかしら？ もうちょっとね、ローズマリーがいい匂い！

「Romie!」

えっ？

ダニー？

今何時？ 5時25分？ ウソでしょ！

「Romie!」

は、はいはい。

えっと、おかえりなさいって、英語でなんて言うのかしら？

まあ、いいわ、とにかく、玄関！

「ダニー」

「Romie!」

ガバッと抱きつかれちゃった。

「I missed you!」

なんだか...

ホッとしちゃって...

「アイ・ミス・ユー」

顔見たら...

ウルッとときちゃった。

ダニーがずっと私のこと抱きしめてるの。  
私もなんだかすごく... ホットしてるの。  
初日からこんなでどうするの？  
ううん、初日だからよ。  
きっと慣れるわ、少しずつ。

「ダニー」

「Yes?」

「アー・ユー・ハングリー？」

「Smells so good, and makes me hungry」

「オーケー」

すぐに支度するわ。

あ、その前に背広。

「What are you doing?」

何してるって、

「テイク・オフ、ジャケット」

「I can do it」

自分でできる... あ、そう。

「Romie」

「イエス？」

「You don't have to worry about my jacket」

ジャケットのことは心配しなくていい...

あ、そう。

それじゃ...

「アイ・プリペア・ディナー」

スーツから普段着に着替えたダニーは、いつものダニー。  
私の目の前で美味しそうにチキンを食べてるわ。

「So, how was your day?」

私の今日はどうだったか？

こういう漠然とした質問で、答えるのにいちばん困るわ。

私の一日ねえ、なんて言ったらいいのかしら？

「Why are you thinking?」

笑ってるけど、

「ハウ・ワズ・ユア・デー？」

「Well...it's...yeah, good」

ほら、なんだかわけがわるようでわからないことしか言えないじゃない。

「What did you do today?」

何をしていたか？

「そうねえ... クッキング...ウォッシング...クリーニングに、クッキング」

「Oh, you were busy」

忙しかった？

忙しかったかしら？ そうでもないわよねえ。

「What are you thinking?」

また笑ってるけど、だったら、

「ホワット・デイド・ユー・ドウ・トウデイ？」

「I worked」

働いていた。

そりゃそうだわ、そうだったわ、バカなことを聞いたわ。

なにかしら？ なんかぎこちないのよ、なに？

あ！

今まで、お互いに今日は何をしていたかなんて聞いたことなかったわ。

だって、いつも一緒にいたんですもの。

今何考えてるの？とか、今なにしてるの？は聞いたことあっても、

今日はどうだった？なんて聞き合ったことなんてなかったわ。

おとうさんともそうだったわよね。

そんなこと聞いたこともないし聞かれたこともないわ。

美香とだって、学校に行ってたときは、今日のテストどうだったくらいは聞いたけど、

何を話してたかしら？

美香はテレビ見ながらご飯食べたりして、おとうさんは何してたかしら？

そういうものよね、会話なんてなくなっていくのよ。話すことなんてないもの。

まして私なんて毎日同じことしかしてないんだから。

あ、ダニーがお皿を...

「ダニー、アイ・ウォッシュ」

「It's my job」

自分の仕事？ なに言ってるの？

「ユア・ジョブ・イズ、えっと、ロイヤー」

「Yes, but...」

なんで笑うのよ？

「I mean... You cook, I wash dishes, it's our roles, right?」

私が料理して自分がお皿を洗うのが、役、役割？

それは、休みのときのことで、もう仕事が始まったんだからしなくていいのよ。

って英語でなんて言えばいいの？

って、考えてるうちにキッチンに行っちゃったわ。

あなたは仕事して疲れて帰ってきたのよ？ それに明日も仕事があるでしょ？

私は明日も一日中家にいて、料理したり掃除するくらいなのよ。

だから、お皿はいいから、むこうに行ってゆっくりしたら？

って言いたいんだけど、なんだか全然英語が浮かんでなくて、

ダニーが次々とお皿を洗っていくのを横で見てるだけ。

無理してるようには見えないけど、仕事から帰ってきて...

あ... そういうこと？

仕事が始まって、私ももうすぐいなくなるから、今のうちから慣れておこうとしてるの？

そうね、そうよね、私がいなくなったら、自分でお皿を洗わなきゃならないんですもの。

そう。

「Romie, where are you going?」

ゴー・バック・ジャパンよ、6日後にね。

「ユー・ドント・ニード・ミー」

「What?」

私ったら... 仕事から帰ってきて疲れる人に...

「えっと... ユー・ドント・ニード・ミー、トゥ・ウォッシュ・ディッシュ」

「Am I a good husband?」

そうね、きっといいハズバンドになると思うわ。

「イエス」

そして、私は...

「アム・ユースレス」

やっちゃった...！

自分の部屋よ...。

自己嫌悪で吐きそうよ。

仕事から帰ってきて疲れてるのに、お皿洗って、それなのに、私の感情なんかぶつけちゃって... 最低だわ。

「Romie」

ごめんなさい、今はうまく言えないから。

「Even if you say no, I will come into the room」

ノーと言っても部屋に入る...

本当ね、入ってきたわ。

「Romie, tell me what happened to you」

だから、それがうまく言えないから...

「ナッシング」

「I don't believe your nothing now」

ナッシングを信じない？

「You're obviously upset」

オブビアス... なんだったけ？

「Why are you upset?」

なんでアップセットしてるのか？

「Tell me. Why?」

尋問？

えっと... えっと... えっと...

「ビコース...」

「Because?」

「ビコース...」

えっと...

「ユー・アー・ダンシング・ウィズ・ビューティフル・ガール」

「What?」

ホワットよね、私もホワットだわ、なんでこんなこと言っちゃったのか自分でもわからない！

「What are you talking about?」

何のことを言ってるのか？よね。

私もわからない。

「Romie, what are you talking about? Who is that beautiful girl?」

ビューティフル・ガールは誰か？

知らないわ、あなたが知ってるでしょ。

見せるしかない？ 見せたら私が見ちゃったことがバレちゃう。

でも、見ちゃったんだからしかたないわ。

「アム・ソーリー」

「For what?」

卒業アルバムって英語でなんて言うの？

グラデュエーションアルバム？ わからない。

「アム・ソーリー」

「For what?」

だから、あのね、見ちゃったのよ、こういうの、こうやって開くやつ。

「Romie, speak」

「ユー・ウィル、アングリー」

「Will I be angry? What did you do?」

「ユー・ウィル・アングリー」

「Ok, I promise! I won't be angry」

怒らないって約束する？

「トゥルー？」

「Yes, true」

だったら...

「カム」

ダニーをリビングに連れてきたわ。

本当に怒らない？

「ドント・アングリー」

「I promise, I won't be angry」

そう？ だったら...

これなんだけど...

「アイ・シー・イット...」

「Did you see my yearbook?」

イヤブックって言うの？ それは今はどうでもいいのよ。

「アイム・ソーリー」

「You saw my pictures...」

「イエス」

「You could find me」

僕を探せた？

「イエス」

「How?」

「ハウ?」

ハウって、どうやってのハウ？

「Even my mother couldn't find me, when she first saw that yearbook」

お母さんが？ 最初に見たとき？ 見つけれなかった？

なんで？

「How could you find me?」

どうやって見つけたか？

バカじゃない？

「ユア・アイ」

「My eyes?」

「イエス、セイム、ナウ」

目が全然変わってないもの。

あら？ 黙っちゃった！

やっぱり怒ったの？

「Romie...」

「イ、イエス...?」

「You are...」

私は... な、なに？

「killing me!」

やっぱり怒ってるの？

「アー・ユー・アングリー?」

「How can I?」

なんでできるのか？ 怒ってないってこと？

「So... Which girl were you talking about?」

どのガールのことを言っていた？

あ、そうよ、えっと... あ、これ！

「ディス・ガール!」

「Ah! She is Cisse's niece」



シシーのニース、ニース、あ、姪？ シシー？

「Do you remember 80 years old bride?」

80歳の花嫁... ああ！

「シー・イズ・ユア・ガールフレンド？」

「No」

「ユー・アー・ダンシング！」

「Well, it's a long story」

長い話？

「ドウ・ウィ・ニード・コーヒー？」

「I'll get them」

つまりね、シシーの姪っ子とダニーは同じ高校の同じ学年だったんですって。

そして、シシーの姪っ子が付き合ってた彼氏とプロム直前に別れちゃったんですって。

それで、シシーがダニーにプロムに連れていってくれるように頼んだんですって。

でも、ダニーに彼女はいなかったの？って聞いたらね、いなかったんですって。

なぜならね、二学年飛び級したから、同じ学年の女子は全員二歳年上で、相手にされなかったって、

二学年も飛び級って、どんな頭してるの？

え？ じゃ、ピラーって私よりひとつ上？ それであれ？ 軽すぎる。

「So... You were jealous」

え？

「You were jealous of her」

それは...

「ノーコメント」

「You were jealous!」

何回も言わなくてもいいでしょ！

私だってバカみたいだってわかってるわよ！

「I'm glad I could make you jealous!」

何回も言わないでよ！

「アトム・ナット・ジェロス！」

「I'm jealous」

僕は嫉妬してる？

「トゥ・ディス・ガール？」

「No! Your husband, not always, but, yes, sometimes」

ハ？ おとうさんに？

「ヒー・ダイ」

「I know, but he is always in your heart」

彼はいつも私のハートの中にいる...

「And I know he is the greatest part of your life」

彼は私の人生の中の偉大な一部...

そんなこと言われると...

おとうさんのいる世界に戻れて言われてるような気がしちゃう...

戻るけど... 6日後には...

「But I won't give up」

キブアップしない？ なにを？

「ホワット？」

「You!」

私を？ 6日後に帰るのよ？

「Give me a room」

部屋をくれ？

「ルーム？」

おとうさんの部屋？ 日本よ？

「Or... Can I share with your husband?」

おとうさんとシェア、シェアルームってこと？

「ダニー、ヒー・イズ・イン・ザ・グレイブ」

お墓の中よ！

「ユー・キャント・ビ・ルームメイト、ナウ」

ポカン？

こっちこそポカンよ。

「See? The hardest nut to crack!」

またクラック？

で...

私は...

何に怒ってたんだっけ？

怒ってたの？

忘れちゃったわ。

明日のお弁当の下準備をしておこうと思ってキッチンに行ったら、お弁当箱がないことに気がついたの。

ダニーに、お弁当箱は？ランチボックスはだけど、って聞いたら、オーッって言ってカバンから出したわ。

おとうさやんや美香もそうだったわ、私が言わないと出し忘れるんだから。美香なんて学校に何回忘れてきたことか！ 予備のお弁当箱って必要よ。

まあダニーはあと4回だけだから、会社に忘れてきたとしてもタッパーで済ませるわ。ダニーがお弁当箱を自分で洗うって言うから、これは私の仕事よって断言したわ。だって、男が空のお弁当箱洗ってる姿ってわびしいもの。

ダニーはね、私にお弁当箱渡すとき、「Thank you」って言ったの。それだけよ。ホッとしたわ、デリ～シャスとかグレ～トとか言われたら、なんて答えたらいいかわからないもの。

ふつうがいいわ、ふつうにしてほしいわ、まるで日常みたいに。

このお弁当箱は防水のカバン？ 入れ物？ とにかく、それが付いてるものを買ったの。ちゃんと水筒、じゃなくてサーモなんかを入れる場所もあるのよ。

美香にもこれの赤とかピンクを買ってあげようかしら？ 日本にだっていくらでもあるわよ。ベントー・ボックスっていうくらいなんだもの、日本が先だわ。

ダニーはシャワーを浴びるって言ってたわ。私もこれが済んだらお風呂に入ろう。あら？ 袋の中に何か入ってる... メモ？ 私が書いたやつ？ ちがうわ。ハートが1個描いてある...

ダニーが描いたの？

ハートはちゃんと描けるのね。

これは... どういう意味かしら？ 意味って、ハートはハートって意味だけど。私がメモを書いたから、何か書かなきゃって思ったのかしら？ べつにいいのよ。でも、せっかくだから取っておくわ。

下準備ができたわ。

さあ、お風呂に...

あ、そうだわ、ダニーにノートを持ってるか聞いてみなきゃ。

スロー・クッカーのレシピをパソコンのノートパッドに打とうと思ったんだけど、私って、ペンで書かないと英語が出てこないのよ。

こうやって時代に置いていかれるのね。もうとっくに置いていかれてるのかしら？ どうでもいいわ、ノートよ。

リビングにいないってことは、まだ寝室ね。

寝室のドアを開けたら...

ダニーがバスタオル巻いて立ってたわ。

「ダニー」 「Romie」

「ホワット？」 「What?」

あら、いいわよ、どうぞ。

「You... first」

私が先？

でも...

「ウェアー、ルームウェアー」

「Ah... yes...」

ウォークインクローゼットの中に入っていったけど、なんだか顔つきがヘンよ？  
バスタオルだけの姿を見られたから？ スッポンポンで目の前歩いてるくせに！

「Yes, what can I do for you?」

ほら、なんだか顔が硬いのよ、どうしたのかしら？

「ダニー、アー・ユー・オーケー？」

「Me? Ah... I guess so」

だと思っ？

やっぱりなんだかおかしいわ。

「Romie...」

「イエス？」

「Ah... Well... What do you want to ask me?」

何が聞きたいのか？ あ、そうよ。

「ドゥ・ユー・ハブ・ノートブック？」

「Notebook is on the table in the living room」

リビングのテーブルの上？ あったかしら？ あ、それはパソコンでしょ。

「ノー、ノートブック、メニー・ペイパー、こうやって、ライト、ワード」

「Ah! You mean a notebook!」

ややこしい時代になったわねえ。

「Yeah, I have some. What kind of notebooks do you want?」

どんな種類って...

「ノーマル」

「Normal... Well, just a sec」

書斎コーナーに入っていったけど、なんでニコリともしないのかしら？

お風呂に入ったら疲れが出ちゃったのかしら？ そうね、ありうるわね。

「Here you are」

あら、いっぱいあるわ。

どれがいいかしら？ あんまり大きくてもキッチンで邪魔になるわね。

これかしら、そうね。

「ディス・ワン・イズ・オーケー？」

「Sure」

「サンキュー」

お風呂に入る前に野菜スープだけでも書いておく？

「Romie」

「イエス？」

え？ なに？ なんてそんなに深刻な顔して私を見てるの？

「ホワット？」

「Ah... Did you... did you wash my under wears?」

下着を洗ったか？

「イエス」

「Ah... Thank you」

「ユア・ウェルカム」

なに？ 突然？ いつも洗ってるわよ？

「Ah... Did you put them into my drawer?」

「ドローア？ ホワット・ドローア？」

「Ah... drawer... you pull and put something into it and shut...」

引っ張って、何か入れて、シャット... あ、引き出し？

引き出しに入れたかってこと？ 入れたわよね？

「イエス」

入れ忘れたかしら？ どうだったけ？

「So... Did you see... that... documents?」

ドキュメント？

「ホワット？」

「Didn't you see papers in the envelope?」

エンベロープって... えっと... 封筒...

「あっ！」

「Oh, no... You saw it...」

すっかり忘れてたわ... 機密書類でしょ。

だから、ニコリともしないで、深刻な顔してたんだわ。

「ダニー」

なんて言えばいいの？

「ビリーブ・ミー、アイ・ドント・セイ・エニシング」

信じて、何も言わないから。

「What do you mean?」

どういう意味って...

「イツ・ユア・トップシークレット」

「Ah... a kind of, but, you... already... know...」

英語なのにカタコトになっちゃうほど機密だったってことね。

「ダニー、アイ、えっと、ディレート・メモリー」

「What do you mean?」

どういう意味って、だから、

「アイ・フォーゲット・イット」

ン？ なにその、怒ったような悲しそうな目？ 信用できないってこと？

「So... You want to forget it」

忘れない？ ちがうわ！

「ナット・ワント！ アイ・ウィル！ ストロング！ ノーメモリー！」

「Ah, ok. Your answer is... No」

私の答えはノー？

答え？ 何の？

「ホワット・イズ・ア・クエスチョン？」

「You don't want to marry me」

自分と結婚したくない...

ハ？ なんで突然そんな話になるの？

「ホワット... ホワット... ホワット？」

「I knew you wouldn't say yes, and I didn't mean to push you, I just wanted to check...」

なに？ 早口だし長いし、わからないわよ。

「ダニー、アイ・ドント・アンダスタンド」

「Sure, I was stupid, but I was serious, and still I'm serious, but...」

自分はバカだった？ でもシリアスだったし？ まだシリアスで？

こんな支離滅裂なダニーって初めてよ。

それくらい重要機密だったってこと？

でも、私は絶対に誰にも言わないわよ、どうやったら信じてもらえるの？

あ

「ダニー」

「Yes」

「アイ・ニード・ア・ペン」

もらったノートに書くわよ！

口で言ってもわかってもらえないんだもの！ 書いても信じてくれるかわからないけどね！

*"It's not on purpose, I just happened to see the envelope ."*

わざとじゃないのよ、偶然あの封筒を見ちゃっただけよ。

*"I didn't touch it, I didn't see inside, so please believe me. I'll keep your secret ."*

触ってないし中も見えてないから、秘密を守るって信じて。

「You didn't see... inside of...」

「ノー」

「So... you don't know what it is...」

あれが何か知らない？ そう言ってるじゃない！



“BELIEVE ME!!!!”

「Then... Why did you say it's my top secret?」

“You are a layer, and you have a duty to keep secret.”

守秘義務くらいわかるわよ。

「Ah, now I got it」

わかってもらえた？

「Romie, it's not the top secret」

ハ？

「Do you wanna see it?」

見たいか？

なんか... 怖いわ...

「アイム... スケア...」

「Yes, it's scary for you」

私にとって怖いもの？ なになになに——っ？

「I won't, I don't want to scare you」

怖がらせたくないからやめる？

笑ってるけど... なんだか目が... なんてそんなに淋しそうなの？

「ダニー」

「Don't worry, it's nothing, just... forget it」

「アイ・ワント・シー」

「Romie, it's nothing, forget it」

あなたの様子がおかしかったし、今は悲しそうな目なのに...

「アイ・キャント・フォーゲット！」

ナッシングなわけないでしょ！ 何かあるにきまってるでしょ！

「ショー・ミー！」

固まったわ。

固まっても、私は見るわよ！

「ショー・ミー！」

えっとね、いくら読む方が得意だと言ってもね、専門分野以外のものってわからないのよ。  
K3-visas とか、USCISとか、I-129F って... なに？

「ホワット・イズ・イット？」

「Don't you understand？」

「ノー」

「Ok, you don't have to understand」

理解しなくていい？ 仕事のことなの？ そんなに重要ではないから見せた？  
って、私が思うとでも思ってるの？

「ホワット・イズ・イット？」

なにその困ったような目？ さんざん騒いだんだから言いなさいよ！

「セイ！ ホワット・イズ・イット？」

「It's about International marriage laws!」

そんなにヤケになったみたいな言い方しなくていいでしょ！

ン？ インターナショナル... 国際的な、マリッジ... 結婚、ロー... 法律... 法律...

「イズ・イット・ユア・ビジネス・シング？」

法律ってことは、やっぱり仕事のことだったの？

「No」

違う？

「I just wanted to check the requirement of International marriage」

ただ、チェックしたかった... 国際結婚の... リクアイヤメント？

「ダニー、スペル、リクアイヤメント」

Requirement

リクアイヤー...は要求するで、名詞形、要求されること？ 国際結婚で要求されること？

「Romie, I didn't mean to push you, I just...」

「ホエン？」

「What？」

「ホエン・ディド・ユー、プット・イット、イン、なんだっけ、これ？」

「When did I put it in my drawer？」

「イエス」

「Well... one week or more」

一週間以上前...

「ホワイ？」

「because... I'm stupid」

バカだから...

「イエス... ユー・アー・ステューピッド...」

「I know」

でも...

「サンキュー...」

「For what?」

だって...

「ユー・ラブ・ミー」

こんなこと不可能だってわかってるのに、こんなものを隠しておくくらい...

「You didn't know that?」

ほら、ふざけた顔して、目を見開いて驚いたふりして...

「Romie, I have something to tell you」

「イエス？」

「I love you!」

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ハブ・サムシング・トゥ・テル・ユー」

「What?」

「アイム・サプライズ、ユー・キャン・ライト・ハート」

キョトン？

「イツツ・ハート、でしょ？」

ほら、このメモよ。

「Romie」

「イエス？」

「It's a turtle!」

カメ...

「Why are you crying?」

だって...

ハートをカメだって言って、私を笑わせようしてくれて...

本気で私と結婚しようと思っていて... ムリだってわかってるのに...

それをずっと隠していて... あなたの中に...

こんなに愛されて...

だけど...

私が言えるのは、

「アイ・ラブ・ユー」

それだけなのよ....。

## 5日間だけの

---

今日のお弁当は、ミニハンバーガーよ。

美香が幼稚園のとき好きだったの。ロールパンにレタスとトマトと味付けしたハンバーガー。それを二個と卵のを一個。昨日マッシュポテトを作ったときに作っておいたポテトサラダ。あとはフルーツとコンソメジュリエンヌ風スープ、野菜を千切りにしてチキンスープで煮ただけ。

昨日のお弁当はきれいに食べてくれてたわ。それが答えよね。

残してきたら、これは好きじゃないのねってわかるもの。

世の中の妻や母親はそうやって答えを見つけるのよ。

この苦労わかってくれる？ お弁当作るようにならないとわからないわねえ。

今日のメモは... 今日のメモは... ゆうべのことが頭にチラついちゃって...

ダメダメ、工作中に余計なこと考えさせちゃダメよ。

“Have a beautiful day!”

これでいいわね。

「Good morning」

「グッドモーニング」

ゆうべのことはなかったみたいに、いつもと同じ顔でコーヒーを入れてるわ。

あら？ ネクタイがちょっと... 朝食食べたあとでいいわね。

「What are you gonna do today?」

今日は何をする予定か？

「セიმ・アズ・ユージュアル」

いつもと同じよ。

「Are you gonna find something new today?」

何か新しいものを見つけるのか？

なによそれ？ わざわざ探したわけじゃないわよ！

「アー・ユー・ハイディング・サムシング?」

他に隠してるものでもあるの？

「Nothing! You can look for whatever you want!」

なんでも探していい？ そんなことしないわよ。

「Oh! Don't look at my under wears!」

下着は見るな？

「アイ・シー・ユア・アンダウェア、エブリデー」

「I know you love my sexy under wears!」

どこがセクシーよ!? フットーのパンツじゃない!

よかった、ふつうに、いつもみたいに会話できて。

「Romie」

「イエス？」

なに? なんで黙ってジッと見てるの?

「ホワット？」

「Ah... I'll be back around 5:30」

「オーケー」

あら? お皿、片づけないの? いいけど。

そうね、昨日は初日だったから休暇のときと同じ感覚だったのね。

ン?

なに?

なんで背広つかんでこっち見てるの?

「ホワット？」

「Come on! You got to help me!」

ヘルプ? なにを?

「ホワット？」

「You have to help me to put on a jacket」

ジャケットを着る手伝い?

だって、ジャケットのことは心配するなって言ったじゃない。

「I'm your husband」

え?

「Until you go back to Japan」

私が日本に帰るまで...

そう言っておどけた顔してみせるあなた...

それが... あなたが出した答えなのね。

「イエス」

あと5日だけは、私はあなたの妻だから...

背広を着せて送り出すわ。

「あ！ ランチボックス！」

「Oh, yes! I don't want to starve to death!」

餓死したくない？ 大げさね。

「I love you」

チュッて...

そうね、昨日は初出勤だったから、あんなだったのね。

こうやって日常になって... そして...

ドアが閉まったわ。

今日は戻ってこないのね。

そうよね。

私が日本に帰るまで... そう決めたんですものね。

決めたっていうか、それしかないんだもの。

わかってるのに...

なんで...

日本に帰るまでって言われたとき...

ズキンッてしたの？

わかってるのに...

どうしようもないって...

わかってるのに...

いないって...

でも...

ドアを開けて外へ...

え？

なんで立ってるの？

きっと私もダニーと同じような驚いた顔してるんだわ。

なんでまだいるの？って、なんだか聞けなくて...

「ダニー」

「Yes?」

「ユア・ネクタイ」

ネクタイが曲がってたの。

直したわ、まるで奥さんみたいに...

見上げたら...

ダニーが...

私のこと愛しいそうにちょっと淋しそうな目で見ていて...

抱きしめた... すごく強く...

そうして欲しかったの... すごく...

何か言いたかったけど、言えなくて...

「ドライブ・ケアフリー」

「I will, honey」

本当に言いたいことは心の奥深くにあって、外に出てこないわね。

ダニーが運転席から手を振って、通りを曲がっていったわ。

ドアを閉めて、部屋を見渡すと...

昨日より淋しくはないわ。

でも、昨日より...

なんで悲しいの？



食器を洗って片づけて...

夕食は何にしようかしら？ ペペロンチーノ？ 食べたい！

ダニーは辛いのがダメかしら？ いちおう作ってみてダメだったらミートソースを出すわ。

あとは、カプレーゼ！ トマトとモッツアレラのサラダ！ 好きかしら？

それと、ポークソテー？ ローズマリーやタイムに漬けておいて、イタリア風なんてどう？

なんで私、日本食じゃなくてイタリアンが食べたくなっちゃってるのかしら？

ああ！ きっと、あのうどんみたいなパスタから解放されたからだわ。

なんとなく寝室に行ってみたら、相変わらずちゃんとベッドメイキングしてあるわ。

なんとなく...

あの下着の入っている引き出しを開けたら...

もうあの封筒はないわ。

捨てたのね。

ホッとすることはなのに... なんなの？

なんだか断ち切られたような気持ちがするのは...

宇宙旅行の切符より現実性がないのに...

遠くに感じてしまう...

なんだかもう彼との終わりを見てしまったみたいなの...

終わるのよ、あと5日で。

こうやって少しずつ離れていった方がいいんだわ。

こうやって少しずつ現実に戻っていった方が...

引き出しを閉めて、寝室から出たわ。

## 爆発

---

ゆうベダニーからもらったノートに、スロー・クッカーで作れそうな、  
ダニーでも作れそうなレシピをいくつか書いたわ。

作るかしら？

お気に入りの背広を着ていたかったら作るべきよ。

今何時？ まだ10時過ぎ？

まだ...

若い頃は「まだ」なんて思ったことなかったわ。

もうこんな時間？ だけだったわよ。

美香の幼稚園の送り迎えとか、お習い事に連れていくとか、宿題見てあげてたら、

「もうこんな時間？」って、焦って夕食の準備してたわ。

いつから「まだ」になったのかしら？

美香が中学になったくらいからかしら？ 部活で帰りが遅いし、おとうさんもいつ帰ってくる  
のか、

夕食作って待ってるだけだったわ。

若い頃は自分が家庭を回している気持ちになってたわ。

でも、いつからか、私はこうやって座ってるだけで、私の時間は止まってて、

まわりの時間だけがまわってるの。私はただ待ってるだけ。

日本に帰ったらまたそうなるのかしら？ そうよね、ここにいてもこうなんだもの。

何か習い事でもした方がいいのかしら？ 何をすればいいの？

茶道？ 興味ないわ、それに茶道ってけっこうお金がかかるって近所の奥さんが言ってわ。

華道？ スーパーのお花で十分可愛く活けられるわよ。

料理？ 今さら？ チキンの赤ワインソースなんかなんて作ったって誰が食べるのよ？

ガーデニング？ あの狭い庭で何ができるの？ だいたいもう体力がないわ。

若い頃はね、やってみたいことはあったのよ、映画の影響だけど、社交ダンス。

近くのカルチャーセンターであったのよ。でも、それって、たいてい夕方からとか夜で、

日中のクラスは詩吟とか、なんだっけ史跡研究とか？ 興味ないわ。

夕食の準備...

今日はダニーから電話はかかってこなかったわ。

まあそうよね、昨日は初日だったからよ。

今何時？ 5時20分、もうすぐ帰ってくるわね。

もうすぐ7時よ、まだ帰ってこないわ。

電話もないし。

何かあったのかしら？ 何かあったら電話かけてくるわよね？

電話もかけられないような状況？ 事故？ でも、事故だったら警察とか病院から...

かかってこないわよ、私、奥さんじゃないんだもの。

つまり、ダニーが電話できないほど、意識がないくらいの事故に遭ったってこと？

事故に遭ったとは限らないわ、事故じゃないわよ、大丈夫よ。

それじゃ、なんで電話がないの？

あ、帰ってきた！

「ダニー！ ホワット・ハブン？」

「Nothing. I just... I had a work to do」

仕事... 仕事だったのね、そう、仕事、だから遅かったのね、そうよね、仕事だもの。

仕事ならしかたないわ、忙しかったのね、仕事だもの、トイレに行く暇もなかったのかしら。

トイレって2～3分はかかるわよね、トイレくらいは行くわよね、仕事で遅くなるって

電話するのって15秒あればできると思うのよ、でも、そんな暇もなかったってことよね、

仕事ですもの、帰るのが遅くなるなんていちいち電話してられないわよね、そんなこと、

どうでもいいことだもの、仕事だもの。

なんだか... ずっと前にもこんなこと考えたような...

「Romie」

え？

「ホワット？」

「Help me to take off my jacket」

上着を脱ぐのを手伝え？

「ホワイ？」

「It's your duty, right?」

私の義務... 妻の義務... そうよ、妻の義務よ...

「ダニー、ドゥ・ユー・ノウ、ホワット・ドューティー・イズ？」

義務って何かわかる？

「Sure」

「ノー！ マン・ドント・ノウ！」

男にはわからないわよ！

「What do you mean?」

「デューティー・イズ、ホワット・アイ・ハフ・トゥ・ドウ、ナット・アイ・ワント！」  
やりたくてやってたわけじゃないのよ！

「ユー・ワーク、イエス、ワーク・イズ・インポートANT・フォー・マン」  
確かに仕事がいちばん大切でしょうよ！

「でもねっ、アィム・ナット・ソファ！」

「Romie, what do you want to say?」

何が言いたいか〜っ？

「ソファ・イズ・ゼア、ノー・ムーブ、ジャスト・ウェイト・ユー・シット」  
私はソファじゃないのよ！

「Romie, I can't get the point」

ポイントがわからないいいっ？

「ユー・アー・ライク・マイ・ハズバンド！」

そうよ、おとうさんみたいよ！

「What?」

「美香ズ・ファザー！ アイ・ラブ・ヒム、でも、アイ・ドント・ワント・ヒム、アゲイン！」  
もうたくさんだわ！

「アィム・ナット・ステューデント！ ナット・ソファ！」

ずっと私...

「アイ・リタイヤー・ワイフ！ ノーワイフ！ エニモア！」

バーンッとドア閉めて、自分の部屋よ。

新たな自分発見だわ...

新たなじゃないわ、本当の自分だわ...

私... ずっと我慢してたんだわ...

仕事なんだからとか、仕事してるのに、遅くなるなら電話してって言うのは、

そういう奥さんは奥さんとしてどうなの？とか...

仕事と私とどっちが大事？なんて考えたこともなかったわ、仕事に決まってるもの。

でも、それじゃ私は何？ お手伝いさん？ お手伝いさんならお給料もらえるわ。

お手伝いさんはまだ人間よ、そうよ、ソファみたいに、そこにあるのがあたりまえみたいなの？

ちがうわ、ソファ以下よ！ ソファはそこにあるだけでいいんだもの。

私は何かしてないと存在価値なんかはないのよ！ 養ってもらってるんだからって。

そりゃ、おとうさんのことは大切だったわ、死んだときには悲しかったし淋しかったわ。

でも、おとうさんはもう死んだのよ。また同じことしなきゃいけないの？

もうたくさんよ！ もう若くないんだもの、家事だって若いときみたいにできないわ。

だから、私、結婚なんかしたくないのよ！ もう妻の義務なんてやりたくないの！

「Romie」

来た、おとうさん2号。

「May I come in?」

「ノー」

「Please」

「ノー」

「Romie」

「アイム・ナット・ユア・ワイフ！」

「I know, you are not my wife」

ごはん食べたかったら、勝手に自分で温めて食べれば？

「Romie, I want to talk with you」

話がしたい？ 遅くなるって電話もしなかった人が？

「アイ・ドント・ワント・トーク！」

話なんかしたくないわ！

バチンと電気消して布団にもぐったわ。

ドアが開く音がする。

私はあなたと話もしたくないし、顔も見たくないのよ！

静かにドアが閉まったわ。

お風呂に入ろう。

お風呂からあがったら... 8時半。

もう寝るわ。

明日からはもう何もしないわ、したくないわ。

年をとるとね、ずーっと眠ってられないのよ。

目が覚めちゃった、3時か。

もう寝てるわね。

会いたくないもの。

キッチンに行ってお水を持ってこよう。

パチンと電気をつけると、カウンターの上にお弁当箱が洗って置いてあったわ。

何の真似？ 私の機嫌をとりたいから？ どうでもいいわ。

パチンと電気を消して部屋に戻ったわ。

## NO MATTER WHAT

---

目を開けたら、時計は8時10分。

あと20分で仕事に行くわね。

私はもう何もしないわ。

お昼だって、マックでもピザでも好きなもの食べればいいじゃない。

好きだから作ったのよ、あなたに喜んで欲しくて。

でも、そんなことは妻の義務になって行って、あたりまえになるのよ。

もうたくさんよ。

だいたい私はあの人の妻じゃないわ、妻になんかなりたくないわ。

奥さんになりたいって言ったのは、ずっと傍にいたかったからだけよ。

でも、奥さんになるってことは、つまり妻の義務の日々になるってことよ。

ずっと座って待っている日々ってことよ、いろんなこと我慢して、夫の仕事がいちばんで、仕事って言われたら何も言えなくなる日々ってことよ。

ドアが閉まる音がしたわ。

出かけたのね。

嫌われたっていいわ。

だってあと5日だけだもの。

そうしたら、もう二度と会わないんだから。

顔を洗ってキッチンに行ったら、お弁当箱はカウンターの上。

コーヒーだけ飲んで行ったのね。

そうね、私がいなくなったら、またそうなるんだから、ううん、今日からそうよ。

私はいないのよ、ここにはいないの。

バナナブレッドを作ったわ。

あの人のためじゃないわ。

バナナが熟れてたのと、暇だったから。

四個作ったのよ、バナナがいっぱいあったから、一個作るのも四個作るのも手間は同じよ。

あの人に食べさせないわよ、ただ暇だから作っただけなんだから。

明日の私のおやつにするわ。あとは... 捨てる？ これをどうしようと私の勝手よね？

そうよ、私が作ったものをどうしようと私の勝手なんだわ。

義務じゃないんだもの。

ああ！ なんだか自由だわ！

なんでここで料理するようになったんだっけ？

あ、着いた夜にマックに連れていかれて、次のお昼がピザで、

こんなもの食べてたら死んじゃうと思って、スーパーに連れていってもらって作ったんだわ。

あの人のためじゃなかったわ、自分のためだったわ。

ここに来てから... 料理するのが楽しかったわ、だって義務じゃなかったから。

朝食を作らなかったときだってあったわ。ピクニックのときは、どこかのお店で調達して、

ダニーが作ってくれたこともあったわ...

でも、仕事が始まったら...

ダニーに作ってほしいってことじゃないけど、すべて仕事がいちばんになるのよ。

それでいいじゃない、そうすれば。

私はもうそんなことに合わせて生きたいとは思わないわ。

ソファに座って...

なんだか昨日とは違うわ...

「まだ」って思ってないわ。

私の時間なんだわ、本当は今までもそうだったんだわ。

でも、私の時間も、おとうさんや美香のものだと思ってたんだわ。

ダニーと一緒にいたときは... 考えもしなかった... 二人でいるのが楽しかった...

でも、ダニーが仕事に行くようになって... 私の時間が消えたんだわ、私の中で。

いい天気ね。

庭に出てみる？ あの草ぼうぼうの庭？

それより、ゆっくりお風呂に入って、パックしてお昼寝なんてどう？

待って待って、えっと、これってCDプレイヤー？ CDなんてある？

ある...けど、知ってるのがないわ。これは... BADFINGER? なに？ かけてみる？

あら、なんだかビートルズみたい。知らない曲だけど懐かしい感じ。

踊っちゃう？ 誰も見てないから踊るわよ。

短大のときに、友だちに連れられてたまにディスコに行ったわね。楽しかったわ。

何十年ぶり？ 明日身体ガタガタかしら？ どうでもいいわ、なんか楽しい。

私が踊るなんて、美香もおとうさんも見たことないのよ、でも実は踊るのよ、ヘタだけど。

若い頃は、料理作ったり掃除しながら踊ってたわ。

次の曲になったわ、これ... なんとなくしかわからないけど、悲しい歌詞ね。

あら？ これ聴いたことがあるわ... あれじゃない？ リビビデュダデュ〜っていうやつ。

なんだかイメージが違うわ、すごくシンプル、これ好きだわ。

なんていう曲？



WITHOUT YOU

君なしで...

もういいわ、お風呂に入っ

「ギャ————ツ！」

だ、だれっ？ えっ？ なにっ？ だれっ？ なにっ？

え？

「I'm sorry, I didn't mean... to scare you」

なんで？

なんで？なんで？なんで??????

今 何時？ 2時 2時っ？ なんで？

なんでもいいわ、お風呂に入ろう。

「Romie! Wait!」

なによ？ 腕つかまさないでよ！

「We need to talk!」

我々は話す必要がある？

「アイ・ハブ・ナッシング・トーク」

話すことなんて何もないわ。

「I have」

腕をつかまれたままソファに座らされたわ。

私の横に座ってるけど、そっちなんか見ないわ、言いたいことがあるなら勝手に言えば？

「Romie, look at me」

自分の方を見る？ イヤよ！

あ、私のひざのところに、真ん前に、絶対顔なんか見ない！

「Romie, I'm sorry I misunderstood」

誤解してた？ どうでもいいわよ。

「I've thought you wanted me to do like your husband did」

私が... ハズバンドがしてたみたいに... してほしいと思ってた？  
どうということ？

「You didn't let me wash dishes before I went to work」

仕事に行く前に... ディッシュを洗わせなかった...

「You helped me to put on my jacket and tried to take off」

ジャケットを着るのを手伝って、脱がせようとして...

「When I called you, you sounded like... a kind of upset」

電話したとき、腹を立ててるみたいな感じに聞こえて...

「You kept telling me, go back to work」

仕事に戻るように言い続けた...

これはなに？ 私は責められてるの？ 私が悪いの？

「ホワイ？」

「What？」

「ホワイ・ディド・ユー・ドウ、ライク・マイ・ハズバンド？」

「I wanted you to do what you wanted to do」

私がしたかったことをさせたかった？

ハァッ？

だから昨日言ったじゃない！ あれは義務で、私がしたいことじゃないって！

「英語が出てこないっ！」

「Now I know you were doing what you didn't wanted to do」

今は... 私がしたくなかったことをしていたと知っている...

「ユー... カムバック... ベリーレイト、イエスタデー」

「Yes, I'm sorry, but I really had a work to do, it was an urgent」

「ア、アージェン？」

「Ah... emergency」

緊急の...

「ユー・ドン、ディドント・コール・ミー」

「I'm sorry, I was going to call you, but I thought you didn't want me to call you」

電話しようとしたけど... 私が電話してほしくないだろうと思った？

「バッカじゃない!？」

「What？」

「ドウ・ホワット・ユー・ワント！ アイ・ドント・ケア！」

勝手に好きなことすればいいわよ！ どうでもいいわ！

「What do you mean?」

「アイム・ナット、ワイフ！」

「I know you are not my wife」

「アイ・グラデュエイト・フロム、ワイフ！」

そうよ！

妻からの卒業よ！

「ナウ、アイム・フリー！ アイム・ジャスト・ウーマン！」

そうよ、私はもう誰かの奥さんとか、そんなのはイヤよ！

だから、好きなことするわ！

「アイ・アスク・ユー」

聞きたいこと聞くわ！

「Sure, ask me anything」

なんでも？ 驚くわよ？ ていうか、呆れるわよ？

「ホイッチ・ドウ・ユー・ラブ、ワーク・オア・ミー？」

私と仕事とどっちが大事？ 最大級のバカな質問よっ！

「That is the most stupid question」

そうよ！ 知ってるわよ！

「You! You are the only one I love」

え...

「イ、イフ、アイ・ドント・クック？」

「It doesn't matter」

「イフ、アイ・ドント・ウォッシュ・クローズ、クリーニング、えっと」

「Romie, I love you」

「ホワイ？」

「Why? Because I love you」

なぜなら、愛してるから... 答えになってるようで、なってないようで...

「And I love your dancing」

ン？

「You are a great dancer」

えっ？

「ホ...エン、ユー... カムバック？」

「When you were dancing 'NO MATTER WHAT」

「ホワット？」

「This song」

えっと...

えっ？ ディビィビデュダデューの前から————っ!?

「アイ・ヘイト・ユー！」

「I don't care. I love you」

な、なによ、その余裕、みたいな？

え、ていうか、ちょっと待って。

「ホワイ・ユー・カムバック？」

「Because I wanted to see you」

私に会いたかったから...

いやいやいや、

「ワークは？ ユー、ハブ・ワーク」

「I don't care」

いやいやいや、

「アイ・ケア！」

「Why？」

ホワイって、気にするでしょ？

「You graduated from being wife, right？」

「イ、イエス、でも、アイ・ケア」

「Don't worry」

「アイ・ウォーリー、ビコース、ビコース...」

だって...

「アイ・ラブ・ユー」

負けた...ってカンジ。

でも、いいわ。

あなたの目が、愛しそうに私を見て、微笑んでるから。

負けてあげる。

## To be or not be

---

よく考えたらね、なんで私がダニーの仕事のことを心配しなきゃいけないのって話よ。だって48歳よ？ しかも、自分の法律事務所を持ってるくらいなのよ。そんな人が大切な仕事を放っばらかしにするとは思えないわ。昨日だって緊急の仕事が入ったら、ちゃんと残業してきたじゃない？ 電話してこなかったけど、わけわかんないこと勝手に思い込んで、バカじゃない？ それは今はいいわ。だから彼が大丈夫って言うなら大丈夫ってことなのよ。

「Coffee?」

「イエス」

でも、いちばん信じられるのはね、私が男を破滅させるような魔性の魅力なんかないってことよ。  
それがいちばん安心できる根拠だわね。

「Romie, you baked Banana bread!」

え？

あ！

あわててキッチンに行ったら、嬉しそうな顔してるけどね、ちがうわよ。

「イツツ・ナット・フォー・ユー」

「You made four」

そうよ、4個分バナナがあったんですもの。

「オール・イズ・マイン」

全部私のものよ。

「You can give me one」

フッフッフッ、絶対あげないわ。

「ノー」

「You're smiling like a devil」

悪魔みたいにスマイルしてる？ ますます絶対あげないわ。

「You know what?」

知ってるか？

「ホワット？」

「I love to be tempted by this sweet devil...」

チュッはいいけど... なんて言ったの？

ていうか、今キスしながら1個、自分の方にズリズリッて寄せたわね。

「アイ・セイ、ノー」

ズリッて戻したわよ、あげないって言ってるでしょ。

「Yes, you do」

またズリッて...

「ダニー」

「Yes?」

「ホイッチ・ドウ・ユー・ラブ、バナナブレッド・オア・ミー？」

「Banana bread」

絶対そう言うと思ったわ。

なによ、そのイタズラっ子みたいな目？

そんな目をして、今日はダメよ、バナナブレッドは1日置いた方が美味しいんだから。

「ナット・トゥデー、アイ・ギブ・ユー・トゥモロー」

「Oh! You made them for tomorrow!」

明日のためっていうか、明日食べた方がいいのよ。

でも、まあそうね。

「イエス」

「You didn't have to」

やらなくてもよかった？

いいでしょ、べつに誰かのために焼いたわけじゃないんだから。

「アイ・ハブ・タイム、アンド・バナナ、だから、アイ・メイド」

暇だったし、バナナが熟れてたから焼いただけよ。

なにその目？ よくわからない？

いいわよ、わからなくても。

ダニーは普段着に着替えて、私の横で本を読んでるわ。

今何時？ 4時。

わかるかしら？

私... 今ものすごく葛藤してるのよ。

夕食を作るべきかどうか。

まだ時間的には余裕があるけど、時間が問題じゃないのよ。

私は昨日引退宣言したのよ。

妻の義務はもうしないってね。

でも、夕食は食べるでしょ？ ダニーはお昼どうしたのかしら？

それはどうでもいいわ、なんとかしただろうし、もう過ぎちゃったことなんだから。

私が今また夕食を作ったら、私、また同じこと繰り返すってことよ。

でも、夕食はどうするの？ ピザやマックはイヤよ。私の分だけ作る？

私の分だけ作って、ダニーの前で食べるの？ そんなひどいこと、人間としてどうなの？

「What are you thinking?」

何を考えてるか？

だからね、どうしたらいいのか...

「アイ・ドント・ノウ」

「You don't know what you are thinking?」

「アイ・ドント・ノウ、どうしたらいいのかって... ホワット・トゥ・ドウ」

「What to do... Do what?」

何をすって、したらいいのかどうなのか...

「メイキング・ディナー」

「You don't know...what you want to make?」

何が作りたいのかわからないんじゃないかと...

なんていうのかしら、今の気持ちは...



「“To be or not to be, that is the question”」

「Hamlet?」

そうそう、ハムレットみたいな気分よ。

あれは、生きるべきか死すべきか、それが問題だって言ってるって説と、復讐すべきかせざるべきかって説と、まあ、どっちでもいいけど、どっちにしたらいいのか悩んでるってことよ。

「What do you mean?」

どういう意味？ そりゃそうよね、わからないわよね。

「Ok, don't think about it」

考えるな？ そうはいかないでしょ！

「I'll make it」

あなたが作る？

そう...ね、そうすれば...私は悩む必要はない...のよ。

でも...

ちょっと、聞いてみたいだけなんだけど...

「ダニー」

「Yes?」

「ドント... ユー・ワント・イート・マイ・クッキング?」

ただ聞いてみてるだけよ？ 私の料理を食べたいとは思わないのか、聞いてるだけ。

「I don't want you to be Hamlet」

ハムレットにしたくない...

んっとね...

そういう答えじゃなくてね、なんて言えばいいかしら？

「ドウ・ユー・ライク・マイ・クッキング?」

「What do you mean?」

どういう意味？

簡単な質問文でしょ？

「If you don't want to cook, you don't have to」

料理したくなかったらしなくていい...

だからね、料理がしたくないかって言われたら、したくないってわけじゃないんだけど、私がしたくないのは、ずっとやってた妻の義務っていの？ それであって、料理自体がどうのじゃなくて...

「Romie, you don't have to cook」

料理しなくていい...

だからね、私が料理しなくていいとかそういうことじゃなくて...  
あなたはどうなの？ってことよ。

「Romie, I'll make dinner, so don't think about it」

じゃなくて！

「ドウ・ユー・ワント・イート・マイ・クッキング、オア・ナット、ザット・イズ・ザ・クエ  
スチョン！」

どうなのよっ？

「I do」

ほら、簡単な質問でしょ！

わかったの。

簡単なことだったわ、好きな人に私の料理を食べて欲しいって、それだけだったのよ。  
ほら、こうやって目の前で美味しそうに私の料理を食べてるのを見るのが好きなの。

「Your cooking is... Heaven!」

私の料理は天国？

大げさね。

「I ate Big Mac for lunch today」

ハ？

「It was... Hell!」

この人...

「You changed my sense of taste」

笑ってるけどっ

「ユー！ イート・マイ・ランチ・トゥモロー！」

「Are you going to make my lunch tomorrow?」

「ドウ・ユー・ワント・マイ・ランチ、オア・ナット？」

「I do」

まったく、私がこの二週間、あなたの身体を考えてやってきたっていうのに、ビッグマック!?

「Romie」

なにっ？

「ホワット？」

「I love you」

「イフ・ユー・ラブ・ミー、イート・マイ・クッキング！ ノー・ビッグマック！」

「I love your cooking」

私の料理を愛してる？

私はね...

「アイ・クック・フォー・ユー、ナット・ビコース・デューティ」

あなたには義務で作ってるわけじゃないわ。

「ビコース・アイ・ラブ・ユー」

あなたのきれいな茶色の目が、そうやって、嬉しそうに愛しそうに私を見てくれるからよ。

簡単な答えだったわ。

ハムレットも、あんまり考えすぎない方がいいわよ？ 余計なお世話だけど。

## 半世紀!?

---

ほらね、お弁当作るつもりだと、目覚ましが鳴る一分前に目が覚めるのよ。

これだけはしかたないわね、長年の習慣ですもの。

ダニーはまだ眠ってるわ。

起きたときに傍で誰かが眠ってるっていいわね、誰かって誰でもいいわけじゃないけど。

今日のお弁当はフライドチキンよ、から揚げじゃないのよ、味付けが洋風なだけ。

炒めたブロッコリーやインゲンもたっぷりね。それと、コールスロー風サラダ。

千切りキャベツにニンジンも千切りにして、レーズンを入れて、マヨネーズと、

塩・胡椒で出来上がり。塩気とレーズンの甘味がたまらない組み合わせなのよ。

あとは、ビスケットっていうパンを入れて、フルーツとで出来上がり。

どうしよう？ バナナブレッドも入れてあげる？ おやつにいいんじゃない？

「Good morning」

「グッ...」

あら？ なんで普段着？ 今日も会社よね？

「Are you making my lunch?」

そうよ、昨日そう言ったじゃない。

「I'm gonna take a break...」

テイカブレイク？

「ホワット？」

「Ah... I'm not going to work」

仕事に行かない？

「ホワイ？」

「Why? Because... Oh!」

ン？ なに？ 目の前に立って...

「Happy birthday, Romie」

チュッ

え？

ハッピーバースデー...

えっ？

「ホエン・イズ・トゥデー？」

「What is the date of today? It's 20th of August」

トゥエンティー... 20... オーガスト... 8月

あっ！

私の誕生日だわ！

すっかり忘れてたけど...

50歳

とうとう 50歳

実感ないけど、50歳

49と50って、響きが全然違うのね...

「What are you thinking?」

何考えてるって...

「アイム... オールド...」

笑ってるけど、50歳って初老に分類されるのよ？ 老がつくのよ？

「Ok, you are old and gorgeous」

オールドでゴージャス？

全然嬉しくないっ。

「So, what do you want to do today?」

今日は何をしたいか？

何をしろっていうの？ べつにないわよ。

ていうか、

「ホワイ・ユー・ドント・ゴー・トゥ・ワーク？」

「Because it's your birthday!」

私の誕生日だから仕事に行かない？

ハァァァッ？

「マイ・バースデー・イズ・ナット、えっと... あ、パブリック・ホリデー」

キリストさんが生まれたってわけじゃないのよ。

「I know, but it's very special for me」

スペシャル？

もうっ、これだから男って！

女はね、45歳を過ぎたら、誕生日はひっそりと何もなかったようにしたいのよ！

少なくとも私はね！

って、英語でなんて言えばいいの？

えっと、ちょっと待ってよ、えっと、あ、そうね。

「イツツ・マイ・バースデー」

「Yes」

私の腰に手を回してるけど？

「アイ・ワント・ユー、ゴー・トゥ・ワーク」

「What?」

「ゴー・トゥ・ワーク」

目をパチクリさせてるけど、いいから仕事に行って。

「May I ask you why?」

「ノー」

英語で説明できないから、仕事に行ってって言うてるのよ。

背広に着替えて朝食食べてるわ。

ときどき、私のことを首かしげながら見てるけどね。

いいのよ、私の誕生日なんだから好きにさせて。

あ、バナナブレッド、いっぱいあるから事務所の人にもあげる？

何人いるのかしら？ いるのかしら？ 一人でやってる？ 事務の人くらいはいるわよね？

「ダニー、ハウ・メニー・ピーポー・ドゥ・ユー・ハブ?」

「What do you mean?」

どういう意味って...

「ハウ・メニー... あ！ スタッフ！ ドゥ・ユー・ハブ、ユア・オフィス?」

なんで会社のことになると、英語がメチャクチャになるのかしら？

「Six」

シックス... 6... 6人もいるの？ 6人も養ってるってこと？ 養ってるわけじゃないけど。

「Why?」

「キブ・ゼム、バナナブレッド」

「No」

「ノー？」

そういうことは弁護士事務所では収賄とかになるのかしら？

「I'm just kidding」

からかったって、あのね、私は弁護士事務所のことにはわからないんだから、本気にするわよ。

「Thank you, they'll love your banana bread」

あ、そう。

お弁当とスライスしたバナナブレッドと紙ナプキンを入れた袋を持たせたわ。

「Are you sure?」

「ホワット？」

「Do you really want me to go to work?」

まだ言ってる。

「イエス」

「May I call you?」

電話してもいいか？

「イエス」

「May I kiss you?」

「ホワイ・ユー・アスク？」

「Because it's your birthday, I want to do what you want me to do」

私の誕生日だから、私が彼にしてほしいことをしたい...

これは...

罨だわ。

私がイエスって言ったら、私がしてほしいって思ってるってことになっちゃうわ。

「ノー」

「Ok」

結局チュッとするなら、なんで聞いたのよ!?

いいけど。

10回くらいチュッとして出かけたわ。

2回はチューーーッくらいだったけど。



さてと...

どうしたらいいの？

いちおうご馳走みたいなのを作った方がいいのかしら？

私の誕生日だから仕事を休もうとまでしたのよ。

帰ってきて、たとえばよ？　たとえば、塩ジャケとお豆腐のお味噌汁だったらガッカリよね？

塩ジャケとお味噌汁を作るってわけじゃないけど、なんていうのかしら、ふつうの食卓の絵？

でも、今まで私の誕生日って、そんなものだったのよ。

おとうさんや美香の誕生日にはご馳走作ったけど、自分で自分の誕生日のご馳走作ってもねえ。

でも、ダニーはスペシャルとか言ってたから、スペシャルにした方がいいのかしら？

アメリカの主婦って、自分の誕生日はどうしてるのかしら？

ちょっと待って。

主婦とか妻とか、引退宣言したじゃない！

自分がどうしたいかよ、そうよ、どうして自分で自分のこと言い聞かせてるのかしら？

私はどうしたいか？

そうねえ、べつに特別なことしたいとは思ってないわね。

でも...

ダニーに喜んでほしいとは思ってるわね。

ちょっとだけ手の込んだものを作ればいいんじゃない？

ケーキは... バナナブレッドがあるから、とにかくあれさえあれば喜んでるわよ。

それにしても...

50歳。

まさか、50歳の誕生日をアメリカで迎えるなんて思ってもみなかったわ。

去年の誕生日のときなんか、そんなこと頭の片隅にもなかったわよ。

50年...

半世紀？　半世紀も生きてきたってこと？

世紀にするとクラクラするわ。

若い頃は50歳って、もっと、なんていうのかしら、ドッシリかまえてるっていうか、

すべて悟って迷いもなく、もっと余裕をもって生きてるイメージだったわ。

おとうさんが50歳になったときは、私は35歳で、私から見たおとうさんはそうだったわ。

私だけ？　50歳になっても、こんなにジタバタ、ドタバタ、惑ってるのって？

いつになったら悟れるのかしら？　今のところ先が見えないんだけど。

それより、何を作る？

ミートローフ？　ハンバーグよりは手の込んだ感じよね。

ダニーが好きそうよね？

私って...

誰かのためにしか料理作らないのね。

自分のためになんて...

めんどくさいもの。

## 一本のピンクのバラ

---

ミートローフの下準備はできたわ。三本分作ったわ。

これは冷蔵庫の中に寝かせておくわ。

デザートがバナナブレッドっていうのもどうかしらと思ったから、

ヨーグルトゼリーを作ったの、まだちゃんと固まってないけどね。

こっちの桃って小さくて黄色いのよ。それを四角く切ってバニラシュガーで和えて、

ヨーグルト・ゼリーの中に入れると切ったとき可愛いだよ。

そこにね、フードプロセッサーで桃とハチミツとバニラをちょっと入れて、

ピューレーを作ってかけるの。白にオレンジっぽい黄色がきれいなのよ。

あとは夕方でもいいわね。

そうよ、ダニーのために作ったようなものよ、ようなものっていうか、そうなのよ。

私の誕生日だからって仕事まで休もうとした人に、塩ジャケとお豆腐のお味噌汁は出せないわ。

例えよ、こんな例えしか出てこない私もどうかと思うけど。

だって、私の誕生日はずっといつもと変わらない献立だったんだもの。

美香と二人になってからもそうだったわ。

朝、美香が「おかあさん、誕生日おめでとう」って言うことができることが、他の日と違うだけ。

プレゼントだってもらわないわ。美香が小さいときは絵を描いてくれたりしたけど。

おとうさんはどうだったかしら？ あ！ 結婚して初めての私の誕生日にくれたのが、

エプロンよ、花模様の微妙なエプロン。一瞬こう思ったのよ、もっと働けてこと？って。

何を買ったらいいのかわからなかったんだらうけどね。そうよ、次の年のときは聞いてきたのよ

。

何が欲しい？って、当日の朝よ？ そんな急に言われても思いつかなかったし、

ちょうどゴム手袋が破れちゃったから、ゴム手袋が欲しいって言ったら、

帰ってきたとき、本当にゴム手袋を買ってきたわ。それってプレゼントっていうよりお使いよね

？

帰りにネギ買ってきてと同じレベルじゃない？

それで、もう私へのプレゼンとはいいからって言ったの。

おとうさんのお小遣いは私が渡してたし、結婚したら、なんていうのかしら、

どっちがどっちにプレゼントしても、同じ袋からお金を出してるようなものでしょ？

もうこの年になると、プレゼントもらって「わあ！」なんて思わないわねえ。

少なくとも、若かったけど、ゴム手袋では思わなかったわ、ビックリしたけど。

今でも憶えてるってことはインパクトはあったってことね。

あら？ 何からゴム手袋の話になっちゃったんだったかしら？ まあいいわ。

ソファに座ってコーヒー飲んで一休み。

ダニーのこと、仕事に行ってて言ったけど、仕事に行ってほしかったわけじゃないのよ。ふつうにしている欲しかったの、この横で本を読んでいてくれるならそれでもよかったの。ただ、スペシャルなんていうから。

あのとき、私の頭に浮かんだのは、よく映画で観る暗闇でパチンと電気つけると、部屋中に人がひしめいて「サプライズ！」とかニコニコして言われる場面と、部屋中にHAPPY BIRTHDAY って書いてある風船がビッシリ詰め込んである場面なの。ああいうのって苦手だわあ。

サプライズ！なんて言われても、絶対にその前にわかるわよね、やるだろうなって。知ってるのに「わあ！」なんて驚いてみせなきゃいけないのよ？ 苦痛だわあ。

ダニーがそんなことするとは思わないけど、スペシャルって言うから...

スペシャル？

たしか言ったわよね？ 君がしてほしいことをしたいって。

だったら、何の用事もないけど電話してもいいってこと？

今何時？ もう少しで一時？ お昼休みが終る頃かしら？

電話しちゃおうか？ いいわよね？ スペシャルなんだから。

#と1を押して...

トルルウウウ トルルウウウ カチャッ あ！ え？

何か言ってるわ、これって、多分あれよね？ 英語だからよくわからないけど、“おかけになった番号は電源が切れているか電波の届かない...”って、多分そうよね。

きっと会議とか、お客様っていうの？ それね。

な～んだ、ふつうに仕事してるのね。そりゃそうよね。

私が仕事に行ってって言ったんだから、そうよね。

まあいいわ、声が聞きたかっただけで、用事があったわけじゃなかったんだもの。

あ、電話。

“Thank you for calling. I'm sorry but I can't answer your call right now.

Please leave a message after the tone. I'll get back to you as soon as possible”

ピーッ

「Romie, I know you're sitting on the sofa」

ソファに座ってるのはわかってる？ そりゃそうよ、この時間はいつもここだもの。

なんで電話を取れって言わないの？ 忙しいのね。

「Oh, you don't look like happy」

しあわせそうに見えない？ な～に言ってるの。

「Now you're lying down the sofa」

えっ？ なんで私がソファにゴロンとしたのがわかったの？

まさか...

防犯カメラつけてるの？

どこ？

「What are you looking for?」

何を探してるのか？ やっぱりどこかにカメラをつけてたんだわ！

ここから出ていけば見えないわよね？

「Where are you gonna go?」

どこに行くのか？ 絶対カメラ！

「Romie, open the porch door」

ポーチドアを開けろ？

え？

なんでいるの？

コンコンってガラス叩いてるけど？

知らないふりしたらどうするのかしら？

あら、いなくなったわ。

玄関？ 入ってこないわ。

また会社に戻ったのかしら？

きっと仕事でどこかに行く途中にちょっと寄ったんだわ。

開ければよかつ

「ギャ—————！」

なにになになになになに？ 後ろからなにかがガバッと抱きつい...

「I'm home」

ハ？

ダニー？

「ホ、ホエア・ユー・カム？」

「From the back door」

バックドア... あ、そう。

あら？ さっき電話したとき電源がなんとかって...

「アイ・コール・ユー」

「Oh, sorry. I was driving」

運転してたから電源をオフにしてたと...

それはいいけど...

「ホワイ・ユー・アー・ヒア？」

「I did everything you wanted me to do」

私がしてほしいことをすべてやった？

「I worked, yes, I got rid of a big problem of one of my client,

I gave your banana bread to my stuff and they said thank you and happy birthday.

I ate your lunch, it was Heaven!」

早口で単語しかわからない。

「So, may I be with you?」

私といてもいいか？

「イエス」

「May I kiss you?」

「ノー」

「Ok, I won't」

え？ しないの？

「It's for you」

ダニーが後ろから出して私に差し出したのは...

ピンクのバラが1輪。

そうだわ、最初にダニーにもらったのはピンクのバラだったわ。

ダニーは憶えていたのかしら？ それとも偶然？

どっちでもいいわ。

「サンキュー！」

あなたからもらうピンクのバラが好きよ。

「ダニー、アイ・ショウ・ユー」

見せたいものがあるのよ。

「Yes？」

部屋から持ってきたわ。

「ほら」

部屋にあった分厚い本の中にティッシュに挟んで重しをかけてたの。

あのときのバラよ。

「イツツ・ピンクローズ、ユー・ギブミー、ファーストタイム」

ダニーは驚いたように押し花を見て...

「You still have this...」

そう言って私の顔を見て...

「You know what？」

なに？

「I already fell in love with you when I bought this pink rose」

え？

あのときにはもう私のことが好きだった？

「I didn't want to scare you, so I didn't buy a red rose」

私を怖がらせたくなくなったから赤いバラは買わなかった...

「Now a pink rose is the most special rose for me more than a red one」

ピンクのバラは赤いバラよりスペシャル...

「I love you, my pink rose」

そう言って...

私の好きな茶色の目で... 優しく見つめて...

その目と同じくらい優しくキスしたわ。

「It's only one, not 100, so you don't have to clean up the room」

そうね、それに、100本も押し花にできないもの。



## 女は女

---

ダニーは寝室に着替えに行ってるわ。

私はピンクのバラを空き瓶に活けてリビングのテーブルの上に置いてウツトリしてるのよ。

そうなの、ウツトリしちゃってるの。

だって誕生日にピンクのバラよ？ しかも赤いバラよりスペシャルだって言われたのよ？

私も女なのねえって思うわ。

50歳だけど...

50歳だからって女じゃなくなるわけじゃないでしょ？ いいわよね、女でいたって。

いいわよねって、誰の許可を得ようとしてるのかしら？ 世間様？

「Romie」

「イエス？」

振り返ろうとしたら電話が鳴ったわ。

ピーッ

“Thank you for calling. I'm sorry but...”

「I can't answer your call right now. Please leave a message after the tone.”

ダニーが留守電と同じことを同じ声で言ってるわ。

男って、いくつになってもおバカさんだわ。

「I'll get back to you as soon as possible.” No, I won't」

そう言いながら私の横に座って...

「Romie」

「イエス？」

誰か男の人の声が何かしゃべってるわ。

え？

ダニーが電話の方を見て...

顔がこわばってる...

何か悪い知らせ？ 仕事のこと？

『カトーサン、現地スタッフノケントデス』

え？

『日曜日ノ、ピックアップノ時間ノ確認デス。』

日曜日...

『カトーサンノトコロヘハ、朝ノ9時ニ迎エニ行キマス。 バスノ出発ハ10時デ、  
3時間半ホドデ、ニューヨークノ空港ニ着キマス。パスポートヲ確認シテオイテクダサイ』

今日は木曜日... 金、土、日... しあさって...

しあさってには... 帰るんだわ...

何を言っているのか... 何か言えばいいのか...

ダニーも私の横で黙ったまま...

さっき何か言いかけてたわ。

何か言わないと...

「ダ、ダニー、ホワット・ユー・ワント・セイ？」

「Ah... It's not... It's not the right timing」

正しいタイミングじゃない？

何が？

「ホワット？」

「Not now」

今じゃない？

何の話？

「ホワット？」

なにその、目でわかってくれみたいな？

わからないわよ！

「ホワット？」

フウ〜って...

「I have a present for you」

プレゼント？

「バースデープレゼント？」

「Yes」

「ユー・ギブ・ミー、ピンクローズ」

ほら、これ。くれたじゃない。

「It's like...an hors oeuvre」

「アンノードブ？」

「Ah... not a main dish」

メインディッシュではない...

「イツ・ナット・メインディッシュ、それじゃ、ホワット・イズ・メインディッシュ？」

「That's what I'm going to give you」

今からあげようとしているもの、あ、そう。

「Romie」

「イエス？」

「Don't be scared」

怖がるな？ 怖がるようなものなの？

なにになになにーっ？

「Oh, no... You're already scared」

だって怖がるようなものって言うからあっ！

「ホワット・イズ・イットっ？」

「Romie, don't be scared, it's just a birthday present」

怖がるな、ただの誕生プレゼントだ？

だからなによーっ？

「ホワーーーット？」

「Don't be scared! Here! Look!」

逆ギレーっ？

なにこれ？ 紺色の箱？ リボンがかけてあるけど？

箱？

「ビックリ箱？」

「What?」

「あの、ほら、ほら、英語で、なんだっけ？ ほら、あ！ ジャック・イン・ザ・ボックス！」

ビックリ箱の英語が出てくるなんて奇跡だわ！

あら？ なに？ ちがう？

「ノー？」

「No」

まあそうよね、50歳の誕生日にビックリ箱なんかくれたら許せないわ。  
ゴム手袋の方が100倍マシだわ、使えるもの。

「ホワット・イズ・イット？」

「Open」

開ける？ 私が？

「ミー？」

「Yes」

「ナット・スケア？」

怖いものじゃないわよね？

「I hope...not」

そうじゃないことを希望する？

そうだってこともありうるってこと？

そうだわ！

「ユー、オープン」

「Me？」

「イエス」

「But it's for you」

「オープン！」

「Ok, ok... I will」

もしもの場合を考えて... 少し離れたわ。

箱の中から... 楕円形の入れ物... なあに？

ダニーがパカッて... 真ん中から...

え？

ゆびわ？

ダイヤ？

ピンクの透き通った綺麗な小さな石が両横に並んでる...

綺麗...

「Do you like it?」

好きか...

「イエス...」

こんな素敵な指輪... 初めて見たわ...

「Romie, I am a man...」

そう言ってダニーが箱から指輪を出して...

「A man wants to give a ring to his special woman」

男はスペシャルウーマンに指輪を贈りたいもの...

そう言って...

私の左手の薬指に...

あ！

「ウェイト！」

待って！

そんな目で見ないで。

ちがうの。

なんて言えばいいの？

「あの、キブ・ミー・タイム」

「You mean... you can't accept it?」

アクセプト、受け入れる、受け入れられない、そういうことじゃなくて...

「キブ・ミー、えっと2ミニッツ、2分じゃ... あ、5ミニッツ」

「Five minutes?」

「イエス」

「Sure」

自分の部屋に駆け込んだわ。

私...

ずっと結婚指輪をしてたのよ。

結婚してから外したことないから、美香を妊娠したときは外しなさいってお医者さん言われて、生まれるまでは外したけど、ずっとつけてたのよ、ずっと。

だから...

つけてることも忘れてたわ、この指にあるのがあたりまえになってて。

私...

おとうさんとの結婚指輪をしたままダニーと...

ダニーはずっと見てたのよ。

何も言わなかったわ。

今だって、この指輪の上にあの指輪をはめようとしたわ。

残酷ね...

私...

結婚指輪したまま、ダニーに愛してるって言って、ダニーとキスして、ダニーと...

ダニーはどんな気持ちで...

おとうさん...

私、今もおとうさんが好きよ、今も大切だと思ってるわ。

誕生日にゴム手袋買ってきても、好きだったわ。

でも...

今だけ...

ゆるしてほしいの...

しあさってには帰るから...

それまで...

ゆるしてほしいの...

結婚指輪をはずして、バッグの中に入れて...

だって...

リビングに戻ると、ダニーが私を見てるわ。

あの大好きな茶色の目で...

ダニーの横に座って...

左手を出したの...

ダニーは私の薬指を見て、一瞬驚いた顔をして... 私を見たわ。

だって...

「アイム... ジャスト... ウーマン」

ダニーは...

愛しそうな目で私を見つめて...

そして、何もついていない私の薬指に、あの綺麗な指輪をはめてくれたわ。

「I love you」

そう言って抱きしめるから...

「アイ・ラブ・ユー」

私もそう言ってダニーの身体に腕をまわして...

だって...

50歳でも、女は女なのよ。

## 誕生日の夜

---

ダニーに、いつ買ったの？って聞いたら、おとといだって言うの。

The day before yesterday って、昨日の前の日だから、おとといよね？

おとといって、たしか緊急の仕事が入ったって遅くなった日なのよ。

それはウソなの？って聞いたら、本当なんですって。朝クライアントから電話があったって。

クライアントってお客様？ とにかく、それでニューヨークまでドライブして行ったって。

仕事が片付いて、ニューヨークでこの指輪を買ったんですって。

私への誕生プレゼントに何を贈ったらいいか、ずっと考えてたって言うのよ。

美香に聞いてからずっと考えてたんですって。ベリー・ディフィカルトって言われたわ。

そうよ、私の誕生日、美香から聞いたんですって！ 前にSkypeしたとき！

美香ったらふつうの話したって言って、誕生日のことを話したなんて言ってなかったわよ？

まあそれはいいわ。

とにかく、ベリー・ディフィカルトって何回も言われたの。私ってそんなに難しい女？

聞けばよかったのになって言ったら、そんなこと聞けるわけがないだろうって。

それはそうね、聞かれたとしても、またゴム手袋とか言っちゃったかもしれないわ。

さすがにもうゴム手袋とは言わないけどね。

それでね、考えてみたんですって。

何を贈ったらいいかじゃなくて、自分は何を贈りたいのかって。

そしたら、指輪って、すぐに頭に浮かんだ...で、いいのよね？ そんなこと言ってたわ。

途中何回か書いてもらったけど。どうせなら全部書いてて言ったら、口で言いたって。

いいけど？ 私が大変だったけどね。

そしてね、この指輪を見た瞬間に、私のためのものだって思ったって言うのよ。

それですぐ買って、それからドライブして帰ってきたから遅くなったっていう話。

緊急の仕事して私のプレゼント買って長時間ドライブして私にキレられたダニー...

かわいそうだね、でも知らなかったんだもの！

私もつくづく女よねえって思うわ。

好きな人に指輪をもらうことがこんなに嬉しいなんて。

ほら、この内側に“From D to H”と、“Aug. 20 ‘13”って刻んであるの。

それに時間がかかっちゃったらしいんだけどね。

私が見て怖がるかもしれないって言ったのは、ほら、この形でしょ？

エンゲージリングだと思って怖がるんじゃないかって。

ダニーは、結婚してくれとか、そういうことは言わなかったわ。

男はスペシャルウーマンに指輪を贈りたいものだって、あの言葉だけ。

それにズキュンだったわ。



だって、たいてい男が指輪を贈るときって「結婚してくれ」が付くでしょ？  
この指輪が欲しければ結婚しろみたいな？ まあそこまでじゃないけど。

それでね、この指輪、サイズがピッタリなの！

なんで私のサイズを知ってるの？って聞いたら、どうやって知ったか想像できる？

私が眠っているときに、ソ〜ッと結婚指輪をはずして測ったんですって。

いつ？ 全然気がつかなかったわ。 イビキかいてなかったかしら？

おとうさん、あの結婚指輪が役に立ったわよ、よかったわね。

よかったのかしら？ おとうさんにしたら複雑かしら？

でも、あの世に逝ったら、そんなこと気にしなくなるのかしら？ まあいいわ。

夕食も作ったわ。

ダニーは私を、なんとかっていうレストランに連れていくつもりだったんですって。

もう夕食の下ごしらえができてるって言ったら、自分の誕生日に自分で料理する気かって。

あなたが今日はあなたにとってスペシャルだって言うから、あなたのために作るのよって言ったら、

笑ったのよ？ 「You are funny!」って！ 笑うこと？

ミートローフもいい感じで焼けたし、ニンジンのグラッセに、温野菜にマッシュポテト。

やっぱり作ってよかったわ。半世紀生きてきた記念の日だもの。

もちろんあのピンクのバラも食卓に飾ったわ。

ダニーが記念写真を撮ろうって、私だけのと、ダニーだけのと、そして二人のを、

セルフタイマーで... ダニーは10秒待てなくて私にキスしちゃって、

撮り終わってもずっとよ？ でも、トロンとしちゃったからいいわ。

もちろん、デザートのパーチ入りヨーグルトゼリーも気に入ってくれたわ。

シャワーを浴びてリビングに行ったら、ダニーがウッドデッキに出てるわ。

何を考えているのかしら？

あ、振り向いたわ。

こっちに来いって手招きしてるわ。

イヤよ。

なんでだ？みたいな顔して、ほら、やっぱりこっちに来たわ。

「Now you're clean and fresh」

フレッシュではないけどね、50年も使い続けた身体を洗ってきただけよ。

「I'm clean and fresh, too」

本当？

「You are sniffing at me! Do I smell?」

ククンて匂いを嗅いでみたの、あなたの匂いがするわ。

「イエス、ユー・アー・クリーン」

「Now I passed the physical examination!」

ン？

「You are funny」

「ユー・アー・ハンサム」

うわあ！ 真っ赤になっちゃった！ 絶対赤くなるって思ったわ！

「Naughty girl!」

あなたのガールの定義は何歳まで？ けっこう範囲が広いわね。

私の手を引っ張って、はいはい、ウッドデッキに行けばいいのね。

ボトルがワインクーラーの中に入ってるわ。

「For my Killer Queen」

キラー・クイーン？

あら、これ、MOËT & CHANDON って書いてあるわ。

ときどき、クリスマスするときとか、スーパーで売ってる小さな瓶のを買うんだけど、こんな瓶のは見たことないわ。

ポンッ

細長いグラスにシュシワシュワッと泡を立てて注がれて...

「Happy birthday, Romie」

「サンキュー」

うわっ、美味しい！

いつも飲んでるのって、キラー・クイーンがキャビネットに入れておくほどかしら？って、あんまり美味しいと思ってなかったけど、これは美味しいわ。

「Do you like it?」

「イエス！」

まさか、私の50歳の誕生日が、こんなに、なんていうの、スペシャルになるなんて！

もう一生こんな誕生日はないわね、それでもいいわ。

60歳になったら還暦だから赤いチャンチャンコもらうのかしら...

おとうさんも学校のスタッフの人たちからもらって帰ってきたわ...

赤いチャンチャンコなんて絶対イヤだわ...

「What are you thinking?」

何を考えてるのかって、チャンチャンコって英語でなんて言うの？

だいたい還暦って、日本の風習から？

「アイ・キャント・セイ」

「You can't? What are you thinking?」

言えないようなことじゃなくて、説明できないってだけよ。

しかも、くだらないことなのよ。

そんなことより、

「アイ・ワント・セイ...」

ちゃんと言いたいだよ、でも、パッと出てこないの、書けばいいんだけど、書けばいいんだわ。

「ウェイト」

ノートとペンを持ってきたわ。

このノート、スロー・クッカーと私が言いたいことのメモとゴチャゴチャになってるわ。

えっとね、ほら、書くと出てくるのよ。

できた！

「リード」

読んで。

「No」

「ノー？」

「Speak」

言え？ これを？

「Yes」

え〜... 自分が書いた手紙を超えを出して読むって、いちばん恥ずかしいわよお。

なによ、その目？ 早く読め？

わかったわよ！

「えっと、“Dear Danny”ここから読まなくてもよかったかしら、まあいいわ。

“Thank you for everything you did for my birthday.”なんでこれが出てこないかしら？

“This is the happiest birthday I’ve ever had”過去分詞だって書けば出てくるのに。

“It’s not only because a beautiful pink rose, or a beautiful ring”ここからが...

“It’s because”.... ビコーズ、ユー・アー... ウィズ・ミー」

それが... もう少しで終わるって...

もうあなたとこうして一緒にいられなくなるって...

実感が... ずっとこうしていられそうな... 無理だけど...

でも...

「サンキュー」

あなたが微笑んでるわ... 淋しそうな目で...

きっと私もあなたと同じような目をしてるのね...

あなたが私の手をとって...

あなたがくれた指輪をしている私の手を見てるわ...

「Thank you for accepting my ring, and...」

その後に何を言いたいのかわかってるわ。

私の指には、あなたからもらった指輪しかついてないわ。

今は...

## 死ぬように

---

お弁当を作ってるの。

ダニーは本当は今日は休むつもりだったんだけど、どうしても出なくちゃいけない  
コンファレンス？ とにかく、それがあから仕事に行かないとって、謝るのよ。

謝ることじゃないでしょ？ 仕事なんだから。淋しいけどね。

今日はね、小さなフランスパン、もちろんポンと開けて焼けるやつよ、その中に、  
ダニーの好きなチーズと、チキンサラダを入れたのと、ミートローフを薄く切ったのを入れた  
もの。

温野菜サラダも忘れずに。あとは、フルーツと、野菜スープよ。

これが私の作るダニーへの最後のお弁当なんだわ。

メモは...

“I love you”？ ちがうわ。

“I won't be angry even if you will come back home late.

In that case, CALL ME!”

帰りが遅くなっても怒らないから、そのときは電話して。

ふつうにしたいわ、まるで、これからも続くみたいに。

「Good morning」

この言葉の間にチュッがあるんだけどね。

「グッモーニング」

ダニーが、いつものようにコーヒーをいれて...

私は朝食をキッチンテーブルに並べて、もちろんピンクのバラを飾ったわ。

そういえば...

ダニーの誕生日っていつ？

「ダニー、ホエン・イズ・ユア・バースデー？」

「26th of December」

26日... ディッセンバー... えっと、セブテンバー、オクトーバー、ノベ... 12月、

12月26日？

それって... 微妙だわあ。

「I know what you want to say」

言いたっていうより、慰めの言葉も出てこないわあ。

クリスマスの次の日って...

クリスマスが誕生日の人もかわいそうだけど、お祭り気分出し尽くした翌日でしょ？

今までどんな誕生日だったのかしら？

お母さんも大変だったでしょうね。クリスマスが終わったばかりで誕生日の...

「What are you thinking?」

だから

「ユア・マザー」

「My mother?」

「イエス」

「Ah... Ok」

男にはわからないわよ、一大行事と子どもの誕生日が続く大変さ。

ダニーが自分のお皿を洗いにキッチンに行ったわ。

来週の月曜日からは、一人で朝食作って自分でお皿を洗うのよね。

朝食作るかしら？ せめてスムージーくらい作って飲んでほしいわ。

来週の月曜日には...

私はもうあのキッチンにはいないのよね。

なんだか... まるで... 来週の月曜日には、自分が死んでいなくなるような気持ち...

「Romie」

「イエス?」

「I'll be back as soon as possible」

できるだけ早く帰る...

そう言いながら上着を着て...

「オーケー」

私の最後のお弁当を受け取ったわ。

「I love you」

そう言って私にキスしてドアを開けた背中...

こうやって...

愛する人が仕事に行く背中を見るのは...

あ...

これが...

私の人生で最後なんだわ...

ダニーの背中に抱き着いて...

「いってらっしゃい」

そう呟いた...

これが...

今が...

私が“妻”であることの最後の瞬間なんだわ...

今だったんだわ...

ダニーが振り向いて、私の顔を両手で包んで...

「I'll be back, honey」

そうね、あなたは帰ってくるわ。

「ドント・ビ・レイト、ハニー」

遅くなったら承知しないからって顔したら、

「I won't!」

怖がってるふりして、そして微笑んで...

ダニーの車が角を曲がるまで見送ったわ。

スーツケースに、明日使うもの以外は全部詰めたわ。  
明日、ダニーがいるときにパッキングするのはイヤだから。  
このロングドレス、日本では絶対に着ないと思うけど、思い出に持って帰るわ。  
美香へのおみやげのヴィクトリアシークレットの箱、これを買ったのがすごく昔に思える。  
ダニーからもらった言葉の書いていない本も。手紙もカメの絵もね。  
こうやってパッキングしても、まだ実感が湧かないわ。

ボタンとスーツケースを閉めて、洗濯しよう。

ダニーの寝室。  
ダニーの枕に顔をうずめると、ダニーの匂いがするの。  
大好きよ、ホッとするの、いつもダニーの腕の中にいるときの匂いだから。  
でも、きっと少しずつ忘れてしまうのね。  
思い出そうとしても思い出せなくなるんだわ。  
私の枕は、私のシャンプーの匂い。  
ダニーは私を抱きしめるとき、いつもこの匂いをかいでいるのかしら。  
そして、きっとダニーも忘れるのね。  
洗おう、シーツも全部。  
忘れられる前に消してしまおう。

昔、生理があった頃ね、生理前になるとイライラして、無性にトイレが掃除したくなったの。  
更年期障害がひどかったときもそうだったわ。なんでかしら？  
そうね、こうしてると、ちょっとは無の境地になれるからだわ。  
そして今もトイレ掃除してるのよ、イライラしてるのかしら？  
だって、どうにもできないんだもの。

次はどうする？

キッチンに来たわ。  
今日の夕食は何にする？  
明日は最後の夕食ね。  
最後の晩餐みたいなのはイヤだわ。



明日のことはまだいいのよ、今日の夕食よ。

冷凍庫の中にはね、いろいろなものを作って入れてあるの。

チキンスープは病気のときに飲むって言ってたから、小分けにしてあるし、ミートソースも、昨日余分に焼いたミートローフも、バナナブレッドもよ。ハンバーグもあるわ。全部にそれぞれ何分チンしたらいいか書いておいたわ。今日はビーフシチューにするわ。いっぱい作って、それも冷凍しておくわ。これが全部無くなった頃には、ダニーは私のことを忘れているのかしら。

私...

なんだか、死ぬ準備をしているみたいだわ。

でも、そういうことよね。

この家から消えるんだもの。

そして、いつかダニーの中からも消えるんだわ。

忘れるって、いいことよね。

いなくなった人を、まだいるみたいに憶えている間は辛いけど、時間が経って少しずつ記憶から消えていくと消えていった分楽になるもの。それに、ダニーが誰かと出会ったら、私のことなんか一瞬で忘れるわ。私は傍にいないんですもの。遠く離れた、昼と夜が逆の違う国にいるのよ。それって死んだも同じだわ。

死んだ人を思い続けて生きるって、どこか空っぽな気持ちなのよ。

私がいちばんよくわかってるわ。

しあわせになってほしいわ。

私は...

また死んだ人を思い続けるように生きるのかしら。

わからないわ。

わかってるのは、あさって日本に帰るってことだけよ。

あら？ 電話？

ダニーの録音している声の後に...

ピーッ

『Romie, pick up the phone』

ダニー？

『Honey, it's me. Hello?』

こうやって...

いつか...

誰かべつの人に電話するのかしら...

『I love you, so please pick up the phone』

そんなのイヤよ...

私以外の女の人に電話しないで...

『Romie, I know you're there. PICK · UP · THE · PHONE』

私って...

「イエス」

「Romie!」

「ダニー、アイ・ミス・ユー！」

まだあなたのこと、忘れるなんてできない...

「I miss you more than you do」

私が恋しいって思ってるよりもっと？

「I'll be back in 30 minutes」

30分で帰ってくる？ 今... 3時15分...

「アイム・ウェイティング」

早く帰ってきて！

「Wait for me, I'll be there as soon as possible」

「イエス」

「I love you, honey」

「アイ・ラブ・ユー」

「See you 30 minutes later」

「イエス」

私って...

ビーフシチューの下準備しなきゃ。

嘘をつきあっても

---

わかってるのよ。

期限付きだからよ。

障害があるほど恋って燃えるっていうじゃない？

ロミオとジュリエットだって、敵同士だからあんなに燃え上がったんだわ。

これで、親がすぐに結婚を許したらどう？ 結婚式の前に冷めちゃったかもしれないわ。

若い頃の恋ってそういうものでしょ？ 熱しやすく冷めやすいっていうの？

私は若くないけど、若くないから余計に、あさって日本に帰ったら、もう一生会えないから...

だってそうでしょ？ このホームステイだって、私の簡易保険が満期になって、

全部じゃないけど、それで来れたのよ。あとは美香の結婚費用や私の老後のために貯金しなきゃ

。

アメリカになんて二度と来れないわ。

いい夏だったじゃない。ダニーと出会って、いろいろなことをして、恋をして...

恋なんてもう死ぬまで縁がないと思ってたわ。それでいいじゃない。

私の地味な人生の中に、そんなことがあったんだなあって、きっといつか懐かしい思い出になるわ。

そうよ、きっとそう。だから...

「Romie!」

帰ってきた...

ドアの前に立つあなたは...

私が一生懸命すごくすごくがんばって自分に言い聞かせたことを...

一瞬で消しちゃうのよ。

駆け出して抱き着いた。

「おかえりなさい」

あなたの腕の中でそう言うと、私の好きなあなたの匂いがしたわ。

「Romie」

「イエス？」

「Will you excuse me?」

え？

ダニーが寝室に走っていった。

どうしたの？

会議が終って、すぐに帰ってきたんですって。

運転してる途中でトイレに行きたくなかったけど我慢したんですって、早く帰りたいから。

つまり、オシッコを我慢してたわけよね。

オシッコくらいしてから帰ってくれば？

そうね、48歳のおじさんはオシッコも近くなるわよね。

そうね、現実ってこんなものよ。

一瞬にしてロマンティックな気分なんか消えちゃったわ。

なんだか気持ちが軽くなったけどね。

キッチンにシチューの煮え具合を見に行ったら戻ってきたら、

ダニーはソファで眠ってたわ。

きっと大変な会議だったのね。

ひざ掛けをそっとかけてあげたわ、夏風邪ひいたら長引くもの。

私がいなくなったら...

サラダの準備してこよう。

「Romie」

グイッて手を引っ張られたわ。

眠ってなかったの？ それとも起こしちゃった？

「Don't go」

行くな？

わかったわ、あなたの横に座るわ。

ああ、膝枕したいのね、はいはい、どうぞ。

「Tell me when you want to go to bathroom」

トイレに行きたくなったら言え？

わかってるわよ。

私の顔見てニヤッと笑って目を閉じたわ。

あなたの髪をそっとなでて、あなたの寝顔を見てると、  
ずっとこうしてられるような気持ちになっちゃうわ。  
できることなら、ずっとこうしていたい...  
だって、あなたといるとしあわせなの... 何もしなくてもしあわせなのよ...

「What are you thinking?」

目をつぶったまま...

何って...

「アイ... はああ アイ・ドント・ワント・ゴー」

それが正直な気持ちよ。

「Bathroom?」

この状況で...

あさって日本に帰る私が...

わざわざ...

トイレに行きたくないって言うっ？

いいわよもう。

「アイ・ドント・ワント・ゴー・バスルーム、だから、ユー・キャン・スリープ」

寝てなさいよ！

なに笑ってるのよ？

「スリープ！」

「Ok, I will」

この人... 確信犯ね。

朝から私が感傷的になってるのをわかってるのよ。

だから、わざとふざけたこと言って...

だったら、直撃してやるわ。

「ウィル・ユー・ミス・ミー？」

私のこと恋しくなる？

黙ってる、寝たふりしたまま。

やっぱりね。

あら？ 起き上がった。

「Romie」

え？ なんで睨むの？

「I'll go to bathroom」

ああ、トイレ。

なかなか戻ってこない。

まさか...

倒れてる？

おとうさんもトイレで倒れてたことがあったわよね。

あとから考えると、あれが最初の発作だったんじゃないかって...

「ダニー！」

寝室にはいないわ。

やっぱりトイレ？

「ダニー！」

物音がしない。

ウソ...

「ダニー！」

返事がない。

「ダニー！ アー・ユー・オーケー？」

どうしよう、どうしよう、倒れてたらどうしよう、どこに電話すればいいの？  
なんて言えばいいの？ どうしよう...

「ダニー！ アー・ユー・オーケー？」

どうしよう... どうしたらいいの...

「ダニー！」

死なないで！ おとうさんみたいに、突然死なないで！

「ダニー...」

あ... カチャッて...

ダニー！

「あ... よかった...」

「Romie...」

「アイ... アイ・シンク... ユー・ハートアタック... ダイ」

「Oh, Romie...」

ギュッて抱きしめられて...

よかった... 生きてる...

「I'm sorry...to make you worry」

私が早とちりしたから...

顔をあげたら...

ダニーの目が...

え？

真っ赤で...

もしかして...

「ダニー... ユー・アー...」

そうなのね...



「ドゥーイング・ビッグワン」

ダニーの目が... 情けなさそうに...  
私が見つかったことを... 見つかった目で...

「Yeah! Tough one!」

ふざけたようにそう言って、これ以上私が彼の目を見ないように、  
私の頭をギュッと彼の胸に押しつけて...

「Sweet liar」

ウソつき？

「ユー・トゥー」

あなただって。

わからないふりし合って、でも、わかりあってるから...  
ウソついても無駄ね。

## チョコレートパフェ

---

泣きたいほど悲しいとき、ふたつの選択肢があるの、私の知ってる限りだけどね。  
ひとつは、思い切り悲しい曲を聴いて大泣きするの。陽気な曲は逆効果なのよ。  
自分の気持ちと合わないから虚しいだけ。ドゥプリ悲しい曲が意外とホッとするの。  
悲しいのは私だけじゃないのねっていう気持ちになるっていうの？ そんな感じね。  
でも、今の私とダニーには泣いてる時間なんてないのよ、あさってには帰るんだから。  
となると、もうひとつしか手はないわね。

「ダニー、ウィ・ドント・ハブ・タイム、トゥ・クライ」

泣いてる時間はないのよ。

「I didn't cry」

ごまかしてる時間もね。

「Why are you looking at me like that?」

そんなことを説明してる時間もね。

「Ok! Yes! I did cry! Are you satisfied?」

半ギレしてる場合じゃないのよ。

「ウィ・ニード・ゴー・スーパーマーケット」

キョトンとしてる暇はもっとないのよ！

バナナとベリー類とリンゴとオレンジと... これくらいでいいかしら？

野菜も買っておいた方がいいわね、ダニーが野菜だけ買いに来るとは思えないもの。

スムージー用のヨーグルトも買って、いよいよ本命よ。

アイスクリーム売り場。

これって... 業務用？ 小さいのでも日本のファミリーサイズより大きいわ。

えっと、バニラは... あった、どれが... これ、Organicってオーガニックよね？

「Vanilla!?!」

なにそのイヤそうな顔？

「I want a chocolate ice cream」

チョコレートアイスが欲しいいっ？

まったく、しかたないわね。

「オーケー、ジャストワン、スモールワン」

「Thank you!」

大きいのをカートに入れようとしたから、小さいのに取り換えてやったわ。

あとは、あれとあれとあれね。

バナナをスライスして底に敷いてチョコレートソースをかけて、  
バニラアイスと、しかたないからチョコレートアイスを重ねて、絞るだけのホイップクリームを  
、  
グルグルッて絞って、バナナのスライスを脇に飾って、チョコレートソースをかけて、  
トッピング用の砕いてあるアーモンドをパラパラッとかけて出来上がり。

「イート」

横でずっと見ていたダニーに渡したわ。

「Wow! You made a Chocolate parfait!」

一口食べたわ。

「グッド？」

目がVery good! って言ってるわ。

「Why did you make parfaits?」

口の脇にチョコレートソースついてるわよ。

「You were like...impulsive」

インパルシブ？ インパル... インパルス...は、衝動だったわよね？

なぜ衝動的にパフェを作ったのかってこと？

そこなのよ。

美香が小さいときに、子どもにありがちなことで泣いてたりするじゃない？

そのときに、アイスクリーム一個ポンと渡しても、気持ちが盛り上がらないでしょ？

だから、小さいパフェみたいなものを、今作ったみたいなものを作ってあげたの。

そしたら、ニコニコしちゃって、食べ終わる頃には泣いてたことも忘れたみたいな顔になったわ

。

私もね、イライラしてるときに、たまに作ることもあるの、真夜中によ？

真夜中に一人でパフェを食べているっていう状況にワクワクするっていうの？

って、英語でなんて言えばいいの？

「えっと... パフェ・メイク・アス・ハッピー」

一言で言えば、まあそういうことよ。

「You have chocolate sauce on...」

え？ ついてる？

「Here」

あっ！

舐めたあああっ！

「ユー・アー・ライク・ドッグ！」

なにその、ヘッヘッヘッみたいな顔？

「ユー・ハブ・チョコレートソース、ここと、ここと、ここ！」

なに？ 顔突き出して？

私は舐めないわよ！

「アイ・ドント、えっと、舐めるって？」

あ

キス

チョコレートソースだらけの口で

きっと私の口元にもチョコレートソースがついちゃったわ。

いいけど。

ていうか、私のくちびるをナプキン代わりにしないでよ。

いいけど。

「アー・ユー・ハッピー・ナウ？」

「Yes」

「ユー・ドント・ワント・クライ、えっと、エニモア？」

「I didn't cry!」

あ、そう、はいはい。

「Can I have one more chocolate parfait?」

「ノー！」

「Oh! Do you want to make me cry?」

「クライ！」

泣いたって、あげないわよ！

糖尿になっちゃうわ。

ヘンな時間にパフェなんか食べちゃったから、夕食はあまり食べられなかったわ。  
若い頃は、パフェ食べた後に焼肉でも、焼肉食べた後にパフェでも平気だったのにねえ。  
ダニーはペロッとビーフシチューも食べてたけどね。

シャワーを浴びて、ダニーがシャワーを浴びてるみたいだから、  
野菜を茹でて、小分けにしてるの。

このノートにも、スロー・クッカーでできそうなレシピをけっこう書いておいたわ。

作るかしら？ 作ってほしいわ、たまにでもいいのよ。

まあ手っ取り早いのは、料理上手な素敵な人と出会って、その人に作ってもらうことよね。

そうなったら、私のこんなノートなんか捨てられちゃうのかしら？

そうよね、スロー・クッカーなんか必要なくなるわけだもの。

こんなこと考えてても、本当はまだ実感湧かないのよ。

ずっとこのキッチンで、ずっとダニーのために料理してるような気になっちゃうの。

ありえないのに、あさってはもういないのに。

ここで、別な女の人が料理するようになるのかしら？ なるわよね、そりゃそうよ。

私より料理がうまいのかしら？ そうよね、今度はキャシーみたいな人とは結婚しないわよ。

素敵な人よね、きっとそうよ。もちろん英語はベラベラよ。

言葉が通じなきゃ結婚生活なんて送れないもの。私は三週間だけだったから...

私って、ダニーにとって三週間だけの思い出の人になっちゃうのかしら。

そうよね、たった三週間一緒にいた人を死ぬまで思って暮らすなんてありえないわ。

さっさと結婚してくれればあきらめもつくのに！ あきらめってどういうこと？

あきらめるもなにも、あさっては日本に帰るのよ！

だいたいなんで好きになっちゃったの？ いつからだった？ キスしてきたのはあっちからよ！

キスなんかしたから！ キスしなかったら... 好きにならなかった？ わからないわよ！

もうしちゃったんだから！ ていうか、今さら何考えてるの？

「What are you doing?」

何をしてるかっ？

「アム・シンキングっ！」

「About what?」

「キス！」

あ

「What?」

そうじゃなくて、その前があるのよ、なんて言ったらいいのかしら？

「Do you want to kiss me?」

そういうことじゃないのよ、私の腰に腕まわしちゃってるけど、そうじゃないの。

「What do you want to say?」

何が言いたいのかって、だからね、だから...

「ドウ・ユー・キス... アザー・ウーマン?」

「Other woman? What do you mean?」

どういう意味って、だから、

「アザー・ビューティフル・ウーマン」

「Who?」

誰って知らないわよ！ あなたが会おうんでしょ！

「Romie, what are you talking about?」

何のことを言ってるのかって、だから...

だから...

わかってるのよ... 私って...

「アイム... ステューピッド」

バカだわ。

「I know」

「ハアッ?」

「You must be thinking a stupid thing」

バカなことを考えてたにちがいない?

そうよ！ ちがいないわよ！ わかってるわよ！

「Do you need a chocolate parfait?」

チョコレートパフェが必要かあっ?

私は泣きたいわけじゃないのよ！

「アイ・ニード・ピア!」

そういう気分！

## 絶対に叶わない願い

---

ゆっくり目を開けたら...

ダニーが私のことを見ていたわ。

「Good morning」

ささやくようにそう言うから...

「グッモーニング」

私もささやくように言ったわ。

ささやくようになってというか、起きてすぐに声が出ないってだけなんだけど。

ダニーが枕の下から腕をまわして私を抱き寄せるから、

起きて朝食作らなきゃと思うんだけど、まだこのままトロトロしていたい気分よ。

ゆうべ...

ダニーの腕の中で...

バカなことを考えてたわ...

絶対に叶うことのないバカな願い...

笑っちゃうわ、いい年して。

「What do you want to do today?」

今日は何をしたい？

そうねえ...

まずは...

「アイ・メイク・ブレックファスト」

「You don't have to」

私は作りたいのよ。

「アイ・ワント・メイク」

あなたに朝食を作るのは、もう今日と明日しかできないんだから。

「Thank you, I love your breakfast」

そう言って私の髪にチュッてしたけど、ラブって言われるほどのものは作ってないけどね。

あとは...

朝食食べたあとに考えるわ。

私が朝食を作って、ダニーがコーヒーを入れて...  
明日の朝は... どんな気持ちで朝食を作るのかしら？  
わからない。

「So, what do you want to do next?」

次は何をしたい？

そんなに急かさないうでよ、やりたいことをギュウギュウに詰めた一日なんてイヤだわ。  
まるで... まるでじゃないけど... 最後の一日なんだって念を押されてるみたいで...  
何もしたくないわ、特にとりたててこれ...って、あ、そうだわ。

「アイ・ワント・ゴー・ユア・マザーズ・グレイブ」

ダニーがキョトンとした顔で見てるけど？

「My mother's grave?」

「イエス」

そうよ。

「You love my mother's grave!」

笑ってるけど、最後にちゃんにご挨拶したいのよ。

ご挨拶って英語でなんて言うのか考えるのもめんどくさいから言わないけど。

例のあの車よ。

ダニーが助手席のドアを、わざとらしく、うやうやしく開けてどうぞって。  
ギロツて睨みつけてやったら、わっざとらしくニッコリしたのよ？ どう思う？

「ドント・ティーチ・ミー・ドライブ!」

もう二度と運転させないでよ！

「I won't. You are a pathetic driver」

パセティック・ドライバーッ!? パセティックって、なに？

って聞く間もなく、ヴォー——ッよ！



前にも寄ったお花屋さんに来たわ。

ダニーには車の中で待っててって言ったの、チャレンジしたいことがあるのよ。  
ダメだったら呼ぶわ、弱気だけど。

今日はどんなお花にしようかしら？

白いデイジーに、この赤い小さなお花が可愛いんじゃない？  
えっと、たしか、シシーさんがブーケのケにアクセント置いてたのよ。  
ブーケェみたいに？

「プリーズ・メイク、ハァッ、ブ〜ケェ」

「Sure!」

通じた！

最後の日にやっと通じたわ。  
人生ってそういうものよね、単語ひとつで人生語るのもナンだけど。

ここで... ダニーはピンクのバラを買って... 私にくれたのね。  
あのときから好きだったって...

「Young lady! Here you are!」

ヤングレディだなんて〜、おじさんたら〜、おじさんじゃなくて、おにいさんにしておくわ。

「It's for you」

え？ 赤いバラ？

「ミー？」

「Yes!」

「サンキュー！」

アメリカの花屋さんて気前がいいのね。

バイバイって手を振って店を出たわ。

「Did you get what you want?」

「イエス」

「What is it?」

これ？

「レッド・ローズ」

見ればわかるでしょ？

「Did you buy it?」

「ノー、ヒー・ギブ・ミー」

「A man of this shop?」

そうよ、あのおじさんよ。

「イエス」

なに？　なんで私を睨むの？

本当よ？　盗んだわけじゃないわよ？

「ヒー・ギブ・ミー！」

「Why?」

ホワイって、どういうこと？

「サービス、でしょ？」

なんでそんな不機嫌そうな顔で私を見るの？

「ホワット？」

「Nothing」

ナッシングって顔してないじゃっブォ—————って！

スピード出し過ぎよ————っ！

着いたわ。

なんだかここに来るとホッとするのもよ、不思議ね。

「Romie」

「イエス？」

「Give me that rose」

ローズ？　これ？

ダニーが、あの赤いバラをお父さんのお墓の前に置いたわ。

あ！

そういうことだったのね！

「ダニー、アトム・ソーラー！」

お父さんにお花を買うのを忘れてたわ。

「アイ・ド、ディドント・バイ・フラワー・フォー・ユア・ファザー！」

「He doesn't care about flowers, he prefers scotch」

花のことは気にしない？ スコッチの方がいい？

だったら、なんでバラを... なに？

「Dad, you understand, right?」

お父さんは理解する？

なにを？

まあいいわ、父子の仲にある何かの絆か話か、まあ何かよ。

ダニーのお母さんのお墓の前にブーケを置いて...

ダニーのお母さん、三週間、ダニーにお世話になりました。

お世話になるどころか...

お母さん... 私、ダニーのことが好きになってしまいました。

ダニーも私のことを好きだって言ってくれています。

この指輪、見てください。綺麗でしょ？ ダニーが私の誕生日にくれたんです。

私の一生の宝物です、ずっと死ぬまで大切にします、死んだあとは美香に大切にしよう言います。

でも... 安心してください。

私は明日、日本に帰ります。

だから... きっと、次にここに来る人は、ダニーの新しい奥さんで、きっと素敵な人で、英語もベラベラで、お母さんのレシピも作れる人だと思います。

その人が現れるまで、どうかダニーをお守りください。

私がお願いするなんておかしいのはわかっていますけど、どうか、お願いします。

お母さん...

お母さんにだけ聞いてほしいことがあります。

私はゆうべ... 叶わない夢を... 叶わない願いを...

お母さん...

私...

ダニーの子どもが生またいって思ったんです。

すごくすごく... ダニーの子どもが生みたくて...

でも... これだけは... どんなに願っても... これだけは絶対に叶うことのない願いで...

ゆうべは、自分が50歳なのを恨みました、シワやシミはしかたないと思っています、でも...

私はどんなにダニーのことが好きでも、もうダニーの子どもは生めないんです。

この気持ち... お母さんならわかってくれますか。

好きな人の子どもが生またいって女の気持ち...

もう50歳なのに、そんなことを思った私を笑わないでくれますか。

これは私とお母さんだけの秘密にしてくださいね。

もう二度とここへは来られないのが淋しいです。

「アイ...ミス...ユー... マザー...」

あ... ダニーズって、つけ忘れちゃった...

でも、わかってくれますよね。

「サンキュー... サンキュー...」

あ もう ダメ

声出して 泣いちゃって

ダニーが私の肩を抱いてくれて...

だから...

「ダニー... アイ・ミス・ユア・マザー」

そう言って、また大泣きしちゃったの。

## ダニーのオフィス

---

今どこに向かってると思う？

ダニーのオフィスよ。

オフィスを見たいかって聞かれたの。

仕事場に私なんか行っていいのかしら？って思ったんだけど、

言えたのは「イズ・イット・オーケー？」だけだったわ。

「Sure, it's my office」って言って、ていうか、そう言う前に向かってたけどね。

私、おとうさんの仕事場に入ったことないのよ。

学生ときは、同じ学部の友だちとレポート提出しに行ったり質問しに行ったりしたけど、

結婚してからは、急な届け物も全部事務局に預けてたわ。

だって、仕事場に奥さんがチョロチョロ出入りするってみっともないでしょ？

みっともないって、先輩の奥様に言われたのよ。

なんだか歴史のある風情の建物の横の駐車場に車を止めて、

入口を入れてすぐのエレベーターに乗って、

「My office is on this floor」

エレベーターのドアが開いたら、「Dan Swope Law Office」って、

ダニーの名前が壁から浮き出てるみたいについていて... なんだか感動しちゃう。

「What are you doing?」

何してるって、感動してるのよ、感動って、なんだったっけ？

あ！

「タッチ・マイ・ハート」

「What?」

「これ、ユア・ネーム、タッチ・マイ・ハート」

なに？ なんで笑うの？

「You are like my mother」

お母さんみたい？

「ユア・マザー、タッチ・マイ、じゃない、タッチ・ハー・ハート、これ？ ディス？」

「Yeah」

お母さん、わかります！

自分の息子がこんな立派に事務所をかまえたら感動しますよね。

私の息子じゃないけど、私だって感動してるんだもの。

「Romie」

「イエス？」

「May I show you my room？」

自分の部屋？

「イエスイエス」

そんなに長い廊下じゃないけど、なんていうのかしら...

私、法律事務所って、もっと無機質っていうか、近代的で冷たいっていうか、  
そういうものだと思ってたけど、廊下の壁際に置いてある椅子も壁も、ホッとするような...  
ダニーって感じだわ。

こういうところなら、安心して相談に来れそうね、私は相談することは特にはないけど。

「This is my room」

そう言ってダニーがドアを開けたところは、やっぱり、ダニーだわ。

入口の真っ直ぐ奥に机があって、手前には両側にソファと一人掛けのソファがあって、  
真ん中に低い木製のテーブル、ガラスとかじゃなくて、家のリビングのテーブルみたい。

「What do you think？」

どう思う？

「イッツ... ユー」

「What do you mean？」

なんて言ったらいいのかしら...

「アイ・ライク・イット」

ダニーが嬉しそうな目で微笑んで、私を机のところに連れてきたわ。

ダニーの机、ここで仕事をしているのね。

そうだわ。

「ダニー、シット、ここ、デイス・チェア」

「Do you want me to sit on this chair？」

「イエス」

「Ah... Ok」

キョトンとして座ったわ。

こうやって仕事してるのね。  
もうちょっと離れて見たいわ。  
後ろに下がって、もうちょっと、もうちょっと...

「What are you doing?」  
何してるって、  
「アトム・ルッキング」  
「Yeah, I know, but...Why?」  
なんて言えばいいのかしら...  
「タッチ・マイ・ハート」  
「What?」  
笑ってていいわよ、私は感動してるんだから。  
「Do you wanna sit?」  
私?  
「イズ・イット・オーケー?」  
「Sure!」

いいのかしら、仕事する机に...って椅子だけど、私なんかが座っちゃって。  
あら、この椅子、座り心地がいいわ。  
これなら長時間座っても腰が痛くならないわね。

「Let me get coffee」  
そう言って、ダニーが部屋から出ていったわ。

ダニーの机の上、パソコンがあって、右側に書類みたいなのがきちんと積んであって、  
左側には時計とペン立てとメモ付きカレンダー。  
左の壁の本棚にはズラッと多分法律の本よね。

ダニーが毎日見ている風景...

見れてよかった...

このカレンダー...  
メモには使っていないのね、何も書いてないわ。  
ちょっと...  
いいかしら? 仕事場の物にそんなことしたらダメかしら?  
でも...

パラパラッとめくって、12月26日、あった。  
小さく書くから、目立たないように書くから、ちょっとだけ。

"Happy birthday"

これだけならいいわよね？ ほら、こんなに小さいし。  
だって、私、ダニーの誕生日には何もできないんですもの。  
でも...

その頃には、もう私のことなんか忘れてるかしら？  
新しい人と出会って、お祝いしてもらってるかしら？  
でも...

お祝いの言葉くらいは、いいわよね？

あ、ドアが...

あわてて、カレンダーを元の場所に戻したわ、はぁぁぁ、ちょっとドキドキしたわ。

「Here you are」

「サンキュー」

ダニーのオフィスで一緒にコーヒーを飲むなんて想像もしてなかったわ。  
最後だから連れてきてくれたのね。  
もう二度とここに来ることはないわね、これが最初で最後ね。

「Romie」

「イエス？」

「Do you want to see a picture of my parents？」

ピクチャー... ペアレンツ...

え？ 両親の写真？ あるの？

「イエス！」

ダニーが、机のいちばん下の引き出しから写真立てを出して...

「My father and mother」

そう言って私に手渡してくれたわ。

古い写真の中で微笑んでる二人...



ダニーのお父さんとお母さん...

お墓しか見たことなかったけど、今、やっと会えたみたいな気持ちで...

お母さん...

やっと会えましたね...

お母さん...

なんて優しい顔して...

ダニーに似てる... 目が... 口も...

ダニーが黙ってティッシュを私の手ににぎらせてくれたわ。

そうよ、私、また泣いてるのよ。

なぜなのかわからないけど、泣けちゃうのよ。

あ...

あの真珠のネックレスをしてるわ。

やっぱりお母さんによく似合う。

お父さんも背が高く、紳士って感じの素敵な人ね。

ダニーは骨格と雰囲気がお父さんに似て、顔がお母さんに似てるのね。

「ダニー、アイム・ハッピー、シー・ユア・ファザー・アンド・マザー」

「They must be happy to see you, too」

私に会えてハッピー？

そうだったらいいけど...

本当に会ったら、きっと...

英語もろくに話せない日本人のおばさんじゃ...ねえ。

さようなら

二人の写真にお辞儀して、

「サンキュー」

ダニーに返したら、また机の中に入れようとするの。

「ダニー」

「Yes?」

「ホワイ・ユー・ドント・プット、イット、デスク？」

なんで机の上に飾らないのかしら？

アメリカ人って、オフィスの机の上に家族の写真置いてない？ あれって映画だけ？

「I used to put it on my desk, but I dropped it all the time, and so...」

机の上に置いてたけど... ドロップ、落とした... オール・ザ・タイムって、いつも...

おっちょこちょいだわ。

そうねえ、どこか邪魔にならないような...

あ、この本棚のところは？

「ダニー、ユー・キャン・プット・イット、あそこ」

「Do you want to put it on there?」

私があそこに置きたいか？ 私？

まあ、そうねえ、見えるところに置いてあげた方がいいと思うわ。

「イエス」

「Ok」

本棚のところに置いたわ。

決定権、私だったの？

でも、お父さんもお母さんも、息子が働いている姿を見たいと思うわ。

「Oh, no, they are watching on me」

そう言って、私の方を振り向いて...

チュッ？

仕事場で？

「ダニー、ユア・ペアレンツ・ワッチング」

「I don't care」

そう言って、またチュッて...

ダニーのお父さんとお母さん、私は悪くないです、ダニーです！

## カット

---

お昼をオフィスの近くで食べようかってダニーが言ったけど、私は家に戻りたいって言ったの。

だって、ダニーにランチを作るのは今日が最後なんですもの。

ランチっていってもサンドイッチ程度だけど、三週間ずっとこうしてきたから、今日もいつもと同じことをしたいの。

こうやってサンドイッチ作ってる私の腰に、ダニーが腕をまわしてペタリくっついてるの。サンドイッチを小さく切って口に入れてあげたわ、背中越しにね。

私の肩にあごを乗せているダニーを感じながら、平気なふりしてサンドイッチ作ってるの。だって、振り向いたら、ダニーに抱きついて泣いてしまいそうなのよ。

この、腰にまわした腕をまだ離さないでね、でないと床に座り込んでしまいそう。

頭の中でね、どうしようどうしようって、ずっと思ってるの。

何をどうしようなのかわからないんだけど、ただ、どうしようどうしようって、ずっと。

「What are you thinking?」

どうしようっていう、この漠然とした気持ちを表す英語ってなに？

「えっと、ホワット...ドウ・アイ...ハフ・トゥ・ドウ？」

「What do you have to do? You made sandwiches. What else do you want?」

そういうことじゃないのよ。

「Oh! I'll make lemonade for you!」

あ——っ、腕を離さないで——っ！

カウンターにつかまって、なんとか持ちこたえたわ。

ダニーがサンドイッチのお皿とレモネードを入れたピッチャーを持って、ウッドデッキに出たわ。

そうね、ここでお昼を食べるのも気持ちいいわね。

はああ、レモネード美味しい！ レモンの香りで、なんだか気持ちがちょっと楽になるわ。

そういえば、レモンの香りって気持ちを落ち着ける効果があるって、テレビでやってなかった？

いっそレモンを丸かじりすればもっと落ち着くかしら？

あ、想像しただけで口の中がジュワッてしてきちゃった。

「Is it too sour?」

ん？ サワー... 酸っぱい？

「ノー、デリシャス」

酸っぱそうな顔してたのかしら？ レモンを丸かじりするって想像してただけよ。

ダニーは、いつもと変わらない顔で、ふつうにサンドイッチを食べてるわ。  
まあ大泣きしながら食べられても、どうしていいかわからなくなっちゃうけど。  
昨日はバスルームで泣いてたけどね。  
男の人って、いざとなると腹くくっちゃうのかしら？  
昨日、大泣き、大泣きかどうかは見てないけど、泣いて、それでスッキリした？  
もうパンと割り切っちゃったのかしら？ 私のこと、割り切っちゃったの？  
そうなの？ だからそんなふつうの顔してサンドイッチ食べてるの？  
私、割り切られちゃったの？

「What?」

「ホワットってホワット？」

「Why are you looking at me like that?」

なんでって、だって、

「ユー・カット」

「I cut... What? Lemon?」

「ミー」

ダニーが驚いたような怒ったような目で私を見たわ。

「Why do you think like that?」

なんでそんなふうに考えるのか？

それよりね...

驚いたのは...

割り切るって英語でなんて言うのかわからないから、  
カットって言ってみたら、通じたことよ。

「Romie... Let me tell you」

言わせてくれ？

なにを？

「Nothing」

ハ？

あら？ 行っちゃった。

何を言おうとしたのかしら？

そうだよ、僕は君のことは割り切ったんだ、だってどうせ君は明日日本に帰るんだろ、僕は新しい恋人を見つけてしあわせになるよ、ハッハッハ！

そんなこと言う人じゃないわ。

いっそ、そんなこと言ってくれたら、な～んだ、こんな人だったのねってあきらめられるのに。でも、そんなこと言うような人なら最初から好きになってないわ。

「Romie!」

あら、戻ってきた。

え？ 顔が... ものすご～く怒ってる？

「Let me tell you!」

それはさっきも言ったわ。

「I cut you? I cut you? Ha!」

怒ってるわ。

「Let me tell you!」

だから、それはさっきも言ったわよ、三回目よ。

「You cut me like a knife! Cut me deep!」

ナイフのように割り切る？

あ、違う、cut ~ like a knife って... ナイフのように切り裂く... ~を...

え？

「You say I cut you! How much? I bet it's just a scratch!」

君は僕がカットしたと言う... どれくらい？ スクラッチ... かすり傷だろう...

スクラッチ... かすり傷...

あなたが私の心を... かすり傷...

「イエス... “a scratch, a scratch”」

私の頭に浮かんだのは、ティボルトに刺されたときのマキューシオの台詞よ。

「“tis not so deep as a well, nor so wide as a church-door, but”」

井戸ほどは深くない、教会の扉ほどは広くない、でも...

自分の部屋に駆け込んで、ドアをバタンと閉めた。

あのあとの台詞は... “tis enough, 'twill serve” 葬るには十分だ...

マキューシオの台詞って...

私も... バカじゃない？

だって、私の傷はかすり傷だろうなんて言うから！

私がどんな気持ちか知りもしないで！

でも、自分の言葉で言い返せなかったのよ、そしたら、連想ゲームみたいに、スクラッチで、マキューシオの台詞が浮かんだのよ、私は死ぬわけじゃないけどね。

いい〜んじゃない？ これで！

なんだかわからないけど、ケンカみたいになって、このままサヨナラすれば気が楽よ。

ダニーと私って、ロミオとジュリエットじゃなくて、ティボルトとマキューシオよ。

いい〜んじゃない？ それで！

私はティボルトに刺されて、あの世じゃないけど、消えていなくなるのよ！

ピッタリじゃない！

いっそこの指輪も返す？

そうよね、これを贈ってくれたときの気持ちなんか無くなってるとしょ！

なんだかわからないけど、あんなに怒ってるんだもの。

外すわ、外して箱に入れて、ここに、サイドテーブルに置いておくわよ。

ヤフオクで売るでもなんでも、好きにすればいいじゃない！

これでもう、な〜んの未練もなくサーーーッパリした気持ちで日本に帰れるわ！

はあああ、疲れた。

バッテリーって、ベッドにうつぶせよ。

片頭痛がする... 薬飲んだ方がいいかしら...立ち上がる...のが...めんど...く...さ...い...





あ... 爆睡してたわ...

イテテ、うつぶせで眠ってたから、首が固まっちゃってるわ。

あら？ え？ 指輪？ なんてついてるの？

外したわよね？ 外したつもりで眠っちゃった？

箱はサイドテーブルにある...

箱を出して... 外した... 気になって、眠っちゃった？

やだ、憶えてない...！

今、何時？ 4時、何時に寝たんだっけ？

憶えてない...！

やだ、ボケてきてる...？ もう？ まだ50よ？ 50からくるのかしら？

やだ、怖い...

だって、指輪を外したと思い込んでたなんて... 現実と妄想の区別がつかなくなってる...

ケンカしたのも妄想？

あれは本当よ、だから、この部屋に来たのよ、そうよね、そうよ。

お水飲もう。

冷たいお水飲んで、頭をハッキリさせなきゃ。

そ〜っと部屋から出て、そ〜っとキッチンに来たわ。

ダニーは、リビングか自分の寝室かしら？ どうでもいいわ。

ハァ〜、お水飲んだらスッキリしたわ。

夕食は何を作る？

最後の夕食...

ダニーが自分で絶対に作らないもの...

魚のホイル焼き？ そうね、あれなら食べるわ。

あとはチキンサラダと、大きいスパニッシュオムレツを作ったら、明日も食べられるわね。

下ごしらえして、そっとリビングを覗いてみたけど、いないわ。

寝室？ ドアが開いてる、いない、バスルームも... いない。

どこに行ったの？ 裏庭？ いないわ。

どこにもいないわ。

どこに行ったの？

怒ってどこかに行っちゃったの？

わからない。

いいわ、夕食までには戻ってくるわよ。

もうすぐ8時よ。

電話一本かかってこないわ。

最後の夕食よ？ いつもなら6時半には食べてるのよ。

なんなの？ どこかで飲んだくれてるの？ ダニーが飲んだくれてる図が浮かばないけど。

もういいわ、もういい！

ああ、そう！

明日には日本に帰ってしまう私にはもう用はないってことよね！

もうどうでもいいのよね！

あんなに怖い顔で怒ってたし！

私だってもういいわ！

お風呂に入って、さっさと寝るわ！

指輪は外した、ちゃんと外したわよ、今度は忘れないわ。

このシャワーとも今夜でお別れね。

お世話になったわ、最初はカルチャーショックだったけど、カルチャーショックっていうのかしら？

なんだか... 明日の夜もこのシャワーを使うような、これが最後だって実感がないわ。

このドライヤーも、こんなに風圧があるのっていいわね。もう使うことはないのね。

いつもは日中掃除するけど、今夜はパックしながらバスタブの掃除をするわ。

明日はもう掃除できないから。

パックをとって、パッティングして...

鏡の中に映る私...

最初にこの鏡に映した顔と、そんなに変わってはいないけど、

私の心の中は...

いっぱいなのに空っぽなの...

空っぽなのにいっぱいなの...

嫌われてよかったわ...

あきらめがつくもの...

嫌われてるって思えば...

もうここにはいられないって思えるもの...

何も感じないですむもの...

バスルームのドアを開けて...

これは

幻覚？

なに？

部屋中がピンクに見えるんだけど...

ピンクっていうか...

ピンクのバラ？

なんで？

頭がおかしくなったのかしら？

ちょっと、触って... 本物だわ、幻覚じゃないわ、ないわよね？

どういうこと？

とにかく...

お水飲んでくるわ。

キッチンの冷蔵庫から出る冷たいお水。

お風呂上りにこうやって飲むのも、これが最後なのね。

実感がないけど。

それにしても...

さっきのはなんだったのかしら？

部屋に戻ったら、また消えてたら... 怖い！

私、そうになったら、帰ったらすぐに病院に行くわ。

「Romie」

「ヒャー————ッ！」

ビックリしてグラス落としちゃった。

「あ... ど、どうしよう」

壊れたグラスを拾おうとしたら...

「Leave it!」

そう言って、私の手を...

目が合った...

そのきれいな茶色の目の中には... あなたの中には... もう私は... いないでしょ...

「Romie」

私のことを呼ぶ声は... いつもと変わらないのに...

「Please come with me」

え？ どこに？

ダニーが私の手をにぎったまま、私の部屋に...

あったわ、バラ。

幻覚じゃなかったわ。

よかった、まだボケてないわ。

そうじゃなくて、なんで？

「I know you don't like to have one hundred roses」

私が100本のバラをもらうのは嫌いなのは知ってる...

「You don't have to clean up, I'll do it after they wither」

枯れたら、自分が掃除する...

ハア〜ッ？ これ、100本もあるの？

「ホワイ？」

「Because you don't want to clean up withering roses, and anyway you won't be here when...」

掃除のことじゃなくて！

「ホワイ・ワンハンドレッド？」

「I thought 100 would be enough for... Is it not enough?」

100本で足りると思った？ 足りないか？

何に？

「フォー・ホワット？」

「For pleasing you」

私を満足させるため？

この人... どうしちゃったの？

「ダニー、アー・ユー・オーケー？」

「No」

そうね、たしかにオーケーじゃないわよ。

「Romie」

「イ、イエス？」

「Would you please promise me?」

約束してくれないか？

「Don't accept pink roses from any other men」

ピンクローズを他の男からアクセプト、受け取る、受け取らないでくれ？

他の男？

だれ？

「フー・イズ・アザーマン？」

「Men who will love you」

私を愛するであろう男？

どういうこと？

つまり、他の男って、私を愛する他の男って、やっぱりダニーは私のことはもう...

そういうこと！

「ユー・ギブ・ミー・ワンハンドレッド・ピンクローズ」

「Yes」

「ビコース、ユー・ドント・ラブ・ミー！」

「What?」

「ユー・セイ・アザーマン！ イッツ・ナット・ユー！」

つまりは、あなたじゃないってことよね！

「ユー・ドント・ハフ・トゥ・バイ・ワンハンドレッド・ローズ！」

そうよ、100本のバラなんか買ってこなくてもいいわよ！

「ユー・ジャスト・セイ、ユー・ドント・ラブ・ミー！」

「Romie! You are misunderstanding!」

誤解してる？ 何が誤解よ！

「ユー・ワント、アザーマン・ラブ・ミー！」

他の男に愛してもらえってことでしょ！

「No!」

「アイ・ヘイト・ユー！」

部屋から飛び出したわ。

こんな手の込んだひどいフリ方しなくてもいいでしょ！

もう愛してないなら、そう言えばいいだけでしょ！

「Romie!」

来ないでよ！

家の中、走り回ったわ。

追いかけてくるのよ！ どこに逃げればいいの？

私の部屋はバカげたバラだらけだし！

あ！

こうなったら...

「No!」

玄関のドアの前に立ちふさがったわっ。

どいてよっ！

グイッて押したけど、なによ、なんで、なに、ギョッて...

「Romie」

離してよっ！

「I love you」

ハ？

違う男に愛してもらえって言ったくせに！

「I know I'm stupid to get 100 pink roses」

そうよっ！ バカよっ！

「But I don't want you to receive pink roses from any other men」

他の男から... ピンクのバラを... 受け取ってほしくない？

「A pink rose is the most special thing for me, it's my love for you」

ピンクのバラは... いちばんスペシャル... 私への愛...

よくわからないけど...

もしかして...

「ダニー」

「Yes?」

「アー・ユー・ジェロス?」

「Yes」

ハア〜?

「ユー・アー・ステューピッド!」

「I know」

「ノー・マン・キブ・ミー・ローズ! オンリー・ユー!」

私にバラをくれるなんて、あなたくらいよ。

「How would you know?」

なんでわかるかって、あたりまえでしょ！

「アイム・フィフティー・イヤーズオールド・ウーマン! オールド!」

50歳のおばさんにバラなんかくれるわけないでしょ！

「I love you!」

だから、それは...

「ホワイ・ユー・ラブ・ミー?」

今さら、こんなこと聞くのもナンだけど？

そりゃポカンともするだろうけど？

「How can I explain?」

なんて説明すればいいんだ？

「It's like...」

それは...

「Conceit, more rich in matter than in words,

Brag of his substance, not of ornament.

They are but beggars that can count their worth.

But my true love is grown to such excess. I cannot sum up sum of half my wealth」

あ...

ジュリエットの台詞...

つまりは...

言葉で表せないほど愛してるっていう意味。

かなり意識しちゃったけど、そういうことよ。

「Now you understand」

「イエス」

聞いた私がバカだったけど。



## スパニッシュオムレツ

---

男って、いくつになってもバカだと思うわ。

なんで遅く帰ってきたと思う？

ピンクのバラを100本買うために、街中の花屋さんを何軒もまわってたんですって！  
100本贈ったら、私が一生他の人からピンクのバラをもらわないでくれるだろうって。  
バカでしょ？

呆れちゃったわよ。

その思考回路がわからないわ。

まあ、絶対に他の人からピンクのバラはもらわないって約束したけどね。

くれる人なんていないから、宇宙旅行には行かないっていうくらいバカバカしい約束だけどね。  
それと、もうひとつ約束してくれって。

せめて僕のところにいる間は、指輪をつけていてくれって。

あのね、やっぱり私、指輪を外してたのよ！ 外して寝たのよ！

眠ってるときに、ダニーがはめたんですって。

そんな紛らわしいことするから、ボケたかと思って本気で不安になったんだから！

今、ウッドデッキに座って二人でビール飲んでるの。

食欲がないって言うのよ、ビール飲もうって。

最後の夜はどうなるんだろうって、いろいろ想像してたわ。

想像してると辛くなっちゃたりしてたわ。

でも、まさか、こんな間の抜けた夜になるとはねえ。

そういうものよね、現実ってこういうものよ、映画みたいにドラマティックじゃないわ。

現実は、ほら、100本のバラを贈られて感動して抱きつくなんてシーンもなく、  
街中をバラを求めて走り回った主人公は、今、私の横でビール飲みながら脱力状態よ。

さっきから何度も顔をこすって、ため息ついてるわ。

なんだか落ち込んで、かわいそうになっちゃうわ。

でも、なんて言って慰めればいいの？ ていうか、何を慰めればいいの？

バラのお礼でも言う？ そうね、街中探し回ったんだから。バカじゃない？

ダメだわ、心からお礼を言う気分にはどうしてもなれないわ。

「Romie」

ン？

「Please say something」

何か言ってくれ？

この状況で何を言えばいいの？

そうねえ、えっと...

「アー・ユー・ハングリー？」

ハ？みたいな顔で私を見てるけど、食欲がないって言ってたけど、

「レッツ・イート」

ここでこうやって座ってるよりはいいわよ。

ダニーの手を引っ張って、キッチンに連れてきたわ。

ダニーの腕を私の腰にまわさせたわ。

私の背中で何を考えててもいいわ、誰かにくっついてるとホッとすると思うのよ。

じゃがいもを薄くスライスしてオリーブオイルで火を通しておいたものに、卵を入れて、弱火でじっくり焼くのよ。ダニーが私の肩に顔をのせてきたわ、よかった。

そろそろひっくり返した方がいいわね。この大きなお皿をフライパンの上に載せて...

あら？ ちょ、重い、グラグラしちゃって...

「ダニー」

「Yes？」

「ヘルプ・ミー」

ダニー、スパニッシュオムレツをひっくり返す初挑戦よ。

「キープ・ディッシュ、真っ直ぐって、えっと、フラット」

「Like this？」

「イエス、そして、フライパン、ひっくり返すって？ カポッて、こう」

「Now？」

「イエス」

緊張の一瞬...

ダニーがカポッてひっくり返せたわ！

「Yeah! I did it!」

よくやったわ！

でもまだ終わりじゃないのよ。

フライパンに少しオリーブオイルを足して、お皿に乗ったオムレツを戻すの。

「スローリー」

ズルズルッてお皿の上のオムレツがフライパンに戻っていくわ。

成功！ズレなかったわ！

「グッド！」

「Did I do right?」

「イエスイエス」

あとは、この面が焼ければ完成よ。

ダニーは今度は自分から私の腰に手を回して、あごを私の肩にのせたわ。

「What are you making?」

「スパニッシュオムレット」

「Ah! Tortilla!」

トルティージャ？ なにそれ？

まあいいわ、ダニーが少し元気になったから。

これをお皿に、よいっしょ、載せて、小さな四角に切るのよ。

昔、教授の奥様会で行ったレストランで食べたことがあるの。

爪楊枝で刺して食べるの、おつまみみたいなものね。

ひとつ刺して、フーフーして、ダニーの口に入れてあげたわ。

「I love it!」

そう？ よかった！

「Romie, thank you」

「アイム・グラッド、ユー・ライク・イット」

「Yes, thank you for tortilla, and... anyway thank you」

「アイム・ハッピー、ホエン・ユー・アー・ハッピー」

ダニーが... ちょっと悲しそうな... でも優しい目で私を見たわ。

「I don't want you to go」

行かないでほしい...

それは...

100本のバラより...

私の心に突き刺さる言葉...

「アイ...」

私だって... 言いたいわ...

行きたくないって...

あなたの傍にずっといたいって...

でも...

私が言えるのは...

「アイ・プロミス...」

今は心から言えるわ...

「アイ・ドント・ゲット・ピンクローズ、フロム・アザーマン」

私にピンクのバラをくれる人は、あなたしかいないわ。

「ビコーズ、ユー・ギブ・ミー、ワンハンドレッド・ピンクローズ」

あなたは一生分のピンクのバラをくれたから...

「サンキュー・フォー・ワンハンドレッド・ピンクローズ」

しあわせね、こんなに大好きな、ずっとそばにいたいほど大好きなあなたから、  
100本もピンクのバラをもらえたなんて...

ダニーが...

淋しそうな目で微笑んで...

私は、もうひとつ、スパニッシュオムレツを、ダニーの口に入れてあげたわ。

## 最後の朝

---

カーテンの隙間からうっすらと光が入ってきたわ。

なんだか眠れなかったの。

ダニーもね。

話しておきたいことがいっぱいある気がしてたんだけど、言葉なんてほとんど出ないわ。

ただね...

電気を消して...

暗闇の中で...

ダニーに抱きしめられて...

ダニーの腕の力を、肌の感触を、体温を、できるだけいっぱい感じようとしていたの。

忘れたくないから、でも、いつか忘れてしまうこともわかってるけど。

こうやってダニーの胸の上に頭を置いて、見上げると、ダニーが私のこと見てるから、

私の方からチュッてしたら、ほら、ギュウッて抱きしめるの。

でもね、これは絶対ふざけてるわ、ギューーーーッだもの。

「アイ・キャント・ブリーズ！」

やっぱり！ 笑ってるもの。

今何時？ もうすぐ6時になるわ。

起きて顔を洗って朝食作らなきゃ。

「アイ・メイク・ブレックファスト」

「Ok」

いつもの朝みたいに、ダニーも私も、そういうふりをしているわけじゃないのよ。

いつもの朝みたいな気がするの、実感がないのよ、あと数時間で...

顔洗おう。

あ、メイクもしなきゃ。

それは朝食の後でいいわ、口紅取れちゃうもの。

ダニーも起きてきて、いつものようにコーヒーを入れてるわ。

「ダニー、ディス・イズ・サンドイッチ、フォー・ランチ」

「Did you make my lunch?」

呆れたような顔で笑うけど、作りたかったのよ、作っていると何も考えなくてすむから。

いつも朝食を食べてるときに、どんな会話をしていたんだっけ？ 会話してた？  
とにかく、なんていうの？ 何を話したらいいのかわからなくて、ダニーも何も言わないし、  
なんだかお互いに目を合わせないようにしてるのよ。  
ふつうにしたいんだけど、なんだかふつうにできないわ。  
まあ、そうよね、ふつうにはできないわ。

ダニーが後片付けをしてくれているうちに、私は自分の部屋に戻って...  
このバラ！  
枯れたらどうやって掃除するのかしら？  
とにかく、メイクよ！

バスルームの中には忘れ物はないわね？ ないわ。  
あ、パスポートとか、スーツケースに入れたままだったわ。  
これが... バラに埋もれて... ヨイッショ... あ、指輪傷ついちゃう。  
サイドテーブルに置いておくわ、箱も手荷物に入れて置いた方がいいかしら？  
あ、日本円も着いたら必要よね。スーツケースの中から出して、家の鍵もだったわ。  
あとは大丈夫よね？ スーツケースの鍵もあるし。忘れ物はないわね？  
あ、使ったタオルを洗濯機に入れてこなきゃ。  
ついでに、ダニーのバスルームのタオルも持ってくればいいわね。

さよなら、アイボリー、さよなら、ダウニー。  
本当は買って帰りたいけど、あまりに大きすぎて無理だと思ったの、無理よ。  
ダニーのパンツをきれいに洗ってあげてね。

「What are you doing?」  
え？  
何をしてるのかって  
「アイ・アスク・アイボリー、ウォッシュ・ユア・アンダーウェア・クリーン」  
「Ah! My dirty thing!」  
「イエス」  
笑ってるけど、笑ってくれてよかったわ、なんで笑ってるのかわからないけど。

スーツケースも手荷物も玄関のところに置いてあるわ。

あと、10分くらいで迎えが来るわ。

リビングのソファに、ダニーと二人で座ってるんだけど、もう何を言っているのかわからないの。

ダニーも何も言わないのよ。

何か言ってほしいんだけど、何を言ってほしいのかわからないの。

顔が見れないの、顔を見ていたいと思ってるのに、見たくないとも思うのよ。

「Romie」

「イ、イエス？」

ダニーの口が何か言おうと動いて...

ビーッ

玄関のベルの音。

時間切れ...って言葉が浮かんだわ。

ダニーが立ち上がって玄関に向かって、私もバッグを持って、玄関に...

まだ開けていないドアの前で、ダニーが... 私のことを黙って見て...

そのきれいな茶色い目が... 何を思っているのか全然わからなくて...

ビーッ

また玄関のベルが鳴って、ダニーが苛立ったようにドアを開けたわ。

“Good morning, Mr. Swope”

あの現地スタッフがニコニコしてダニーに挨拶して...

「Good morning」

ダニーもふつうの声で挨拶して...

「カトーサン、オヒサシブリデス、オ迎エニマイリマシタ」

わかってるわよ。

「荷物ハ、僕ガ車ニ入レマスノデ」

そう言って、私のスーツケースを持っていったわ。

もうこれで、もうこれで、何か言わなきゃ、何を...

「ダ、ダニー」

「Yes?」

私を見つめるダニーの目は優しくて...

「ドント・イート、ビックマック、ピザ」

出てきたのはそんな言葉で...

「Ok, I won't」

ダニーがちょっとふざけたようにそう言って...

「カトーサン！ 次ノ方ヲ迎エニ行クノデ、早く乗ッテクダサイ！」

行かなきゃ。

でも...

何か...

でも...

抱きついたらもう...

だから...

「アィム・ハッピー、スリー・ウィーク」

それしか言えなくて...

「Me, too」

ダニーがそう言って微笑んだわ。

グッバイって言わなきゃって思うんだけど...

言ったら... もう...

「カトーサン！」



あなたの目だけ見て... その目を忘れたくないから...

車に走ったわ。

## ニューヨークの空港

---

ニューヨークの空港までのバスの中、爆睡だったわ。

気がついたら着いてたのよ。

ゆうべ一睡もできなかつたからだわ。

よかったわ、何も考えなくてすんだもの。

ここがニューヨークだっていう実感はないわねえ。

空港の中だから、わあ、ニューヨーク！なんて思えないわよね。

それにしても... 巨大だわあ。

まだチェックインまでには30分くらいあるから、好きにしてくれって言われたけど、

どう好きにしているのかわからないわよ。このカウンターの近くしか行けないわ。

絶対迷子になるわ。免税店って、チェックインして中に入らないと行けないのよね？

窓の外でも見てる？ 別にみるものなんてないけど。

あ、いちおう、もう一回手荷物とバッグの中を確認しておいた方がいいわね。

パスポートはある、チケットは、あのスタッフがまとめて持ってるから後で渡されるのね。

お財布もあるし、スーツケースの鍵も家の鍵もある。

ダニーからもらった指輪のケースもある。

え？ 私、指輪はめてないわ。ケースの中に入れちゃったのかしら。

ない。

どこに？

バッグの中は？

ない。

手荷物の中は？

ない。

そうね、そうなんだわ。

そういうことよ。

あれは... 夢だったんだわ。

三週間だけの夢。

「ホームステイプログラム、ハリスバーグ地域ノ皆様、チェックインノ時間デス」  
ズラッとカウンターに並んでるわ。

こんなにいたかしら？

来たときは、舞い上がってて、そんなこと意識もしてなかったわ。

みんな、ちゃんとしたクッキング・ホームステイをしたのね。

仲良くなっておしゃべりしている人たちもいるもの。

行きは知らない同志で、みんな黙ったままだったのにね。

きっと、それぞれのホームステイ先を歩き来したりしたのね。

まだあと10人くらい？ おばちゃんたちだからモタモタしてるわ。

私もきっとそうなるだろうけど。

中に入ったら免税店に直行しなきゃ。

美香がなんとかって言う香水を買ってきてって言ってたのよ。

メモしておいたのは... あった、お財布の中。

あとは、ご近所に何か買っていった方がいいかしら？ 行くとは言ってなかったけど、

私が三週間もいなかったら、旅行していたってバレバレよね。

マカデミアナッツ？ それはハワイ？ アメリカのおみやげって、なに？

スーパーにはいろいろあったわ。

日本にはない歯ブラシとかキッチン用品とか。

「Romie」

そうね、スーパーの中を走り回る私を探してたわ。

「Romie」

息を切らせた声で私の名前を呼んでたわ。

「Romie!」

私の両肩をつかんでクルッと

ハ？

え？

なんで？

「Romie」

えっと

えっ？

「ダニール」

なんでも

「ダニー？」

「Yes」

でも だって なに だから えっと

「You left this ring」

指輪を

あ

指輪...

「You don't have to wear it, but...」

きれいな茶色い目が...

「Please keep it」

私を...

「Don't forget... me」

見つめてる...

「ユー... カム... ヒア...」

あなたは...

「フォー...」

私に...

「リング？」

忘れないでくれって...

「Yes」

忘れないでくれって...

「ユー・アー」

あなたって

「ステューピッド」

バカね

「I know」

情けなさそうに微笑んで

「カトーサン！ カトーサンノ番デス！ 早く来テクダサイ！」

え？

「ダ、ダニー、ウェイト、ウェイト」

「I'm here」

カウンターで搭乗手続きしている間、チラッと見ると、ダニーは私を見てる、あそこにいる。

「カトーサン、コチラニ進ンデクダサイ」

私はダニーのところに走っていったわ。

「ダニー」

本当はね

「キブ・ミー・リング」

左手を出すと...

ダニーが私の薬指に指輪をはめてくれた...

ダニーの手の感触は...

ダニーは私の手をにぎったまま...

「I love you」

あなたの目は... 私を抱きしめて...

私の目も... あなたに抱きついて...

でも...

私はダニーの手から...

ゆっくり自分の手を...

「アイ・ラブ・ユー」

あなたに聞いてほしいの...

「Dan Swope」

あなたの目が驚いたように...

そうよ...

私、ずっと練習してたの...

あなたの名前をちゃんと言いたくて...

あなたの目を... これ以上見ていたら...

私は背を向けて走ったわ。

だって、あと一瞬で座り込んでしまいそうだったから。

どこにも行けなくなってしまうから。

私は帰らないといけないのよ。

ちゃんと...

現実に。

明日で9月も終わるのね。

年をとると、月日が経つのがどんどん早くなっていくわ、まあそう感じるってことだけど。空もすっかり秋っぽくなってきたわ。

あの夏の日々が、夢だったんじゃないかって思うのよ。

帰ってきて最初の一週間は時差ボケで、辛くて辛くてほとんど憶えてないわ。

ビックリしたのはね、ダニーにもらった指輪よ。

美香に見せたの。どこの？って聞くから、わからないって言ったのよ。

だって、箱についてるお店の名前は聞いたことも見たこともなかったんですもの。

「ウッソー！ ハリー・ウィンストンじゃん！」

「なにそれ？」

「すごい高級なブランド」

「え？」

「おかあさんがもらった指輪なら、200万くらいするかもよ」

「ヘッ？」

「ちょっと待ってて」

美香がスマホで何かして、何かって検索よね。

「ほら、ここ」

「ヒ—————ッ！」

そこに載っているアクセサリーの値段の単位が、もう、なんていうのかしら、クラックラしちゃったわ。

心臓がバクバクしてきちゃって、汗が出てきちゃった。

更年期の症状なのか驚いたからなのかかわからないわ、どっちもかもしれないけど。

「美香、これ、返した方がいいかしら？」

「ハ〜？ なんで？」

「だって、こんな高いもの…」

「そんなことしたら、ダニーさん死ぬよ」

「なっ、なんで死ぬのよっ？」

「わざわざ空港まで届けにきたくらい、おかあさんに持っててほしかったんでしょ」

「そうだけど… でも…」

「素直にもらっておけばいいじゃん、冥土のみやげっていの？」



め... 冥土のみやげ...

その冥土のみやげは... みやげって誰におみやげにあげればいいのよ？

それはいいけど、あの指輪は私のベッドのサイドテーブルの中に入れてあるわ。

鍵付きだから、泥棒に盗られないようにね、ドキドキしちゃうわよ。

撮った写真は、美香が私のPCに取り込んでくれたわ。

ほとんど撮りっ放しで、どんな写真を撮ったかも覚えてないの。

美香にいちばんウケたのは「Mr. and Mrs. Jason」よ。

ほら、二人でパックして撮った写真。

遠い遠い昔みたいに思えるわ。

デジカメで撮った写真をネットで本みたいにできるんですって、有料だけどね。

「プリントアウトしてアルバムに貼るより場所取らないし、雰囲気いいよ」っていうから、

美香にまかせることにしたわ。

だって、その頃はとにかく時差ボケが辛くて何もする気になれなかったのよ。

「タイトルは何にする？」

「なんでもいいわ」

「33枚まで写真選べるんだけどさ、どの写真がいい？」って言われても、

「適当に選んで」としか言えなかったわ。

「何冊作る？」って、「一冊でいいわよ」って言ったら、

「私も欲しいし、ダニーさんにも送ってあげればいいじゃん」

こんな写真欲しいかしら？と思ったけど、何も考えられなかったから、美香にまかせたわ。

出来上がるまで一週間くらいかかるって、それよりこの時差ボケはいつ直るのかしら？

そう思ったわ、辛いよ、身体に力が入らないし、ダルいし、とにかく辛い。

もう二度と海外旅行には行きたくないって思ったわ。

一週間経ったら、スッと楽になったの、不思議なものね。

ちょうどその頃、ダニーからの手紙が届いたの。

私の方から先にお礼の手紙を書かなきゃと思ってたのに、時差ボケでしょ？

まさかこんなに早くダニーが手紙を送ってくるとは思わなくて焦ったわ。

そして...

何を書いてあるのか...

開くのがちょっと怖かったわ。

そこには、元気ですかとか、フライトはどうだったかとか、美香は淋しがってただろうとか、“I had a good time with you”とか、そういうふつうのことしか書いてなかったわ。日付は私が発って2日後だったから、そうね、ダニーもふつうの生活に戻って、現実に戻ったのねって思ったわ。

その手紙が届いた翌日にフォトブックっていうの？ 写真が本みたいになったのが届いたわ。表紙に“HOME STAY”って書いてあったわ。まさにそのままね。

表紙の写真は...

ちょっと————！　なんで“Mr. and Mrs. Jason”なのよ————っ!?

美香ったら、美香にまかせた私が悪かったわ、でも、しかたないわ、まかせちゃったんだから。いいわ、どうせ人に見せるわけじゃないんだから。

1ページ目の写真は、

私とダニーがポカンと顔を見合わせる写真。

これって...　なんだったかしら？

ああ！　セルフタイマーが1秒遅かったときだわ。

なんでこれが1ページ目なのよ？　いいわ、とにかく美香にまかせちゃったんだから。

次は...　ああ！　キッチン！　ここで毎日料理してたのよね、懐かしいわ。

となりの写真は、あら？　キッチンで私が料理してる写真。

ダニーが撮ったの？　いつ撮ったの？　撮られてたなんて知らなかったわ。

でも、わたしがあそこで料理してたのは本当だったのね、そうだけど。

次のページは...　あ、これは初めてもらったバラの写真。

あっ！　そのとなりの写真...　私がビックリした顔して、ダニーがホッペタに...

こんなもの載せて！　これ、削除しなかった？　なんかあのときは...　憶えてないわ。

次のページは...　私とダニーが、ダニーのベッドの上に座ってる写真。

ベッドシーツを買いに行った日だわ。あのとき、美香のヴィクトリアシークレットも買ったのよね。

美香が喜んでたけどね、ブラとパンティのセットも欲しかったって言ったのよ？

無理よ！ Tシャツ買うだけでも精いっぱいだったわ。

次は... え？ リビングで... ロングドレス着てる私... シシーさんの結婚式の時...

こんな写真撮った？ あのときはパンパンで、でも、カメラ目線じゃないから、知らないわ。

ダニーが撮ったの？ ダニーしかいないわよ、リビングだもの。

ダニーったら、私のカメラで盗み撮りしてたのね。なんでかしら？ ああ！

私は私のこと撮れないものね。しかも、このときは吐きそうなほど緊張してたし。

これもいい思い出ね。もうこのドレスを着ることもないしね。

真珠のネックレスをつけてるわ。

このネックレスを...

その横に黒スーツに蝶ネクタイでポーチドアの方を見ているダニー。

私だって隠し撮りしてたのよ、パンパンだったけど、かっこいいと思って撮ったんだったわ。

次のページは... ああ、ピクニックに行ったときだわ。

二人で映ってるのと、その横のは私の膝の上で寝てるダニー。

この顔を見ているのが好きだったわ。

ずっと見ていたかったわ。ダニーの柔らかい髪感触もまだ憶えて...

次のページは、1ページ全部がああ公園の池の風景... え？ 私がいる...

私が池を見ている後姿が...

ダニーは... こうやって私を見ていたの... こんなふうに... こんな優しい...

ページをめくったわ。

ああ、ダニーからもらった言葉のない絵本とダニーのカメ、じゃなくて赤ちゃんの絵。

美香に見せたのよ、これ何だと思う？って。

「カメ？」

やっぱり！ 誰が見てもカメなのよ！

「これね、赤ちゃんなんですって」

「ハ？」

「それじゃこれは？」

「三角形？」

「おむつだって」

「マジで？ ひどすぎる！ アハハハ」

「でしょ？」

「ダニーさんてヘタを超えて天才的！」

その絵はフォトフレームに入れてダイニングに飾ったわ。

美香なんて写メ撮ってたわ、待ち受けにするって。

ごめんなさいね、ダニー、でも、人をしあわせにする絵だとは思わよ。

次は... ダニーがソファで本を読んでいる写真。

こっそり入口から盗み撮りしたの。

この光景がいちばん好きだったわ。

この写真を撮ってから、ダニーの横に座ったのよね。

この空いているところは、私の場所だったわ。

ほら、テーブルに私の分のコーヒーカップがあるもの。

私がここに座っていたなんて... あたりまえのように座っていたけど...

こうやってダニーしかいないソファは、私がいたことがウソみたいに思えるわ。

次のは... そうそう！ ダニーに初めて作ったお弁当とメモ！

そして、隣りの写真は、これも隠し撮りしたスーツを着たダニー。

「弁護士Dan Swope」かっこいいわ。

次のページは、そうだわ、誕生日にもらったピンクのバラよ。

そして、その横の写真...

美香————っ！

キ、キスしてる写真、こんなの載せるなんて————っ！

いつのだったけ？ あ、誕生日の夜だわ。

ダニーって... こんな顔をして私にキスしてたの...

すごく... 愛しそうに... こんな顔でキスされてたの... こんな素敵な顔で...

くちびるに指をあてて... 目をとじると... まだ感触を憶えてるわ...

ダニーの柔らかいくちびるの... あのとろけそうなキスの...

でも、きっと... いつか消えていくのね。

思い出そうとしても思い出せなくなるんだわ。

思い出そうとすることもなくなるのかもしれない。

次のページは...

えっ？

私が眠ってる写真!?

ダニー？ あの人、盗撮魔？ 私も人のことは言えないけど、寝顔はないでしょ！

これ... 私の寝顔っていうより...

私の寝顔と指輪をしている私の手...

なんでこんな写真を撮ったの？ どんな気持ちで、この姿を見ていたの？

どんな気持ちでも、このときの気持ちは、もう消えているわね。

次のページは、両面全部で1枚の写真、あの100本のバラの写真。

こうやって写真で見るとすごいわ、それに、きれいね。

私が100本ピンクのバラをもらった、人生で一度きりの記念ね。

次のページは...

ダニーがコーヒーをいれている写真。

これ、いつ撮ったんだっけ？

いつも朝見ていた光景だわ。

コーヒーカップがふたつあって...

なんともないこの光景が好きだったわ。

ずっとこの姿を見ていられるような、そんな気持ちだったわ。

こうやって見ると、いろいろあったわ。

写真には撮ってない、写真になんか撮れないことの方が多かったわ。

気持ちは写真には撮れないもの。

最後のページは...

これは...

朝の光を浴びているダニーのサイドテーブルに飾った一本のピンクのバラ。

私は撮ってないわ。

ダニーね。

私が朝食を作ってるときに撮ったのね。

あら？ 瓶のところにメモが... 何か書いてある...

*I miss you*

ダニーの字...

私がいつかこの写真を見るときって書いたの？

でも、この気持ちは...

今は...

わからない。

フォトブックを閉じたわ。

あれから一度も見てないわ。

1ヵ月経った今もね。

## 二通目の手紙

---

フォトブックが出来上がってきた翌日だったかしら。

ダニーからまた手紙がきたの。

私、まだ最初の手紙にも返事を書いてなかったから、また焦ったわ。

それとね、なんでまた手紙を送ってきたのか「？」だったの。

読む前だったからわからないのはあたりまえなんだけどね。

でも、ふつう、こう続けざまに手紙がきたら「？」ってなるでしょ？

まあそれはいいわ、手紙の日付は最初の手紙の翌日だったわ。

“Romie,

*As you know, I am not good at express my thought or emotion.”*

「君も知っているとおりに、僕は自分の考えや感情を表現するのが下手だ。」

そう？ 私といるときは、笑ったりスネたり泣いたり怒ったりしてたわよ？

“I tried to write down everything I’ve thought and felt in the last letter,

*but I was overwhelmed with... what to say, everything, I still cannot describe that feeling.”*

「この前の手紙で、自分の考えや感じたことをすべて書こうとした。

しかし、僕は、なんと云えばいいのだろう、すべてに圧倒されてしまった。

今でもあの感覚を描写することはできない」

だから、こんな長い前置きはいいいから、何を言いたいの？

“Where should I start from? How can I explain? Why am I writing this letter?”

「どこから始めたらいいいのか？ どうやって説明できるのか？ なぜこの手紙を書いているんだ？」

これは、完全にひとり言だわ、なぜこの手紙を書いているんだなんて、手紙に書く？

“Let me start to write about me of the day after you were gone.”

「君が去った翌日の僕について書くことから始めよう」

やっと決まったのね。

“Well, anyway, I went to my office.”

「とにかく、僕はオフィスに行った」

Well, anywayって書く前に、頭の中で何があったのかしら？

*"I worked, yes, worked until very late. I didn't want to go back home, but I knew I had to."*

「僕は仕事をした、とても遅くまで。

家に帰りたくなかったが、帰らなければならないことはわかっていた」

*"When I arrived at my house, actually in front of my house, I saw my house.*

*What I saw was the scene that was like as my house was dead.*

*I did not see any lights from windows, I could not feel Life from my house."*

「家に着いたとき、家の前に着いたとき、僕は自分の家を見た。

僕が見た光景は、まるで僕の家が死んでいるようだった。

窓からは灯りがひとつも見えず、命を感じることはできなかった」

*"I entered the house and turned on the light. Empty, this word expresses exactly*

*what I felt at that time. It did not have any color, it was not monochrome, just lost all colors."*

「家に入って灯りをつけた。空っぽ、それがその時僕が感じたことをまさに表している言葉だ。

何の色もなかった、モノクロじゃないんだ、ただすべての色を失ってしまっていた」

*"I tried not to feel anything, and I went to the kitchen. I just wanted to have a bottle of beer.*

*You were not there, and so I could be naughty and lazy. Are you upset? I hope you are.*

*I know I'm stupid to think like a stupid thing."*

「何も感じないようにして、キッチンに行った。ただビールが飲みたかったんだ。

君はそこにはいなかったから、僕は行儀悪く怠け者になれたよ。

君は腹を立ててるかな？ そうであってほしい。

こんなバカげたことを考えるなんて僕はバカだってことはわかってるよ」

*"I knew there some food which you had made before you left at that morning.*

*I did not want to see them. I knew they would remind me of you.*

*Somehow, I don't know why, I opened the freezer.*

*Romie, you gave me a powerful blow.*

*What I saw was... you know very well."*

「君がいなくなる朝に作っていた食べ物があるのは知っていた。

君を思い出してしまうとわかっていたから見たくなかったんだ。

なぜか、なぜなのかわからない、僕は冷凍庫を開けたんだ。

ロミー、君は僕に強烈な一撃を食らわせたよ。

僕が見たものは... 君はよくわかっているだろう」



わかってるわ。

「病気のときに」ってメモを書いているチキンスープ、ミートソース、ハンバーグ、ミートローフ、バナナブレッド、茹でた野菜、他にもたくさん冷凍庫いっぱいに入ってる。すべてに何分温めればいいのかを書いたメモがついてるの。

*“Let me confess, I actually spoke, pronounced ‘ You kill me ‘ and, yes, I cried.*

*I cried until I collapsed to my knees and sat down on the floor. You won.”*

「白状するよ、僕は実際に声に出して“*You kill me*”そう言って、そうだよ、泣いたんだ。がっくりと膝をついて床に座り込むまで泣いたんだよ。君の勝ちだ。」

*“You are the most cruel woman in this world.*

*You cut me like a knife.*

*I am the most stupid man in this world.*

*Although I keep bleeding, I cannot stop loving you.”*

「君はこの世でいちばん残酷な女だよ。

ナイフのように僕を切り裂くんだ。

僕はこの世でいちばん愚かな男だよ。

血を流し続けても、君を愛することをやめられないんだ」

*“Please forgive me. I know you made everything for me from your sweetness.*

*It’s not fair to say such horrible words to you. But, Romie, tell me...*

*How can I forget you? How can I be used to the cruel fact you are not here?”*

「僕を許してほしい。君は僕のためにすべて作ってくれたのはわかっている。

こんな最悪な言葉を君に言うなんてひどいよ。でも、ロミー、教えてくれ。

どうすれば君を忘れられるんだ？

どうすれば君がここにいないという残酷な事実になれることができるんだ？」

*“I’m sorry, I’m writing stupid meaningless things, and I have no idea what I am writing.*

*I will make you confused, upset, or sick of me.*

*I am not sure you still love me or not. Maybe not.*

*I’m sissy, and stupid as always.”*

「僕が愚かで無意味なことを書いてるのを許してほしい。自分が何を書いているのかもわからない。

僕は君を混乱させ、怒らせて、そして、うんざりさせるだろう。

君がまだ僕を愛してくれているのかどうかわからない。多分もう愛していないだろうね。

僕は女々しくて、いつものようにバカだよ」

*"I cannot find the words for concluding this letter.*

*May I write you sometimes? If you don't want to hear from me, let me know.*

*See? I'm hopelessly childish and sissy!"*

「この手紙を終わらせるための言葉が見つからないよ。

君にときどき手紙を書いてもいいかな？ もし嫌ならそう言ってくれ。

ほら！ 僕は救いようがなく子どもじみていて女々しいんだ！」

ダニーの手紙はそこで終わっていたわ。

そうね、私は残酷な女よ。

あの冷凍庫いっぱい作った料理、あれはね、私を忘れて欲しくなかったからなの。

でもね、いつかは忘れることもわかってる。

すぐには忘れてほしくなかったの。

少しずつ... 少しずつなら...

あれを食べている間だけは忘れて欲しくなかった、忘れないようにしたかったの。

あの冷凍庫が空っぽになる頃には忘れるとしても。

そして、確かに私は勝ったのね。

あなたが泣き崩れるほどに。

こんな手紙を書くほどに。

ひどいわ、私ってひどい女だわ。

自分勝手だわ。

あなたを、これ以上苦しめたら自分のことが許せなくなるわ。

だから...

手紙を書いたの。

*"Dear Danny,*

*Thank you so much for your letters. I am sorry that I haven't written to you soon.*

*I was suffering from jet lag for a week, and I could not do anything.*

*Thank you for everything you did to me during I was staying with you.*

*Danny, if you don't want to see my cooking and they make you unhappy,*

*Don't hesitate to throw them away. It's not important that you eat them.*

*The most important thing is that you are feeling well and being healthy.*

*If you want to feel better, forget me. I'm sure you will. To be honest it's sad for me, but I know sometimes to forget someone is release from the pain.*

*I don't want you to feel the pain. If I cut you like a knife, please forgive me.*

*I won't forget you until you forget me. When you forget me, I will forget you.  
Please take care of yourself."*

『ダニーへ

お手紙ありがとうございます。すぐに手紙を書かなくてごめんなさい。

一週間時差ボケで何もできませんでした。

あなたのところにいた間あなたがしてくれたすべてのことに感謝します。

ダニー、もし私の料理を見たくなくて、私の料理があなたを不幸せな気持ちにさせるなら、どうぞ気にせず捨ててください。あなたがあれを食べることが重要なではありません。

もっとも重要なのは、あなたが元気で健康であってくれることです。

もし気分がよくなりたいのなら、私のことは忘れてください。きっと忘れるでしょう。

正直に言うと、それは悲しいことだけど、誰かを忘れることは痛みから解放されることだと、私はわかっています。あなたに痛みを感じて欲しくない。

私がもしあなたをナイフのように切り裂いたのなら、どうぞゆるしてください。

あなたが私を忘れるまでは、私はあなたを忘れません。あなたが私を忘れたとき、私もあなたを忘れます。どうか、身体を大切にしてください。』

もう十分だわ。

もう苦しませたくないわ。

美香に手紙を出してもらうように頼んだの。

「こんなことしないで、Skypeすれば早いじゃん」って言われたけど、それはイヤなのよ。いつもダニーと話すときは、あの優しい茶色の目を直接見て、あの声を直接聞いていたから。その感覚をできるだけ憶えていたいのよ。

パソコンを通して話したら、あの感覚がすぐに消えてしまいそうで怖いよ。

私の手紙を出して、それから今日まで、もうダニーからは手紙は来なくなったわ。

きっと、忘れたいのね、忘れたのかもしれない、少しずつ私のこと…。

早いわあ、もう10月もそろそろ半ばよ。

さっき買い物から帰ってくるとき、ご近所の庭木が紅葉してたわ。

きれいだけど、落ち葉がうちの玄関先にまで飛ばされてくるから、ちょっと迷惑ね。

言えないけどね、ご近所付き合いの辛いところよね。

来週は三連休だって美香が言ってたわ。何の祝日？って思ったら体育の日と土日なのね。

私が若い頃は体育の日は10月10日だったけど、今は違うのね、混乱しちゃうわ。

どっちみち連休だろうとなかろうと、私には関係ないけどね。

言ってみれば、365日連休みたいなものだわ。

若い頃は365日無休だったけどね。

今、何時？ 2時ちょっと過ぎ。

向こうは明け方の3時か4時ね。

まだ眠ってるわね。

あれ以来、なんにも連絡はないわ。

私のことは忘れたのね、そうよね、忘れてって書いたんだもの。

きっと冷凍庫のものも全部捨てたわね、捨ててって書いたんだもの。

だってねえ、虚しいわよね、もう一生会えない人のことを思い続けるなんて。

でも、忘れてって書いてきたからって忘れるの？ そんな軽い存在だったの私？

そりゃそうでしょ、たった三週間しか一緒にいなかったんだもの。

こうして離れた時間の方が今では長いくらいよ、忘れるわよ。

案外、冷凍庫のものは食べてたりして？ そうね、もう気にならなくなって食べてるかもね。

スーパーで売ってる冷凍食品感覚？ それはそれでどういう神経なの？って言いたくなるわ。

いいじゃない、べつにどんな感覚で食べようが食べてなかろうが、もう関係ないんだから。

コーヒーでも飲ん... あ、ダメだったんだわ。

帰ってきて、キッチンに巨大な機械がデ〜ンとあったのよ、そこまで巨大じゃないけど。

エスプレッソ・マシーンですって。カプチーノもできるんですって。

私がない間に、美香が夏のボーナスで買ったっていうの。

いちおう作り方を教わったけど、全然覚えられないの。

だいたいなんでシューッて蒸気が立つの？ あれが怖いよ、量だってよくわからないし。

朝は美香がカプチーノをいれてくれるけど、日中は紅茶を飲んでるわ、ティーバッグのね。

そうね、いいわ、紅茶で。

紅茶飲みながら、顔をコロコロしてるの。

誕生日プレゼントに美香がくれたのよ、コロコロするとリフトアップ効果があるって。

つまり、私はリフトアップが必要だって思われてるってこと？ 必要だけどね。

これだって本当にリフトアップしてるのかわからないのよ、たいして変わらない気がするの。

こうやって座ってると暇だからコロコロしてるけどね。

今日は仏壇のお花も新しいのを買ってきたわ。

スーパーで、ピンクのバラが二本入りで365円で売ってたの。

一瞬買おうかしらって思ったんだけど買えなかったわ。

あの100本の呪縛だと思うわ。

いつか絶対買うわ、ピンクのバラ。呪縛から抜け出してやるわよ。

日本に帰って家に着いて、おとうさんに報告しなきゃって仏壇の前に座ったの。

ちゃんと新しい花が飾ってあったわ。仏壇に埃も溜まってなかったし。

私がいないと、美香はちゃんとやるのね。

驚いたのはね、おとうさんの写真を見たときよ。

竹之内豊に似てないの！ あんなに似てると思ってたのに、どうしちゃったのかしら？

「おかあさんの目が、やっとまともになったんじゃないの？」って美香に言われたけど、

あれは衝撃だったわ、もちろん、竹之内豊に似てなくても、いい男よ、おとうさん。

おとうさんに何を言っているのかわからなくて、「ただいま」とだけしか言えなかったわ。

だって、他の男の人に恋をしたなんて、なんだか申し訳なくて...

あの世からはすべてお見通しなのかもしれないけど、どう思ってるのかしら？

写真に聞いてもねえ、何も答えてくれないけどね。

そうそう！

なんで向こうにいたときに、日本時間の真夜中でも明け方でも、

Facebookに美香がログインしていたのか、ていうか、PC開けて起きてたのか、

あっちにいたときは何の疑問も持たなかったけど、わかったのよ。

先月だったかしら？ 夜中にトイレに起きたの。まだ身体が向こう時間だった頃ね。

そうしたら、美香の部屋から声がするの。

美香の声だけじゃなくて、男の人の声もよ。

彼氏がいるだろうなあっていうのは気づいてたけど、やっぱりいたのよ。

そりゃいるわよね、27歳だもの、いてくれなきゃ困るわ。

でも、相手はどうなのかしらって気になっちゃって。だって、そうでしょ？

ただの遊びだったら、そんなことに付き合ってもらえるような年齢じゃないじゃない？

まして、もしかして、不倫だったりしたら、不毛よ、不毛どころの騒ぎじゃないわ。

心配になっちゃって、それでも三日は我慢したの、二日だったかしら？

もう耐えきれなくなって、美香に言ったのよ。

「美香、あなたもおとなだから誰とお付き合いしてもいいけど、不倫だけはやめてね」って。

いつもの「ハア〜？」から始まって、「なんの話？」って聞かれて、

「誰かとお付き合いしてるだろうなと思ってんだけど、ちゃんとした方よね？」って。

もう27歳のおとなの娘の恋愛に親が口を挟むのはどうかと私も思うのよ。

だから、あまり突っ込んで聞かないようにはしてたんだけど、心配にはなるじゃない？

今までも、美香が学生のときも、付き合ってる男の子がいるなってわかったけど、

美香も言わないし、私もあえて聞いたことはなかったわ。

でもね、10代や20代前半の恋愛と27歳の恋愛は、やっぱり違うと思うのよ。

そういうようなことを言ったのよ、美香にね。

そうしたら、珍しくちゃんと話してくれたの。

同じ会社の人なんですって。同じ会社っていてもね、ニューヨーク本社に勤めてるんですって。

去年から今年の春まで一年間、なんだかで日本の東京支社にいて、そのときからですって。

遠距離恋愛よ、遠距離って、まさに遠い距離よ、ニューヨークって...

1〜2ヵ月に一度、日本の支社に来るたびに会ってるんですって。

それで、ああ！と思ったの。

ときどき、「今日は友だちのところに泊まるから」っていう日があったの。

それって、そういうことだったのねって。

「ウソついてたのっ!？」って言ったら、

「本当のこと言ってもよかったけど、おかあさん、すぐパニクるじゃん」って言われたわ。

たしかにね... いろいろなこと考えちゃったでしょうね。

できるだけ、できうる限り軽い感じで、「今度連れていらっしやいよ」って言ったら、

「まあ、いつかね」って流されちゃったわ、軽くなかったかしら？

でも、たしかにね、親に会うとなったら、つまりは、そういうときだものね。

美香も結婚ねえ、まだだけど、そこまで聞かなかつたし、言わなかったけど。

いずれはそういうときがくるのよね。

あ、そうそう！ その人、外人なのよ！ 外人て、アメリカ人だけど。

娘のお婿さんと意思疎通ができないのかしら？って愕然としたわ、言わなかったけど。

ていうか、まだお婿さんになるって決まったわけじゃないけどね。

美香が、「おかあさん、今、エ〜って思ったでしょ」って。

なんでわかったのかしら？

美香が言うにはね、その人、日本語がベラベラなんですって。

小学校のときに、お父様の仕事の関係で日本にいたんですって。

だから、日本支社に派遣されて、何かのときには来るんだって言ってたわ。

でも、美香とは英語でしゃべるんですって。

もし結婚したとして、私の横で二人が英語でしゃべってたら何を話してるのかわからないわ。って、ポロツと言っちゃったの。

「おかあさん、まだ結婚とかそんな話、全然ないし！」って言われちゃった。

まあそうだろうけど、でもねえ、美香の話を聞いてたら、未来があるのねえって思ったわ。

美香もいつか結婚して、子どもを生んで家族を作っていくようになるのねえって。

私の未来は？

何も見えないわ。

若いときの何も見えないとは違うのよ、もう何も無いっていうか。

思い浮かぶとしたら、そうねえ、せいぜい孫の面倒をみるくらい？ まだ実感はないけどね。

家に帰ってきて、夜寝るとき、しばらくは淋しかったわ。

ひとりなんだなあって。

あの頃の感覚は... よく憶えてないわ、思い出したくないし。

でも、今は、これが私の現実なんだわって思うわ。

おとうさんと結婚して、美香を生んで、子育てして、私も家庭を作ってきたわ。

そして、おとうさんが死んで、美香もいつか結婚して...

今の私って、ちょうど今の季節くらいなのかしら。

冬まではいってないけれど、終わりが近づいてる気配はするのかな？

気配はするけど覚悟はできてないのよ。

中途半端だわ。

左手の薬指には、おとうさんとの結婚指輪。

帰ってきてすぐにははめられなかったの、ごめんなさいね、おとうさん。

でも、今月の初めに、10月1日に、はめたのよ。

もうダニーからは何も連絡はないし、いつまでも夏の思い出を引きずってたら、

前には進めないもの、前って、老後ってこと？

とにかく、今晚の夕食は何にする？





美香が！

---

いつもの朝よ。

美香が起きてきてカプチーノをいれてるわ。

私がコーヒーらしきものを飲めるのは、朝のこのカプチーノだけ。

いいけどね、ほうじ茶や紅茶飲んでるから。

「ヤッター！ 明日から三連休！」

いいわね、三連休の喜びを感じられるなんて。

「お弁当ここに置いておくからね」

「サンキュ！」

朝の納豆ご飯、日本人に生まれてよかったって思うささやかな喜びね。

「おかあさん」

「ン？」

「今日、連れてきたい人がいるの」

き た

こ の 口 の 中 の 納 豆 を どう した ら いい の

飲 み 込 ま な き ゃ と に か く 飲 み 込 ま な き ゃ

「そ、そう」

き た き た き た き た き た き た き た き た き た き た

「え...と、何時頃いらっしゃるのかしら？」

どうしようどうしようどうしようどうしよう

「だいたい5時か6時かなあ」

「どっちっ？」

「まあ5時くらい？」

「くらいって、ハッキリ決めて！」

「わかんないよ、飛行機が定時に着けば5時には家に連れてこれるけどさ」

飛行機...

やっぱり、あのニューヨークの彼氏！

とうとう...

ああ、どうしよう、どうしようじゃなくて、え？

「今日？」

「うん」

「それって、今日いらっしゃるって、いつわかったの？」

「一週間くらい前？」

「なんでもっと早く言わないのよっ!？」

「だって、言ったら、おかあさん一週間ずっとパニックりっぱなしになるじゃん」

この子...

私を知りすぎてて...

ときどき憎くなるわ...

「え...と、5時...ね？」

「まあそれくらい？」

「それじゃ、夕食は？」

「おかあさんが作ってくれるんなら食べるんじゃない？」

「ハ？」

決定権... 私？

「フツーツーにしていればいいよ」

「フツーツーって、フツーツーにできるわけないでしょっ！」

あなたの人生の一大イベントのひとつなのよっ!？」

「おかあさん、イヤなの？」

「え？」

「イヤなら連れてこないよ」

「そ、そうじゃなくて、そうじゃないのよ、そうじゃないの」

今度連れてきなさいって言ったのは私だったわ。

そうよ、それに、いつかはこういう日が来るんだから、それが今日だったのよ、今日って、

「なんで今日なの？　なんで今日なのよっ!？」

「そんなこと言ったって、もう飛行機乗っちゃってるもん」

「もんで...」

「ほらね？　もうパニックしてるでしょ？　だから、ギリまで言わなかったんだよ」

「ギリだからパニックしてるのよっ！」

「どっちにしても、パニックるんだから短い方がいいじゃん」

そう...いう...ものかしら？

あら？

「美香、今日、会社よね？」

「早退するから」

この子...　仕事より愛の女だったの？　意外だわ。

「それじゃ、いってきま～す」

「え？　あ、えっと、電話して、えっと、飛行場出るとき、電話してちょうだい」

「わかった」

忘れないでよっ！

ボタンと玄関ドアが閉まっ

おとうさ——————ん！

おとうさん、おとうさん、おとうさん！

チンチンチンチンチンチンチン

おとうさ——————ん！

美香が、美香が連れてくるんですって————っ！

なんでこんな大切なときにいないのよっ！

なんで私一人で対応しなきゃいけないの————っ？

恨むわ、おとうさん、恨むわ、恨んでる場合じゃないわ！

どうしたらいいのかしら？

まずは、掃除！

仏間兼客間も掃除した。

トイレもいつもよりピッカピカに掃除した。

ダイニングも、お花買ってこなきゃ、仏壇のお花もおととい買ったのだけど、新しくするわ。

あとは、玄関も掃除したし、玄関前も掃除したけど、夕方になったらまた枯葉が溜まるわね。

夕方もう一回掃除しておくわ。

あとは？

買い物！

スーパーに来たけど、何を作ればいいの？

いっそお寿司を取る？ 特上？ でも、アメリカ人よね？ でも、日本に住んでたのよね？

でも、店屋物で済ませたって思うかしら？ そうね、お寿司はやめておくわ。

和食？ 食べるかしら？ ローストビーフでも作る？ でも、最初からご馳走だと、

あとが続かないわ。それに、やり過ぎてもねえ。さりげない方がいいわね。

夕食を一緒にいかが？ くらい、さりげなく？ さりげないものって、なに？

あ！ ミートソース！ そうだわ、あのレシピで！ アメリカのだもの。

着いてすぐでしょ？ 着いてすぐに和食やドーンとご馳走より、家庭の味がいいわよね。

それと、サラダと、デザートは？ デザートっていうより、最初はコーヒーとお菓子よね？

スーパーのケーキじゃねえ、ヨーグルトゼリー？ そうね、黄桃の缶詰で作ればいいわ。

あと、何が必要かしら？ パンもいちおう買って置く？

パンはもう少し先のパン屋さんのが美味しいから、あそこで買うわ。

とにかく、考えられるものは買っておいた方がいいわね、考えられればだけど。

仏壇のお花と、あ... ピンクのバラしかないわ。おとといはトルコ桔梗もあったのに。

そうね、そうよ、美香のこのことが呪縛から解放されるいいきっかけだわ。

2本入りを三つ買って、なんだかすごい荷物になっちゃったわ。

まあ大は小を兼ねるって言うし、そうじゃないわ、足りないより余るくらいの方がいいわ。

ゼリーは作って冷蔵庫よ。

ミートソースも今煮込んでるわ。

少しずつ準備ができてきたら、ちょっと落ち着いてきたわ。

ちょっと休憩。

紅茶をいれて、はあああああ

ドッと疲れが出てきたわ。

眠い... 寝てる場合じゃないわよ。

どんな人かしら？ そう言えば写真も何も見せてもらってなかったわ。

何歳？ 同じくらいの歳かしら？ まさか15歳も上じゃないでしょうね。

それはやめて欲しいわ、私が言うのもナンだけど、15歳も年上は大変よ。

年代が違うとね、話が合わないのよ、観ていた映画も違うしね、結局相手に合わせなきゃならないの。

それに、なんといっても、さっさと先に死なれるのよ？

娘のこんな大切なときにいないのよっ？ 年上はダメよ！ せいぜい5歳くらいまでよ！

年下もねえ、1~2歳ならいいけど、5歳や10歳、10歳はないわね、17歳になっちゃうわ。

まあ私が考えてもしかたないわ、美香が選んだんだから、美香の人生なのよ、そうよ。

今、何時？

3時！

あと2時間で来ちゃうわ。

えっと、あとは、そうだわ、着替えて化粧しなきゃ！

どうすればいいの？ スッピンはありえないわ。

かといって、あまりバッチリメイクしてもねえ。

さりげなく？ そうね、普段のメイクよりはちょっと丁寧くらいでいいんじゃない？

髪は？ ちょっとだけウェーブつけて、あまりやり過ぎると、やり過ぎだわ、何言ってるの？

服は？

ジーパンはありえないわ、お出かけ用のワンピースはやり過ぎよ。

こういうとき、みんなは何を着るのかしら？ 私るとき、お母さんは何を着てたっけ？

憶えてないわ、そんな昔のことはいいのよ、そうねえ、この薄いピンクのブラウスに、

グレーのふんわりスカートだったら、さりげないんじゃない？ これにするわ。

5時10分前。

吐きそうよ。

スリッパもお客様用のを出しておいたし、玄関前もさっき掃いたわ。

仏壇のお花も替えたし、ダイニングテーブルの上にバラをさりげなく飾ったわ。

本気で吐きそう...

なんだか酸っぱいものがあがってきてる気がするわ。

私のせいで破談なんてことにならないわよね？

なんで私のせいなの？ せいっぱいやったわよ？ これ以上は求めないで！

求められてないけど、でも、何を話せばいいの？ もう話さないわ、お茶を出して、

もし食事するっていうなら食事を出して、「美香さんをください」って言われたら、

「はい」でいいの？ 「はい」って言えないような相手だったら？

美香を信じよう、そうよ、美香が選んだ人ですもの、あの子は頭がいいんだから。

それにすぎるしかないわ！

ガチャッ

玄関のドアが開く音！

「おかあさーん！」

きた！

きたきたきたきたきたきたきたきたきたきたきた！

おとうさん！ 来たわ！ 来たわ！

「おかあさーん！」

「は、はい」

できるだけさりげない声で返事して、玄関にパタパタパタッて。

フウウウウウ

「美香の母でございます」

お辞儀して

あら、素敵な靴、さすがニューヨークね。

スーツも、なかなか素敵じゃない、趣味がいいわ。

顔

あ

おじさん

美香...

こんなおじさん...

ン？

なんか

ン？

なに？

「おかあさん、ダニーさんが来たよ」

「だれ？」

「ダニーさん！」

え？

ハ？





## 風船に針でパーン

---

私ね、脳貧血起こしたの、多分脳貧血だと思うんだけどね。

スッと目の前が真っ白になってね、気がついたら、床に倒れてたの。

美香と、ほら、なぜなのか、まあ、とにかく、あわてて傍にきたのね。

ふっと見たら、ほら、あの、土足であがってたのよ。

「ドント・シューズ！」

とっさに言ってたわ。

「Oh, sorry. Should I take off my shoes?」

そしたら、美香がブツてふき出したのよ。

「ドント・シューズって！」

笑うの、笑うのよ？

「しかも通じるって！」

ハハハハって笑うの。

笑いごとじゃないと思うの。

まあいいわ。

それより...

今、客間にいるの。

ここに美香のお相手をお通しするつもりで用意していたからね。

沈黙。

できれば私、ちょっと出かけたいわ。

頭を整理したいっていうのかしら？ 冷やすと言ってもいいわ。

脳みそが混乱し過ぎて、逆に空っぽよ。

あら？ 畳、そろそろ新しいのにしないとダメかしら？

そうね、おとうさんが死んでから、お客様もめったに来なくなったから、そのままだったわ。

「おかあさん」

「ン？」

「何か言ったら？」

「なにを？」

「それじゃ、私、カプチーノいれてくるよ」

「座りなさいっ！」

私の声、自分でもビックリするほどドスがきいてたわ。  
おそらく目も血走ってるんじゃないかと思うの。  
あの美香が、「はい」って、おとなしく座りなおしたんだから。

「Ah... How are you?」

「美香」

「なに？」

「なんて言ってるの？」

「これくらいわかるでしょ？」

「わからないから聞いているの」

「元気ですかって」

元気ですか？ さっき脳貧血起こして倒れた私に元気ですか？

「元気ですって言って」

「それくら」

「言って」

多分、私、今、瞳孔が開いてるんじゃないかしら。

「“She said she’s fine”」

「Good... good」

畳の目がポワーッと見えるわ。

「おかあさん」

「ン？」

「ダイニングに移動しない？」

「なにが？」

「ダニーさん、畳じゃ座りにくそうだしさ」

「行けば」

「行けばって、おかあさんもだよ」

「私？」

私はね

「寝るから」

「ハァ～？」

「美香、おかあさんね、吐くと思うの、胃液があがってきてるわ」

本当よ

「わ、わかった」

スッと立ち上がって、そのまま階段上って、二階の寝室に入って...

ベッドにバターーン

そのまま意識がなくなったわ。

目を開けたら

真っ暗

サイドテーブルの照明をパチンとつけて

時計を見たら 7時ちょっと過ぎ

疲れてたんだわ。

疲れるにきまってるわよ、朝からパンパンに緊張して、掃除して買い物して料理して、メイクや服まで神経ピリピリになって疲れない方がおかしいわ。

なんにも考えられないわ。

なに？

あのときの私をたとえるなら、そうねえ、パンパンになった風船に針？ 一突きでパーーンよ。たとえばね、玄関を開けたら象がいるの。玄関の前に象がいるなんて日常でありえないでしょ？ そういうとき、脳って処理できなくなるのね、何を見ているのかわからなくなるのよ。目が見ているものをまったく把握できないの、象だなあってすぐに思える？ 思えないわ。こんなこと考えてるってことは、まだ正常な神経じゃないってことね。

「おかあさん、起きてる？」

ドアの外から声がするわ。

美香、たとえ娘だといってもね、今あなたに対して怒りでいっぱいなのよ。

いっぱい過ぎて何も感じないくらいにね。

「入るよ」

入っていいとは言っていないわよ。

「大丈夫？」

なわけないでしょ。

「ダニーさんも心配してるよ」

「おかあさん、まだ具合悪い？」

「帰ってもらって」

「ハ？」

「帰ってもらって」

「なんで？」

なんでは、こっちの台詞よ。

「わざわざ来てくれたんだよ？」

来てくれなんて頼んでないわよ。

「おかあさんてば！」

「美香」

「なに？」

「やっていいことと悪いことがあるのよ」

「ハ？」

「おかあさんは、今日、あなたのお相手が結婚のご挨拶にいらっしゃると思って、朝からずっと神経パンパンにして、いろいろ準備してたのよ、それなのに…」

「彼が来るなんて言っていないじゃん」

「娘が、連れてきたい人がいるって言ったら、そうだと思うでしょ！」

「黙ってたのは悪かったけどさ、ダニーさんが来るなんて言ったら、おかあさん、絶対パニックっておかしくなっちゃうと思ったからさあ」

「言わなくてもなったでしょ！ さっきだって倒れたでしょ！」

「ほらね、だから、パニックる時間は短い方がいいと思ってさ」

「そういう問題じゃないでしょ！ 時間じゃないでしょ！」

「おかあさん、落ち着いてよ」

「どうやったら落ち着けるのよっ!？」

「そうだけどさあ」

「なんで呼んだのよっ？ 私に内緒で、なんで呼んだのっ？」

「私は呼んでないよ、ダニーさんが来るって言ったんだよ」

「いつよっ？」

「だから、一週間くらい前」

「なんで勝手に了承したのっ？」

ハァ～って、ため息つきたいのはこっちよ！

「あのね、一週間くらい前にね、ダニーさんがSkypeに入ってきたの」

「なんで美香のSkypeに入ってくるのよっ？」

「おかあさんがアメリカにいたときに、ダニーさんのIDでつながってたじゃん」

あ

「だ、だからって、勝手に人の娘のSkypeに入ってくる？ なによそれ？」

「だからさ、ダニーさんは、私におかあさんのSkypeのIDおしえてくれって言ったの」

「おしえたのっ？」

「おしえてないよ！ おかあさんはSkypeで話すのはイヤだって言ってるって伝えたの」

美香、ちょっとあなたを許す気になれたわ。

「そしたら、君のおかあさんに会って話がしたいから、日本に行くって伝えてくれって」

「なんで伝えなかったのよっ？」

「だから、それは言ったじゃん！ おかあさんパニックと思ったからさあ」

「なんで断らなかったのよっ？」

「だって、おかあさん、ダニーさんのこと好きなんでしょ？」

好き？

「わからない...」

「わからないって、どういう意味？」

「どういう意味って、アイ・ドント・ノウよ」

「あ～、おかあさん、ヘンになってるよお」

「ヘンになってるってどういう意味っ？」

「えっとさ、そうじゃなくて、おかあさん、ダニーさんのこと嫌いになったの？」

嫌いになった？

「美香...」

「なに？」

「おかあさんね... 忘れようとしたの... もう忘れたかったの...」

だって

「そうじゃないと... 辛くて... やっと... やっと断ち切れたと思ってたの...

それなのに... なんで今頃になって... なんで来たのよ... なんで...」

「おかあさんと話がしたかったんじゃない？」

「何の？」

「それは私はわからないよ」

「美香...」

「なに？」

「どうしたらいい？」

「ご飯食べさせてあげたら？」

「ハ？」

「もう7時半だしさ」

ご飯...

そう...ね...

それくらいなら...

そうね...

美香の後ろについて下に降りて、ダイニングキッチンに入ったら いたわ。

「Romie, are you ok?」

何か言ってるわ。

「美香」

「なに？」

「なんて言ってるの？」

「今のはわかるでしょ？」

「頭が英語モードになってないから音にしか聞こえないのよっ！」

「大丈夫かって聞いているの」

「大丈夫じゃないわよ！」

「そう言えばいい？」

「え、あ、もう、大丈夫だって言っておいて」

私はそのままキッチンの中に入って、スパゲティを茹でるお湯を沸かして...

なんでこのミートソースにしちゃったかしら...

これじゃまるで、あの人のために作ってたみたいじゃない...

ちがうわよ、美香の彼氏だと思って...

ミートソース・スパゲティとサラダとヨーグルトゼリーと、ピンクのバラの花。

これじゃまるで、まさに、待ってました的な食卓だわ。

「美香」

「なに？」

「私が、ほら、来るのを知らなかったって、そこの、ほら、言ってるの？」

「言っていない」

「言ってるっ！」

「わ、わかったよ、言うよ」

冗談じゃないわ、これは美香の彼氏のために作ったんであって、そういう意味じゃないわよ。

美香と、ほら、なんていうの、二人で何か話してるわ。

顔なんか見てないわ、直視したのは、最初のあの衝撃の一瞬だけよ。

「あとで、ちゃんと話をするって」

「何の？」

「だから、あとで話すって」

「誰に？」

「おかあさんにだよ」

「イヤよ！」

「そう言えばいい？」

「え、それは、とにかく、早く食べてって言って、スパゲティが伸びちゃうから」

なんでこのミートソース作っちゃったかしら...

よりもよって、このミートソース...

お寿司とればよかったわ。

どっちにしても、私は一口も入らないけどね。

夕食の間、美香と、ほら、とにかく、何かしゃべってたわ。

今は、二人で後片付けしてるわ。

なんで私のキッチンで後片付けしてるのっ？

あたりまえみたいになっ？

お風呂入ろうかしら？

お風呂入ってる間に帰ってくれないかしら？

そんなわけないわね、高い飛行機代出して、わざわざ...

なんで来たのよっ？

「美香！」

「なに？」

「薬飲むから、お水ちょうだい」

「何の薬？」

「更年期障害のよ！」

「わ、わかった」

お水持って、薬持って、となりのリビングに　　そうよ、逃げたわ。

ひとりになりたいの。

ひとりにしておいて。

来ないで！



## 夜と朝

---

来たわ。

美香がこんなときに限って気をきかせてカプチーノ持って、来たわ、二人。

な       なんで隣りに座るのよ？

ズリッて端に移動したわ。

「Romie, Mika told me....」

何か言ってるわ。

「美香」

「私が、おかあさんはダニーさんが来るのを知らなかったって言ったから、  
驚かせてしまっでごめんって、まあダニーさんが謝ることじゃないんだけどさ」

どっちもどっちよ。

「なんで来たのか聞いて」

そうよ、それを言ってさっさと帰ってよ。

「飛行機でだって」

「交通手段じゃなくて理由を聞いているのよっ！　　どういう質問したのっ!?!」

「だって、おかあさん、笑わないからさあ」

「笑えると思うっ？」

「わかったよ、ちゃんと聞くよ」

美香...　あなたが娘じゃなきゃ首しめてるわ。

娘でも首しめたいくらいよ。

「おかあさんに会いたかったんだって」

なにそれ

「それじゃ...　私に会うために...　高い飛行機代出して、わざわざ日本に来たの？」

「そうじゃないの？」

「聞いて！」

なによそれ

私に会いたかったって

ずっと何の連絡も寄こさなかったくせに

「そうだって」

「なにが？」

「だから、おかあさんに会うために高い飛行機代出して、わざわざ日本に来たって」

「バッカじゃないっ!？」

「バッカじゃないって言えばいいの？」

「勝手に言いなさいよっ！」

「“She said, are you silly?”」

「Yes, I am」

隣りで何か言って笑ってるわ。

よく笑えるわね、こんな状況で。

「それで？ 私に会ったでしょ？ 帰るの？」

「おかあさんが聞けばいいじゃん！」

「英語が出てこないのよ！ 何言ってるのかもわからないの！ 音よ、音！ 音！」

「わ～かったよお、もう」

もう帰ってよ

なんなのよ 会いたいからって なによそれ

「おかあさんと話がしたいんだって」

「何の？」

「私が聞くの？」

「あたりまえでしょ！ 私には」

「音ね、はいはい」

話なんてないわよ

何を話すのよ

お元気ですか？

さっき言ってたわよ

「あのさあ、できれば二人きりで話したいって」

えっ？

「イヤ！」

「イヤって言えばいい？」

「え、それは、だから、あ、美香にも言えないようなことなら聞きたくないって言って」

二人きりで話したいって、なに？

何の話？

もしかしたら、恋人ができて結婚することになったとか？

だったら、手紙でいいわよ。美香にSkypeで伝えてくれでもいいじゃない！

ていうか、いちいちそんなこと私に言わなくてもいいわよ！

「おかあさん、やっぱり二人で話した方がいいと思うよ」

「なんでよ？」

「だって...」

「何って言ってるの？ いいから言って！」

「おかあさんのこと愛してるって」

ハ？

「そ、そ、そんなことを、美香に言ったの？」

「だって、おかあさんが、私に言えないことなら聞かないって言ったからでしょ」

「言ったからって、美香に言うっ？」

「だから二人で話した方がいいってば」

「美香...」

だから...

「音にしか聞こえないの... 何を言ってるのか... 本当にわからないの...」

もうどうしていいか... 美香... おねがい... たすけて...」

涙が出てきちゃって...

美香が私の手をにぎろうと...する前に...

なんで、この、隣りに座ってる、肩に手を置くのっ？

その手をふりほどきたくて、パッと立ち上がって、

テレビの傍のティッシュ取りに行ったの。

立ち上がったまま、ポーッとカーテンの模様を見てたわ。  
カーテンの模様が見ていたかったわけじゃないけどね。  
他に見るものがなかったからよ。

「おかあさん」

なに？

声も出ないわ。

「今ね、おかあさんが混乱してるし、かなり疲れてるからって、ダニーさんに言ったの」  
誰のせいで混乱してかなり疲れたと思ってるのよっ？

「ダニーさんも、そう思うって言って、今日はゆっくり休んでほしいって」  
言われなくても休むわよ。

「明日ゆっくり話をしようって」

ハ？

「明日？」

「うん」

「明日もいるの？」

「いるよ」

「なんで？」

「なんでって、一週間滞在するって言ってたもん」

「一週間？」

「うん」

「一週間も日本で何するの？」

「それはわからないよ、聞く？」

「い、いいわ、べつに」

私には関係ないわ。

観光でもなんでもすればいいわよ。

「それじゃ、今日はもうホテルに帰るのね？」

「ここに泊まるよ」

「ハ？」

「ダニーさんはホテル予約してたんだけど、それがさあ、帝国ホテルだよ？　すごいよね」

「どこのホテルでもいいわよ！　ホテルに泊まればいいでしょ！」

「もったいないから家に泊まってって、私がキャンセルの電話しちゃった」

「ハアアアアッ？」

「ダメだった？」

「ダメだったって、今頃聞くのっ？ 勝手にキャンセルした後でっ？」

「ごめんなさい」

あ... 美香がシュンとしちゃったわ。  
きつく言い過ぎたかしら？

「まあ、ちょっと、おかあさんも...」

「おかあさんの部屋でいいよね？」

「なにが？」

「ダニーさんが寝るところ」

「なんで私の部屋なのよっ？」

「おとうさんのベッドもあるからいいんじゃない？」

「客間があるでしょ！」

ちょ、ちょっと待って...

もう泊まる前提で話が進んでるの？

「でも、せっかくなんだから二人でさ」

「客間よ！」

あ... 部屋を指定しちゃったわ...

泊まらせるってことになっちゃったじゃない...

「お風呂に入るわ」

「わかった」

「その後は... 適当にやってちょうだい、おかあさんは寝るから」

気がついたら朝よ。

6時半。

いるのかしら？

本当に来たの？

来たわよ、だから私があんなになっちゃったのよ。

お風呂に入ってから、どうやって自分の部屋に入って寝たのかさえ覚えてないくらいよ。

朝食なんか作らないわよ。

今日は一日中寝てるわ。

その間にとっとと帰ってよ。

この年になって一日中寝るってことは不可能なのよね。

どう頑張っても、目が覚めちゃって、何時？ 9時半。

下から声が聞こえるわ。

二人とも起きてるのね。

パンの焼ける匂いがするから、美香が朝食作ってるのね。

何を作ってるのかしら。

あの、ほら、あの人は、目玉焼きは嫌いなのよ、オムレ... どうでもいいわよ。

はあああ、起きるわよ、起きればいいんでしょ。

ダイニングのドアの前。

二人で楽しそうに話してる声があるわ。

ダイニングを通らないと仏間兼客間に行けないのよ。

毎朝、起きたらいちばん先に、仏壇にお水をあげて、おとうさんに朝の挨拶するのよ。

しかたないわ。

はああああ

ガチャッ

「おかあさん起きたんだ」

「Good morning」

私が朝いちばんに挨拶するのはおとうさんよ。

「お、おかあさん、どこに行くの？」

「おとうさんのところ」

「えっ？ 死ぬ気？」

「仏壇よ！」

まったく、いつも朝は私が最初に起きてるから知らないのよ。

たまには私より早く起きてみなさいよ。

それにしても死ぬ気って、どういう発想よ？

まあ、ほら、あの、まあ、あの人なりに？ 考えたんでしょうね。

お布団が巻き寿司みたいにクルクル巻いて並べてあるわ。

どうやって、こんなにキチッと巻いたのかしら？

そんなことはどうでもいいわ。

チーン

おとうさん                      言葉が出てこないのよ

どう思う？

どう思うって聞かれても困るわよね。

ゆうべ、ここで、一緒に寝たのよね？

一緒に寝たってわけじゃないけど。

どう思う？

どう思うしか出てこないわ。

どうしたらいい？ なにを？ わからないわ。

おとうさん、私ね、必死で、やっと、なんていうのかしら、だからね

「Romie」

「ギャーーーーーーーーーーーーーーーーッ！」

「Oh, I'm sorry! I didn't mean to scare you!」

こ 来ないで そばに 来ないで

「おかあさん、どうしたの？」

「I scared her」

「“No worry. That is her”」

「Actually I know」

なに？ なにを二人で言って笑ってるの？

勝手に二人で笑ってなさいよ！

コーヒー飲むわ！

このテーブルの上のこれは なに？

スクランブルエッグのつもり？

そぼろだわ。

もっとちゃんと料理教えておかないとダメね。

美香と、ほら、あの人もこっちに来たわ。

なんで私のあとをついてくるのよ!?

「おかあさん、そのスクランブルエッグ、ダニーさんが作ったんだよ」

ハ?

「本当はオムレツ作るつもりだったんだって。食べてみたら？ 味はいいよ、ハハハ」

なんで私のキッチンで勝手に料理してるのよっ!?

「食欲がないの、コーヒーちょうだい」

な　なんで　私の正面に座るのよっ!?

目を合わせなきゃいいんだわ、横向いておくわ。

「おかあさん、今日ね、表参道行こうってことになったの」

「あ、そう」

ちょっとホッとしたわ、これで一人になれるわ。

表参道でも東京タワーでも、どこでも行ってちょうだい。

「おかあさんは表参道行ったことある？」

「ないわよ」

表参道なんて、東京に住んでもテレビで見るくらいだわ。

「だったら、私が二人を案内してあげるよ」

「二人？　二人って、だれ？」

「ダニーさんとおかあさん」

「わ、私も？」

「あたりまえじゃん」

「お、おかあさんはいいわ、留守番してるから」

「それじゃ意味ないじゃん」

「なんの意味よっ？」

「おかあさん、だったら私、友だちのところに行くよ？　いいの？」

「え？」

そんなことになったら...

この、正面に座ってる人と、二人きり...



「わかったわよ... 行けばいいんでしょ...」

「じゃ、きまりね！」

なんで、いつも私って、こんな目に遭うのかしら...

何か悪いことした？

前世？ そんな前のことなんか覚えてないわよお。

## 表参道なうっていの？

---

ここが 表参道。

へええええ

日本とは思えないわ、日本だけど。

うちの近所とは全然違うわねえ。

なんだかもうオシャレなお店がズラッと、はあああ、すごいわねえ。

けっこう外人も歩いてるのね。

だから、ほら、私の前を歩いてる、あの人も、そんなに目立たないわ、電車の中ほどはね。

電車の中では、もう、なんていうのかしら、あっちにいるときはそんなには思わなかったけど、

背が高いのよ、とび抜けて高いの、おまけに外人だから、なんだかもう車内の視線が、

私なんてもう離れたところに移動したわ、できれば隣の車両に移動したかったわ。

美香が生き生きしちゃってるわ。

そうよね、若者の街だものね。

腕なんか組んじゃって、楽しそうに話してるわ。

知らない人が見たら、お金持ちの外人のおじさんと若い日本人の恋人に見えるかもね。

見えるわね、二人ともあんなにニコニコしちゃって。

いいんじゃない？ お似合いよ。

似合っちゃダメだわ、美香の相手があんなおじさんじゃダメよ、もっと若くないと。

私の方が浮いてる気がするわ、私みたいなおばさんがなんでここにいるの？って感じよ。

あら、きれいな色のバッグ。

でも、こういう繊細な色のって、すぐ汚れるのよね、持ったことはないけど。

だいたいこんな色のバッグに、どんな服を合わせたらいいの？ この色と同じ服？

それこそどこに着て行くのって話だわ。

「おかあさ〜ん！」

ン？

あら、離れちゃってたわ。

い、いいわよ、戻ってこなくて、後ろの方からついていくから。

「欲しいの？」

「何を？」

「そのバッグ」

「見てただけよ」

「買ってもらえば？」

「ハ？」

「ダニーさんに」

「見てただけよっ！」

冗談じゃないわ！

こんなバッグ、欲しいわけじゃないし、なんで、買ってもらわなきゃならないのよ!?

「ねえねえ、あっちの方に素敵なフラワーショップがあるんだよ」

フラワーショップ？ 花屋さん？ 表参道に？

「ちょっとふつうのと違うの、お茶するところもあるからさ、行こうよ」

好きにして...

あら？ この角のお店のロゴ、美香がいつも買ってくるシャンプーのじゃない？

私も使ってるけど、へえ、こんなオシャレなお店のだったのねえ。

「入る？」

「え？」

「シャンプーとコンディショナーも少なくなってきたから買おうよ」

え...

シャンプー買うのに、この、つき合わせるの？

まあ、いいわ、美香のテリトリーだわ。

「こちらは当店で扱っておりますハーブティーでございます。よろしければどうぞ」

え？

あ、試飲？

「あ、ありがとうございます」

あら、いい香り、ほんのり甘みもあるのね、なんだかちょっと落ち着くわ。

あ...

飲んでるわ。

いいけど、べつに、関係ないわ。

「おかあさん、いつも使ってるのってこれだよ」

ああ、そうね。

へえ、こんなお店のだったとはねえ。

どおりでいいと思ったわ。

あら？ 美香が、連れて、角の、Men's？

ちがうわ、あの人が使ってるのは、なんだかもっと高そうな、関係ない、関係ない、関係ない。

「ダニーさん持ってきたからいらないって」

そんな会話、私にいちいち言わなくていいから。

「それじゃ、シャンプーとコンディショナーだけ買ってくるね」

あ、お金渡してあげる？

いつも美香に買わせてたか、あ—————っ！

「美香っ！ おかあさんのお財布！ ほらっ！」

「でも、ダニーさんが買ってくれるって」

「美っ香っ」

おかあさんの目を見てっ。

美香が黙って私の財布を受け取って、あの人に何か言って、私のお財布からお金出したわ。

まったく何考えてるのっ!? シャンプー買わせようとするなんて。

買わせようとはしてなかったけど、とにかく、やめて、たのむから。

はあああ、疲れる

お店を出たら、向かい側の、これは何のお店？ ソフトクリーム？

でも、ウィンドウのディスプレイは、宝石のお店みたいな...

「ここのチョコレート美味しいんだよ、高いけど」

そうね、高そうだわ。

「チョコレート・ソフトが美味しいの、食べる？」

え？

チョコレートのアイスクリーム...

「おかあさんはいいわ、寒いから」

「そんな寒くないじゃん、お店の中で食べればいいし」

「美香...たち...だけ、食べてくれば？」

「おかあさんが食べないならいいよ」

帰りたい...

「こっちの方」

美香はまた、ほら、腕を組んで、あ、荷物持たせてるっ。

い、いいわ、関係ないわ。

ここが 花屋？

なんだかモダンな建物ねえ。

え？ なに？ 私が入るまで待つてなくていいのよ！ ここは日本よ！

入らないとずっと待つてるわね、わ、わかったわよ、もう。

わあ

これが花屋さん？ ふつうバケツに入った花がいっぱいあるわよね？ ないわ。

なにこれ？ 箱に入ってるわよ？ これってアートフラワー？ ちがうわ。

あ、そこのがブリザーブドで、こっちは生なのね、これが生花？ へえ。

世の中って、まだまだ知らない世界がいっぱいあるのねえ。

ン？

えっと

「美香」

「なに？」

「あの、なんだか、横で、なにか言ってるんだけど」

私に話しかけないでくれるかしら、どうせ音にしか聞こえないんだから。

「おかあさんに、これを買ってもいいかって」

「ハ？」

「おかあさんにプレゼントしたいって、このピンクのバラの箱」

ヤ           メ           テ——————ッ！

誰もいなかったら、叫びたいっ！

「いない」

「おかあさん、気持ちはわかるけど、少しはさあ」

「美香、おかあさん、ちょっと外に出てくるわ、ちょっとだけだから」

「わかった」

店から出て、人通りの少ない角に...

もう...

耐えられない...

涙が... もう... やめてよ... なんて... こんな...

はああああ

傷口に塩を塗られるっていうの... そんな感じよ...

はああああ

鼻かんで、ファンデ落ちちゃったかしら？ コンパクトは... あったあつた。

鼻のところだけ、ちょっと、これで大丈夫ね。

私の目... 鬼みたいな目つきだわ。

なるでしょっ？ なるわよっ！

なんで 二人とも店の前で待ってるのおおおっ!?

「おかあさん、どうしたの？」

「え、あの、ちょっと、くしゃみ出そうになっただけ」

「くしゃみ？」

「ほら、多分、花粉よ」

「おかあさん、花粉症だったっけ？」

「ちがうけど、きっと、ほら、高級なお花だから」

「ハハハ！ 高級だからってくしゃみするう？」

アレルギーよっ！

ピンクのバラ・アレルギーっ！

不思議な壁ねえ。

異次元だわ。

なんで私の横に座ってるのかしら？

へえ、テーブルの中にまで緑の葉っぱやらなにやら入ってるわ。

真正面よりはマシね、窓の外でも見てるわ。

いいお天気ねえ、秋晴れね。

早く帰りたいわ。

「おかあさん」

え？

「な、なに？」

「ダニーさんが、おかあさんが疲れてるんじゃないかって」

疲れてるわよ、死ぬほど疲れてるわよっ、今すぐ帰りたいわっ！

「大丈夫よ」

誰のせいでこんなに疲れてると思ってるのよっ!?

だいたいなんで隣りにいるのよっ!? ていうか、日本にいるのっ?

ていうか、私の家に来たのよっ?

「それじゃ、また表参道に戻って...」

「えっ、まだどこかに行くの？」

「だったら、私、友だちに電話して、ここから別行動でもいいよ」

この子... 私の弱みにつけ込んでるわ...

確信犯よっ！

「わかったわよ... 行くわよ...」

私... イジメに遭ってるような感覚なんだけど...

私の前を、腕を組んで歩いてるわ。

美香がニコニコしてる。

そういえば、美香はおとうさんとこうやって腕を組んで出かけたことはなかったわね。

小さい頃は、よく三人で遊園地に行ったりしたけど。

美香は、おとうさんと出かけてるような気持ちで楽しいのかしら。

そうかもしれないわ。

だって、今日の美香は子どもの頃の美香みたいに、あっちに行ったりこっちに行ったり、

すごく楽しそうなもの。

そうだとしたら、まあ、美香のためには、まあ、よかったのかもしれないわね。

私は帰りたいけどね。

できれば、その地下鉄の入口の階段駆け下りたいけどねっ。

その衝動と闘ってるけどねっ。



これはデジャブ？

「わあ、これ可愛い！」「これ欲しい！」って、次から次と手にとって、  
試着室に入っていき姿、見たことがあるわ、デジャブじゃないわよ、実際あったわよ。  
金髪だったけど、その前に、美香が10歳くらいのときにはそうだったのよ。  
あのときはその美香と同じだと思って、今は美香がまたその美香になってるってだけよ。  
試着室の前に、ポップっていうの？ レトロ？ それぞれ違う椅子が置いてあって、  
そこに座ってるのよ、隣りに、ほら、あの人も座ってるけど。  
女の服の買い物に付き合うって、退屈っていうか、ウンザリじゃないかと思うの。  
おとうさんは絶対に一緒に来なかったし。ウンザリしてないのかしら？  
どんな顔して座ってるのかわからないけど、まあいいけど、関係ないけど。  
あ、膝がこっち向きになった、えっと、座ってるのも暇だから、見てみる？ 買わないけど。

あら、この黒のジャケット、裏地がプリント模様できれいねえ。  
4万8千円、高いんだか適度な値段なのかよくわからないわ。  
こっちはワンピース、へえ、なんだかオシャレねえ。  
なんだかこれ、ほら、オードリー・ヘプバーンぽくない？ 形がクラシックで素敵ね。  
もうちょっと、かなり、若かったから、こういうの着てみたかったわ。  
「Romie」

い つ の 間 に？

「It will look good on you」  
美香、早く出てきて早く出てきて早く出てきて早く出てきて――――っ  
「おかあさ～ん！」  
グッドタイミングよ――――っ！  
「はいはいはいはい！」  
「これ、どう思う？」  
「似合う似合う、それにしなさい、それに」  
「え？ 買ってくれるの？」  
「買うからそれにしなさい」  
「他のも着てみる」

えええええ...

はああああ

ドカッと椅子に座ったわ、もう...  
あ... 来た... また横に座った...  
話しかけないで話しかけないで話しかけないで  
あら？ 今、フツて笑わなかった？  
左耳に聞こえたんだけど？  
なんで笑うのよ？  
なんで笑うの？って、べつにどうでもいいわ。

「おかあさ〜ん！」  
はいはいはいはいはいはい。  
あら、素敵。  
「似合うわよ、さっきのよりいいわ」  
「マジ？ “Dan, what do you think?”」  
「Perfect!」  
私の意見だけじゃ足りないわけ？  
「それじゃ、これにする」

よかった... 終わるわ。

「ねえ、これで写メ撮って」  
「お店の中で写真撮っていいの？」  
「ここ、その辺スタッフさんたちがわかってくれるんだよ」  
何回も来てるのね。  
このお店の服なんて持ってたかしら？  
「美香、これ、どうやればいいの？」  
「そっか、いいよ、ダニーさんに頼むから」

あ、そう。  
どうせ私はメカに弱いわよ。

「これ、お願いします」

美香がレジにさっき試着した服を置いて...

いくら？

¥68,000

6万8千円!?

分割にしてもらえるかしら？ 6ヵ月？ 12ヵ月だわ。

「おかあさん」

「な、なに？」

「ダニーさんが買ってくれるって」

「ハ？」

バッカじゃないのっ？ こんな高いもの買ってもらわないでよっ！

「い、いいから！ おかあさん買ってあげるから！」

な、なに？ その挑戦的な目？

「ダニーさんに買ってもらいたいの」

ほら、この子は10歳のときから扱いが大変だったのよ。

キャシーなんて可愛いもんだわっ！

「そう」

好きにすればっ!?

やっと終わったわ。

ウワッ！

ビックリした。

そうだったわ、入るときもビックリしたのよ、本物の犬かと思ったわ。

それにしても、よくできてるわね。

「おかあさん、ダニーさんと写真撮ってあげる」

ハ？

「ななななんで？」

「記念？」

「何のっ？」

「一緒に表参道に来たみたいなの？」

来たっていうか、あなたに脅されて連れてこられただけよ。

「み、美香、おかあさんが撮ってあげる」

「じゃ、ダニーさんとおかあさんの撮ってからね」

「今よっ！ 今っ！」

お母さんの目を見てっ！

イヤだって言ってるでしょっ！

「わかった、それじゃ、ここタッチすればいいだけだから」

あ...

写真を撮るっていうことは...

見なきゃいけないってことだわ...

い、いいわ、顔見ないから。

「撮るわよ」

「オッケー！」

な、なに？ 美香の肩に腕をまわして、いいけどっ。

美香まで腰に手をまわしてニーーッコリしちゃってっ。

ピッ

あら？ 頭切れちゃった。

「美香、もう一回撮るわ」

「オッケー！」

顔は見ないで頭を画面の中に入れてるようにして

ピッ

今度は大丈夫ね、多分...

「ダニーさんが、おかあさんと私のツーショット撮ってくれるって」

「お、おかあさんはいいわよ」

「いいじゃん、おかあさんと二人の写真撮るの久しぶりだしさ」

「まあ... そうね」

でも、待って。

写真を撮ってもらうということは...

見なきゃいけないのよね？

イ、イヤだわ...

下向いてたらダメかしら？

「おかあさん」

「ン？」

「楽しかったね！」

美香の顔が...

子どもみたいに... ニコニコして...

なんだか... ジーンとしちゃって...

「そうね」

目線の高さは変わっても...

あなたに微笑む気持ちは同じよ...

美香が耳元で...

「おかあさん、やっとニッコリしたね」

そう言ったわ。

ごめんね...

ごめんなさいね...

おかあさん...

まだどうしていいのかわからないの...

電車の中よ。

ひとつだけ開いていた席に、美香が「座った方がいいよ」って座らせてくれたわ。

まだ行くつもりだったの、美香はね。

私が、疲れたって言ったの、美香が私の顔が蒼いってあわてて帰ることになったの。

お隣のおばあちゃま、あなたにくらべたら私はまだまだ若輩者ですけど、

多分、今の私の精神的疲労年齢はあなたより遥かに年とってると思います。

はああああ

「おかあさん、もう着くよ」

ン...

あ...

眠っちゃってたわ...

あ、私ったら...

お隣のおばあちゃまの肩に！

「す、すみま」

えっ？

「せん？」

なっ なんで？

い、いつ？

いつ入れ替わったの？

私ったら...

あの人の肩に...

もたれかかって...

眠ってたのおおおおっ？

「美香、な、なんで起こしてくれなかったの？」

「だって、おかあさん、疲れてたから」

「ど、どうして、この、この人が、となりに、いるのよっ？」

「ダニーさんが座ってくれなきゃ、おかあさん座席に寝てたよ」

そ そんな 爆睡？

「Dan, we're almost there」

「OK」

ますます顔が見れないわ、見ようとは思わないけど。

駅から歩いて10分。

ああ、この風景、ホッとするわ。

スーパーに寄っていこうかしら？

「美香、おかあさん、スーパーに寄っていくわ」

「大丈夫？ 今日はお寿司でもとればいいじゃん」

魚が好きじゃない人が約1名いるのよっ。

まして生魚なんて無理よっ。

「簡単なものにするから。何か食べたいものある？」

「なんでもいいよ」

そう言うと思ったわ。

「Dan, do you have any request for dinner tonight?」

聞いてもあなたと同じこと言うわよっ。

「Romie's steamed fish」

わかっちゃったんだけど...

「おかあさんの蒸した魚って、何？」

いつも作ってるじゃない！ なんであなたがわからないのよっ!? 魚のホイル焼きよ！

「それじゃ、行ってくるから先に帰ってて」

「一人で大丈夫？」

「大丈夫よ」

「ダニーさんについていってもらえば？」

「大丈夫だから」

「だって、また倒れたら大変じゃん」

この人という方が倒れる確率が高いわよっ。

「大丈夫だから」

「Dan, could you go to a grocery store with my mother?」

余計なことを言わないで————っ！

「Sure」

シュアじゃなくてっ！

「美香、美香も一緒に来て」

「え～、スーパーに～？」

「来てっ」

おかあさんの目を見てっ。

「おかあさん... 目が血走ってるよ」

そうでしょうよっ。

みんながこっちを見てるわ。

そりゃそうよね、こんな、身長の高い、しかも外人が、このスーパーに来るなんてないもの。  
少なくとも私はこのスーパーで外人に会ったことはないわ。

果物も買っておく？ そうね。

あっちでヨーグルトを買えば、朝食に...

なんで私、日本に帰ってきてまで、あの人の朝食を考えてるの？

いっそ納豆でも食べさせてやろうかしら？ 絶対無理ね。

てことは...

白飯は、あと6日間はダメだわ。

とにかく...

鮮魚売り場よ。

サササササッと必要なものをカゴに入れて、レジに並んだわ。

美香も、あの人も、私にはついてこれてないわ。

どこかでウロウロしてるわね。

ここは私の庭みたいなものよ。

しかも、「Edyをお願いします」、アメリカにはないのよ、ポイント貯まるのよ。

そして、日本では自分で袋詰めするのよ、いつもはエコバッグ持ってくるんだけどね。

ヨイッショ...

「I'll get it」

い つ の 間 につ？



「おかあさん早いから、ここで待ってれば来るなあと思ったら、来たよ」

美香、あなた、たしか、私を心配したから一緒に来たのよね？

なぜついてこないの？

なぜ待ち伏せっ？

いいけどっ。

そして、あなたの手には、ビールの缶が入った袋があるけど？

いつ買ったの？

まさか、また買わせたんじゃないでしょうねっ？

買わせたわ、絶対買わせたわ。

もういいわ！

とにかく、帰る！

## 美香の爆走

---

はあああ 疲れたああああ  
このまま寝てしまいたいわ  
着替えなきゃ

ハ

寝てたわ。  
何時？ 5時半ちょっと過ぎ、夕食の準備しなきゃ。  
あ、着替えなきゃ。

リビングから楽しそうな話し声がしてるわ。  
そっちで勝手にやっててちょうだい、私は夕食作るわ。  
あっ、美香...  
こんなときに限って気をきかせてご飯炊いてるわあああ。  
どうしよう、チャーハン？ ピラフね、ホイル焼きが洋風だから。  
あとは？ 野菜スープ？ お肉もないとダメなのよ...って、  
なんで私、自分の家でまで、あの、ほら、それ用のメニュー考えなきゃいけないのっ!?

「あ、おかあさん、起きたんだ」

起きてるわよ。

「ピラフ作るの？ ホイル焼きにはいつも白いご飯じゃん」  
だから...

「あの... ほら... 白いご飯が... 好きじゃないのよ」

「ふ〜ん、ダニーさんの好みに合わせてあげてるんだあ」

「ちがうわよ！ 残されるのがイヤだからよ！」

「とか言っちゃって」

「あのね、おかあさんは、茄子が大好きなのよ」

「突然なんで茄子？」

「おとうさんが茄子が嫌いだから、おとうさんがいるときに茄子を出したことがある？」

「憶えてない」

「お、憶えてないって... そ、それじゃ、美香がいるときに、カボチャを出したことがある？」

「出ても食べないし」

「出てないのよっ！ 小さい頃は好き嫌いをできるだけなくしたけど、

カボチャだけはダメだから、あなたがいるときはカボチャ料理は作ってないでしょ！」

「で？」

「でって、なに？」

「カボチャがどうしたの？」

「だからっ、誰であろうと、嫌いなものは出さないっていう習性があると言いたいだよ！」

「ああ、はいはい」

はいはいって、そんな言い方したら、まるで私が言い訳してるみたいじゃないっ!?

「ねえねえ、これ見て」

なに？ スマホ？

「ほら！」

ああ！ 美香が買ったワンピースの写真！

「似合ってるわねえ」

「だよね」

あ... 後ろの鏡に... 見ない見ない。

「あと、ほら」

美香と... 美香の顔だけ見るわ... ニコニコしちゃって。

「これはおかあさんと」

あら、美香と顔を合わせて微笑んでる...

「これ、いい写真だよね」

「そうね」

撮った人が...だと思うと、ちょっと複雑だけど。

「あと、この三連発が最高だよ」

どれ？

え？

ハ？

なにこれ――――っ？

「これが、おかあさんがダニーさんの肩にもたれて、ダニーさんがおかあさんを見てるの」  
な、な、なんでこんな...

「これは、ほら、ダニーさんがお母さんの肩抱いてるの」

ハアアアア？

「これが最高だよ」

見たくないんだけど...

「ほら、おかあさんがもうダニーさんに膝に倒れかかって、ダニーさんが支えてるの」

な　ん　な　のっ　これは————っ？

「みっ　美香っ、なんで、こんな、写真、撮ったのっ!？」

「おかあさん可愛いなあとと思って」

「消して！　早く消して！　消してっ！」

「この中のを消してもいいけど、もうパソコンに取り込んでしまった」

「ヘッ？」

「ダニーさんのパソコンにも送ったし」

「ハァァァアアアッ？」

「この、おかあさんを見てるダニーさんの目がいいよねえ」

見たくないわ、そんなもの、玉ねぎスライスしなくちゃ。

「おかあさんの肩を抱いてってというのは私が言ったんだけどね」

ハァァァア？

もう声も出ないわ。

「美香...　手伝って...」

「何すればいい？」

余計なことをしないでくれればいい...

夕食の時間よ。

疲れちゃって、食欲がまったくないわ。

美香と、あの人は、なんだか楽しそうに話しながら食べてるわ。

「...だって」

ハ　ポーッとしてたわ。

「な、なに？」

「やだあ、聞いてなかったの？ ダニーさんが、おかあさんの料理がいちばん好きだって」

「あ、そう」

なんだか疲れすぎて何も感じなくなっちゃってるわ。

「You have a great cooking teacher」

「I know, but I prefer eat to cook」

「Mika, learn how to cook from your mother」

「Yes, Daddy」

ン？

今 ダディって聞こえたけど... 聞き間違い？ そうね、きっ...

ン？

なんとなく、私の正面に座ってる人もフリーズしてる気配なんだけど...

「Good girl」

声が... 戸惑ってるわ...

美香さん、あなたは笑ってるけど？

明日からカボチャ料理オンパレードにしてやりましょうか？

なんだか知らないけど、また美香とあの人が後片付けしてるから、私は、そうね、お風呂入ってこよう、疲れたもの。

はああああ

やっぱり湯船にゆったり浸かるっていいわね。

癒しのラベンダーの入浴剤たっぷり入れたわ、癒して欲しいわよ、本当に。

鏡に映る私の顔、やだあ、隈ができるわあ、どれだけ疲れてるのよおお？

美香の暴走のせいよ。

あの子、あんな子だった？

パキパキしてて今どきではあるけど、もっとおとなだったわよ？

なんだかまるで、まさに10歳のときの、突然マセたけど子どもみたいなときと同じだわ。  
私に何かの復讐してるのかしら？  
復讐されるようなことした？ してないわよ！  
じゃ、なんなのよっ？

お風呂からあがって、お水を飲みにキッチンに来たら、リビングから笑い声がするわ。  
まあ二人で楽しくやってちょうだい。  
ビールでも飲もうかしら？

「おかあさん」  
「ン？」  
「次、私入ってくるね」  
えっ？  
「まっ待って！ あの、ほら、お客様が先よ、こういうときは」  
二人きりになっちゃうわ。  
「そっか、じゃ、入るように言ってくる」

明日の朝は何を作ろうかしら？  
っていうふうに冷蔵庫の中を見ている私の背後を通った気配がしたわ。

ビール飲んで寝よう。  
プシュッ  
グビグビグビッ  
ハー———ッ！ お風呂上りのビールは美味しい！

「私も飲もうかな」  
「お風呂から上がったからの方がいいんじゃない？」  
「一本くらい平気」

ダイニングの私の前に座って、プシュッとビールを開けるあなたに聞きたいことがあるのよ。

「美香」  
「なに？」  
「さっきの、あの、夕食のときの、あの、あれは...」

「ダディって呼んだこと？」

すぐにわかったってことは、かなり意図的だったのね。

「あれは、なに？」

「冗談だよ、ふざけただけ」

「あのね、冗談でも、言っていることと悪いことくらい、もうわかるでしょ？」

「おかあさん、私、一人っ子じゃん？」

「そうよ？」

だって、おとうさんが前立腺を...

「おかあさんも一人っ子だからわかると思うけどさ、一人っ子って、

まわりにおとなしかいないから、親が今自分に何を欲してるかって、つい感じちゃうんだよね

」

「私が欲してたっていうの？」

「おかあさんじゃないよ、ダニーさん」

「ハ？」

「まあ欲してたっていうか、今日一日一緒に出かけて私も楽しかったし、

ダニーさんが私のこと娘みたいに扱ってるのがわかったんだよね」

だからって...

「おかあさん、私がダディって呼んだときのダニーさんの顔見てないでしょ」

見てないわよ... でも... 声は... 戸惑ってるみたいに...

「ダニーさんの目が一瞬でパーッと赤くなったんだよ、泣きそうみたいな？」

え？

「それで、ああ、やっぱりなって思ったの」

美香... あなたって... 頭が良すぎて... ある意味... 恐ろしいわ...

「Good girl って言ったときも、泣きそうなのごまかすみたいに微笑んでたし」

だから... なんなの...

「おかあさん、なんでもっと素直にならないの？」

「ハ？」

「ダニーさんのこと好きなんでしょ？」

それは...

「ダニーさんもおかあさんのこと愛してるまで言ってるんだからさ」

それはね...

「美香、あなたはまだ若いからわからないのよ」

「なにを？」

「開けてはいけないものがあるのよ」

「開けちゃいけないものって、なに？」

「パンドラの箱」

「ハ？」

「パンドラの箱は開けてはいけないのよ」

「パンドラの箱って、ギリシャ神話？」

「どこの神話か忘れちゃったけど、パンドラの箱よ」

「どういう意味？」

「だから、開けたらいけないものがあるっていうことよ」

「意味わかんないし！」

わからないでしょうね。

あなたはまだ若いもの。

好きだったら何も考えずに突き進めるのよ。

ロミオとジュリエットみたいにね。

すぐ死ぬけどね、それはそれでしあわせだと思うけどね。

「おかあさん」

「ン？」

「何ポーッと考えてたの？」

「ロミオとジュリエット」

「今度そっち？ もっと意味わかんないし！」

わからなくてもいいわ。

そのうち、イヤでもわかるようになるから。

50歳になったらね。



## パンドラの箱

---

一瞬で決めなきゃいけないことってあるでしょ？

お風呂から上がってきたダニーと入れ替わりに美香が出て行ったその一瞬、私も二階に上がってしまおうか、でも、ビールくらい出してあげてもいいんじゃないか、一瞬でけっこう葛藤したのよ、なんでこんなことで葛藤してるの？とも思ったわ。でも、その葛藤してる一瞬が次の一瞬に進んじゃったから、冷蔵庫からビールを出して、ダイニングテーブルの上に、あの人の方にズズッと近づけて置いたの。

「Thank you」

そう言ってビールを手にとって、向こうに行っちゃった。

あ、そう。

まあそうよね、私が全面的に拒否してるわけだから、あっちだって、もういいやと思ってるのよね。

そうね、べつに私と話なんかしなくても、美香と楽しくやってるし。

ダディとか呼ばれて泣きそうになって喜んでたらしいし。

いいんじゃない？

私に会いたかったとかいって、美香と一緒にいるけど？ いいんじゃない？

そりゃ私は拒否してるわよ、だってそうでしょ？ 一ヵ月以上も連絡無しで、もう過去のことになったのよ？ それなのに突然現れるんだもの、そんなの自分勝手よ。

パンドラの箱を開けると、この世のありとあらゆる災いが飛び出して、希望だけが残っていた、確かそんな話だったけど、私の箱の中には、あの夏のありとあらゆることを詰め込んだの。それを開けたら、開けてしまったら、残っているのは失望なのよ。

だって、あの夏の思いはけして叶うことはないんだから。叶わない希望は失望ってことよ。だから、私は心の奥の深く深く深いところに埋めたのよ、もう絶対に開けられないように。

なんで来たの？

私に会いたかった？

懐かしい思い出にちょっと会いたくなかった？

会って満足したら帰るんでしょ？ そして忘れるのよね？

忘れられた私は？

空っぽの箱の中の失望だけ抱えて生きるのよ！

もう一本飲むわ！

プシュッ

冗談じゃないわ！ なにがThank you よ！

あのビール一本出すのに、私がどれだけ葛藤したと思ってるのっ？

私の気持ちなんてどうでもいいでしょ！

そうよ！ 美香だって、おとうさんだって、私が何考えてるかなんて気にもしないのよ！

私だって、いろいろ考えて、いろいろ悩んで、いろいろ感じてるのよ！

あの人だってそうだわ！ 私が何考えてようがどうでもいいのよ！

美香と楽しく親子ごっこして喜んでるんだから！

ハッキリ言ってやるわ！

そうよ！ ここは私の家よ！ なんで私がこそこそしなきゃいけないの!?

どこ？ リビング？

いない、客間？

いた！

驚いた顔でこっちを見てるわ、ここは私の家なんだから、私がいたって驚くことじゃないでしょ！

「ホワイ・ユー・カム？」

なによ？ なんで黙って見てるの？ 聞いているんだから答えなさいよ！

「ホワイ・ユー・カムッ？」

なによその目っ？ 私は怒ってるのよ！ そんな目で見てないで答えなさいよ！

「アンサーッ！」

「I was waiting for you ask me that question」

私とその質問をするのを待っていた？

したわよっ！ 美香を通して聞いたわよっ！

会いたかったなんてバカみたいなことしか言わなかったわよ！

「ホワイ・ユー・カム？」

「I wanted to see you」

ほらまた！

「ホワイ？」

「Because I love you」

それを言えばすむと思ってるの!? すまないわよっ！

「ユー・ディ dont ・ライト・ミー、ユー・フォーゲット・ミー、ユー・ dont ・ラブ・ミー！」

なにその目？ そんな目をしたって同情しないわよ！

「I've been a mess」

メス？

「ホワット・メス？」

「Ah... I've been depressed」

「デプレスト？」

なんだったっけ？

「Ah... I've been... like this」

ビールの缶をクシャッて握り潰したわ。

クシャッとなってたってこと？

「Anyway I'm sorry. I was trying to write you many times, but I couldn't」

何回も書こうとしたけど、できなかった？

「ホワイ？」

「I was confused」

混乱した？

「ホワイ？」

「Because of your letter」

私の手紙？ 私のせいにするのっ？

「アム・アイ・バッド？」

「No! No, you were not wrong, ah, not bad at all」

そんなことはどうでもいいわ！

「ホワイ・ユー・カム？」

会いたかったとか愛してるとかそんなことはもう聞きたくないのよ！

「I saw a little hope」

小さな希望を見た？ どこで？

「You wrote me, you would not forget me until I forget you」

それは...

「And you would forget me when I forget you」

あなたがあまりに苦しそうだったから...

私のこと忘れたいんだと思ったから...

「It means you won't forget me until I die」

それは... 自分が死ぬまで... 私が忘れないっていう意味...

「I can never forget you」

開けないで

私の箱を

開けないで

もう埋めたのよ

「アイ・フォーゲット・ユー」

あなたのことは忘れるわ、だから...

「Yes, you can, but I can't」

だから

イヤだったの

あなたが

あなただけが

開けられるのよ

どんなに深く深く埋めても

簡単に

「ドント・オープン...」

「What?」

「ドント・オープン」

簡単に開けないで  
開けた後に残ってるのは...

「オンリー・アイ・シー... despair」

失望なんかじゃないわ、絶望よ。

「Romie, may I ask you one thing?」

なによ... なにを聞くの...

「Do you still love me?」

ほら！

「アイ・ヘイト・ユー！」

開けちゃった！

なんで笑うの？  
なんでそんな目で私を見て  
なんで...

「Romie, I love you」

抱きしめるの？

「アイ・ヘイト・ユー！」

嫌いだって言ってるでしょ！

「Ok, you hate me, and I love you」

なにがオーケーよ！ オーケーじゃないわよ！

ほら、あなたに抱きしめられると...

ホッとするから...

イヤなのよ！

「ユー・オープン...」

「What?」

「ユー・オープン・ボックス」

「Box? What do you mean, box?」

「パンドラのボックス」

「Ah... Oh! Pandora's Box?」

「イエス！ ユー・オープン！」

「Did I?」

「イエス！」

「Well, at least we still have a hope」

パンドラのはね！ でも、私の箱はちがうのよ！

「イン・マイ・ボックス、ノー・ホープ！」

「Maybe because, it's in my box」

多分それは僕の箱の中にある？

ハ？

なにをもってして希望があるなんて言えるの？

「アイ・リーブ・イン・ジャパン」

「Yes」

「ユー・リーブ・イン・アメリカ」

「Yes」

「ノー・ホープ」

でしょ？

なにその目？ その、挑戦的？ 私は事実を言っただけよ！

「You are...」

私は？ なに？

「Well, I need to talk with your husband」

私のハズバンドと話す必要がある？

「ヒー・ダイ」

死んだって言ってるじゃない。

「He is still alive」

まだ生きてる？

なに言ってるの？

「He is still alive... in you」

彼は... まだ... 私の中で... 生きて...

音がしたわ

箱のふたがボタンと閉じて

鍵がかかる音

「サンキュー」

あなたが

「What do you mean?」

閉めてくれたわ。

「グッナイト」

もう二度と開けないわ。

二度と開けさせないわ。

私の心の箱。

もう中には絶望しか入ってないけどね。



今朝はいつもどおりに起きたわ。

あの人が眠っているから、まだおとうさんには挨拶できないわ。

いつもどおり朝食作ってたわ、そうよ、ずっとこうしてきたんだもの。

「Good morning」

おとうさんに挨拶できるわ。

お水を持って、仏間に... 巻き寿司... 開いてたたんで押入れに入れたから、

おとうさん、これでスッキリしたでしょ。

おとうさん、今日は会いに行くわね、待っててね。

「ねえ、今日はディズニーランドとか行っちゃう？」

美香、あなた、ゆうべ、ここで聞いてたでしょ、私の飲みかけのビールの缶が空だったもの。

どこまで聞いてたのかしら、もうどうでもいいけど。

「おかあさんはデートしてくるわ」

「ダニーさんと？ いいねいいね！ 私はジャマしないよ」

「おとうさんとよ」

「ハ？」

「おとうさんのところに行くわ」

「お墓？」

「そうよ」

「なんで？」

「おとうさんに会いに行くのよ」

「だったら、みんなで行って、それからどこかに行く？」

「美香たちは好きなところに行きなさい、おかあさん一人でおとうさんに会いに行くわ」

「なんで？」

「おとうさんは生きてるからよ」

「おかあさん？」

私の中で おとうさんが生きているのなら なんてあんなに苦しい思いをして  
すべてを 心の奥底に 苦しいから もう開けないようにしようと 必死に

「Dan, what did you say to my mother?」

「What's going on?」

もういいわ バカみたい 私の中にいるのは おとうさんってことでしょ

「She looks like, her eyes look like just as when my father died!」

「What? What does it mean?」

「I'm asking! What did you say to her last night?」

「Last night? Well, I... Shall we talk in an another room?」

「Ok」

なに？

美香の怒ったような声と...

誰もいなくなったわ。

出かけよう。

電車に乗ってバスに乗って、お店でお線香とお花を買って、ここも、もうすっかり秋ね。  
ここに来たのは、帰ってきて一度来て以来ね。

おとうさん

何を言えばいいの？

そっちの世界ではすべてお見通しなのよね？

今さら私が言わなくても、全部わかってるんでしょ？

バカだと思ってる？ 思ってるわよね？

たしか帰ってきたときにも、こんなこと言ってたわ。

バカよね、50歳にもなって、叶わない夢なんか見て、苦しがつて、バカだわ。

おとうさんは、もうわかってるわよね。

私の心の中には... ごめんなさい... あの人しかいないって... 今はあの人だけだって...

だから、必死に、必死に、辛いから、必死に、思いを閉じ込めたのに...

だから苦しかったのに、それなのに、私の心にはおとうさんがいるって言うのよ？

私の気持ちも知らないで、そんなひどいこと言うのよ？ ひどいことって、ごめんなさい。

そうじゃないの、私の心の中に、おとうさんがいたら、私はこんなに苦しくないわ。

私、おとうさん、いいわよね、ハッキリ言っても。

二人の人を愛することなんてできないわ。

おとうさんのことはもう... やっと... 思い切れたのよ... 死んだって受け入れられた...

それだって時間がかかったわ、辛かった、苦しかった、でも、受け入れてあきらめられた。

だけど、そのときは、まさか他の人を好きになるなんて思わなかったわ。

でも、好きになってしまったの、好きになっても、どうしようもない人を。

好きで好きで... 苦しくて... それなのに、おとうさんが私の中にまだいるって言うのよ。

どう思う？ ひどいでしょ？ 私がそんな女だと思ってるのかしら？ そうなの？

おとうさんに聞いてもねえ、でも、そっちってなんでもわかるんでしょ？

いっそ、そっちに行きたいわ、そしたら... あ、美香がいるわ、まだいけないわ。

まだ迎えには来ないで、美香が結婚してからにして、できれば、結婚してちょっと落ち着いてから。

あ、でも、子どもが生まれたら、きっといろいろと相談したいこともできてくるわね。

おとうさん、ごめんなさい、まだそっちにはいけないわ。

おとうさん、どうしたらいい？

何か言ってよ。

いつもそうね、何も言ってはくれないのよ、生きてたときも。

私も聞かなかったわ、聞くことなんてそんなになかった気がするわ。

お風呂にする？とか、そういうことしか聞かなかったわ。

生きてるうちに、もっと話をしておけばよかったのかしら？ でも、私と話すことってあった？

何を聞いているの？

石に聞いたって答えてくれないのはわかってるのに。

そうよ、ひとりごとよ。

どうせ誰も聞いてくれないなら、聞いてよ。

おとうさんの教え子としての私は優秀だったでしょ？ そう言ってくれたわよね？

お気に召すままのフィービの台詞なんかどう？

いくわよ？ えっと... あ、思い出したわ。

「Think not I love him, though I ask for him.

'Tis but a peevish boy, yet he talks well.

But what care I for words? yet words do well.

When he that speaks them pleases those that hear.

It is a pretty youth, not very pretty.

But, sure, he's proud, and yet his pride becomes him.」

どう？ 私だって、古語なら言えるのよ！ 丸暗記だけどね！

私の前で、二人でベラベラ英語しゃべって、私だけバカみたいよ！ ポカンとしてるのよ！

ストレス溜まっちゃって！ だから今聞いてもらったの！ ていうか、誰も聞いてないけどねっ！

はあああ、なにやってるの私？

それじゃ、帰ります。

お寺に寄って住職さんに挨拶していく？ 今日はいいわ。

象がいる

あのね、前にもね、ありえないところでありえないものを見ると脳が認識できないって、たとえばね、この、まさに日本！の墓地に外人が立ってたら、どう思う？

外人が立っててもいいわよ、いいけど、なんでここ？って、思わない？

美香だわ。

こっちから帰ろう。

あ、この水桶返さなきゃ、そっちに回って、あのお店に、なんで追いかけてくるのよ？

なんでお墓の中を追いかけてっこしてるの？ 来ないでよ！

おとうさ——ん！ たすけて——！

おとうさんって、本当にいつも私の話なんか聞いてくれないのね、たすけてって言ったのに。

腕つかまれちゃったわよっ！

いいの？ おとうさん、他の男が私の腕をつかんでも放っておくの？

そうよね、骨になっちゃったんだから。

「Romie」

はっ なっ しっ てっ！

「You are misunderstanding」

手を放してって英語でなんて言うの？ フィービの台詞の中にあっった？

「Well, I made you misunderstood」

たのむから放してっ！ 向こうからどこかのおばあさんが来てるでしょっ！

「Mika explained to me, actually she scolded me」

そうよ！ 私の中にはおとうさんがいるんだから、おとうさんのところに戻るわ！

だからっ、手を放してってば！ なんてついてくるのっ？

おとうさん！ ほら！ どうよっ？ なんとかしないのっ？

「It's your husband's grave, isn't it?」

ちがうわよ、おとうさんと、おとうさんのご両親も入ってるのよっ。  
そのうち私も入るのよっ！

「May I ask you something?」

ノー！

「Why were you speaking Phebe's monologue?」

フィービのモノローグ

聞いてた

聞かれてた

なんで黙って聞いているのよっ？

「I love your tone, and rhythm, it's like a music」

私のトーンやリズムが好き？ 音楽みたいだ？  
どうせ普通の会話はボロボロよっ！

「Your husband must have loved it, too」

ハァァァアッ？

おとうさんがフィービの台詞を言うのを聞くのを好きだから言ってたと思ってるのっ？  
ちがうわよっ！

「アイ・ストレス！」

「Stress? What kind of stress do you have?」

どんな種類のストレスだ？

「ユー、美香、スピーク・イングリッシュ！ アイ・キャント！」

「Oh, Romie」

おとうさんのお墓の前で抱きしめないで！ お舅さんとお姑さんも入ってるのよっ！

「ドント・ハグ・ミー！ えっと、イン・フロント・オブ...」

「In front of your husband's grave?」

「ナット・オンリー・マイハズバンド！ バット・オーソー...」

舅と姑って、なんだっけ？

「あ、ペアレンツ・イン・ロー！」

なにその目？ 私の中に、お舅さんとお姑さんも生きてると思ってるのっ？

「Let me say hello to your husband's family」

ハズバンドの家族にヘローを言わせてくれ？

私をおちよくってるのっ？ 私が全員生きてると思ってると思ってるのっ？

正直言うわ！ お姑さんが亡くなったときはホッとしたのよ！ 同居じゃなかったけどねっ！

私のこと、若いから何もできないって言い続けてたのよっ！

「Hello, Mr. Katoh and his father and mother」

「ゼイ・ダイ！ アイ・ノウ・ゼイ・ダイ！」

「I know you don't think they are alive」

ハ〜ッ？

ゆうべは私の中に生きてるって言ったじゃないっ！

「Mika let me know you misunderstood what I said」

美香が知らせた？ 私が、誤解してる？ 言ったことを？

「She told me, I should have been very straight with you」

彼女は言った、私にベリー・ストレイトにならなければいけない？

「What I was going to say to you was... Ah... I want you」

言おうと思ったのは、私が欲しい？ お姑さんの前で言う？

「I know you need a time」

私に時間が必要なことを知っている？ 何の時間？

「ホワット・タイム？」

「What time? What do you mean what... Oh, ok, let's see...」

なんでそんなに考え込んでるの？

「Oh!」

何か思いついた？

「I will wait until you say yes」

私がイエスと言うまで待つ？

何にイエスと言うの？

「ホワット・イズ・ア・クエスチョン？」

「Ah...」

なにその困ったような目？ 私だって困るわよ！ 何に答えればいいのよ？

「I didn't ask you yet」

まだ質問してない？

ハアアアアア？

「ユー・ドント・アスク・ミー・クエスチョン、アイ・キャント・アンサー！」

質問されていないのに答えられるわけないでしょ！

「Ah...」

また困ったような目！ 美香、何を言ったのよっ!? ベリー・ストレートって、なに？

「Oh!」

また思いついた？

「I will wait for asking you until you are ready」

私が、準備？ できるまで、質問するのを待つってこと？

準備？ 何の？

「ホワット・レディ？ あ、ちがう、レディ・フォー・ホワット？」

あ、また困った目で上向いてるわ。

「Anyway...」

とにかく？

「I love you」

愛してる？

とにかく愛してる？

とにかく愛してるって言い方あるっ？

とにかくって！

「I love you」

だから？

「I love you」

ベリー・ストレートって、そういうこと？

## アゲイン？

---

よくスーパーで流れてるでしょ？

「いらっしやいませ～いらっしやいませ～」とか、「感謝感謝の大感謝デー」とかね。

あんなに同じ言葉を連呼されたら、本当にいらっしやいませと思ってるのかしら、

心から感謝してるのかしらって、それすら思わないわ、音よ、ただの音。

今の私は、スーパーであの音を聞いているような、そんな感じ。

ここまでI love youを連呼されると、音にしか聞こえないわ。で？ どうすればいいの？

「What are you thinking?」

だから

「ホワット・ドウ・ユー・ワント・ドウ？」

「What do I want to do? What do you mean?」

どういう意味って、こっちが聞きたいわよ。

「ユー・セイ、ユー・ラブ・ミー、メニータイム、アイ・ドント・アンダerstand」

「Don't you understand the meaning of I love you?」

アイラブユーの意味はわかるわよ！

「ホワイ・ユー・セイ・メニータイム？」

「Ah... I'm trying to be straight with you」

ストレートになるようにトライしてる？

どれがストレート？ なに？ なにが言いたいなの？

「ホワット・ドウ・ユー・ワント・セイ？」

「What do I want to say? I'm telling you! I love you!」

「アイ・ノウ！」

それじゃなくて！

「What else can I say?」

なんで半ギレっ？

「アイ・ドント・ノウ！」

あなたが他に何が言えるかなんて、私が知ってるわけないでしょ！

何が言いたいのかわからないんだから！

「ホワット・ドウ・ユー・ワントッ？」

「I already told you! I want you!」

私が欲しい？ だからなに？ どうしろっていうの？

あ、おとうさん！

私の英語おかしい？ おかしいかもしれないけど、どうすれば通じるの？



なんて言えばいいんですか、先生？ 先生！ 教えてくださいっ！

「What are you doing?」

なにしてるのかって、だから...

あ

そういうこと？

そうだったわ

言われたのよ

「ユー・セイ、マイハズバンド・イズ・スティル・アライブ、イン・ミー」

私の中におとうさんがまだ生きてるって！ ひどいわ！

「ユー・ドント・ノウ、どれほどって、あ、ハウ...」

「I know」

ハ？ わからないでしょっ!?

「I know I chose wrong words, a wrong expression, Mika let me know」

悪い言葉？ 表現？ 美香がおしえてくれた？

「That's why I made you misunderstand」

だから誤解させた？

「What I wanted to say to you was...how to say...well...」

なによ？ そんなむずかしいことなの？ なんなの？

「セイ！」

「What?」

「セイ、ホワット・ユー・ワント・セイ！」

「Ah... I...」

自分が言いたかったことでしょ？ さっさと行ってよ！

「I can't」

ハァァァァ？

ここまで引っ張っておいて、言えない？

「ホワイ？」

「Romie, I don't want to hurt you」

私を傷つけない？

傷つけるようなことを言おうとしたの？

私を傷つけることって...

「ユー・セイ・ユー・ラブ・ミー」

「Yes」

「イズ・イット、ライ？」

愛してるってウソ？

「It's true! I love you!」

愛してるんだったら

「イフ・ユー・ラブ・ミー、セイ！ ホワット・ユー・ワント・セイ？」

さっさと言いなさいよ！

なに？ その追い詰められたような顔？ あなたから言い出したんでしょ！

「セイ！」

そうよ！ 私はあなたの目を真っ直ぐ見てるわよ！ ベリー・ストレイトよ！

なんだか、目をそらした方が負けみたいな状態だわ。

私は負けないわよっ！

「Ok」

勝った

「You are stuck」

私はスタックしてる？ スタック、なんだったっけ？ スタックする、動けない？

「In your... strong thought」

私の強い思考？ 考え？ なに？

「You believe, your house is the only place to live for you, what to say, in this world」

私は信じている？ この世界で、私の家だけが住む場所だと？  
あたりまえじゃない！ だって、あれは持ち家よ？

「イツツ・マイ・ハウス！ ナット・レンタル！」

美香が生まれて、建売りだけど20年ローン組んで買ったのよ、完済したわよ。

「It's not the point」

それはポイントじゃない？  
じゃ、何がポイントなの？

「ホワット・イズ・ポイント？」

「I'll tell you」

あ、そう。

「You believe, this country, Japan is the only place to live for you」

私は、この国、日本だけが、私の住む場所だと信じてる？  
あたりまえでしょ！ 私は日本人よ？ 日本人が日本に住んで何がいけないの？

「ビコーズ・アィム・ジャパニーズ！」

「See?」

Seeって両手広げられても、何が悪いの？ なに？ 意味がわからない！

「アイ・ドント・アングスタンド！」

「I knew you wouldn't understand, but...」

私が理解しないことを知っていた？ だったらなんで言ったの？

「Would you consider a new place to live?」

住むための新しい場所を、コンシダー...って？ えっと... あ！ 熟考する？  
住むための新しい場所を熟考するって、なんで？ 自分の家があるのに？  
あの家に何か問題があるっていの？ 古いけど、欠陥住宅じゃないわよ。  
だいたい、新しい場所って？

「ホワット・イズ・ニュー・プレイス？」

なに？

「My house」

ハ？

この人の家？ あの家？ なんで？ またホームステイしろっていうこと？

「ホームステイ？」

そんなお金ないわよ、あるけど、何回もなんて無理よ。

「What? Oh! No, no, it doesn't mean... a homestay program or that kind of things」

なんでそんな大きなため息つくのよっ？

あっ！ ほら、あの、目を上にやって、あ～あ的な！  
だって、わからないわよ！ なに？

「ホワット？」

「I'm asking you to marry me!」

怒鳴る？ 怒鳴って言うっ？ そんな...

え？

「アゲイン？」

また？

「Again? What do you mean, again? Ah! yes! Again! And again...

How many times do I have to ask you? Well, I will until you say yes」

なに一人でゴチャゴチャ言ってるの？

早口でわからないわよ！

ちょっと待って。

ここって

「ダニー」

「Yes」

「ユー・アスク・ミー...」

墓地って？ グレイブの複数形？ グレイブス？ インじゃなくてアット？

「ユー・アスク・ミー、マリー、アット・グレイブス」

墓地でプロポーズって...

「I know it's not romantic, and I was not going to propose you in the cemetery, but...」

しかも、おとうさんはいいとして、舅と姑のお墓の前って...

「Believe me, it's not on purpose, it's, it's an accident」

アクシデント？ 事故？ ていうことは？

「アクシデント・イズ、ユー・アスク・ミー、でも、ユー・ドント・ワント・マリー・ミー？」

「I want to marry you!」

「ユー・セイ・アクシデント！」

「It means...ah...」

なに？ なにその目？ なんておとうさんのお墓見てるの？ 助けてみたいな目で？

バカじゃない？ 死んでるわよ！ ただの石よ！

もういいわ！

「アイ・ゴー...」

いくらなんでも、置いてったらかわいそうね。

「レッツ・ゴー・ホーム」

なんかもう、頭クラックラするわ。

「Which home?」

どのホーム？

「マイ・ホーム！ マイ・ハウス！」

私にはちゃんと家があるのよっ！ 持ち家よっ！

「Sure! Your house! Of course! Where else?」

なにそのイヤミな言い方っ!?

「アイ・ヘイト・ユー！」

「Ok, and I love you!」

「アゲインッ？」

またアイラブユーッ？

「Yes, again and again and again!」

なにそのケンカ腰みたいな言い方っ!?

「ユー！ ユー！ ユー！」

あ————っ！ ユーしか出ないっ！

「I know what you want to say」

私が何を言いたいかわかってる？

「I'm stupid, right?」

僕はバカだ？

「イエス！」

そうよ！

「I know」

わかってるんなら、いいわよ。

「I know you need a time」

時間が必要って... そういうことだったのね...

「I will wait until you say yes」

私がイエスと言うまで待つ...

「Well, I couldn't wait for asking you until you are ready」

そうね、私はまだ...

あなたが私の肩に腕をまわして...

見上げると...

私の大好きな... きれいな茶色い目が... 私のこと...

だからイヤなの...

あなたの目を見てしまうと...

ずっと見ていたくなるから...

でも...

どうしていいのか...

わからない...



## Not young enough

---

車の中。

美香が運転してるの。

おとうさんの車、そろそろまた車検の時期だわ。

おとうさんは毎日これで大学に通勤していたけど、今は美香がたまに運転するだけ。

休日に、友だちとどこかに行くとか、そういうときだけよ。

おとうさんが死んだとき、売ろうかと思ったけど、たまにそうやって美香が使うし、ずっと車があったから、車がなくなったら不便なのかどうなのかもわからなくて、結局車検に出して、自動車税払って、そういうものが、いっぱいあるわ。

あの人は後部座席に座ってるわ、座ってるはず、振り返ったらいなかったりして？

いない気がするわ、だって、この車にあの人が乗ってることの方が現実的じゃないんだもの。

「どうだった？」

どうだった？

「なにが？」

「いろいろ？」

いろいろ？

「お墓のこと？」

「じゃなくてさ」

「美香、霊園の駐車場にいたなら、おとうさんのお墓参りすればよかったでしょ」

「だって、服がお線香臭くなるんだもん」

これだもの。

「“Dan, how did it go?”」

「Well...」

いたわ。

「I screwed up」

「“Whaaaat?”」

「Sorry」

「“What did you do?”」

「み、美香！ 前向いて！」

「あ、ごめん。“Dan, we need to talk later”」

「Yes, I know」

どうすれば、こんなにスラスラ英語で会話できるのかしら。

私だって、若い頃はもう少しマシだったわ。

でも、もう無理よ。

「おかあさん、ダニーさんに何言われたの？」

「何って... いろいろ」

「たとえば？」

「たとえば？ だから、そうね、なんだっけ？ とにかく、えっと、結婚してくれって」

「ハァ〜ッ？ “Dan, did you propose to my mother?”」

「Yes」

「“In that cemetery?”」

「Yes」

「“Are you silly?”」

「Mika, you sound just like your mother」

「“I’m her daughter!”」

「Okay! Two Romies!」

ン？ 二人のロミー？

なに？

「How can I deal with two Romies? One is enough for me」

ハ？ 今のはわかったわよっ！ 一人で十分だっ？

「ホワット？」 「“Whaaat?”」

「See?’」

「あっ、美香！ 前！」

「あっ！」

後ろから笑い声が聞こえるわ、よく笑ってられるわねっ。

だいたい、一人で十分だって、どういう意味よっ？

それより、なんで結婚なのよ？

結婚って言葉で、頭の中がパンパンよ！

どうしろっていうの？

無理でしょ！

「おかあさん」

「なに？」

「落ち込んでる」

「落ち込んでるっていうか...」

「ちがうちがう、ほら」

美香が目でバックミラーを...

なに？

あ...

窓の外をドヨ〜ンとした顔でポーッと見てるわ。

なんで、あなたが落ち込むのよっ？

結婚してくれって言ったのは、あなたでしょ？ それで落ち込むって、なに？

万が一よ？ 億が一でもいいわ、結婚してもいいと思っても、

申し込んだ当の本人にあんな顔されたら、イエスなんて言えないわよ。

言えないわよ...

無理よ...

あんな顔してなくても...

家に着いたら、もう一時過ぎ。

ちょっと遅いけど、お昼作らなきゃ。

「美香、お昼はサンドイッチでいい？」

「焼きそば食べたいな」

「焼きそば？ でも、ほら、食べられないと思うのよ」

「ダニーさん？ 食べさせてみたら？」

「でも、ほら、あのね、おかあさんとか、なんていうのかしら、おかあさんの年代？」

「初老？」

「しょっ、初老っ!？」

「あ、ごめん、そういう意味じゃなくて」

「どういう意味よっ？」

「アラフィフ？」

「アラフィフ？ なんでもいいけど、初老って、まあいいけど、そんなに新しいものは...」

「せっかく日本に来てるんだから、日本のもの食べさせてあげたらいいじゃん」

「そ、そう？ それじゃ、おかあさん、スーパーに行ってくるわ」

いちおうサンドイッチの材料も買ってきた方がいいわね。

「わかった」

「あ、夕食は何がいい？」

「夕食のことまで考えられないよ」

これよっ！

主婦はねっ、昼食食べたすぐ後でも、夕食のこと考えなきゃならないのよっ！

ダニーに聞く？ 無駄ね。

いいわ、行ってくるわ。

「美香、ダニーのこと...」

「二人で留守番してるよ」

美香と二人にしておいて大丈夫かしら？

まあいいわ、行ってくるわ。

焼きそばって、フライド・ヌードルっていうのね、美香が説明してたわ。

それにしても...

お箸の使い方が日本人みたい。

知らなかったわ。

それに、食べてるわ、焼きそば。

さすがに、音を立てては食べられないみたいだけど。

「Why are you looking at me?」

え？

「あ、ユー・キャン・ユーズ、えっと、これ、お箸って... 美」

「Chopsticks?」

チョップスティックス！ そうだったわ。

「Yes, I can. But I'm not sure I'm holding them in the proper way」

ン？ プロパーって... 正しいだった？

「ユー・グッド」

「Thank you」

ニッコリ微笑んで... 私のことを見る目が... 私のこと見つめてる...

大好きな茶色の... 優しくて... ずっと見ていたくなるの...

その目を見ていると...

「ダニー」

「Yes?」

あのね...

「アトム・スケア...」

怖いのに...

「You are scared of what?」

何が怖いのか...

「アイ・ドント・ノウ...」

わからないのに...

「*I am not young enough to know everything*」

え？

「Oscar Wilde said so」

あ！ オスカー・ワイルド！

英文学の授業でやったわ、あんまり興味なかったけど。

“私はすべてを知ってるほど若くはない”だったかしら。

あのときは、何のことがさっぱりわからなかったわ。

でも、今は... なんだかすごくわかるわ。

若いときは、なんでも知ってるような気になってたわ。

でも、年をとればとるほど、わからないことばかりが増えていくのよ。

「When I was young, I had no idea what he wanted to say, but now, I agree with him」

あなたも？

あなたも同じ？

私だけじゃなかったの？

「And he would say, *Whenever people agree with me I always feel I must be wrong*」

“人々が僕に同意するときはずっと、自分は何か間違ってるに違いないと感じる”

オスカー・ワイルドって、年をとるとわかるのね。

「I'm so glad to find someone understands what Oscar Wilde meant」

オスカー・ワイルドが何を言おうとしているのかをわかる人を見つけて嬉しい？

「ビコーズ、ウィ・アー・オールド・イナフ・トゥ・ノウ、ウィ・ドント・ノウ」

わからないってことをわかるくらい年をとってるからだわ。

「Oh! Romie's quote! That's for sure」

なんだかホッとした...

あなたも同じことを感じていたから...

あなたはアメリカ人で弁護士で、私は日本人で主婦だけど、  
年をとって感じることは同じなんだって。

「Mika, do you understand what your mother and I were talking?」

あ、美香がいたんだったわ。

「I am young enough to know everything」

「That's right, lil girl」

「Oh, Daddy! I'm not lil anymore!」

「Time to bed. Do you want Daddy to tuck you in?」

「Oh, you want to keep Mommy to yourself」

「Yes, good girl. Nite nite」

「Okey dokey!」

この二人は... 父娘ごっこが好きねえ。

「おかあさん、ダニーさんがおかあさんを独り占めしたいって」

え？ そういう話してた？

「ちょっと出かけてくるね」

「どこに行くの？」

「友だちとお茶してくる」

「夕飯は？」

「電話する」

って言って電話してきたことって数えるしかないけどね。

「“Dan, behave yourself!”」

「I’ll try」

「“See ya!”」

出かけちゃった。

「Romie」

「イエス？」

見上げたら...

あなたの茶色の目が... 私のこと愛しそうに見つめていて...

だから...

抱きついたの...

怖かったから...

あなたの腕の中にいると、はぁぁぁ、なんだか安心するのよ。

何が怖くて、何に安心したのかわからないけどね。

## エスプレッソ

---

なんでかしら？

今ふたりでリビングのソファに座ってカプチーノ飲んでるんだけど。

なんで、ダニーがうちのカプチーノ・マシンの初めて見ただけで使えて、私は使えないの？  
ダニーの家のだってそうよ、壊しそうなんだもの、ううん、絶対壊すわ。

「What are you thinking?」

何を考えてるのかって

「カプチーノ・マシーン」

「Are you thinking about a cappuccino machine with that serious look?」

シリアス・ルックって言われても

「アイ・キャント・ユーズ」

「Why?」

「アイ・ウィル・ブレイク」

壊しちゃうわ

「No, you won't. It's easy. Try」

トライって

「アイム・スケア」

「Oh, is that the reason you are scared?」

それが怖い理由か？ なに？

「ホワット？」

「You said you were scared at lunch time. You are scared of using a cappuccino machine!」

さっき、私が怖いって言ったのは？ カプチーノ・マシーンを使うのが怖いってこと？

「ノー！」

そんなくだらないことじゃないわよ！

「I'm just kidding」

からかった？

笑ってるし。

なによ！

「Maybe... You are scared of... me?」

多分？ あなたのことが怖いのか？

あなたのことは怖くはないけど、でも、そうね、あなたの...

「アイム・スケア、ユア・アイ」

目が...



「My eyes? Why?」

なぜって

「ノー・コメント」

そのきれいな茶色の目が大好きで、その目に見つめられると、ポ〜ッとしちゃって...  
なんて言えないわよ。

「Oh, Romie, tell me」

言ってくれって言われても...

あ...

本当に... その目は...

危ない、危ない！ 見ない、見ないわ！

「Romie」

「イエス？」

「Look at me」

見ないってば。

「ノー」

「Romie, look at me, look at me」

なによ、まるで、犬かネコに、おいでおいでって言うみたいな言い方！

絶対見ない！

笑ってる。

「You are so cute」

私ね、この50歳のおばさんをキュートって言うのは、この世の中でこの人だけだと思うわ。

言わないでしょ？ ていうか、思わないし、私だって本人だけと思わないわよ。

どうかしてると思うの、だってね...

「ホワイ・ユー・カム？」

見ちゃったけど

「Because I love you」

ね？

ビコーズ・アイラブユーで、高い飛行機代出して日本まで来る人っている？

そりゃ、相手がすごい美人とか、若くてピッチピチしてるならわかるけど、

50歳のただのおばさんに会いにアメリカから高い飛行機代払って来る？

嬉しいけど？ 嬉しいけどね、でも、なんで？とも思うのよ、今さらナンだけどね。

「Romie」

「イエス？」

あ

目を

見ちゃった

こんな優しい目で... 愛しそうに見つめられたら...

目が離せないって... ということ？ あなたの目を... 離せないの... なに考えてるの...

だって... もう... 風と共に... 去りそう...

バタンッ

え？ 玄関？

反射的に身体を離れたわ。

「み、美香？」

「サイテ～、携帯忘れちゃった～」

そう言いながら二階に駆け上がる音がしたわ。

現実って、一瞬で来るのよね。

一瞬で引き戻されるっていうの？

戻るんだけど、現実だから。

ドタドタドタッて下りてくる音がして、こっちに来たわ。

「改札入ってから気がついてさあ、サイテ～」

「そ、そう」

「何してたの？」

「カプチャーノ飲んでたのよ」

「あ、そう、じゃ、いってくるね」

「いってらしゃい」

「あ、“Dan, you have my mother’s lipstick on your lips”」

えっ

ダニーの背中が固まってる... 固まってないで何か言いなさいよ、何か———っ！

「I’m just kiddiing”」

美っ香———っ！

「じゃあね！」

ボタンと玄関の扉が閉まる音...

「What should I have done?」

何をすべきだったのか？ 固まったままボソボソ言ってるけど？

「セイ・サムシング・トゥ・ハー！」

「Romie」

やっところち向いたわ。

「What could I say to her?」

何が言えたか？

そうね、だから、そうね、たとえば、だから、

「アイ・ドント・ノウ」

思いつかない。

「See?」

Seeって、だからって固まらなくてもいいでしょ？

子どもにからかわれて固まる親って、親じゃないわ、ダニーだから、おとな？

まあ、美香も27歳だからおとなだけど、それにしたって、え？ あっ！

「ダニー」

「Yes?」

「アイ・ドント・プット・リップスティック」

これは

「イツ・リップクリーム」

「Oh! I fell into her trap!」

笑ってる場合っ？ だいたいキスしておいて気がつかないっ？ 見てないのっ？

「Romie」

「ホワット？」

「Mika already knows we are...」

美香はすでに知っている...

そうけど...

ここで...

だから...

「あっ！ ナット・ヒア！」

窓からご近所に見えるかもしれないわ。

「マイ・ルーム！」

なんだかわからないけど、なんていうのかしら、風と共に去りそうになりながら、階段のぼって、ポ〜ットした頭で寝室のドアを開けたら、また現実を見たわ。

サイドテーブルを挟んで、ふたつ並んだベッド。

「Which is yours？」

どっちが私の方か...

こっちって指さしたけど...

つまりは、もう片方は、おとうさんので...

この部屋は...

もう向こう側に、おとうさんはいないけど...

おとうさんがいた部屋で...

横を見ると...

おとうさんのベッドが...

もうベッドカバーしかかけてないけど...

でも...

「ダニー」

「Yes？」

「アイ・キャント」

「Did I do something wrong？」

あなたが悪いんじゃないの...

「ノー、 アイム... アイ...」

そうね...

「ユー・アー・ライト」

あなたは正しかったわ。

「マイ・ハズバンド・イズ、スティル・アライブ...」

でも、それは...

「ビリーブ・ミー、アイ・ラブ・ユー、でも...」

なんて言えばいいの？ 英語で、なんて...

「Romie, I know」

わかる？

「It doesn't mean you still love your husband , and you can't accept me」

私がおとうさんを愛しているから、あなたを受け入れられないってことじゃないって...

「I told you, I will wait」

待つって言った...

「I will wait for you crawling up from the trap」

ン？ なに？ トラップから？ クローリング？

「ホワット？」

「You don't have to make Cappuccino」

カプチーノを作らなくてもいい？

なんで突然カプチーノ？

「I will make it for you」

あなたが作る？

「So don't worry」

だから心配するな？

なんでカプチーノ？

「ドゥ・ユー・ワント・カプチーノ、ナウ？」

カプチーノが飲みたくなったの？

「Actually I need a cup of espresso now」

エスプレッソが必要？

あの苦いやつ？

なに？ なんのことを言ってるの？

「アイ・ドント・アングスタンド！」

「You don't have to, it's... my problem」

あなたの問題？

「ホワット・イズ・プロブレム？」

なに？ またその目？ わかってくれみたいな？ そんな目だけでわかるわけないでしょ！

「ホワット？」

「I am a man!」

僕は男だ？

またそれ？

意味がわからないわ！

「So... You are not putting lipstick on」

口紅をつけていない？

そうよ、そう言ったじゃない！

「イツツ・リップクリーム！」

「So... I can kiss you」

キスができる？

口紅つけてたってキスしてきたじゃ... もう...

ねえ

待つって言わなかった？

「ユー・セイ、ユー・ウェイト」

「Did I?」

なに、すっとぼけてるの？

「Anyway... Espresso wouldn't work」

またエスプレッソ？

「ドウ・ユー・ワント・エスプレッソ？」

「I don't need it anymore」

もう必要ない？

あなたの腕の中から...

チラッと見えるもうひとつのベッド...

だって、しかたないわ。

私、50歳だもの。

子どもだっているしね。

もう27歳よ。

それでも...

「I love you」

そう言うんだから。



## メイフェア・レディ？

---

そうよ、私、50歳なのよ。

それが昼間、夕方だけ、こんな時間に何やってるの？

ほら、私の肩に腕をまわしたまま、顔を見ると、ほら、嬉しそうに微笑むけど、

この人だって、もう48歳よ？ 不倫してるわけじゃないけど、なんだかねえ。

ダニーの家に行ったときも、まあ、ねえ、そういうことはあったけど、なんでかしら？

あのときはこんな気持ちにならなかったわ。私にとってあれは現実じゃなかったのかしら。

この寝室にダニーが、なんだか似合わないよ。現実の中にありえないものがあるみたいなの？

「おかあさ〜ん！」

ンッ？

ダニーと顔見合わせたわ。

美香っ？

もうジェスチャーで服を着てって指示しながら、私もあわてて服を着て、

ベッドを直して、そっちに座ってって指さして、はあああああ。

「おかあさ〜ん！」

息をひそめてるのもおかしいわね。

「は〜い！」

「二階？」

「そうよ！」

ダダダダって階段をのぼってくる音がして

ガチャッとドアが開いて

「二人で何してたの？」

ななななにして

「あの、カプチーノ・マシンの話よ」

「カプチーノ・マシン？」

「そうよ」

「ここで？」

「そうよ、おかあさんが使えないって言ったら、ダニーが作るから作らなくていいよって」

ウソは言っていないわよ。

「キッチンじゃなくて、ここでカプチーノ・マシンの話？」

「そうよ」

「まあいいけど」

「美香、お友だちと出かけたんじゃないの？」

「あ！ それ！ おかあさん、お願いがあるの」

「なに？」

「電話かかってきちゃってさ」

「なにが？」

「忘れちゃってんだよね」

「なにを？」

「パエリアとスパニッシュオムレツ作ってくれない？」

「ハア〜ッ？」

「今夜ね、持ち寄りパーティするの忘れててさ」

「持ち寄りパーティ？」

「それぞれ何か作って持っていくの」

「知ってるわよ」

教授の奥様会でよくやらされたもの。

「それでね、私はパエリアとスパニッシュオムレツ持っていくって言ってたんだよね」

「だったら自分で作ればいいでしょ」

「私作れないし、おかあさんのが食べたいって言うんだもん」

「誰が？」

「真由ちゃん、ほら、幼稚園のとき一緒だった」

「ああ！ 真由ちゃん！」

たしか、お母さんが二歳くらいのときに亡くなって、おばあちゃんと一緒に暮らしてたんだわ。

「真由ちゃん、結婚することになったの」

「あああ！ おめでとう！」

あの真由ちゃんがねえ、月日が経つのは早いわねえ。

「それで、仲良しだった4人で、おめでとうパーティしようってことになってさ。

ほら、真由ちゃん、私の誕生パーティで、おかあさんが作ってくれたパエリャ好きだったじゃん？」

そうだったわ、おばあちゃんと暮らしてたから煮物しか食べたことないって言ってたわ。

「それで頼まれたんだよね、おかあさんのパエリャとスパニッシュオムレツ食べたいって」

「憶えててくれたの？」

「そうだよ、真由ちゃん、今でもパエリャはおかあさんのがいちばん好きなんだって」

「まあ...」

泣けちゃうわ。

「だから作って」

「いつ？」

「だから今夜、8時に集合ってことになったから」

「それって、さっき決めたの？」

「ううん、二週間くらい前かな？」

「なんでもっと早く言わないのよっ？」

「だって、ダニーさんが来るとかいろいろあって忘れちゃったんだもん！」

私のせい？ 私のせいなの？

「What's going on？」

だからって、せめて今朝言ってくれれば... あ、今朝はとてもそんな状態じゃなかったわ。

やっぱり私のせい？

美香がダニーに説明してるわ。

ダニーに説明してたって何の助けにもならないけどねっ。

「Oh, your friend must would be happy!」

何がハッピーよ？

これから、材料買って怒涛のように作らなきゃいけないのは私よ？

「あれ？ “Dan, Your shirt is buttoned wrong”」

ン？ ボタンがなに？

「Mika, you can't tease me anymore!」

笑ってるわ。

「“No. Look!”」

美香がダニーのシャツの胸元を指さした アーーーーーッ！

ボタンがかけちがえてて、もうっ、もっと落ち着いてよっ！

なんだか、もう、なんていうの、高校生が、おかあさんに現場をつかまれたみたいなの、その逆バージョンみたいなの、なにやってるの、私たちったらーーーーっ!?

美香に材料を買ってきてって言ったら、何を買ったらいいかわからないって、

書くからって言ったら、おかあさんが行った方が早いって、そうだけどっ？

じゃあ一緒に来てって言ったら、着替えるから、ダニーに運転してもらったら？って。

「This way?」

「イエス」

真由ちゃんじゃなかったら、絶対に作らないわよ。

おかあさんも真由ちゃんの花嫁姿見たかったでしょうね。

おかあさんの代わりにはなれないけど、おばちゃんからのお祝いよ。

私のパエリヤを憶えていてくれたなん... あっ！

「右側走ってるわよ！ えっと、左側、レフト、道、ロード！」

「Oops! That's right. I should drive on the left lane like as London」

ロンドン？

なんでもいいけど、

「ここ、曲がるって、ターン、ライト」

「Ok」

一人で来た方が早かったかしら？

だいたいの材料は買ったわ。

あ、サフラン！ あれがなきゃパエリヤにはならないわ。

「加藤教授の奥様！」

え？

あっ！

向こうから、川田教授の奥様！ おとうさんの先輩の奥様！ うるさい奥様！

なんでこのスーパーにいるの———っ？

「まあ、お久しぶりですこと！」

「ご無沙汰しております」

「お元気でした？」

「おかげさまで」

早く帰りたいのよっ！

「お嬢様はお元気？」

「おかげさまで」

「まだご結婚はなさらないの？」

余計なお世話よっ！

「はあ」

「あら、こちらの、外国の方は？」

え？

あっ！

「あの、しゅ、主人の知り合いで、お墓参りに来てくださって」

「イギリスのお知り合い？」

イギリス？

あ、そうだわ、お父さんの外国の知り合いって、イギリス人しかいなかったわ。

知り合いってというか、学会で顔見知りくらいだけど。

「はい、（わかって！）ブリティッシュです」

目で、あなたはブリティッシュよ！って、わかるわけないわ。

まあ、黙ってればイギリスだろうがアメリカだろうがわからないわね。

「まあ！ ‘How do you do?’」

そうだわ...！

この奥さん、若い頃一年間イギリスに語学留学したって自慢してたんだわ。

「How do you do?’」

「Where do you live in England, sir?’」

イングランドには住んでないのよ！ いいから早く解放して！

「I’m from London, Madame」

ロンドン？

「Which part of London do you live?’」

いいから、早く解放して———っ！

「Mayfair, Lady」

メイフェア？ なんの話？

「Oh... I see ...’」

なんだかキョトキョトしてるけど、いいから早くいなくなって———っ！

「あら、もうこんな時間、帰らないと」

そうよ、帰って！

「It is nice to meet you, sir.’」

「Nice to meet you, Madame」

「それじゃ、加藤教授の奥様、ごきげんよう」

「はい、失礼します」

行った。

はあああああ

「Who was she?’」

誰って、奥様会でも口うるさくて、さんざん私をこき使った、おとうさんの先輩の奥さんよ。

「マイ・ハズバンドの、先輩って？ まあ、ワイフ・オブ・ボス」

「I see, and she is still your boss」

ハ？

笑ってるけど？ ロンドンで、フランス人にしておけばよかったかしら？

フランスはおとうさんと接点ないわ、アメリカもないけどね。

「She didn't get it」

彼女はゲットしなかった？

「ホワット？」

「Do you know a musical My Fair Lady？」

マイフェアレディ？ オードリー・ヘプバーン！

「イエス！ アイ・ライク・イット！」

「My Fair was parodied... what to say, came from Mayfair, cockney accent」

マイ・フェアは... メイフェアからできた... コックニー... あ、コックニー訛り？

「Oh, you got it」

英文学専攻だったから、一応ね。

ちょっとしかわからないけど。

でも、あなたは、なんでそんなことまで知ってるの？

「What are you looking at me like that？」

だって、なんていうか...

「ユー・カム・フロム・ロンドン」

「I told Porkies」

「ポーキーズ？」

「Never mind, it's a cockney slang」

コックニーのスラング、あ、そう。

アメリカ人よね、あなた？

「アー・ユー・アメリカン？」

「You emphasized 'British', and so I pretended like a British man」

私がブリティッシュを、エンファサイズって、とにかく、ブリティッシュのふりをしたと。

「サンキュー」

とにかく、助かったわ。

「May I ask you something？」

「イエス？」

「Why did she act like still your boss？」

なんで私のボスみたいなのか？

「ビコーズ、ハー・ハズバンド・イズ、マイハズバンドズ・ボス」

「But your husband already died」

そりゃ死んじゃったし、もう交流もないけど、なんていうのかしら？

「ビコーズ、そうねえ、ディス・イズ・ジャパン」

日本社会の構図っていうのかしら？ 構図って英語でなんて言うの？ いいけど。

そんなことより、パエリャよ！



美香がね、作っているのをスマホの動画で撮るっていうのよ。

真由ちゃんが結婚してから作れるようになって。

書いてあげるって言ったら、見なきゃわからないって、まあ、それはそうね。

「美香も覚えたらどうなの？ ていうか、手伝いなさいよ」

「だって、ビデオ撮るし、あ、“Dan, would you take a video of us?”」

「Sure」

え？ ダニーがビデオ撮るの？

なんだか緊張しちゃうわよ。

「真由～！ これから、うちのおかあさんがパエリア作りま～す！」

私の顔は写さないでほしいわ。

「おかあさん、最初に何すればいいの？」

「え？ あ、ああ、えっと、そうですね」

「料理番組じゃないんだからさ、緊張しなくていいよ」

するわよっ！

「まず、お米4カップ、これは洗わないでください」

「なんで？」

「前も教えたでしょ？ スープを吸い込みやすいように」

「ああ！ はいはい」

はいはいじゃないわよ。

「最初に、お米4カップに対してスープ4カップ作ります。

お水を4カップよりちょっと多めを火にかけて...」

「なんで多めなの？」

「前にも教えたじゃない！ 沸騰すると、少し蒸発するからよ」

「だって！ 真由、わかった～？ 次は？」

「え？ ああ、そこに、チキンコンソメ1個か2個と、サフランを指ですり潰すようにして、

あとは、塩・胡椒と、私はターメリックも入れます」

「どれくらい？」

「何が？」

「サフランとか塩・胡椒とか、何グラム？」

「グラム？ だいたい、これくらいよ」

「これくらいじゃわかんないよ」

「わかんないって言われても、見なさいよ、これくらいよ！」

「真由、これくらいだって」

「あとは味見してとしか言えないわ」

「だって」

美香に、チキンに塩・胡椒させて、オリーブオイルで焼き色つけさせたら、油がパンパンはねるから大騒ぎよ。

真由ちゃん、普段料理しないところなるから気をつけてね。

パエリアが炊ける間にスパニッシュオムレツ。

今日はいちばん大きいフライパンで作ったから、ひっくり返すのが...

「美香、やって」

「やだあ、怖いよ」

「怖いって、おかあさんは重たくてできないわよ」

「そうだ！ “Dan! Help my mother!”」

「Sure」

なんでもかんでも、ダニーを便利に使うんじゃないの！

「Mika, I'm an expert to flip Tortilla」

「Are you?」

「Yeah, your mother taught me」

教えたっていうか、あのときは、やっぱり重たくて、まあ教えたことになるのかしら？

「Three....two....one!」

カポッて、できたわ！

美香より、よっぽど覚えがいいわよ。

「そして、これを、ゆっくりフライパンに戻します」

「Am I doing right?」

「イエス、スローリー、イエス」

「そして、下の方に火が通ったら出来上がりです」

パエリアも出来上がって、タッパーに詰めて持っていくんですって。

「美香、ダニーの分だけ残しておいてちょうだい」

「あ、だね。他の子もいろいろ持ってくるから、二人分残しておくよ」

「おかあさんは少しでいいから」

「わかった」

「真由ちゃんに、おかあさんからもおめでとうって言うておいてね」

「うん、伝えておくね」

「あ！ パエリアにレモンつけないと、ちょっと待って」

レモンを、切ってあげた方がいいわね。

「これ、絞ってから食べてね」

「うん、今夜泊まってくるかも、終電なくなると思うし」

「あ、そう」

「“Dan, I'll stay with my friends tonight”」

「Have fun!」

「“I will”、じゃ、行って来るね」

「はいはい」

「あ、“Dan, You can take off your shirt tonight”」

美っ香ああああっ

ていうか、あなたも固まってないで何か言いなさいよ——っ！

バタンッ

はああああ

情けな〜い顔で、ゆっくり振り向いたわ。

わかってるわよ、何を言えばよかったのか？でしょ。

何も言えないわよ。

それより、このスパニッシュオムレツをお皿に移して...

ダニーが私の腰に腕をまわしてきたから、一欠けらを爪楊枝に刺して、口の中に入れてあげたわ。

「It reminds me of that night」

あの夜を思い出す？

ああ！

「ザット・ナイト、ユー・ギブ・ミー・ワンハンドレッド・ピンクローズ！」

あの最後の夜...

「Yes, that night I was out of control and stupid, you would say, as usual」

まさかまたこうやって、あなたにスパニッシュオムレツを食べさせるなんて...

そしてまたザット・ナイトは来るんだわ、あさっての夜に、また最後の夜が...

とにかく...

サラダだけでも作ろうかしら？

美味しそうに食べてるわ。

そういえば、さっき川田教授の奥さんと話してたとき、マイフェアレディが、  
マイフェアのコックニー訛りからどうのって言ってたけど、マイフェアって、なに？

「ダニー」

「Yes?」

「ホワット・イズ・メイフェア?」

「Mayfair? Ah, it's... what to say, it's one of the most exclusive district of London」

ロンドンの？ イクスクルーシブ？

「ホワット・イクスクルーシブ?」

「Ah... a very good area」

とてもよいところ？ 説明するのをめんどくさがったわね。

「My grey grandparents used to live there long long time ago」

グレイグランド・ペアレンツ？ グランドペアレンツはおじいさんとおばあさんで...

グレイがつくと... ひいおじいさんとおばあさん？ え？ 住んでいた？

「アー・ユー・ブリティッシュ?」

「No. My grandparents were from England」

おじいさんとおばあさんがイギリスから...出身？

「ユー・アー・ブリティッシュ!」

「No, I was born in the US, and my father was, too」

おじいさんとおばあさんがイギリス出身てことは...

「ディド・ユー・ゴー・トゥ・ロンドン？」

ロンドンに行ったことあるのかしら？

「Yes, I've visited there a several times」

何回か行ったことがある？

え～、うらやましいいいい！

「アイ・ラブ・ロンドン！」

小さい頃からの憧れの地よ！

「Have you ever been there?」

行ったことがあるか？

「ノー、でも、アイ・ラブ・ロンドン！」

「You love London, ok, so... Why did you come to the US instead of London?」

なぜロンドンじゃなくてUSに来たのか？

だって

「アイ・キャント・ファイド、クッキング・ホームステイプログラム、イン・ロンドン！」

「Of course not. Nobody wants to learn how to cook British food」

誰もイギリスの食べ物の作り方を習いたくない？

「ディド・ユー・イート、ブリティッシュフード？」

「Yeah, ah... Fish and chips, mince pie, shepherd's pie... what else?」

フィッシュアンドチップスなんて言ってるようじゃダメね。

「ドウ・ユー・ノウ、ネイキッド・シェフ？」

「Naked chef? A naked chef? naked... chef? Naked?」

なんで何回も聞くの？

「イエス、ネイキッド・シェフ」

「I don't know... A naked chef?」

なによ、そうよ！

「ヒー・イズ・マイ・グレート・クッキング・ティーチャー」

「Have you ever seen him?」

会ったことがあるか？

「ノー、アイ・ジャスト・シー・DVD」

会えるものなら会いたいわ。

「You watch DVD of a naked chef...」

「イエス、メニータイム」

「So... You watch a naked guy is cooking」

ガイ？ ガイじゃなくて、

「ネイキッド・シェフ」

「Ok... Well, I didn't... I didn't know... you like a such kind of...DVD」

そういうDVDが好きだとは知らなかった？

だって料理のDVDよ？

「アイ・ラブ・イット！」

「Ok...and... What is the point?」

ポイントは何か？

だからあっ

「イングランド・ハブ・グレート・シェフ！ ヒズ・クッキング・イズ・グレート！」

「Ok...」

なにその、よくわからないっていう顔？

見せた方が早いかしら？ 百聞は一見にしかずっていうものね。

「ドウ・ユー・ワント・シー？」

「You mean his DVD?」

「イエス」

「Ah... If you want me to watch...」

持ってるのよ、これは珍しく買ったのよ。

「ウェイト」

えっと、この棚の中に... あったわ。日本語吹き替えだけどいいかしら？

「ほら、これ！」

ポカン？ やっぱり知らなかったのね。

「Oh! The Naked Chef!」

「イエス」

「The title of a program!」

ハ？

男ってバカだわ。

ネイキッド・シェフって、何も着ていないシェフだと思ったんですって。

Wearing nothingって、そういうことよね。

そんなもの見るわけないでしょ！ 話の流れからしてありえないでしょ！

見せる気も失せたわ。

どういう発想よ？ 信じられない！

今、お皿洗ってるけど？ チラッと私の方見たけど？

フン、私がそんな、そういうDVDを見ると思ったこと自体ゆるせないわ。

「アイ・テイク・ア・バス！」

「Yes, please」

プリーズって、なによっ？

なんで笑ってるの？

フン！ いいけど。

## 間違いの喜劇？

---

はああああ

やっぱり湯船に入ると身体がほぐれるわあ。

シャンプーラックを置いている台の上に、ダニーのシャンプーとコンディショナー。

ダニーの寝室のお風呂にあったわ。

男性用のひげそりがこのお風呂場にあるなんて、何年ぶりかしら？

おとうさんが死んでからも、しばらくそのままにしてたわね。

捨ててしまったら、もう二度と同じものはそこにはなくなるの、それが怖かったのよ。

二年かかったわ、美香は何度も捨てようって言ってたんだけど。

この光景に慣れるのが怖いわ。

大丈夫よね、しあさってにはいなくなるんだから。

きっと大丈夫よ。

このドライヤーにもまたすっかり慣れたわ。

帰ってきたときは、風が弱くてイライラしたけど、もともとはこれを使ってたんだもの。

ダニー用っていうか、お客様用のバスタオルとタオルを出して...

あら？ そういえば、ダニーの下着、洗ってないわ。

どうしてるのかしら？ 滞在分の下着を持ってきたのかしら？ 汚れたのを持って帰るの？

あとで出してって... そんなこといいじゃない！ なんでダニーの下着の心配してるの？

そういうことを日常の中に入れちゃうと、それがなくなったときに...

でも、洗ってあげよう。

だって...

好きなんだもの。

好きな人に何かしてあげたいって思うのよ。

それが、たとえパンツ洗うことだとしても、あと一回か二回しかできないとしても。

バカみたい、涙出ちゃった。

アイクリームつけ直さなきゃ。

あら？ いないわ。

リビング？

いない、あら、仏間にいるわ。

仏壇の前であぐらかいて座ってるわ。

珍しいのかしら？ そうね、アメリカでは見たことないでしょうね。



「Ah, Romie」

こっちを向いて微笑む目が... 見とれてる場合じゃないわ。

「ダニー、キブ・ミー・ユア・ダーティシング」

「What?」

「アイ・ウォッシュ・ユア・ダーティシング」

「Oh! Yes, my... Well, thank you, I will」

ダニーって、洗濯物出してって言うと、いつも、なんていうの？ 苦笑い？ するのよ。  
アメリカでも、いつもだったわ。今さら照れることじゃないでしょ？

「This is your husband, right?」

おとうさんの写真見てたのね。

「イエス」

「He is very handsome」

まあね、でも竹之内豊には似てなかったわ、竹之内豊って言ってもわからないわよね。

「I was asking him that how did he get you?」

彼に聞いていた？ どうやって私をゲットしたか？  
なんだかよくわからないけど、

「ダニー、テイク・ア・シャワー、あ、キブ・ミー・ユア・ダーティシング」

「Ok, if you want, I'll give my... well, I will」

スーツケースからゴソゴソ出してきたわ、やっぱり溜めてたのね。

「キブ・ミー」

はい、ここに出して。

なに？ なんでジッと見てるの？ アイクリームよれてるかしら？

なぜこの状況で突然キスなのかわからないけど、とにかく洗濯物は渡されたわ。  
カルバン・クライン、懐かしいわ。

お布団を敷いておいてあげたけど、つくづくベッドにしてよかったと思うわ。  
お布団の上げ下ろしって、けっこう腰にくるのよね。  
若い頃はそんなに感じなかったけど、もうダメねえ。

おとうさんの写真...  
毎晩見てたのね。

おとうさん、たしかにおとうさんはハンサムよ、ずっと憧れてたくらいですもの。  
でもね、あのね、私、今は、ダニーの方がときめいちゃうの。  
化けて出ないであげてね、ダニーは悪くないのよ、誰が悪いの？ 私？  
ちがうわ、おとうさんがさっさと死んじゃうからよ！ おとうさんのせいとかじゃないけど。  
でも、それもしあさってには終わるわ、今度こそ本当にさよならなのよ。  
今回のは、なんていうのかしら、特別編？ 本当はあのニューヨークの空港で終わったはずなのよ。

だから、私、必死に気持ちを抑えて、あれはなかったことに、なかったことっていうか、  
夢？ まあそんな感じね、そうだと思おうとしてたのに、突然来るから、なんかまた、  
せっかくやっとなんとか気持ちを落ち着けたと思ったのに、なんで来たの？  
もう来ちゃったんだからしょうがないじゃない！ さっきもキスされちゃったし。  
夕方は... それはいいわ、美香が... 考えない！

おとうさん、これはあれかしら？

“Too early see unknown, and known too late!”

ジュリエットの台詞、知らずに会うのが早すぎて知るのが遅すぎた？ 知るって何を？  
これじゃないわね、だったら...

“Out, out, brief candle!”

マクベスの、消えろ、消えろ、つかのまの蠟燭よ！って、まだ消えるには寿命は長いわ。  
それに、全然関係ないし。

“A horse, a horse, my kingdom for a horse”

リチャード三世の、馬を、馬を、馬の代わりに王国をくれてやろうは、今思い浮かんだだけ。  
クイーンの歌詞の中にもあるのよ、さすがフレディーねって思ったわ、関係ないけど。  
おとうさん、48歳のおじさんと50歳のお婆さんの恋の教科書がないわ。  
シェイクスピアも初老の恋物語なんて書いてないわ。つまり、そんなものは存在しないの？

それじゃ、私とダニーは何してるの？ あ... 思い浮かんじやった。

「間違いの喜劇」。

そうね、初老のおじさんとおばさんの恋なんて、傍から見たら喜劇よね。

私は深刻に悩んでるんだけどね。悲劇くらいに思ってるんだけどね。

悲劇って、人が見たら喜劇なのかしら？ そうね、他人の不幸は蜜の味っていうものね。

それはちょっと違うわね。

「Romie」

あ、あがってきたのね。

ビールでも飲むかしら？

「What are you talking with your husband?」

何をおとうさんと話してたのか？ 笑ってるけど、笑ってる場合じゃないわよ。

「間違いの喜劇って... あ、The Comedy of Errorsよ」

「The Comedy of Errors?」

ポカンとしてるけど

「ドウ・ユー・シンク、ディス・イズ・エラー?」

「This? What do you mean... this?」

ディスはどういう意味かって、だから...

「ディス・イズ、アイ・ラブ・ユー」

「Oh, no. I hope not!」

そうでないことを希望する？

それは、私だって...

「アイ・ホープ・ナット、トゥー」

「You hope not, either」

嬉しそうにそう言って私のこと後ろから抱きしめるけど...

さりげなく、私の英語直したわね。

そうだったわ。

Notの、否定形の「私も～しない」は、tooじゃなくてeitherだったわ。

中学生レベルの英語よ！

これを間違いの喜劇っていうの？

ちがうわね！

わかってるわよ！

わからないんだけど？

---

朝だわ。

朝よね？

ここには目覚まし時計がないけど、薄暗がりにぼんやり見える壁掛け時計は... 6時10分。本当にイヤになるくらい、何時に寝ても同じような時間に目が覚めるわ。

ゆうべは、結局、なんとなく、私も仏間で狭いお布団の中に二人で寝たのよ、寝てるの。寝てよかったのはね、気づいたのよ、ダニーの脚がお布団からはみ出るって。

すごく背が高いんですもの、お布団は平均的日本人用サイズを買ってたから。

だってそうでしょ？ このお布団買うときに、こんな背の高いアメリカ人が寝るって、想定しないでしょ？ そのときにはまだダニーは私の人生に存在しなかったんだもの。

なんで黙ってたのかしら？ 言ってくれればいいのに。言われてもどうするの？

おとうさんのベッド？ 最初の日なんて、とてもじゃないけど、そんなこと... まあいいわ。

夜中にダニーがトイレに起きたの。アメリカでもそうだったから、トイレねって思っただけだけど。

私を起こさないように、腕枕していた腕をそっと外そうとして、アウツみたいな声出して、アメリカでもそうだったのよ、だから、腕が固まっちゃうから腕枕しなくていいのに。

それから、立ち上がって、鴨居に頭ぶつけて、オウツて声出して、私を起こさないように、必死に痛いのをこらえてトイレに行ったわ。痛かったと思うわ、ガツツて音がしたもの。

戻ってきて、私が寝てると思って、私のおでこにそっとチュツて、それから寝たわ。

アメリカにいたときもそうだったわ、こんなこといつまで続かないと思ってたけど、少なくとも今のところは続いているわね。

なんとなく... 思ったのよ。

アメリカにいたとき、ニューヨークの空港で、もうこれで一生会えないと思ったわ。

でも、こうやってまたダニーと一緒にいるのよ。

だから、もしかしたら、また会えるときがあるのかもって。

しあさってになったら、今度こそ、それが一生のお別れだと思ってたけど、

もしかしたら、何年後かに、何かのはずみで会えるかもしれないって。

でも、そのときまでダニーが私のことを好きでいてくれるかどうかわからないけど。

それに、何年後なんて悠長に考えていられるほど若くないしね。

そろそろ起きて朝食作ろうかしら。

ダニーの寝顔...

こうやって見ているのが、自然すぎて、なんだかずっとこうやって見てきた気になっちゃって、あら、やっぱりおでこの上の方がポッコリ赤くなってるわ。

これはかなり痛かったと思うわ、ガツツだもの。

触ったら痛いわよね、でも、ちょっとだけ...

あ！

手をつかまれちゃった。

起きてたの？

「What are you gonna do?」

何をするつもりって、たんこぶを触ろうとしたんだけど、たんこぶって英語でなんて言うの？

ていうか、そんなこと言わなくていいわね。

だって、またギュウッて抱きしめられちゃったもの。

ギュウッよ？ そっと優しくとかじゃないのよ？

「ダニー！ アイ・ウォッシュ・フェイス！」

「You don't need to」

必要じゃないって必要よ、洗顔は大事なのよ、肌のお手入れはまず洗顔からよ。

「Your face is shinny and bright」

な～に眠たそうな目で見te寝ぼけたこと言ってるのよ。

シャイニーって、皮脂が浮いてテカってるんだわ、早く洗顔しなきゃ！

「Don't go yet」

まだ行くなって、もう起きる時間よ。

「アイ・ハフ・トゥ・ゴー、イツ、えっと、シックス、もう少しでサーティ」

「Do you love me?」

ハ？

まだ寝ぼけてるの？

「ホワイ？」

「I'm just asking」

ただ聞いているだけ？

あ、そう。

「イエス」

「How much?」

どれくらい？

バカじゃない？ こんな朝っぱらから、そうね。

「ディス・マッチ」

たんこぶ、ギュウッて押してやったわ。

声出して痛がってたわ、そうよ、それくらい？

もっとかもね。

ダニーが入れたカプチーノと私が作った朝食。

アメリカにいたときからそうだったわ。

私とダニーって、朝食のときにいろいろ話したりするわけじゃないのよ。

まあ私がいろいろ話せないんだけど。

な~んとなく目が合うと、な~んとなく、ちょっと見つめ合って、またお皿に目を戻すの。

目が合ったからってニコッと、するときもあるけど、無理やりニコッとするわけじゃないの。

これがなんていうのかしら、すごく楽なのよ、心地よって言えばいいのかしら？

心地よって英語で、なんだったっけ？ 知ってるのよ、えっとね、ほら、コン、コン...

「What are you thinking?」

あのね、ここまで出てるの

「コン、ワード、コン、なんだっけ？ コン、ほら、コン」

「Content?」

なにそれ？

「ノー」

「Contract? Confident? Conscious? Contempt? What else?」

そんなにいっぱい言われちゃったら、何がなんだかわからなくなっちゃったわ。

「What do you want to say?」

何か言いたいかって、だから、そうね、簡単に言えば、

「アイ・フィール・グッド・ウィズ・ユー」

そういうこと？

「me, too」

ニコリしたから、そういうことね。

単語は思い出せなかったけどね。

ダニーが、まあ、いつものようにって言えばいいのかしら？ 後片付けしてるわ。

さっきみたいなことがあるとね、やっぱり思うのよ、何を思うって、ほら、

何回も結婚してくれって言われたでしょ？ 何回もよ？ ふつう一回でしょ？

あんなに何回も言われると、“アイ・ラブ・ア・ペン”みたいに聞こえるわ。

あら？ なんだったかしら？ あ、そうそう、だから、言葉よ。

まず、そこでしょ？ 夫婦で言葉が通じないって、ありえないでしょ？

結婚て、アイラブユーって言ってればいいわけじゃないんだから。

だいたい心地よって単語も思い出せないのよ、なんていうの？ 意思疎通？ できないわ。

たとえば、そうね、たとえば、ダニーが胃が痛いって、あ、それはわかるわ、ストマックエイクよ。

だったら、そうね、あ、たとえば下痢をしたとするでしょ？ 下痢って英語でなんていうの？

言われてもわからないわよ、まさか見せてもらうわけにはいかないし、それは見たくないわ。

「What are you thinking?」

あ、終わったのね。

何を考えてるって、だから下痢って単語がわからないのよ。

「アイ・キャント、スピーク・イングリッシュ」

まあ、端的に言えばそうね。

「You are speaking English now」

スピーキングしてるって言ったって、

「マイ・イングリッシュ・イズ、メチャクチャって？ ベリー・バッド」

「I can understand, well, I couldn't say all of, but most of」

全部とは言えないけど、モスト... ほとんど？

ほとんどじゃダメよ、全部じゃないと。

「モスト・オブ・イズ、ナット・グッド」

「Not good... for what?」

何のためにとって、だから

「マリッジ」

え？ 目をひんむいて、なに？ なんでそんな驚いた顔、あっ！



「ノー、ノー、ノー」

ちがうの、そんな、ただちょっと、なんとなく考えてただけで、そんな

「Romie, are you thinking of our marriage?」

アワって、私たちのって、そういうのじゃ、ただなんなくってだけで

「イ、イエス、でも、ノー、そういうのじゃなくて、ノー、えっと」

「So you are afraid of that your... Oh! Now I understand what you wanted to say」

なにになになに？ 何言ってるの？ 早口でわからない。

「You were trying to say competence! I thought something prefixed c.o.n.」

この人は何を言っているの？ まったくアイ・ドント・アンダスタンドよ。

「Competence! Of course! You studied Shakespeare, I should have thought about that」

シェイクスピアだけわかったわ。

なんでシェイクスピアの話になってるの？

「Romie, don't worry about your English」

突然わかること言い出したわ。

私の英語のことは心配するな、何がどうつながって心配するなになったの？

「Romie, it is not the most important thing」

なんで急に、すご〜くゆっくりしゃべってるの？

「A language is just a tool for communication, maybe one of, not the only one」

結局ふつうの速さに戻ったけど、言語は、ツールって... あ、道具？

「アイ・キャント・ユーズ、えっと、ツール、ウエル」

私はその道具をまともに使えないのよ。

「Ah... What to say...」

なんて言えばいいのかって、だから私の方がわからないのよ、英語が！

「Oh!」

何か思いついたみたいだけど、もういいから。

「Cathy and I speak the same language」

キャシーとあなたは同じ言語を話す、だって二人ともアメリカ人だもの。

「But we could never understand each other」

しかし、お互いをネバー理解できなかった... だからなに？ 何が言いたいのかしら？

「So, speaking the same language is not the most important thing for marriage」

え？ マリッジに戻ったの？

だから、そうじゃなくて、でも、やっぱり、いくらなんでも、こんな... えっと...

バタンッ

玄関？

「ただいま〜！」

美香！

「おかえりなさい！」

なんていいところに帰ってきてくれたの！

「ただいま、“Hi, Dan!”」

美香、あなたが天使に見えるわ！

「Hi, Mika. Did you have a good time with your friends?」

「Yeah! Did you have a good time with my mother? I bet you did!」

「Why not? Now we're talking about our...」

「美香!」

「なに?」

「朝ご飯は?」

「友だちと朝マック食べてきた」

マック...

まあ、いいわ...

今日はいいわ...

とにかく、帰ってきてくれて、ありがとう!

## 歌舞伎座なうよ！

---

今ね、歌舞伎座にいるの。

ビックリよね、自分でビックリしてるわ。

歌舞伎座なんて初めて来たわ、ていうか、歌舞伎なんて観たことないわよ。

美香がチケットを取ってたの。

美香の友だちで、なんだったかしら？　なんだか甲殻類の名前だった気がするんだけど、とにかくその役者さんのファンがいて、その子に頼んで取ってもらったんですって。

ダニーが来るってわかってからね。

私は知らなかったけどね、チケットのこともダニーのことも。

せめて、昨日にでも歌舞伎座に行くって言ってくれればいいと思わない？

どうしていつもギリギリで言うのかしら？

正直に言うわ、私、歌舞伎なんて興味ないのよ、全然ないの、申し訳ないけど。

でも、美香がせっかくチケット取ったわけだし、THE・日本みたいなものだから、ダニーは珍しいかもしれないけど、正直、ダニーにとって珍しいかどうかより、あのまま家にいなくて済んだからホッとしたわ。

ただ、何を着ていけばいいのか、まったくわからなくてうろたえたけどね。

だって、歌舞伎座って、着物とかフォーマルなドレスを着たマダムの社交場って印象なんですよ。

夜の部っていても、開演が4時半で開場が4時だから、移動時間も考えたら...って、

私の化粧や着る物に悩んだことはいいんだけど、あれからずっとダニーのこと避けてたの。

あの狭い家で避けるって至難の技だったわ。

二階の寝室のおとうさんのベッドにシーツ敷いたり、仏間を掃除したり、洗濯したり、お昼も作って、とにかく「私は忙しいの」オーラを出して避けてたのよ。

だって、ダニーは私ともっと話したそうな空気ビンビン出してたんですもの。

言葉が問題とかそういうのじゃないって、説明するのもめんどくさかったし。

それにしても、すごいわねえ。

別世界だわ。

やっぱり着物の人が多いわねえ、洋服の人もやっぱりそれなりだし。

私もいちおうお出かけ着で来たけど、なんだか場違いなところに来たって感じよ。

むしろ、スーツにネタクイしてるダニーの方が、なんだかしっくりしてるわよ。

この絨毯すごいわねえ、みんな土足で歩いているのにきれいね、毎日クリーニングしてるのかしら？

さっき美香が、イヤホンガイドいる？って聞いてきたんだけど、いらないうって言ったの。ガイドしてもらうほど興味ないし、多分寝ちゃうと思うのよ、もったいないわ。ダニーには、英語のイヤホンガイド借りてたけどね。英語のイヤホンガイドがあるってことは外国の人がたくさん来るってことよね。わかるのかしら？ まあ、だからイヤホンガイドがあるんでしょけど。なに考えてるの、私？ ちょっと緊張してるのよ、別世界だから。

席は二階の真ん中よ。

へえ、すごいわねえ、すごいしか言葉が出てこないわ。

劇場の中に提灯がぶら下がってるのよ？ ここで、たとえば、バレエはできないわね。

ダニーを真ん中に、右側に私、左側に美香よ、できれば美香に真ん中に座ってもらいたかったわ。

だって、もし何か聞かれても私はわからないわよ。

日本人だからって、日本のこと何でも知ってると思わないでほしいの。

イヤホンガイドがあるから大丈夫かしら？ わからないけど。

ダニーも、もちろん初めてなんですって、もちろんよね。

でも、日本人の私とアメリカ人のダニーが、今同じスタートラインってどうなの？

どうなのって、しかたないんだけど。

なんていうの？ パンフレット？ この世界では筋書きていうのね。

それはいちおう買ったんだけど、義経の話らしいんだけど、夜の部には出てこないの。

なんで義経の話に寿司屋が出てくるのか、狐ってなんなのかわからないわ。

観ればわかるのかしら？

始まった！

はああああ、日本！って感じねえ。

あら、あのおばちゃん、男なのよね？ どう見てもおばちゃんだわ、すごいわあ。

あ！ あれが主役の、なんだっけ、ゴンタさん？ まあ！ カッコイイ！

スラーツとしてて、なんてハンサムなの！ 素敵！ 私と同じくらいの年かしら？

同い年でこんなカッコいい人見たことないわ。

え？ あのおばちゃんとゴンタさんが夫婦なの？ 母子だと思ったわ。

それで、あの子役が二人の子どもなわけね、へえ。

それにしても、ゴンタさん、素敵すぎるわ、惚れちゃうわ。

いや～ん、あんなふうに、好きって感じで着物めくられたら、ポツとしちゃうわよお。

あの若者は、たしか最初にも出てきたわよね。

へえ、なんていうの？ アクション？ すごいわ。

あららら、殺されちゃった、なんで？ ちょっと人間関係がよくわからないわ。  
それで、今出てきたおじいさんは何？ 何してるの？ あれは首？ なんで？

あ、終わったわ。

チラッとダニーを見たら、満足そうに微笑んでるわ、楽しんだのね。

イヤホンガイドって、外国人に歌舞伎をわからせちゃうのね、すごいわね。

「ねえねえ、お弁当買いに行こうよ」

お弁当？ どこで食べるの？ 食べるところがあるのかしら？ まあいいわ。

へえ！ いろいろあるのねえ。

ダニーが食べられそうなのは、サンドイッチくらいだわ。

「おかあさん、お金ちょうだい」

「あ、はいはい」

「Mika, here you go」

えっ？ お財布渡す？

「Thanks!」

子どもにお財布ごと渡す？ 子どもじゃないけど、おとなだけど、でも、

「Why are you looking at me?」

甘やかさないでって何て言うの？ えっと、

「ドント、トゥーマッチ・スイート・トゥ・美香！」

「Ok, I won't, honey」

ハニーッ？ この人混みの中で、公衆の中で、ハニーッ？

だ、大丈夫よ！ ここは歌舞伎座だもの！ でも、江戸時代じゃないわ... まあ、いいわ。

劇場の椅子に座ってお弁当食べていいなんて、歌舞伎座ってすごいわねえ。

美香ったら、歌舞伎座弁当っていうのを三個買ってきたわ。

THE・和食だけど、ダニーは食べられるのかしら？ まあいいわ、これも経験よ。

あら、食べてる。さすがに煮物のこんにゃくだけは複雑な顔して食べてるけど。

なかなか美味しかったわ。

なんていうのかしら？ 奇をてらっているわけでも高級ぶってる感じでもなく？

でも、お弁当が千円っていうのは高いわね、まあこれくらいなら千円はしてもおかしくないかしら？

「What are you thinking?」

だから

「プライス・オブ・ランチボックス」

キョトン？ なに？ だって本当にそうなんですもの。

あ、次の幕が始まるわ。

ここは、お寿司屋さん？ カウンターがないわね、昔のお寿司屋さんてこういうところなのかしら？

あら、あの簪刺してる若い女の子...よね？ あれも男の人でしょ？ すごいわねえ。

実は私、歌舞伎の女形のことについては、文献使って書いているのよ。

シェイクスピアの「お気に召すまま」のレポートに使ったんだけど。

見たことないのに書いたけど、Aプラスだったわ、若いって怖いもの知らずね。

話が進んでいくけど、どうも解せないわ。

どうして、あのゴンタさんは、自分の奥さんと息子を、お父さんの上司、じゃないわ、主君？

その家族を守るために、殺されるのがわかっているのに差し出すのかしら？

ほら、あんなに別れを惜しんでるわ、だったら最初からこんなことしなきゃいいのに。

え？ となりで小さく「Oh...」って言って、あら、ウルウルしてるわ。

いったいイヤホンガイドで、どんな感動的なことを言ってるのかしら？

あっ！ となりでも「Oh, no...」って、あのお父さんたらゴンタさん刺しちゃって！

怒ってるのかもしれないけど、もうちょっと落ち着いて話を聞いてみたらどうなのかしら？

あらあらあら、ほらあ、本当はお金目当てじゃなくて、お父さんのためにやったんでしょ？

だから、ちゃんと話を聞いてみればよかったのよ。

でもねえ、だからって、自分の奥さんと子どもをねえ、こういう人ってどうかしら？

あらら？ なに？ 結局早とちり？ 敵方は、知っていて許すって言ってるってこと？

このお父さんと息子って、おっちょこちょいだわ、似たもの親子ね。

えっ？ ズルって鼻をすする音、となりでかなり泣いてるんだけど？

いったいイヤホンガイドで、どれほどドラマティックに盛り上げてるの？ こんなに泣くほどよ？

聞いてみたいわ、聞いても英語だからわからないわね。

ティッシュ、そっと出して渡してあげたわ、顔は見ないようにしてあげたけど。

なんていうのかしらねえ、身もふたもない？ 結局なんだったの？  
かわいそうなのは、ゴンタさんの奥さんと子どもだわ、結局そうなのよ。  
男のおバカさんに振り回されるの、災難だったわねえ、結婚した相手が悪かったわね。  
でも、ゴンタさんは、やっぱりカッコイイわ。

終わったわ。

え？

なんで、突然ギュッと手をにぎってきたのかしら？  
泣き顔見せないようにしてるけど、泣いてたのモロバレよ。

「Romie」

「イエス？」

「I love you」

いったい、そのイヤホンガイドはどんなことを言ってたの？  
こんなところで、アイラブユーって言う何かそんな気持ちにさせるような、どんなこと？  
違う話をして盛り上げてるんじゃないかしら？ そうとしか思えないわ。

次の演目まで15分休憩だから、トイレに来たわ。

「おかあさん、どう？」

「なにが？」

「初歌舞伎」

「どうって... 美香は？」

「おもしろかったよ」

おもしろい？ どこが？ おもしろい話ではないと思うのよ？ あの奥さんと子どもの身になっ  
たらね。

「美香、あのゴンタさん？」

「いがみの権太？」

「あの役者さん、かっこいいわねえ！」

「だよね！ あの、70近いんだって」

「え？ 70歳近いの？ 若いわあ！ 素敵すぎるわ！」



「おかあさん、惚れちゃった？」

「そうね、惚れちゃうわね」

「ダニーさんとどっちがいい？」

ハ？

どっちって、役者さんよ？ 私に選ぶ権利はないわよ。

ていうか、役者さんとアメリカ人、どっちも... 遠すぎるわね。

トイレから出たら壁にもたれてダニーが立ってたわ。

こっちもかっこいいわ、悔しいけど。

立ってるだけだとね、イヤホンガイドに泣かされてたけどね。

次の演目はね、たしか狐が出てくるって書いてたんだけど、

白いフサフサのを着て出てきたのは... マルチーズ？

でも、歌舞伎にマルチーズって出てくるのかしら？

まさか、あれは狐？ そうなの？ 狐には見えないわ、悪いけど見えないわ。

でも、飛んだり跳ねたり頑張ってるわ、マルチーズが、ちがうわ、狐のつもりなのよね。

歌舞伎って、よくわからないわ。

不思議すぎるわ。

英語のイヤホンガイドもね。

外に出たら、すっかり暗くなってるわ。

わあ！ ライトアップされた歌舞伎座ってきれいねえ！

「おかあさん、写真撮るよ」

え？

「Dan, I'll take a picture of you guys!」

「Ok!」

え、ちょ、ちょっと、肩抱いて、みんなこっちを見てるわよ。

「おかあさん、笑って！」

この状況で笑えると思うっ？

パシヤッ

50歳にして、初体験だわ。

歌舞伎のね、日本人だけどね。

ゴンタさん

---

家に戻ってからも、ダニーと美香は歌舞伎のことを話しているわ。

そんなに感動したのかしら？

私、絶対あのイヤホンガイドは違うことを言っていたと思うのよ。

だって、ゴンタさんの話なんかは、結局は奥さんと子どもが災難に遭ったってことでしょ？

お父さんに勘当されて許してほしかったからって、あんなことしてどこにしあわせがあるの？

もっと他のやり方があったと思うのよ。

だいたい奥さんも、自分が身代わりになるって言うなんて、そこから違う気がするの。

「おかあさん、ダニーさんすごいよ」

「なにが？」

「いがみの権太の、なんていうのかな、あのお芝居の意図することを理解してるんだよ」

美香、英語のイヤホンガイドが怪しいと思わないの？

「美香、あなたはわかったの？」

「まあね、今日で二回目だから、すごくわかってるわけじゃないけどね」

「二回目？ 前も行ったことあるの？」

「うん、まあね、5月かな？」

知らなかったわ。

「そのとき一緒に行った、あの、ニューヨークのね」

「ああ！」

彼氏と行ったのね。

彼氏もイヤホンガイドにやられちゃったんじゃないかしら？

「そのとき、見たのが、えっと、なんていう演目だったかな？

なんかね、主君の若君がいて、その若君を毒殺しようとする悪い連中がいて、

その若君の乳母が、自分の息子に、毒でもなんでも食べろって言ってあるんだよ」

エーーー？ なんて母親なの？

「それで、毒入りのお菓子を位の高い人が持ってきて、その息子が若君をかばって食べて死ぬの」

「まあ、ひどい…」

「目の前でね、悪者とその息子に短剣突き刺すんだけど、母親は顔色ひとつ変えないで見てるの」

その母親に血は通ってるのかしら？

「でも、悪者たちがいなくなってから、息子の遺体にすがりついて泣くのね。  
おまえはこの国の礎になったって言いながら、泣くわけよ」

理解できないわ。

「それを観た後に、彼がね、この芝居に出ていたkingdom、王国は今でも続いているのかって聞くの。

なわけないじゃん？ 藩とかさ、もうないじゃん？ ないって言ったら、  
だったら彼の死は無駄だったってことだねって言うんだよ？」

「え？」

「この世界に永遠に続いている国は歴史上どこにもないだろうって。

この母親は、この国が永遠に続くと思いついていたけれど、続かなかった。

彼女は、そんな見えない先のことより、目の前の息子の命を優先すべきだったって」

そのとーり！

「情緒のかけらもないでしょ？」

「諸行無常よ！」

「ハ～？」

「美香、あなたの彼は、諸行無常を知ってるのよ！」

「いやいや、知らないと思うよ」

彼はわかってるわ！

よかったわ！ 美香の彼氏は、ちゃんと物が見える人だわ！

おかあさん、あなたの彼と仲良くできそうよ。

まだ会ったことないけど。

いつ会わせるつもりなのかしら？ まあいいわ。

美香が、多分今の話をダニーに説明してるわ。

あら、笑ってる。

「He is very realistic, and has his own point of view, I like it」

リアリスティック、現実的？ 現実的っていうより、やっぱり諸行無常を知ってると思うわ。

「Romie」

「イエス？」

「How did you like that play tonight?」

今夜の芝居を、どのように好きか？

ゴンタさんをやった役者さんは好きだけど、あの内容は好きではないわ。

だって...

歌舞伎を私が英語で説明できると思う？

インポッシブルよ！

「美香」

「なに？」

「訳して」

「私？ いいけど」

何から言えばいいのかしら？

「おかあさん、早く言ってよ」

「ちょっと待って、整理してるのよ」

そうねえ

「まず、ゴンタさんとお父さんは、おっちょこちょいだわ」

「おっちょこちょい？ エ～？ なんだろう？ 他の言葉ない？」

「それがいちばんびったりなのよ」

「え～っとお、“Gonta and his father are clumsy”かなあ」

「Clumsy? Well, some points, well, ah... maybe」

多分？

あなたはイヤホンガイドに騙されてたからわからないのよ。

「もしも、私がゴンタさんの奥さんなら、まあ、ああいう人とは結婚しないけど、  
まずは、ゴンタさんのお母さん？ お姑さんのところに相談に行くわね。  
それで、お父さん、舅ね、頭を下げて、孫の顔を見せてあげるわ。  
孫はね、可愛いだよ、お芝居の中でも言ってたじゃない？ 少しずつ心がほぐれるわ」  
「おかあさん、それじゃお芝居にならないじゃん、てか話変わっちゃうし」  
「だって、そう思うんですもの」  
「わかったよ」

たとえ、お芝居でも納得できないわ。  
ううん、現実の方が納得できないことが多いわね。  
そうよ、せめてお芝居だけでも納得して観たいわよ。

「Oh! That sounds just like her!」

笑ってる？ なんで？ 笑うこと？  
あなたはイヤホンガイドに騙されてたのよ、私の言ってることの方が本当の話よ。

「おかあさんらしいってさ」

私らしい？ なにが？

「Mika, your mother will be able to solve any problems in this world」

なに？

「おかあさんはこの世界のどんな問題でも解決するだろうってさ」

どういう意味？

「That's why I can't stop loving you」

ン？

「これは訳さなくてもわかるでしょ」

愛することをストップできない...は、わかるけど、

ザッツ・ホワイのザッツは何を指すのか、わからないわ。

「美香、ザッツ・ホワイは、何を指すのか聞いて」

「自分で聞いてよお、私、お風呂入ってくる」

エーーーーー？

歌舞伎の話なんか英語でできないわよ。

日本語でだってできないわ。

「Romie」

聞かないで！ 歌舞伎のことはわからないのよ！

あ、私から聞けばいいんだわ。

「ダニー」

「Yes?」

「ホワイ・ディド・ユー・クライ?」

あら、固まっちゃったわ。

そうだったわ、この人、泣いてるって思われるのがイヤなんだったわ、明らかに泣いてるけどね

。

「Ah... I was moved」

ムーブ、動揺...じゃないわね、なんだっけ？ 他の意味...

「Oh! The play touched my heart」

タッチ・マイ・ハート！ それはわかるわ！

で？

「ホイッチ・ポイント?」

どこが？

「Which point? Ah...」

ほらね？ 聞かれると困るでしょ？

しかも、あなたはイヤホンガイドで違う物語を聞いていたのよ、きっとそうよ。

「As you mentioned, maybe they are clumsy or silly」

私が言ったように？ 多分、彼らはクラムズィ、たしかさつき美香が、おっちょこちょいで愚か？

「But all of them try to help their loving ones」

でも、彼らすべては、彼らの愛する人たちを助けようとする...

まあ... そうね... たしかに... そうだわ...

「Things don't work well, and they are carried into a tragedy」

物事はうまく働かなくて？ キャリー... 運ぶ？ 悲劇に運ばれる？

「On the other way they found they love each other, and everything comes from love」

逆にかしら？ 彼らはそれぞれ愛し合っていることがわかり、すべては愛から来ている？

「That point reminded me of you」

ハ？ そのポイントが、私を思い起こさせた？

どのポイント？

もしかして...

「アイム・なんだっけ、クラムズィ・アンド・シリー？」

私がおっちょこちょいでバカだったこと？

「No」

違う？ だったらいいけど。

「As Mika explained me what you were thinking about that story...」



えっと、長いわ、美香が、私があこのストーリーについて考えていることを、はああ、説明したように？

「You always try to help others not expect anything in return. Remember banana bread?」

私はいつも他の人を助けようとする？ その後が聞き取れないわ、バナナブレッドを憶えてるか？

何の話？

あっ！ ほら！ やっぱり！

「ダニー、ユー・ヒヤー、違うって、ディフレント・ストーリー・フロム・イヤホンガイド」

「What?」

「ユー・ヒヤー、あ、リスン、ディフレント・ストーリー・フロム・イヤホンガイド」

「What do you mean?」

あのね

「ノー・バナナブレッド、イン・ザット・ストーリー」

バナナブレッドは江戸時代の日本にはないのよ。

「Oh! I confused you!」

あなたが私を混乱させた？ ちがうちがう、イヤホンガイドよ。

「次、だれ？ おかあさん？ Dan?」

あ！

「美香！」 「Mika!」

え？ 顔見合わせちゃったけど？

「なに？ “What?”」

お先にどうぞみたいに手をスツてやってるわ、あたりまえよ！

「美香、ダニーがね、イヤホンガイドから違う話を聞いてたのに気づいてないのよ」

「ハ〜？」

「バナナブレッドが出てきたらしいの」

「なに言ってんの？」

「なに言ってるのでしょ？ そういう話じゃないんだから！」

「おかあさん」

「なに？」

「バカじゃない？」

「でしょ？」

「おかあさんがだよ」

「ハ〜ッ？」

いいわよ。

そうやって二人で笑ってれば？

だいたい歌舞伎の話をしているときに、夏にあの、名前、

とにかく女の子に作ったバナナブレッドの話なんか突然するから悪いのよ！

美香も美香よ！

バカじゃない？って親に言うっ？

あのゴンタさんだって言わなかったわよ！

ゴンタさんの方がよっぽど親思いだわ！

お風呂入ってくるわ！

ゴンタさん、あなた、おっちょこちょいだけど、いい人よ。

ゆうべは、ダニーをおとうさんのベッドに寝かせたわ。  
理由もちゃんと説明したわよ、美香にさせたんだけど。  
お布団が小さいからよ、それだけ。  
あのね、おとうさんのベッドはセミダブルで私のはシングルなの。  
ゆうべはもうグッタリで枕が頭につくつかないかで寝ちゃってたわ。  
朝方までグッスリよ、目を覚ましたら私のベッドにダニーが寝てたのには驚いたわ。  
だからかしら？　なんだか夢見が悪かったわ。  
身動きできないような夢だった気がするの、夢じゃなくて本当に身動きできなかったのね。  
美香が小さい頃に、たまに私のベッドにもぐりこんできて寝てたけど、  
48歳のあの大きなおじさんよ？　心の中で「子どもかっ!？」って突っ込んだわ。  
古いかしら？　最近テレビ見てないから。

ダニーの家では、ほとんどテレビは見なかったのよ。  
それまでは、テレビつけっぱなしで家事をしたりしてたんだけど、  
つけなければつけないで、べつに不便はないのよね、それに神経が休まる気がするの。  
美香はお気に入りのドラマ見るけどね。おじさんばかり出てるドラマなのよ。  
主役がね、紅茶飲んでるの、チラッとしか見ないからよくわからないんだけど、  
とにかく、チラッと見ると紅茶飲んでるのよ、あれはなに？　あの人、ほら、昔、  
北海道弁の先生やってた、顔は思い浮かぶのよ、名前が、ああ、ど忘れ、出てこないわ。  
まあいいわ、思い出したからどうって話でもないし。  
最近、パッと出てこないのよねえ、名前？　この前なんか、ピーマンで言葉が出なかったわ。  
ビックリしちゃった、ピーマンよ？　映像？　それは思い浮かぶのよ、名前が出てこないの。  
イヤだわあ、こうやって少しずつボケていくのかしら？　まだボケるには早くないかしら？  
なんでこんなこと考えてるのかしら？　暇なのかしら？　べつに暇ではないわよ。  
今だって洗濯してるし、さっきは掃除したわよ。

美香は今日からまた仕事だし、ダニーも出かけてるのよ。  
六本木ですって。名前は知ってるけど、行ったことなんてないわ。  
東京のどのあたりにあるのかも知らないわよ。  
アメリカ人なのに、よく行けるわね？　何しに行ったのかしら？　まあ見たかったんでしょね  
。  
そんなに六本木って世界的に有名なの？  
私に、一緒に行かないかって言ったのよ、速攻でノーって言ったわ。  
だって、私、本当に六本木なんて何も、何ひとつ知らないのよ。  
日本人だからって頼られても道も、どこに何があるのかしもわからないもの。

ダニー、大丈夫かしら？ 迷子になったって電話があっても、あら？ ダニーは家電の番号知ってた？

おしえてないわよ？ どうするの？ 交番から電話があるかしら？

帰ってくるまでスーパーには行かない方がいいかしら？ もし交番から電話があったら、ちょっと待って、交番から電話があっても、私、迎えに行けないわよ？ 知らないもの。美香だわ、美香に電話すればいいんだわ、そうね。はあ、ちょっと落ち着いたわ。

どうしよう、スーパー行ってきちゃう？ サササッと行けば大丈夫よね。

夕食は何がいいかしら？ ゆうべは幕の内弁当だったから洋食がいいわね。

何が食べたいかしら？ あら？ ダニーって... 明日帰るのよね？ そうだったわ。

今日が最後の夕食なんだわ。

本当にこれが最後の夕食になるんだわ。

なんだか... ずっとここにいなさな気になってたわ。

バカみたい。

何かおみやげを持たせた方がいいかしら？ おみやげって、何がいいの？

日本的なもの？ 日本的なものって何？ 扇子？ ダニーが扇子を使うと思う？ 使わないわよ

。

日本人形？ 絶対いらないわ、私もいらぬ。

全然思い浮かばないわ。

まあいいわ、とにかくスーパーに行ってくるわ。

そうよ、これしか思いつかなかったのよ。

今オーブンで焼いてるけど。

バナナブレッド。

これなら日持ちするから。

日本のおみやげが私のバナナブレッドってショボいけど、バナナブレッドが好きだからいいわね

。

美香も好きだから二本焼いてるのよ。一本も二本も手間は同じなもの。

夕食はビーフシチューにしたわ。コトコト煮てるわよ。

あとは野菜とマッシュポテトを用意すればいいわね、サラダもね。

私、ダニーがいる間、日本食作ってないわ。

だって、やっぱり... 好きなものを食べさせてあげたいって思うのよ。

ずっと作ってあげられるわけじゃないから。

あ、バナナブレッド、そろそろいいわね。

ピンポン？ 誰？ 町内会の会長さん？ 町内会費の集金って今頃だった？

え？ ダニー？

なんでピンポン押したの？ さっさと入ってくれば... あ、そうよね、私の家だったわ。

なに？

なんでジッと見てるの？

あ、お帰りなさいって言わないから？

えっと...

ああああああ、待って待って待って！ 玄関のドア閉めてからにして——！

抱きしめられたただけだけどね、ほら、ご近所が見てるかもしれないでしょ？

でも、なんで突然？

ときどき、わからないのよ、ゆうべだって、ほら、お芝居が終った途端に、

手をにぎってアイラブユーでしょ？ 何をもってして気持ちが盛り上がったのかわからないわ。

今もね。

「Oh, I know what you made」

何を作ったかわかった？

ああ、バナナブレッドの匂いがするものね。

「アイ・メイド・フォー、おみやげって何だったっけ？ まあいいわ、ギフト」

「Gift?」

「ギフト・フォー・ユー」

なに？ ほらまた、黙って私のこと見てるわ。

それより、こんな玄関に立ってないで中に入ったら？って英語で何て言えばいいの？

あら？ 大きな封筒持ってるわ、書類？

仕事だったのかしら？ 六本木で？

「Oh, Ah... I went to the Embassy of the United States」

ユナイテッド・ステイツのエンバシー、エンバシーって、聞いたことあるわ、なんだっけ？

「Oh, no, you look so serious」

なんだったっけ？ ほら、出てこないのよ、知ってるのよ、聞いたことあるもの。

「I just, just wanted to know what I need for...」

ああ！

「大使館！」

「What？」

アメリカ大使館に行ってきたのね、そうだったのね、アメリカ人だものね。

でも... お昼はどうしたのかしら？ 六本木って、ランチとか食べる場所あるのかしら？

「Romie, it doesn't mean...」

「ホワット・デイド・ユー・イート、フォー・ランチ？」

ポカン？ それとも、なに？ 何も食べてない？

「I went to an Italian restaurant with Mika」

ン？ 今、美香って聞こえたんだけど？

「美香？」

「Yes, she called me and we have lunch together」

美香が電話してきて？ 一緒にランチを食べた？

美香にはお弁当作ったのに？

だったら言ってよ！ ダニーと食べるからいらんって！ いっつもこうなんだから！

「Are you upset? You look upset」

腹を立ててるか？

「イエス！」

「Oh, I'm sorry. I should have called you」

私にコールをすべきだった？

コールより、お弁当はいらんって、ゆうべのうちに言ってほしかったわよ！

あら？

美香が電話してきた？ 美香はダニーの携帯番号知ってるの？ 私は知らないわよ？

「Romie, I'm sorry」

「え？ ホワット？」

「I should have called you, and so we could have lunch together」

電話すべきだった？ そうすれば、ランチと一緒に食べられた？

そこじゃないの、それはいいの、私が頭にきてたのは美香のお弁当...って、もういいわ。

「イッツ・オーケー」

「So, may I kiss you?」

なんでそこにいくのかしら？

返事してもしなくても、ほら、するくせに。

なんだか、なんていうの？ ルンルンって感じで二階にあがっていったわ。

わからない。

何があったのかしら？

まあ、いいわ、ビーフシチューの煮え具合を見ないと。

## 怖い

---

ダニーが普段着に着替えて下りてきたわ。

秋の普段着は、ダニーの家にいたときは見たことなかったわ、夏だったものね。

「You are making Beef stew」

「イエス」

「You know what?」

なに？

「I make Beef stew and vegetable soup by using that slow cooker」

え？ スロークッカー使ってるの？

「トゥルー？」

「Yeah, just only on weekends though」

ウィークエンドだけでもすごいわ！

「グーッ！」

「I have to eat them for 2 or 3 days because of your recipe!」

そうよ、一度作ったら3日くらいは食べられる分量で書いたんですもの。

「Actually I didn't have to make dinner for about a month」

一ヶ月くらいはディナーを作らなくてよかった？

「I just needed to put what you made into the microwave」

私が作ったものを、マイクロウェーブ... 電子レンジ？に入れた？

捨てなかったの？

「ユー・ディドゥント、捨てるって、ああ、スロー・アウェイ？」

「How could I?」

だって、泣いたとか、残酷だとか書いてたじゃない！

まあ、あの量を捨てるのも大変だけど、冷凍庫いっぱいだったもの。

よく作ったわね、私も。意地だったのかしら？ そうね、女の意地？

「Romie, I have something to tell you」

私に言うことがある？

なに？

「ホワット？」

あ、また始まったわ、目でわかれみたいなの？



こういう目をするときって、ロクなこと言い出さないのよ。

「ホワット？」

「Ah... The reason I went to the American embassy was...」

アメリカのエンバシー、あ、大使館、に行った理由？

「I wanted to get information of International marriage」

インターナショナル・マリッジ、国際結婚のインフォメーションをゲットしたかった？

国際結婚？

え？

美香？ だから美香とランチしたの？ 美香に頼まれたの？

「I know you would be upset, but it doesn't mean...」

腹を立てるのはわかってる？

それじゃ、やっぱり美香なの？ あの子、結婚するの？

なんで？ なんでダニーには言って私には言ってくれないの？

ダニーならアメリカ大使館に行けて、必要な書類をもらえるから？

でも、私は母親よ？

「Romie」

「ノー・トーク！」

「Romie」

「ノー・トーク！」

信じられない！ そんなに私ってダメな母親？

「Romie, please, just, just forget it」

「フォーゲット？ インポッシブル！」

「I'm sorry, I'm really sorry」

あなたは悪くないわ、美香よ！

だけど、あなたもなんで言わなかったの？ 今朝はわかってたんでしょ？

いつ？ いつ、美香から聞いたの？ いつからわかってたの？

「ホエン・ディド・ユー・ノウ？」

「When did I know...what？」

今さらしらばっくれないでよ！

「美香ズ・マリッジ！」

「What? Is she going to marry？」

知ってるくせに！

「アイ・ノウ・ユーノウ！」

「Romie, I swear, I don't know anything about Mika's marriage」

ハア〜ッ？ 美香の結婚について何も知らないと誓うっ？

「ユー・ゲット・インフォメーション、インターナショナル・マリッジ！ 美香のマリッジ！

」

「Oh, no! No! It's not for Mika, it's for us!」

アス？

「アスって、ホワット・アス？」

「You and me」

私とあなた？

ハ？

何の話？

「ホワット？」

「Oh, now I know you were misunderstanding...」

私が誤解してた？

それより、アスって何の話？

ハ？

「インターナショナル・マリッジ？」

「Yes」

ハアアアアアアッ？

「まぎらわしいことしないでよっ！」

「What did you say？」

「ユー・アー・ステューピッド！」

「Yes, I know」

「わかってないっ！」

筆談よ。

今のところわかったのは、はああ、ため息出ちゃうわ。

私をプッシュする気はまったくなかった、ただ、念のために情報をゲットしたかった...

念のためって、何のためよ？

アメリカで結婚するのと、日本で結婚するのと、どちらが、easier、簡単かってこと？

なんで結婚したいの？って聞いたら、愛してるからって、聞き方が悪かったわ。

だから、なんでそんなに結婚に固執、固執ってbe obsessed withよ、辞書で調べたわ。

とにかく固執するの？って聞いたら、一緒にいたいからだって。

一緒にいたいなら結婚しなくてもいいでしょ？って書いたら、国籍が違うから、

ビザ？ グリーンカードって何？ まあいいわ、ずっと一緒にいるにはそういうのが必要で、そのためには結婚するのが、いちばん、手っ取り早い？ そんな感じ。

今、ノートを間にして、私の目の前に座ってるわ。

チラチラ私を見てるわよ、見てる視線を感じるわよ、私は目も合わせてないけど。

私の番なんだけどね、何を書いていいかわからないわ。

だって...

どっちにしたって現実的じゃないわ。

私がアメリカに行くことも、ダニーが日本に住むことも。

それに...

*“Mika will marry, I don't know when yet.”*

いつになるかはわからないけど、美香が結婚するわ。

*“She will need my help for her wedding and starting a new life.”*

結婚式や新しい生活を始めるとき、手伝ってあげたいのよ。

「Sure, I understand」

わかってないわ。

「I will wait, please let me wait for... you're ready」

待たないで、待つなんて、そんなの...

*“Don't waste your time.”*

時間の無駄よ。

「What do you mean?」

だって...

*“I don't love you.”*

怖いよ。

「Romie, look at me」

*“I like you, but I don't love you anymore. ”*

この歳になって、新しいことをするのは怖い。  
愛してるだけで、見知らぬ世界に飛び込むことはもうできないわ。

「Look at me, Romie」

*“That's why I don't want to marry you. ”*

「You are not telling the truth」

信じてよ。  
だって、これしか、これしかできないから。

*“It's true.”*

これ以上ウソつかせないで。

「Romie」

来ないで、来ないで。  
私の目を見ようとしなないでよ。

「If it's true, look at me and say it」

どうして追い詰めるの？  
これでいいじゃない、これで...

「Romie」

あ... 見ちゃった... あなたの目...  
どうしよう... もう... ウソつけない...

「アイ...」

私ね

「Yes?」

私... 怖い...

「アイム...」

怖い...

「アイム・ス...」

「ただいま〜!」

美香...

そういうことよ、そういうことだわ。

「おかえりなさい」

これでいいのよ。

夕食を食べながら、美香がお昼のことをダニーに楽しそうに話しているわ。  
お弁当箱は空になってたの、ランチも食べてお弁当も食べたの？って聞いたら、  
会社の友だちに食べさせてあげたっていうのよ。ハア～？だったわ。  
一人暮らしの男の子なんですって。

「メッチャ美味しい！」って言ってたんですって。

「加藤のおかあさんみたいな人と結婚したい」って言って笑ってたって。

ほらね、結局そうなのよ。

結婚したら、女が求められることって、料理や洗濯や掃除、家事をすることなのよ。

たまに思ったことがあるわ、お給料のない家政婦さんみたいだって。

あれは、30代の前半だったかしら？ お風呂掃除してたときよ。

私は何をしてるの？って思ったの。親に学費を出してもらって短大まで出てお風呂掃除？

だったら、英文科じゃなくて、主婦科があればよかったのにな。

あれは美香が小学校のときだったかしら？ そうね、PTAの委員を押し付けられちゃって、  
PTA会長が、おとうさんの大学の先輩教授の奥様で断れなかったわ。

いろいろな雑事をどんどん押しつけられてヘトヘトだった頃だわ。

「加藤さんは何でもキチンとやってくれるから」なんておだてたつもりかもしれないけど、  
好きでやってたわけじゃないわ、おとうさんの顔を立てるためと美香のためよ。

「おかあさん、どうしたの？」

「え？ ああ、PTAのこと考えてたの」

「PTA？ なんで今PTA？」

笑ってるけど、大変だったのよ、中学までずっとだったもの。

高校になってやっと解放されたときにはホッとしたわ。

「そうだよ、ほら、5年と6年のときと中一のときに同じクラスで仲良かった子、

あれ？ 名前なんだったっけ？ 仲良かったのになあ」

あら、美香みたいに若くても名前が出ないことがあるの？

「あの子のお母さん、PTAの会長だったじゃん？」

そうだったわ！ 同じクラスになったから、余計に大変だったのよ。

「言ってたことあるんだよね、ママがよく家で爆発するって。大泣きすることもあるって」

何を泣くことがあるのよ、泣きたかったのはこっちだわ。

「パパが教授だからって、私がいつも会長を押しつけられるって」

ハ？

「そのくせ、みんな文句ばかり言ってきて、どうしろっていうの？って。

でも、美香ちゃんのお母さんだけは、文句も言わず、頼んだことをしっかりやってくれて、  
こういう人もいるのねえって慰められる...だったかな？ そんなこと言ってたらしいよ」

文句なんか言えるわけじゃないじゃない、上の教授の奥様なんだもの。

でも、そういえばそうね、あの奥様、パッと見た感じが姉御肌だったから、  
いつも会長やってたわね、好きでやってるのかと思ってたわ。

PTAの役員なんて好きでやる人なんていないってことね、中には好きでやってる人もいるけど。  
結局子どものためとか、夫の顔を立てるためってというのが先にくるものね。

そうよ、ほら、子どものことでもPTAのことでも、結局は母親でしょ？

美香のときなんか入学式も卒業式も、ちょうどおとうさんの大学のと重なることが多くて、  
いつも私一人で行ってたわ、参観日や三者面談だってそうよ。

運動会や発表会だって、学会や授業があったから私だけ行ってたわ。

なんだかまるで母子家庭みたいだったわね。

「おかあさん、どうしたの？」

「え？ ああ、なんだか、思い出しちゃって、昔のこと」

「今思い出さなくてもいいじゃん、ダニーさん、明日帰るんだからさ」

そうね...

明日にはいなくなるのよね...

それでいいのよ...

「おかあさん、どうしたの？ 元気くない？」

「ちょっと... 頭が痛いのよ」

「風邪？」

「そう...ね、多分」

「熱は？」

「熱はないけど、あの、ほら、多分更年期症状だわ」

「だったら寝てなよ、片づけは私とダニーさんとやるからさ」

「そう？ だったらそうするわ」

二階の寝室は...

仏間で寝よう。

「どこ行くの？」

「仏間で寝るから」

「なんで？」

「だって、ほら、ダニーも帰る準備とかするだろうから」

「そっか」

同じ部屋で、一緒になんて、もう無理よ。

あれでよかったのよね。

あれでよかったのよ...

だって、そうじゃなかったら、ダニーを動けないままにしまうわ。

ダニーにだってダニーの人生があって、私を待ってるなんて、

いつになるかわからないことを、いつまでも待つほどダニーだって若くはないもの。

それに、待ってたって...

無駄だわ。

美香が結婚するまで、私は母親で、美香が結婚したら私も母親から卒業するんだわ。

おとうさんが死んだときから、私は妻ではなくなったわ。

気持ち的にはそんなにスッパリ割り切れないけど。

50歳よ、だいたい30年近く主婦として生きてきたわ。

いろいろなことがあったわ、どんなことがあったのか忘れるくらいにいろいろ。

もう一度最初からやるなんて、もうそんな気力はないわ。

しかも、言葉だって思うように通じない相手と、もしかしたら知らない土地で？

もう無理よ。

もう主婦から卒業させて。

あとはただ穏やかにふつうに暮らしたいだけなのよ。

そうよ、怖いわ。



もしも若かったら飛び込めたかもしれない、何も知らなかったから。

でも、今は、知っているから怖い。

それに、まだ知らないから怖い、知らない世界に飛び込むほどの勇気はないわ。

若かったら... できたのかもしれない。

でも、50歳になって、このまま、今までと同じふつうの暮らしがあるのに、

そこから飛び出してどうなるかわからないなんて怖いわ。

おとうさん、おとうさんとの結婚生活が不幸だったとは思ってないのよ。

まあいろいろあったけど、しあわせだったと思うわ。

でもね、でも... なんなのかしら？

やっぱり少し寝ようかしら。

お布団を出して...

掛け布団をかけると...

ダニーの匂いがして...

私... すごく弱くなっちゃうの...

さっきも、ダニーの目を見た途端、抱きついて怖いって言いたくなっちゃったのよ。

美香が帰ってこなかったら、そうしてしまっていたかもしれない。

そしたら...

もう後戻りできなくなっていたかもしれない...

だから、よかったのよ。

「おかあさん、どう？」

美香？

「うん... まだ少しね...」

「薬とか持ってこようか？」

「寝てれば大丈夫よ」

そうよ... 時間が経てば... なんとかなるものよ... いつもそうだったわ...

「ねえ、何かあったの？」

「何かって？」

「ダニーさんとさ」

「何も無いわよ」

「な～んかさ、ダニーさんヘンなんだよね、昼に会ったときと違うからさあ」

美香には言っていないのね... よかった...

「疲れが出たんじゃない？ 年を取るとあとから疲れが出てくるから」

「そうかなあ」

「おかあさん、このまま寝るかもしれないから、ダニーの相手をしてあげて」

「わかった、何かあったら呼んでね」

「ありがとう」

もう顔を見れないわ。

明日までは。

明日は9時にはここを出るって言ってたわよね。

美香が車で送って、それから会社に行くって。

さっき、夕食のときに美香がそう言ってたわ、「おかあさん泣かないでよ」って笑いながら。

泣かないわ、泣けないわ、そんな気分じゃないわ。

明日の朝には気持ちを切り替えて、笑顔でさよならするわ。

夜中に何度も目が覚めたわ。

途中で本当に頭が痛くなっちゃった。

ゆうべはお風呂に入らないまま寝ちゃったから、シャワーを浴びて、朝食を作って、

美香のお弁当を... 昨日焼いたバナナブレッドをラッピングしてあるの...

何もなかったように、おみやげにどうぞって、渡せるわよね、渡せるわ、渡すわ。

「おかあさん、おはよう」

「おはよう」

「どう具合い？」

「もういいわよ」

本当は頭がガンガンしてるのよ...

「Good morning」

ダメ、ビクッとしちゃダメよ、ふつうに、パンを焼くわ。

「“Good morning, Dan”」

「How are you, sweet girl?」

「“Super! Well, no, I already miss you”」

いいわね... そんな言葉を... そのまま言えるなんて...

私は... 何を感じたらいいかさえわからないわ...

「I'll miss you, too」

声を聞きたくないわ。

ダメよ、ダメ、もうこれで終わるんだから、大丈夫よ。

「“Dan, I bet you will miss my mother to death!”」

「美香、これ、テーブルに運んで」

「オッケ～」

朝食を食べながら、美香が何かしゃべってるわ。

ときどきダニーの声が聞こえるわ。

私は...

何も感じないの... まるで、誰もいないみたいに、何も感じないの...

朝食が終って、後片付けを手伝おうとするダニーに、美香が準備してきてって言ったわ。

よかった...

「おかあさん」

「え？ なに？」

「淋しいんだよね、だから何も言えなくなっちゃってるんでしょ？」

そうじゃないのよ...

やらなければいけないことがあるから...

「大丈夫だよ、ダニーさん、また来るよ」

もう来ないのよ。

もう二度と。

これで最後なのよ。

ダニーが、荷物を持って下に降りてきたわ。

今だわ。

二階に上がって、寝室に入ると、ダニーが寝ていたベッドはちゃんとベッドメイキングしてある

。

もう誰もここに寝ることはないのに。

サイドテーブルの引き出しの鍵を開けて、箱を... エプロンのポケットに入れて...

下に降りると、美香も出かける準備をしていたわ。

美香とダニーが玄関へ、そのあとを私も、ラッピングしたバナナブレッドを持って...

「私、車出してくるから。“Dan, I'll pull out the car, and come back soon”」

「Ok, thanks」

玄関には...

私とダニーの二人きり...

ジャケットにシャツ、ちょっと出かけるときにいつもそうだった...

何も言わないのね。

そうね、もう何も言うことなんかないわ。

あ、そうだわ。

「バナナブレッド・フォー・ギフト」

ラッピングしたバナナブレッドを差し出して...

この沈黙は... なに？

「No」

ノー？

「Thank you anyway」

そう...よね、そうよ、私が作ったバナナブレッドなんか、もう食べたくないわよね。  
バカだわ、扇子の方がまだマシよね。

あれを...

エプロンのポケットから...

指輪の入った箱を...

「アイ・キャント・キープ・イット」

これを持っていたら、終わりにできない、私もダニーも前に進めない。

ダニーがどんな顔しているのか、何を見ているのかわからない...

でも...

黙って受け取った。

玄関のドアを開ける音

外に出ていく気配

そして

ドアが閉まる音

終わったわ。

さようなら。

キッチンに戻って、バナナブレッドをゴミ箱に捨てた。



知ってたわよ！

---

もう11月も半ばね。

そろそろお歳暮のことも考えておかないと。

お父さんが死んでからは、お歳暮をいただくところも差し上げるところも少なくなったけど。

年賀状はまだいいかしら？

まだいいかしらって、ギリギリになっちゃうのよ、お父さんが死んでからは。

あれから...

美香がスマホで撮っていた写真で、またフォトブックを作ったのよ。

タイトルは“HOMESTAY in JAPAN”、表紙は、表参道で美香と私が顔を見合わせて微笑んでいる写真。

中は見てないわ、美香がくれたけど、寝室のサイドテーブルの中にしまったわ。

美香がね、あの人にも送ったらしいのよ。そのときは別れたって美香に言ってなかったから。

二週間くらい前かしら、手紙が届いたの、美香がフォトブックを送ったお礼のね。

*“Dear Hiromi and Mika ,”*

もうRomieではなくなってたわ、そうよね。

*“Thank you for a beautiful photo album.*

*Thank you so much for your kindness and everything when I was staying in Tokyo.”*

エブリシングって、指輪を返したこともすべてってこと？ そうね。

*“I hope you are doing well and have great days.*

*Best wishes*

*Dan Swope”*

美香が言ったのよ。

「なんかよそよそしくない？」

そりゃそうよ、ただのお礼状だもの。

「てか、おかあさん宛ての手紙書いてこないって、おかしくない？」

おかしくないわよ、だって

「別れたのよ」

「ハ？」

「帰る日にね」

「マジ？　なんで？　てか、空港に行く車の中はふつうだったよ？

ふつうっていうか、なんかヘンだったけど、淋しいからなんだと思ってた」

淋しくななかなかったはずよ。

「なんで別れちゃったの？」

なんでって...

「まあ無理だったってことよ」

「どっちから？　おかあさんだよな？」

なんで決めつけるの？　そうだけど、でも...

「指輪を返したの」

「指輪ってあの指輪？　だって、ニューヨークの空港まで届けに来た指輪でしょ？」

そうよ、ニューヨークの空港まで届けに来た指輪だからよ。

「むこうもサッと受け取ったわよ」

だから、そういうことなのよ。

「でもさ」

「とにかく、終わったから、だから、もう言わないで」

もう考えたくもないのよ。

美香もそれ以上何も言わないでくれたわ。

でもね、二週間前から、なんだかイライラしてるの。

あの人帰ってすぐも、悲しいとか淋しいとかじゃなく、怒りが込み上げて、

シーツから何から洗濯して、家中の窓を開けて、家中掃除機かけて雑巾がけして、

最後にはファブリーズしたわ。新品のが一本空になったくらいよ。

もうね、高血圧で倒れるんじゃないかと思ったくらいカーッと頭に血が上ったのはね、

あの人使っていたベッドのシーツをはがしたとき、メモがヒラッと落ちたのよ。

*"I can't stop loving you"*

そう書いてあったの。

考えられるのは最後の夜か朝よ。

そんなこと書いておきながら、あの指輪を何も言わず受け取ったのよ？



そう思ったら、クラクラするくらい怒りが込み上げて、吐いたの、本当に吐いたの。  
トイレでだけだね。

それで、あの形式的なお礼状よ！

I can't stop loving you って書いたのと同じ文字！

いっそお礼状なんて書いてこない方がよっぽどよかったわ。

美香が何を送ろうが、無視したっていいじゃない、別れたんだもの！ もう無関係なんだもの！

ずっと抑えてたわ、この二週間ずっとね。

でもね、私、知らないふりしてあげてたのよ。

それだって辛かったわ。

そうよ！

どうせもう無関係だし、むこうが何と思おうと知ったことじゃないわ。

知らないふりしてたこと、ぶちまけてやるわ！

封筒と便箋、書くわよ！

*“Mr. Dan Swope,”*

どこから書けばいいかしら？

カッカッしてまもらないわ。

そうね...

*“You don't have to reply, I just want you to know what I know .”*

返事はいりません、私が知っていることを知ってほしいだけですから。

*“When you gave me that ring for my birthday present,*

*I got a feeling it meant an engagement ring to you, should I say only in your heart?”*

あなたが私の誕生日のプレゼントとしてあの指輪をくれたとき、

それは、あなたにとってエンゲージ・リングだと直感しました。

あなたの心の中だけでは...と言うべきでしょうか？

*“You emphasized it was just a birthday present, and before you gave me that ring,*

*You said to me ‘Don't be scared’, because you thought I would be scared if I knew what it meant to you.”*

あなたは、ただのバースデープレゼントだと強調し、あれをくれる前に「怖がらないで」と、

私に言いました、なぜなら、あれがあなたにとってどんな意味があるのか私がわかったら、

きっと怖がると思ったからです。

*“When I saw that ring, I got that feeling, but I pretended like as I didn’t notice it.*

*I accepted that ring knowing your feeling.”*

あの指輪を見たとき、私はそう直感しましたが、気づかないふりをしました。  
あなたの気持ちを知っていて受け取りました。

そうよ、おとうさんとの結婚指輪を外してね。

*“But on the other hand, I was not so sure my intuition was right or not at that time.”*

けれど、一方では、私の直感が正しいのかどうか、その時点では確かではありませんでした。

*“When you appeared at the airport with that ring, I was convinced that I was right.”*

あなたが指輪を持って空港に現れたとき、私の感覚は正しかったのだと確信しました。

*“You said you wanted me to keep that ring, said 'Don't forget me'.*

*It meant you wanted me being your fiancé in your heart.”*

あなたは、あの指輪を持っていて欲しいと言いました、あなたのことを忘れないでほしいと。  
それは、私にあなたの心の中の婚約者でいて欲しいという意味です。

*“I accepted it.”*

私はその思いを受け取りました。

*“Also I knew it was a silly thing, it made us stuck in fantasy. ”*

そして、それは愚かなことで、私たちが妄想の中で動けなくしてしまうことも知っていました。

*“But I wanted to be your fiancé in our fantasy.*

*As long as I had that ring, I could being your fiancé in our fantasy.”*

でも、私たちの妄想の中のあなたの婚約者でいたかった。  
あの指輪を持っている間は、私は妄想の中でのあなたの婚約者でいられる。

*“I put every memories of that summer into the box, into the deep inside of my heart.*

*So that I could being your fiancé only in my heart.”*

私はあの夏の思い出すべてを箱の中に、私の心奥底にしまいました。  
私の心の中でだけ、あなたの婚約者でいられるように。

*“But you came to my house, you opened my box, you pulled me out to the reality.”*

でも、あなたは私の家に現れ、私の箱を開け、私を現実へと引っ張り出したのよ。

*"I was scared to dive into a reality, new reality.*

*I was scared to make you lose a possibility to choose other life.*

*Life which you would be able to have a child,*

*you would be able to communicate with your wife easily."*

私は現実、新しい現実へ飛び込むのが怖かった。

あなたが別の人生を選べる可能性を失わせることが怖かった。

子どもが持てるかもしれない、奥さんと楽に会話できる人生。

*"I knew I should release you from our fantasy and go for a new life without me."*

あなたを私たちの妄想から解放して、私なしの新しい人生へと進ませなければいけないって...

*"When I returned that ring, you accepted it so easily.*

*I realized I was right, my decision was right.*

*You wanted to go back to your reality and you don't need a fiancé in your fantasy."*

私が指輪を返したとき、あなたは簡単に受け取ったわ。

それでわかったのよ、私は正しかったって、私の決断は正しかったって。

あなたは現実に戻りたかったんだって、妄想の婚約者は必要なくなったんだって。

*"I'll tell you, your love is such as narrow, shallow and light as the air.*

*Your 'I love you' is just like 'I love banana bread'!*

*By the way, I throw that banana bread which you refused to accept into a rubbish bin!*

*I'm glad that I didn't dive into your arms! How can I?"*

あなたの愛なんて狭くて浅くて空気みたいに軽いのよ！

あなたの「アイラブユー」は「アイ・ラブ・バナナブレッド」と同じよ！

あなたが受け取らなかったバナナブレッドはゴミ箱に捨てたわよ！

あなたの腕の中に飛び込まなくてよかったわ！ できるわけじゃない！

*"You can never ever imagine how I was scared and how I was trying to, anyway,"*

あなたには絶対にわからないわ、私がどんなに怖かったか、どんなに、とにかく、

*"I'm glad I didn't believe your 'I love you'!*

*I'm not stupid as much as you think I am!"*

あなたの「アイラブユー」を信じなくてよかったわ！

私はあなたが思ってるほどバカじゃないのよ！

*"I don't care you are angry at me, or you don't feel anything because you already forgot me."*

あなたが怒ってようが、私のことなんかすっかり忘れてるから何も感じなくてもかまわないわ！

“Only I want to say is...”

私が言いたいのは...

“I HATE YOU!”

あなたなんか大嫌い！

はあああ、スッキリした！

こんなへ口へ口の英文書いたことないけど、スッキリしたからいいわ。

これで終わりよ！

これで私も前に進めるわ！

美香に出してもらったわ。

すぐに出してねって頼んだの。

その日のうちに出してくれたわ。

「おかあさん、スッキリした顔してるね」

そう言われたわ。

そうよ、スッキリしたもの。

50歳のいいおばさんが「大嫌い！」は、どうかとはちょっと思ったけど、

出しちゃったし、それでいいと思うの。

本当のことだから。

お歳暮のカタログ見るわ！

## 12月のニューヨーク

---

手紙書いてスッキリするなんて一瞬のことよ。

そうそう簡単にスッキリなんてできないわ。

どんなことだってそういうものよ、しばらく悶々とするのよ。

逆に悶々とするのが出てきたりね、もしかしたら、あれは私の思い込みだったのかしらとかね。

でも、あれは思い込みではないわ、だって、でなきゃ、わざわざニューヨークの空港まで、何時間も車飛ばして指輪持ってこないわよ。

「Don't be scared」って、渡す前に言っちゃうことからして何を考えてたかわかるわよ。

中身を見たときに、その言葉がどういう意味を持つのかわかったんだけどね。

本当に単なる誕生日プレゼントとして買ったのなら、そんな言葉なんて出ないもの。

だいたいあの人、あのお店のサイト見たのかしら？

あの指輪、エンゲージメントリングのページにあったわよ。

それにね、ああいうお店って、ちゃんとコーナーが分かれてるのよ。

エンゲージメントリングとマリッジリングとファッションリング。

明らかにエンゲージメントリングのコーナーで買ったわよ。

パッと見たとき、これは君のための指輪だと思ったって、まあそれは本当だろうけど、

誕生日プレゼントならファッションリングのコーナーで見るでしょ？

たとえばね、百歩譲って、一億歩だわね、何用とか関係なく、ただの誕生日プレゼントなら、

「Don't be scared」なんて絶対言わないわよ。

それを気づかないふりしてあげたのよ？ 私に気づかれたらイヤだろうなと思って。

だって、空想の中の婚約なんて、子どものごっこ遊びじゃないんだから。

48のおじさんが、恥ずかしいでしょ？ どんだけロマンチストなの？って話じゃない？

でも、受け取ったのよ、私、だって...

まあいいんだけどね、もう終わったし、手紙も出しちゃったんだから。

...って、あれから何回同じこと考えてたかしら？

あの手紙を出して二週間が過ぎても、返事は来なかったわ、もちろん来なかったわ。

返事はいらなくて書いたし、書いたけどね、返事はいらなくて書いてあっても、

何か伝えたかったら書かない？ ないのよ、伝えたいことなんか。

もう、あの指輪を受け取ったときに終わったのよ。

12月に入って、やっと落ち着いてきたの。

こうやって時間が経つと、どんなにもうダメと思ったことも少しずつ薄れていくのよ。

歳をとってよかったのは、そういうものだってわかってるってことかしら。

そういうことをたくさん経験してきたんだもの。

そんなことより、とうとう美香の彼氏と会うのよ！

ニューヨークに行くことになったの！

美香の彼氏が招待してくれたのよ。

飛行機のチケットとホテルまで用意してくれたの。

本当はね、ここに挨拶に来るのが筋だけど、自分の家族にも会ってほしいから、

どうせなら、ニューヨークでクリスマスと新年を迎えませんかって。

ニューヨークのクリスマスですって！

本場よ？ どんなの？ まだ見てないから想像もできないわ。

クリスマスは、向こうのご家族の家でクリスマスを過ごしましょうって。

いよいよ結婚かしら？

美香に聞いたら、まだプロポーズはされてないんですって。

「まずはお互いの家族に紹介してからと思ってるっぽい」って。

素晴らしいわ！ 大和魂さえ感じるわ、アメリカ人だけど。

筋が通ってるわよ、気が合いそうよ、まだ会ってないけど。

やっと写真を見せてもらえたのよ。

感想はね、美香って、チョー——面食いだわ！

黒髪にものすごくきれいな深い青い目で、スラーツとして身長も高いんですって。

メガネをかけてる写真なんかメガネ男子っていうの？ もうかっこいいの！

私もあと30年若かったらフラフラッとしちゃったかもしれないわ。

なんで今まで写真を見せてくれなかったの？って聞いたら、何回もケンカしてたからって。

「おかあさんに見せようかなあって思うとケンカになって別れるって言ったから」って。

言ってたのは美香の方だけなんだけどね。

ケンカって言っても、話を聞けば、美香が一人でキレてるだけなのよ。

どうして美香ってあんなに気が強いのかしら？

私はおとうさんにキレたことなんてないわよ、不満はあったけどキレたりしなかったわ。

つき合って1年半？ 2年近くになるの？ あの美香とそんなに続くなんて忍耐強いわ。

よろしくお願ひしますって感じよ。

23日に発って、向こうの1月3日に帰ってくるの。

おせちを準備しなくていいお正月なんて初めてだわ。

年賀状もさっさと出したわ。

ニューヨークは東京より寒いっていうからヒートテクも詰めたわ。

そうよね、人生って、悪いこともあればいいこともあるのよ。

おとうさん、留守番お願ひね。

I'm in New Yorkよ！

なんていうのかしら、街中全部でひとつのクリスマスの飾りつけみたいなのよ。  
どこにも隙がなくクリスマス？ うまく言えないわ、とにかくきれいなもの。

空港に彼が迎えに来てくれていたの。

「美香！」って言って抱き着いてチュッよ？ 日本じゃ考えられないわね、親の前でチュッて。  
イヤな感じじゃなかったわ、それに写真より実物の方がもっと美形でビックリしちゃった。  
私もね、そんなに緊張しなかったわ。

家に来られたらわからなかったけど、空港だったし、なんだかスッとすぐに馴染めたの。

「美香のお母さんは美しい方ですね」って、んもう、お世辞がうまいんだから～、ウフフフ～  
日本語がうまいの！ 日本人みたいよ。よかったわあ、お嬢さんと話ができなきゃ困るもの。  
まだ本格的に決まったわけじゃないけど、秒読みでしょうね、私を招待したんだから。

彼の実家はニューヨーク郊外で、彼はニューヨーク市内で一人暮らしなんですって。  
お姉さん一家も近くに住んでいるんですって。弟もいて、大学の寮にいるって。  
姉弟がいてよかったわ、美香は一人っ子だから。

夜は3人で食事して、私だけ疲れたからってホテルに戻ってきたの。  
だって、ねえ、久しぶりに会ったんだから二人きりの時間が欲しいでしょ？  
ホテルの窓から見えるニューヨークの夜の街、イルミネーションがきれいだよ。

どうしてるのかしら

何を考えてるの？

もう関係ないのに...

もう違う世界で違う現実を生きているのよ。

車で3時間、すごく近くにいるのに、もう届かないほど遠いのね。

もう私のことなんか忘れてるわね。

憶えていたとしても、ただの遠い思い出の欠片でしかなくなってるんだわ。

ニューヨークに来る1週間くらい前かしら...

サイドテーブルから日本にいたときのフォトブックを出して、初めて中を見たの。

最初のページは、あの人が仏間の布団で寝ている写真だったわ。

足が布団から出てるの。

こんな写真をそっと撮ってたのなら、足が出てるって早くおしえてくれればよかったのに...

そう思ったけど、多分最初の朝みたいだったから、言われても無理だったわ。

表参道の写真でね、驚いたのが、あの服を買ったお店よ。

美香が試着してるときに、あの人が私の傍に寄ってきた、その写真があったの！

試着室のドアを開けて盗み撮りしたんだわ。どおりで、すごくいいタイミングで出てきたもの。

霊園の中の写真もあったのよ！ 私があの人に手をつかまれてるの。

パパラッチ？ しかも、お墓で写真なんてバチがあたるわよ。

歌舞伎座の写真は何枚もあったわ。

美香との写真もね、どの写真も、二人ともニコニコしてたわ。

私とあの人がスパニッシュオムレツひっくり返しているときの写真も。

私がキッチンに立って何かしているのを見ているあの人の後姿とか。

とにかく、いっぱい。

私が気づかないで何かしているのを見ているあの人の表情、私を見ているあの人の表情、

あの大好きな茶色の目で、優しい目で、愛しそうに私を見ている顔...

私は... あの人に... こんなふうに見つめられていた...

愛されていたって... そう思ったの。

それだけでいいなあって、私の人生の中で、こんなふうに見つめられていたときがあった、

それだけでいいって...

何を求めていたのかしら？

何も求めないつもりで、私はあの人に何かを求めていたんだわ。

求めてはいけないとわかっているのに、求めてはいけないものを。

そんなことに応えられるわけがないじゃない。

この人に、愛してるって、そう言われたことがある...

それだけでいいじゃない。

そうよ、だって私、きっと私、死ぬまで、この人のこと愛し続けるわ。

愛してるのよ、たとえそれがもう届かなくても、自分の気持ちに正直になって生きたいの。

そう思ったら、楽になったの。

ずっとずっと愛してるって、正直に思ったら楽になったわ。

たとえ、あの人が誰かと結婚して、本当にもう私のことを忘れても、それでもいいの。

だって、しあわせだったもの。

あの人の家にいたときも、私の家にあの人がいたときも、一緒にいたときは。



今夜は美香は帰ってこないわね、そう思ってチェーンもかけて寝ていたら、ガチャガチャって、一瞬、強盗かと思って怖くなったら、  
「おかあさん？ 開けてよ」って、帰ってきたわ。  
「なんでチェーンしちゃったの？」って不機嫌そうな声だわ。  
「彼のところに泊まるんだろ？あと思ったのよ」  
「帰れって言われた」  
「え？」  
「おかあさんが一人で淋しいだろうから帰った方がいいって」  
「そんなこといいのに、ちゃんとしたホテルだし」  
「でしょ？ 私もそう言ったらさ、初めてのニューヨークの最初の夜だから心細いよって」

なんて... 若いのにすごいわ。

「だから、もうカチンときて、私と一緒にいたくないんでしょ！って出てきちゃった」

そう言ってバンッとバッグをベッドにたたきつけるように投げたわ。

「なんかさ、そういうところがイヤなんだよね」

「そういうところって？」

「現実的っていうか、ロマンティックじゃないっていうか」

「十分ロマンティックよ、食事中に美香を見てる目なんて、愛してますって目だったわよ」

「そうかなあ、私とずっといるのウザインじゃないかなって思うよ、ウザインだよ」

スネちゃって、まるで子どもだわ。

「もう明日あなたの家に行くのはやめる！って出てきちゃった」

本当にまあ、よくこの駄々っ子の相手をしてあげていること。

「お母さん、明日は二人だけでショッピングして、レストランで夕食しようよ」

そんな気ないくせに。

「美香、わかってるんでしょ」

「何を？」

「そんな駄々をこねてもスネても、彼がゆるしてくれるって」

「な、なにそれ？ ちがうし！」

「いいわねえ、愛されちゃって」

「ケンカしてきたんだよ！」

「美香がキレだけでしょ」

「そう...だけど」

「おかあさんのことまで心配してくれる人だから好きなんですよ？」

美香が、ちょっと上目使いで私を見て、口とがらせて、

「まあ...ね」

美香がここまで甘えられる人なら大丈夫だわ。

「それじゃ、おかあさん先に寝るから」

サイドテーブルの私の方の灯りを消したわ。

## 卒業

---

ニューヨークのクリスマスの朝。

まさか今年のクリスマスをニューヨークで迎えるなんて想像もしていなかったわ。

去年のクリスマスはどうしてたっけ？

ああ！ チキンのもも肉を焼いて、美香がケーキを買ってきて、食べて、テレビ見てたわ。

「クリスマスって、たいした番組ないわねえ」って言いながら。

ゆうべ、彼の実家に連れていってもらったわ。

みんな、なんていうのかしら、自然体で、とってもいい人たちだったわ。

彼のお母さんがキッチンで準備していたから手伝ったの。

料理してるのを見て、この人なら美香をお任せできるわって思ったわ。

とっても楽しんでるのよ、料理をね。そして、私と一緒に料理するのをとても喜んでくれたわ。

お父さんは、すごくおもしろいの。

そして、今でも奥さんをすごく愛してるって伝わってきたわ。

お姉さんはしっかり者だったわ、お姉さん！って感じね。

美香のことを妹みたいに可愛がってくれて、美香も甘えてたわ。

弟さんは、これまたイケメンなのよ！ それでね、家族の目の色が半々なもの。

青い人と茶色い人？ お父さんが青で、お母さんが茶色だからかしら？

はあああ、外国だわあって思ったわ。

途中で、美香と彼がリビングからいなくなったの。

そうかなあとは思ってたわ。

彼の家族もそんな顔しながら会話してたわ。

お父さんとお姉さんは日本語ができるのよ。お母さんは少しだけで、弟さんはちょっぴりね。

私に気を使って、できるだけ日本語で話してくれていたわ。

美香が目を通り赤にしてリビングに戻ってきて、私に抱きついたので。

「結婚してくれって言われた」って。

感無量って、こういうことを言うのねって思ったわ。

言葉が出なかったわ。

美香が結婚するのよ、あの小さかった美香が、まだ若い私の腕の中で眠っていた美香が。

彼からもらった指輪を見せてくれたわ。

その指輪を見たとき、彼は本当に美香のことをわかっているんだわって思ったの。

美香にピッタリの指輪だったの。

彼が、家族に、美香にプロポーズしてイエスって言ってもらったって報告したら、

みんなが、嬉しそうに美香と彼にハグとキスしてお祝いしてくれたわ。  
なんてしあわせなのって、本当に嬉しかった、本当にしあわせだったわ。  
よかったって、本当によかったって。  
涙が止まらなかったわ。

しあわせで、それを一緒に、このしあわせそうな美香の姿と一緒に、私と一緒に...  
思い浮かんだのが、あの人だったの、愕然としたわ、美香のお父さんはおとうさんなのに、  
美香のしあわせな姿と一緒に分かち合いたいと思ったのが、あの人だったの。  
美香のしあわせを見てほしいのはおとうさんだけど、美香の姿を見て、  
しあわせだと思う私の気持ちを、一緒に、そばで一緒に、いて欲しかったのは、あの人だったの  
。  
おとうさん、ごめんなさい、ごめんなさい...  
何度も心の中で謝ったの、でも、自分が許せなかった。

泣いている私の傍に美香が来たから、  
「おとうさんもきっと喜んでると思うわ」  
必死に、笑顔を作ろうとして必死に、そう言ったら、美香が言ったの。

「ダニーさんも喜んでくれるかな」

あの子、私の気持ちをわかってたのよ。  
自分の人生の最高にしあわせなときに、私の気持ちを...  
声を出して泣いちゃったの、バカみたいね。

そのとき、初めて、心から、おとうさんに報告できたわ。  
おとうさん、あなたの娘の美香はこんなに優しい子に育ちました。  
素敵な人と結婚します。  
どうぞ、これからも見守ってあげてください...って。

そしてね...

おとうさん、先生、加藤先生、先生にずっと憧れていました。  
ずっと尊敬していました。  
先生の奥さんとして、尊敬する憧れの先生に恥をかかせないように、  
私のできる限りの力ですけど、必死に奥さんと母親をやってきました。  
先生、私、もう卒業していいですか？  
Aプラスはもらえないと思いますけど、Bくらいはくれますか？

Fでもいいです。

卒業したいです。

Fじゃ卒業できないから、せめてDをください。

50歳で、先生の奥さんを卒業させてください。

もう無理です。

空想の中で生きるのは無理です。

50歳から先が何も見えないんです。

怖いです。

卒業が、一生一人で生きることになったとしても、強くなりたいたいです。

当たって砕けても、泣いて戻ってきたりはしません、強くなりたいたいです。

強くなりたい。

怖がって生きていたくない。

もう50歳だから、若い頃みたいにたくさん時間がないから、やってみたい。

やりたい。

自由に生きてみたい。

自由に生きたい。

やりたいと思ったことを、思ったままやりたい。

強くなりたいたいです。

加藤先生、今までありがとうございました。

さようなら。

そして今朝、長距離バスのバス亭まで、美香と彼が車で送ってくれたわ。

今、バスを待ってるの。

美香は、彼と一緒に車で送るよって言ってくれたけど、強くなりたいたいのよ。

できることをしてみるわ。

怖いけど、怖がってたら、前に進めないんだもの。

「帰りにまたここに迎えに来るから、向こうでバスに乗る前に電話してね」

そう言って戻って行ったわ。

そうね、まだ少し助けてもらわないと一人では歩けないわ。

少しずつだわ。

どうなるかわからない。

でも、やらなかったら絶対後悔するわ。

現実を突きつけられたとしても、その方が前に進める、ちょっとは強くなれる。

怖いから、自分に言い聞かせてるの。

だって、怖いわよ。

こんなこと、したことがないんですもの。

バスが来たわ。

ハリスバーグ行き。

当たって砕けろよ！

---

窓から見る景色は雪が積もっていて、夏に見た景色とは全然違うわ。  
4日前に、この辺りは大雪だったんですって、というようなことを言ってたわ。  
さっき、タクシーの運転手さんが。  
いい人よ、何度も聞き返しても、ちゃんとわかるように話してくれるの。  
でも、あんまりわからないんだけど。

バスの中で、いろいろなことを考えてわ。  
もし現実がどんなに辛いことだとしても、それはそれでいいって。  
美香が結婚したら、ニューヨークに住むから、あの家は売って、賃貸のアパートに住もう。  
一人には広すぎるし、あの家にいたら、私はずっと卒業できない気がするのよ。  
美香が、たまに里帰りしたら泊まれる部屋がある部屋がいいなあとか。  
あの家じゃなくても、私がいるところが美香の実家だもの。  
でもね、美香がいないときまで、ずっと母親でいたくはないわ。  
自分のために一日を生きたいわ。  
生きたいの、そうなの、生きたいのよ。  
誰かのためにとか、誰かを待って時間を送るんじゃないわ、自分の時間を生きたいの。  
それがどういうことか、まだやってもいないから、全然わからないけどね。  
自分がやりたいことを、やりたいときに、やりたいの。  
何のことか私もよくわからないけど、そういう感じっていうのかしら。

「Here you go, Mom」

着いた。

歩道から玄関への道が少しだけ低くなってるけど、雪が積もってる。  
ていうことは、旅行に行っちゃったのかもしれないわ。  
どうしよう...  
この辺りをタクシーが通ってるなんて見たことないわ、少なくとも夏には見なかったわ。  
あのバス・ステーションまで歩いてなんてとても行けないわ。

「えっと、ウッド・ユー・ウェイト・ヒア？」

「You wanna me to wait, Mom？」

「ウェイト」

「Sure」

シュアってことは待つってことよね？

いちおう、念のために？

「ドント・ムーブ！ ウェイト！」

「Okay！」

オーケーって言ったわ、よし。

それにしても... この雪... よいっしょっと... 美香のUGG借りてきてよかったわ。

窓からぼんやりと見える部屋の中は暗くて、やっぱり誰もいないみたい。

でも、いちおう、そうよ、ここまで来たんだから。

呼び鈴、押したことはないわね、私はね。

ビー——ッ

30秒くらい待ったけど、やっぱりいないのかしら？

タクシーの方を見たら、運転手さんが、もう一回押せみたいなジェスチャーしたわ。

これね？

うんうんて頷いてるから、もう一回押せばいいのね。

ビー——ッ

数えたわよ、30秒、やっぱりいないんだわ。

タクシーの方を見て、出ないって首振ったら、もう一回押せって。

もう一回？ これ？

うんうん？ あ、そう。

ビー————ッ

ちょっと長めに押してみたけど、やっぱり留守なんだわ。

そっか！ そういうことか！

クリスマス旅行よね。

ということは、しあわせに暮らしてるってことよ。

淋しいけど、これが現実。

よく来たわ！ えらい、私！

さ、帰ろう！

運転手さんの方を見たら、指で、なに？ ここ？ ドア？ なに？



あ

ドアから半分だけ覗かせている目が 目玉が飛び出そうなほどよ

何を言えばいいのかしら？ えっと、ヘロー？ メリークリスマス？

「Why... are...you...here?」

なぜ私がここにいるのかって、それはそうだわ、当然の疑問だわ。

えっと、なんて言えばいいのかしら？

それにしても、そんな眉間にシワ寄せて、怖い目で...

それはそうよね、あんな手紙送ったんだから、そういう顔にもなるわよ。

でも、私はメゲないわ、がんばってはみる、ちょっと弱気だわ、ダメよ！

えっと...

「アイ... アイ...」

それにしても、なんでこんな苦渋に満ちたみたいなの？ 険しい顔で見てるの？

やっぱり来たのは間違いかしら？

帰った方がいいかしら？

私のこと見てるのも不快なのかしら？

だって、ほら、入口にもたれて腰に手を当てて、不機嫌そうってこういう顔って顔で...

そんなことわかってたじゃない？

ウエルカムなんてされないだろうって。

追い返されてもいいって。

当たって... 派手に碎けて帰るわ。

よし！

フウウウウ

「アイ・ワント・ステイ・ウィズ・ユー」

え？ なんでそんな恐怖映画観たときみたいな目？

瞳孔開いてない？

「Ah... How long?」

どれくらいの期間ってこと？

そうね...

「アンティル、ユー・セイ・ゴー・バック・ジャパン」

今すぐに言われそうだわ、それでもいいわ。

「Until I say go back to Japan to you...」

繰り返したわ。

こういうときって、一瞬、間があって、「ゴーバック！」って叫ぶのよね、映画だと。

「Then... It means... You have to stay with me until I die」

ン？

つまり？ 私は、この人が死ぬまでここにいないてはいけない？

死ぬまで？ 死ぬ？

そういえば...

なんだか顔色も悪くて、無精ひげ生えてて... 病気？ 深刻な状態なのかしら？

だって、クリスマスなのに、雪かきもしていない家の中に、こんな顔で...

「アー・ユー・シック？」

「What?」

「ユー・アー・シック？ ベリー・シック？」

なに？ その意味がわからないみたいなの？ うろたえてるみたいなの？

「Ah... not really」

ナット・リアリー？ そんなでもない？ いちおうそう言うわよね？

「Why?」

だから、あなたが、（それにしても、その眉間のシワと怖い顔やめてくれないかしら？）

「ユー・セイ、アンティル・ユー・ダイ」

ポカン？

いやいやいや、確かにそう言ったわよ。

「Romie...」

あら、ロミーって呼んだわ。

「イエス？」

はあああって、ため息つかれても...

やっぱり帰ればいい？ 帰って欲しい？ 私の顔なんか見たくない？

「えっと、ユー・ワント・ミー、ゴー・バック・ナウ？」

なに？ なんてあの目を上にあげて、あ～あ...みたいな？

「Romie」

「イエス？」

それにしても、怖い顔だわ。

「I'm asking....」

フウウウツて、ため息つくときまで怖い顔。

「I'm asking you to marry me」

ン？

マリー？ 結婚してくれと？

この顔で？ この怖い顔で？

地を這うような低い声で？

なぜなのがちよっとよくわからないけど、  
まあ...

「オーケー」

「What do you mean?」

どんな意味か？ どういう意味かって聞かれても...

「オーケー・イズ・オーケー」

「To which question did you answer?」

ハ？ どのクエスチョンに答えたのか？

他に聞かれたことってあったかしら？

なぜここにいるのか？

それに答えたわけではないわよ？

「What are you thinking?」

何を考えてるのかって、あなたの質問がよくわからないのよ。

だからね、

「そうねえ、ドゥ・ユー・アンダerstand、オーケー・イズ？」

「Yes, I know, okay means okay, but I don't understand... what is okay to you?」

オーケーがオーケーだとはわかる、私が？ 何がオーケーなのか？ わからない？

ハァァァァァ？

「ユー・アスク・マリー！ アイ・セイ・オーケー！」

なにその、目がテンくらいビックリした顔？ 何か悪いこと言った？

「Are you sure?」

本気かってどういう意味？

冗談だったの？ 私はそれを真に受けたの？

「イズ・イット・ジョーク？」

「No! I'm serious!」

真剣？

だったらもういいじゃない！

「アイ・マリー・ユー！」

ポカン？

「ドウ・ユー・アンダスタンド？」

「Yes」

え？ なに？ 目が 真っ赤になって

「Oh! Romie!」

ガバッと私を抱きしめて

私の耳元で

「Aaaaaaaaaaaaaaaaaah!」

悲痛な叫び声をあげたの。

## 夢が叶うと...

---

ダニーは今ソファに座っているわ。  
あれから三時間くらい経ったかしら？

あのね、あの叫び、何だったと思う？  
私はビックリしたわよ、「Romie!」って抱きつかれて耳元で叫ばれたんですもの。  
4日前に大雪が降って、次の朝、雪かきしてギクッとやっちゃったんですって。  
ギククリ腰よ。  
そのときはもう動けなくて、友だちに病院に連れていってもらおうとあちこち電話しても、  
ほら、クリスマス休暇で、みんな実家に一家で戻ったり旅行に出かけてたりで、  
結局911、日本でいう119と110みたいなもの？に電話して救急車で運ばれたって。  
だいぶよくなっただって言うんだけど、ほら、そのこと忘れて私にガバッと抱きついたから、  
痛かったらしいのね、それで思わず叫んだらしいのよ。

それからが大変だったわ。  
あのタクシーの運転手さんと呼んで、一緒に家の中に連れてきて、  
だって私一人じゃ、とっても無理だったわ。  
それでね、もしかしたらと思って、キッチンに行って冷蔵庫見たら空っぽなの。  
だから、タクシーの運転手さん、ベンさんていうのよ、ベン、日本人にはちょっと抵抗ある名前ね。  
まあそれはいいんだけど、スーパーマーケットまで連れていってもらって、  
買い物している間待ってもらって、とにかくありとあらゆる食材を買って、戻ってきたの。  
あのとき、念のために待ってもらってよかったわ。  
スーパーで山ほど買った荷物を家の中まで持っていく手伝いまでしてくれたもの。  
お礼に、スーパーで買った可愛いクリスマスのカップケーキの大きな箱詰めをあげたわ。  
すごく喜んでくれたわ、お子さんがまだ小さいから嬉しいって。  
ベンさんに直接つながる電話番号を教えてくれて、タクシーが必要なときにはいつでも呼んで  
くれって。

あ、ダニーのことを忘れてたわ。  
だからね、あんな怖い顔してたのは、この数日ほとんど横になっていたから、  
立っているのが辛かったらしいのね、腰が痛かったっていうの？ 言えればいいじゃない？  
そう言ったら、それどころじゃなかったって、私が現れてビックリして、頭が混乱して、  
信じられなくて、嬉しくて泣きそうで、他に何て言ってたかしら？ まあそういうことね。

もうね、リビングのテーブルの上やダイニングテーブルの上に、ピザの空箱がグチャッと積ん

であったわ。

「Romie, it was an emergency」

叱られるのを怖がってる子どもみたいな顔でそう言ったわ。

叱らないわよ、少なくとも餓死しなくてよかったわ、三日くらい食べなくても餓死はしないだろうけど。

全部片づけて、サンドイッチと簡単な野菜スープを作って食べさせて、今にいたるよ。

私って、タイミングがいいんだか悪いんだかわからないわ。

まあ、よかったんでしょうけど。

それにしても、いちおう？ まあ前にも何回も言われてるからいいんだけど、プロポーズよね？

それを玄関先で、あんな怖い顔でされる女の人って、そんなにいないと思うのよ。

まあそれでも、オーケーしたら、どういう意味だとか、何に対してオーケーなんだとか、

本気かとか、自分でプロポーズしておいて聞く？

「What are you thinking?」

何を考えてるのかって、だから

「イット・ワズ・ナット・ロマンティック」

「What do you mean?」

「プロポーズ」

「Oh! I'm sorry! I'm so sorry! I, I was... just... what to say...」

まあいいけど。

だいたい、まわりくどいのよ！

自分が死ぬまでステイしなくてはいけないって、あんな顔で言われたら死ぬのかしらって思うじゃない？

「Romie, are you upset?」

腹を立てているのか？

「フォー・ホワット?」

何に？

「The way I proposed you was not romantic」

プロポーズの仕方がロマンティックじゃなかったから？

「アイ・ドント・イクスペクト・ユー・ロマンティック」

あなたにロマンティックなんて期待もしてないわ。

「What?」

だいたい、あなたが結婚っていうときって、いつもシツチャカメツチャカっていうか、  
なんていうの？ そうね、結局おっちょこちょいなのかしら？

「エブリタイム・ユー・アスク・マリー・ミー、ユー・アー、なんだっけ？ あ、クラムズィ」

「Clumsy?」

「イエス」

そんな驚いたみたいな、情けないような顔したって、そうでしょ？

「Do you...love me?」

ハ？

「Do you still love me?」

私、さっきプロポーズされて、オーケーしたわよね？

「ホワイ・ユー・アスク?」

今さら聞く？

「I just want to ask you」

ただ聞いてみたかった...

バカじゃない？

「ユー・アー・ステューピッド」

「Yes, I am」

愛してなかったら来ないわよ。

愛してなかったら、こんな怖いことしないわよ。

だって...

「アイ・キャント・ストップ・ラビング・ユー」



あきらめようと思っても、ダメだったのよ...  
ずっと愛してたわ... ずっと... 今も...

「アイ・ラブ・ユー... アイ・ラブ...ユー...」

私の涙を指で優しくぬぐうあなたの、そのきれいな茶色の目も真っ赤で...  
その目からツーッと涙がたっついていて...

「ユー・アー・クライング」

「Yes, I'm sissy」

情けなさそうに微笑んで...

涙で濡れているあの私の大好きな茶色の目で、優しく愛しそうに私を見て...

キスしようとしたから...

私の方からキスしたの...

だって...

あなた、腰が痛いから。

カーテンの隙間から、朝の光が漏れてきてるわ。

目を開けて、ダニーの方を見ると、私のこと見ていたわ。

「Good morning, Romie」

また... このきれいな茶色の目で... 優しく愛してるって目が... こんな近くに...

「ハッピー・バースデー、ダニー」

「You remember it!」

驚いた顔して、そして嬉しそうにキスしようとしたから、私からしたわ、だって腰が。

「I'm alright, honey!」

「アイ・ドント・ビリーブ・ユー」

「Believe me, love, it was the nightingale」

な～にジュリエットの台詞なんか言ってるの？ しかも、全然状況と合っていないし。

「ユー・スリープ、アイ・メイク・ブレックファスト」

えっ？ あらっ？ なんで？ なんで泣いてるの？

「ホワイ・アー・ユー・クライング？ バック・イズ・ペイン？」

また腰が痛くなっちゃったかしら？ 泣くほど痛い？

「No, I'm just... My Romie is back... back to me」

僕のロミーが帰ってきた？

それで泣いてるの？

「ユー・アー...」

「I know I'm sissy, very!」

私が戻ってきたのが泣くほど嬉しいの？

「ユー... メイク・ミー・クライ！」

泣くほど喜んでもらえるなんて... 私だって泣いちゃうわよお。

「Oh, Romie!」

「ドント・ムーブ！ バック・イズ・ペイン！」

泣きながらこんなこと言うのもナンだけどお、悪化されても困るんだものお、フェ～ン...

「アイ・メイク・ブレックファスト、ドント・ムーブ」

「Ok, I won't」

二人で泣きながら、フツターの会話してるけど。

ゆうべは、いろいろな話をしたわ。

私のあの怒りの手紙をもらって、嬉しかったって。

すごく泣いたんですって、ビックリしないけど。

私がダニーの気持ちを知ってたって、そりゃわかるわよ。

それでね、「I HATE YOU!」って書いてあったから、希望が持てたって言うのよ。

おかしいでしょ？ 大嫌いって言われて希望持つってどういうこと？って聞いたのよ。

そしたら、君が“I hate you!”って言うときは、僕のこと愛してるって意味だって。

楽天的にも程があるわ、まあ... そうね... 言われてみれば... そうかもね。

それじゃ、なんで今まで何も連絡をくれなかったの？って聞いたら、

私を迎えに行くための準備をしてたっていうの、何の準備かはわからないけど、いろいろ？

ひとつだけわかったのは、お風呂が改装されてたの、ダニーの寝室のね。

バスタブとシャワーが一緒じゃないの、シャワーと洗い場みたいなのもついていて、

シャワーもホース？ あれがついていて、ちょっとジャパネスク？

私の家に泊まったときに、私のためにはこれが必要だと思ったんですって。

それがね、配管とかは業者に頼んだけど、仕事が終わってから毎日自分でやってたって言うのよ

。

こっちの人って、そうらしいの。

そんなことしてたから腰に負担がかかって、雪かきで最後のイッパツ食らったのね。

でも、私に来ない可能性もあったわけでしょ？って聞いたらね、

来てくれるまであきらめるつもりはなかったって、粘り強いわ。

そうそう！ なんで、私の家を出る前にバナナブレッドを受け取らなかったの？って聞いたの。

そしたら、君がギフトって言ったからだって、そんな別れのギフトは受け取れなかったって。

私、捨てたのよ？って言ったら、「I'm so sorry」って謝ってたけどね。

けっこう細かいところにこだわるのね、まあ確かに、あれを受け取ってたら、私キレたかもね。

どっちにしてもキレたってことね。

それから、そう！ 指輪！

なんで黙って受け取ったの？って聞いたら、受け取らなかったら君が捨てるだろうと思ってだって！

失礼ね！

でも、そうね、バナナブレッドと一緒に投げ捨てたかもしれないわ。

指輪、今つけてるわ。

ゆうべ、ダニーがはめてくれたの。

「You know what I mean」って、もちろんわかってるわよ、私の誕生日のときからね。

ダニーが入れたコーヒーと、私が作った朝食。  
ダニーがしあわせそうにオムレツ食べてるわ。

「Romie」

え？ なに？

「I don't need eggs」

え？ 卵は必要ない？

「ユー・ドント・ワント・オムレツ？」

オムレツはいらなかったの？

「I don't mean that egg」

その卵の意味じゃない？

「You have no egg, I don't need eggs, what I need is only you」

私は卵を持っていない？ あなたは卵は必要ではない？ 必要なのは私だけ？

どういう意味？

「ホワット？」

「I don't need my kids」

自分の子どもは必要ではない？

え？

ハア〜ッ？

私が閉経してるってこと？ 言う？ あえて言うっ？

しかも、そんなまわりくどく言うっ？

「アイ・ヘイト・ユー！」

「Oh, you love me!」

「アイ・リアリー・ヘイト・ユー！」

「You really love me!」

頭にくるわ!

確かにそうだけど。

でも、もし、本当にこの人を大嫌いになったら、何て言えばいいの?

私、他の言い回しって知らないわよ? ヘイトの他に何かあったかしら?

「What are you thinking?」

何を考えてるのかって、だから

「イフ、アイ・リアリー・ヘイト・ユー、ホワット・ワード、アイ・キャン・ユーズ」

「Oh, no! Don't think about such things!」

まあ、そうね、プロポーズされてすぐに考えることではないわね。

それに、嫌いになることはないわ、絶対にとは言い切れないけど、まあないわね。

キレルことは、おそらく何百回もあると思うけどね、何百回で足りるかしら?

ダニーが腰にクッション充ててソファに座ってる横に、私はダニーの肩に頭をもたれて座ってるの。

見上げると、ダニーが、あのきれいな茶色の目で、愛してるって目で私を見ているわ。

あなたといると、ホッとするの。何も怖くなくなるの。

何を怖がっていたのかしら。あなたの傍にいればよかっただけなのよ。

夢が叶ったわ。

こうやって、あなたの傍にいたいっていう夢。

夢が叶うとね、その夢は現実になるの。

その現実はね、夢みたいにしあわせなの。

夢は叶うわ。

それがどんなに自分にとって大切なかわかれば。

そして、とっても簡単なことだったの。

叶えたいって、素直になればよかっただけだったの。

50歳の私にわかるのは、今はそれだけよ。

*To be continued...*

## NOTE

---

この物語は、二年ほど前の娘との会話から始まった。二人でDVDを観ていたとき、私がふと思ったことがあって、それを娘に言った。

「20代や30代、せいぜい40代の初めのラブコメはあるのに、50代のラブコメがない」  
そして、私が、たとえば、こうこうこうで...と、頭に浮かんだラフなイメージを語ると、  
「それおもしろいよ！ 観たいよ！ 脚本書いてよ！」  
いやいやいや、無理だよ。それに、私は観たいだけなのだ。

それから、二年経って、大昔（40代前半）に書き溜めた物語を電子書籍として、  
まとめたくなくて、Blogを作った。  
最後にUPした物語の最後の2ページが、どうしても気に入らなくて書き直した。  
すると、書くことが楽しくなった。  
もう二度と物語など書くことはないと思っていたのに。

そして、書きたくなった。  
アラフィフのロマンティック・コメディを。

最初はこんなに長くなるとは思わず、こんなに自分の中で深いものになるとは思わなかった。  
そして、こんなに登場人物たちに翻弄されたのも初めてだった。  
なぜダニーが、こんなことを言うのかわからないまま書いていたことも多々あった。  
UPして読み返して初めて「ああ！ そういうこと！」と、わかるのだ。  
次に何が起るのか、どこから始まるのか、まったくわからない。  
だから考えなかった、すると、ポンと場面が浮かんで話が始まり、私はそれを書き留めた。  
そして、こんなに深く深く物語の中に入り、肌でリアルに感じるのも初めてだった。

ダニーの両親のHelen. Y. SwopeとGuy. J. Swopeは、実在の人物だ。  
Helenさんは私のアメリカの母である。  
80歳の花嫁の結婚式など、Helenさんに連れて行ってもらった実話を元になっている。  
Harrisburgというのも、Helenさんが実際に住んでいた場所だ。  
Helenさんには子どもがいなかった。だから、私はダニーという息子を作ってあげたかった。  
Helenさんの息子は、きっとダニーみたいな人だ。  
ダニーのお母さんのお墓の場面は、いつもボロボロ泣きながら書いていた。

ロミーのアメリカでの戸惑いなどは、私が高校のときに初めてホームステイしたときの、その感  
覚などを元になっている。  
英語と日本語の会話が成り立つのか、私の錆びついた英語で、アメリカ人の英語が書けるのか、

書く前は、そこに戸惑いがあったが、どうせ自分のために書いているのだから、実際にはボロボロでも、その気になっていればいいと居直った。

ロミーのシェイクスピア好きは私である。

今でもジュリエットの台詞は空で言える。

娘の存在なくしては、この物語は書き続けられなかった。

娘は美香のモデルである。

毎日、娘と話をした。

娘はまるで私のプロデューサーのようだった。

これを読んでいた娘がよく言っていた。

「50代って、こんなバタバタしてるの？ もっと落ち着いてると思った」

とんでもない！ 50代はシツチャカメツチャカでバタバタしてもがいているのだ。まして、恋なんかしたら、若い子たちよりシツチャカメツチャカになってしまう。恋なんてもう自分の人生には存在しないくらいに思っているのだから。

私はそれを書きたかった。

しっとりとしたおとなの恋ではなく、おならもすればいびきもかく、そんな現実があたりまえになっている50代の恋を。

ロマンティックにしたいくても、ここぞというときに決めようとしても、バタバタしてしまう現実を。

正直に言うと、ダニーはコリン・ファースをイメージして書いていた。

書き始めたときは、ふつうに好きだったが、今ではダニーとして好きだ。

マーク・ダーシーのようなMr. パーフェクトではない、アラフィフのおじさん。やってくれないかなあ。

そして、私には夢がある。

その夢を叶えるためには、これを完成させる必要がある気がした。

私のダニーは、きっと私を待っている。そして、きっともうひとつの夢も叶う。

*My story is still going on...*

*December 29 2013*

じゅじゅ



## ホームステイ

<http://p.booklog.jp/book/80868>

著者：じゅじゅ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/donna49/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80868>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80868>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ